

けものフレンズR ～
Re:Life Again～

こんぺし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

終わったはずの世界。なかったはずの未来。少女は再び仲間と共に世界を旅していく。

一人ずつと帰らぬ主を待ち続けるイエイス、プロングホーンの腰巾着でお調子者のロードランナー、怒れる殺戮者だった過去を持つアムールトラ：そしてそんな彼女たちをまとめる少女、ともえ。

これはそんな彼女たちの”もう一度”パークを巡る物語。

※1：これはけものフレンズ2の二次創作であるけものフレンズRを元にした三次創作になります。けものフレンズRについては以下のURLからご覧ください。

https://www.nicovideo.jp/watch/sm34862414

※2：本作品はけものフレンズRとRe：Lifeの完全な続編という立ち位置です。未読の方はそこから読むことをおすすめします。

https://syosetu.org/novel/192982/

目次

Re:Life Again

Resurrection

第0話「プロローグ」	1	Ex1話「鶴・リバイバル」	180
第1話「再会」	6	Ex2話「始まり」	187
第2話「かばんの帰還」	22	Ex3話「キルゾーン」	202
第3話「鉄を打て」	35	Ex4話「砂漠の追跡者」	224
第4話「無双と双壁」	52	Ex5話「The Number	0
第5話「ロッジ・アリツカの怖い話」		f The Beast」	238
75		Ex6話「魔獣の呼び声」	252
第6話「深い霧の包むところ」		Ex7話「忌子」	266
90		Ex8話「終焉」	282
第7話「和解」	106	Ex最終話「エピローグ」	298
第8話「鶴」	124		

??	— 1	「新たなる旅路」	309
??	— 2	「出航の時」	318
??	— 3	「ゴコクエリア」	331
??	— 4	「序曲」	351
??	— 5	「決意」	362
??	— 6	「731」	373
??	— 7	「ポセイドン」	394
??	— 8	「秘境、魔境」	407
??	— 9	「セイリユウ」	424
??	— 10	「神を討つけもの」	437
??	— 11	「終焉への序曲」	456

豺キ豊—12 「墮ちる神、顕現する悪」

472

豺キ豊—13 「深い闇の奥底へ」

491

豺キ豊—14 「巨人の彫刻」

507

豺キ豊—15 「腐敗と悪意の獣」

524

豺キ豊—16 「混沌の黒き山羊」

548

??—17 「旅の終わり」

568

ROP—終幕「エピソード」

589

R u i n

R u i n—1 「滅亡」

603

726	R u i n 8 「Origin」	710	R u i n 7 「狂気を孕む者」	685	R u i n 6 「vsネメア後編」	670	R u i n 5 「vsネメア前編」	653	R u i n 4 「パンドラの匣」	R u i n 3 「奥へ」	616	R u i n 2 「ホツカイエリア」
										631		

915	R u i n 17 「過去と未来」	d r	R u i n 16 「J・rmungan」	R u i n 15 「邂逅」	R u i n 14 「復讐」	R u i n 13 「反撃」	R u i n 12 「北へ」	R u i n 11 「転機」	R u i n 10 「Parricide」	752	R u i n 9 「Ekthikisi」
		893		875	847	828	816	800	779		

R u i n | 1 8 「追い求める影の形」

931

R u i n | 1 9 「深い北方の彼方へと」

948

R u i n | 2 0 「アフターマス」

965

R u i n | 2 1 「アークティカ地方」

983

R u i n | 2 2 「祝福」

995

R u i n | 終幕 「エピローグ」

1014

設定資料

登場獣物

1026

Re : Life Again

第0話「プロローグ」

目が覚めた。目の前にはキラキラした空間が広がっている。遠くに目を凝らすと灰色の町並みが広がっている。町…？遊園地のようにも見える。いずれにせよよくわからないところにあたしはいた。ここはどこなんだろう。

「来たようだな」

声が聞こえた。

「あなたは…？」

黒いヒトのような何かがあたしの前に立っていた。頭には虹色の角が生えている。露出も大胆でいろいろと危ない感じがする。

「私はセルリアン…セルリアンの女王だ。前に一度会ったことがあるはずだが…覚えていないか」

「セルリアン…女王…」

聞いたことがあるような…ないような…セルリアン…？

虹色に輝く不思議な瞳であたしを見つめている。どこかあたしを見下しているかの

ようだ。

「しかし、ここに来たということは転生する準備が完了したということか？」

「転生……？ どういうこと……？」

「言葉そのものの意味だ。もう地球の再構築は完了しているぞ？ お前の大切な友達だっている。イエイヌといったか。かわいそうなやつだ。来もしないヒトの帰りを待っているのだ。お友達のためにも行つてやつたらどうだ？」

「イエイヌ……ちゃん……」

聞いたことのある名前だ。確か……あたしの……大切な友達……

……思い出した……イエイヌちゃん……あたしのお願いを聞いて……管につながれたあたしを……

どういうことなの……？ あたしはいつたい……死んだはずじゃ……

「……思い出したか？ 状況が飲めないようだな。確かにお前はあの時イエイヌの手によって死んだ。だが、今ここにいるお前はアストラル体としてサンドスターの作り出す集合精神体の中にあるのだ。あれから何百年という時を経てようやく我々は地球の再生に必要な情報を獲得し、その目的を達成することができた。そら、見てみるといい。あるセルリアンの見ている光景だ。ここがどこだかわかるか？」

「……」

見たことのある景色だ。ここは…セントラル？あのドーム状の建物は…？

「気になるか？」

中からフレンズさんが出てきた。イエイヌちゃんだ。

「っ!! イエイヌちゃん!!」

映像が急激にイエイヌちゃんに近づく。セルリアンがイエイヌちゃんに攻撃してるんだ。た、助けないと!!

「イエイヌちゃん!!!」

急に映像が途切れた。

「女王さん！映像が！イエイヌちゃんはどうなったの!？」

「知らん。もつともセルリアンが倒されたのだろう。恐らくだがイエイヌが勝ったのだ。心配するな」

「…でも…!」

「…そんなに気になるなら自分で行って確かめてみたらどうだ？今度造った私の世界は仮初の世界ではないぞ？我々セルリアンが作った…再現した世界ではあるが決して虚構の世界ではない。お前たち人間やフレンズたちが嫌った再現された世界ではあるがな」

「……………」

「どうだ？」

行きたいような気もするけどあの時のことを思うと二の足を踏んでしまう。けど……あたしは……！

「行きたい……女王さん！あたしを行かせて！イエイヌちゃんとまた……！あたしは……！」

「ふん、良いだろう。だが、後悔するなよ？」

少し怖いような気もするけどあたしはイエイヌちゃんに会いたい……また一緒に冒険したい！また一緒にお話したい！また一緒に騒ぎたい！ゴマちゃんとアムちゃんともまだお友達になったばかりなのに……！アムちゃんなんてまだ友達になって2日くらいしか経ってないんだよ!!

「転生……なんだよね……？また偽物の世界に送られるわけじゃないんだよね……？」

「いかにも。私が保証しよう」

「じゃあ、お願いしても……いいかな……あたし……イエイヌちゃんとまた冒険したい！」

「……引き受けた。では、目を閉じるがいい。次の瞬間にはまた、あのカプセルで目覚めるだろう」

あたしは目を閉じた。そして体が軽くなったと思うと意識が遠のく感じがした。

またイエイヌちゃんに会える……会ったらいっぱいお話するんだ……いっぱいお話して、いっぱいじゃれあって、いっぱいもふもふして、いっぱい冒険して……ああ、楽し

みだなあ…でもまずは謝らなくちゃ…あれだけのつらいことをさせて、泣かせてしまっ
たんだ…

あたしはたくさんワクワクと少しの反省を胸に深い海に沈んでいった。待ってて
ね、イエイヌちゃん…今行くからね…

第1話「再会」

目の前に真っ白が広がっている。一面を埋め尽くすほどの白だ。

やがてプシューという音とともに光が差し込んできた。とてもまぶしい。目が光に慣れてくるとなにやらボロボロのコンクリートの天井が目に入ってきた。

ここはどこだろう？体を起こすして辺りを見回してみる。…どうやらボロボロの廃墟のようだ。どうしてこんなところにいるんだろう…？

ふと割れたガラスの破片が目に残った。比較的大きな破片で自分の容姿を確認してみた。左右の瞳の色が違う。髪は若干緑が勝っている。背は低めらしい。

あたしが入っていたカプセルのような容器を見るとカバンが入っていた。中を見てみるとスケッチブックとクレヨンとどうぶつ図鑑が入っていた。

「と…もえ…？」

懐かしさが込み上げてくる。これ…あたしの名前だったのかな…？まあ良い。あたしの名前ということにしておこう。きつとあたしの名前のはずだ。

壁伝いに建物の中を歩くとあたしは外に出た。気持ちの良い風と日の光があたしを包み込む。

「気持ち良い……」

胸いっぱい空気を吸い込んでリラックスする。

「よしー！」

そうして気合を入れるとあたしは走り始めた。行く当てなんて決まっていな。ひたすらにあたしは走った。何も無い平野を無我夢中で走る。

「はっ……はっ……はっ……」

しばらく走ってふと周りを見るとあたしが出た建物の後方に遊園地のようなものが見えた。

「なんだろう……あれ……」

走ってきた道を戻ってその遊園地らしきところに戻る。いろんな建物がある。洋服が置いてあるお店、カラオケ……？カフェやジェットコースターなどとりあえず賑やかそうなお店があちこちに並んでいる。

「いろんな建物があるなあ……」

歩きながらあちこちを見て回る。けどいくら歩けど人っ子一人見当たらない。みんなどこに行っただろう……？もしかして閉園でもしたのかな……？

そのときだった。

ドアの開く音が聞こえた。音のした方を見ると一人の女の子がいた。薄い灰色の髪

ぎゆううとうと抱きしめられる。イエイヌちゃんの温もりと抱きしめる力を感じられる。なんだかとても落ち着くようだ。でもちよつと苦しい…

「く、苦しいよイエイヌちゃん…」

「会いたかったですううう…とつても…」

消え入りそうな声でそう呟く。これはしばらくは放してくれなさそうだ。あたしはあたしでイエイヌちゃんの温もりを感じてみよう…かな…？

…どれくらい時間が経つただろうか。イエイヌちゃんが満足したのか力を緩めてあたしを解放してくれた。べたんと座ったイエイヌちゃんがあたしに話しかける。

「ごめんなさい、苦しかったですか？」

少しだけ申し訳なさそうにしながらあたしに尋ねてきた。苦しかったのは苦しかったけど全身であたしとの再会を喜んでくれたことの方が嬉しかった。

「うん、ちよつとね。でもそれ以上にあたしとの再会をこんなにも喜んでくれたことの方が嬉しかったよ。ただいま！イエイヌちゃん！」

「っ…!!!」

イエイヌちゃんのペアツと顔が輝く。

「もえちやああああああああああああああああん!!!」

再び抱きつかれた。顔中をべろべろと舐められる。

「く、くすぐつたいよ！」

「わふう！わふう！」

これはしばらくは放してくれなさそうだ。あたしは人形みたいになぶられた。

……………

「どうぞ」

「ん、ありがとう」

この香りはとても落ち着く。香りを感じ、味を楽しむ。どちらかが欠けてもダメだ。口に含むとその味を楽しんだ。

「はあ…とつても良いね…」

「えへへ…練習した甲斐がありました」

控えめな笑顔を見せながらしつぽをふりふりと振って喜ぶイエイヌちゃん。ほわほわとしたこの笑顔の裏には猛獣のようにペロペロとあたしを舐め回した過去があるのだ。顔は未だべちよべちよである。

「そういえばさつきあたしのこと、もえちゃんって言ってたよね。もしかしてあたしの名前だったりするの？」

「あつ…そ、そうですね。急に言われてびっくりしましたよね。スケッチブックに”と”、と”もえ”の間に不自然な空白があったと思います。何かしらの理由でそこだけが消えてしまったんでしょう。あなたの本当の名前は遠坂 萌。それが本当の名前なんです」

「とおさかもえ…」

佇まいを直して真剣な表情をしながらそう告げた。

…だめだ、全然思い出せない。前にいたパークのこととあの出来事は思い出せるのに…
…そういうえばお父さんの声と顔も思い出せないや…

「ごめん、思い出せない…もえっていうのもなんかむずむずする…今まで通りともえって呼んでももらえないかな…?」

「いいですよ!ともえちゃん!」

「えへへ…ありがとう」

ふと静寂が訪れる。とても静かだ。外で風が吹く音と遠くで何かがきしむ音だけが聞こえてくる。

「イエイ又ちゃんはずっとここにいたの?」

「はい。イヌの本能なんでしょうか。誰かを待たないといけない…そんな気がしてならなかったのです」

「ずっとここで……？」

「そう、ですね……時々散歩に出かけたりフレンズさんが遊びに来たときは一緒に遊んだりっていうのはやってましたけど、基本はずっとここで待ち人が来るのを待ってました」

「そんな……どれくらい待ってたの……？」

「どれくらいでしょう……最初のうちは数えてたんですけどそのうち数えるのをやめました。ただずっと……待ってたっていうのは覚えてます」

そう言って遠くを見つめる。やがてニッコリ笑ってこう言った。

「でも待った甲斐がありました！こうしてともえちゃんとまた会えたんですからー！」

「イエイ又ちゃん……うん、じゃあ、待ってもらった分いっぱい遊ぼうか！」

「はいー！」

そう言って帽子を取って外へ出るとフリスビーのように大きく投げた。

「そーれ！取ってこーーいー！」

「わふー！はーいーいー！」

元氣よく返事をする、勢いよく駆け出して行った。その姿はきらきらと輝いている。こうして一緒に遊ぶのは初めてではない。そんな気がした。記憶にはないけど多分フレンズ化する前もこうして一緒に遊んだはずだ。イエイ又ちゃんはあたしにべつ

たりなついている。あたしがイエイヌちゃんを無下に扱っていたらこんなに元気よくじやれてこないだろう。あたしが初めて目覚めたときどんな反応をしたか。

「あいたかったー！！！！」

それがすべてを物語っているはずだ。

「あの時もずっとあたしが目覚めるのを待ってたのかな…」

そう思うと少し切なくなつた。

……………

昨日は一日中遊んだ。大はしやぎのイエイヌちゃんが泥まみれの体で抱きついてくるものだからお互い泥んこになつてしまつた。それに加えて自ら泥に飛び込んでいくからもう大惨事だ。それでも屈託のない笑顔であたしに笑いかけてくるからあたしも楽しくなつた。お互い泥まみれなんてどうでもいいんだ。それがお互い楽しく遊んだ証拠になるのだから。イエイヌちゃんが楽しければそれでいいんだ。それだけあたしはイエイヌちゃんにうれしいことをさせたんだしそれくらいさせても良いと思えた。

けどその後が大変だった。イエイヌちゃんのおうちにはお風呂がなくて簡易的なシャワーしか置いてないからちよつと困つた。泥を洗い流すには十分なんだけどそれ

以上のことができなくて参ってしまった。それに加えてイエイヌちゃんが中々シャワーを浴びたがらないから尚のこと参った。波々浴びてはくれたけど洋服まで洗いたがらないのは本当に参った。なんでも毛皮らしい。よくわからない。ちよつと強引に洗つたらいじけてしまった。

そのあとはベッドで一緒に遊んだりぐつすり眠ったりして一日を終えた。

そして今日はゴマちゃんとアムちゃんを探しに行く日だ。二人とも見つかるというな。

「それじゃあ、行こっか！」

「はい！ともえちゃん！」

と、景気よく出発したのは良いが、実はお互いどこをどう行つたのかよく覚えていなかった。サバンナ地方を抜けた先というのは覚えていけるけどお互いどこを歩いて行つたのか記憶があいまいだ。その後の記憶の方が良く覚えている。

道するべのないだだっ広いサバンナの地をあてもなく歩き続ける。

しばらく歩いているとふとイエイヌちゃんが立ち止まった。鼻を上に向けてなにやらにおいを嗅いでいるようだ。なにか覚えでもあるにおいでも嗅ぎつけたのだろうか。

「ふーむ……こつちからでしょうか……」

どうやらにおいのする方角を嗅ぎ当てたようだ。こうなつたらイエイヌちゃんにつ

いて行くしかない。あの二人のおいだつたらいいな。あたしは期待を胸に膨らませた。

「汗のにおい…立ち込める砂のにおい…フレンズさんのにおい…そして間違えることないこのにおいは…ゴマちゃん…そしてアムちゃん…!ともえちゃん!あの二人です!間違ひありません!早く行きましょう!」

あたしの手をとってイエイヌちゃんが走りだす。時々転びそうになりながらも懸命に後をついて行く。やっぱりイエイヌちゃんは速い。さすがフレンズさんだ。でも元となるイヌさんも速いのか。少し大変だけどはしゃぐ愛犬に連れ回されるというものも悪くないものなのかな。

やがてあたしは見覚えのある四つの影を認めた。プロングホーンさんチーターちゃん、ゴマちゃん、そして…アムちゃんだ!

「おーい!ゴマちゃん!アムちゃん!アムちゃん!」

「!ともえ…!?!」

「ともえちゃん…?」

あたしの声に気づいたのか二人が反応する。どうやら追いかけてこをしていたようでその動きを止めてあたしの元へ駆け寄ってきた。

「おいどうした!懐かしいな!イエイヌも一緒か!ははっ!」

「久しぶり…元気してた…?」

あたしの手をとってぶんぶん振り回すゴマちゃんと控えめににやんといった感じのポーズであいさつをしてくるアムちゃん。二人とも相変わらず元気そうさ。

「元気にしてたかーおまえー!あたしはバリバリ元気だぞー!おーい!プロングホーン様ー!」

「ともえちゃん、久しぶり」

「うん、久しぶり!アムちゃんも元気そうだね!」

「うん。ゴマちゃんがあたしを取り繕ってくれたおかげで受け入れてくれた。おかげで毎日が楽しい。えへへ」

そう言って控えめに笑ってみせる。無事アムちゃんも居場所を見つけたようだ。

「おー、二人とも久しぶりではないか!元気になっていたか?」

「プロングホーンさん!うん!あたしは元気いっぱいだよ!」

「むっ、チーターのやつどこへ行ったのだ?チーター?チーター!」

「チーターのやつ、あんなところに居やがりますよ。おーい!ビビってんのか?こっち来いよー!」

「ッ…!!」

遠くにチーターちゃんが見える。照れてるのか恥ずかしがっているのかわからない

けどこっちに来る様子は見られない。

「つたくしやうがねーな」

ゴマちゃんがチーターちゃんを捕まえに行った。チーターちゃんは特に抵抗することなくあつさりと捕まった。

「ちよつと、放しなさいよ！放しなさいってば！」

なんだか控えめに暴れている。こうして連れられるのもまんざらでもないといった様子だ。やがてあたしの前まで連れてこられると顔を赤くしながらあたしに語りかけてきた。

「ひ、久しぶりね。よく来たじゃない」

「なーに照れてんだよ！いつもならツンツンするか適当にあしらうつてのによー！」

「う、うるさい！ホント誰に似たのかしら…つたく」

「はっはっは！いやーよく成長したものだ！わたしも嬉しいぞ！期待通りだな！」

「いや、そんな〜…」

なんだか照れ照れしながらくねくねしている。まるでイエイヌちゃんのようだ。

「お前も行って来たらどうだ？お前もこいつのように成長できるかもしれないぞ」

「あ、あたしはいいわよ！あまり縄張りから出たくないし…」

「そうか。無理強いはできないな。ゴマちゃんよ、お前はどうか？」

「いいんですか!？」

「おうとも。ジャパリパークは広いからな。まだまだ見てないところもたくさんあるだろう。行つてくるといい。わたしはここで待っているからな。帰つてきたらお前の武勇伝をぜひ聞かせてくれ」

「は、はい!」

元氣よく返事をするゴマちゃん。

「お前ら、よろしくな!」

「うん!」

ニカツと笑つて改めてあたしにあいさつをした。

見るとアムちゃんもあたしの方を見て何やらモジモジしている。言いたいことはわかつている。言うべきことはひとつだ。

「…いっしょに行こ!アムちゃん!」

「うん…!」

嬉しそうに笑顔を作る。アムちゃんもこんな顔ができるようになったんだ。たつたこれだけなのに弱いながらもイエイヌちゃんにも負けない輝きが見て取れるようだ。仲間の力というものはすごい。つつけば壊れるような存在だったアムちゃんがこんなに笑えるようになったんだ。あたしは改めて友達の尊さを認識させられたようだった。

「じゃあ、行ってきます！プロングホーン様！」

「うむ、行ってくるといい。おまえなら気持ちよく送り出せる。さあ、行ってこい！」

そうしてあたしたちは再び四人となり冒険の続きを始めた。なんだかどうでもわくわくする！前は全然冒険できなかったもんね。今回はいっぱい冒険してやるんだ。どこへ行こうかなあ。ゴコクエリアっていうところにも行ってみたいな。けど今はまだこのエリアを踏破してやるんだ。そして他のエリアに旅立つ。うーん、楽しみだ！イエイヌちゃんにゴマちゃん、そしてアムちゃん。みんな心強いあたしの仲間だ。どんな脅威にだって立ち向かっていける。あたしたちは最強のパーティーなんだ！さあ、どこへ行こうかな…

……………

行ってしまったか。風が鳴く。ちよつとした寂寥感がわたしたちを包み込む。

「また寂しくなるな」

「そうね…」

「あいつが戻ってきたときはびつくりしたな。まるで別人になったようだった。なによ
りビーストと戻ってきたことが一番の驚きだったか」

「アムールトラね。あたしも何事かと思つたわ。…あたしにもべたべた絡んできちやつて…あなたの腰巾着さんはどこへ行っちゃつたのかしらね」

「そうだな…なんだか寂しい感じがするな」

彼女の成長した姿は何事にも代え難いほど嬉しいものだったが、同時にわたしの知るロードランナーがいなくなつてしまつたようで寂しさを感じた。あいつは常にわたしのそばにいておだてていものだが、それもなくなつた。そのかわりチーターにも絡むようになつて、ちよつとした嫉妬を覚えたものだった。

「もしかして妬いてた？」

「かもな。失つて気付くものもあるのだなと思ひ知らされたよ」

正直な感想を言う。実際その通りだ。たまに鬱陶しいと思つたりもしたが、それは恵まれていた故の感想なのだ。実際はどうであろうか。実際に寂しいと思つている。妬んだりもしている。ロードランナー一人でこれだけの感想を思わせたのだ。たまげたものだ。

「…帰ろうか。またしばらく静かになるな」

「そうね。しばらく二人でくだらないことでもしてましょ」

二人でいつもの道に戻つていく。そこにいつもの賑やかさはない。またしばらく物足りなさを感じる日が始まるのだろう。最初こそ歓迎していたものの、今は何とも言え

ない寂しさがあるだけだ。わたしもいつの間にかあの子に追い抜かされていたのだな。その思いを嘯みしめながらわたしたちは帰路についた。

第2話 「かばんの帰還」

パーク・セントラルにかばんさんが帰ってくるという報を受け取った。どこに行こうか考えていたけどまさかセントラルに戻ることになるとは思わなかった。なにしろあたしと同じヒトなのだ。この目で見ないわけにはいかなかった。

既に人だかりができている。かばんさんは有名人らしい。その中に博士ちゃんと助手ちゃんの姿があった。カラカルちゃんとアルパカちゃんもいる。あたしはその中の博士ちゃんたちに声をかけることにした。

「博士ちゃん！助手ちゃん久しぶり！」

「この声はとも…。っ!?!」

ばさささささっ！

「うわーなに?!」

辺りがざわつく。なにやら博士ちゃんがすごいことになっている。なんとというか全体的に大きくなっている。

アムちゃんはまたかとうんざりしているようだ。アムちゃんも成長したものだ。

「アムちゃんはビーストじゃないよ！もしビーストだったら今ごろ大惨事になってるよ

！」

「は〜い静まれ静まれ〜見せ物じゃないんだぜ〜」

こういう時のゴマちゃんに頼りになる。みんなを落ち着かせようと自分から嫌な役を買ってくれるのだ。

「ビ、ビースト…!?!」

「ふしゅーっ!ふしゅーっ!ふしゅーっ!」

どういう状況だろう。アムちゃんを見た助手ちゃんがうろたえて、博士ちゃんが必死に威嚇しているようだ。まだアムちゃんをビーストと思っっているのだろう。ここは説得しなくちゃ。

「あの、二人とも聞いて…」

説得しようと思った矢先にアムちゃんがあたしを引かせた。自分から説得しに行くらしい。

「は、博士、ビーストの様子がおかしいのです。どうやらいつものビーストとは違うようなのです」

「…ふしゅー」

博士ちゃんが気絶してしまった。あの妙な上から目線とは裏腹に意外とメンタルは弱いのかもしれない。

刹那、辺り一面の空気がビリッと張りつめた。肌を刺すような殺気があたしたちを包む。見るとアムちゃんが尋常じやない殺気を放っている。本能があたしに逃げるように警鐘を鳴らしてくる。

「…あたしにかけた最初の言葉を覚えているか？」

「…」

ドスの効いた声で凄むアムちゃん。周りの騒めきも一瞬にして静まってしまった。ただその雰囲気は圧倒されるだけだった。あたしもあの時の再現が起きているように足が震えてしまっている。

「あたしははつきりと覚えている…生かしておくか…殺す…食わせる…忘れるはずがない…あたしを狂気の渦に墮とした張本人だ…」

言葉を一句詠む度にビリビリと肌を刺すような殺気が辺りに満ちていく。もしかしたら本当にビーストに戻るかもしれない…そんな気がした。

「…忘れるな。あたしはお前たちを絶対に許さない。今ここで殺さないのもともえがいるからだ…彼女はビーストのあたしを救ってくれた。そしてフレンズとして、アムールトラとして認めてくれた、無二の恩人だ。それに免じて生かしているに過ぎん」

博士ちゃんが目を覚ました。瞬間シュツと細くなつた。あの体どうなってるんだろ

もはやあたしに状況を理解できる能力などなかった。

「…数多のフレンズに手をかけてきたあたしに今すぐお前たちを殺すことなど造作もないことだ。あたしは殺すと決めた時は躊躇いなく殺す。それだけは忘れるな」

辺りを包んでいた肌を刺すような殺気が薄らいでいく。するとアムちゃんがこちらにくるりと振り向いて謝ってきた。

「ごめん…やりすぎた」

…いつもの気が弱いアムちゃんだ。さっきの雰囲気とはまるで大違いだ。博士ちゃんたちがなにをしたかはわからないけど、アムちゃんがあそこまで変わるなんてよほどひどいことをしたのだろうか。

…博士ちゃんが白目をむいて泡を吹いている。アムちゃんのあまりもの殺気にかなりやられたらしい。トラウマになってなければいいけど…

「大丈夫…？」

あまり大丈夫ではないです。足が震えて言うことを聞いてくれません。

「ごめんね…あの二人にはどうしても言いたいことがあって…抑えきれなかった…」

「う、うん…大丈夫。ちよつと怖かったけど…」

まだ足がガクガクと震えている。アムちゃんもそれに気づいたのだろうか。

「あたし、ヒトを見てみたい。ともえちゃんも一緒に見よう？」

そう言うどひよいとあたしを担ぎ上げて肩車してきた。視点が一気に高くなった。たくさんさんのフレンズさんの頭が見える。狭かった海も一気に広くなったようだ。

「うううー！わたしも見たいですー！」

イエイヌちゃんがぴよんぴよんと跳ねている。ゴマちゃんは一人で飛んで知らん顔だ。おーつ！と驚きの声を上げると周りのフレンズさんたちも騒めき始めた。

「ともえちゃん、ちよつとごめん」

再びあたしを持ち上げると左肩に座らせた。

「ほら、イエイヌちゃんも」

膝裏に腕を突っ込むとそのまま草でも引き抜くかのようにひよいと持ち上げて自身の右肩に座らせた。すごい力だ。イエイヌちゃんをあたしと同じ高さに持ち上げてくれたことよりもそっちの方に意識が向いてしまう。

「わ、わふ…すごい力…。…ともえちゃん、あれ…」

「うん…何か見える…」

「かばんだわ」

不意に第三者の声が聞こえた。

「うわ！ト、トキちゃん!?!」

「お久しぶりね。あなたたちも来てたのかしら」

トキちゃんだ。あの独特の掠れがかった声を聞き間違えるはずがない。

「トキさんはかぼんさんのことを知ってるんですか？」

「知ってるも何も私の大切なファンだもの。私の歌を純粹に聞いてくれたのは彼女だけだったわ」

「そうなんだ…」

「それにアルパカのカフェを繁盛させたのもかぼんの功績なのよ。忘れるわけがないわ」

「そういえばアルパカさんもそんなことを言っていましたね。いろんなところで名前を聞きますし、すごいお方なんですわね」

「そうね。かぼんがセルリアンに食べられたときにもパーク中からフレンズたちが集まって来てたし、人望も相当厚いはずよ。ほら、着いたみたい」

フレンズさんたちの騒めきが大きくなる。

「アムちゃん、もつと前！」

「うん」

人ごみ割いてのっしのっしと前に進んでいく。

そこには二人の姿があった。

少し背の高い、赤いシャツに黒い外套をまとった女の人と大きな耳の全体的に黄色つ

ぼいフレンズさんの二人だ。前者の方はなんとなくかばんさんとわかるけどもう一人の方は誰だろう…？

みんなの声援を一身に浴びる二人。さしずめアイドルといったところだろうか。ふとかばんさんらしきヒトと目があつた。しばらく見つめ合った後心底驚いたようにこう言つた。

「君…もしかして…ヒト…？」

辺りが静まり返る。急ぐように人ごみをかき分けてあたしの元へ走り寄ってくる。いったいどうしたというのか。あたしがヒト…？どうということだろう…？

「ねえ！君！」

「あ、あたし…？」

「うん！その帽子…フレンズさんらしき特徴もないし…僕と同じヒトだと思ふんだ！違うかな！」

「ともえちゃんもヒトですよ。イエイヌであるわたしが保証します。あなたのことは聞いたことがあります。確か同じヒトを探し求めてゴコクエリアに旅立つたって聞きます」

「うん…10年あそこで探し続けたけど結局見つけれなかった…けど驚いたな…まさかキョウシユウエリアにずっと探し求めてたものがいたなんて…」

「じゅ、10年!?!」

驚いた。10年もゴクエリアでヒトを探し続けていたなんて…あたしだったら1年もしないうちに諦めて帰りそうなものだけど…

「まあ、探し続けてたつていうよりセルリアン退治の方がメインになるのかな。最初はやっぱり探していたんだけど、キョウシユウエリアとは比較にならないくらいセルリアンが多くてね。そこにいるフレンズさんのためにも、あそこのサーバルちゃんと一緒にずつと退治し続けてたんだ。それが10年かかったつていう方が正しいかも」

「そんなー、私、ほとんど何もしてないよー!」

「そんなことないよ。サーバルちゃんがいなくなったら僕どんな目に会っていたか…」

なんか妙だ。ヒトのかばんさんがフレンズさんのサーバルちゃんよりも強いつてこと?!

「かばんちゃんつてすつごいんだよ! テツつていうものを作ってセルリアンをバツタンバツタン倒していくんだ! 私が苦労して一匹のセルリアンを倒してる内に五匹も六匹も倒してるんだもん!」

「あはは、でもサーバルちゃんの耳とか鼻とかのおかげで早くセルリアンにも気付けるからね。そこは適わないよ」

「でもそれだけじゃん!」

なんだか妙な距離感があるような…サーバルちゃんっていう子がなんだか拗ねているようなそんな態度をしているように見える。まるで痴話喧嘩を見ているようだ。

向こうではみんなが船のような乗り物を陸にあげる作業をしている。ゴマちゃんが音頭をとってみんなを指揮しているようだ。ゴマちゃんもたくましくなったと思う。

「そういうええ君、名前を聞いてなかったね。なんていうんだい？」

「あたしはともえ！この子はイエイヌちゃんでこの子はアムちゃん！向こうで指揮を執ってるのがゴマちゃんだよ！」

「イエイヌちゃんはわかるけどアムちゃんとゴマちゃんは…？何のフレンズさん…？」

「あ、ごめんなさい…アムちゃんはアムールトラちゃん、ゴマちゃんはロードランナーっていうフレンズさんなんだ！」

「な、なるほど…よくわかったよ…」

若干ひきつったような笑顔を見せてくるかばんさん。言いたいことはよくわかる。あたしも最初はそうだったからね。恐らくゴマちゃんとロードランナーの関連性のことが気になるんだろう。実はあたしもよくわかっていない。そして当の本人もわかっていないのだ。

「そういうええ君もヒトなんだよね？よければ話を聞かせてくれないかな」

「うーん…聞かせてあげたいのは山々なんだけど実はこのパークにくる以前の記憶があ

まりなくなつて…」

「え、そうなんだ…」

露骨にしよんぼりしてくる。そんな反応されるとあたしもどう応じればいいかわからない。

「あたしも目覚めた場所がセントラルの施設にあるカプセルの中なんだ。どうしてそこで眠っていたのか記憶がなくなつて…」

多少の真実と若干の嘘を混ぜる。以前のあたしだったら全部真実なんだろうけど今のあたしのことを言つたつて話がひどくこじれて訳が分からなくなるだろう。ここは全部セルリアンの女王によつて再現された世界なんだから。

…なんかすごく恐ろしいことを言つたような気がする。

「そうなんだね…うーん、どうしてだろう。僕が最初に目覚めたときはサバンナ地方の真ん中にポツンと立っていて…後にミライさんつていう人の髪の毛からフレンズ化したつていうのがわかつて…」

「そ、そうなの!?!」

驚きの真実! かばんさんはヒトのフレンズだった!

「あつはは…訳が分からないよね…人のヒト化つて…そうだ、アリツカゲラさんのロツジに行こうか。そこでゆっくりと話そう。ついでに鉄の作り方も教えてあげる。鉄の

作り方をマスターしておくでセルリアンとの戦いにも役に立つよ」

そう言うのと背中中に括り付けてあった、丈は2メートルはあるかという戦斧を持ち出した。

「これはデーンアックスっていつて僕のメインウエポンなんだ。あとは投げ斧とかナイフとか…この刃の部分鉄から作り出したんだ」

そう言うって体中のいたるところから武器が出してくる。確かにこれならセルリアンに勝てるかもしれないしサーバルちゃんよりも強いかもしれない。

「かばんちゃん楽しそう…人に会えたのがそんなに嬉しいのかな…」

「かも…ですね」

どこか寂しそうな顔をするサーバルちゃんと、どことなく渋い顔をするイエイヌちゃん。なにか気に障ることも言ったのだろうか。イエイヌちゃんがあんな顔をするとは珍しい。後で謝っておくべきかな…？

……………

「いらつしやいませ、ロッジアリツカにようこそ…つて、かばんさん…ですか…？」
「うん。久しぶりだね、アリツカゲラさん。ここも何も変わってないな。あの時のま

んまだ」

「うわ、お久しぶりです〜！真っ先にここに来てくれたんですか？嬉しいです〜！」
ほんわかしたしやべり方をするのはアリツカゲラちゃんだ。このロτζジの店主らしい。オオミミギツネちゃんが経営するホテルと同じ宿泊施設らしい。向こうと違ってちゃんといろんなフレンズさんが利用してるとのことだ。

チエックインを済ませると部屋に案内される。なんでも以前かばんさんが泊まった部屋と同じ部屋らしい。かばんさんとサーバルちゃん、あたしとイエイヌちゃん、ゴマちゃんとアムちゃんというペアに分かれるとそれぞれの部屋に通された。

「えへへ〜ふかふかです〜」

「そうだね〜このお布団はもっふもふだね〜」

イエイヌちゃんとこのベッドの組み合わせは最強だ。ふかふかですべすべのベッドとイエイヌちゃんのもふもふだ。最強と言わざるを得ない。どんな人やフレンズでも一瞬で落ちること間違いなしだ。

「わ、わたしはお布団じゃありません！」

「えっへへ〜もふもふ〜」

イエイヌちゃんもじゃれるようにいたずらっぽくあたしを離そうとする。イエイヌちゃんもまんざらではないようだ。

どったんどったん！

ゴマちゃんたちの部屋からどたばたと暴れるような音が聞こえる。

「なにやら二人で暴れているようです。枕投げでもしているんでしょうか」

枕投げ。こういうところに来た時の定番の遊びだ。子供であれば誰しも一度はやったことがあるであろう。それが壁一枚隔てた向こうの部屋で行われている。

「い、行つてきます！」

イエイヌちゃんが行つてしまった。程なくしてゴマちゃんの声が聞こえたと思うとイエイヌちゃんの”わふう！”という鳴き声が聞こえてきた。再びどたばたとすごい音が鳴る。もはや大乱闘だ。

ふと外を見るとかばんさんとサーバルちゃんが何かしているのが見えた。なにやらあの乗り物から荷物を降ろしているようだ。果たして荷物なのだろうか。荷物にしてはあまりにも大きく、物のようには見えない。言うなれば装置：鍛冶場といったところだろうか。あれからかばんさんは鉄を作るのだろうか。

今日はもう遅い。しっかりと寝て明日に備えよう。

第3話「鉄を打て」

なんだか大掛かりな準備が始まった。なんでもこの炉や作業台は全部自作なのだという。とんでもないお方だ。パークのみんなから尊敬されてるだけのことはあるというものだ。

ジャパリバスというフロートを付けた乗り物から炉を降ろして火を点ける。まずはこの火を1300度になるまで熱するという。

「…よし。そろそろ入れようか」

ゴコクエリアで拾ってきたという泥炭を炉の中に入れる。ゴコクエリアの火山に堆積している泥炭には多めの鉄分が含まれており、良質の鉄が出来上がるのだという。これを炉で熱することにより鉄を錬成するのだとか。

「これを大体6時間…この棒で突いて余計な成分を弾き出すんだ。…煙は吸っちゃだめだよ。あまり長いこと吸っちゃうと死んじやうからね」

「そ、そんな危険な作業なの…?」

…煙を吸わないように炉の中を突つつき回す。これを6時間…もうすでに腕やら肩やらが痛いと言っている。

「まだまだ始まったばかりだよ。僕も一緒に手伝うから頑張ろう！」

ザクザクとかばんさんが炬の中を突き回す。その顔は職人そのものだ。これをもう何年と繰り返ししているんだ。職人と呼ばれてもおかしくないはずだ。

「かばんちゃん一度これを始めると一日中暇になるんだー。ゴクエリアじゃ寄ってくるセルリアンをやつつけるくらいしかできなかつたもん」

「この作業だけでも6時間かかるって言ってますもんね。待っている方は大変そう
だ」

「本当だよー！なんもすることがないんだもん！火は怖いしね！」

遠くでイエイ又ちゃんとサーバルちゃんが何か話している。これを機にあの二人が仲良くなってくればいいな。話も弾んでいつていようでお互いの顔に笑顔が見えてきた。やがて二人はどこかへ走り去っていった。

あたしはというと煙を少し吸ってしまったせいか少し頭が痛くなってふらふらとしていた。

「だ、だめ…頭痛くなってきた…ふらふらする…」

「少し休むかい？初めてのうちは仕方ないよ。しばらくは僕がやっておくから、ともえちゃんは少し休むといいよ」

「う、うん…そうする…」

お言葉に甘えて少し休むとしよう。向こうではサーバルちゃんといエイヌちゃんの遊ぶ声がある。なんだかとても楽しそうだ。あたしも少し眠くなってしまったし、少し仮眠でもとろうかな。

.....

「ふわあ……」

目を覚ますと隣でいエイヌちゃんとサーバルちゃんが寝ていた。どうやら遊び疲れたらしい。かばんさんは未だ真剣な顔つきで炉の中を突いている。ふらふらと炉の中を覗きに行くと一つの塊が出来上がってた。どうやらこれが鉄らしい。……いったいどれくらい寝ていたのだろうか。

「あつ、起きたようだね。ともえちゃん5時間くらい寝てたんだよ。最初死んじやったのかと思ってすぐく焦ったんだから」

……やっぱりそれくらい寝ていたんだ……かばんさんはその間にもずっと炉を突いていたのかな……？

だとしたらすごい気力と体力だ。

「あとはこの鉄の塊を取り出して、ひたすらハンマーで叩いていくんだ。力加減や温度

には注意だね。炉で温度を保ちながら最初は弱く、硬くなってきたら少し強めに叩くんだ。いいね？」

かばんさんの指示に従って鉄の塊を叩いていく。叩くたびに黄色く熱せられた塊から火花のようなものが散っていく。かばんさん曰く不純物らしい。あとは2時間ほどかけてこの作業を繰り返し、ひたすらこの鉄の塊を叩いていく。そうして鉄が出来上がることのことだ。

しばらく叩いているとカンカンと金属のような音が出るようになった。どうやらだいたい不純物を取り除けたようで鉄に近付いてきたらしい。

「おめでとう、だいたい良くなってきたよ。あと少し頑張ろうね。もう少し叩いたら念願の鉄が出来上がるんだ。君だけのオリジナルの剣ができるんだよ。ワクワクするでしょう？」

かばんさんの言葉に喜びが乗っている。ワクワクしているのはかばんさんの方に思えるけどどうなのだろうか。あたしは熱やら疲れやらでもうふらふらだ。腕ももうパンパンである。

「…さあ、もうそろそろ良いかな。あとはこれを平らに伸ばして…いいよ本作業だよ」
ま、まだまだ続くの…？本作業って…なんであんなにピンピンしていられるんだろう…
…やつぱりあつちで鍛えられたからなのかな…？

今までは鉄を作る作業だった。そして今からは鉄を打って剣を作る作業に入る。ひたすら叩いて、叩いて、叩きまくるのだ。そしてあたしだけの、オリジナルの剣が生まれる…

「さあ、叩くんだ！」

右手に力を込めて、鉄の塊に振り下ろす。叩く。叩きまくる。ひたすら叩く。いや、打つんだ。あたしは今叩いてるんじゃないやなくて鉄を打っている。打っているんだ。

「想像してごらん…君が打っている鉄は獲物を殺すための道具になるんだ…僕もそう思っているから鉄を打ってきた。襲い掛かってくるセルリアンを倒すための鉄をね…炉にくべるたびに鉄は生まれ変わって強くなっていく…叩くたびに強くなる…腕を振り下ろすそのひと振りが鉄を強くしていくんだ…」

かばんさんが何かに取り憑かれたように呟く。しかしその目は真っ直ぐあたしの打つ鉄に向けられていた。

「硬く、鋭く、重く、打たれ続けた鉄は美しく輝くんだ。そして獲物を殺す武器になる…」
鉄を打つ。ひたすら打つ。鉄が伸びてきたら折り曲げて、またひたすら打つ。炉にくべて熱く熱された鉄を打っていく。そして鉄は強くなる。あたしは何かに取り憑かれたように打ち続けた。セルリアンを斬る様子を想像した。あたしに襲い掛かるセルリアンを想像した。その想像をあたしの右腕に込めて鉄を打っていく。この想いは敵を

討つたためにある。この鉄は敵を斬るためにある。打って打って打ちまくるんだ。

.....

「…できた…」

あたしの手には一本の剣が握られていた。ずつしりと重く、一振りすれば硬い岩をも切り裂きそうだ。もちろんそんなことはできないけどそんな風に思えた。

「わかっていると思うけどセルリアン以外斬っちゃダメだよ。それと取り扱いには十分気を付けてね。鞘は作ってないから歩いてる拍子に自分を切っちゃったら大変だからね。それと、まだ防錆加工も何もしてないから手入れも大切にね。じゃないとすぐ錆びちゃうから」

「うん。ありがとう！かばんさん！」

「いえいえ、僕も楽しかったよ。やっぱり誰かと一緒にものを作るのは楽しいなあって思ってたよ」

「サーバルちゃんとは作らなかったの？」

「サーバルちゃんは火が苦手だし…頑張っても1時間くらいが限界みたいなんだ」

「そうなんだ…」

やっぱり最初の焔を突く作業が鬼門になるのかな。あたしも結局1時間くらいでダウンしてずっとかばんさんに任せつきりにしてしまったしね。サーバルちゃんもダメだったみたいだ。

「みなさん！セルリアンです！そこそこ大きいのが来てます！注意してください！」
「早速セルリアンのお出ましましたいだね。ちょうどいい、その剣の性能を試してみようか」

試し斬りをしてみろということだろうか。震える腕で剣を構える。この剣で今から敵を斬るんだ…息が荒くなってくる。今からセルリアンとはいえこの手で倒すのかと思いと恐怖でいっぱいだ。

目の前にあたしより大きなセルリアンが立ちふさがってきた。…もうどうにでもなれ！

「うわあああああああああああああああああああああ!!!」

ザンツ！

「あつ…」

縦一文字に大きな傷が入った。だけど不十分だったみたいで、そのままあたしに覆い被さるように襲い掛かってきた。

「…させない！」

ゴウと音を立て、あたしの頭上を突風のようなものが突き抜ける。かばんさんのデーンアックスがセルリアンを突き刺さり、あたしの横に倒れこんだ。そのままセルリアンの上に登ると手斧で石を叩き割ってしまった。

「まだまだ来るよ！気を付けて！」

三匹のセルリアンが立って続けに現れた。かばんさんは狙いを絞ると、まずは縦に斧を振り下ろし一匹のセルリアンを倒した。続く二匹目のセルリアンを横なぎで吹き飛ばすと、手斧を投げて見事石を叩き割った。

三匹目のセルリアンはあたしを狙っていた。ブンブン振りまわすと、うろたえたのかその場であたふたしているように見える。

「や、やああああああああああああ!!」

切っ先を相手に向けて突撃する。ぶすりと突き刺さり、腕全体に生々しい感触が伝わっていく。コツンと何かに当たったかと思うとセルリアンは勢いよく爆散した。

「ああ……」

あたしが……セルリアンを……倒した……？

「やったね！セルリアンを倒したよ！」

「あ……ああ……」

茫然として言葉が出ない。訳も分からずヤケクソになって突撃しただけなのにセル

リアンを倒してしまった。こんなことってあるんだなあ…

「おめでとう。はじめの一步だよ。誰でも最初は慣れないものさ。ゆっくりと上達していけばいいよ」

かばんさんから激励の言葉を受ける。あたしはそんな危険に身を投じるつもりはないんだけどこれは素直に受け止めるべきなのだろうか…？

「かばんちゃん、変わっちゃったなあ…」

「変わった？」

「昔はもつと頼りなくて、みんなの為に必死に頑張る子だったんだけど、ゴコクエリアに行ってからほとんどんんん変わっていったんだ。淡々と問題を解決して、作戦も自分一人で考えて、肅々と物事を進めていって…そのうち私の出番がなくなっちゃった。今までは私がかばんちゃんを守ってたんだけど、それもなくなっちゃったんだ」

「そうだったんですか…」

「ごめんね、愚痴っちゃって」

「いえ、そんな…」

……………

夜中、同じイヌ科の仲間としてタイリクオオカミさんと談笑していた。わたしと同じオツドアイということもあって奇妙な友情を感じた。それにしてもこのお方はいろんなお話を知っておられる。またいつか聞きたいものだ。

「それでは、この辺で」

「うん、また一緒に話そうか」

エントランスには誰もいない。時計を見ると短い針が2と3の間を指している。ヒトの生活の中でももつとも親しみのある字であろうこの字は、唯一わたしの読める字でもある。

この時間帯はヒトであればもう皆が寝静まっている時間だ。ともえちゃんのリビングに
向かって歩いていく。外からは虫の鳴く声、部屋からはフレンズさんの寝息が聞こえる。うーん、聞いていて気持ちが良い。夜中特有の異世界ともいえるような雰囲気がりわたしの心を魅了してくる。

その虫の音と寝息に交じってふとため息のような音が耳に入ってきた。耳を澄ませるとトントンと床を鳴らすような音が上の方から聞こえてくる。それにこのニオイは……サーバルさん……？

わたしは屋上に向かって歩みを進めた。屋上にいたのはやっぱりサーバルさんだった。なにやら柵にもたれかかって物思いにふけているようだ。昼間にサーバルさん

が見せていた寂しそうな顔をしている。昼にサーバルさんが漏らしていた愚痴を思い出す。…かばんさんに関することなのだろうか。やつぱり気になる。ヒトとの暮らしの中でヒトの行動や表情を観察してきたわたしは感情の機微にとっても敏感なのだ。においでもわかる。わたしに隠し事は通用しません。

「どうかしましたか、サーバルさん」

「イエイ又ちゃん…」

言葉に元気がない。なんだか追い詰められているようにも見える。こういう態度をしているヒト…フレンズさんはとても放っておけない。これもイエイ又の性なのだろうか。

「よければお話、お聞きしますよ」

「……………」

うつむいて黙ってしまった。どうすればいいのかとわたしなりの知恵をふり絞る。わたしはともえちゃんを悲しんでいた時にもどうにかしてともえちゃんを笑わせようとしていたはずだ。フレンズ化する前の記憶を必死に辿る。

「私、怖いんだ…」

ぼつりとサーバルさんが呟いた。

「昼間にも話したけど、サーバルちゃんはゴコクエリアに行つてから変わってしまった。

どんどん大きくなって、成長して強くなっていくかばんちゃんと、成長せずにと同じ姿のままかばんちゃんに守られる私：たまにね、いつか、かばんちゃんが私の元からいなくなっちゃうのかなって思うときがあるんだ：今日のもえちゃんもテツを作っているときにも強く思ったんだ。いつか私なんか必要じゃなくなって、一人でパークのために旅をするようになるのかなって思うと、怖くって…」

サーバルさんの独白は続く。

「考えてみたってそうだよ。かばんちゃんとさばんなちほーで初めて会ったとき、私に對しても怖がってた。それがパークを旅していく中で、どんどんフレンズたちを助けていって、かばんちゃん自身もどんどんたくましくなっていた。この時からもう差がついてたんだよ。わたしに頼ってばかりではダメだって、自分で道具を作り始めた。その一つがテツなんだ。それからは、バスを自分で修理したり、自分でセルリアンを倒したり、一人で困りごとを解決したり：一緒にやってたことも一人でやるようになっていった。：いつからか、私はいるだけになっちゃった。」

「想像してみてもよ。いつも横に並んで一緒に歩いてたのが、後ろからついて行くことになるんだ：この気持ち、わかるかな…」

正直に言うよと、わからない。けど、サーバルさんの声色や表情から察するにきつとでもつらいのだと思う。わたしはともえちゃんの気持ちを顧みずに引つ張っていった

り、後ろからついて行ったり、ぐるぐるともえちゃんの周りを回ったりする。おそらくサーバルさんとはまったく違う思考をしているのだと思う。

けど、わたしはどうにかしてこのサーバルさんの悩みに応えられるようにしたいと強く思った。

「そんなはずない、そんなことかばんちゃんは絶対にしないってわかってるのに、どうしても思っっちゃうんだ…私、怖いよ…」

サーバルさんが泣き出した。私はどうすることもできなかった。ただ黙って背中をさすって慰めるしかできなかった。

不意に屋上の扉が開く音がした。かばんさんだ。

「サーバルちゃん…ここにいたんだ」

「…かばん…ちゃん」

心配そうな顔でこちらを見ている。やっぱりかばんさんはサーバルさんの異変に気が付いていないようだ。サーバルさんは背を向けて拒否しているように見える。

「サーバルちゃん…心配したよ？夜中目が覚めたらいなくなつて、どこを探しても姿を見ないんだもん…一緒に戻ろう？」

「止めて！今は…一人にさせて…」

ビクツとかばんさんの動きが止まる。どうやら相当重症のようだ。痴話喧嘩どころ

ではない。二人の関係は破局の一步手前まで来ている。わたしにできることは何か。イエイヌとしての責務を考える。

「サーバルさん。ごめん、少し離れますね」

「……………」

返事はない。そばにいてあげるべきなんだろうけど今はそれどころではない。この問題はかばんさんが原因で引き起こされたものだ。ならばサーバルさんのためにも正さねば。なんでも一人で背負い込もうとするかばんさんのその思いがサーバルさんを追い詰めてしまった。それを気付かせなければならぬ。

「かばんさん!」

「イエイヌちゃん…どうしたの?」

「来てください。お話があります」

エントランス付近のロビーにかばんさんを連れていく。さすがにタイリクオオカミさんはいなくなっていた。かばんさんに座るよう促す。

「それで、お話って?」

「サーバルさんに関してです。かばんさんはサーバルさんのあの様子をどう見えますか?」

単刀直入に話を切り出す。まずはかばんさんがサーバルさんをどう思ってるかだ。

「サーバルちゃん：前々から様子がおかしいとは思ってたんだ。：僕は今までずっとサーバルちゃんに守られてきた。けどこのままじゃダメだと思って、サーバルちゃんに任せつきりにするのはダメだと思って、僕なりに努力して：その時からかな。僕とサーバルちゃんの間溝を感じるようになったんだ」

「やっぱり…」

かばんさんはサーバルさんに迷惑をかけたくないから自分が強くなつて少しでも負担を減らそうとしていたんだ。それが気付いたらすべて一人でできるようになっていた。頼られなくなったサーバルさんはそれをとて寂しく思っていたんだ。

「結論から話します。サーバルさんはとても寂しがっています。サーバルさんに頼ってばかりではダメだと思うかばんさんの気持ちもわかります。でも：サーバルちゃんは頼られたいんです。以前のよう一緒に旅をしたいんだと思います。今のままでは一緒に旅をしているんじゃないかと、一人で旅をしているのと同じだ：サーバルさんはなんでも一人で解決してしまうかばんさんを悲しんでいます。そして、非力な自分をとても嘆いています：どうかそれに気付いてあげてください：今のサーバルさんを見ているのはわたしとしてもとてもつらい…」

「……………」

沈黙が流れる。かばんさんの顔が険しくなる。こうしてヒトに齒向かう行為はわた

しとしても苦しいけどこれもサーバルさんのためだ。

「そう…だったんだね…正直に言うとは薄々と気付いてはいたんだ。けど僕からは言い出せなかった…自分の行いが間違いだとは思いたくなかったのかもしれない。けど、それがいつの間にかこんな深刻なことになっていたなんてね…」

「…サーバルさんはあなたに頼られるのが好きだったんです。以前のようなら一緒に協力し合う旅をしたいと思っっています。…サーバルさんはもう壊れかけてます…手遅れになる前にどうか…手を差し伸べてあげてください。」

失礼しますと断って席を後にする。

わたしも寂しいと思う気持ちは痛いほど理解できる。わたしだってともえちゃんに頼られなくなったら生きる意味を失うというものだ。なんでもかんでもともえちゃん一人でやってしまうと考えると、わたしは…とても耐えきれない…

…わたしにできることはやった。後は…あのヒトを信じてうまく事が運ぶのを祈るだけ…どうかうまくいきますように…

……………

…僕は現実から逃げていたのかもしれない。わかっていたことをわざと無視して一

人で頑張り続けてきた。結果、それがサーバルちゃんを傷つけることになった。いったい、どれだけの長い間サーバルちゃんを傷つけてきたのだろう。僕は星の読み方を覚えた。鉄の作り方を覚えた。セルリアンだって一人で倒せるようになった。最初はサーバルちゃんの負担を減らすだけのつもりだったのに……サーバルちゃんは気付けば孤独を感じるようになっていた。僕はいつたいてどこで……間違っていたのだろう……

……

「じゃあ、またね」

「はい、お元気で」

わたしたちはかばんさんと別れることになった。かばんさんたちはしばらくは博士たちの住む図書館で過ごすことにするらしい。あれからどうなったのかはわたしにはわからない。けどお互いの間にはなんだか柔和な雰囲気漂っているように見えた。少しは前進できたのだろうか。遠くから会話を聞く限り少し仲直りしたようにも見える。わたしもともえちゃんとの関係を大事にしていきたい。お互い大事なパートナーだ。持ちつ持たれつ、お互いの不足を補っていきながらわたしはともえちゃんと過ごしていきたいと、そう思った。

第4話 「無双と双壁」

あたしたちは今、平原地方に来ている。なんでもここで今から合戦が行われるらしい。敵はヘラジカさんとライオンちゃんの連合チーム。対するこちら側はアムちゃん一人だけ。なんでも因縁の対決らしい。あたしたちがここに来るとヘラジカさんたちは快く迎えてくれた。そしてあたしたちのパーティーにアムちゃんがいることをすごく喜んでくれた。それから紆余曲折を経て合戦が行われることになったのだ。

「どう？緊張する？」

「うん…手加減できるかな…」

「そつちかあ…」

アムちゃんらしい回答だ。相手を殺してしまわないよう、うまく手加減できるか心配なようだった。

「負ける心配とかはないの？」

「うん。全然」

はつきりと言い切ってしまった。まあ…あの超巨大セルリアンを相手にしたあの暴れっぷりからすると負ける心配をする方が変なのかもしれない。

「アレ、君たち…」

かばんさんだ。思いがけない再会の早さにびっくりした。

「どうしてここに？」

「ここでヘラジカさんたちと合戦するんだ」

「合戦？あれ、たしかかばんちゃんが解決したはずじゃあ…また何かあったのかなあ？」

と、サーバルちゃん。前に一回何かあったのだろうか。

「前はライオンとヘラジカが合戦してたんだよ！ヘラジカが51回も戦いを挑んで51回も負けたって聞いたときはびっくりしちやった！」

「ズ、ズじゆういち…？」

なんとということだ。七縦七擒なんてものじゃない。これで諦めないヘラジカさんもヘラジカさんだ。対ビーストとの共闘ではすごく頼もしく思えたけど意外と…なのかもしれない。

「それで今回はどういうことになってるの？」

「アムちゃんがヘラジカさんとライオンちゃんたちを相手に一人で戦うんだ」

「一人で!？」

驚くのも無理はないだろう。一人で森の王者と百獣の王の軍勢を相手にするのだ。

「あの戦いを見た者としてはちよつと信じられないけど…ちよつと気になるかも…」

なんだかうずうずしているようだ。もしかして戦いたいのだろうか。

「かばんちゃん、もしかしてライオンたちと戦いたいの？」

「ま、まさか！ただちよつと…」

「ちよつと？」

「アムちゃん…アムールトラさんがどれくらいの実力なのか気になって…」

そつちか。ここはちよつとかばんさんの驕りを静める良いチャンスかもしれない。少しウォーミングアップも兼ねてかばんさんの実力を見てみるとしよう。

「アムちゃん！かばんさんがアムちゃんと戦いたいつて！」

「あたしと…？」

アムちゃんがとことここちらに歩いてくる。

「よろしく、アムールトラさん。そういえばよく見たら他のフレンズさんとは色々と違う格好をしてるんだね」

「元ビーストの不完全なフレンズだから…もう慣れたよ」

両者見合う。デーンアックスを手に取り構えるかばんさんと棒立ちのアムちゃん。果たしてどつちが勝つのか楽しみです。

「よーい…はじめー！」

瞬間、ドンと空気が張りつめる。まずは相手を威圧して怯ませるのがアムちゃんのや

アムちゃんがかばんさんへ飛びかかる。体を翻すと両の爪でかばんさんへ切りかかった。アックスの柄が真つ二つに折れる。

「そんな…!?!」

鋭い眼光がかばんさんを捉えると強烈な突き上げがかばんさんを襲った。瞬間、かばんさんの体が宙へ舞った。

「ア…グッ…!!」

「かばんちゃん!」

アムちゃんは静かに佇んでいる。しかしかばんさんはまだ諦めていない様子だ。

「まだ勝負は…終わってない!」

ナイフがアムちゃんめがけて飛翔する。ナイフをかわしたアムちゃんへ手斧を持つたかばんさんが襲い掛かる。

アムちゃんはなんてことなく手斧を奪った後、足元をすくって転ばせた。

「調子に乗らないで」

「ッ…!」

上から睨むようにかばんさんを見下ろす。ここまでくればもう王手だ。勝負は決したようなものだった。

「あたしの勝ち」

袈裟切りのような斜めに薙いだ爪がシロサイちゃんのスピアを叩き切った。

ドン！

「グッ……！」

強烈な蹴りでシロサイちゃんを10mほど交代させる。すかさず標的をオオアルマジロちゃんに変えるとその凶爪の糧とした。

「まだ……終わってません！」

折れたスピアを片手にシロサイちゃんが突進してきた。

「しっ……い……！」

アムちゃんの横薙ぎの一閃がシロサイちゃんの鎧を大きくえぐった。さすがのシロサイちゃんも戦意喪失したようでぺたんとなんと力なく崩れてしまった。

そんなシロサイちゃんに目もくれずアムちゃんは次の獲物を探しに行くかのように走り去ってしまった。

やがて次の相手が見えてきた。オーロックスちゃんとアラビアオリックスちゃんの二人だ。

「シロサイとオオアルマジロたちを突破したか……だが、守りは破れど力では負けないぞ！」
二人は相見合おうと両者勢いよく鉾を交えた。

ズドンッ！

アムちゃんの左側頭部からオーロックスちゃんのスピアが突き出る。アムちゃんはそれを掴むと自らの前に叩きつけた。

「グハア!?!」

ズンツ!

「ひい!?!」

イエイヌちゃんが悲鳴をあげた。それもそのはずだ。アムちゃんがオーロックスちゃんの胸に全体重をかけて踏みつけたのだ。あれは…きつと痛い。

オーロックスちゃんはピクリとも動かなくなった。…死んでないよね?

「ふーっ…ふーっ…」

けもののような荒い息を吐く。体全体を使って大きく息をする様子はさしずめ野生のけものといった様子だ。

「くっ…」

ラビラビが逃げ出した。すかさずアムちゃんも追いかけるが追いつく様子はない。やがてヘラジカさんとライオンちゃんがいる城まで逃げ込んだ。

あそこにはツキノワグマちゃんとパンサーカメレオンちゃん、ハシビロコウちゃんがいる。

さすがにあたしも城の中までは見えない。あたしたちも中に入ろうかな?

.....

アラビアオリックスを追って城の中まで入った。中へ入るとなにやら迷路のようなところへ出た。フレンズの姿は見当たらない。いったいどこへ行った？

ぷし！

「ツ……!?!」

妙なものを踏んだ。トゲが付いている変な木の実のようなものだ。よく見るとあちこちにたくさん落ちていているのがわかる。

「あいつらの仕業か……!」

注意していかなければ。浅い水溜めもそこらかしこにある。恐らくそこにもこの小賢しいトラップがあるはずだ。

「やあつー!」

「つ!!」

背後から不意打ちを仕掛けてきた。アラビアオリックスだ。大した腕もないくせにあたしを機動力で翻弄してくる。ビーストだった時のことを思い出す。あの時のあたしも今のような怒りを感じていたものだ。その怒りを燃料に力を開放していく。

「ツキノワグマ！」

「任せて！」

彼女の背後からもう一人のフレンズが飛び込んできた。とつさに飛び退いて距離を稼ぐ。こいつらは不意打ちしかしてこない。正々堂々と戦うことはしないのか。沸々と怒りが込み上げてくる。

「……………」

ちくちくちくちく！

「グウ!?」

背中にちくちくした何かが当たる。あの木の実か……もう一人いる……!

「今だ！」

「ぐあ!?!」

倒れた拍子に背中にたくさん木の实が刺さる。背中がじつとりと血で濡れていくのがわかる。

「あつ……」

「気を抜かないで……くるよ……!」

「うん……!」

取るに足らないと思っていたフレンズたちがあたしに血を流させた。あたしは何だ

後ろで隠れていたと思われ一人のフレンズが姿を現した。どうやらこいつがあたしに木の実を投げて攻撃していたらしい。

「貴様か…」

「ひっ…」

背後から地面を蹴る音が聞こえる。アンブッシュだ。すかさずその頭を掴んで持ち上げる。

「アツ…ガツ…」

「相変わらず不意打ちだけは得意なようだな…」

ツキノワグマだ。渾身の一撃で頭突きを喰らわす。こうなったらあたしのものだ。あたしはもはや戦うことが目的ではなくなっていた。

殴る。蹴る。叩きつける。投げ飛ばす。あたしを見ていたアラビアオリックスが巻き添えを喰らったがどうでもよかった。ひどく怯えたような目であたしを見ている。それがたまらずゾクツと快感があたしの中を駆け巡った。

這うように逃げるツキノワグマの頭を掴む。抵抗しようとしたあたしの前に腕を突き出すけどそもそもあたしとは体軀が違う。無意味だった。あたしは右手を力の限り叩きつけるとそいつは気絶してしまった。

「ふーっ…ふーっ…」

アラビアオリックスを睨む。腰が抜けているようでほとんど動けないようだった。頭を掴むと壁に思い切り叩きつけた。次いで浅い水溜めにそいつの頭を沈める。うめき声をあげて抵抗が激しくなったところで引き上げると腹部に爪を突き刺してやった。

「アツ…!？」

「よくもあたしを愚弄してくれたな…ただでは済まさんぞ…」

前にある扉に向かってそいつを投げた。勢いよく扉を突き破るとボロ雑巾のように転がっていった。やがてふらふらと立ち上がりあたしを横目で確認するとまたも逃げ出した。得物もボロボロで使い物にならないだろう。それにあの様子ではまともに戦えないはずだ。このカメレオンも完全に戦意を失っている。あとはヘラジカとライオンだけか。早く最上階を目指すでしょう。

アラビアオリックスが血を流しているのか、この血の跡を辿っていくとヘラジカたちの元へと辿っていつているような気がする。二階、三階、四階、と登っていき、ついに最上階に着いた。奥にはヘラジカたちが見える。その前にはアラビアオリックスが力なく倒れていた。

「い…行かせるものか…」

あたしの足首を掴んでくる。少し振り払うだけですぐに離れた。

「だいぶ派手に暴れたようだな。手が血まみれだぞ」

た。

「ふん！槍が折れたって戦える！甘く見ないことだ！」

動きが素早くなった。得物をコントロールしなくなつて良くなった分フットワークが軽くなったのだろう。小賢しい。さっさと沈めてくれる。

「ダア!!」

脇腹に獲物が刺さる。痛みなど感じなかった。ヘラジカの腕をとると大きく振り上げて畳へと叩きつけた。

「ぐあああああああああああああ?!?!」

呻き悶えるヘラジカの足を掴み持ち替える。二〜三回畳に叩きつけた後ライオンの元に投げ飛ばした。

苦しそうな声をあげている。やってみればあつけないものだ。とどめをさそう。

「ま、まだだ！」

手に持っていたもう一つの槍があたしの足を切る。不意の攻撃にバランスを崩して倒れこんでしまった。

「よくもやってくれたな…！これで終わりだ…！」

切っ先をあたしの胸にめがけて振り下ろしてきた。ここで負けるものか…負けな
いッ…!!

拳を振り上げてあたしに突進してくる。左肩から右の脇腹ににかけて思い切り斬る。そのまま力なくドンという音を立ててヘラジカは倒れた。勝負はあっけなかった。もはやあたしに立ち向かうものはいない。あたしは勝ったのだ。

……………

アムちゃんの咆哮が城の中から何回も聞こえた。まるでビーストのようだった。まさか本当にビーストに戻ったとかはないよね…？

「恐ろしい咆哮…理性がはちぎれたみたいだ…」

「ライオンたち大丈夫かな…前に来たときはケガ人が出そうで嫌だと言ってたけど、今やつてゐることは狩りごっこでもない殺し合いだよ…」

言っていることはもつともだ。アムちゃんの戦闘スタイルは型なんてない粗野なものだ。故に手加減なんてものは知らなくて当然だ。ひたすら本能のままに暴れる獣そのものといつてもいい。だから誤ってフレンズさんを殺してなきやいいけど…

ゴマちゃんが険しい顔をしている。あたしたちの中で一番アムちゃんのそばにいたのはゴマちゃんだ。ホテルのときもロッジでペアを組む時も二人は一緒だった。再会したときもアムちゃんはゴマちゃんたちと一緒にいた。二人はあたしが思っている以

上に仲が良いのだ。

「アム！」

ゴマちゃんが叫んだ。見ると城の中からアムちゃんが出てきているところだった。けどあたしたちはその異様な姿に驚いた。お洋服はボロボロで全身いたるところから血が滲んでいなのだ。両手は血で濡れている。本当に殺し合いをしてきたかのような出で立ちだ。

「お前、大丈夫かよ!? どうしてこんな…!」

「…やられたからやり返した。それだけ」

「そんなんじやねえだろこんなの…! お前殺していないだろうな!」

「…たぶん…」

ゴマちゃんが本気で心配している。あの姿に幾度ともなく聞こえたあの咆哮を聞く心配にもなるはずだ。そして今いるアムちゃんは血まみれなのだ。そういうことがあつたと思われてもおかしくないはずだ。

そうこうしている内に中からフレンズさんたちが出てきた。ライオンちゃんとハシビロちゃんが他の四人を背負っている。なんだかラビラビとツキノワグマちゃんとヘラジカさんはひどくぐったりしているようだ。カメレオンちゃんは…他の三人と比べるところとくにぐったりしている様子もない。

「ハシビロちゃんもいたんだ。でもハシビロちゃんだけ無傷みたいだね。どうしたんだろっ?」

「…あたし、あの子だけ見てない。どこかに隠れてたんだと思う」

あたしたちの前にラビラビたちが降ろされた。三人ともひどくボロボロだ。

「改めて見るとひどいねえ、これは」

ライオンちゃんがぼつりと漏らす。言うことはもつともだ。ラビラビなんて腹部を思い切り刺されている。恐らく爪でグサリとやられたのだろう。ツキノワグマちゃんも頭部をひどくやられているようだしヘラジカちゃんは左肩から右わき腹にかけてひどい裂傷ができています。

「ハシビロコウをセーフキーパーとして城に待機させておいてよかったよ。これだけのフレンズを一人で背負うのもきついし、もしかしたらわたしもアムールトラにボロボロにされてたかもしれないしね」

あたしとしてはライオンちゃんがまだシャキツとしている方が不思議な気がする。

「で、ヘラジカ。これで満足かい?」

「あ、ああ…満足だ…」

「アムールトラはまだ満足していないようだよ?」

「なっ…?!」

本気でビビっているようだ。そりやあ自分から申し出た合戦にボロボロににされた挙句アムちゃんがまだ満足してないと言われればね。もつともライオンちゃんの嘘なだけで。

「まだやるといふならやる」

「も、もう勘弁してくれ！私の負けだ！もう…動けん…」

「…わかった」

ヘラジカさんが正式に敗北を認めた。この試合はアムちゃん一人の勝利に終わったようだ。何がともあれ無事に終わってよかった。ケガ人いっぱい出たけど。アムちゃんも全身に傷を負ってるしこれはアリツカゲラちゃんのロッジでしばらくは休憩かな。

「ロッジに戻るんなら僕が連れていくよ？」

「あ、ごめんなさい。じゃあ、お願いしてもいいかな」

「わ、私たちも頼む…」

「いいよ。さ、みんな乗って！」

こうしてアムちゃんの傷が癒えるまであたしたちはロッジで休息することになったのだった。

第5話「ロッジ・アリツカの怖い話」

夜、あたしたちはロビーにて三人で語り合っていた。三人とも全員がオッドアイという稀有な状況下にいる。イエイヌちゃんは同じイエヌ科の動物としてすごく気が合っているらしい。狼と犬、お互い高度な社会性を築く動物であり、ヒトに家畜化されたかされていなくらいのの違いしかない。気が合わないはずがなかった。それに凶鑑で見たとように狼犬という狼と犬のハイブリッドがいるくらいだから尚のことだ。

「君は本当にヒトが大好きなんだね」

「はい！大好きです！特にともえちゃん！わたしの大切なご主人さまです！」

「イ、イエイヌちゃん…」

「ふふふ、良いことだ。オオカミの私には知り得ない感情ではあるが、キミの話聞く限りとても素敵なことなことなんじゃないかと、私は思うよ」

「えへへ…」

「それに、良いマンガのネタになりそうだ。その案いただくよ」

「「ええ!？」」

「いいじゃないか。種を超えた絆を謳うハートフルストーリー…これは良いネタになり

「そうだ」

「はわわ…」

「なんだかあたしたちマンガのネタにされてしまった。これは恥ずかしいぞ…！」

「えへへ…わたしともえちゃんやタイリクオオカミさんの漫画として残っちゃうんですね…」

「しつぽをぶんぶん足をばたばたと忙しく動くイエイ又ちゃん。なんだか嬉しそうだ。あたしはすごく恥ずかしい。」

「ふふふ、けどね、ヒトという生き物はどうしても怖い生き物なんだ」

「こわい?」

「そう。イエイくんもかつては軍用犬だと言っていたね」

「はい」

「軍用犬にも様々な種類があつてね、死ぬことを前提とした地雷犬という犬がいたことを知ってるかい? かばんが乗っていたバスがあるだろう? ああいう乗り物の下に潜つて自分の死と引き換えに乗り物を破壊するんだ。その時に地雷犬も一緒に死ぬ…。恐ろしいだろう?」

「…少なからずあたしはそんなことしないよ。そんなことするヒトがいたら絶対に許さない」

「ははは、その意気だよ。その気持ちがあればヒトのやましい感情なんかすべて吹き飛ばせるさ」

「してみせるよ！」

：聞かなきやよかつた。地雷犬なんて本当にいたの？乗り物を壊すのに犬も一緒に死なせるなんて：そんな残酷すぎる手法を良く思いつくものだよ。もしかしたら他にもあるのではないかと邪推してしまう。

義憤に燃えるあたしをよそにイエイヌちゃんが話を続ける。

「：他にもあつたらお願いします」

「イ、イエイヌちゃん：？」

「じゃあ、こういうのはどうだい？この世で最もヒトを殺している動物の名前、なんだと思おう？」

「ヒト：：ですか？」

「残念、蚊だよ」

「か、か？蚊？ですか？」

蚊つてモスキートのあの蚊？確かに蚊が媒介する病気っていっぱいあるらしいけどそんなに殺してるのかな？

「そう、そして二番目がヒト、三番目がヘビだね。ちなみに四番目が犬になるよ」

「!!」

「イエイ又ちゃんの目が見開く。あたしも驚いた。へびはともかく犬が四番目に来るなんて…」

「単純に襲われてやられるっていうのもあるだろうけど、狂犬病っていう病気に患って死んでしまう事例が多いらしいね。もつともここでは起こり得ないだろうけど…まあ、蚊には気を付けな」

「はあ…」

「なんてことを言われてしまった。狂犬病…名前だけは聞いたことはあるけどどんな病気だっけ…とにかく狂犬病のせいで多くの人が死んでしまうという恐ろしい事実だけはなんとなく理解できた。」

「狂犬病…」

「ボソリと呟いた。イエイ又ちゃんの体がビクリと跳ねる。怯えるような目でこちらを見ている。」

「だ、大丈夫だよ！あれだけペロペロ舐められてもなんともないし、きつと狂犬病なんて患ってないよ！」

「あつはは！そんなことやってたのかい！」

「お互いハツとする。そしてお互いに赤面してしまった。」

「ふふっ、良い顔いただき」

「や、やめてよーもうー…」

なにやらかきかきと何かを描いている。恐らく恥じらっているあたしとイエイヌちゃんの似顔絵でも描いているのだろう。大変遺憾である。

満足した顔で絵を描き終わると一息ついてこう続けた。

「さて、ヒトは怖い生き物だと言ったけど、ヒトが作る怖い話というのもあってね、ちよつと聞いてみる気はないかい？」

「ヒトが作る怖い話？」

「そう、たとえばこんな話がある…」

……………

あたしの名前はともえ。ジャパリパークのセントラルに住むヒトの女の子！イエイヌちゃんとはおともだちなんだ。今日もいつもみたいにイエイヌちゃんのおうちに遊びに行った。

お日様はほかほかと気持ちよくて、イエイヌちゃんもふもふで、とても落ち着く。そんな何気ない日常を楽しんでいた。

そんなある日…

「ぼ、ぼぼぼ…ぼっ、ぼっ、ぼっ…」

と、変な音が聞こえた。

音？声？フレンズさんの鳴き声にしては奇妙だ。ヒトとも動物とも男とも女ともとれない奇妙な音だった。何だろうと思っていると、少し先にある別の建物から帽子のようなものが見えた。

しばらく見ているとすーっと動いて、やがて一人の女の人が現れた。その帽子はその女の人のかぶっていたものだった。白っぽいワンピースを着た女の人だ。

あたしはその女の人の背の高さに驚いた。ゆうにアムちゃんの大きな身長を遥かに凌いでいる。あたしの倍近くの身長はあるだろう。すぐくおっきなフレンズさんだなくなんて思っている、そのフレンズさんはゆっくりと視界から消えていった。帽子も見えなくなった。”ぼぼぼ”という音もなくなっていた。そのときはすぐ大きなフレンズさんくらいしか思わなかった。

そのあと、イエイヌちゃんやんが淹れたお茶を飲みながらイエイヌちゃんにさっきのことを話した。

「さっきすごく大きなフレンズさんを見たんだ〜」

「大きなフレンズさん…アムちゃんでも近くに来たんでしょうか」

「すごく大きかったんだよ！帽子を被ってて”ぼぼぼ”って変な鳴き声で鳴いてたんだ」

瞬間、イエイヌちゃんの動きがピタツと止まった。時が止まったかのようだった。

「いつ見たんですか!?!どこで見たんですか!?!どれくらい大きかったですか!?!」

怒ったように質問をまくし立ててきた。あたしはその気迫に押されながらもありのままに答えた。するとイエイヌちゃんは室内にいるラッキービーストに、今あたしが言ったことを伝えるとあたしにこう言った。なんだか深刻そうな様子だ。

「今日は泊まっていてください：今日、帰すわけにはいかなくなりました：」

：イエイヌちゃんとお泊りとも考えたけどこの雰囲気から察するにそういう訳でもないようだ。事は思った以上に深刻らしい。：あのフレンズさんがいけないのだろう。けどあたしはアレを見ただけだ。向こうから現れた訳だし別にそう騒ぐほどのことでもないと思う。

「：あなたは八尺様に魅入られてしまったようだ。けど大丈夫。必ず何とかしてみせます。心配しないでください」

以下はイエイヌちゃんが話してくれたことだ。

ジャパリパークには”八尺様”という厄介なセルリアンがいる。八尺というのは長さの単位で大きさを表すと2mと50cmくらいらしい。”ぼぼぼぼ”という不気味

な笑い方をするらしくあたしが聞いたのはその八尺様の笑い声ということだった。フレンズさんによつては黒いスーツのようなものを着ていたり、和服姿の老婆だったりするそうだ。でも、異常に背が高く頭にか被っていることと、不気味な笑い声はどの目撃談にも共通しているそうだ。

サンドスターによつて生まれたビーストとはまた違う変異種という噂もあるが定かではない。

一度八尺様に魅入られると数日のうちに取り殺されてしまう。最後に八尺様の被害が出たのはだいぶ昔とのことだ。

八尺様は四神の力によつてキョウシユウエリアに封印されていて、ゴコクエリアやナカベエリアに行くことはできないのだそうだ。せめてもの被害拡大の防止のためであろうとイエイヌちゃんやんは言っていた。

そんなことを言われても、全然リアルに思えなかった。当然と言えば当然だ。

そのうち、博士ちゃんと助手ちゃんが訪ねてきた。

「まったく、厄介なことになったのです」

博士はそう言つてお守りをくれた。それから一緒に二階へ上がり、何か変なことをしていた。イエイヌちゃんと一緒にいてくれた。トイレをするときも付いてきて、ドアを完全に閉めさせてくれなかった。あたしは初めてこれが異常事態だと思うようになった

た。

しばらくして二階の一室に入れられた。

窓はすべて紙や布なんかで目張りされていて、その上にお守りやらお札みたいなものが張られていた。四隅には盛塩が置かれていた。木でできた箱状の物があり、その上にオイナリサマの模型が置かれていた。

「もうすぐ日が暮れるのです。いいですか。明日の朝までここから出てはならないのです。博士も助手もイエイエもお前を呼ばなければ話しかけることもないのです。明日の七時になるまで絶対に出てはいけません。七時になればお前の方から出すのです。良いですね?」

「博士の言うことは絶対なのです。良いですね」

あたしは黙って頷くしかなかった。

「…博士たちに言われたことは良く守ってください。お守りも肌身離さずをお願いします。もし何か起きればオイナリサマにお願ひしてください。きつとあなたの助けになるはずですよ」

博士が作ったというおにぎりもイエイエ又ちゃんが淹れてくれたお茶もまったく手につかなかった。あたしは布団の中で震えるしかなかった。

…いつの間にか寝ていたようだった。時刻を見れば深夜一時を回っている。嫌な時

…とても長い夜に感じられる。しかし朝は来るもので、目張りからは朝の光が差し込んでいた。時計を見ると七時十三分を指してる。

ガラスを叩く音も、あの”ぽぽぽ”という声も止んでいた。どうやら気絶していたらしく、盛塩は完全に黒く変色していて崩れていた。

あたしは恐る恐るドアを開けると、そこには心配そうな顔をしたイエイヌちゃんと博士と助手がいた。イエイヌちゃんは、よかった、よかったと涙を流しながらあたしに抱きついてきた。

下に降りるとゴマちゃんやかばんさんたちが来ていた。いつになく険しい表情をしている。

外に止めてあるジャパリバスを見ると早く乗るように促した。訳も分からずバスに乗ると、あたしを中心にいろんなフレンズさんが乗ってきた。よく見るとアムちゃんやサーバルちゃんの姿もある。バスはぎゆうぎゆう詰めた。九人は乗っていたと思う。

「大変なことになったな…気になるかもしれないけど、ここからは目を閉じて下を向いている。私たちには何も見えないけど、ともえには見えてしまうかもだからな。私が良いつていうまで目を開けるんじゃないぞ」

ゴマちゃんがそう言った。

かなりゆつくりと進んでいる。まるで遊覧でもしているかのようだ。

ここが踏ん張りどころですと助手ちゃんが言うと、博士が何かぶつぶつと呟き始めた。

「ぼ、ぼぼぼ、ぼっ、ぼぼ…」

またあの声が聞こえてきた。

博士ちゃんからもらったお守りを握りしめ、言われた通りに目を閉じて下を向いた。でも気になって薄目を開けて少しだけ外を見てしまった。

目に入ったのは白っぽいワンピース。それが大股でバスにびったりと付いてきている。頭は外に見切れて見えないけど車内をのぞき込もうとするように上半身が傾き始めた。

「見ちゃだめ」

低い声でアムちゃんが呟く。

コツコツとバスを叩く音が聞こえてきた。周りから“ヒツ”と声をあげたり咳払いをするような音が聞こえる。姿は見えなくても、声は聞こえなくても音は聞こえてしまうようだ。博士ちゃんのぶつぶつ言う声も力が入る。とても気が遠くなるような時間が過ぎていった。

…どれくらいの間が過ぎただろうか。音と声途切れた時、博士ちゃんがやりましてと声をあげた。助手ちゃんやゴマちゃんも安堵の声を漏らしている。

助手ちゃんが”お守りを見せるのです”と言うので握りしめていたお守りを見せる
と真つ黒になつていた。念のためと言うので代わりのお守りをいただくことになった。

ここにいるみんなはあたしのために集まってくれたのだという。でもさすがに一晩
で集まるということもできるはずがなく、また、夜よりも昼の方が安全だろうと思われ
たため、一晩中部屋に閉じ込められたというのである。最悪イエイ又ちゃんが犠牲にな
る覚悟だったとか。

そうしてあたしはかばんさんの元、ゴコクエリアへと行かされた。もう二度とキョウ
シユウエリアに来てはならないと言われた。あたしは八尺様に魅入られたのだ。ゴコ
クエリアから出る前、イエイ又ちゃんにあの晩あたしに声をかけたか聞いてみたけど、
そんなことはしていないと断言された。改めて背筋が寒くなった。

それからしばらく経ったある日、かばんさんからある話を聞かされた。あたしは全身
から血の気が引くのを感じた。

「八尺様を封じている四神の守りが誰かに壊された。八尺様がキョウシユウエリアから
出てしまったかもしれない……」

あの時の恐怖がよみがえる。八尺様はあたしの元へ来ているのだろうか。気が気で
はない。あの声が聞こえるようだ。

「ほほほ……」

本当の恐怖はすぐそこにある。

……

あたしはイエイヌちゃんと抱き合っていた。恐ろしく怖い話を聞かされたものだ。八尺様……？ 本当にいるのかな……？

イエイヌちゃんは恐怖で歯をかちかちと鳴らしている。あたしは恐怖で半泣きだ。

「ふふふ。そんなに怖がつてくれるならこちらとしても話した甲斐があるというものだ。いやあ、良い顔をしているね。マンガのネタにできそうだ」

「もー！ 止めてつたらー！」

またさらさらとキャンバスあたしたちの絵を描き始める。完全に遊ばれているようである。

「まあ、でも怖がる必要はないよ。私が話した八尺様は遠い昔にヒトが作ったおとぎ話だからね。もしいたとしてもこんな僻地に来ないだろうさ」

「ほ、ほんとう……？」

「ホントホント。私は嘘は吐かないよ」

「よ、よかった〜:」

「私も初めてこの話を見たときは心の底から震えが止まらなかったものだよ。そうそう、この話には続きがあつてね:」

タイリクオオカミさんはそこで言葉を切った。

「…この話を聞いた者には八尺様が枕元に立つという:」

あたしの意識はそこで途切れた。

第6話 「深い霧の包むところ」

「不思議なところ…」

ロτζジ・アリツカを出発したあたしたちは森の中を歩いていた。森といっても木々はみんな枯れていて深い霧だけが立ち込めている。読んで字のごとく五里霧中である。進めど進めど前に広がるのは霧ばかり。そして霧の間から見えるの枯れた木と大きな岩だけだ。それに湿気がひどい。

ひどい寂寥感を感じる。あたしを含みイエイヌちゃんたち四人で旅をしているけど、まるで一人で旅をしているかのような錯覚を覚えるようだった。サバンナ地方や平原地方は青々として生命の息吹を感じたものだが、ここにはそういったものは一切ない。クモとか細かな虫はいるだろうが、それすら感じさせないような一切の無だ。

ここではすべてが停滞しているようにあたしは感じた。

「不思議なところだ…フレンズさんや命のにおいが全くしない…」

「本当だぜ…私もこんなところがあるなんて全く知らなかったぜ…」

べちゃべちゃと不快な感触が足の裏から伝わってくる。湿度が高く日も差さないから水分が蒸発せずに地面に溜まっていくのだろう。よく見るとどの枯れ木の表面も

しつとりと濡れている。こんなところで過ごすフレンズさんがいるのならばぜひ見てみたいものだ。

「こんなところに来る物好きがいるとはな」

不意に声が聞こえた。

「どうやら迷ったわけではなさそうだな、カタカケよ」

モノクロの世界に溶け込むような真っ黒なフレンズさんが二人、そこにいた。

「ここはジャパリパークの最果てとも呼べる地。フレンズたちはもちろん、けものや野鳥といった生物はほとんどいない」

「そしてジャパリパークで唯一サンドスターの影響を受けない所でもあるのだ。原因は博士もわからないと言っていたが、いずれにせよ私たちのお気に入りのお場所だ」

そういうと二人は地上へ降りてきた。

「お前たちは何者だ？」

「あたしはともえ！この子はイエイヌちゃんで、この子はロードランナーのゴマちゃん！そしてこのおっきい子がアムールトラのアムちゃんだよ！」

「ほう…私はカンザシフウチヨウ」

「カタカケフウチヨウだ」

不思議な雰囲気にするフレンズさんだ。なんだかあたしの頭の中を見抜かれている

ような感じがする。

「どうして二人はこんなところにいるの？」

「お気に入りの場所だからだ。静かで心が安らぐ」

「生命の息吹を感じさせない死せる場所。現世と隔離された非現実的とも呼べるこの場所を私たちは気に入っている」

「…フレンズとの交流も断っているように見えます。外部との交流はほとんどないのですか？」

「ない。ごくまれに迷い込んでくるフレンズを外に帰すくらいだ」

「或いはボスがじゃぱりまんを持ってこずに博士たちに無心するときくらいか」

どこまでも不思議なフレンズさんだ。現世との関係を完全に立っているように見える。じゃぱりまんを無心するというのは置いといて、周囲から隔絶した環境に身を置き、周りとの交流を断つて過ごしているというのはまるで世捨て人のようだ。

「お前たちも早く帰ることだ。ここは生命を受け入れるところではない」

「道がわかるうちに早く帰るのだ。私たちは飢えやサンドスター切れから斃れているフレンズやけものをたくさん見てきた」

「お前たちもそうなりたくなければ戻ることだな」

「ま、待って！」

それだけを言うとならフウチヨウさんたちはどこかへ行ってしまった。深い霧のせいもありあつという間に見失ってしまった。方向感覚を失っていく。もはやどこから来たかすらもわからなかった。しかし、幸いにもあたしたちはまだ道の真ん中に立っている。この道を見失わないように歩いていくとしよう。

「しかし気味わりーやつらだったな。全身真っ黒だし何考えているかわかりやあしねーぜ」

「うん。あたしも頭の中が見透かされてるような感じがした」

「それにこの白と黒の世界に馴染むかのような言動と恰好でしたね。初めからここにいたかのようにです」

「み、みんな言いすぎだよ」

各々が思い思いの感想を述べている。あたしも色々と言いたいことはあるけどあたしが思う最も強いと思った感想は、不思議ということだった。ミステリアスとかそこに”存在しない”ものが存在しているようなそんな感じがしたのだ。あの子たちには不思議な魅力がある。また会ってみたいな。

「！」

イエイヌちゃんが何かに反応した。ぴこぴここと耳をあちこちに動かしている。

「な、なんですかこれは…？びりびりと何かを感じる…音はするのにニオイがしない…」

わ、わたし怖いです…なんなんですか一体！」

「お、落ち着いてイエイヌちゃん！」

パニックになるイエイヌちゃんをなだめて落ち着かせる。何か一点をじつと見ているようだ。アムちゃんも何か認識したようで同じところをじつと見ている。

あたしも同じところを見てみると一つの岩に一人の老人が座っていた。杖を持った頭の禿げた老人だ。

「ヒト…？」

「なんだありや…ヒトじゃねえぞ…フレンズでもねえ…気味わりいぜ…」

好奇心から近づいてみる。

「ともえちゃ…」

一瞬イエイヌちゃんが止めに入ろうとしたがその声は弱々しく消えた。やがて後数メートルというところに近付いた途端その老人は霧散したように消えてしまった。

「っ…！」

声にならない声で驚く。それはみんな同じようだった。いったいあたしたちは何を見たというのだろうか。

「物の持つ記憶を見たようだな」

「うわ!!!」

カタカケさんとカンザシさんだ。いったいどこから現れたのだろうか。何も無い所から突然現れたようだった。

「長くこの世に存在する物には記憶を持つ物がある。お前たちはまさにそれを見たのだ。私たちもこの岩がいつからあつてどこから渡ってきたかはわからない。だがこの岩には道行く人が腰を掛けるという記憶が根強く残っているようなのだ」

「何も無機物が記憶を持つとは限らない。ヒトによつて愛されたあまり、それを羨んだ”何か”が自分も愛されようとそれに取り憑き記憶することもあるのだ」

「人に愛されたものは何であれ思い出や愛着が深いほど記憶も強くなる。お前の持つスケッチブックやどうぶつ図鑑はどうだ？お前自身の思い出や愛着が投影されていないか？」

妙なことを言ってくる。物の記憶：愛着：思い出：無いとは言い切れない。そういうものがあつてもおかしくないとはなんとなく思えた。

けどあたしのスケッチブック…？

「実はお前自身がスケッチブックが映し出した記憶なのかもしれないのだぞ」

「なっ…!!?へ、ヘンなこと言わないで!!」

「な、なんていうことを言うんですか!!!」

「ふふふ…」

再び霧のかなたへと消えていった。しかし、なんてことを言うのか。あたしがスケッチブックが生み出した記憶だなんて…

「ともえちゃんもスケッチブックの記憶だなんてありえませんか！ イエイヌのわたしが言うんです！ においも声も仕事もぜーんぶ正真正銘のともえちゃんです！ イエイヌのわたしが保証します！」

イエイヌちゃんが激高している。そして胸を張りながらドンと胸を叩く。あたしは正真正銘のともえちゃんとお墨付きをいただいた。あたしはヒトのようである。

……………

霧が立ち込める道を行く。生命の胎動すら感じない死の大地だ。カンザシさんたちは生命を受け入れるところではないと言っていたけど本当にそうなのかもしれない。一歩ずつ奥へと足を踏み入れていくたびに確信を得ていくかのように感じていった。

「あの縄…」

イエイヌちゃんが何かを見つけたように呟いた。見ると先が丸く結われた縄がぶら下がっている。

「わたし、見たことがあります…あの縄に首を括り付けて人がぶら下がっているのを…

みんな死んでいた…あれはきつと人が死ぬためのものです…アレがあるところでは必ず人が死んでいた…」

「…どういふことだよそれ…わざわざ死ぬためにアレを用意したってことなのかよ？」
「…わたしもヒトの身近にいた存在とはいえ完全にヒトを知っているわけではありませぬ。わたしがともえちゃんのお父様といっしょに行動してた時には、アレに首をくくりつけたまま死んでいるヒトをたくさん見てきました。アレもそれと同じものかはわかりませんが、あそこでヒトが死んだと考えるのは大いにあり得ると思います…」

あそこでヒトが死んだ…そう考えると背筋が寒くなるような感じがした。ますますここがどんな場所か分からなくなるようだった。そしてあたしは改めてここがジャパリパークの中でも異質なところなのだと思っただけでなく、強く思った。

しばらく歩いているとこの異質なこの世界でもさらに異質なものがあたしの目に留まった。椅子、机、花瓶、絵画、ティーセット…それらが整然とこの場所に並べられていた。まるで、たつたさつきまでそこでヒトが生活を営んでいたかのようだった。周りに乱雑と転がっているたくさんの椅子がその不気味さをより一層引き立たせている。

「か、かふえ??」

ゴマちゃんが混乱している。明らかにカフェではないのだが。

しかし見れば見るほど気味が悪い。誰が何のためにこんなものを用意したのか…目

的すら想像できない。あの二人が用意したのだろうか。

「おもしろい所に目を付けたな」

またあの二人だ。

「ここは私たちのお気に入り場所だ。お前もきつとこんな死んだ世界になぜこんなものがあると思っっているのだろう。それはもつともな疑問だ」

「私たちもなぜこれらがここにあるのかわからない。だが、私たちはこの異物に一つの美を感じたのだ」

「誰がいつ何のためにここに持ってきたのか、いつどこから来たのか。そんな事を考えるのは無駄なことだ。私は美しいと思っただものは何であれ愛でる。これもその一つに過ぎない」

そう言うくとカンザシさんは椅子に腰かけた。

「お前の見た記憶の岩もその一つだ。アレは見るたびに座っている人物が違っている。たまに被っていることもあるが概ね違う人物が映し出されているのだ。得体の知れない物とお前たちは思うのだろうか。私たちがそれをも美しいと感じる」

そう言うくとカタカケさんはふわりと飛んだ。

「行こう、カンザシよ。この者たちにはまだ見てもらいたいものがたくさんある」

「そうだな、カタカケよ。待っているぞ、ともえよ」

行つてしまった。この奇妙な空間にはあたしたち四人しかいない。静寂が訪れる。

あたしはカンザシさんが座つていた椅子に腰を掛けた。じつとりとした不快な感触がお尻から伝わってくる。視界を机に落とす。特別目新しくも古くもないらしいがやや粗い表面が目立つ。椅子にしても特に腐つているといふわけでもない。

目を閉じて想像してみる。ここでは異物とでも呼ぶべきこの椅子たちだけど、これらも人によつて作られた人工物だ。これらにもヒトの歴史とか思い出があるはずだ。

「…おかしい…だめ…何にも思い浮かばないや…本当にヒトが使つてたものなのかな…」

この机や椅子が使われたという想像が全くできない。そもそも使われるために作られたのかすらわからない。最初からここに捨てられるために作られたのではないのかとあたしは思った。

立ち上がつて机を見下ろす。この霧の深い枯れ木の森に机と椅子だけがある。なんだかそれがとてもシユールなように思えた。やはり最初からここにあるために作られたのではないか。とてもここにあるべきではないようなこれも、ここにあることによつて存在の意義を生じているような、そんな気がした。

あたしたちはこの異質な世界の異質な空間を後にした。

霧の立ち込める道を行く。目的も何もないけどひたすら霧のかかる道を辿つていく。

しばらく歩いていると少し傾斜がかかる道に差し当たった。どうやら峠か山に入ったようで傾斜が急になっていく。相変わらず周りの木々は枯れているままだが、それに入ったのは間違いないらしい。

イエイ又ちゃんたちは無言のままだ。話すネタもなく死の大地の雰囲気にもまれていくかのようだった。事実あたしもそうだ。深い霧があたしの心の中にまで広がっているかのようだった。じめつとした大気はあたしたちを深く包み込んでいる。

道端には獣の死体が転がっている。この獣もかつてはフレンズさんだったのだろうか。ひどくやせ細っている。飢えて死んだことは間違いなさそうだ。しかしかなり奥の方まで来ているように見える。この霧と枯れ木の世界に足を踏み入れてサンドスターが尽きるまでさまよい続けたのだろうか。サンドスターが尽きたフレンズは元の動物に戻ると聞く。サンドスターが尽きた後もさまよい、歩き続けたのだろうか。そして獲物や食物にたどり着くことなく飢えて死んだのだろうか。無常である。生命の存在を許さない。死んだ世界。世界そのものが死んでいる。そしてすべての生物が死に絶える場所。それがこの世界だ。

「自分を見失うな」

声が聞こえた。見るとカンザシさんとカタカケさんが立っていた。

「世界に吞まれているぞ。お前がここに来るのは早かったみたいだな」

「この世界に吞まれるモノは戻れなくなる。お前もいずれこの獣みたいに死ぬことになるかもしれないぞ」

「そしてこの蟲に喰われて地獄に落ちるのだ。慈愛の日に照らされる喜びを忘れ、一人地獄に落ちるのだ。それでも良いのか？」

「…あなたたちはどうなんですか？長いことここに住んでいるようすし、あなたもその地獄に落ちるのではないのですか？」

「私たちはもう既に地獄に落ちている。ヒトでなくけもの…フレンドズの時点で天国になんて行けないのだ。あるのは深い深い深淵のみ。コキユートスの深い底に沈んでいくだけだ」

「そんな…」

「…あんなものに耳を貸したらダメ。どうせでたらめ言ってる」

アムちゃんがあたしたちを制する。ぎゅつとイエイ又ちゃんの手を握りしめてあたしたちはその場を後にした。

…地獄に落ちるかはわからない。けどカンザシさんたちの言葉は落ちかけていたあたしを救ってくれた気がした。

あたしは再び深い霧に吞まれないようにイエイ又ちゃんの手を強く握った。イエイ又ちゃんもぎゅつと握り返してくる。

「ゴマちゃんも呑まれないようにね」

見るとアムちゃんもゴマちゃんの手を握っているようだった。お互いが呑まれないように必死に引き止め合っている。あたしたちは地獄に堕ちないようにこの道を進んでいくんだ。

しばらく登っていたら一つの開けた場所にたどり着いた。霧はやや薄く、遠くに一つの山が見える。深い緑色をしており霞がかつたその姿はどこか朧気だ。

風が吹く。どこかで木の枝が折れる音がした。遠くその音がこだまする。しばらくの残響が霧の中で響いていた。

あたしは一つの小石を拾い上げると遠くに向かって投げた。かつんと岩に当たる音が聞こえた。遠く、音が反響する。しばらくの残響の後、静寂が訪れた。

「こだま…やまびことも呼ばれるものだ」

カンザシさんとカタカケさんがそばに立っている。

「山には様々な精霊や物の怪がいると言われている。ヒトの中にも山に関する様々な噂や言い伝えがある」

「ヒトは山を恐れ、山に感謝していた。ヒトからモノを奪い、同じくヒトに恵みを与えてきた」

「それをヒトは山岳信仰と呼んでいた」

遠く山を見つめる。

「私たちはここが好きだ。ここにいると自然の偉大さを感じることが出来る。死せるこの世界ではあるが、ここでは大地の息吹を感じることが出来る」

「遠く呼ぶ木霊の声も、私たちの言霊を運んでくれる。私たちの言葉を返すその魂が、幽玄の彼方に消えるその瞬間が、たまらなく美しいと感じるのだ」

二人は腕を前に広げ、山に向かい目を閉じている。

風が吹く。風は二人の呼び声に応えているようだった。

「山は生きている。枯れた山であろうとこうして私たちに答えてくれる」

「姿はなくとも確かに存在する。時たま寝ているときに気配を感じるのだ。山の精が私たちに会いに来るのだ」

「ヒトでもフレンズでもない山の精霊がいたずらをするのだな」

そう言つて二人は山の麓を見下ろす。

「見るがいい。あの湖を」

あたしたちも二人に倣つてそれを見遣る。

「あの湖はこの付近で降つた雨によつてできたものだ。枯れた山を寂しく思つたのだろう。雨を降らせて湖を作つたのだ」

「今は死んだこの世界ではあるが、霧の深いこの世界もあの湖から新しく生まれ変わる

やもしれんな。獣の死体ばかりではあったが、最近ではあの湖付近で生きた獣やフレンズを見かけるようになった」

「あの湖を中心にこの世界も生まれ変わるのだろうか」

しばらくの沈黙の後二人はふわりと宙へ飛んだ。

「じゃぱりまんが切れた。私たちは博士のところは無心しに行く」

「お前たちも早く行くといい。飢えて斃れるかもしれないし、腹を空かせた獣が襲い掛からないとも限らないからな」

そう言う二人はどこかへ飛んで行ってしまった。

四人で山を下っていく。相変わらず獣の死体はそこにある。しばらく下っていくと見慣れた広場に出た。

遠くからカツンと音が聞こえてきた。

「なんだろう…」

イエイ又ちゃんの手を引いて音のする方へ歩いていく。しばらく歩くとまた遠くからカツンと音が聞こえてきた。再び音がする方へ歩みを進める。それを繰り返していくうちに徐々に霧が晴れてきた。やがてあたしたちは元いたジャパリパークへ戻ってきた。

最後にカツンと音が聞こえた。それは霧の立ち込めるあの森の向こうからだった。

「木霊…本当にいるのかもかもしれませんね」

「かもね…」

あたしたちは枯れ木の森を後にした。不思議なところだったな。木霊…山の精霊だっけ。あたしたちがジャパリパークで遭遇した初めてのフレンスさん以外のものだった。カンザシさんたちが言うことから察するに、ヒトが大好きでちよつと寂しがりやなのかもしれない。いつかあたしたちの元にも現れてくれるかな。普段は見えないようだけど様々な方法でアプローチをかけてくる。気付かないだけで実はいろんなやり方であたしたちに話しかけているのかもかもしれない。そう思うとちよつとほっこりした。

次はどこに行こうかな。風の導くままにあたしたちは次の地方を目指した。

第7話「和解」

あたしたちは博士ちゃんたちが住んでいる図書館に向かっていた。フウチヨウさんたちがじゃぱりまんを無心しに行くっていうのも気になるし、ちよつとかばんさんに会いに行きたいっていうのもあった。

「…本当に行くの?」

「やっぱり…嫌?」

「嫌」

むすつとした顔ではつきりと否定する。でもこのままだとアムちゃんも生きづらいだろうし博士たちも何だかわいそうな気がする。

「でもでも、このままだとダメだと思っただ!お互い許してこそ初めて前進することもあると思っただ!」

「…被害を受けたのはあたしだ。許す自由も許さない自由もあたしにある。ヒトに左右される謂れはない」

「うぐっ…」

被害を受けた人のことも考えないといけないのはわかっている。やっぱり加害者の

ことも認めたり許せつていうのはやつぱり傲慢なのかな…でもあたしは博士ちゃんたちも考え合つてのことだと思つてしまう。そこはやつぱり知つてほしいと思う気持ちもあつた。

「だからあたしはあたしに殺されたフレンズには許されなくて当然つて思つてるし、石を投げられても仕方がないつて思つてる」

「うーん…」

難しい問題だと改めて思う。アムちゃんが自身を狂気の渦に落とした張本人だつて言つてたから何かあるとは思うんだけど…

「アムちゃん…話し合いだけでもしてみよう？博士ちゃんたちにも考えがあつてのことだと思ふんだ。もちろん許さなくてもいい。でもあたしはアムちゃんと博士ちゃんたちのギスギスした関係を終わらせたいつて本気に思つてるんだ」

まつすぐとアムちゃんの目を見てあたしの意見を伝える。ゴマちゃんといエイヌちゃんがその様子をじつと見ている。

ギロリとアムちゃんの双眸があたしの目を捉える。その威圧に屈しそうになるけどあたしも自分の意思を貫き通すために負けじと見つめ返す。あたしは真剣なんだ。

「…あたしを殺す理由を聞きに行こうつていうの？」

「言い方が悪いよ！あたしはただ…」

「…アム、こう考えようぜ。博士たちの罪を裁くんのだ。どうしてあんなことをしたのかお前自身が裁いてやるんだ！そしたらお前もスツキリするだろう？」

「…うん。それだったら…」

よ、良かった…機転を利かせてくれたゴマちゃんに感謝だ。

「ゴマちゃん、ありがとう…」

「別にいいぜ…。…実は私もアムと博士たちの間柄をどうにかしたいって思ってたんだ。私からは中々言い出せなくてな…アムのやつも嫌がるだろうしどうしようかと思ってたんだ…」

「そっか…ゴマちゃんもそう思ってたんだね…」

ゴマちゃんもあたしと同じことを考えてたようだ。やっぱリアムちゃんと博士ちゃんたちの間にギスギスしたわだかまりがあるのは嫌だと思うらしい。せっかくのフレンズという素敵な呼び名もこれでは欺瞞というものだ。

あたしはその問題を解決するために図書館へ向かった。

……………

…なんだか賑やかなことになっている。図書館というのはもつと静かで落ち着くも

のだと思つてたけど今の状態を見るにちよつとしたお祭り騒ぎだ。

あそこに見えるのはアライさんだろうか。フェネックちゃんもいる。それになんたかタイリクオオカミさんもいるようだ。それにカラカルちゃんも？あのいっぱいいる小さくて青っぱいぬいぐるみみたいのはなんだろうか？それに見たことないフレンズさんたちもいっぱいいる。

…結構緊張した状態で来たんだけど初っ端から出ばなをくじかれたような気分だ。

「な、何が起きているんですか…？」

「さ、さあ…」

「…帰ろう？」

「だ、ダメだよ！」

どさくさに紛れて帰ろうとするアムちゃんを引き留める。なんとか引きずって中に入るとかばんさんとサーバルちゃんと博士ちゃんたちがいた。

「博士ちゃん！お話があるんだけど！」

「おや、ともえたちでは…。っ!?」

「は、博士!?!」

ばさささささっ！

「うわまただ!」

「……」

またぶわつてなった。相当警戒しているようだ。未だ誤解は解けていないらしい。

「やっぱりこいつら…ッ!!」

「どうしたのですか!」

上から助手ちゃんやんがバタバタと降りてきた。そしてアムちゃんを見るなり臨戦態勢をとった。

「え!?!なに!?!なんなの!?!」

「博士たち!?!どうしたの!?!」

「ふしゅーっ!ふしゅーっ!ふしゅーっ!」

ギリツと歯を噛みしめる音がアムちゃんから聞こえた。見る見るうちに図書館内の空気が変わっていく。

「ア、アムちゃん落ち着いて!」

「うっ…ぐっ…」

全身を震わせ溢れる怒りを抑えるアムちゃん。なんとかギリギリのところまで踏みとどまってくれている。このアムちゃんのためにも博士ちゃんたちを宥めさせなければ

…

「…ぶしゅー」

「博士ー！」

…博士ちゃんが気絶してしまった。すかさず助手ちゃんが下りてきて博士を介抱する。

「い、いったいどういうつもりですか！ビーストなんかを連れてきて！私たちを脅迫しに来たのですか!?!」

「ギイ……！」

「落ち着けアム！」

アムちゃんもそろそろ怒りが爆発しそうな勢いだ。

「助手ちゃん！あたしたちは話し合いに来たの！決して脅しに来たとか復讐しに来たとかではないの！あたしたちはアムちゃんへの誤解を解きたいんだよ！」

あたしは必死に博士ちゃんたちを説得する。ここはアムちゃんと博士ちゃんたちの双方のためにも勝たなくてはならない。長い戦いが始まる。

………

ヒトの知恵を活用する時だ。かばんさんと二人で議会の席を設ける準備を始める。あくまでもやるのは博士ちゃんたちの誤解を解くことであるが、場の雰囲気とか格式な

んかも時には重要であるとあたしは思っている。だからわざと厳肅な雰囲気を作ることによつて、余計な茶々や煽りなどを極力排除するのを目的としてみる。特にちよつと口が悪い博士ちゃんたちのことだ。雰囲気作りは大事だろう。

「私にも手伝わせてくれ！」

ゴマちゃんが手伝いを申し出てくれた。

「私もアムと博士たちのためにも役に立ちたい！まず何をすればいいんだ？」

「うーん…ちよつと待つててね」

そう言うとかばんさんは外へ出てしまった。しばらくするとちよつと長めの木の枝を携えて戻ってきた。

「ロードランナーさんはこれを持って構えてくれるかな。ともえちゃんは…僕たちと作った剣、持つててくれてたんだ。ちよつとそれ借りるね」

ゴマちゃんが言われた通りに木の枝を構える。かばんさんはあたしから剣を取るとビュツとゴマちゃんに向かって突き出した。

「イツ!?!」

「…よし。これがちよつといい距離だね。そこから動かないでね。ともえちゃん、僕とロードランナーさんの前にテープを貼つてもらえるかな」

言われた通りにゴマちゃんとかばんさんの前にテープを貼つていく。どういうつも

りなのだろうか。

「これはソードラインって言ってお互い剣と剣が交わらない距離なんだ。議会は暴力と暴力によって行われるのではなく、知性と話し合いによって行われるべきという意味だね。お互いこの線を踏み超えないように話し合いを進めるといふ方向性でいこう」

「な、なるほど…つか私すごいビビったんだぜ!？」

「あはは、ごめんごめん」

剣をしまつて椅子を並べていく。ちよつとした模様替えのようだ。椅子を並べていくたびに図書館の雰囲気が変わっていく。

「けど僕もうれしいな。剣は本来相手を斬るために作られたものだけど、今日みたいに話し合いをするための物差しとして使われるつてすごいことなんだよ。ともえちゃんはその剣でセルリアンを斬ったりつてないかい？」

「ううん。まだ一回も使つてない」

「じゃあ、今回がその剣の初めてのお仕事だね。武力の象徴じゃなくて知性の象徴としてこの図書館に飾るつていうのはどうだろうか？」

「そうだね…いいかも!」

自衛用の剣が儀仗として生まれ変わった。これからは図書館の知性の象徴としてこの図書館でその役目を果たしていくだろう。

「さあ、博士たちを呼んでこようか。ロードランナーさん、お願いしてもいいかな」
「合点！」

ゴマちゃんが博士ちゃんたちを呼びに行つた。あたしもアムちゃんを呼びに行こう。
ちよつと大仰な博士ちゃんたち説得計画が幕を開ける。

.....

「な、なんですかこれは……」

ちよつと引きつった表情を見せる博士ちゃんと助手ちゃんの二人。

「さ、博士たちも席について。博士たちが席に着いたら議会が始めるよ」

「ぎ、議会なんて聞いてないのです！ 私たちはあくまでビーストへの誤解を解くと……！」
「そんなことを言わずに。アムールトラさんも席についてるでしょ？ ほら、みんなが見てるよ」

「ご丁寧に傍聴席まで設けてある。サーバルちゃんやイエイエヌちゃんは最前列で傍聴することになっている。」

アムちゃんも緊張しているのか議席で固まってしまっている。計画通りである。

博士ちゃんたちが席に着くと、かばんさんが議会の開催を宣言した。

「今ここに、議題、博士と助手の持つ元ビーストのアムールトラ氏に対する誤解を解く」を始めさせていただきます。僭越ながら議長はわたくし、かばんが務めさせていただきます」

議会が始まった。かばんさんの語り口調もありすごく雰囲気がある。これは予想以上の展開になりそうだ。

「まずはアムールトラさん、あなたの主張を聞きましょう」

「は、はい：あたし、は、生まれたばかりのあたしを、殺すだとか処分するだとか言つて、あたしの存在を否定した博士たちが許せないと思つてました…」

「わかりました：次は博士たちの主張を聞きましょう。博士、あなたの主張を聞かせてください」

アムちゃんはそのどどしく自分の思いを主張した。あたしは必死になってかばんさんやアムちゃんたちの言葉を記していく。すごい大変な作業だ。

「我々はパークの巡回中に見慣れないフレンズがうなだれてるのを発見したのです」

「遠目からでもわかる異様な雰囲気からただのフレンズじゃないと判断し、図書館に行して様々な検査をしたのです」

「結果的にサンドスター・ロウを吸収した新種のフレンズと断定してビーストと名付けたのです。それが皆の知るビーストなのです」

傍聴席からざわざわと声上がる。

「静かに！アムールトラさんは博士たちの意見に言うことはありますか？」

「…何故あたしを鎖で縛った？」

「我々が感じた異様な雰囲気というのはその尋常じゃない殺気だったのです。意識がないはずなのに殺気だけは肌が痛くなるほど感じたので、安全のために鎖で縛ったのです」

「前々からあたしも何の鎖なんだろうとは思っていたけど博士ちゃんたちが付けたものだったんだ…」

「仕方ないことだったので。今までそういう事例は過去になかったのです」

「前例がなかったからこそ慎重に調査を進める必要があったのです。今回のことを顧みるに行きすぎた対応だったと我々も思っているのです」

「目をそらしながら若干気まずそうな表情をしている。わずかながらも申し訳ないと思っているのだろうか。」

「アムールトラさんは博士たちに何か言うことはありますか？」

「…あたしを殺すと判断した理由を聞かせてほしい」

「…それが最良の手段と思ったのです…」

「我々はピーストという存在を今まで知らなかったのです。言葉も理解できないと踏ん

でいたのでそこへは考え至らなかつたのです」

「で、言葉を理解したあたしに驚いたと?」

「まったくの予想外だったのです」

「その上はつきりと我々に対して敵意を向けてきたのです。我々も怖かつたのです。ピーストのような未知の存在をどのように扱っていいのかわからない。そのような恐怖の感情が確かにあつたのです」

アムちゃんが目をつむつて考えるような素振りをしている。博士ちゃんたちはうつむいてひどく落ち込んでいるようだ。話し合いすらできなかつた三人が今こうして話し合いをしている。博士ちゃんたちも話し合いができる相手と知って後悔しているのだろう。今まで自分が何をしてきたか反省してほしいとあたしも少し思った。

すつとアムちゃんが立ち上がった。ビクツと博士ちゃんたちの体が跳ねる。

「ちよ、ちよつとアムールトラさん!」

ソードラインを踏み越えて博士ちゃんたちに迫っていく。

「な、なんですか!?!このラインは超えてはいけないという約束のはずなのです!」

「私たちをどうする気ですか!?!」

「アムールトラさん!今すぐ席に戻って!そのラインを超えるのは禁則事項なんだよ!」

「そんなのどうでもいい」

「っ!!」

会場がざわつく。あたしも急な出来事でどうしていいかわからなかった。

やがてアムちゃんは怯えて抱き合う博士ちゃんたちの前まで来ると両腕を前につきだした。

「これ、外してほしい」

「…え？」

「いったい何を…」

「あたしをビーストと思わないならこれを外してほしい」

何が起きているか分からなかった。依然としてアムちゃんは敵を見ているかのような目をしているけど今までと違う態度を見せている。

「ちよ、ちよつと待つのです…」

席を外してごそごそと柵を漁っている。どこに鍵をしまったか忘れたのかあちこち探し回っている。

「早くして。腕が疲れる」

「ちよ、ちよつと待つのです！今探しているのです！助手も一緒に探すのです！」

「わ、わかりました博士」

二人で鍵を探し回る。床にいろんな物が散らかって行く。

「ない……ない……!」

「あ、あつたのです!」

助手ちゃんがあむちゃんの元へ駆け寄って行く。

「い、今外してやるのです」

ガチャリと両腕と両足の枷が外れていく。あむちゃんの四肢に繋がれていた枷がすべて外れると博士ちゃんたちに柔らかい笑顔を見せた。

「……ありがとうございます」

「え?」

「お前たちはあたしをフレンズとして認めてくれたのでしょう?だから枷を外してくれ
た……違う?」

「え……あ……」

「あたしもひどいことをしたと思う。あなたたちも他のフレンズと同じで怖かったんだ
と思う。この島の長として色々考えて頑張ってきたんだと思う。今回の話し合いでそ
れがわかった。あたしは今までそれに気付かないで一方的に自分の感情をぶつけてき
た。許してほしいとは言わない。けど、申し訳なかったと思う……ごめんなさい……」

「わ、我々のことを許してくれるのですか……?」

「うん…だからこれからはあたしのことを見ても怖がらないでほしい。あたしもあなたたちとお友達になりたい…」

「…は、はい…。歓迎するのです！」

会場から拍手が巻き起こる。あたしは目の前で起きている光景が信じられなかった。アムちゃんが博士ちゃんたちを許しただけでなく、自分から謝ってお友達になりたいと言ったんだ。あまりもの出来事にあたしの理解が追い付かなかった。

「ふふふ…じゃあ、今回の議決は…」

「ビーストでもお友達になれる…」

「だねー！」

こうして無事に議会は閉幕した。

………

「本当に怖かったのですよ？」

「…ごめん。あたしもやりすぎたと思う」

「悪いと思ってるならいいのです」

ちよつと前なら信じられないような光景が広がっている。アムちゃんが博士ちゃん

を肩車して助手ちゃんが背中に抱きついているのだ。

「お前は本当に力持ちなのです！」

「これくらいしか取り柄がないから……」

「そんなことはないのです。お前はとても背が高いのです」

「うう……」

「それに意外とお前は気が弱いのですね」

「よく言われる……」

「怯えた子熊が精いっぱい威嚇しているようなものなのです」

なんだか楽しくじやれ合っているようだ。これで博士ちゃんたちとアムちゃんの関係は一気によくなった。良かった良かった。あたしたちの大きなわだかまりが取り除かれたのだ。

「へへっ。良かったな！ともえ！」

「うん！ゴマちゃんもありがとう！」

「そんな私大したことしてないぜ？」

「そんなことないよ！ゴマちゃんが背中を押してくれたから達成できたことなんだよ！」

「そ、そうかな……？」

「二人とも、お疲れ様！」

かばんさんだ。今回の話し合いの立役者だ。

「かばんさん！今回は本当にありがとう！」

「はははっ、こんなので役に立てられたなら幸いだよ」

「ううん！かばんさんの助けがなかったらこんなことはできなかった。かばんさんが引つ張ってくれなかったらできなかったことだよ！」

「ふふっ、じゃあそんな僕にアクションを起こしてくれただもえちゃんも立派な立役者だね。おめでとう、ともえちゃん」

「かばんさん……」

感激して泣きそうになる。必死に感情を抑えながら精いっぱいのお礼を伝える。

「ありがとう！かばんさん！」

「私からもありがとうだぜ！」

「ふふっ、どういたしまして」

アムちゃんと博士ちゃんたちが仲直りできた。あたしは何よりもその事実がとても嬉しかった。今や二人はいがみ合う関係ではなく、抱き合ったり肩車するようなとても良い関係にある。これからはお互い威嚇し合うようなことはなくなるだろう。あたし

たちの悩みの種はなくなった。ゴマちゃんも良い笑顔を見せている。

さて、次はどこへ行こうかな。とても気持ちよく冒険ができそうだ。どんなフレンズさんに会えるだろうか。とても楽しみだ。

第8話「鶴」

夜、あたしとイエイヌちゃんとで図書館に来ていたタイリクオオカミさんと語り合っていた。図書館に来た目的はマンガのネタを探しに来たということだった。

タイリクオオカミさんはマンガを描くために字を猛勉強したらしく字が読めるとのことだった。だから話の引き出しが豊富というわけだ。

「昼間の評議会、お見事だったよ。とても良いものを見させてもらったよ」

「えへへ…書記としてほとんど仕事できてなかったけどね…」

「いやいや、それを抜きにしても本当に良かったと思うよ。ヒトというのはああいうことをして話し合いを進めていくんだね。話としては知っていたけど、まさかこの目で見ることになるとは思わなかったよ。良い勉強になった」

「まあ、そう思ってもらえたらあたしとしても嬉しいよ」

三人で楽しく談笑する。夜も遅く図書館で寝泊まりしているフレンズさんもいるので、お話もそこそこにお開きにしようと思う。

「そういえばどんな本を読んでいたんですか？」

「うん？ そうだねえ…色々読んだんだけど…これが一番印象に残ったかな」

百鬼夜行。とんでもなく恐ろしいものを取り出してきた。こんなものまでこの図書館においてあるんだ…そしてそれをチョイスしたオオカミさんもオオカミさんだ。

「これの…このページを見てごらん」

そう言つてあるページを見せてくる。そこには鶴という妖怪が描かれていた。

「頭が猿、胴体が狸、足は虎で尻尾が蛇…鳴く声はトラツグミ…すなわち鶴に似ていたという妖怪だね。もしかしたらジャパリパークにもこんなフレンズがいるのかもしれないって思ったんだ。なんだかこんな不気味な妖怪だけどそれに何故だか惹かれてしまつてね」

なんだか楽しそうに話している。あたしはそんな得体の知れない不気味なものに遭遇したら間違ひなく漏らす。そんなものに惹かれるとは作家というものは変わつていゝる。と、思った。

「けどね、この妖怪にはよくわからないことがあつてね…」

そう言つて別の本を取り出した。

「この本にも鶴に関する記述があるんだ。頭は猿、軀は虎、尾は狐、足は狸…鳴く声は鶴に似ていたという…そして私が最も怖いと思つたのはこれだ」

明らかに他の本とは違う装丁をされた本を出してきた。なんだか非常に不気味な感じがする。

「これ…なんですか…？ヒトのニオイがします…」

「だろう？私もこの本だけは他と違う感じがしたんだ。どうやらこの本の表紙には…ヒトの皮が使われているようなんだ」

「!!」

震えが止まらなかった。今オオカミさんが手にしている本には人間の皮膚が使われているというのだ。いったいどうしてなのか。ヒトの皮膚でなければならぬ理由があるのか。それほどまでに恐ろしい内容が記してあるのか。あたしはとても怖かった。

「それでこのページなんだけど…頭は虎、軀は猿、尾は狸、手足は蛇の如く…鳴く声は鶴に似たりけると書いてある…」

「…?」

どこを読んでいるのか。ページには日本語がない。描かれてあるのは歪な線と幾何学的な紋様だけだ。けどそこにはオオカミさんの言っていた鶴のような生物が描かれていた。虎の頭、猿の体、狸の尻尾、蛇の手足…名状しがたき邪悪な生き物がそこにはいた。

「そして最後にこれを見てほしい」

それは次のページに描かれてあった。震える指を本に這わせている。悪意を孕むそれは明らかにヒトの姿をしたものだった。

「読めてるって何が…」

あたしの問いかけの意味が分からなかったのかももう一回中を見ようとする。

「いや、止めよう。この本はなんだか危ないような気がする」

「あたしもなんだかそんな気がする…」

「…表紙に何も書かれてないようですけどタイトルつてあるんですか…?」

「タイトル?」

閉じた本をぐるっと見回す。

「ネクロノミコン…」

「……」

「……」

ぶわつと鳥肌が立った。ひどく冒瀆的な響きに思えた。この世に存在しても良いも

のとは思えなかった。

「つ…!!」

「ちよつと!キミー!」

あたしはオオカミさんからその本を取り上げると窓から投げ捨てた。すかさず一階に降りてキャンプ場のかまどに火を点けると本を燃やした。

「ハアツ…!ハアツ…!」

「な、なんてことをするんだ！本を燃やすだなんて……！」

「こ、これはヒトが読んで良いものじゃない……！ヒトの道を外れたヒトが読む本だよ……！」

焚き木が燃える音とあたしの息遣いだけが聞こえる。オオカミさんは観念したように言った。

「……かもね。あれはきつとヒトの読むものじゃない。燃やして正解かもしれないね」

そのときだった。

パリン！

図書館で何か割れる音がした。中で博士ちゃんと助手ちゃん、かばんさんの騒ぐ声がある。

「……行ってみよう」

「……うん」

図書館に近付くとそれらの声に交じってアムちゃんの苦しそうな声が聞こえてきた。何か大変なことが起きているのは間違いないようだった。あたしたちが中に入ろうとしたときだった。

「ダメです！ともえちゃん！中は危険です！」

「イエイ又ちゃん……!?!」

「イエイヌちゃんが道を塞いできた。奥の方を見てみると怯える博士ちゃんたちと尻もちをついたかばんさんの姿があった。それに割れたフラスコ、黒いものがまとわりついたアムちゃんの姿が見えた。

「と、ともえ……」

「アアツ……ウウ……ツ！ともえちゃ……見ないで……！」

苦しそうに悶えるアムちゃんがあたしに切願するように言う。あの黒いのは何……？何が起きているの……!?

「博士たちが誤って研究用のサンドスター・ロウが入ったフラスコを落としてしまったアムちゃんがそれを浴びてしまったんです……!あのままだとアムちゃんがビーストになっってしまう……!」

「そんな……!助けなきゃ!」

「ダメだ!危険です!」

せつかくアムちゃんと博士ちゃんたちが仲直りしたのにこれじゃ台無しになっってしまう……!早く取り除かないと……!

「ダメだともえちゃん!サンドスター・ロウに触れたらともえちゃんまで汚染されてしまう!逃げるんだ!」

「どうしたのだ!?!」

ストの背中をさすっっているのがわかった。

「大丈夫なのだ…怖くないのだ…」

「ア…ア…ア…」

「…落ち着いたか？」

「ア…ア…ア…ア…ア…」

「大丈夫なのだ！お前をいじめる悪いやつはアライさんがまとめてぶっ飛ばしてやるのだ！だからフレンドズを襲う必要もないのだ！アライさんにお任せなのだ！」

…驚いた。ピーストと化したアムちゃんをたった一人で静めた。アムちゃんもポカんとした顔でアライさんを見下ろしている。

「ほら、こっちに來るのだ！一緒に寝るのだ！」

アムちゃんの手を取ってアライさんは行ってしまった。シンと辺りが静まり返る。

「な、何が起こったのですか…？」

「わ、わからない…アライさんが、アムールトラさんを…」

博士ちゃんとかばんさんが啞然としながらさつき起きたことを確認する。

ふらつと博士ちゃんが立ち上がると、様子を見に行ってくるのですと言いついてふらふらと出て行った。

「と、ともかくピーストを元に戻す方法を考えるのです！ともえたちはどうやってビー

ストをフレンズにしたのですか?」

助手ちゃんが訪ねる。

「え、えーとセルリアンに半分だけ食べられてから…サンドスター・ロウだけ吸われたのかな。ビーストとしての気配が消えていったんだ」

「セルリアンに食べられたと…その時はたまたまサンドスター・ロウがきれいに吸われただけなのかもしれませんが、サンドスターだけを吸われる可能性も否定できませんね…」

「うーん…」

頭を悩ませていると突然機械音声が届いてきた。

「ユキヤマチホーニ キュウビキツネト オイナリサマガ キテイルヨ。ソコヘ イクト イイカモネ」

「ラ、ラツキーさん!」

ラツキーさん…?この場にラツキーさんというフレンズがいるのだろうか。変なしゃべり方をするフレンズさんだ。

「オ、オイナリサマとキュウビキツネ…恐ろしいメンツなのです…な、なぜ雪山地方に…」

「オイナリサマ?キュウビキツネ?フレンズさんなの?…つていうかさつききの声は?」

「ああ、ごめんね。僕の右手につけてるこれが喋ったんだ。ラッキービーストってガイドロボットなんだよ。外にいつぱいいる青くて小さい子たちと同じガイドロボットなんだけど、僕のこれはボディがなくなっちゃったんだ。そうだ、ちょうど外にいつぱいいるしともえちゃんも一つどうかかな？バスも運転してくれるしフレンズさんの解説はしてくれるしとても役に立つと思うよ」

「う〜ん…」

しばらく悩む。今まであたしたちは四人で旅をしてきたけどどうなのかな…？

「う〜ん、あたしはいいかなあ…今まで不自由したことないし今のままでもいいかも」

「そっか。まあ、ラッキーさんはあちこちにいるし、もし欲しいと思ったら適当な個体に話しかけるといいよ。きつともえちゃんの力になってくれるから」

「うん！」

ラッキービースト。あの小さくてぴよぴよこしてるものがそう呼ばれてるみたいだ。あたしも力を貸してほしいときはお願いしてみようかな。

「ただいま戻ったのです。ビーストはアライとフェネックと一緒にぐっすり寝ているのです。しばらくは安心だと思われるのです」

博士ちゃんが戻ってきた。アムちゃんはぐっすり眠っているらしいことが伝えられた。

「なら安心ですね。ともえたちは明日にでも雪山地方に行つてオイナリサマに助けてもらうのです。くれぐれも失礼のないようにするのですよ。相手はフレンズといつてもカミサマなのです」

「? 助手。オイナリサマが来ているのですか?」

「オイナリサマとキュウビキツネが雪山地方に来ていらしいのです」

「なんと」

特別驚いた様子もなくよくわからない反応を返してきた。そして助手ちゃんと同じような注意を補足するような形でアドバイスしてきた。

「オイナリサマは我々フレンズに対してとても親身に接してくれるから特に心配はないと思うのです。けどキュウビキツネに対しては注意するのですよ。アレは傾国の美女と呼ばれたあの九尾の狐と全くの同一個体なのです。どういう謀略を謀ってくるかわからないので、最後まで気を抜くのではないのですよ」

「う、うん。わかった」

こうしてあたしたちはアムちゃんを助けるために雪山地方に行くことになった。雪山というだけあつてとても寒いのだろう。防寒対策にじやぱりまんの補給もしておかなくちゃ。きつと過酷な旅になるはずだ。今のうちに準備して明日の出発に備えなければ…

第9話「傾国」

「きれいだなー…」

「やー、本当だねー」

あたしたちは今雪山地方に来ている。ピーストと化したアムちゃんも不思議そうに周りをキョロキョロと見ている。相変わらずただならぬオーラを放っているがこうしている分にはだいたい大人しいものだ。むしろ喋らなくなったアムちゃんという塩梅である。

あたしたちがジャングル地方で乗り捨てた荷車を誰かが再利用して、またどこかで乗り捨てたのか再び荷車を見つけたのは大変大きかった。

「アライさーん、大丈夫かーい？」

「イエイ又ちゃんも無茶しないでねー？」

「アライさんにお任せなのだ！バリバリ働くのだー！」

「わふ！負けませんよー！」

ぞりぞりぞりぞり

犬ぞりと化した荷車はぐんぐん進んでいく。しかし上り坂というのに二人の体力に

は驚かされるばかりだ。速度を緩めずどんどん登っていく。このままいけばあつという間に着くのではないだろうか。

「ふうむ。しばらくは嵐は来ないだろうけどいつ天気が変わるかわからないからねー
…」

「フェネックちゃん？」

「やー、前にかばんさんを追いかけてた時にここに来たことがあつてね、その時にも天気が急に変わつて立ち往生したことがあるのさー」

「そ、そうなんだ…」

「やー、かばんさんが温泉の危機を救つてねー、私たちも助けられたものだよー」

「そうなんだー…本当いろんな話を聞くなー。カフェを繁栄させたり合戦を治めたり…
オイナリサマも温泉にいたりしないかなー」

「この地方に来るなら真っ先に行きそうなどころではあるからねー。いると思うよー
？」

「…だよね！」

……………

「さ、寒い…凍え死ぬ…」

急に襲ってきた吹雪をしのぐためにかまくらを作って避難していた。小さなかまくらに六人入っているから結構ぎゅうぎゅう詰めである。

「ふいーさみーな本当…」

「……」

「うお!?アム!?!」

ぎゅー。

「へ、へへ…暖めてくれるのか?さんきゅーな…けど…本当にあったけえや…アムの体…」

「ね、寝ちゃダメだよっ!」

けどなんとなくアムちゃんのもふもふさは暖かそうな感じがする。なんていうかボリュウムがある。けどアムちゃん自身は平気なのだろうか。あまり寒がつてる様子は見られない。

「わっ!イエイヌちゃん!?!」

「わたしも温めてあげます!」

「わっ!わっ!イエイヌちゃん!」

上から押しつぶすような感じで上に乗っかって抱き着いてくる。セントラルで再会

したときもこんな感じで抱きつかれたっけ。なんだか懐かしいな。

見た目以上にもふもふで暖かくてなんだかほぐれていくような感じがする。無垢で純真なイエイヌちゃんの思いもあつて身も心もほっこりと暖かい気持ちになつていく。

「あはは、仲いいねー」

「フェネックも温めてあげるのだ！」

「え？」

ボスッ！

「わわっ、アライさんっ」

「ぎゅーなのだ！」

「ア、アライさん……」

「どうなのだ？暖かいか？」

「う、うん……」

「フェネックの体はとても冷たいのだ。砂漠に住むけものだから寒さに弱いのか？」

「……かもねー」

六人分詰まっていた空間に空きができる。みんなが寒さをしのぐために抱き合っているのだ。傍から見ると面白くも微笑ましい光景に見えるかもしれない。だが一度この空間に入ってしまったらフェネックさんのふもふの虜になること間違いないはずだ。

現にあたしもイエイヌちゃんのもふもふに吞まれてしまっている。特にこの寒い吹雪の中での破壊力は抜群だ。二度と出たくないと思ってしまう。

なんだか遠くからキュラキュラと変なが聞こえてきた。この雪山には不似合いな無機質で気味の悪い音だ。

「なんだろう…何の音だろう…」

「この音…聞き覚えがあります…」

徐々にこつちに近付いてくる。

「クッウッツッ…！」

「ア、アム！落ち着け！」

《…なんだろうアレ、ヘンなものがあるよ！》

《かまくらかな…誰か避難してるかもしれない。見てみよう》

声が聞こえた。かばんさん…？ザクザクと雪を踏み歩く音がしたと思ったら入口からぬつとかばんさんの顔のぞいてきた。サーバルちゃんの姿もある。

「かばんさん！サーバルちゃんも！」

「ははは、今朝方ぶりだね。気になったからついてきちゃった！」

「やあやあ、お久しぶり、かばんさん」

暖かそうなジャケットを着たかばんさんが顔をのぞかせる。サーバルちゃんも耳が

立って変な形になってるけどしつかりと防寒着を着こなしているようだ。

「すごいね。自分たちで作ったのかい？」

「うん！表の荷車を盾にしながら作ったんだ。もう冷たいし寒いしで死んじやうかと思つたよ」

イエイ又ちゃんが離れるとかぼんちやんと向き合つた。途端にイエイ又ちゃんが離れたところから冷気が一気に入り込んできた。

「ひい！さむっ！」

「あはは、バスがそこにあるから入りなよ。暖かいよ」

ぞろぞろとバスに乗り込んでいく。音の正体はタイヤの部分履帯に改造されたジャパリバスだったようだ。

「あれ？かぼんさんは？それにこれ…なに作ってるの？」

「かぼんちゃんはボスと運転しなきゃいけないから前の席で運転するんだよ！これは私もよくわからないんだけどじょーりゅーしゅ？っていうの作ってるんだって！私が火を怖がるから火が見えないように加工してくれてるんだよ！」

「へ〜…」

かぼんさんお酒飲むんだ…しかも蒸留酒って強いやつじゃ…でも…

「あつたか〜い…空気も適度に湿つてて心地いいよ〜…」

「わふう…：そうですなえ…」

車内の暖かさに身を溶かすあたしたち。フェネックちゃんたちもご満悦のようだ。かばんさんは大丈夫なのだろうか。

風にきしむバスに揺られながら雪山を登っていく。いつしか吹雪も止み、太陽が顔のをぞかせてきた。青空が見えるだけでも心が澄み渡るかのようだ。

しかしアムちゃんはそうもいかなかったようで低い唸り声を上げ始めた。

「ウッウッウッ…」

「ど、どうしたの…?」

初めて感じるであろうビーストのただならぬ殺気に怖気づくサーバルちゃん。

遠くに見える建物を睨みながら低く唸っている。あそこに何かいるのだろうか。もしかしてオイナリサマとキュウビキツネさんが…?」

「ど、どうしたってんだよ!別に何もないだろ!」

いつの間にか眠っていたアライさんとフェネックちゃんが目覚める。殺気立つアムちゃんを宥めながらあたしたちはその建物に入った。なんだかバタバタと館内を走り回る音がする。やがて紺色の服を着た銀髪のアリスさんがあたしに気付くと慌てた様子で話しかけてきた。

「わわわ、お客さん!?!ごめんなさい!今それどころじゃないの!あああ〜どうしよう〜

「カ、ア、ツ、！、？、」

「さつきからギヤーギヤーうるさいわよ」

少しウエーブがかかった髪をした鋭い目つきのフレンズさんがそう言うのと、突然現れた透明の槍がアムちゃんを吹き飛ばした。アムちゃんはそのまま力なく倒れてしまった。

「アムちゃん！」

「アムールトラ！」

「アム！」

「ウツ…アツ…」

意識を失い気絶してしまった。

「ふん！余計なマネをしてくれる…」

「ここはあなたひとりを楽しむところではありません。ここは皆が安らぐ温泉郷なのです。和を乱すのであればあなたでも容赦しませんよ」

「はっ！そーですかー！」

白髪のフレンズさんが諫めるように言う。

「申し遅れました。わたしは皆からオイナリサマと呼ばれている者です。さつきあなたのお仲間に無礼を働いたのがヤマタノオロチ、そしてあの子がキュウビキツネです。どうぞお見知りおきを」

「襲い掛かってきたのはアイツだったのに…」

「あ、あたしはともえつて言います！この子がイエイヌちゃんでこの子が…」

……

「なるほど…そのアムちゃんさんのピースト化を解除してほしいと…」

「うん…ダメ…かな…大切なお友達なんだ…」

「はっはっは！自分から手を出しておいてお願いごとをするとは！ヒトとはそこまで傲慢になったか！」

「オロチ！…キュウビキツネ、できますか」

「何故私がやらなければならぬのよ」

「わたしがやると時間がかかるからです！さあ、早くやりなさい！」

「まったく…さあ、そいつを連れてきなさい」

気絶しているアムちゃんをキュウビキツネさんの元へ連れていく。背中を見せろと言うのでアムちゃんの背中を差し出すとベシツと叩いた。

するとびっくりしたようにアムちゃんが目を見開き、何やら苦しそうに口元を抑え始めた。

「ウツ…!!」

ビチャビチャと黒いものを吐き出した。これがサンドスター・ロウなのだろうか? 図書館で見たものよりもなんだかすごい水っぽい感じがするけど…

「ハアツ…ハアツ…」

「もう少しまともな方法はなかったのですか…?」

「早くしろと注文を付けたのはあなたじゃない。私はその注文に従っただけよ」

「そ、そうですか…? とりあえずこれでアムちゃんさんのピースト化は解かれたはずですよ。アムちゃんさん、お気分はどうですか?」

「……へいき。なんともない…」

アムちゃんが元に戻った…! けどこんなに簡単に解除するなんて…

「ありがとう! オイナリサマ! キユウビキツネさん!」

「ふふふ。ほら、キユウビ」

「……ふん」

「まったく、素直じゃないんだから…さあ、せっかく温泉に来たのですから、あなたたちも入りなさいな。ギンギツネの管理する温泉ですもの。きつと身も心も安らぎますよ」

オイナリサマに誘われて服を脱ぎ温泉に入っていく。…本当に気持ちいい…関節や

筋肉の緊張がまとめてほぐれていくようだ。体中の力が抜けていく。

「ほら、ギンギツネ、あなたも入りなさい」

「は、はい…」

ギンギツネちゃんが神様相手に完全に委縮している。同じ狐でその上、神様が相手なら委縮してしまうのも当然なのかもしれない。

「そういえばキタキツネはどうしたのですか？」

「…あの子、どさくさに紛れてまたゲームしてるわね…」

そう言う素っ裸のまま館内に行ってしまった。良いのだろうか。

「ふふふ、毛皮を脱ぐというのがあまりなかったのですものね…可愛らしいわ」

「イエイヌちゃんは普通に脱いでたけど…」

「ヒトに最も身近なけものですもの。一度毛皮や衣服を脱ぐという認知をしてからはヒトのように順応できたのでしょうか」

「わたしのお話ですか？」

すすすとイエイヌちゃんが寄ってきた。

「良き主を持つているようですね、イエイヌ」

「はい！わたしの大好きなご主人さまです！」

「ふふふ、良いことです。イヌというものはどこまでも健気で、純真で、穢れを知らない

善いけものです。あなたが愛情を示せば必ず応えてくれます。生き別れ、死に別れても、何度でも生まれ変わって大好きなあなたの元へと必ず帰ってくるはずです」

「……………」

イエイヌちゃんに視線を移す。ニコニコとあたしに笑いかけている。イエイヌちゃんの笑顔を見ているとなんだか本当にそのような気がしてくる。

「オイナリサマの言う通りです！わたしは何度だって死んでも何度でもともえちゃんの元に帰ってきますよ！ともえちゃんに忘れられても、わたしだって認識されなくても、ともえちゃんの元に帰ってきていつもみたいにじやれてみせますから！」

「イエイヌちゃん…」

「それに…」

「??」

「そんな奇跡、もう既に起こしてますしね！」

「…え？」

「ほう？」

一瞬言われた意味が分からなかった。けどその意味を理解したとき、あたしは泣きそうになっちゃった。

「イエイヌちゃん…！」

「ともえちゃんの方から戻ってきたんです！わたしたちの友情はホンモノです！」

ぎゆうつとイエイヌちゃんを抱きしめる。ケガワと違っておすべすべのお肌が直に当たる。けどそんなことがどうでもいいと思えるくらいあたしはイエイヌちゃんが愛おしく思えた。

イエイヌちゃんとあたしは魂を超えて繋がっている。そんな気がした。

「ふむふむ、お二人の仲は相当に良いようですね。あなたたちの魂はもう結ばれているよう……一柱の神であるわたしもそう感じます」

「はっはっはっはー!!!」

「!?」

急にけたたましい笑い声が聞こえてきた。ヤマタノオロチさんだ。見るとかばんさんとつるんでいるようだった。

「貴様もよく飲むではないか！」

「いやあ、それほどでも……」

「む、貴様の持つているそれ……酒か!?!」

「あ、うん。自分で作ったウオツカだよ」

「なに!?!」

「飲んでみる?」

サーバルちゃんが遠くからフェネットクちゃんと一緒にジト〜とした目で眺めている。あの目がお友達に向けられる視線なのかと少し悲しく思えた。それともかばんさんに悪がらみするオロチさんに向けられているものなのだろうか。

「クウー！効くではないか！お前も良いものを作るではないか！気に入ったぞ！ヨツカといつたか？」

「ウオツカだね。僕のはじゃがいもをベースにしてるからオロチさんのとはちよつと味わいが違うかもしれないね」

「うむ。しかしこいつはかなりの辛口でよく沁みるわい！」

なんだかすぐく盛り上がっているようだ。アレに近付くと間違いなく嫌な絡まれ方をされるだろう。君子危うきに近付かず。くわばらくわばら。

「サーバルちゃん！こっちに来なよ！楽しいよ！」

「はっはっはっ！！近うよれ！」

「うみや!？」

南無三サーバルちゃん。慈悲もなくオロチさんから生えている蛇に絡まれて彼女たちの元へと引きずり込まれていく。文字通りオロチさんの毒牙にかかってしまったようだ。毒牙にかかったサーバルちゃんはヒトの魔の手によって蹂躪されるのみであった。

「オロチさくん。サーバルちゃんの耳つてすぐかわいと思わないか？ふへへ。こうやってお耳や尻尾をさわさわするのが向こうでの唯一の楽しみだったんだからね」

「や、やめてかばんちゃん！なんか変だよ！それにすごい臭いよ！」

「そりゃあ、お酒飲んでるからね。あくふわふわして気持ちがいいや。…かわいいなあ、サーバルちゃん…食べちゃいたいかも」

「た、食べないでよ!？」

「ぬ、ぬへへ…」

夫婦漫才を見せられているようだ。そして既にオロチさんの毒牙にかかっていたフレンズさんの一人であるアライさんがフエネックちゃんの尻尾を懸命に洗っていた。

「ははは、洗い上戸なんだねー、アライさん」

わしやわしやわしやわしや

「ぬへ、ぬへへへ…」

「あー、そんなとこまで…そこはちよつとストップしてもらったほーが良いかなー、あははははー……ふへっ……」

ふくくくくくくくくくく

「あはは…みんな楽しそうだね…」

「和を以って温泉の静かな雰囲気を楽しもうと思つてここへ来たのですが……これは咎めるのも野暮なのかもしれませんね」

「だね。そつとしておこつか」

楽しそうに自由に遊ぶフレンズさんを和やかに見守っていると、隅つこでゴマちゃんと一緒に入つていたアムちゃんが目に入った。なにやら口をもごもご動かししている。

ぺっ！

「っ!!アムちゃん!!」

「な、何吐いてんだお前!!」

「……サンドスター・ロウ?」

黒い液体みたいなのがふよふよ浮いている。これは唾以上にまずいものなのではないか。

「イイイイイイ!!こつち来んな!!あつち行け!!」

バシヤバシヤと自慢の足で向こう側へ追いやろうとするゴマちゃん。その抵抗も空しく波に逆らうかのようにゴマちゃんの元へと漂着するとゴマちゃんの体に吸い込まれてしまった。

「なっ!!」

顔が絶望色に染まっていく。青くなつた顔でワナワナと体を震わせるとアムちゃん

に襲い掛かった。

「どうすんだよおい！ビーストになっちまうだろーが！」

「そしたらあたしの仲間だよ。嬉しいでしょ」

「ちつとも嬉しいかないわい！」

「あたしは嬉しい」

バシヤバシヤとゴマちゃんに揺さぶられながらあはははと絶妙な棒読み加減で笑うアムちゃん。もしゴマちゃんがビーストになるとしたらどうなるだろうか。ビーストになる兆候も見られないしあの程度の量であれば特に問題もないのかもしれない。オイナリサマたちもさしたる反応も見せないしやっぱり問題はないのだろう。

「うううう……さむさむ……」

「ふああ……」

ちょうど忘れていたところにギンギツネちゃんが他の狐っぽい女の子と一緒に入ってきた。ギンギツネちゃんにそっくりでいかにも狐っぽい色合いをしている。

「ほら、挨拶なさい。キタキツネ」

「キタキツネだよ。よろしく」

しつかり者のギンギツネちゃんに対して何だかダウンナーな雰囲気醸し出している。だるだるとした雰囲気は何とも言えない。

「ふあ。本当にオイナリサマとキュウビキツネさんがいる…」

「わざとらしい…あたしと一緒にあたふたして走り回ってたのに…まさかゲームをするための演技だったの？」

「まあね」

「あんたねえ…」

キタキツネちゃんが呆れている。けどゲームって…？

「キタキツネちゃん。ここってゲームがあるの？」

「んん。あるよ。やる？」

「うん！やりたい！」

「いいよ。行こっか」

「だーめ。まだ入ったばかりでしょ！それに出るときはちゃんと30数えてから！」

「えー…」

なんだかオイナリサマとキュウビキツネさんみたいだ。それとも姉妹と言うべきか。いずれにせよぴったりのコンビのように見える。

オイナリサマはゆったりとくつろいでいる。けどなんだかあたしは少しのぼせてきちゃったかもしれない。もうそろそろあがろうかな。

「あたしそろそろ上がろうと思うんだけどイエイヌちゃんは どうする？」

「わたしもあがります。体お拭きしますよ！」

「いや、いいよ！自分でやるから！」

「そう言わずに！」

「うわあ！イエイヌちゃん！」

.....

「はあく、いいお湯だった。体がふにやふになっただみただよ」

「そうですね。温泉がこんなに気持ち良いなんて……毛皮の下もすべすべで心も体もほぐれちゃいました」

ヴヴヴヴ

「あ、あ、あ、あ、あ……」

アムちゃんがマツサージチエアに背中をぎりぎり刺激されているようだ。小さく呻きながらその快感に身を任せている。あたしの身長だとちよどあのぎりごりが頭のところに来て脳みそにすごい振動が来るのだ。こういうときにアムちゃんの身長が羨ましく思ってしまう。

「気持ち良いのか？それ」

「気も、ち、い、い……」

「すげえ声出してんぞ……」

もつともな感想を言ってくれてどうも。

アムちゃんの体が振動に合わせて小さく揺れている。見ていてちよつと面白い。

「ともえちゃんともえちゃん！」

イエイヌちゃんが小走りで駆け寄ってきた。手に何かを持っているようだ。

「はいーこれー！」

「おお、これは……」

温泉の定番、牛乳である。持ってきてくれるのはありがたいけど大丈夫なのだろうか。

「フリシアンさん印の牛乳ですよ！パークでも大人気のミルクですよ！」

フリシアン：たしかホルスタインだっけ？ちゃんと牛乳を作るフレンズさんがいるんだなあ。けどイエイヌちゃんに牛乳は大丈夫なのだろうか？イヌに牛乳は栄養過多で体調を崩すって聞くけどフレンズ化した今は大丈夫なのだろうか？ルンルンと器用に蓋を開けるイエイヌちゃんだけど一応聞いておいた方がいいだろう。

「イエイヌちゃんって牛乳大丈夫なの？体調崩したりしない？」

「大丈夫ですよ！パークのみんなも喜んで飲んでますし、わたしもたまに行商の口バさ

んからいただいた牛乳を飲んでましたから！」

えへへと小さく笑いながらあたしの牛乳瓶も開けてくれた。小気味良い音と共に開かれた牛乳瓶からは、ひんやりとした冷気が手を伝ってくる。澄んだまろやかな良いにおいが鼻の中に流れてくる。

お互い目配せをすると一緒に喉を鳴らしながら牛乳を一気に飲み干した。冷たい感触が体の中を駆け抜けていく。牛乳のまろやかな味がたまらない。やっぱり温泉にはこれがないとね。

「ぶはーサイコーだね！」

「はいーフレンズ化した今、ヒトとこうして楽しむのがとっても幸せです！」

冷たい感触がよく沁みる。イエイヌちゃんも良い顔をしていてもほっこりする。当初の目的とは違えど、解決した今はこれくらい楽しんで良いはずだ。それとももう既に楽しんでいたか。当のアムちゃんもずっとマツサージチエアに夢中のようにだしはいよね？

ガハハハとけたたましい笑い声が聞こえる。温泉から上がった後もあの方たちは酒盛りを楽しんでいるようだ。そういえばサーバルちゃんとアライさんとフェネックちゃんの姿も見当たらない。恐らくあの二人に巻き込まれたのだろう。ご愁傷様である。

「サーバルちゃんたち、大丈夫でしょうか」

「たぶん大丈夫じゃないと思う。かばんさんもお酒飲むと変わるんだなあ…温泉でサーバルちゃんのお耳をすごいもふもふしてたし、今ごろどうされちゃってるんだろう…フェネツクちゃんもちよつと心配かも」

「あはは…全身くまなく洗われてましたもんね…」

あの光景は見ていてすごかった。セクハラなんてものじゃない。悪意も何もないのだろうけど、アライさんは純粹に洗っていたのだからとあたしは思うことにした。抵抗せずにアライさんにされるがままのフェネツクちゃんもフェネツクちゃんとも思った。洗い上戸…恐るべし。

その後あたしはキタキツネちゃんのいうゲームで遊んで、いつも以上にふつくらになつたイエイヌちゃんをもふもふして眠るのだった。

……………

「じゃあ、またね！ギンギツネちゃん！キタキツネちゃん！」

「ええ、またいらつしやいな。道中気を付けるのよ？」

「またね」

あたしたちはギンギツネちゃんたちとバイバイした後ジャパリバスで下山していった。

「頭が痛いのだあ…なんなのだ…？」

「かばんちゃんも頭が痛いって言ってた。朝から吐いたりお酒の臭いがすごかったりしてたけど大丈夫なのかなあ…？それにアライさんからも臭うよ…？」

二日酔いに苛まれる二人がいた。アライさんからもお酒のにおいがする。あたしでも臭うんだからサーバルちゃんやイエイヌちゃんからしたらさすがく臭うのだろう。運転席でうなだれるかばんさんからは時おりえずく声が聞こえる。明らかに飲みすぎである。

お酒はほどほどに飲むのが大事なのだとなんとなくわかった気がした。特にかばんさんの様子を見てみると強くそう思ってしまう。しかしあの人に運転を任せて大丈夫なのだろうか。

「あ…かばんさん大丈夫なの…？」

「んん…ううーん…」

返事がない。ただの酔い潰れのようにだ。

「カバンガ ウンテンスルト アブナイカラ ボクガ バスト リンクシテ ハンジド
ウウンテンデ ウゴカシテイルヨ。 ダカラ アンシンシテネ」

「そういうことだから…安心していいよ…」

なるほどと思って少し安心する。よく見るとハンドルが勝手に動いているのがわかる。本当に自動運転しているようだった。こうして見るとすごい技術だなーって少し感心してしまう。

いろんな余韻を残すあたしたちを乗せてバスは雪山を降りていく。無事ビースト化が解けたアムちゃんも気持ちよく風に当たっているようだ。神様と触れ合えたこと、フレンズさんたちが楽しく温泉で遊んでいた光景をまぶたに浮かべながらあたしたちは図書館への帰路についたのだった。

第10話「砂漠」

暁の地平線から日の光が見える。あたしたちは砂漠を歩いてきた。こうして見ると砂漠というものも美しいものだ。砂ばかりの枯れた大地という認識しかなかったが、それも違うように思えた。

朝焼けが辺りを照らす。群青色の空は消えて空が段々と白んでいく。一日の始まりである。この光景を見ただけでも、ここ砂漠地方に來た甲斐があったというものだ。

周りを見回してみる。辺り一面は砂の大地、大きな砂丘があるのみである。砂丘というものは意外と大きいもので、一つ一つが山のようなのである。頂上に行くのにも一苦労する。一つの砂丘に登ると、改めて周りを見回してみる。ここから見る限りでは休憩できそうなどころはない。オアシスなんてものがあるかもと期待してみたけどそれもなさそうだった。

しかし、日が昇り切る前に休憩できるエリアを見つけなければ、あつという間に倒れてしまうかもしれない。じゃぱりマンも水も多めに持ってきたけどいつまで持つかは分からない。なくなってしまう前に早く見つけなければ。せめて砂漠に住むフレンズさんに会えればいいと思ったのだけど、その影すらなかった。噂に聞く限りでは平原地

方でアムちゃんが戦ったラビラビがこの砂漠地方に住んでいるらしいけど、今見る限りではないなさそう。ガラガラヘビのフレンズでもいいからせめて誰かに会いたい。

当てもなくただ歩いていく。後ろに続くのは四人分の足跡のみ。けど、その足跡すらも風が吹くと消えていってしまう。あたしたちがいたという一つの証明を残すことすらもこの砂漠地方は許さないのだそう。少し切なくなってしまう。

「不思議な感じがするぜ。ついこの間まで雪山にいたっていうのに今では砂漠にいる。普通、こんなことつてないはずだぜ」

ほつりとごまちゃんがそんなことをこぼした。確かにそう。この一週間で雪山、森、砂漠と足を運んでいる。この短期間で三つのエリアを渡り歩いたのだ。日く、サンドスターの影響でジャパリパークの気候は日差しや大気の状態などがはっきりと分かれてしまっているのだそう。その影響でそれぞれの環境に適したフレンズさんが、自分の適する最も過ごしやすい地方に住んでいるとのことだ。

日がだいぶ高く昇ってきている。影の大きさから判断するに1時くらいだろうか。互いが会話もなく黙々と歩いている。もうそろそろ誰かフレンズさんに会うなり休憩スポットみたいなどころについてもおかしくないはずなんだけど、その気配はまるでない。

「おや〜?ここであうなんて奇遇だね〜」

不意に声が聞こえた。このゆったりしたしゃべり方はフェネックちゃんだろうか。

「やあやあ、砂漠地方へようこそ。こんな暑いくらいしか取り柄のない砂漠地方に何の用だい？」

「フェネックちゃん…あれ？アライさんは？」

「ははは、私がいつもアライさんと一緒にいると思っただら大間違いだよ。フェネックギツネは砂漠に住むけもの。ここは私の縄張りなのさー」

そうなんだ…アライさんは別行動をしているのかな？けど、二人はいつも一緒にいると思ってたからなんだか意外だ。

「今の時間からは暑さも厳しくなってくるからねー。よかったら私の巣でゆっくりしていくといいよー」

「あ、うん。ちようど休憩できるところを探してたんだ。悪いんだけど邪魔してもいいかな？」

「どうぞどうぞ。キミたちさえよければ是非くるといーさー」

……

「あそこに見えるのが私の巣だよー」

丸く盛り上がった小さな砂山に人工的な扉が据え付けてある。フェネックちゃんのお手製ののだろうか。

「ヒトの住処みたいですね。扉があるだなんて」

「やー、あれがないと砂嵐が来た時に大変なのさー。いつつも砂嵐が吹くと巣の中がちやぐちやの砂まみれになっちゃってねー。あれがあるだけで大違いだよー」

なるほど。そういう狙いがあるのか。

しばらく雑談しながら歩いていくと扉の前まで来た。フェネックちゃんが扉を開ける。中は整頓されていてきれいだった。木箱や絨毯などが置いてあるがフェネックちゃんの趣味なのだろうか。人の住んでいるような生活感が漂ってくるが、どうしても一つだけ気になるものがあった。

なぜアライさんがいるのだろうか。

「フェネック！おかえりなのだ！」

「ただいまーアライさん」

「…あー……」

ゴマちゃんが頭を抱えて呆れかえっている。気持ちはすごくわかる。あたしも今までさしくその気持ちになっっている。イエイヌちゃんも眉間にしわを寄せて呆れたようなよくわからない表情をしている。

「あー…なんでアライがいるんだ？」

「んー？あー、アライさんと別行動をしてると言っても一緒に住んでないわけではないよー？」

「るーむしえあなのだ！」

「あのかなー…まあ、いいや…」

何か言いたげにしてるようだけど諦めたように口を紡ぐ。あたしが言おうとも思っただけど止めておこう。なんかもう答えは出てるような気がする。

フェネットクちゃんがつろぎなよと言うのでその言葉に甘えてくつろぐことにした。アムちゃんとアライさんは一緒に遊んでいる。ゴマちゃんはイエイヌちゃんと何やら話しているようだ。あたしは…お絵かきでもしようかな。

思えば全然お絵かきをしていない。絵を描くことは好きなんだけど、それ以上にみなとする旅が楽しくてしょうがなかった。いろんな地方に行くたびにいろんな出会いがあつて、いろんな出来事があつた。それらに全力で臨んでると絵を描く暇なんてなかった。描けなかった。

あたしはスケッチブックを取り出すと、過去の出来事を思い返しながらかつてきた絵に落とし込んでいった。思い返せば懐かしいものだ。

「おつ、マンガ描いてるのー？」

「ん？違うよー。絵を描いてるの」

「マンガとは違うのかい？」

「うん。絵と文章で物語を作るのがマンガなんだけど、あたしのはただの絵。全然違うんだよ」

「へー」

わかつてるのだろうか。けどフェネックちゃんは賢いみたいだし、たぶんわかつてるはずだ。たぶん。

じーつとあたしの描く絵を見ている。…あんまり見られると気になって集中できない。い。

「フェ、フェネックちゃん…あんまり見られると気が散るっていうか集中できないっていうか…」

「んー？あー、私のことはいないものと思ってくれていーよー。気にせず描きな」

そう言われても…うーん…頭の中がぐちゃぐちゃになってしまふ…そうだ。

「フェネックちゃん、なんか描いてほしいものってある？」

「描いてほしいもの？うーん…そうだな…」

顎に手を当てて考えるそぶりを見せる。何かあるのだろうか。

「そうだな…じゃあ、アライさんを描いてもらえるかな」

「アライさん？どうして？」

「やー、ともえちゃんのアライさんのことをどう見てるのかなーって気になってねー。私は私でアライさんのことを見ているんだけど、ともえちゃんと同じ目で見ても限らないしねー。ちよつとどうい風に見てるか絵で描いて見せてほしいなーって思ったわけさー」

「なるほど…」

そう来たか。あたしが思うアライさん…

考えを張り巡らせてみる。正直で…かわいくて…まっすぐで…ポジティブで…元気で…ちよつとおバカっぽいけどスツと深くを見通してて…みんなを引っ張ってて…周りを元気にしてくれる…

考えがまとまってくる。あたしの思い描くアライさんは…これだ。

あたしはイメージをまとめるとすかさず絵を描き始めた。この考えが消えないうちに描き上げてしまわねば。

「おつ、考えがまとまったようだね。じゃー、楽しみにしてるよー」

そういうとフェネックちゃんは席を立った。

あたしはあたしの思うアライさんをひたすら描き続けた。これだと思うあたしの思い描くアライさん。それをひたすら描き続けるのだった。

.....

「できた…」

絵が描きあがった。なんだか某聖処女のような構図になってしまったけどこれがあたしの思い描くアライさんだ。持ち前の元気でみんなを元気にして行って、そして導いてくれる。おおよそ間違っていないはずだ。

「おー、できたようだねー。ちよつと見せてもらえるかい？」

「うん！どうぞー！」

「どれどれ…」

じーつとあたしの絵を見る。趣味で描いてるだけのあたしの絵なんて全然うまくないだろうけど、フェネックちゃんのお眼鏡に合う絵は描けているだろうか。

何の反応も示さずただじーつとあたしの絵を見ている。ここまで反応がないと不安になってしまう。せめてうまいへタだけでも言ってくれないとあたしとしても気が気じゃない。

「ふーむ、なるほどねー。これがともえちゃんから見たアライさんなんだねー…」

「フェネックちゃん…どうかな…？」

「いいと思うよー。たしかにアライさんらしいねー。なんだか私が初めてアライさんに会った日のことを思い出すよーだよー」

うんうんと頷いて何やら過去の思い出について懐古しているようだ。フェネックちゃんとアライさんの出会いってどんな感じだったのだろう。まったく性格の異なる二人だけどやっぱアライさんからアクションを起こしたのだろうか。もしかしてあたしとアムちゃんのような出会いだったりするのかな？

「私は目標のために突っ走るハチャメチャなアライさんを見るのが好きで一緒にいるっていう理由があるんだけど、確かにこーゆー風に周りを元気にするのもアライさんの魅力だよー。わかるわかる」

「アライさんの話をしてるのか？」

ひよこつとアライさんが顔を出してきた。

「おー！アライさんを描いたのか！？すごいのだ！上手なのだ！アライさんの絵なのだ！ともえもすごいのだ！アムールトラを救ったり絵を描いたりアライさんに負けないくらいすごいのだ！」

「え、えへへ…そうかな…？」

なんだかすごい喜ばれてしまった。ここまで喜ばれると描いた甲斐があるというものだ。

「ともえー！これ、もらってもいいか!？」

「うん、いいよ。アライさんさえ良かったらどこか適当なところにも飾ってくれたらあたしも嬉しい」

「わかったのだ！部屋の一番目立つところにバッチシ飾ってやるのだ！」

「あはは…一番目立つところはちよつと…」

そんな他愛のない話をフェネックちゃんとアライさんとしていく。気付けば窓からは西日が深く差し込んでいた。もうそろそろ出発しても良いのかもしれない。けど、アムちゃんとかゴマちゃんはすやすやと寝てしまっている。起こすのも悪い気がするしどうしようかな？

そんな平和なことを逡巡しているとイエイヌちゃんがごろんとあたしの前に寝転がってきた。なぜかゲシゲシとあたしの顔を叩いてくる。

ゲシゲシ。

「ど、どうしたの？イエイヌちゃん」

ゲシゲシ。

「絵を描き終えたと思ったらアライさんたちと話して。わたしにもかまってくれないとすねますよ〜」

どうやらかまちよの攻撃だったらしい。イエイヌちゃんらしい攻撃だ。

もちもちとイエイヌちゃんのほっぺを揉みつつどうしようかと悩んでいるとフェネックちゃんが一つの提案をしてきた。

「そろそろ頃合いかもしれないねー。砂嵐もまだ来てないし、出発するなら今が良いかもしれないよー。迷ったらいけないから砂漠地方から出るまで私が案内してあげるねー」

「うん、わかった。ありがとうフェネックちゃん。ほら、アムちゃん、ゴマちゃん、出発するよ」

寝惚け眼をこすりながら二人が身を起こす。見事なまでの大あくびをすると二人は大きく体を伸ばした。あたしもずっと座つてて絵を描いてたから体が固まってしまった。少しストレッチをしたら準備して出発するでしょう。

.....

無限に続く砂漠を歩いていく。いくら日は弱くなったと言えども、依然として西日は容赦なくあたしたちを照らしてくる。無計画に砂漠地方に来たあたたちであつたけど、今はフェネックちゃんという砂漠地方に縄張りを持つ心強い仲間がいる。相変わらずアライさんも一緒にいるけどそれだけ二人の仲が良いということだろうか。二人に

あたしとイエイ又ちゃんを重ねると他人じゃないような気がしてきた。アライさんとフエネックちゃんは二人で一つなんだ。お互いがお互いをカバーし合って楽しく冒険しているんだと思う。

「ともえ？何を見ているのだ？」

「ううん。二人って良いコンビだなーって思ってた」

「へっへーん。当然なのだ！フエネックがいるからこそアライさんも全力で走れるのだからな！それに一人で冒険するよりも二人で冒険する方がずっとずっと楽しいのだ！冒険は楽しくなくて嘘なのだ！」

「なるほどね〜」

フエネックちゃんといえるアライさんはとても楽しそうだ。あたしもイエイ又ちゃんやゴマちゃんたちといるととても楽しいし、とても心強く思う。あたしたち四人でいるからこそできることもある。あたしができないこともイエイ又ちゃんやアムちゃん、ゴマちゃんがやってくれる。そうすることでできる絆もあるんだ。

「なんか遠くに水場みたいなのが見える…」

「ホントだ。オアシスかな？」

「あー、多分蜃気楼だよ。騙されちゃダメだよー」

アムちゃんが遠くに揺れる水場みたいなのを見つけたけど、どうやら幻らしい。ゴマ

ちゃんに上空から確認させてみようかな。

「ゴマちゃんにも見えるかな」

「ああ。水辺みたいなのが見えるぜ」

「ちよつと飛んでみてくれない？本当に蜃気楼なのか確かめたいんだ」

「お、おう。わかつたぜ」

そう言つて三十メートルほど上空まで飛んでいった。うおつと驚きの声をあげるとあたしたちの元へと下りてきた。

「消えた！消えたぜ！あれがシンキローっていうのか!？」

「だね。本当にオアシスだったらそこで一夜明かそうと思つただけだな。残念」

「あはは。人工的に作られたオアシスだったらあるんだけどねー。私もどこにあるか忘れちゃったよー」

気を取り直して再び歩き出す。とりあえずあの蜃気楼に向かって歩いてみよう。迷わないようにフェネックちゃんのアドバイスを聞きながらまっすぐ進んでいく。この先にはジャングル地方がある。明日には砂漠地方を抜けてそこに着けるといいな。

.....

日も沈み辺りはすっかり夜の闇に包まれてしまった。月明りが夜の砂漠を優しく照らしている。昼の砂漠とは全く違う景色が広がっている。まるで別の世界のようだ。

空には無数の星が瞬いている。空にはこんなにもいっぱい星があったんだなあ。普段意識してないだけに驚きだった。すごくきれいだ。ジャパリパークじゃなかったらこんな星空は見れなかっただろう。そして砂漠地方だからこそ見れたものだと思う。

あの星空に走っている光の筋は天の川だろうか。あたしたちの住む地球もこの天の川銀河にある一つの星なのだ。そう考えると宇宙の雄大さを感じるようだった。

「イエイ又ちゃん」

「なんでしようか」

ぎゅー。

「ともえちゃん？」

「えへへ…あつたかい」

「うーん、確かにちよつと冷えるな。昼はあんなに暑かったのに」

「ん…」

ぎゅー。

「へへ…またやってくれるのか？さんきゅーな、アム」

再びお互いがお互いを抱き合つて暖を取る。実際暖かいからしょうがない。イエイ

又ちゃんをぎゅーって抱くとイエイ又ちゃんも抱き返してくれた。あたしはイエイ又ちゃんを抱きしめたまま星空を見上げた。星座：シリウスを基準に星と星をつないでいく。できた：おおいぬ座だ。イエイ又ちゃんの星座だ！

「イエイ又ちゃん、イエイ又ちゃんがいるよ」

「わたしが？どこにですか？」

「ほら、あそこ」

「??」

星空を指さしておおいぬ座があることをイエイ又ちゃんに伝える。イエイ又ちゃんにはさっぱりといった様子だ。そもそもフレレンズに星座という概念はあるのだろうか？いや、一部の文明的なフレレンズを除いてほばないだろう。あたしも星座なんてほとんど興味なかったけど、こうしてジャパリパークに来てからは少しだけ星座のことを勉強した。星座には神話になぞらえたものや動物に関係するものがある。しし座とか雄牛座とかさそり座みたいな十二星座から始まって、こぐま座、ふくろう座、やぎ座というモノまである。昔の人は夜空を見上げていろんな動物や人物たちを想像して遊んでいたのだろう。あたしもそんな酔狂な遊びと思ったりもしたけど、こうして砂漠に寝転んでみんなと夜空を見上げるとなんとなく昔の人の気持ちもわかるような気がする。

相変わらずイエイ又ちゃんはきよとんした顔で星空を見上げてよくわからないと

いった様子だ。

「ほら、あたしが指さしたところにひと際明るい星があるでしょ？あれがイエイヌちゃんの鼻になるんだ。それから少し左上に行ったところに…」

あたしの説明を懸命に聞くイエイヌちゃん。あたしの説明が終わるころにはイエイヌちゃんの顔も明るくなっていった。

「素敵ですね…ヒトってというのはこうして夜空に絵を描いて楽しんでいたんでしょうか」

「かもね…あたしも星座にはまったく興味なかったんだけど、こうしてみんなと楽しむことができるならもうちよつと勉強してもいいかもって思っちゃった」

仰向けに寝転がって星空を見上げながら独り言のように呟いた。あたしがこうして寝転がっている間にもこの無限に広がる星空は動き続けている。すぐくゆっくりだけどう思うとなんだか不思議な感じがした。

「今日もまた、素敵なことを一つ教えてもらいましたね」

「あたしも同じ空でイエイヌちゃんとのつながりを見つけてくることができてとても嬉しいよ」

イエイヌちゃんと一緒に星空を見上げる。イエイヌちゃんは他に星座を見つけてくことはできるのだろうか。

「おおいぬ座の中でも一番明るい星をシリウスっていうんだ。星の中でもドッグスターって呼ばれてたり、太陽の次に明るい星だったりするんだよ。天体でもこれだから、やつぱりイヌっていう生き物はヒトともっともつながりが強い存在って思っちゃうな」

「…ですわね!」

イエイヌちゃんと目配せをするとお互いニツコリと微笑んだ。一緒に同じ空を見上げて互いに思いを強くする。素敵なことだなとあたしは思った。

「よくわかんねーな。私にはただの星がいっぱい空にしか思えねーぜ」
「ヒトというのはよくわからないことをするのが好きっぽいのだ」

「けどこーゆーお遊びのおかげで方角とかそーゆーものを発見できたんだと思うよー」

「よくわからないのだ…」

あたしたちのお話についていけないフレンズが三名：四名？アムちゃんはそもそも関心がなさそうだ。この遊びはあたしとイエイヌちゃんの秘密の遊びということにしておこう。

たくさんの星に囲まれながらあたしたちは眠りにつく。明日目が覚めたら：朝焼けが差し込むころに再びジャングル地方を目指して、新しいフレンズさんに出会おうんだ。どんなフレンズさんがいるのかな。砂漠地方でラビラビに会えなかったのは残念だけ

ど、出会えなかった分、ジャングル地方で素敵な出会いをしていきたいと思った。ジャングル地方にはどんなフレンズさんがいるんだろう。楽しみだなあ。

あたしはそんな期待を胸に眠りについた。次の日もまた新しい冒険が始まる。

Resurrection

E X I 話「鶴・リバイバル」

私は眠れなかった。あの日、あの子は私に何と言ったか。読めてる？ 私は確かに”その本”に書かれていた”文字”を読んでた。私は”それ”を”文字”と認識して”読んで”いた。けど……私は……

あの時、私は何を読んでた……？ 思い出せない……あの時読んでいた文字は？ 何と書かれていた？ 思い出そうとするがどうしても思い出せない。確かに何か書かれていたはずだ。その前に読んだ本の内容やどういう記述がされていたかはつきり思い出せる。しかし、ネクロノミコンに書かれていた文字というものが全然思い出せない。あの子に来る前にも少しだけ読んで、あの子が来た時にもう一度読んだ。二回も読んだはずなのに全然思い出せないのだ。

……もう一度読みたい。一体あの本には何が書かれてあったのか、もう一度この目で確かめたい。いったい私は何を読んでた？

しかし、その本はともえが燃やしてしまった。確かめる手段がないのだ。もう諦めるしかないのか。非常に残念だ。

ふと横を見る。ベッドの横にあるチェストに本が置かれている。ロッジに本を持ち込んだ記憶はないのだが……私はその本にひどい魅力を感じていた。体を起こしてその本を手にとってみる。……忘れるはずがない。ヒトのカワで装丁された忌々しい魔導書、ネクロノミコンがそこにあった。あの時ともえが燃やしたはずなのにどういうことだろうか。

恐る恐るその本を手にとってページをめくってみる。

いったい何が書かれてあるのだ……？ 全く読めない……あの時いったい私は何を讀んでいたのだ？ 確かに私は“それ”を“文字”として讀んでいた。しかし、今私が讀んでいるこの本には文字が書かれていない。文字として認識できない。動悸がする。息が荒くなってくる。酷く恐ろしい気持ちになってきた。

気持ちを落ち着かせてページを進めていく。あの時私は何を讀んでいたか確かめなくてはならない。確かめなくては気が済まない。

ページを進めていく。そのページにはあの鶴の姿があった。相変わらず何が書いてあるかわからない。

——でも……あの時……私は……この文字を……

「ふんぐるい　むぐるうなふ　くとうるう　るるいえ　うがふなぐる　ふたぐん」

言葉が漏れた。そうだ。あの時の私はこの字を讀んでその言葉を口にしたんだ。

ともえが言った読んでいるのかという問いの意味がようやく分かった。私は確かに読んでいた。この意味が分からない線の羅列を私は読んでいたんだ。酷く恐ろしい気持ちになつてきた。

「死せるクトウル、ルルイエの館にて、夢見るままに待ちいたり」

ドクンと何かが跳ねた。体が震える。手から本がドサツと零れ落ちた。途端、本から黒い煙のようなものが舞い上がってきた。

「あ……あ……」

なにかとんでもないことをしたようなことだけはわかる。煙の合間から少女の姿が見える。

猿の頭、狸の体、虎の手足、蛇の尻尾……鶴だ。鶴のフレンズがそこにいた。

「ふ……ふ……あはははは!! 憐れなり! よくぞ私を呼び覚ましてくれた! まさに期待通りだ! ふふふ……大概の者はこの本を読めないのだが、まれにお前のように読めるものが現れる……お前に目を付けて正解だったぞ。憐れにもこの私を呼び覚ましてくれたのだからな! あつはははは!」

高らかに笑うこの鶴のフレンズ。よくわからないが、とんでもなく邪悪な存在ということはその言動からわかる。わたしはとんでもないものを召喚してしまったようだ。

「お前は……何者なんだ……いったい何が目的だ……!」

「うん？お前にわたしはどう映っている？」

「私には…鶴だ。カメラのような合成獣に見える」

「そうかそうか。ならばそれで良い。真の姿を見られるのは私にとっては屈辱だから」

「……………」

真の姿…あの本に書かれていた少女の姿だろうか…？

「ふん、そうか…ならばあの本に描かれていたあの少女の姿がお前の真の姿というわけかい。いいさ、その姿…必ず暴いて見せる…！」

「……………余計なところまで見よつてからに…ふん！恐怖の心がある限り私の真の姿は見破られん。あの方を目覚めのためにもこの島を…パークを恐怖で埋め尽くす！未知なる恐怖に怯えて死ね!!」

高笑いをあげながら鶴は飛び去って行った。あの方の目覚め…？

” 死せるクトウルー、ルルイエの館にて、夢見るままに待ちいたり”

まさか…あのクトウルーというものを呼び覚ますつもりなのか？クトウルーなんてけものは聞いたことがない。…パークを恐怖で埋め尽くす。そうすることで目覚めるとあいつは言っていた。きつとろくでもないものに違いない。何が何でもあいつの計画を阻止してみせる…！

.....

「又エ…ですか…」

この危機を伝えるために私は博士たちの元へ向かった。この島の長であるこの二人であれば今回のパークの危機も広めてくれるはずだ。けどまずは私の話を信じてくれるかだ。

「新種のフレンズでしょうか、博士。トラツグミのフレンズなのです」

「違う！妖怪のフレンズだ！ヤマタノオロチのような…神獣に類する獣だ」

「ああ、鳴き声が気味悪いからとヒトに倒されたあの鶴ですか。その鶴がフレンズ化したのですか？」

信じてくれているのだろうか…フレンズ化したところではない。アレは確実に悪意を持って動いている。どうにかして事の重大さを伝えなければならぬ。

「したのですかではないんだ！そいつがパークを恐怖で埋め尽くすと言っているんだ！クトウルーというものを復活させようとしているんだよ！」

「なんと」

「知っているのですか？博士」

「いいえ。くとうるーなんてけものは聞いたことがないのです。タイリクオオカミこそ、くとうるーというけものを知っているのですか？」

「うっ…」

博士たちすら知らないけもの…博士たちが知らないものを私が知っているはずがない。博士たちなら何か知っているかとも思ったのだけど、あまり良い答えはもらえなかった。

「いや…私もどういいうけものかは知らない…ただ、鶴の口ぶりからするにロクでもないけものであることだけは確かだ。鶴の計画を阻止するためにも、目覚めを阻止しなくてはいけないと思う」

「ですね。我々の方でも調べておくのです。助手はパークにくとうるーの復活を企む鶴というフレンズがいるということを知らせるのです」

「わかりました、博士」

助手が外へ飛び出して行った。なんとかこの危機がパーク中に広まってくれらることを祈る。

…私にもできることを探そう。もとはといえば私が原因で起こったことだ。私がどうにかしなくては…

「どこへ行くのですか」

「私にできることを探す。この騒動の原因は私だ。私が起こした始末は私がつけたい」
「…無茶をするのではないですよ。例えお前が原因だったとしても、困難は群れで分け合うのです。パークの危機は皆で救うのですよ。何も一人で背負い込む必要はないのです」

「…すまない、博士」

「…僕にも手伝えることがあつたら遠慮なく言つてほしい。僕もサーバルちゃんと一緒に可能な限り手伝いたい。僕はパークで生まれたときから、キョウシュウエリアを出るまで、いろんなフレンズさんに助けられてきた。今度は、僕の方から恩返しをする番だ。僕もオオカミさんやパークのみんなを助けたいって思うんだ」

「そうだよ！タイリクオオカミ！一人じゃないんだから！くじけそうなときや泣きそうなときは遠慮なく頼つてもいいんだからね！かばんちゃんもすつごく強いんだし、私にできることがあつたら全力で手伝つてあげるよ！」

「…うん。ありがとう」

私たちの長い戦いが始まる。パークを脅かす巨悪、鶴。永い眠りから覚めるであろう未知なるけもの、クトウル。これらの悪行を決して許すわけにはいかない。私はフレンズのため、パークのため、自分の犯した罪のため、皆の笑い合う平和な美しい世界のため、そして鶴を倒すために、パークを救う旅に出る。

Ex 2話「始まり」

「ここ最近セルリアンが奇妙な動きを見せているのです」

「奇妙な動きって？」

博士たちが昨今の鵪騷動から鵪の行動を調べているらしく、その過程でセルリアンの行動が変化しているということが分かったとのことだった。

「詳細は助手が引き続き調べているのですが、フレレンズを襲うことがなくなった代わりに群れを作ってあちこち移動してまわっているそうなのです」

「へえ…」

「かばんちゃんとゴコクエリアにいたときも、よく三匹くらいで集まっているのを見てたけどそれとは違うの？」

「違うのです。単独で行動するセルリアンがほとんど見られなくなりました。数の有利がある分フレレンズを襲いやすくなったと思うのですが、フレレンズを襲うという報告もなくなりましたのです」

「それは興味深いね…」

セルリアンも鵪を探しているのだろうか。セルリアンはモノや動物の持つ輝きを

奪ってその情報をコピーするのだという。鶴という新種のけもの…あの子の情報を奪おうとしているのだろうか。僕にセルリアンの気持ちはわからないけど、いずれにせよ鶴を追い詰められるならそれを利用しない手立てはない。セルリアンでもなんでも利用できるものは利用しなければ。

………

バスをセントラルに向けて走らせていく。タイリクオオカミさんが事件の解決に向けて頑張っているのに、僕だけのうのとゆっくりしているわけにはいかなかった。

僕たちが目指したところは管理施設、パーク・セントラルにある情報管理施設だ。欲を言えば中央管理室、トップシークレットが隠されているような施設が良いんだけど、この緊急の際にわがままを言うわけにはいかなかった。

「ココダヨ」

「ありがとう、ラッキーさん」

ガチャガチャ。

「開かない…」

押ししても引いても開かない。それ以前にひどく渋い感じがする。鍵がかかっている

のかドアノブもうまく回らない。それに何だか錆びびついているのかガリガリと不快な感触が手に伝わってくるようだ。

「サーバルちゃん、どこか適当なところから入って中から開けてくれないかな」

「うん！」

サーバルちゃんはぴよんと跳ぶと割れた窓からひよいと中に入ってしまった。しばらくすると僕を呼ぶ声が扉の向こうから聞こえてきた。

「かばんちゃん！ どうすればいいの？」

「ドアノブに変なぼっちみたいなのがないかな？ もしあったらそれをつまんで回してほしいんだ」

「これかなあ？」

ガリツと不快な音と共に鍵が外された。やつぱり立て付けが悪くなってるせいかわどく開けにくかった。中はひどく荒れていた。なんだか争ったような形跡もある。しかし、どれも埃にまみれていて、長い間誰も中に入った様子は見られなかった。

サーバルちゃんと共に上へと上がっていく。いくつか部屋を見て回った後、情報センターと思われる部屋を見つけた。

幸いにも電気は通っているようだった。ラッキーさんたちは電気の維持もしているのだろうか。いや、今はそんなことを考えている暇はない。鶴や彼女の目的であるク

トウルーの復活について調べなくては。

「うーん…：サーバーに入れない…：ラツキーさん、セキュリティの解除ってできる？」

「マカセテ」

チチチチとノイズみたいな音を出している。ディスプレイにはなにやら文字がいっぱい流れていつている。どうやらラツキーさんがハッキングを試みているらしかった。これは少し時間がかかりそうだ。適当な容器を用意してラツキーさんのバンドを括り付けると僕は席を立った。

「ごめん、ラツキーさん。少し頼むね」

「マカセテ」

サーバルちゃんが窓から外を見ている。僕も窓に向かうとサーバルちゃんと一緒に外を覗いた。

「何見てるの？」

「セルリアン…：博士の言つてた通りセルリアンがいっぱい…：どれも群れで行動しているよ」

「本当だね…：…：サーバーに入れたら過去の文献を見てみよう。セルリアンに関することも何かわかるかもしれない。もし中に入ってこられたら困るから、サーバルちゃんには外の警戒をしてもらってもいいかな」

「うん！任せて！」

そういうとサーバルちゃんは部屋から出て行った。ラッキーさんもハッキングが完了したと僕に知らせてくれた。バンドを右腕に着けなおすと目に入る資料に目を通してみた。セルリアンのことに書かれている資料もいくつかあるけど、めぼしいものはない。つからなかつた。フレンズから輝きを奪ったセルリアンが恐竜のような見た目になったり、自我に近いものを持つことがあつたというのは興味深かつたけど、今必要な情報ではなかつた。

「これは…？」

「かばんちゃん！」

気になる情報を見つけたところでサーバルちゃんが部屋の外から声をかけてきた。

「ツチノコが来たよ！どうしよう？」

「ツチノコさんが？いいよ。通してあげて」

「うん！ツチノコー！こっちだよー！」

カランコロンと下駄を鳴らす音が聞こえてくる。どうやら本当にツチノコさんが来たようだ。やがてその懐かしい姿が僕の目に入ってきた。

「おー、本当に帰って来てたか！久しぶりだな！」

「うん。久しぶりだね、ツチノコさん。元気にしてたかい？」

「オレは変わらずヒトが残した史跡を巡ってぶらぶらしてるぞ。しかしお前も随分変わったな！相変わらずヒトというのは面白いな〜！」

カランコロンと音を立ててびよんぴよん跳ねるようにしながら僕の所へ寄ってきた。「何を見ているんだ？」

「パークの過去の記録を見ているんだ。ちょうど今面白いものを見つけたんだけど……」
「お？どれどれ……」

黒いセルリアンが過去に出現したという記録だ。その記録によれば黒いセルリアンは非常に統率が取れていて通常のセルリアンより強力だったということだった。また、フレンズさんが持っている武器を取り込んで自分の体の一部にしたとも書いてある。

「ほうほう……黒いセルリアン……あのデカブツにそんなことができるっていうのか？」

「わからない……でも、可能性は十分にある。今回のセルリアンは黒くはないけど群れで行動しているし、似たような状況下にあるのかもしれない」

「ふーむ……これによれば群れの統率が取れてそれぞれが役割を果たしながらフレンズを襲ってみたいだが、今回はフレンズを襲ってないみたいだし……わからないな」

過去の出来事から今回の出来事について憶測を立ててみる。当時と似ているようでどうも違うというのがお互いが導き出した答えだった。フレンズを襲うはずのセルリアンが襲ってこないというのが一番の謎だ。セルリアンにとってフレンズの輝きより

大事なものでもあるのだろうか。

「…とりあえず他のものでも調べよう」

ページを閉じて他の資料を漁ってみる。鶴が言っていたクトウルーというものについて探してみる。

「うーん…どれを見ればいいんだろう…。…そういえばツチノコさん、クトウルーってきいたことある?」

「あ?なんだそりゃ」

「うーん…知らないかあ」

博士たちはおろかツチノコさんすら知らないという。他にもギンギツネさんの温泉で会ったオイナリサマにも聞いてみたい気もするけど今はどこにいるか知らないし…

ふと一つの閃きが頭をよぎった。

「そういえばラツキーさん、オイナリサマについて教えてくれるかな?」

「オイナリサマハ フルクハ ホウジヨウノ カミサマトシテ シンコウサレテイタ

シユゴケモノダネ。 オイナリサマハ ヒトツノ カミサマヲ サスモノデハ ナク

テ フクスウノ カミサマヲサス コトバナシタヨ」

「なるほど…じゃあ、鶴について教えてもらえるかな」

「又エハ トラツグミノ ベツシヨウトシテ シラレテイルヨ。 ヨルニ アヤシイコ

エデ ナク トリヲ ヌエト イウンダネ。トラツグミハ ソレノ ダイヒヨウテ
 キナ トリナンダヨ」

「うんうん…じゃあ、クトウルーについてはどうかかな？」

「クトウルー… ケンサクチュウ。ケンサクチュウ。ボクノ データニハ ソンザイシ
 ナイヨ。 オソラク パークニ ソンザイシナイ ケモノ ナノカモネ」

「うーん、そうかあ…ごめんね。ありがとう、ラッキーさん」

ダメだった。ラッキーさんだったら何か知ってるかもと思っただけどラッキーさんも
 知らないようだった。

引き続きパソコンで情報を漁っていく。どうやら情報管理室ではすべてのエリアの
 図書館に所蔵されている本を調べられるようだ。鶴は妖怪だ。どうぶつ図鑑で調べら
 れるような獣ではない。加えて鶴が口にしていたというクトウルーという名前…間違
 いなく海外の獣…妖怪だろう。調べるとしたら…

「聖書…」

新しくタブを開き閲覧モードにして本を読み進んでいく。独特な表現や注釈の多さ
 に早速出鼻をくじかれてしまう。

「こ、これは骨が折れるぞう…」

「……ま、オレはオレで調べておくからがんばんな」

「う、うん……ありがとう……」

……

——いつの間にか寝てしまっていたようだ。時計を見ると時刻は12時を回っていた。適当に流し読みをしていたがクトウルーに関する記述はなかった。内容は頭に入ってこなかった。しかし、読むのにひどく疲れてしまった。

ふと傍らを見るとコップに入った水とジャパリまんが置かれていた。サーバルちゃんが気を聞かせて置いてくれたのだろうか。

ジャパリまんを口に運ぶ。一人で食べる食事はひどく寂しい感じがする。思えばいつも僕のそばにはサーバルちゃんがついてたつ。ゴクエリアでは無意識のうちにひどいことをしてきたんだ。これからはサーバルちゃんともいっぱい遊んであげなくちゃいけないな……。そういえばサーバルちゃんはどこに行っただろう？それに変な笛のような音もする。

「何の音だろう……」

ぼつりと呟いた。音は外から聞こえてくる。ふと下を見るとサーバルちゃんがぼつんと一人で立っていた。あちこちに耳を動かして音の正体を探っているようだ。

「トラツグミノ ナキゴエダネ。ケド…」

「けど…?」

「キヲツケテ。ヌエカモ シレナイヨ」

「…っ!!」

トラツグミの鳴き声…鶴の鳴き声だ!

「サーバルちゃん!」

「!!」

「急いで上がってきて!近くに鶴がいる!」

「え!?う、うん!」

近くにいる…!デーンアックスを構える手に力が入る。まだ見ぬ未知なる敵への恐怖は計り知れない。息が荒くなってくる。額からは脂汗がにじみ出してくる。

「かばんちゃん!」

サーバルちゃんが部屋に飛び込んできた。僕が寝ている間にもあの鳴き声に対して一人で警戒に当たっていたのだろう。なんと労えばいいのか…

「ごめんね、僕が一人で寝ている間にも一人で鶴と相見合っていたんでしよう?怖かったよね…」

「え?あの音って鶴の鳴き声だったの!」

「サ、サーバルちゃん…」

鶴の鳴き声と気付いてなかったようだ。そういえば僕も知らなかったつけ…ラツキーさんに教えてもらって初めて鶴の鳴き声と分かったんだ。

『ふふふふ…はははははははは！』

「っ!？」

不意に笑い声が聞こえてきた。音の所在がわからない。どこから聞こえているのか。

「サーバルちゃん、気を付けて…鶴かもしれない…!」

「う、うん!」

まるで室内に反響しているかのようだ。全方向から”そいつ”の笑い声が聞こえてくる。

『さあ…沈め!』

不意に部屋に影が現れた。まるで炎のように踊るそれはやがて獣の形をとり始め、僕たちに襲い掛かってきた。あつけに取られていた僕は何もできずにいた。

「あ…っ!」

「みやああああああ!!」

サーバルちゃんが”獣”の側頭部を攻撃して吹き飛ばした。寸でのところで僕は助かったのだ。

「ご、ごめんサーバルちゃん…油断した…」

「だいじょぶだよ！かばんちゃんのピンチは私に任せて！」

「…うん！」

気を取り直して”獣”を睨む。猿の頭、狸の体、虎の足、蛇の尻尾…あれが鶴…

「くっ…ダア!!」

鶴の元へ駆け寄り脳天を叩き割るようにアックスを振り下ろす。デスクやパソコンのせいで自由に身動きが取れない。それはサーバルちゃんも同じようだった。

「うみやあーみやああああああ!!」

サーバルちゃんがデスクから飛ぶたびにパソコンやテキストが床に散乱していく。これでは僕もどんどん動きにくくなる。どうにかして開けた場所…外に出なくては…

対する鶴はそんなものを物ともせず突撃してきて僕たちに攻撃してくる。虎の腕はデスクを薙ぎ払い、おぞまし気な猿の頭は僕の体を食いちぎろうとしてくる。

「このままじゃいざれ負けてしまう…どうすれば…！」

そのときだった。

「かばんちゃん！セルリアンが！」

「え？」

三匹のセルリアンが部屋に入ってきた。鶴を取り囲むように戦いに乱入してきたの

だ。

「こ、こんなときに……!」

しかし様子がおかしい。その目は鶴に向けられていた。僕たちの中には目もくれずに鶴に飛びかかって攻撃している。

「かばんちゃん!こつち!」

「う、うん!」

僕を窓の方まで誘導すると僕を抱きかかえて外に飛び降りた。

「ありがとう、サーバルちゃん。あのままじゃどうなるかと思ったよ……」

「私も……狭くて全然思うように動けないもん」

「WOOOOOOOOOOOAAA AAA AUUWWWW!!!」

不気味な咆哮が聞こえてきた。あの鶴の咆哮だ。あの細い笛のような鳴き声からは想像もできないほどの野太い咆哮だ。

瞬間、僕たちのいた部屋の壁が吹き飛ばされ、ズンという衝撃と共に鶴の体が落ちてきた。セルリアンたちを相手に意外と苦戦していたようだった。

一匹のセルリアンが鶴の体に覆い被さった。二匹目、三匹目と覆い被さり、やがて鶴の体を呑み込んでしまった。呻き声をあげ、バタバタと抵抗しているようだが、やがておとなしくなるとセルリアンに完全に呑まれてしまった。

「セルリアンに食べられちゃった…」

「……」

セルリアンの体の変形し始める。色こそセルリアンの色と変わらないものの、変形したその姿は鶴そっくりだった。猿の頭にあるセルリアンの単眼が僕たちを見下ろす。

「っ……」

「さ、させないんだから！」

鶴の形をしたセルリアンは僕たちを一瞥するとどこかへ行つてしまった。僕たちは二人その場に取り残されてしまった。

「た、助かったのかな……」

「ど、どうなんだろう……」

僕たちは訳も分からずその場に立ちすくんでいた。

建物を見遣ると見事に僕たちの使っていた情報管理室が破壊されていた。アレではもう調べ物もできないだろう。

ふと後ろを振り向くと一人のフレンズさんが立っていた。虎の手足に狸の体、蛇の尻尾を持っている。あれは…鶴のフレンズだろうか。

「キミは……」

「ふん、運のよい奴め…今回は見逃してやる。だが、調子に乗るでないぞ。未知への恐怖

を忘れた者は必ず死ぬ。それだけはゆめ忘れるな」

そう言うとそのフレンズさんは飛び去って行った。

僕たちが見た妖怪・鶴、鶴をコピーしたセルリアン、鶴のフレンズ：僕たちは何の手掛かりをつかむことはできなかつたけど、確実に一步前へ進むことはできた。タイリクオオカミさんやパークのためにも、もっと頑張らなくては。事件解決にはまだほど遠い。まだ戦いは始まったばかりだ。

E X 3 話 「キルゾーン」

「ハア……ハア……」

砂漠地方を抜けた先のジャングル地方、あたしたちは必死に化け物から逃げていた。猿の頭と虎の手足、狸の体と蛇の尻尾……恐らくタイリクオオカミさんが語っていたあの鶴なのだろう。しかし、どうしてあの鶴が三匹も四匹も、いや、五匹、十匹もいるのだろうか。とにかくあたしたちは五メートルはあろうかというたくさんの化け物から逃げていた。

「G W H O O O O O O O O O O A A A H H H W W W !!!」

化け物の咆哮が聞こえる。立ち止まったら死ぬ。今聞こえた咆哮はあたしたちのいるところからそう近くはないけど、周りにはたくさんの化け物がうじゃうじゃいる。あたしたちがガムシヤラに走っている方向に化け物がないことを祈るばかりだ。

「B R R R R R R R R R R R A A A !」

「キャアツ!!?」

右の茂みから化け物が飛びかかってきた。頭の中が高速で回転する。あの歯で食い散らされて死ぬだろう。あの爪で、あの前足で薙ぎ払われて死ぬだろう。あの巨体で押

し潰されて死ぬだろう。絶体絶命だ。

「クッ、アッ、アッ、アッ、アッ、アッ!!」

アムちゃんが横から化け物を突き飛ばしてくれた。アムちゃんの爪が化け物の首深くに刺さっている。

「グウ……ガアアアアアアッ!!」

化け物の太い首が嫌な音を立てながら引きちぎられた。化け物が激しく体を痙攣させながら大量の血を噴いている。アムちゃんも返り血を浴びて全身が赤く濡れている。興奮しているのか体全体を使つて激しく呼吸をしている。

「化け物はあたしがやる! 早く行けッ!!」

「ッ……!!」

アムちゃんの怒号に従つてあたしたちは再び走り出した。あたしの顔は死に対する恐怖から汗や涙や鼻水やらのせいでぐちゃぐちゃになっていた。

「ハア……! ツアア……! グス……」

汗と涙で視界が歪む。心臓は激しく脈打っている。恐怖とパニックのせいでうまく呼吸ができない。不規則な激しい呼吸のせいで喉や肺が裂けるように痛む。デタラメに走っているおかげで足がもつれて転びそうだ。けど転んだら死んでしまう。立ち止まったら殺される。死にたくない……その一心だけであたしは走り続けた。

「前にバケモノがいる！左に向かって走れエ!!」

ロードランナーちゃんが上空から前に化け物がいることを知らせてくれた。頭がパニックに陥ってどうすればいいかわからなくなっている。もはや右と左の判別もつかなくなった。

「こつちです!」

イエイヌちゃんがあたしの手を引いて走りだした。足がガタガタ震えて何度も転びそうになった。遠くで化け物の咆哮が聞こえる。この場に不釣り合いなヒョーという鳴き声も聞こえる。四方八方とあちこちから化け物の鳴く声が聞こえる。四面楚歌という言葉がこれ以上に似合わない状況はそうそうないだろう。あたしたちは完全に包囲されていた。

「走り続ける!少し先にバケモノと戦っているフレンズたちがいる!そこまで走るんだ!」

ロードランナーちゃんが先にフレンズがいることを伝えてきた。もう何でも良い。とにかくフレンズさんでもなんでも安心できる場所が欲しかった。あたしたちはそこへ向かってガムシヤラに走った。

しばらくイエイヌちゃんに手を引かれて走っていると五人のフレンズさんの姿が見えた。正面から鶴と戦っていて互角に渡り合っているようだ。あたしはそのフレンズ

さんに向かって助けを求めた。

「ハアツ……！ハアツ……！お、お……！……い！」

「っ!? な、なんや!？」

「っ……！こんなときに……！」

「た、たすけっ……！」

べしやつ！

足がもつれてこけてしまった。すると、狙ったように後ろから化け物が襲ってきた。

「っ……!!」

今度こそダメだと思った。しかし、化け物は身をねじると軌道がそれてあたしの横へドスンと倒れこんできた。よく見ると化け物の頭にアムちゃんがしがみついている。

「G W O O O O O O O O O O g h h h h h h h h h h!! G W O O O O O O O O g h h h h h h h h h h!!
!!」

「あたしの仲間に……手を出すなアツ!!」

ゴキツという音と共に化け物の首が180度捻じ曲がった。そのまま化け物はピクピクと痙攣したまま動かなくなった。

血濡れのアムちゃんの姿を認めると化け物たちは退いていった。あの化け物たちも勝てないと踏んだ相手には立ち向かわないらしい。

「ハッ……ハッ……」

あたしは座り込むと自分を抱きしめたままうずくまった。体はガタガタと震え恐怖からカチカチと歯が鳴ってしまふ。体がしびれて頭が痛くなってきた。意識が朦朧とするようだ。眩暈がする。あたしは恐怖と疲れからそのまま倒れてしまった。

……

「……………」

「……………」

誰かが話す声がある。この声は……イエイヌちゃんど……誰だろう。体を起こして状況を確認してみる。ここは……家の中……？

「いたっ……」

全身のあらゆる場所が痛む。全身を強く打ったかのような痛みだ。足にはたくさん
の切り傷がある。走っているうちに木の枝や細かな石で切ったり擦ったりしたの
う。

「うう……頭も痛い……」

過呼吸だろうか。気を失う前に過剰なまでに息切れを起こしてしまったことを思い

出す。恐怖でパニックになってそのまま気を失ったのだった。：あたしをこの家に入れてくれたのは誰なのだろうか。イエイヌちゃんかな？

「はあ…はあ…」

再びあの恐怖がよみがえる。あの化け物の顔がまぶたに焼き付いたようだった。巨大な猿の顔。あれほど悪意に満ちた恐ろしい顔をあたしは見たことがない。誰が何の目的で作ったのか、何の為に生まれたのか皆目見当がつかない。再び体が震えてくる。あたしは恐怖で泣きそうになった。

「おっ、目が覚めたようだな」

一人のフレンズさんがあたしに声をかけてきた。黒いニット帽と白いタンクトップが特徴のフレンズさんだ。肌は浅黒いしなんだかちよつとフレンズさん離れしているような気がする。そのフレンズフレンズさんはあたしの状態を確認した後ドカツとあたしの前に胡坐をかいて座った。

「初めましてだな。私はゴリラだ。イリエワニやヒョウたちを束ねていてボスと呼ばれている」

「ど、どうも、ゴリラさん。あたしはともえ。ゴリラさんがあたしを運んでくれたの？」
「いいや、ここへ運んだのはイエイヌだ。後で礼を言っておきな。しかし、お前の連れのアムールトラはすごいな。全身血まみれで何事かと思つたぞ。アレ全部が鶴の返り血

と聞いたときはびっくりしたものだ。しかも聞けば噂の元ビーストのフレンズらしいじゃないか。とても頼もしい味方を引き連れているな」

はっはっはつと笑うゴリラと名乗るフレンズさん。こんな危機的状況だというのに余裕を持っているようだ。心なしかあたしも余裕が出てきて落ち着いてきた。

「ゴリラさんもあの化け物と戦ってたの？」

「鶴のことか？ ああ、いくら撃退してもひつきりなしに襲つてきやがる」

ゴリラさんはと話しているうちに少しずつあたしにも整理がついてきた。緊張が解けて一気に脱力してしまう。そういえばあの化け物たちはどうしたんだろう？

「そういえばゴリラさん、あの化け物たちはどうしたの？ なんだか襲つてこないみたいだけど…」

「むう。それなんだが、お前のアムールトラを見てからは奴ら一度退いたみたいなんだ。一応私の部下たちが警戒に当たっている。ロードランナーといったか？ お前の連れの鳥のフレンズも空から鶴を見張ってくれているぞ」

「ゴマちゃんが…できるだけ休ませてあげたいけど…」

「私もそうさせたいのが山々だが、空からの目というのは非常に大事だ。申し訳ないがしばらく哨戒をさせるぞ」

「う、うん」

ゴマちゃんには申し訳ないけどしばらく空の目として監視させておこう。あたしも鶴たちに散々追いかけて心身ともに摩耗しきっている。しばらく安心できる場所が欲しかった。

「な、なんだあれは!?!」

突然イリエワニちゃんの驚く声が聞こえてきた。

「こ、こつちに来る!?!来るなあ!!」

瞬間、壁が破壊される音と共にイリエワニさんに襲い掛かる鶴の姿が現れた。イリエワニちゃんの頭に鶴の口が迫っていく。壁際に追いやられて寸でのところで抵抗しているけどこのままでは鶴に食べられてしまう。どうにかしなくちゃ…!

「こつちだ!」

ゴリラさんに手を引かれて二階へと上がっていく。

「ゴリラさん!イリエワニちゃんは!?!」

「アイツはあんなものでくたばるタマじやない!それより自分の心配をしろ!」

二階に上がるとヒョウちゃんとクロヒョウちゃんが鶴と戦っていた。知らない間にこの家は鶴に占拠されていたのだ。

「ヒョウ!クロヒョウ!」

「ギイイ…!こいつら、しつこすぎひんか!?!」

「強いだけならまだええんやけど、後から二匹三匹湧いてきよるわ！」

お互いが家に湧く鶴をそれぞれ相手にしていた。丸太とも思えるような太い前足その華奢な体で受け止めている。並の人間であれば真つ二つにされているであろう攻撃を受け止めて的確に反撃を加えている彼女たちはさすがフレンズさんといったころだ。

「姉ちゃん！」

クロヒヨウちゃんが鶴の喉を裂き、動きを封じたところでヒヨウちゃんの助太刀に入った。ゴリラさんはそれを認めると再びあたしを導き始めた。

「こつちだ！窓から飛び降りるぞ！」

「ええ!？」

ゴリラさんは窓に飛びかかるとそのまま窓ガラスを割りながら外へ飛び降りた。

「ともえ！早くするんだ！さもなくて死ぬぞ！」

「はよいきーや！ここはウチらに任せればええねん！」

「うう……」

こうなつたらヤケだ！ケガも骨折も死ぬよりかはマシだ！

「っ……！」

意を決するとそのままあたしは窓の外へ向かってジャンプした。体が宙に浮く。次

の瞬間、誰かに抱きかかえられ、柔らかい衝撃と共に地面に降りたような感触を受けた。見てみるとイエイヌちゃんがあたしを抱きかかえているようだった。

「イエイヌちゃん……！」

「大丈夫ですよ、ともえちゃん。さあ、行きましょう！」

イエイヌちゃんとゴリラさんは互いに目配せをするとジャングルの奥の方へ向かって走り出した。

周囲からただならぬ気配を感じる。恐らく鶴が再び襲撃して来たのだろう。あのヒョーという独特の鳴き声も聞こえる。あの細い鳴き声はあたしの精神をどんどん蝕んでいく。一つの鳴き声だけでも正気でいられなくなるのにこうも輪唱されると発狂しそうになる。あの悪意に満ちた異形のバケモノはあたしの精神を食べてあの鳴き声を発しているのだ。あたしの正気度：精神はもう限界に近かった。

耳を塞いで情報を遮断する。もう耐えられなかった。恐怖の閾値が限界を突破する。これ以上は正気を保てない。

「嫌だ嫌だ嫌だ死にたくない死にたくない……」

胃の中の物が込み上げてくる。

「ツ……!!」

「ともえちゃん!?!」

とつさに暴れてしまいあたしは地面に転がり落ちてしまった。

「オエエエエエエ!!!」

胃の中の物が逆流する。もうこれ以上の恐怖は耐えられなかった。精神が崩壊してしまふ。周りから嘲笑の聲が聞こえてくるようだ。鶴があたしの怯える姿を見て嗤っているんだ。鶴の悪意と狂気の渦にあたしの精神は呑み込まれていく。

もはや何の音も聞こえなかった。無数の情報が洪水のように頭の中に流れ込んでくる。狂気とも狂乱ともいえるそれは外部のあらゆる情報を遮るようだった。

「おいーともえー」

不意にあたしの名を呼ぶ声が聞こえた。見るとメガネカイマンさんを背負って走るゴマちゃんの姿があった。

「しっかりしろ！お前の気持ちはよくわかるけど、お前がしっかりしてくれなきゃ私たちは何にもできねえんだ！ゴリラやイエイヌみたいな頼れる存在がいるだろ！あんなバケモノ怖がんな！あんなのに怯えていればアイツらの思うつぼだ！」

ハツとした。恐怖：タイリクオオカミさんは何と言っていたか。鶴はどういう獣と言っていた？ 恐怖を喰らい無限にその姿を変える獣：あいつの原動力は何か：あいつが求めているものは何か：

あたしは理解した。あたしは腹を決めると立ち上がった。まだ少し恐怖の心が残っ

ていたけどそんなことは気にならなかった。口に着いた吐しゃ物を拭うとまっすぐと前を見据えた。もうあんなバケモノを怖がる必要はない。あいつの真の目的はあたしやフレンズさんたちの心に恐怖を植え付けること…そしてそれを喰らって自らを強くすることだ。フレンズさんが生きようが死のうが関係ない。

あたしは負けない…もう恐怖になんて屈しない…!

「ともえちゃん…?」

「イエイヌちゃん! みんな! 一気にここを突破するよ! イリエワニちゃんたちにはもう少しだけあそこで頑張ってもらうことになるけど…ゴリラさん、イリエワニちゃんたちは鶴たちにやられるようなタマじゃないんだよね?」

「あ、ああ…」

「じゃあ、大丈夫だね…鶴はあたしたちの持つ恐怖の心を糧にして強くなる獣…ゴマちゃんの言う通り、あんなのに怖がつてちやアイツの思うつぼだよ! あたしはもう怖がらない! あんなバケモノなんか屈しない! みんながいればあんなバケモノなんてイチコロなんだよ!」

自分に言い聞かせるようにそう口にして自らを奮い立たせた。あたしは走り出した。ガムシヤラに走るんじゃない。鶴を倒す…一つの明確な目標を胸に立てて走り出したのだ。少しの恐怖と大きな勇気があたしの中に湧いてくる。後ろからはイエイヌちゃ

んたちが付いてきてくれている。あたしにはそれがとても頼もしく思えた。今のあたしたちならだれにも負けられない……負けるはずがない！」

「GWAAAAAAAAAAAAAAAAOOOOAAAAAAAAHHHHHH!!!」

恐ろしい咆哮と共に鶴が前から飛び出してきた。けどその脅しも今のあたしには通用しない！

「イエイ又ちゃん！」

「はい！」

イエイ又ちゃんの爪が鶴の顔に四つの傷をつけた。左目を潰された鶴が苦しそうな叫び声をあげる。しかし、それでも構わずに大口を開けてあたしたちに突進してきた。

ガシツ！

メガネカイマンちゃんがそれを防ぐ。少し力を緩めれば上半身ごとパツクリ持つていかれてしまうだろう。……ダメだ。そんなことを考えては鶴の思うつぼになってしまう。あたしには信じるしかない。メガネカイマンちゃんなら鶴の攻撃なんてどうとでもないはずだ！

「大口勝負で私に勝てると思わないことよ！」

ガチンと勢いよく鶴の口が閉じられる。大きな隙を見せた鶴の顔面にメガネカイマンちゃんの会心の一撃が叩きつけられた。

ゴリラさんは大きく拳を引くと…

「くらええええええええええええええええええええええ!!」

鶴の顎に向かって大きな一撃を喰らわせた。

鶴の顎が大きく歪む。悲鳴も上げず鶴はゴリラさんの拳を受けて吹き飛ばされた。下あごは上あごとかみ合わずにだらんと床にこぼれている。ゴリラさんの強烈な一撃で粉々になったようだ。

「や、やった…?」

「…そのようです。やりました!みんな!」

イエイ又ちゃんが正式に勝利を認めた。

あたしはみんなのところへ駆け寄って勝ち取った勝利を喜んだ。あたしは何もしてないけど勝てないと思った相手に勝てたことが何より嬉しかった。

「行こう!まだまだ鶴はいるはずだよ!早くこのジャングルを抜けよう!ゴリラさん!道案内をお願い!」

「わかった!」

ゴリラさんを先頭にジャングルの中を駆け抜ける。途中鶴にも何匹か遭遇したけど、一度鶴を倒したあたしたちの敵ではなかった。イエイ又ちゃんが鶴の攻撃を引き受けて、ゴマちゃんが尻尾の蛇を封じて、ゴリラさんとメガネカイマンさんで倒す。完璧な

布陣だった。

ジャングルを抜けた先には開けた広場があった。そこではたくさんのフレンズさんが鶴と戦っていた。なんだか見慣れない化け物の姿がある。

あれは…ヤギの頭、ライオンの胴と手足、蛇の尻尾…？ 鷲とライオンが一緒になったようなものもいる。新種の鶴か…！

「ごめん、遅れた…」

「アムちゃん！」

アムちゃんが背後からやってきた。相変わらず全身が血に濡れているけど本人は元氣そうだ。

「森の中の鶴は大体倒した。イリエワニたちも時期に来ると思う。ともえたちは大丈夫…？」

「うん！ ねえアムちゃん！ あたしたちも鶴を倒したんだよ！」

「ほんと…？ すごい…」

言葉は少なかったけどアムちゃんは優しく微笑みかけてくれた。けど、次の瞬間には遠くでフレンズさんと戦う鶴を睨むアムちゃんの姿があった。

「まだあんなにいっぱい…」

「だね…アムちゃん、やれる？」

血しぶきがあたしの顔にかかる。やがてごぼごぼと泡を立てるような音を立てながらそいつは倒れた。

そいつを皮切りにあたしは次々と鶴を切り伏せていった。戦場が赤く染まっていく。心なしか周りのフレンズたちの士気も上がっていつているようにも見える。中には単独で鶴を倒すものまで現れた。既にフレンズたちには鶴に対する恐怖がなくなっていた。あるのは倒さなくてはならない相手というこの場にいるフレンズたちが得た共通の認識のみ。もはや鶴など相手ではない。恐怖を克服したあたしたちの敵ではなかった。

次々と鶴を斬り捨てていく。右手で鶴の体を切り裂く。次の獲物に狙いを絞り、左手の爪を鶴の首に突き刺す。あたしは足元に斃れている鶴の亡骸を横目に辺りを見回した。

「……………」

どのフレンズも苦戦している様子はなかった。あたしたちは完全に優勢になった。もはや鶴など物の数ではない。

しかし、奇妙な姿をした鶴を見てあたしの思考は止まってしまった。鶴自体が奇妙な姿をしていると言えるのだが、そいつは鶴の姿をしているようで、同時にセルリアンのようでもあるのだ。頭についている無機質な一つ目が、まさしくそれをセルリアンと強

調しているようだ。それはあたしたちフレレンズではなく、鶴を襲っている。鶴の姿をしたセルリアンが次々と鶴を狩っていつているのだ。目を凝らしてみると次々といろんなセルリアンも戦場に姿を現してきている。どれもフレレンズではなく鶴を攻撃しているようだ。鶴は次々とセルリアンに呑み込まれていき、鶴の形をとっていつている。なるほど、こうして鶴の形をしたセルリアンが生まれていつているのか。

しかし、このセルリアンはどうすればいい？フレレンズを襲う気配はないが、襲わないとも限らない。しっかりと警戒を怠らずにいつでもあのセルリアンを倒せるように気を張っておく。

そうこうしているうちにすべての鶴がセルリアンに呑まれてしまい、戦場にはぼかんとしているフレレンズと鶴の姿をしたセルリアンしかいなくなってしまった。そのセルリアンもフレレンズを一瞥するとほとんどがどこかへ行ってしまった。辺りには鶴の亡骸とフレレンズしかない。

「アムちゃん！」

ともえの呼ぶ声がある。この声が聞いたことはあたしたちの勝利を意味していることと同じだ。

あたしたちは勝ったのだ。

.....

「アムちゃん！大丈夫!? ケガはない!？」

「うん。ヘーキ。でも一発だけでもらっちゃった」

「あれには私もヒヤってしたぜ。けどあのセルリアン共はなんだろうな。鶴だけ襲ってどっか行っちゃった」

「フレンズ以上の輝きを持っているから襲った…としか考えられないですけど…どうなんでしょうか」

「それだと後からフレンズさんたちも襲いそうなものだけど…うーん…」

考えても埒が明かない。今はただ、鶴の襲撃を乗り越えたということを祝福したい。最初は恐怖と絶望から狂乱の状態に陥ってたけど、今は鶴たちを完全に退けここに立っている。それがたまらなく嬉しかった。

ふと遠くを見るとフレンズさんたちに交じって奇妙な影が二つ見えた。どうも二人は相見合っているようだ。一人は黒いボロボロの浴衣のようなものを着た薄い緑色のショートヘアをしたフレンズさん。もう一人は…あの姿は鶴のフレンズさんなのだろうか? あの子が今回の騒動の原因とでもいうのだろうか?

「イエイ又ちゃん、あの子…」

「はい…恐らく鶴です。今回の鶴騒動の元凶に違いありません…」

牙を剥いて臨戦態勢をとるイエイヌちゃん。今にも襲い掛かっていきそうだけど今は抑えてもらわなければ。あたしたちが戦った鶴は倒せるけどあの子は倒せるか分からない。どんな手を使ってくるか分からない以上こちらから戦いを仕掛けるのは分が悪い。

「あれはあたしでも勝てるか分からない。とんでもなく邪悪な気配を感じる」

「アムちゃん…」

アムちゃんでも勝てるか分からないと言っている。アムちゃんでも勝てないならなおのこと戦わない方が良いだろう。けど、もう一人の子、あれは…ヤマタノオロチさんだよね…？オロチさんが鶴と対峙している…あの二人が戦うというのだろうか。なんだかとてもないことが起きるような気がする。もう既に起きているのだろうか。今回…戦争に近いことが起きるような、そんな感じがした。

E X 4 話 「砂漠の追跡者」

ともえと別れた私たちはいつもの巢へと向かって歩いてきた。あの子たちと別れてからは私の心にもなんだか晴れ晴れとしたような気持ち良さが残っていた。これもヒトと触れ合えたことによる一つの心理的な効果なのだろうか。アライさんの足取りも心なしか弾んでいるように見える。それに見慣れた夜明けの景色もいつもよりきらめいているようだ。今日も気持ちの良い朝を迎えられそうだな、そんな気がした。

そのときだった。私たちが向かっている方向から突如として大きな砂嵐が巻き起こったのだ。そのときはまたいつもの嵐だねーと談笑していたのだがよく見てみるとなんだかいつも違う感じがした。アライさんもそれには敏感に察知していたようだった。砂嵐に稲妻と焰が走っている。それによく見てみると四つ足の獣の姿がいくつも見える。狸…虎…よくわからない獣の姿がいくつもある。

「アライさん、あの獣の姿、見える？」

「見えるのだ…砂嵐に巻き込まれてしまったのか？」

「やー、私にはそう見えないけどねー…なんだろう…」

今まで感じたことのない不気味な悪意のようなものを感じる。あれは自然によって

生まれたものではない。何か人為的な、悪意を以って生まれた何かだと本能的に感じた。

「アライさん、あれは警戒した方が良いかもねー！」

「そーなのか？ 助けないとまずそうなのだ」

「やー、あれはまずいよー…あれは良くない何かだよきつと…」

遠くに吹き荒れる砂嵐とそれの中で舞う獣の姿を見て思う。確かに砂嵐に巻き込まれているようにも見えるけど、あれは巻き込まれているのではなくて砂嵐に乗って”獲物”を探しているのではないかと思つた。考えてみたつてそうだ。砂嵐に巻き込まれたとき普通の獣だつたらどうなるか？ もみくちゃに蹂躪されてどこかへ飛ばされるか砂嵐の中で息絶えるはずだ。けど今見ている獣はどうしているか。何故あの砂嵐の中で平然としている？ その答えに気付いたときあたしは明確な恐怖を感じた。

「アライさん…逃げよう」

「ちよつ、フェネック!？」

アライさんの手を取ると私は逃げ出した。逃げなくちゃいけないと思つた。アレと関わつてはいけない…アレから逃げないといけない…私の本能がそう告げていた。

「フェネック!?! どうしたのだ!?!」

「つ……」

恐怖を振り払い回避しようとしたその時……

「させないのだああああああああああああ!!」

アライさんの飛び蹴りが鶴の顎に直撃した。鶴は舌を嚙んだらしく悶絶している。

「大丈夫かフェネック!?!」

「う、うん。なんとか……」

「フェネック、足が震えてるのだ……怖いのか……?」

「え? あ……」

アライさんに指摘されて自分の足を見してみると、情けないほどに震えている自分の足があった。恐怖を抑えて化け物と戦っていたんだ。ただ抑えていただけでこんなにも怖がっていたのだ。

「大丈夫なのだフェネック! アライさんが付いているのだ! フェネックの怖いも鶴もみんなアライさんがまとめてやつつけてやるのだ! だからフェネックも無茶はしないようにするのだ!」

「アライさん……」

……またやられてしまった。アライさんにばかり任せてはダメだと思つて私も頑張つてみたけど、結局最後はアライさんに助けられてしまうんだ。やっぱりダメだな私。

気を取り直してアライさんと一緒にダウンしている鶴に攻撃を加える。傷こそ入りはすれど、私たちの攻撃では致命傷を与えるのはどうも難しいようだ。やがて鶴は私たちを振り払うと体を起こして怒りの咆哮をあげた。

「やー……これはまずいねー……」

「ううううー！どうすればいいのダー!!」

アライさんも私も万事休すといったところだ。このまま鶴の攻撃をかわし続けてちまちま攻撃を与えていくのもいいけど、それではいつまで私たちの体力が持つか分からない。

鶴が私たちに襲い掛かる。その大きな口は私とアライさん両方を食い散らすかのようだった。

「GRRRRRRRRRRRRRRRAAAAAAAAAAGHHH!!」

鶴の攻撃が私たちに届くその瞬間だった。

「GYYYYYYYYYYYYYAAAAAARRRRRRRRR!!」

鶴の姿をした別の何かが鶴の喉元に食らいついた。

そのまま鶴を押し倒すと激しく揺さぶり、その牙を鶴の首深くへと刺していく。やがて鶴はおとなしくなるとそのまま息絶えてしまった。

「あ……………」

「な、なんなのだ…?」

二人でポカーンとその様子を見つめる。何が起きたか分からなかった。やがてそいつはくるりとあたしの方へ首を向けてきた。

大きな一つの目が真ん中についている。あれは…セルリアン…?

「セ…セルリアン…?」

訳が分からずボーつとしてるとアライさんが前に飛び出してきた。

「さ、させないのだ! フェネックはアライさんが守るのだ!」

「っ……」

……アライさんに頼つてばかりではダメだ…。せめてアライさんと一緒に戦わなく

ちゃ……!

「大丈夫、アライさん。私だって戦えるから…!」

「フェネック…! 大丈夫なのか? 無茶はしてはダメなのだ!」

「大丈夫…大丈夫だか…」

「おーーーーーい!!! 二人ともーーーーー!!!」

「ふえ!!?」

急な呼び声にアライさんがなんともいえない間抜けな声を漏らした。この声は…サーバル…? 遠くを見るといつも二人が乗っている見慣れたバスがこちらに向かって

走って来ていた。対するセルリアンはこっちを見ていただけで動く気配がない。やがてバスは私たちの近くまで来ると停車した。

「よかった！無事だったんだね！」

「う、うん。なんとか…」

かばんさんとサーバルが来た安心感から私は脱力してへたり込んでしまった。

「鶴相手によく無事だったね。僕とサーバルちゃんでも結構苦戦したっていうのに…」

「本当なのだ…アライさん頑張ったのだ…」

「うんうん、えらいえらい」

サーバルがアライさんの頭をなでている。私も頑張ったんだけどアライさんと比べるのもなんか変な気がするし黙っておこう。

「それよりあのセルリアンはなんなのだ？どうしてアライさんたちを襲ってこないのだ？というかなんで鶴の姿をしているのだ？」

「それがまったくわからないんだ…僕もあのセルリアンをずっと追っているんだけど、どうも鶴だけを襲っているみたいだね。それ以外は何も…鶴の姿をしているのは鶴を食べたからだね。鶴の持つ輝きを奪ったから鶴の形をとっているのかもしれない」

なるほど。セルリアンは輝きを奪うとその特性をコピーするって聞いたことあるけど、そういうことだったのか。けどそれからはフレンズを襲わなくなるものなのかな？

「鶴の姿をしたセルリアンがフレレンズを襲ったっていう報告なんかはないのかい？」

「僕はまだ聞いてない。あのセルリアンもフレレンズたちには見向きもしないんだ」

「へえー…」

うーん…襲わないとも限らないし警戒するに越したことはないよね。一応目を光らせておこう。

ふとセルリアンが上を見上げた。見ると五匹もの鶴がまとめて襲い掛かって来た。あの砂嵐から飛んできたのだろう。

「あの砂嵐から飛びかかってきているみたいなんだ。逃げながら戦わないとキリがないよ」

「そうなんだ…クツ…」

みるみるうちに囲まれていく。最初は五匹だけだった鶴も続々と数を増していつている。いくらかばんさんとサーバルが来たところでもこれでは分が悪いというものだ。けど…あのセルリアンがいれば…

やがてセルリアンが一匹の鶴に飛びついた。

「GRRRRRRRRRRRRRAAAAAAAAAAGHHHH!!」

首元に大きく噛みついてる。鶴は血を流しながらも大きく抵抗している。爪がセルリアンの体を傷つけているけど当の本人は全く意に介さないとった様子だ。

アライさんが叫び声に反応した。言われてみればアムールトラの声に似ているような気もする。普段の静かなしやべり方とは全然違う野太い叫び声から別人と思ったけど……こういう時のアライさんの勘はよく当たる。多分アムールトラなんだろう。しかし……恐ろしい絶叫だ。

「っ……！ 鶴が！」

かばんさんの声につられて周りを見回した。鶴がアムールトラの声がした方向へ走っていく。……どういふことかはわからないけどどうやら助かったようだ。

「ダメなのだ！ アムールトラが危ないのだ！」

「やー、多分大丈夫じゃない？ 仮にも元ビーストなんだし鶴くらいどうとないと思うけど……」

「だけど……アライさんはまだアムールトラに教えてないことがたくさんあるのだ！ もし万が一のことがあったら……あまりにも報われないのだ！」

そういうとアライさんは走り出した。……こうなったら私もついて行くしかない。アライさんのやることは私も付き合おうと決めた。アライさんが行くところは私もついて行くこと決めた。それがどんな理由や結果であろうとそれが私たちと決めているんだ。

「……………」

「……………行こう。かばんちゃん！」

「……うん」

かばんさんはエンジンを鳴らすとバスを走らせた。私も同乗させてもらおう。

「かばんさん、私もいーかなー？」

「もちろん。もし乗っていかないと言ったらどうしようかと思ったよ」

「ふふん、乗できる時にはちゃんと楽しないとねー」

「あはは、フェネットクちゃんらしいね！」

少し走ってセルリアンの前まで行くといきなりバスを止めた。バスと同じくらいの大きさの巨体がバスと並ぶ。

「……言葉が通じるかわからないけどキミにも聞きたい。キミはフレンドズを襲わずに僕たちと一緒に鶴退治をしてくれた。もしキミも僕たちと同じ思いを持っているなら付いてきてほしい」

セルリアンにそう問いかけた。当然ながらセルリアンは答えない。けど、無機質な一つ目はじつと私たちを見つめていた。

「…行こう」

かばんさんは再びバスを走らせた。

この先にはとても大きな戦いが待っている気がする。かばんさんの表情もいつになく険しい。ここからでも感じるただならぬ気配…アムールトラたち以外にも何かいる。

鬼が出るか蛇が出るか…最後の決戦が始まるんだ。

Ex5話「The Number Of The Beast」

遠くを睨む影が一つ、見覚えのあるフレンズさんがそこにいた。鈍く黄色く光る不気味な目と縁がかつた銀髪の短いツインテール、その背後には八匹もの蛇が姿を見せている。かつて素戔嗚尊に倒された伝説の神獣、ヤマタノオロチだ。

そのヤマタノオロチさんが鶴と見合っている。対する鶴はうつむいたままジツと佇んでいる。何やら悔しそうにギリッと歯を噛みしめた後オロチさんを睨み上げた。その顔には憎悪の情が見て取れる。

「どいつもこいつも恐れるどころか我が鶴に立ち向かい倒すなどは…とんだ計算違いよ…あな恨めしや…」

「……………」

鶴が呪いの言葉を漏らす。その言葉一つ一つに明らかな憎悪が込められているようだ。言葉そのものには悔しさが滲んでいるだけのようだが、その言葉には明らかな憎悪が含まれていた。そしてそれはあたしやフレンズに向けられているように聞こえた。

「未知なる恐怖を忘れた畜生共が…この私が直々に恐怖のどん底に叩き落としてくれる

わー！」

「思いあがるなよ……下郎！」

オロチさんの背後から伸びる蛇が鶴の左腕を打ち付けた。

「ぐっ……！」

「もはや貴様に勝ち目などない。おとなしく引き下がってはどうか？ 周りを見てみるといい。あれほどいた鶴はどこへ行つたと思う？ みんな貴様の言う畜生共にあっけなく滅ぼされてしまったのだぞ。キマイラやグリフォンまで出しておいてなんとというザマだ。同じ神獣として恥ずかしい限りだぞ」

「ギイイ……!!」

オロチさんに煽られて悔しそうに歯ぎしりをしている。やがて鶴は何か腹を決めたように再びオロチさんを睨むとこう叫んだ。

「良いだろう!!!後悔するなよ!!!貴様に神の力を見せてやろう!!!」

「……………」

鶴が絶叫する。その目は憎悪で満ちていた。まるでこの世全てを呪っているかのようだった。オロチさんは静かにその様子を見守っている。

「ともえちゃん!みんな!」

「アムールトラ!」

「っ!! かばんさん! サーバルちゃん! アライさんまで!」

「アムールトラ! 無事か!? 鶴と戦ってた時おまえの咆哮が聞こえたから心配になったのだぞー!」

「アライさん…あたしはへーき。アライさんこそケガしてる…」

「アライさんのコレはドーということはないのだ! おまえこそ全身血まみれで…」

…どうやらアライさんたちも鶴と戦っていたようだ。アライさんたちも全身のあちこちに細かなケガを負っている。鶴と戦っていたにも関わらずアムちゃんも全身のあちこちを聞いて駆けつけてくれたというのだ。アライさんはアムちゃんのことを本気で心配してくれているのだ。

「……アレが今回の騒動の親玉なんだねえ…」

「そうみたい…鶴…アレがパーク中に鶴を放ってパークのみんなを恐怖陥れたって…」

フェネツクちゃんと鶴を遠くに睨む。鶴は俯いてなにやらぶつぶつと呟いているみたいだ。

「この世に絶望を…地球よ、海よ…彼の者のために魔獣を送り給え…天よ、彼の者のために魔獣に刻印されている数字を数え給え。それは人類が用いているありふれた数字である…その数字とは、666…」

「なっ…」

「かばんさん…?」

「なんていうものを…呼び出す気なんだ…」

かばんさんがわなわなと震えている。その顔はひどく絶望に染まっている。

「かばんちゃん、どうしたの?」

「……サーバルちゃんと情報管理施設にいた時に読んだんだ。クトウルーに関する情報を集めているときに偶然見つけた……黙示録の獣……666を象徴とする破滅の獣だ……」

かばんさんの答えに呼応するかのように空が急速に曇っていく。風が吹き、雷が鳴り始めた。得体の知れない邪悪な力を感じるようだ。やがて鶴は天を仰ぎ狂ったかのように笑い始めた。

「くっ…あっはははははは!!来る!来るぞ!!今こそ終焉の時は来たれり!さあ、魔獣よ目覚めるのだ!」

ゴゴゴゴゴゴ…

「じ、地震?!」

地震が起きたものつかの間、ジャングル地方の遙か先にある海が大きく隆起するのが見えた。やがて“ソレ”は海を裂くと、七つの獣の頭が姿を現した。七つの頭に十の角、それらの角に十の王冠を持っている。やがて山ほどはあろうかという超巨大な豹の

ような体があらわになった。あれが黙示録の獣：今までの異形の怪物とは一線を画している。酷く禍々しい姿だ。一つの首に七つの頭が付いている。七つのライオンの頭に、緋色の豹の体と熊の手足：破滅をもたらすにふさわしい獣の姿がそこにあった。

「あ……あ……あ……」

思わずへたり込んでしまった。本当の絶望を味わったかのようだ。鶴と遭遇したときはまだ足は動いていた。けど、今はどうか。その圧倒的な存在感は呼吸や瞬きを忘れるかのようだ。地面を踏み鳴らす足音の一つ一つがこの世の終焉を告げているかのようには聞こえた。

魔獣が一步進むごとに稲妻が空を照らし、雷鳴が大気を震わす。魔獣は主を求めてこちらに歩み寄って来ているのだ。

「ふふふ……この日をどれだけ待ちわびたか聞かせておくれ……お前にわたしの持つすべての権限を与えよう……この地上に在るものすべては生かすも殺すもお前次第だ……さあ、この世界に恐怖と絶望を振りまくのだ!! あつはははははは!!」

鶴の姿がみるみると変わっていく。全身を赤い鱗で覆い、四肢に煌びやかな黄金の装飾が散りばめた竜のフレンズがそこにいた。やがてその赤い竜と化した鶴は右手に稲妻を走らせると魔獣に向けて放った。

魔獣はそれを受けると甲高い絶叫をあげ、青白い炎のような光線を空へ向けて吐き出

した。いよいよ世界の滅亡へ向けて魔獣が動き出したのだ。

魔獣を本格始動させた鶴はこちらを振り向くと嘲笑するかのようにあたしたちに語りかけた。

「お前たちはそこで指を咥えながら世界の終わりを見届けるといい。その後にはもっと壮大なショーが待っているぞ……くっ……ふははは……あつははははは!!」

鶴は高笑いをあげると魔獣の元へと飛び去って行った。もう終わりなんだと諦めかけたそのときだった。

「——見栄を張ることではかヒトを敷くことができぬ小童が……」

オロチさんがボソリと言葉を漏らした。

「オロチさん……?」

「……酒は持つておらぬか……」

「お酒……?」

どうしてこんな非常な時にお酒なんて……

「僕のお酒でよかつたら……」

「うむ、上等だ」

かばんさんがバスからお酒が入った瓶を取り出すとオロチさんに投げ渡した。オロチさんはそれを受け取るとグイッと一気に飲み干した。かばんさんの作るお酒は度数

が強いものだったと思うけど大丈夫なのだろうか。

「クウウ〜！ やっぱり貴様の作る酒は効くなく〜！ これで我も良く戦えそうだわい！」

オロチさんはかばんさんのお酒を飲み干すと肩慣らしを始めた。

「あんな雑種なぞ取るに足らん存在だ。我が片手で捻り潰してやるわい。神としての格の違いというものを見せつけてくれるわ！」

オロチさんは自身から生えている八匹の蛇を八方に伸ばして適当なセルリアンを捕獲するとそのまま呑み込んでしまった。

セルリアンを呑み込んだオロチさんの姿が変わっていく。それはセルリアンのような見た目をした大きな蛇のように見えた。八つの首を持ち、八つの又がある巨大な大蛇の姿がそこにあった。アレがヤマタノオロチの真の姿：素戔嗚尊と戦った八岐大蛇なのだ。

「なにイ!？」

「数々の獣を継ぎ接ぎしてその力を補おうとするその姿、まことに見苦しい！ いくら凡百の獣の力を足したとて、真なる一に届くことなど決してできぬ！ 醜い姿のまま我が力の前に屈するといいで、雑種！」

「ほぎげエー！ ビーストよ、お前のその息吹であれなうわばみなぞ消し飛ばせエ!!!」

ビーストと呼ばれたそれは青白い炎をヤマタノオロチに向けて吐き出した。七つの

頭から吐き出されたそれはヤマタノオロチを大きく包み込むようだった。

「その程度の力で我を倒せると思うてか？ 我も侮られたものよなあ！」

ヤマタノオロチの首が赤く光る。その光が口元まで届くと八つの頭の口が大きく開き、その大きく開かれた口から猛烈な火炎がごとくと吐き出された。やがて両者の吐き出した炎は大きくぶつかり合い、辺りを多大な熱と光で満たした。

「あ、熱い……！」

「ぐつ……どこか別のところへ避難しよう！ みんな、乗って！」

あたしたちがバスに乗るとかばんさんはバスを急発進させた。

「ここにいては危険だ……流れ弾に当たるだけでも死んでしまう……！」

かばんさんが独り言のように漏らす。確かにあの場所には危険だ。始まったばかりだからいいけど後に戦いが激しくなるとあつというまに蒸発してしまうかもしれない。

「お……い!! こつちだあああああ!!！」

ふと誰かが呼ぶ声が聞こえた。声のする方を見てみるとそこにはツチノコちゃんがいた。バスでツチノコちゃんを拾うとサーバルちゃんがツチノコに訊ねた。

「ツチノコ!!? どうしてここに!?!」

「んなことはどうでもいい! あつちの方にキュウビ共がいる! 急いでそつちまで行くぞ

！」

かばんさんがバスを飛ばす。かなり速度が出ていてしばしば木とニアミスしている。

「カバン、トバシスギダヨ」

「そんなこと言っている場合じゃないよ……早くしないと……」

後ろからは獣の叫び声や体同士を衝突させる音が聞こえる。まるでテレビで見たような怪獣バトルが繰り広げられているのだ。

「あそこだ！ キュウビとオイナリサマだ！」

「こつちです！ 早く！」

オイナリサマたちがいる方へ走っていき、地面に掘られた穴へと身を隠す。横に長く掘られた穴は塹壕のように思えた。

「ひとまずこれでヤマタノオロチとビーストの吐く炎はしのげるはずです。あとはオロチがビーストを倒すことを祈るばかりですが……」

「……オイナリサマやキュウビキツネさんではあの獣は倒せないの？」

「悔しいですがわたしたちの力ではあのビーストに太刀打ちすることはできません。わたしたちとアレとでは格が違いすぎます。私は神というより精霊に近い存在、キュウビは神霊に組する獣であって神に類するものでもなければ神の使いでもありません。……対するあのビーストは神を冒瀆する獣……正面から神を否定してかつ、支配と破壊を

もたらず悪しき存在なのです…」

「オイナリサマ、ビーストって…?」

「ごめんなさい、説明もなしにしゃべりすぎましたね。ビーストとはオロチが戦っているあの獣のことを指します。あの獣は外来語でアポカリプス・ビースト、またはザ・ビーストと呼ばれているのです。わたしはそれに倣ってあの獣をビーストと呼んでいるのです」

「なるほど…：ビースト…：黙示録の獣…」

塹壕から頭をのぞかせて、遠くで体をぶつけあいながら激しく戦う二匹の姿を見る。アポカリプス…：聞いたことがある。神様が真実を伝えるというニューアンスを含む言葉だったはずだ。あたしの聞くアポカリプスはどれも悲劇的なものばかりだ。世界が滅びる…：人類が滅亡する…：どれも救いのない未来だ。ヨハネの黙示録は読んだことはないけど、あんな獣が出てきて世界に終焉をもたらすと考えると、神様はとっても意地悪でサディストな性格なのかもしれない。

「ともえちゃん！危ないです！頭を引っ込めてください！」

「ん、ごめん…」

イエイ又ちゃんに呼ばれてあたしは塹壕に戻った。イエイ又ちゃんが心配そうな目であたしを見ている。

「ともえちゃん…」

「大丈夫…大丈夫だからね…」

「冷静ですね、ともえさん」

「うん…神様って意地悪だなんて思ってた…」

「え!?!」

「え…? あ、いや、そんな意味じゃなくて…」

別にオイナリサマが意地悪とかそんな意味で言ったわけじゃなかったんだけどちよつと言葉が悪すぎたようだ。

「別に間違っではないわよ。気分次第で災害を起こしたり横取りするのはどこの神様も同じよ。与えたのは私だから奪うのも私だっていうのがあいつらの考えなのよ? それどころか与えてやったんだからって有無を言わさず崇拜させるんだからタチが悪いわ」

「キュ、キュウビ…」

確かにそんな話によく聞くけど今は聞きたくなかったかも…

オイナリサマが気まずそうにこちらを見ている。

「だ、大丈夫だよオイナリサマ! オイナリサマは現に今、あたしたちを守ろうとしてくれているじゃん! 温泉で見せくれたあの和やかな顔を見たらオイナリサマがそんな意地

悪な神様だなんて思えないよ！オイナリサマはあたしたちを守ってくれる神様だってあたし信じてるから！」

「ともえさん……そうですね。あなたのその期待に応えるためにもわたしも頑張らなければなりませんね……！わたしは今も昔も人ともに在り、人の成長を見守ってきました……その人に仇なすのであれば、この私が許しません！」

オイナリサマはふわりと舞うと塹壕の外へ出た。じつと睨むその瞳はビーストに向けられている。

「ツチノコ、この近辺にはまだ他のフレンズさんがいるはずですよ。その子たちをここに連れてきなさい。キュウビはここを襲ってくるであろう鶴から皆を守ってください。わたしはオロチと共に戦います」

「戦いの神でもないあなたにいったい何ができるっていうの？一端の豊穰の神に破滅をもたらず獣にどう対抗しようっていうのよ」

「わかりません……けど、わたしにもできることはあるはずですよ。……かつてセルリアンの襲撃からパークが救われたように、今回もパークを救わなければなりません。そのためにわたしは、戦います！」

オイナリサマはビーストに向けて走っていった。アムちゃんは様子を見てからなにやら難しそうな顔をしている。やがてアムちゃんは塹壕の外へ身を乗り出すとあ

たしたちにこう告げた。

「……あたしも行く。あたしもかつてあの獣と同じようにビーストと呼ばれて恐れられていた。あたしもあいつと同じビーストなんだ。あたしはかつてパークでフレンズたちを殺して回った。……あたしは償わなければならぬ。あたしはビーストを倒す。倒して乗り越える……あたしはこの手でビーストを打ち倒す……！」

そう言うときアムちゃんはオイナリサマの後を追うように走っていった。……放つておけない。あたしはアムちゃんの後を追おうとしたが、キュウビさんに止められてしまった。

「よしなさい。あなたが行ったところで足手まといになるだけよ」

「けど……！」

「……あの子たちを信じなさい。あの子たちはきつと勝つわ」

「……」

オロチさんやオイナリサマたちは勝つ……。勝つのもかもしれないけどあの圧倒的な存在を前にしてはどうしても放っておけなかった。あたしはどうすればいいか。何ができるか……。この塹壕の中でうずくまるだけしかできないあたしがとても悔しく思えた。

「オイナリサマの命令だ。行ってくる」

「僕もいく。僕のバスだったらたくさんのフレンズさんを乗せられるはずだから」

「私も行くー！」

「イエイヌちゃんも行ってあげて。イエイヌちゃんの鼻と耳があつたらツチノコちゃんたちの役に立つはずだよ」

「は、はい」

かばんさんのバスは四人を乗せると行ってしまった。この場所にはあたしとゴマちゃん、キュウビさん、アライさんたちに他ゴリラさんたち数人が残った。

「私たちはここを襲ってくる鶴に対して備える。そして必要があればケガ人の看病をする。わかつたわね？」

「う、うん」

鶴…襲ってくるのかな…けど、オイナリサマやツチノコちゃんを手伝えないあたしでもここに来るであろうフレンズさんのケアはできる…そう信じてあたしは待つことにした。

E X 6 話 「魔獣の呼び声」

外では巨大な怪物が互いにしのぎを削っている。互角の戦いのようにも見えるが、この戦いはオロチさんが有利をとっていた。というのも、ビーストはオロチさんに近付かずにいるのだ。熱線を吐いてオロチさんの攻撃を牽制するも、いざオロチさんに近付こうとすれば八つの首の激しい攻撃を受けて後退するというのを繰り返していた。ビーストの背中では鶴が悔しそうに歯ぎしりしていた。

「おのれ…おのれおのれおのれ…おのれ!!! ビーストよ！なぜあれなうわばみ一匹程度倒せぬのだ!!! 貴様の爪は何のためにある!!! 貴様の顎は何のためにある!!! 貴様の息吹は何のためにあるのだ!!! 裂け！砕け!! 燃やし尽くせ!!! この世に存在するすべてを喰らい尽くせエ!!!」

鶴が憤怒に駆られるように叫ぶ。ビーストはそれに呼応するように絶叫するとオロチさんに向かって突撃した。上半身を大きく上げると熊のような前足でオロチさんへと切りかかる。しかし空しいかな、胴や足を噛まれ、炎を浴びせられ空中へとその巨体を放り出されてしまった。もはや手も足も出ないというようだった。

「いい加減認めてはどうだ。貴様では我に勝てぬ。我はまだ半分の力も出しておらぬの

だぞ。いくら数多の獣を使い、取り繕ったところで雑魚は雑魚にすぎぬ。さあ、諦めて降伏するが良い。さすれば今回の貴様の行い、我が許してやる」

八つの頭がビーストを見つめる。鶴はビーストの背中であんなにやらぶつぶつと呟いているように見える。瞬間、不意にビーストが青い熱線をオロチさんに向けて吐き出した。オロチさんはすかさず一つの頭からレーザーのような光線を口から吐き出すと、ビーストの熱線を押し返しビーストの体に深い傷を負わせた。

「痴れ者が…：私のたった一つの慈悲を無碍にするか…：良いだろう。貴様がそれを望むなら我自らが天誅を下してくれる…！」

オロチさんの首がビーストへと伸びていく。そのとき、鶴が空へ向かって叫んだ。

「この世全てを地獄に包んでくれるわ!!! ビーストよ! 鳴け!!!」

鶴が飛行機のジェットエンジンのような音をあげて鳴いた。次の瞬間、あたしの中で何かがドクンと鳴った。

あたしの中で何かが呼んでいる。誰かがあたしの名を呼んでいる。止めどなくあたしの名を呼び続けている。こわい…：恐怖で体が震えるかのようだ。汗が滝のように流れてくる。何かがあたしの中に入ってきて精神を喰らっているようなそんな感じがした。体がガクガクと震えて呼吸も荒くなってきた。あたしは自分の体を抱きしめるとそのまま跪いてうずくまってしまった。

異常を察知したキュウビさんがあたしの体に触れてくる。

「強力な呪術がかけられてしまったようね…こんなの見たことがないわ…」

「そ、そんな！ともえはどうなっちゃうんだ!？」

「わからない…けど、このままいったらよくないことが起きるのは確かよ」

「くそっ…!」

ゴマちゃんの声が聞こえてくる。頭の中では無数の声が反響する。無数の悪魔があたしの中に入り込んでいく。魂が喰わられていくのがわかる。止めどなくあたしの中に入り込んでいく悪魔があたしの魂を喰らっているのだ。まるであたしがあたしでなくなっていくかのようだ。意識が混濁していく。誰かがあたしにとって代わろうとしている。ぼやつと何かが見えてくる…あたしに似たもう一人の…自分…？

「っ…!! 嫌だ…嫌だ嫌だ嫌だ…っ!!」

崩れ落ちていく自我を必死に引き留めてあたしという自分を保つ。あたしに押し掛かる得体の知れない何かを容赦なくあたしを押し潰そうとしてくる。あと少し力が加わればあたしという自我は崩れ落ちてなくなるだろう。あたしはそれがすごく怖い。あたしがあたしじゃなくなるなんてそんなの絶対に嫌だ…!

「はあ…はあ…!」

「ともえ! しっかりしろっ!」

「おいともえ!!! 気をしっかり持て!!!」

「っ?!? ゴマちゃん…!」

「お前……あんなヤツなんかに負けてんじゃねエよ!!!」

ゴマちゃんが涙ぐみながらあたしの目をじっと見つめている。やがてあたしから視線を逸らすと空をキツと睨んだ。暗い空には蒼い炎と赤い炎がオーロラのように舞っていた。

「キュウビキツネが結界を張って鶴とピーストの呪詛の影響を小さくしてくれた。今後またアレが来るか分からねえ。お前も気張って負けないようにしろよ」

「う、うん…!」

ゴマちゃんが涙声であたしに訴えかける。あたしはあの声に苦しんでいる間にゴマちゃんに大きく心配させてしまったようだった。ゴマちゃんの鼻をすする音が聞こえてくる。

「ともえ!」

アライさんがあたしを呼んだ。

「アライさんにはお前を助けることはできないのだ…けど! 助けてほしいときはアライさんに頼ってほしいのだ! そうすればアライさんも全力でお前を助けてやるのだ! なあ、フェネック!」

「うん。アライさんはなんだかんだ言ってミラクルを起こしてくれるからねー。その内あんたの呪いってやつもアライさんがなんとかしてくれるかもよー」

「任せろなのだ!」

アライさんはそう言っただけで胸を叩いた。どこからあの自信が湧いてくるかわからないけどアライさんの自信満々なその姿を見てるとなんだかあたしも元気が出てきた。今ならあたしも鶴の呪詛に負けない気がする…!

「…っ」

手足に力が入らない。立とうとしても足がマヒしているようで立つことができない。足首がぐにやぐにやと曲がってとても立てない。

「無理に立とうとしない方が良くわよ。あなたの魂は半分ほどあのビーストに食べられてしまっているわ。見てみなさいなあ顔。サタンにできなかったことをひどく恨めしく思っているみたい」

「……………」

墮壕の中からは暗い空しか見ることができないけど、まだ微かに残っているあの感覚の中、明らかに憎しみを湛えた鶴の姿が見えた。

うまくしゃべることができない。キュウビキツネさんによるとあたしの魂はビーストに半分食べられてしまったという。あたしが感じたあの精神を蝕まれる感じや魂を

喰らわれていくような感覚は本物だったのだ。壁にもたれかかって息を整えると上空を見上げる。

突然塹壕の上を突風が吹き抜けたと思うと赤黒い爆炎が頭上を駆け抜けていった。爆炎の中にはいくつもの鶴の姿が見える。オロチさんが地上に現れた鶴を焼き払っているのだろうか。けど、この爆炎の中でツチノコちゃんたちは大丈夫なのだろうか？

「はっはっはっはっはっはっ!!!良いぞ!!!貴様らの恐怖は良い糧となった!!!さあ、ビーストよ!あのうわばみを喰らい尽くせ!!!」

鶴の声が聞こえる。あたしの生み出した恐怖がビーストの力となったということなのだろうか。

「ほら、あんたも見な。あんたもこの異変の当事者の一人というならばね」

フェネックちゃんはあたしをおぶると塹壕の外へ身を乗り出した。塹壕の外には黒く焼け焦げた鶴の亡骸が辺り一面に転がっている。その亡骸からはなんともいえない嫌な臭いがあたしの鼻をついてくる。やっぱりあの爆炎はオロチさんが地上の鶴を焼き払うために放ったようなものだった。

二頭が戦っている方向を向くと、さっきまでとは違ってビーストに苦戦しているオロチさんの姿があった。大蛇の鋭利な牙を通さないビーストの体、大蛇の体当たりにも動

じない守りの堅さ、傷こそ入りはすれど致命傷を与えるに至らないその耐久力、ヤマタノオロチと対等に渡り合う獣の姿がそこにあつた。

「あ……」

「…あんたのせいじゃないよ。仕方のないことさ。私たちには何もなかったけどヒトの心に直接作用する何かだったのだろうさ。あんなもの避ける方が難しいよ。なんだって相手は黙示録の獣なんだし声を聞いてから作用するみたいなんだしね」

フェネックちゃんはそういうけどやっぱりあたしの心にはわだかまりのようなものが残つた。オロチさんはビーストに食らいついては頭を振って少しでもダメージを与えようとするけど、ビーストには以前のようないかなかつた。

「お前らああああああああ!!!」

突然ツチノコちゃんの叫ぶ声が聞こえてきた。見るとサーバルちゃんが運転するバスが猛スピードでこっちに向かって突っ込んできていた。

「おいサーバル!!! 止まれ!!!」

「ええ!?! どうやって止めるの!?!」

「左のペダルを踏むんだよ!!!」

勢いよくブレーキペダルを踏んだせいか前のめりになりながらズザザザという音を立ててバスは塹壕の前で止まった。

「ケガ人がいっぱいいるんだぞ！急ブレーキをするんじゃないやねえ！」

「そんなこと言われても私わかんないよ！初めて運転したんだよ!？」

「ああもう！とりあえずフレنزたちを降ろすぞ！お前らも手伝え!!！」

ツチノコちゃんに言われるままフェネックちゃんはあたしを背負ったままバスの後部へ移動する。その光景に思わずあたしは目をそらしてしまった。そこには血と呻き声と生き物の焼ける臭いが満ちる地獄絵図が広がっていたのだ。窓には血のようなものが付いている。皮膚が焼ける苦しみで喘ぐフレنزさんたち。みんな腕や首、顔などがそれぞれ焼けただれていても見えていられなかった。

「これは……」

普段は飄々としているフェネックちゃんが顔を顰めて後ずさりをしている。あのフェネックちゃんがかんな反応を示すとは相当なことだ。

「なにボケーっつとしてやがる！早く手伝うんだよ！いつまたあのバカが火を吐くかわからん！第二の被害が出ないうちにさっさと塹壕に運び込むぞ！」

塹壕にいるゴリラさんやアライさんたちがバスの観覧席から次々とフレنزさんたちを運び出す。ゴリラさんやアライさんたちがフレنزさんに触れるたびにバスの車内から痛みに叫ぶ声が聞こえてくる。中には殺してくれと絶叫するフレنزさんもいた。あまりもの光景にあたしとフェネックちゃんは呆然と立ち尽くすしかなかった。

「おい！しっかりしろ！」

「しっかりするのだ！」

まさに地獄と呼ぶにふさわしい光景だった。塹壕の中は皮膚の焼ける臭気で満たされていて、とてもいていられない。また運ばれてくるであろうフレンズさんや塹壕に逃げてくるフレンズさん、そしてケガ人を隔離するためにゴマちゃんがあたらしく塹壕を掘り始めた。もはや戦争とでもいうべきか、ゴマちゃんに続いてまだ動けるフレンズさんたちがそれに参加し始めた。

しかし、数多くいるケガ人の中でも特異な傷病者が一人いた。なぜ行きはかばんさんが運転していたのに帰りはサーバルちゃんが運転していたのか。答えは明白だった。

「かばんちゃん！かばんちゃん!!嫌だよ…死んじや嫌だよ！」

運転しているときに右半身をやられたのか右腕や右の顔にひどい火傷を負っている。その目は虚ろだ。サーバルちゃんもかばんさん程ではないにしろ火に焼かれた跡がある。そういうえばイエイヌちゃんは…？

「ともえちゃん！」

「あ… いえいぬ…ちや…」

「そんな…ともえちゃんまで…！」

あたしまで…？どういこと…？

「なにかあったの?」

「ピーストが突然叫んだとき、かばんさんが突然バスを急停止させて何かにひどく怯え始めたんです…わたしやサーバルさんで呼びかけてもダメで、ますますその反応はひどくなるばかりでした…最後には半狂乱の状態に陥って、もはやわたしたちの言葉は届いていないようでした…気付けば周りは鶴に囲まれていて、救出したフレンズさんたちと一緒に戦っていました。しかし、ヤマタノオロチさんが鶴をまとめて焼き払おうと炎を吐いて、ご覧の有り様です…幸いにも死者は出ませんでした、見ての通りみんなあちこちにひどい火傷を負っていて、とても危険な状態です…」

イエイヌちゃんが遠くを睨む。かばんさんもあたしと同じようにあの声を聞いたのかな…悪魔が名前を呼ぶ声とあのヤギの顔…

「鶴…ヤマタノオロチ…互いに破壊をもたらす獣…ヒトやフレンズに害をなすのであれば互いに倒れてくれればいいんです…」

嫌味交じりにそんな言葉を漏らす。たしかにオロチさんは炎を吐いてフレンズさんたちを焼き払った。けどオロチさんはオロチさんなりにこのジャパリパークのことを考えて戦ってくれているんだと思う。あたしはそう信じたい。

イエイヌちゃんがあたしに視線を移す。その目は悲しみに包まれながらも慈しみに満ちていた。

「ともえちゃん……」

「いえいぬ……ちや……」

「……ビーストに魂を半分食べられたんだってさ。おかげで手足を動かすどころかしゃべることもできなくなってるよ。意識ははつきりしてるみたいだし首は動くみたいなんだけど……」

「……………」

イエイヌちゃんが黙ってこちらに近付く。イエイヌちゃんはあたしの近くまで来ると優しく微笑みかけた。あたしはイエイヌちゃんへ手を伸ばしてその髪に触れようとした。

「……………大丈夫です。わたしは何があろうとあなたのをそばにいます。どんな姿のあなたでも、あなたのそばにいて、あなたを愛し、共に生きると決めましたから……」

イエイヌちゃんの手の温もりと柔らかな頬があたしの手を伝ってくる。かろうじて動くあたしの四肢もこうして温もりを感じる事ができるんだ。恐怖で凍てついた心に光が差してくるように感じた。

「……………嫌だねえ……ビーストはあんたらが気に入らないようだよ」

フェネックちゃんがぼつりと呟いた。見るとビーストがあたしたちを見下ろしている。赤く光るその目は憤怒と憎悪に満ちているようだった。

「わたしの主人さまの魂を食べたばかりか、傷つけようというのか…やってみる!!!もし手を出せばお前の喉元を食いちぎってやる!!!地獄の果てまでもお前を追い詰めてその肉体を喰らい尽くしてやる!!!」

イエイヌちゃんがビーストへ向かって吠える。…ダメ…あいつには勝てない…イエイヌちゃんが殺されちゃう…あたしはイエイヌちゃんが傷つく姿を見るのだけは絶対に嫌だ…イエイヌちゃんがあたしのために死ぬのだけは絶対に嫌だ…!

「だ…め…いいいぬ…ちゃ…!」

「ともえ…!」

イエイヌちゃんがビーストに対して構えをとる。本当にビーストと戦おうとしているのだ。あまりこう言いたくはないのだが、キュウビさんやオイナリサマのような特別な力を持たないイエイヌちゃんが神を侮蔑するビーストと対峙するなんて螻蛄之斧としかいいようがない。どうにかして逃げてほしい。そうしないとあたしの心が張り裂けてしまう。

だが、次の瞬間、橙色の一つの点がビーストへ飛んでいくのが見えた。それはビーストに斬りかかると、その体へと掴みかかった。斬られたその箇所からは青白い火のようなものが噴き上がる。よく見てみるとアムちゃんがビーストにしがみ付いてその体を斬っては裂いているようなのだ。アムちゃんの後方にはオイナリサマが迎撃の構えを

とっっている。

ビーストの七つあるうちの一つの首がアムちゃんを捉えると、アムちゃんへ向かって青白い熱線を吐いた。だが、オイナリサマの結界がそれを防ぐとビーストの攻撃からアムちゃんを守った。アムちゃんは意にも介さない様子で次の場所へと移ると再びビーストの体を斬り刻み始めた。

「おのれ…獣畜生が…！」

ビーストは確実に弱っていつている。勝利のときは近いかもしれない。あと少し、もう少し頑張ればあたしたちは勝てる。そんな気がした。

E X 7 話 「忌子」

遠い昔、遠い異国の地で、私は生まれた。私の母は半人半獣の怪物だった。私の父は神に仇なす巨人だった。そして私はその父母から望まずして生まれた子供だった。人々は私を怪物の子として恐れた。化物の子だと罵った。確かに私は人ではない両親のもとに生まれた子供だ。けど、私の姿は周りと変わらない、至って普通の人の姿をしていた。少なからず私はそう思っていた。

化け物の血が混ざっている。神の血が混ざっている。ケダモノの血が混ざっている。その赤い眼はなんだ。その醜い声はなんだ。その尖った耳はなんだ。

：知らない。生まれた時から私はそうだ。お父さんは何も言わなかった。お母さんは何も教えなかった。ただ、毎日理不尽な罵詈雑言の嵐を私は一身に受けていた。

何も教えてくれなかった私の両親だけど、私に愛情は注いでくれた。愛おしい我が子、人の言葉など恐れる必要はありません：そんな母の言葉を私は唯一の心の拠り所にしていた。父は私たちにたて突く人々を消してくれた。そんな私たちを更に人々を恐れていった。

けど、そんな私への愛情はあつという間に裏切られることになった。

ある日、お母さんは手伝ってほしいことがあると私にお願い事をしてきた。山を開墾したいから燃やしてほしいとお願ひしてきたのだ。私は口から火を吹いて山を燃やした。山はあつという間に燃えた。

やがて空からいろんな人たちが下りてきた。お母さんはアレはカミサマだといった。お母さんは私を差し出すとカミサマたちは私を徹底的に痛めつけた。雷霆、光、炎、吸魂：いろんな方法で私を痛めつけた。私は必死に戦った。けど、ボロボロになる私をみてお母さんは怒鳴った。愚図、雑魚、ケダモノ：あの時の優しいお母さんの面影はなかった。私はこの時のためだけに育てられ、使われたのだ。15年かけて育てられた私は、たった15分で壊されたのだ。私の最後は火を吐くために開けた口に鉛を入れられて、溶けた鉛が喉を塞いで窒息したというものだった。私の最初の生はこれで終わった。

.....

私の二回目の生は荒れた荒野から始まった。そこには私と同じ忌子と呼ばれる子がいた。私と違ってその子はいろんな人に持て囃されていた。優雅だ、美しい、気高い、賢い：黄金を発見し守護した彼女は知識の象徴と呼ばれていた。

対する私には相変わらずの罵声が飛んできていた。化け物、醜女、怪物、キマイラ：キマイラ：私の生前の呼び名だ。お母さんは私にキマイラという名前を付けた。二回目の生ではお母さんではなくて人が私をキマイラと呼んでいた。

けど、そんな私にも初めての友達ができた。私と同じ忌子であり、私と正反対な存在のグリフォンだ。知識の象徴とも呼ばれる彼女は、嫌われ者の私に歩み寄り、手を差し出してくれた。最初は私も断った。獅子のように気高く、鷲のように凛々しい彼女に私は不似合いだと思った。彼女は人望も厚く、人々から賢者として慕われていた。そんな彼女としては、醜く嫌われ者の私が惨めにも思えた。

しかし、彼女から何回も手を差し伸べられていくうちに私の心にも変化が現れた。私は彼女と遊ぶようになった。私にとつての初めての友達だった。最初は私も恐ろしかった。彼女は私を辱めようとしているのではないか。彼女は私を謀ろうとしているのではないか。けど、来る日も来る日も彼女は私を謀ることなく山で、川で、森で私と遊んでくれた。私は楽しかった。初めて人と触れ合う機会をくれた。初めて心から笑う機会をくれた。

しかし、そのような日々は長く続かなかった。彼女は私の元から離れていった。彼女が私の元へ訪ねることはなくなつた。私は再び孤独となつた。外へ出向くと相変わらず人が石と罵倒の言葉を投げかけてくる。私はいつも通りの嫌われ者でしかなかった。

しかし、彼女は違った。彼女は町のひと際高い所から人々を見下ろしていた。彼女は王となっていた。女王となって皆を指導する立場となっていた。対する私は生まれた時と変わらず化け物の子として皆から蔑まれるだけだった。彼女は私に気付くと憐れむような目で私を見ていた。

私は町から離れて町の近くにある森林へと移り住んだ。私は己が運命を呪った。私を嫌う人々を呪った。来る日も来る日も私は泣いて、私を生んだ我が父と母を呪った。やがて私は近くに来る人々を襲うようになった。私を嫌って石を投げた人々に対する復讐だった。楽しかった。私を嫌う人間はこんなにも弱い生き物なのかと思った。私を嫌っていた人間のする命乞いは見ていても愉快だった。私へしてきた非道なことをそのままそっくり返してやった。

私は殴った。石を投げた。服を剥いた。犯した。縛った。燃やした。閉じ込めた。埋めた。蔑んだ。そして殺した。首を切つて鳥に啄ませたりもした。醜く歪んだ顔が喰われていく様は見ていても愉しかった。

いつしか私の行動は復讐のためでなく、己の快樂のためへと目的が変わっていた。その内、森へ訪れるのは村人ではなく兵士と変わっていた。奴らは私をマンティコアと呼んでいた。人々を喰らう私を討伐しに来たのだ。私は許せなかった。私を嫌うばかりか殺しに来たのだ。私はいつも通りその兵士らを喰らった。その日から私は忌子では

なく怪物へと成り果てた。

やがて大規模な討伐隊が私の元へと訪れた。私は矢で射られ、剣で刻まれ、呪いの言葉をかけられた。死ぬ間際、一つの姿を見た。私に初めて手を指し伸ばしてくれたグリフォンだ。彼女は相変わらず憐れむような目で私を見つめていた。怪物へと成り果てた私を見下ろしていた。彼女は私を抱くとごめんなさいと謝ってきた。どういう意味かは分からなかったけど私は悲しくなった。私の第二の生はこれで終わった。

.....

私の第三の生はまたも異国の地から始まった。それは深い竹に囲まれた竹林の中からだった。自然に囲まれたそれは私の荒れた心を癒すようだった。

だけど、相変わらず私の姿は醜いままだった。赤い瞳に尖った耳、そして人々を脅かす細い声。闇をも吸い込むような黒い髪は私の心を映すかのようにだった。背中から生える非対称な赤い羽根と青い羽根は私が化け物と教えているように思えた。

私と同じ声で鳴く鳥がいる。人はそれをトラツグミと呼んでいた。私はその鳥たちと歌うように竹林の中で鳴いた。私が鳴くたびにその鳥たちは鳴き返してくれる。グリフォンとは違うけど私に友達ができたように思えた。鳥たちと共に夜に鳴く。私の

ささやかな楽しみだった。

けど、そんな楽しみも長くは続かなかった。人が竹林の中へ現れ始めた。人が私の友達を狩っている。一羽、二羽と数が減っていく。目の前で友達が殺されていつている。私はそれがとても許せなかつた。私は友達を狩ると思われの人を見つけると片っ端から狩っていった。殺された友達の数だけ狩っていった。いつしか人は姿を現さなくなつた。

人が姿を現さなくなつた代わりに私はある噂を耳にした。夜中に不気味な声で鳴く鳥がいる。その鳥は人を襲い、喰らうのだという。その鳴き声を聞いた者は忽ち病を患い、二度と治ることはないのだという。その鳥を討伐せしめた者には多額の褒賞と地位が約束されるのだという。

ひどく身勝手だと思つた。私の声を聞くと病気になるとその人たちは言つた。私はここでも嫌われる……どこにも居場所はないのだと思つた。三度目の生にしてようやく見つけた安住の地も、またしても奪われるのだと私は悟つた。

ひどく疲れた。生きる喜びは私には得られない。一人静かに鳥と歌うことすら許されない。深い絶望が私を支配した。

私の中に黒い感情が渦巻く。体は黒い影をまといつていく。私はマンティコアと呼ばれ人々に恐れられていた。そして今、私は真の怪物となる。猿の頭、狸の体、蛇の尻尾、

虎の手足：鶴と恐れられた怪物に、私はなった。

夜な夜な私は町に出向いては黒い影を纏い、夜の町に鳴いた。人々は私の声に恐怖し、次々と病んでいった。町からは生氣がなくなり、人々の営みは次第になくなっていった。人々は衰弱し、ついには精神を病んで倒れる者も出始めた。嗚呼、愉しい。人はこんなにも簡単に支配できるのだと初めて知った。人は脆い。こんなにも簡単に支配できて、あんなにも簡単に殺せるのだと初めから知っていれば、私は三度も生を無駄にすることはなかったのだ。私はひどく後悔した。

町から町へ私は飛んで人々を恐怖に陥れた。一鳴きもすれば簡単に人は恐怖に沈んでいく。その恐怖は私の餌となる。餌を食べれば私の心は満たされる。私は何よりもそれが愉しかった。私の顔はどれだけ醜く歪んでいるのだろう。それを想像するのもまた愉しかった。

ある日、二人の男が私の前に現れた。一人の男は私を弓で射ると私の喉を射止めた。たまらず私は屋根から落ちると、もう一人の男が私の心臓を刀で貫いた。

気付けば私は元の姿に戻っていた。貫かれた胸からは血が流れている。私の本当の姿を見た男の顔は化け物を見る目と変わらなかつた。人というのはいやほやり化け物である私を殺すことに何の抵抗も感じないのだろう。そう思うとすごく悔しかった。憎しみを湛えた目で男を睨む。呪いの言葉を吐こうとして思わず血を吐いた。息を吸うた

びに嗶声のような音が出てくる。もはや私の意思すら伝えることができない。

私は人からも、世界からも、運命からも、そして親からすらも愛されない、弾かれ者なんだと知った。意識が薄れていく。悲しさが溢れて涙が頬を伝っていく。願わくばもう二度と生を授かぬよう祈るしかなくなった。このような苦しみを与えてくる世界に二度と生まれたくない。そう願って私は目を閉じた。

………

暗い闇の中、私を呼ぶ声が聞こえた。まるで私の頭の中へ直接語りかけているようだった。深い淀みを感じるような、人とは思えないような、深く深く響くような、低くくぐもった声だった。私には彼の言っている言葉が理解できなかつた。けど、何を言っているかは理解できた。

その声が私の中でこだまする。怒れ、叫べと声が告げている。

私の中でドクンと何かが跳ねる。内なる自分というものが急速に広がっていく。私の自我が開いていく。内側に抑え込まれていた本当の私が目覚めていく。

そのときから私は私ではなくなつた。キマイラ、マンティコアと呼ばれた弱い私はいなくなつた。そのときから私は鶴として生まれ変わったのだ。人々を恐怖に陥れ、その

感情を食べて生きていく化け物として生まれ変わった。恐怖とは実に甘美なものだ。人々の恐怖は我が空腹を満たしてくれる。人々の恐怖は私に愉悦を与えてくれる。飽きることはない御馳走がそこかしこにたくさん転がっているのだ。このような尽きることのない御馳走、手にしない方がおかしい。

顔をあげると闇の中に巨人の頭が見えた。その全貌は見えないが、我が父テューポーンに匹敵するほどの巨体であることはわかる。タコのような大きな頭に赤く光る瞳：禍々しいようだけど、とても美しいと私は思った。

巨人が私に語りかけてきた。今度の声ははつきりと分かった。頭の中で彼の声がこだまする。

力が欲しいか。力を求めるのであれば授けよう。汝の力を以って我が眠りを覚ませるので。驕れる人々を恐怖で支配し、再び地上を我が物とさせよ。

ひどく魅力的な提案だった。この世界でこれ以上の魅力的な提案はないと思った。私が人々を恐怖に陥れ、この醜悪ながらも美しい巨人が地上を支配するというのだ。

私は彼の要求を飲んだ。私の中に彼が入り込んでくる。私の内に悪魔が生まれる。彼の力が体の中を駆け巡っていく。彼の力が私の中を支配していく。このとき、私は人類の敵対者となった。化け物と呼ばれた私は真正正銘の化け物となったのだ。私はこの力を用いて全人類に復讐をする。そして彼を目覚めさせる。そして地上に混沌をも

たらず。私の生まれた世界の破滅こそが、私のたった一つの望みとなった。彼の、我が主の目覚めこそが、私の望みを叶える唯一の手段となった。

………

眼前の獣と敵対する。かつてピーストと呼ばれたアムールトラと私は戦っていた。そいつは確実に私の急所を狙って攻撃してきている。獰猛で荒々しいながらもその技量は大したものだ。戦うためではなく殺すために私を襲ってきている。こいつは戦い慣れているだけでなく殺し慣れている。相手を殺すことに何の抵抗もないのだ。一発喰らえばそれが致命傷になることは確実だ。

はつきり言って私は戦いは得意ではない。人を襲って殺してきたりもしたけどそれはあくまでも狩りとして襲っていただけであって、正面切って戦っていたわけではない。まだマンティコアだった頃に戦ったグリフォンの兵士たちとの戦いも、一方的にやられただけだった。

「ぐっ……クソアツッ!!!」

アムールトラの脅威であるところは戦い慣れているところもさながら図体が大きいというところにある。その蹴りと一振りは私のそれを大きく上回っている。相手に傷

を負わせるためには相手のリーチに深く入り込む必要があるのだ。

「ならば……」

腕に雷霆をともし。かつて私を一方的に破った神の一人が使っていた技だ。雷霆を手にとわせると私は投げやりのように放った。ビーストに向けて稲妻が走っていく。しかし、謎の光の壁によってその攻撃は打ち消されてしまった。

「ツ……!!小賢しい真似を……!」

上空を睨む。白い狐の姿をした女が空を飛んでいた。どうやらあの女狐が張った壁らしい。

「アムールトラさん！鶴の妖術を気にする必要はありません！サポートはわたしに任せてください！あなたは鶴を仕留めることだけを考えるのです！」

「っ……」

鼻から私の攻撃なんて気にしていないようだったけど、あの女狐の言葉を聞いてから奴の目が変わった。鋭い眼光が私を捉える。あの目は私の喉を狙っている。油断したら確実にやられる。こうなったら……

「我が同胞よ!!再び我の元へ集え!!あれな獣を潰すのだ!」

私のしもべであり私の生み出した紛い物の生命である鶴を召喚する。それは実際の生物ではなく、ただの幻影にすぎない。すべては私が生み出した虚構なのだ。

壁が鶴を防ぐ。たまに壁を通り抜けることができてもアムールトラがいとも簡単に我が同胞を引き裂いてしまう。

奴には炎も爪も牙も恐怖も通用しない。奴はすべての攻撃を退けて確実に私を仕留めようと私の懐へ飛び込んでくる。寸分の油断も許されない。少しでも遅れたり回避を誤ろうものなら確実に私は殺されるだろう。

「ぐっ……かわし続けても意味がない……せめて火炎や雷霆さえ通用すれば……それにはまずあの白狐を始末せねば……」

標的を白狐に変える。アムールトラから注意をそらすのはあまりにも危険ではあるが、あの女狐を始末しないことにはいつまでも攻撃が加えれず不利のままだ。リスクは多少高いけど、少しでも互角に近づいたためにもやらなければならない。

「っ……」

女狐は自身が標的にされたことに気付いたようだ。だがもう遅い。

突然耳をつんざくような甲高い音が聞こえてきた。空を見ると三角のような奇妙な影がいくつかこちらに向かってきているのが見えた。

それは私たちの上空を通り過ぎると何かの物体を投下した。ビーストの体にそれが入り込む。すると、突如轟音を立ててビーストの体の中で大きく破裂した。

ビーストが大声をあげて絶叫する。血を吐くように熱線を辺り一面にまき散らして

いる。泣いているような、苦しんでいるような叫び声が、形を得ているかのようなようだった。「お前たち！助けに来たぞ！」

鶴の姿をしたセルリアンにまたがったタイリクオオカミが姿を現した。

「セルリアン！出番だ！」

タイリクオオカミの背後にいるセルリアンたちがビーストの元へ津波の如く押し寄せてくる。あの程度どうということでないが…

「ビーストよ、焼き払え！」

ビーストが地面に向けて熱線を吐く。地面に放たれたそれは大きく放射状に広がり、木々やセルリアンを次々と焼き払っていく。ある程度のセルリアンは駆逐することはできたけど、大半のセルリアンは上空に回避していった。七つの首から放たれる熱線でセルリアンを焼こうとビーストが頭を動かす。しかし、羽虫のように飛び回るセルリアンにはあまり効果がなかった。奴らは知能も持たない虫のような存在だというのに、的確に間合いを呼んで私たちに攻撃してくるのだ。

再び甲高い轟音が聞こえてきた。音のする頭上に目をやると先ほどの三角形の形をした何かが私たちに向かって突っ込んできているところだった。

「次から次へと…小賢しい虫けら共がア!!死ねエツ!!」

あらん限りの力を込めて稲妻と火球を放つ。一機は撃墜することはできたけどもう

一機の進行は防げなかった。爆弾槽から爆弾が放たれる。爆弾が一直線に私に向かって落ちていく。回避するのも束の間、アムールトラが私に向かって飛びついてきた。アムールトラに捕らえられた私はそいつ共々地上に向かって落ちていく。やがてアムールトラは私を地上へ向けて投げ飛ばした。アムールトラに投げられた私は地面にたたきつけられた。地面に叩きつけられた衝撃から思わずせき込んでしまう。

目の前にアムールトラが着地する。そいつは得物を仕留めるような目で私を見下ろしている。私の四度目の生もここで終わる。またしても私は私を嫌う者共の手によって終わらせられる。悔しかった。悲しかった。許せなかった。だけど：簡単にやられるわけにはいかない：せめて一矢報いて：傷の一つでもつけて：道連れにしてくれる

……

「ビースト!!!」

ビーストは上体を大きく上げると地面を揺らした。不意の地震にアムールトラがバランスを崩した。そのチャンス逃すまいと奴の腹部に向けて私の爪を叩きこんだ。手応えはある：奴にしつかりとダメージを叩きこんだのだ。血の滲む腹を抑えて悔しそうに私を睨んでいる。いいぞ、その顔だ：その感情こそが我が糧となるのだ。

黙示録の赤い竜の姿から鶴へと姿を戻していく。右手を虎に変えてその爪で切り裂こうと飛びかかろうとしたそのときだった。

「そこまでだ!!!」

突如、タイリクオオカミの声が聞こえた。私をこの世に召還した張本人だ。その目は私の目の奥深くをのぞき込んでいるようだ。

「鶴の正体、見破つたり！観念するんだ！キマイラ！」

「なっ…?!」

突然私の真名を呼ばれた。急速に私の力が失われていく。正体不明であることこそが私の力の源だ。真の姿を隠し、未知なる恐怖を与えて力を蓄えていく…それができなくなってしまうえば私は人にも劣るただの脆弱な生き物に過ぎない。

「アレに怯える必要はない！アレを恐れることこそがキマイラに力を与えることになるんだ！さあ、恐れずしてかかれ!!」

「あ…あああ…!!」

私の鶴としての姿が解かれていく。もはやビーストを操る力も残っていない。失われつつある力を振り絞って姿を保ちつつなんとかアムールトラと戦おうとした。

「このままで終われるものか…せめて貴様を道連れに…!」

最後の力を振り絞ってアムールトラに飛びついた。その攻撃も空しく空を切ると、アムールトラは流れ作業でもするかのように私を地面に叩きつけた。もはやこれまでだった。私の命運もここで尽きるのだ。

もはや抵抗も無意味だ。一矢報いることも叶わない。嫌われ者は最後まで嫌われ者なのだ。だったら嫌われ者なりに最後まで醜く抗って醜いまま死ぬとしよう。私は立ち上がると最後の悪あがきをするのだった。

E X 8 話 「終焉」

立ち上がる鶴をまっすぐ見据える。崩れ落ちていく姿からは別の姿が見える。金色の瞳は赤色に、虎の手からはただの人の手が、猿の頭からは黒い髪が見えている。アレが鶴の真の姿、キマイラなのだろうか。

「くっ……」

わずかに残る虎の爪を構えてあたしに走りかかってくる。先ほどまでとは違ってひどく緩慢だ。もはや戦えるだけの力は残っていないのだろう。黙示録の獣と呼ばれたビーストも活動を停止している。あたしは身を翻してかわすと足を掬って転ばせた。

転んだ鶴を上から見下ろす。相手にとってこれ以上の屈辱はないだろう。鶴自身がどう感じているかは分からない。戦っている最中でも殺そうと思えばいくらでも殺せた。けどあたしは鶴を殺すつもりなど最初からなかった。彼女の目はかつてのあたしと同じ目をしている。周りの全てに怯え、憎んでいる。そんな目をしている。

「何故だ……なぜとどめを刺さない……私を辱める気か……？」

「あたしにお前を殺す気はない。お前はあたしと同じ目をしている」

「なんだと……？」

ギロリと赤い瞳があたしを見上げる。その瞳は憎しみに濡れていた。

「どういう意味だ……私を侮辱しているのか……？」

その言葉に感情はない。けど、明らかに憎しみを含んでいるのは確かだった。次の言葉を放つ時にはあたしに襲い掛かってくるような気がした。

周りに続々とフレレンズたちが集まってくる。たくさんいた妖怪の鶴はもういない。フレレンズたちも、もう危険はないのだろうと判断して集まってきたのだろう。

その中の一人であるタイリクオオカミがあたしの横へ歩み寄ってきた。手には何か本のようなものを持っている。

「お前のことは調べさせてもらったよ。本当、字を読み進めていくたびに命が削られるような気がしてね……すべてこの本で読ませてもらったよ。……アムールトラ、ひとつお前の身の上の話でもしてやりな」

「……………」

あたしの過去……ピーストとして生を受けたあたしの過去だ。血に濡れた殺戮の記憶……この子はあたしと同じ過去を持っているのだろうか。

あたしは静かに語った。

「……………あたしは生まれた時からみんなに嫌われていた……ピーストと呼ばれて怖がられていた……あたしは気が付いたら鎖で繋がれて死を待ただけだった。けどあたしはそんな

のは嫌だった…なんで生まれただけで殺されなければいけないんだって思った。あたしは許せなかった。あたしはあたしを嫌うみんなを殺して回った。けど、そんなあたしを受け入れてくれた子がいた。ピーストだったあたしをその子は認めてくれた…あたしはその子すらこの手で殺そうとしていた…けど、その子はあたしをフレンズとして認めてくれた。あたしにとってその子はとてもとても大事な人…」

「う…うああああああああああああああああああ!!!」

黙って話を聞いていた鶴が突如あたしに拳を振り上げて襲い掛かってきた。目には涙を浮かべている。泣いている…?

「私は!!!皆に嫌われてきた!!!一度ならず三度の生すべてだ!!!唯一見つけた居場所も人に奪われた!!!友達と生きていた子たちもみんな殺された!!!醜い私に誰も手を差し伸べてはくれなかった…!!差し出されたと思った手も私を手放した!!!私は今の今までずっと一人ぼっちで…孤独だったんだあ!!!」

ドスドスとあたしの胸を叩いてくる。その力はとても弱く、まるで駄々をこねる子供のようなだった。やがて力なく崩れると大声をあげて鳴き始めた。

「うわああああああああああああああああああ…うあああああああああああああああああああああああ…」

大粒の涙が溢れ出ている。周りのフレンズたちは黙ってその様子を見守っている。

静かな夜に鶴の泣き声だけが空しく響いている。遠くではビーストが砂のように崩れ落ちていつている。

「アムちゃん！」

少し遠くからあたしを呼ぶ声がした。ともえたちだ。ビーストと戦っているときに見たときはフェネックに介抱されているように見えたけど大丈夫なのだろうか。

「あれ、アムちゃん…その子は…？」

「ともえ…」

鶴は地面に突っ伏してわんわん泣いている。ともえは見たことのない子を見て戸惑っているようだ。まさかこの子があたしたちを脅かした鶴だと夢にも思えない。

「アムちゃん…この子…」

「この子は鶴…化けの皮が剥がれたっていうものだよ。タイリクオオカミに正体を暴かれて力を失ったみたいなんだ」

「こ、この子が…!？」

その驚きもつともだ。鶴と呼ばれたこの子には虎の手足や蛇の尻尾なんてなくて、一部奇怪なところを除けばただの人の子供にしか見えないんだから。

ともえは泣き叫ぶ鶴を見ておどおどしている。どうして泣いているのか分からないといった様子だ。あの狂ったように笑う姿はどこへ行ったのか、あの怒り叫ぶ姿はどこ

へ行ったのか、そしてどうしてこの姿になっているのか、皆目見当もつかないだろう。

「ねえ…キミ…」

「っ…!?!」

ビクツと鶴の体が跳ねる。怯えたような顔つきでともえの顔を見上げている。

「鶴…ちゃん…? ねえ、一体どうしたのかな?」

「あ…あああ…嫌だ…」

怯えるような瞳で尻もちをついたまま後ずさりをする。もはやあの面影は残っていない。今ここにいる鶴は昔ヒト達に虐げられてきたであろう哀れな少女なのだろう。昔の自分の姿と重なるようでも他人とは思えなかった。どうにかしてこの子を救いたい…そうあたしは強く思った。

「大丈夫…怖くないよ…? あなたもフレンズさんなんですよ? だったらお友達になれるよ」

「フレンズ…?」

キョトンとした顔でともえの顔を見つめ返している。フレンズというものがわからないといった様子だ。

「この子はギリシアというところで生まれた半人半獣の怪物と巨人との間にできた子でね、忌子、鬼の子として不当な差別を受けてきたんだよ。しかも一回だけじゃなくて、二

回三回と転生してもその扱いは変わらずにさ、いじめられている内にととうとう壊れてしまったんだろうね。復讐の鬼と化してヒトに危害をなすようになったんだ。そしてその存在を知ったクトウルーという神に気に入られて、彼から復讐するだけの力を得て、世界の人々を恐怖の渦に陥れて彼の復活を目論んだというわけさ。可哀そうな子だよ。それにこの子はフレンズじゃない。このネクロノミコンによって新しく生を受けた生身の……ヒトさ」

「そんな……それに……ヒト……?」

簡単にまとめられた鶴の生前を聞いてともえが衝撃を受けている。しかし鶴は気に入らないようだ。

「黙れ……貴様らに私の何が分かる……私がどれだけの苦しみを味わってきたか貴様たちに想像できるのか!? 私は憎い……私を否定してきた人類が憎い……私はこの手で人類に復讐を……!」

「ダメなのだ!」

アライさんが突然口を開いた。

「憎しみに憎しみを返しても負の連鎖を生むだけなのだ! お前は悪いやつではないのだ! アライさんにはわかるのだ! だから悪いことは止めてみんなと仲良くなるのだ!」

「なんだと……!? 私が過去に受けた行いを全て水に流して仲良くしろというのか!」

「大丈夫なのだ！アライさんに任せるのだ！！ここにはお前を否定する者なんていないのだ！もしお前をいじめる悪いやつがいたらアライさんに教えるのだ！そのときはアライさんがそいつをお仕置きしてやるのだ！」

「ツ……！止める止めるヤメロツツ！！みんなそう言つて私を貶めようとするんだ！！私はもう騙されない……もう二度と貴様らに屈したりしないツ！！二度と屈辱など受けてなるものかツ！！」

アライさんの真つ直ぐな姿勢に鶴はひどく警戒している。感じたことのない人の温もりに混乱しているのだろう。あたしも最初はそうだった。初めて感じる人の温もりには未知の恐怖を感じるものだ。

「……ツ」

アライさんが握手をしようと鶴に手を差し出した。鶴は警戒するような面持ちでアライさんの手を睨んでいる。アライさんはめげずに鶴に手を差し出している。

「お友達になるのだ！どんなことがあるうとアライさんはお前の味方なのだ！」

ニカツと大きく笑顔を作つてみせる。屈託のない笑顔を作るアライさんに突き動かされたのか鶴の心境も変わったように見えた。恐怖と怒り、憎しみに濡れていた顔からは救いを求める表情が見て取れる。アライさんはお友達になろうと言っている。鶴はその提案に迷っているのだ。

言った。

「私は…あなたたちとは友達になれない…」

「!? なぜなのだ!? もう誰もお前をいじめたりなんてしないのだ! アライさんが守ってやるのだ! 今までいじめられてきた分幸せになれないとダメなのだ!」

「怖い…友達になるのが…友達と思ってた子もみんな私から離れていった…それに私の体と魂は全部クトゥールに売ってしまった…私は身も心も全部汚れてしまっている…私は…もう…!」

「関係ないのだ! アライさんが全部受け止めてやるのだ!」

「ッ…!」

汚れてしまった自身を全部アライさんが受け止めると言っている。まるで初めてアライさんと遭遇したときのことを思い出すようだ。あたしの血に濡れた過去もアライさんはすべて受け入れてくれた。そういう人々が持つ過去に犯した罪過をすべて許して友達になろうとするところがアライさんの持つ魅力なのだと思う。

鵜がアライさんの発言にたじろいでいる。アライさんの発言に戸惑っているのだからか。

「……アライさんの言ってくれることは嬉しい…。けど、やっぱりできない!」

「どうしてなのだ…?」

鶴がアライさんに背を向けた。その姿はとても寂しげに見えた。

「私はアムールトラみたいにはなれない。…正直アライさんを信じるのもとても怖い…。私はやっぱり鶴として死ぬべきだったんだ。あのままアムールトラに裂かれて死ねたら怪物・鶴として死ぬことができた。それで良かったんだ…」

「……全然良くなんかないのだ…」

アライさんが小さく震えている。

「私は知るべきじゃなかった。三度も人に否定された私にとって人の持つ温もりはとても強力な劇薬だ…。アライさんの提案は私にとっても嬉しいものだよ。私も友達にはなりたいたいって思う…」

「だったら…！」

「…私みたいな怪物を友達って思ってくれるならどうか放っておいてほしい…。私にはあなたは眩しすぎるんだ…」

「そんな…」

鶴の言葉にアライさんが失望するような表情を見せた。そんなアライさんに鶴はくると振り向くと少し寂し気な笑顔を見せてこう言った。

「…ありがとう、アライさん。実は私にお友達になろうって言ってくれたのはあなたが二人目なんだ」

「お前にもお友達になろうって言ってくれたのがアライさんの他にもいたのか…?」

「…うん。その子は私の元からいなくなっちゃったけど…」

「アライさんはそんなことしないのだ!!」

少しの沈黙が流れる。少し間を置いて鶴がアライさんに訊ねた。

「アライさん…あなたを信頼して少しお願いがあるの」

「…なんなのだ?」

「もし…私がすべての記憶を失ってなにもかもまっさらな状態で生まれ変わったとして

…そうしたらアライさんは私とお友達になつてくれる…?」

「もちろんなのだ! お友達にならないはずがないのだ!」

「…分かった。ありがとう」

少し悲しそうな微笑みを見せるとアライさんから離れてあたしの元へ歩み寄つてきた。その顔には覚悟のようなものが見て取れる。

「アムールトラ、お前にしかできない頼みがある」

「…なに?」

「…嫌だ。したくない…。私はこの子を救いたい。あたしと同じ境遇にあるこの子を救いたい。この子はあたしと同じく皆に嫌われてきた悲しい子なんだ。あたしは皆に救われた。だからこの子も救えるはずだ。お願いだから希望を捨てないでほしい。」

少しでも良いからあたしたちを信じてみてほしい。けど…あたしは…。

「…私はこの世界に希望を持ってない。人を信じたいけど信じることができない。人を信じるのがとても怖い…。そして一人で死ぬことすらできない臆病者だ…。だから…お前の手で私を…楽にしてくれないか…」

ああ、言ってしまった…。この子は自分を殺してくれとあたしにお願ひしてきた。どうしてあたしに断ることができようか。この子の気持ちはあたしも自分のことのように理解できてしまう。あたしがビーストでなくなったときもこの子と同じ気持ちになったものだ。血と殺戮にまみれた自身の姿をどれだけ嫌って消えてしまいたいと願ったことか。あたしは殺さなくてはならない。断ることなんてできない。この子にとって自身の死こそが救いになるのだ。ならば、あたしはすべきことは…

「後悔はしないか…?」
「……………」

鶴は黙って頷いた。だったらあたしにしてやれることは一つだけだ。あたしは鶴の首へと手を伸ばさずと首を締めあげた。

「…っ」

苦しそうな顔をしている。できることなら一瞬で楽にしてあげたいけど殺したくないという感情がその邪魔をしてくる。アイさんが首を絞めて殺そうとするあたし

を止めようと飛び出してきた。

「何をするのだアムールトラ!? 止めるのだ! ぬえは救われなきやダメなのだ!!! 止めるのだ!!!」

「ダメだ……この子は死こそが唯一の救いなんだ……! あたしが救ってやるんだ……!」

心を鬼にして鶴の首を絞める手に力を込める。爪が鶴の首に食い込んでいく。…嫌だ……殺したくない……助けを求めてくれ……そうすれば今すぐにでも力を緩めてお前を解放してやる……!

「あ……がっ……」

「フーツ……! フーツ……!」

「止めるのだ! お願いなのだアムールトラ!!!」

涙が溢れてくる。涙で視界が歪んでいく。鶴の姿はあたしの過去を映しているかのようだ。鶴を殺すことは救いを求めていた過去のあたしを殺すことと同義だ。自身を乗り越える事とはこんなにもつらく惨たらしいものなのかと現実を呪いたくなるようだった。

「あたしがお前を救ってやる……! 苦しまなくてもいいように今楽にしてやる……! 負の連鎖を断ち切って、今、この苦しみを乗り越える時だ……!」

「ダメなのだア!!!」

首を絞める手に精いっぱい力を込めると鶴の首はあっけなく折れた。わずかに抵抗していた手もだらんと力なく垂れ下がった。希望の言葉を残すことなく鶴は死んでしまった。あたしはこの手で鶴を殺してしまった。

できれば救いたいと思っていた。あたしは鶴を救ったのかもしれない。けど、それはあたしの望む形ではなかった。鶴には生きていてほしかった。けど、鶴はそれを望まなかった。あたしは鶴の望みを叶えて、あたしはそれを実行したに過ぎない。あたしは鶴を救ったのだ。

「……………」

鶴を殺した自身の手を見つめる。あたしは生まれて初めて自身の手で生ける者を殺したという感覚を覚えた。今まであたしのしてきたことは、あたしを拒む障害を壊していたに過ぎない。あたしはそれを殺害と認識していたはずだ。あたしは何人ものフレンドを殺してきた。けど、今感じているそれは何か。してはいけないことをやったようなこの感覚は何か。これが殺しというものなのか。分からない。分からないけどとても悲しい。あたしは何をやったのか。あたしは何を…。

「つ……………」

涙が溢れてくる。彼女もあたしと同じく生きたいと思ったはずだ。彼女は心のどこかで救いを求めていたはずだ。生きてみんなと笑いたいと思ったはずだ。あたしはな

ぜそれに気付かなかった？ 彼女はあたしと同じ存在のはずなのに…。

「ぬえ！ぬえ!!」

アライさんがこと切れた鶴に必死に呼びかけている。救えたはずの命に必死に呼びかけている。けど、あたしは自らその手で壊してしまった。救うと決めたはずの命を自ら壊してしまった。あたしはその事実がどうしようもなく悲しかった。

「どうしてなのだ!!! どうしてぬえを殺したのだあ!!!」

「あたし…は…」

「お前もぬえを救いたいと思ったはずなのだ!!! なのにどうして…!!!」

「アライさん…アムールトラは鶴の望みを叶えたに過ぎないんだよ…」

「けど…!」

アライさんがぼろぼろと涙を流しながらあたしに訴えかけてくる。フェネックがあたしをフォローしてくれているけどそれも空しいだけだった。

「お前は何も悪くないぜ…お前は鶴を救ったんだ…お前は嫌な仕事を自ら買って出たれた…それだけでも偉いと私は思うぜ…」

「ゴマ…ちゃん…」

ゴマちゃんがあたしを慰めてくれている。あたしは悲しさやら空しさやらで涙が止まらなかった。何もしなくても涙だけが溢れてくる。あたしの中の何かが決定的に欠

けたようだった。鶴は苦しみを乗り越えて救われた。あたしはビーストと鶴を倒し過去のあたしを乗り越えた。けど、そこにあるのは空しさだけだった。あたしは…何を成し遂げたのだろうか…。

E X 最終話 「エピソード」

鶴騒動が起きて数日が経ったある日、あたしたちはジャングル地方で黙禱をささげている。この場にきたフレンズさんたちは数こそ少ないものの、真実を知る一部のフレンズさんたちだけで鶴：キマイラちゃんの安息を祈っていた。アライさんとフェネツクちゃんは来なかった。アムちゃんは少し離れたところで一人静かに泣いている。少しみすばらしいこのお墓も、少しでもキマイラちゃんに手向けることができればと思ってあたしたちで作ったものだ。

しかし驚いたものだ。あれほど悪意に満ちた禍々しい妖を作っていたのが一人の少女だったなんて……。しかもその子は泣いていた。あたしが見た女の子は、自身を拒んだ人類に復讐するために

その力を手にしたのだ。そうして生まれたのがあたしの見た鶴という妖怪とその化身なのだ。元は周りにいじめられてきた可哀そうな一人の女の子でしかなかった。願わくば、次に生まれ変わった時は幸せな人生を歩むことができますように……

「アム……お前もここにきて拜もうぜ……？」

「……………」

アムちゃんは反応を示さない。無理もない。鶴に手をかけたアムちゃんの目には涙が浮かんでいた。相手を斬るのに一切の抵抗を示さないアムちゃんが殺すのを躊躇っていた。恐らく自分の過去をキマイラちゃんと重ねていたんだと思う。アムちゃんはアムちゃんに鶴を助けたいと思ったんだと思う。そしてそれができなかった自分を呪っているんだと思う。

アムちゃんが泣いている。まるで初めてアムちゃんと出会ったときのような。

「お前は何も悪くねえ…。鶴も感謝してると思うんだぜ…？お前は自分の手で鶴を苦しみから救ってやった…。あんまり悲しんでちゃ鶴も浮かばれないはずだぜ…？だから…な？」

「…………ごめん…。放っておいて…」

「…………わかった。すまねえな…」

力なく震える声で答えるアムちゃん。心に負った傷はかなり深いように見えた。自身の手で救えなかった命によほど深い悲しみを感じているようだった。

その様子を見ていたオイナリサマが口を開いた。

「わたしたちにできることは鶴の魂に安寧が訪れることを祈るだけです。他にやってやることはありません…。アムールトラさんの傷も時間が解決してくれることを願いますよ…」

少し悲しそうにオイナリサマが言う。確かにあたしたちがキマイラちゃんにしてあげられることは何もない。アムちゃんの負った傷もあたしたちがどうこうできるものもない。時間が解決してくれることを祈るばかりだ。

ギャップの端で木にもたれかかったヤマタノオロチさんが神妙な面持ちで目を伏している。オロチさんにも何か感じるものでもあるのだろうか。

「オロチさん…?」

「……我からは何も言うまい…」

そうぼつりと一言だけ漏らすと黙りこくってしまった。その顔は少しだけ寂しそうに見えた。

「積もりに積もった積年の恨みが人を人の道から逸らせ外道へ落とすとはな…怨讐の思いだけで鬼と化し、神にも類する力を手にするとは…人も分らんものだな」

そう独り言を漏らすとこの場を後にした。あの傲岸不遜なオロチさんが感傷的になっっている。やつぱりオロチさんはオロチさんで感じるものがあつたのかもしれない。戦いのさなかでキマイラちゃんから激情のようなものでも感じたのだろうか。

「あのヤマタノオロチがあそこまで感傷的になるとは…名も無き花も平気で踏み潰すような酔っ払いもあんな顔をするんですね…」

オイナリサマが独り言のように漏らす。ちよつとひどい言い方だけど言いたいこと

はあたしも分かる。オロチさんがあんな顔をする事自体が珍しいのだ。それはあたしにも分かる。

キマイラちゃんが眠る墓を見下ろす。このお墓の下ではキマイラちゃんが眠っている。どういう顔で眠っているのだろうか。安らかな、穏やかな顔をしているのだろうか。四度目の生も良いものではなかっただろうけど、キマイラちゃんは自分の望む形で生を終えられたはずだ。

キマイラちゃんの眠るお墓を撫でる。少し視線を下に移すとイエイヌちゃんが耳を畳んで下を向いていた。

「イエイヌちゃんも悲しいの…?」

「当然です…。わたしの大好きなヒトがあんなにも悲しい思いをしていたというのに、それに気付けなかった上に、何もしてやれなかったんです…。そんな自分の無力さと愚鈍さにとっても悔しく思っています…。それに、彼女の感じていた孤独はわたしも良くわかります…。誰にも愛されず嫌われて、暴力と蔑む目を浴びせられ続けられるのは…とても…苦しいものだと思います…」

そう言って項垂れるイエイヌちゃん。ヒトの作る社会に最も身近な存在のイエイヌちゃんが言うのと重みも違う。それに、イヌもヒトと同じく高度な社会性を持つ動物だ。イエイヌちゃんもイエイヌちゃんとしての孤独のつらさや寂しさを敏感に察知してし

まうのだろう。

重い沈黙が流れる。とてもこのパークには似合わない重苦しい雰囲気が辺りを支配している。

「死の二オイっていうのはやっぱり嫌なものですね…。鶴から感じる二オイはやっぱりヒトの持つものです…。そのヒトから感じる死の二オイというものは悲しみを湧き立たせるようです…」

イエイヌちゃんがぼつりと漏らす。

「…行きましよう。あんまり長居をしては鶴さんも落ち着かないでしょうし。ここは彼女にとつて唯一静かに眠れるところなんです」

あたしはイエイヌちゃんの提案に従つてこの場から去ることにした。ゴマちゃんやアムちゃんにも声をかけるけど、二人は後から行くという。まだ少しそつとしておいてほしいのだろう。無理強いはできない。

あたしに続いてオイナリサマやかばんさんたちもお墓を後にする。お墓を後にした道すがらオイナリサマが尋ねてきた。

「お二人とも、もう体調はよろしいのですか？」

「うん、おかげさまで」

「僕ももう平気。あのときはありがとう、オイナリサマ」

「お礼を言われるほどのことでもありません。わたしは、わたしにできることをしたままです。けど、本当に助かってよかったです…。キュウビですら解呪が難しいというのですから、わたしの力でどうにかできるのか…正直、不安だったんです」

そう言っただけでオイナリサマは目を伏した。オイナリサマもいっばいいっばいだったのだろう。自分のせいで二人の命が消えてしまうとひどくプレッシャーを感じていたはずだ。けど、奇跡的にあたしたちは助かった。あたしたちが助かったことでオイナリサマも救われたのだ。

「けど、あたしたちは助かった…。オイナリサマの助けがなかったら、今ごろあたしたちはどうなっていたか…オイナリサマが助けようって思ってくれたからこそあたしたちも助かったんだよ」

「……そう言っただけだとわたしも嬉しいです。ありがとうございます、ともえさん」

そう言っただけでオイナリサマは微笑んだ。

「かばんちゃんもともえちゃんも助かって本当に良かったよ！けど、火傷の痕は治らないのかなあ…。見るたびに痛々しくて胸がズズズキするようだよお…」

「ごめんなさい…。わたしも魂の修復と一緒にやればよかったのでしょうけど気が利かなくて…」

「え？あ！別に責めてるわけじゃないよ!?!ただちよつと見るたびに胸が苦しくなるって

「うか…」

「どうやら傷は治せるけど傷跡は治せないというのがオイナリサマの言い分らしい。確かに物語の中ではプリーストや魔法使いが勇者の傷を癒してくれるけど、整形をやるという描写はあまり見られない。それはオイナリサマも例外ではないらしい。」

「サンドスターで治せるかなあ。博士たちに取り合ってみようかな。僕意外にもひどい火傷を負ったフレンズさんもいっぱいいるし、どうにかしないとね。…バスも壊れちゃったし、どうせだからゆっくり帰ろっか、サーバルちゃん」

「…うん！」

「そう言うとかぼんさんはあたしたちとは別の道を歩み始めた。」

「じゃあ、僕たちは図書館に行くからね。バイバイ、ともえちゃん」

「うん。またね、かぼんさん、サーバルちゃん」

「うん！またね！」

「かぼんさんと別れると、あたしたちはアムちゃんたちと合流した。アムちゃんも少しは立ち直れたようだ。心なしかゴマちゃんの顔も少し柔らかくなって見えるように見える。」

「あたしたちは前へ進んでいく。立ち止まったり塞ぎこんではいけない。痛みや苦しみを乗り越えて強くなるんだ。一度膝をついたとしてもそこからまた立ち上がれば良

い。あたしたちの感じる痛みこそが次を導く指標となるんだから。キマイラちゃんの死を無駄にははいけない。あたしたちは強くなるんだ。旅は続いていく。

.....

「一時期はどうなるかと思ったが事なきを得たようだな」

「さすがの私もどうなるかと思っただぞ」

深い霧に包まれた森の中でわたしとカタカケは静かに語り合っていた。最初は我々も介入しようかとも思ったが、どうやらそうするまでもなかったようだ。

「ヒト…フレンズの力も侮るものではないな」

「うむ。神を騙る愚かしくも傲慢なる者もヒトの力の前には無力なのだ」

「で、あるな」

枯れた木の上でくると舞いながらカタカケと問いかけをする。あの鶴も不幸なものだ。どんな業を背負えばあのような道を辿ることになるのか。カミサマの趣味の悪さにはほとほと辟易させられる。

「しかし、もし介入するとしてどうするつもりだったのだ？」

「ふむ…地震でも起こすか、空から流星でも落とすか…」

「できるのか?」

「まさか」

できるわけがない。できないから代わりにやってもらうのだ。我が母なる大地に。

「大地は応えてくれるのだろうか」

「まさか神頼みする気だったのか。格好悪いぞ、カンザシよ」

「ならばどうしろというのだ、カタカケよ。あのような魔獣には我々では立ち向かえぬぞ。大地の力でも借りなければどうすることもできぬ」

「それもそうだな」

よくわからないやり取りをしながらどうすればあの魔獣に立ち向かえるか二人で議論をした。結果としてフレンズの力ではどうすることもできないという結論に達した。アムールトラは魔獣とやり合っていたようだが。

「アムールトラはどうだ? あいつならあの魔獣に勝てたと思うか?」

「さあな、傷は負わせていたようだが勝てたかどうかは怪しいな」

「そうだな。私もそう思う」

結論の出ない話をしながら私たちはふわりと舞って場所を変えるために移動した。行く先はあの湖。雨が降ったことよってできたあの湖だ。未だ湧水は湧き続け、絶えず湖に水を注いでいる。

湖畔に腰をかけ、湖から吹いてくる冷たい風に身を任せる。

「ここは良い所だ。ここから新たな物語が始まると思うと心が躍るようだ」

「お前らしくないな、カタカケよ。だが、その気持ちは私も分かるぞ」

「そうだろう。いつかこの大地も目覚める時が来るのだ。喜ばしくもあるが、少し寂しい感じもするな、カンザシよ」

「だな、カタカケ」

そんないつ来るかもわからない話をカタカケと二人で語り合う。静かで生命の気配を感じないこの場所ではあるが、もしその時が来ればカタカケと二人で祝福するつもりだ。私たちはこの場所を手放すことになるのだろうか。新しい場所を求めて旅立つというのも悪くないような気もする。

ヒヨー…

「うん？」

「何か聞こえたな、カンザシよ」

ヒヨー…

「鵜か？」

「鵜は倒されたはずだぞ」

二人で立ち上がり鳴き声のする方へ顔を向ける。そこには見慣れないフレンズの姿

があつた。少し怯えたような、赤い眼をしたフレンズだ。

「見慣れないフレンズだな。さっきの鳴き声はお前のものか？」

「生まれて間もないようだな。よければ名前を聞かせてくれないか？」

少し躊躇するような素振りを見せると彼女は口を開いた。

「私…は…」

「怯えなくても良いぞ。まずは我々と友達にならないか？お前もフレンズであれば良き友になれると思うぞ」

「友…達…？」

「うむ、そうだ。友達だ」

怯えているのか中々こちらに来ようとしめない。だから私たちから歩み寄った。

「友達になるには名前を知る必要がある。まずは名前を聞かせてくれ」

新しいフレンズが生まれた。新しい物語は始まったのだ。まずはこの子が生まれたことを祝福しましょう。

R o t t e d O n e ' s P h i l o s o p h i a

??-1 「新たなる旅路」

霧の立ち込める森を出た我々はこのトラツグミというフレンズを連れてパークを案内していた。迷ったフレンズを森の外へ帰すことはたまにしているが、こうしてパークのガイドをするのはわたしとしても初めてのことだ。

カンザシがトラツグミにパークの掟を説いている。パークでは自分の力で生きていくこと。セルリアンというモンスターに注意すること。そして困ったことがあればいつでも我々の元へ来てもいいということ。早速何だか矛盾しているような気もするが、あえて突っ込まないようにしよう。

そして我々は平原地方を抜けると図書館へと続く迷路へ差し掛かった。

「さて、どういう経路で行けばよかったか」

「真ん中をまっすぐ行けばよかったのではなかったか？」

「普段は飛んでいってるから忘れてしまったな」

どうしたものかと二人で頭を悩ませる。

「…飛んでいけばいいんじゃないの？」

「そうだな」

「そうするか」

我々の悩みは物の数秒で解決された。わたしたちはいつものように飛んでいくことにした。幸いにもトラツグミも鳥のフレンズであるので、三人で仲良く飛んでいくことにした。トラツグミも生まれて間もないというのに立派に鳥らしく飛んでいる。

「…あんたたちどうやって飛んでるの？」

頭の羽をはばたかせて飛ぶトラツグミが尋ねる。

「そういえばどうやって飛んでいるのだろうな」

「今まで気にもかけなかったぞ」

「…ヘンなの」

そうしてわたしたちは図書館へとたどり着いた。いつものように博士たちにじやばりマンを無心する。

「博士、きたぞ」

「……せめて要件を言うのです」

「言わなくても分かるはずだぞ」

「我々が来たということはボスがじやばりマンの配給をサボっているということなのだぞ」

「まったくお前たちは…」

いつものようにコノハたちと愉快なやり取りをする。なぜかトラツグミがジト一とした目線を送ってくる。何か変なことをしているのだろうか。

「ほれ、1か月分はあるのです。さっさと帰るのですよ」

「…カンザシ、そいつは誰なのですか？」

水臭い対応をしてくるコノハと見慣れないフレンズに何やら冷めたように聞いてくるミミちゃん助手。聞かれたのならば答えてあげるが世の情けというものだ。知識のフレンズたる賢者にこのフレンズを紹介してやるとしよう。

「この子はトラツグミというフレンズだ。サンドスターの影響がないはずの我々の寢床に突如として生まれたのだ」

「まったく驚きであるな」

「…それは本当なのですか？あんなところでフレンズが生まれるなんてとても考えられないのですが…」

「うむ、もつともな疑問であるな」

「正直なところ我々も驚きを隠せないのだ」

何やらトラツグミがやさぐれているように見える。もう放っておいてくれと言ってやるようだ。しかしそうはいかない。せめてこの子の心にある壁にひびでも入れてや

らねば。この子は心に何か良くないものを持っている。その呪縛から我々が開放してやらねばな。

「ところでお前、自分が何のフレンズなのか分かるのですか？」

「…鶴…。トラツグミよ」

「ほう」

彼女の名を訪ねたコノハがトラツグミの名を聞いてちよつと驚いたような顔をしている。昨日の今日で鶴が倒されてトラツグミが新しく生まれたのだ。偶然にしても少しできすぎているというものだ。驚くのも無理もないだろう。

「失礼したのです。ちよつと前に鶴という怪人がパークを混乱に陥れたことがあったので、お前の名を聞いて少し驚いたのです」

「しかしすごい偶然なのです。こういうこともあるのですね、博士」

「ですね、助手」

「……………」

やはり嫌そうな顔をしながら目を伏している。あまり自分のことを話されるのは好きではないのだろうか。まあ、あまり気持ちの良いものではないのは確かなだろう。

「…それで、もう用は済んだのですか？まさかとは思いますがトラツグミの面倒を我々が見ろというのではないでしょうね」

「まさか、わたしとカタカケで面倒を見るつもりだぞ」

「…聞き間違えなのでしょうか。カンザシがわたしとカタカケで面倒を見るという風に聞こえたのですが…」

「聞き間違えなどではないぞ。我々で面倒を見ると言っているのだ」

「…あのフウチョウコンビが自分たちで面倒を見るとは…。またビーストが復活するよ
うなのです…」

「お前たちは我々を何だと思っているのだ」

失敬な奴らだ。我々だつて困っているフレンズがいたら助けるのだがな。特にこの
トラツグミは放っておけない。せめて自立するまで我々で面倒を見てやるつもりだ。

トラツグミの紹介も終わり、ジャパリまんを受け取った我々三人は図書館を後にし
た。相変わらずトラツグミの表情は険しいままだ。ここは私が一肌脱ぐとしよう。

「トラツグミよ。そのような顔のままだと来る福も逃げていくぞ。ほれ、わたしみたい
に笑ってみるのだ。にぱー」

「気色悪い顔をするな、カンザシよ」

「失敬な」

「……………」

トラツグミがジトーとした顔で見えてくる。なぜだかゾクゾクしてくるようだ。

「カンザシの笑顔はにぱーっというよりニチャアが正しいな」

「さすがのわたしも傷つくぞ」

「そのような顔では来る福も逃げていくというものだな。私の福のためにも今すぐそのニヤついた顔をやめてくれたまえ」

「ひどいぞカタカケ。ひどいぞ」

「…ふっ…」

「おっ?」

カタカケがトラツグミの微かな笑いに反応したようだ。アレはカタカケにいじめられている私を鼻で笑っているのだ。笑ってもらおうとは思ったが鼻で笑われるとは私としては大変遺憾である。

「やるではないかトラツグミよ。カンザシを嗤う時にはそのように笑うのが正しいのだぞ。笑うのではなく嗤うのだ。ゆめ忘れるでないぞ」

「…ふっ。面白いわね。あなたたち」

目を細めてわたしたちを笑っている。笑顔になれたのならこれでいいのか?カンザシフウチョウという尊い犠牲の元トラツグミは初めて笑った。南無三わたしよ。安らかに眠り給え。

「わたしは悲しい」

「トラツグミは嬉しいようだぞ」

「嬉しがっているのはお前だろう、カタカケよ」

そんな詮無いやりとりをしながら我々の縄張りである霧深き森へと帰っていった。

.....

森へと着いた。面倒を見るとは言った我々ではあるが、懸念すべきことが一つだけあった。トラツグミはここで暮らしていけるのだろうか。我々は森で斃れているフレンドを何人も見てきた。少し目を離れた隙にトラツグミも行き倒れになるのではないか。心苦しくはあるが、ここはトラツグミのためにも放してやるべきではないかと思つた。

「トラツグミよ。我々が縄張りとしてこの森であるが、正直に言うところにはあまりフレンドが住むにはこれ以上ない劣悪な環境でな」

「サンドスターがない故、通常の倍近い速さで体内のサンドスターが消耗されていつて、それでいて迷いやすい。ここで何年も暮らす我々もたまに迷うくらいなのだ」

「我々は無理やり一緒に暮らそうとも追い出そうともするつもりはない。ただ、今の体に慣れるまでしばらく我々とは別で森の外で見聞してみてはいかがかと思うのだが」

トラツグミに我々からの提案を申し出てみる。あまり良い顔をしていないようだが一つ意見を聞いてみよう。

「私を手放そうというわけではないの?」

「いいや。わたしたちと一緒にいては、ぽっくりお前が逝ってしまうかもしれぬと懸念しておったのだ」

「今回はたまたま見かけなかったが、よく行き倒れて蟲共に喰われている獣の亡骸を見かけるのでな。そんなお前の姿を見たくないとわたしたちとしても思うのだ」

「……よくそんなところに住もうと思うわね」

「気に入ってるのでな」

「静寂こそがわたしたちの友なのだ」

「……ふふつ。やつぱりあなたたち、面白いわ」

再びトラツグミが笑ってみせた。今回はわたしを嗤っていない。純粹に我々のやり取りを見て笑ったのだ。彼女も良い笑顔を見せてくれる。

「わかった。じゃあ、行くわ。また帰ってくると思うから、その時にはここで迎え入れてくれると嬉しい」

「もちろんだ、友よ。我々はいつでも歓迎するぞ」

「私とカンザシ、いつでもお前のために門戸を開いて待っているぞ」

そういうとトラツグミは行つてしまつた。新しく生を受けた彼女だが、果たして“今度”は良い生を受けることができるのだろうか。今回の生において彼女を縛るものは何もない。縛っているものがあるとしてもそれは彼女の思い込みに過ぎない。この旅を通じて立派に成長して帰つてくることを楽しみにしておこうか。

そして、今回受けた転生は偶然ではなく必然だ。彼女には望まずとも受けた宿罪がある。それを果たす良い機会になるやもしれん。

「神々よ、見ているか。お前たちの下らぬ娯楽のために背負わされた罪を彼女は果たそうとしている。わたしはこのような罪を着せたお前たちを呪う。驕れるお前たちをわたしは否定する。なんとでも呼ぶと良い。我々は何度でもお前を否定してシャーマン：フレンズとしての生き方を見せてやろうぞ」

天を仰ぎ神を否定する。そしてわたしたちは新しく生を受けた鶴を祝福した。新たなる旅路を鶴は歩いていく。我々はそれを遠くから見守るとしよう。少なからず行き倒れるのは我々としても本望じゃない。だが、困難には立ち向かつて見事打ち破つてほしい。我々はそれを遠くから見守つてほんの少しの手助けをしてやるだけだ。

— 堕ちた天使が立ち上がる時だ。物語は始まつた。果たして彼女がどういう道を歩んでいくか、我々としても楽しみだ。

??—2 「出航の時」

雨が降っている。いくら鬱蒼と生い茂っているジャングルでも全ての雨を防ぎきることはできない。葉と葉の間から漏れる雨水があたしたちを打ち付ける。けど、そんな雨水の冷たさも忘れるような演奏にあたしたちは耳を傾けていた。

カンカンと空き缶を打ち付ける音がする。雨水が不規則に空き缶を打っている。それに比するように規則的に空き缶を打つフレンズさんがいる。時折りリズムを崩したり、雨音に共鳴するように空き缶を叩いている。そんな素敵なパーカッションを打っているのはコツメカワウソちゃんだ。

カンカンと空き缶を打っている。なんでも川のあちこちに転がっているゴミを集めて楽器にしているらしい。彼女にかかればどんなゴミや倒木でも遊び道具になるのだそう。塗料が入っていたであろう空き缶やプラスチックの空き容器も心地の良いドラムの音に変わっている。プラスチックの空き容器はスネアの音のようだ。鉄板や中華鍋も見事にシンバルへと変身している。緩急をつける雨水のパーカッションも聞いていて心地よい。

コツメカワウソちゃんの頭が忙しく揺れている。音に身を任せているのだろうか。

激しく揺さぶったりリズムに合わせて頭を揺らしている。

ひと際大きなクラッシュシンバルの音を鳴らすとコツメカワウソちゃんはほんの少し身震いした後に背をピンと伸ばした。雨が葉を打つ音だけが聞こえる。

「……ツハアー！」

ばちばちばち。

あたしたちは心からの賛辞と共に惜しめない拍手を送った。他の三人も無言ながらも敬意を表するように惜しめない拍手を送っているようだ。

「いや〜どうだったかな〜？」

「すごいよ！音を完全にコントロールしているみたい！聞いててすごく気持ちよかった

！心が奮い立つようだよ！」

「…あたしも野生の心が目覚めそうだった」

意外なことにアムちゃんが感想を述べた。この原始的な音楽にアムちゃんも惹かれるものがあつたのだろうか。それともこの荒いながらも力強い音に純粹に魅せられたのだろうか。アムちゃんにしかわからないだろうけどアムちゃんの感想はあたしも感じるどころだった。

「雨の中なのにすごいパフォーマンスですね。雨のなかだつていうのを忘れるようでした」

「へへへ。けどこれって雨の中でしかできないんだよ」

「? どういうことなんだぜ?」

「晴れてる日にはできないんだよ!」

雨の日にはできない? 晴れてるときにはより良いパフォーマンスができそうなものだけだ。

「なんで晴れてる日にはできないんだ?」

「雨が降っているとリズムに乗りやすいからね! 雨が音の基礎を作るんだよ!」

「ふ〜ん」

う〜ん、よくわかんない…。確かに雨の音は聞いて癒されるけどそれを基礎に音楽を作っていく…? コツメカワウソちゃんはなんだかあたしたちとは違う高次元のところにいるようだ。

「もつと聞きたい…」

「ごめんね。今日はもう疲れちゃった。また次に雨が降ったときに来てくれたらやるかも! そのときまでバイバイだよ!」

そういうとコツメカワウソちゃんはせつせと荷物をまとめると退散してしまった。残されたあたしたちは再び歩みを進めた。

鬱蒼と生い茂るジャングル地方を歩いていく。遊歩道なのか獣道なのかわからない

道をひたすら歩いていく。行く当てはない。ただ素敵なフレンズさんに出会えるといいなと思っていた。

いくらか歩みを進めているとミミちゃん助手と豹みたいなフレンズさんが話しているところに出くわした。助手ちゃんが一人で行動しているとは珍しい。けどなにやら深刻な顔をしている。何を話しているのだろうか。

「ミミちゃん、何を話しているの?」

「ともえ…」

少し悲しそうな顔をしている。鶴に関することがミミちゃんたちの間でも分かったのだろうか。

「やあ、アンタたちが噂に聞くともえとその一行かい?アタシはジャガー。よろしく」

「あつ、初めまして!ともえです!」

「あつははっ!アンタたちのことは聞いてるよ。いやあ、懐かしいねえ。パークを旅するヒトとフレンズの噂。かばんたちのことを思い出すよ」

「かばんさん…やつぱりすごい人なんだなあ」

またかばんさんの名を聞くことになった。改めてかばんさんが偉大なヒトなんだと思いが知らされる。

「ところで、何を話してたの?」

「……かばんがかつて行つていたゴコクエリアというところは聞いたことはありませんか？」

「名前だけは知つてるぜ。あと、セルリアンがいつぱいで危険な場所だつてことも」
「…そのゴコクエリアで、フレنزズではないひどく不気味なモノが徘徊しているとオイナリサマから伝達があつたのです」

ゴコクエリア：。かばんさんが十年かけてセルリアンを倒して平定したところだつ
け…。でも…フレنزズではない不気味なモノ…？ 鶴はもういないはずだし…。

「それって？ どんなの？」

「オイナリサマの話では遭遇したフレنزズが悉く恐慌及び狂乱の状態になるという話なのです。フレنزズたちの噂では不気味な教会があつて、そこからその不気味なものが出入りしているという話もあるのです。調査しようにもまともに話も聞けずになしのつ
ぶてなのです」

「へ〜…」

変な話を聞いたものだ。フレنزズを恐慌に陥れる不気味なモノ…。やっぱり鶴の残
党が生きているとしか…。

「鶴が実は生きていてゴコクエリアでクトウルを蘇らせようとしているのではないの
でしょうか？」

「それはないのです。その”不気味なモノ”の姿は全身が真っ黒で顔がないということが判明しているのです。そいつは長い爪に枝のように細い四肢、かつてヒトが信仰していたある宗教のシスターのような恰好をしているらしいのです。それにオイナリサマが鶴とは明確に関連性がないと否定しているので我々はそれを信じてもいいと思うのです」

「なるほど…」

「どうやら鶴とは関係ないらしい。自然から生まれたものなのだろうか？ サンドスターの暴走とかも考えられる。はたまた別の誰かが良くないことを考えているとか…」

「とりあえずわたしは一度図書館に戻ってかばんと相談するのです。かばんなら何か知っているかもしれないのです」

「あたしも行く！ イエイ又ちゃんやみんなもいいよね？」

「もちろんです！」

「私も異論はないぜ！」

こうしてあたしたちは図書館へと向かっていった。

………

「ゴコクエリアで、ねえ…」

かばんさんが難しい顔をしながら助手ちゃんの話聞いてる。かつて自分たちの手で平和を勝ち取ったゴコクエリアで再び異変が起きているのだ。そう思ってしまうのも無理もない。

「せつかく私たちが平和に暮らせるように頑張ってきたのに…。いったいどうしてなの…?」

「それは分からないのです。オイナリサマが主導で目下原因を探っているのですが、手がかりの一つもつかめないというのが現状なのです」

「……………」

悲しそうに俯くサーバルちゃん。大きなお耳も下を向いてより一層悲しみを引き立てているようだ。

「ねえ、博士。僕たちでなんとかできないかな。僕たちは見てきたんだ。セルリアンの影におびえて暮らすゴコクエリアのフレンズたちを。せつかく頑張つて平穩を手に入れたというのに、また得体の知れない何かに怯えて暮らさないといけないなんて僕には耐えられない」

「…そうだよ。私もそう思う。博士、私たち、もう一回ゴコクエリアに行きたい。ゴコクエリアに行つてみんなをけたい！いいでしょ!?博士!!私たちがならきつとやれるよ!か

「ばんちゃんみんなを助けてみせるんだから！」

「…止めはしないのです。私としてはここに留まってほしいのですが…強制はしないのです」

「くれぐれも気を付けるのですよ。特にかばん、お前は鶴に魂を食べられた過去があるのです。今回の不気味なモノも似たような類だと思われるのです。危ないと思ったら無理せずにキョウシュウエリアに帰ってくるのですよ」

「…うん。わかった」

かばんさんはそう言うのと立ち上がった。その目には覚悟のようなものが見て取れる。

「まずはバスの整備をしよう。それに武器の手入れもしくちや。今回の敵はどういうものかも分からないし、入念に準備しなくちやね。サーバルちゃん、手伝ってくれる？」

「うん！」

そう言うのとサーバルちゃんとかばんさんは外へ出てしまった。…あたしたちも何かできることをしなくちや…。

「…お前たちも行くつもりなのですか？」

「ふえ!!」

顔に出ているのだろうか。あつさりと博士ちゃんに見破られてしまった。けど、博士ちゃんの顔には諦めのような表情が見て取れる。

「…どうせ言っても無駄だとはわかってはいるのです。ともえ、お前もかばんと同じく鶴に魂を食べられたことがあると思うのです。かばんにも言ったことですが、危ないと思つたら無茶をせずに逃げるのですよ。そしてイエイヌにアムールトラ、ロードランナー…お前たちがいれば何の心配もないと思うのですが、しっかりとともえを守るのですよ。いいですね?」

「…はい」

「…」

「あつたりまえだぜ!」

三人は力強く博士ちゃん言葉に応え、あたしを守ると誓ってくれた。これほど頼もしく嬉しいことはそうそうない。三人の返事を聞いただけでもあたしはこの異変を解決できるような気がしてきた。けど慢心してはいけない。なるべく三人には迷惑をかけたないようにしないと。

あたしは外へ出るとかばんさんの元へと駆け寄った。

「かばんさん!あたしたちも行く!出航はいつになるの!?!」

「え?」

外でバスにフロートを付けていたかばんさんがなんとも間抜けな声をあげた。

「と、ともえちゃんが!?だ、ダメだよ!ゴコクエリアは危険なところなんだよ!?!」

「大丈夫だよ！あたしにはイエイ又ちゃんやアムちゃんみたいに頼れるお友達がいるんだもん！それにあたしだって弱くない！かばんさんに剣の扱い方だって教わったしね！」

そういつて剣を振るうような動作をしてみせた。でたらめに剣を振るうようなあたしの姿を見てかばんさんが苦笑するような顔を見せた。まるでしやぐ子供を見ているかのような顔だ。

「ははは…。そうだね。でも、真面目な話、向こうで戦っていける覚悟はあるのかい？僕ですらあつちから帰ってくるのに10年かかったんだ。今回は前回と違うとは言えど、どれくらいか分かるか分からない。正直に言えば僕もゴコクエリアに行くのはとても怖いと思ってるんだ…。それにセルリアンが復活しているかすら定かじやないしね。それに話を聞く限り、ゴコクエリアを脅かしているのはどうもセルリアンやフレンズの類とは違うみたいなんだ。ともえちゃんも…僕みたいになる覚悟はあるのかい…？」

少し悲しそうな眼をしながら上からあたしを見下ろしている。それは戦うために、生き残るために一人のお友達を捨てたヒトの目のように思えた。そんなかばんさんの目を見てあたしの中に迷いが生まれた。本当に行くべきなのか。あたしの感じているこの義憤のような感情は一時的なものではないのか。一晩寝て考えよう。起きてこの気持ち冷めていたら行くのを止めればいい…。そう思えてきた。

ああ、あたしはなんて冷たい人間なのだろう。かばんさんの放つ言葉だけであたしの気持ちは揺れ動くものなのか。あたしの感じるこの気持ちはただの醜悪なエゴでしかないのか。そう思うと悔しくてならなかった。けど、そんなあたしにかばんさんは優しく語りかけてくれた。

「僕はキミの気持ちを尊重するよ。怖いという気持ちもよくわかる。さつきも言ったけど僕もとても怖いんだ。初めてゴコクエリアに足を踏み入れた時もそう。ワクワク感とちよつびりの怖さにたじろいたものさ……。けど、それもあつという間に潰れてしまった。ワクワク感なんてなくなつた。あるのは死に対する恐怖と、いつセルリアンに襲われるか分からない恐怖だけ……。それをもう1回体験するのcaと思うと……怖くて泣きそうになるんだ……」

かばんさんは言い終えると小さくうずくまってしまった。その姿は幼い少女のように思えた。あれほどたくましく見えた後ろ姿も鎧を脱いでみればただの幼い少女でしかなかつたのだ。あたしにはなんだかそれが衝撃的に思えた。

「かばんさん……」

「……ごめんね、しおらしくなっちゃつて。それで、どうかな。ともえちゃんにはゴコクエリアで戦つていく勇氣はあるのかい？」

かばんさんは立ち上がると再びあたしの目を見つめてきた。

少しの間逡巡する。本当にこれでいいのか。後悔はしないか。やや後ろめたような感情があたしの決断を鈍らせる。けど、あたしの感じたこの確かな気持ちは…

イエイヌちゃんに目を見遣る。イエイヌちゃんはまつすぐこちらの目を捉えると黙ってあたしに頷いてみせた。だつたらあたしの出すべき答えは一つだ。あたしはかばんさんの目をしっかりと見返すところ答えた。

「…行きたい…。行きたいです、かばんさん！あたしの感じているこの気持ちはきつと本物だと思うんだ！アムちゃんとお友達になつた時もあたしは似たような気持ちを感じた…。あたしもイエイヌちゃんやかばんさんといっしょにみんなを助けたい…。あたしもかばんさんみたいに強くなりたい!!」

「…っー」

かばんさんの目が大きく見開いた。まるで予想だにしていなかった発言を聞いたかのような。けど、あたしの気持ちは本物だ。あたしはゴコクエリアで苦しむみんなを助けない。そしてかばんさんみたいに強くなりたい。それにかばんさんは決して強いだけじゃない。かばんさんがどうして強くなったかはあたしは知らない。けど、みんなを助けたいから自分の腕を磨いていつて強くなったんだと分かる。それだけは確かなんだとあたしは自信を持って言える。かばんさんが時折見せる悲しそうな目は苦しみや痛みを乗り越えてきた目だ。それには皆を助けるために斬り捨ててきたものがいつぱ

いあるのだろう。あたしにはそれが分かるんだ。

「……僕もまだまだみたいだね……。いいよ、一緒に行こう。出航は明日の朝の予定だよ。それまでには準備を済ませなくちゃね。サーバルちゃん、新しいお客さんだ。じゃぱりマンも多めに必要になってくるからそっちの手配をお願いするよ。キミたちにはこの部分をお願いしてもらえるかな」

かばんさんの指示に従ってあたしたちは準備を進めていく。あたしたちもいよいよゴクエリアに旅立つ時だ。かばんさんたちを10年にわたって閉じ込め続けた魔境の地……。ゴクエリアを彷徨う”不気味なモノ”とは……。博士ちゃんや助手ちゃんの話によればフレンズでもセルリアンでもない別の何かという話だ。あたしたちはそれらと戦っていく。痛みや恐怖に屈しないようにあたしは戦っていくんだ。長い戦いが始まる。

??—3 「ゴコクエリア」

大海原に行く。と言っても既にキョウシュウエリアからゴコクエリアは見えていた。思えばかばんさんと初めて会ったときも既に遠くにゴコクエリアの姿は見えていたんだっけ。

固唾を飲んでその島を見遣る。あれがあたしたちの向かう魔境、ゴコクエリアなんだ。

緊張から体が震えてくる。イエイヌちゃんやゴマちゃんの表情もいつになく険しい。アムちゃんはずっとその姿を睨んでいる。遠くに霞んで見える島影はまるであたしたちを呑み込もうとしているかのように見えた。

「不思議だな……。初めて行くときには何も知らない所に行くのにワクワクしたものだ、今は恐怖と緊張しか感じない……」

独り言のようにかばんさんが呟いた。

「……僕たちだけで……やれるのかな……」

消え入りそうな声でほつりとかばんさんがそう漏らした。やっぱりかばんさんも怖いと思うのだろうか。ゴコクエリアで過ごした十年という月日の重さがあたしにも感

じられるようだ。

「モウソロソロ トウチャクスルヨ」

ラッキーさんの無機質なアナウンスが聞こえた。気が付くと目の前には砂浜が広がっていた。バスが砂浜に乗り上げる。しかし場所が悪かったのかスタックしてしまった。タイヤが沈んで胴体がつんのめってしまった。

そのときだった。

がさがさと近くの茂みが音を立てた。もしやセルリアンかと思つて身構えるあたしたち。アムちゃんの前へ出て臨戦態勢をとる。負けじとサーバルちゃんも威嚇の姿勢をとっている。

「だ、誰か……！」

茂みから一人のフレンズさんが飛び出してきた。髪や衣服、ソックスに至るまで全身真っ白のフレンズさんだ。フレンズさんにありがちなぶち模様や縞模様のようなものもなく、辛うじて靴に当たる部分に黒いグラデーションがかかっているくらいものだ。ロバちゃんみたいなたてがみを模したポニーテールに至るまで真っ白という全身真っ白尽くしだ。アルビノ化したフレンズさんとも思つたけどそれも違うように思えた。

「あ、あなたたち……！助けて頂けませんか!？」

「よ、よくわかりませんがわたしたちの後ろに…!」

「…恩に着ます…!」

真つ白のフレンズさんを追ってきたのか黒いシスター服に身を包んだ”不気味なモノ”が姿を現した。

「あれは…!」

かぼんさんが驚きの声をあげた。枝のように細い腕、隆起こそあるものの目も鼻も口もないのつペリした顔、異様に長い指のような爪…。体つきも異様に細く骨と皮だけと錯覚するようだった。あれが博士ちゃんと助手ちゃんの言っていたゴクエリアを徘徊する”不気味なモノ”…。

「…ツ!!」

「アムちゃん!!!」

アムちゃんが真つ先に飛び出して行った。アムちゃんがソレに斬りかかると、あつさりとのソレの体に四つの裂傷ができた。しかしどういうことか、その裂傷の痕から黒い霧のようなものが飛び出すとアムちゃんの体に纏わりついてきた。

「ツ!!?」

「アムちゃんツ!!!」

「アム!!!」

アムちゃんが必死に身をよじって抵抗している。しかし、実態を持たないそれは容赦なくアムちゃんの体を包み込んでいつている。やがて”ソレ”は顔：仮面を外すとぼつかりと空いた真つ黒な空間をアムちゃんの顔へと向けてきた。

「あつ……」

「ダメーやめて!!!」

瞬間、”ソレ”の首が吹き飛んだ。映像がスローモーションのように流れる。アムちゃんみたいな腕をした鳥みたいなフレンズさんが”ソレ”の首を叩き切ったのだ。黄色のような茶色い体に黒いぶち模様のようなものが散っている。頭の羽を見る限り鳥系のフレンズさんだろうか。

真つ黒の霧のようなものが”ソレ”の首元から溢れ出てくる。首を刎ねたそのフレンズさんの元へ黒い霧が流れていく。やがてアムちゃんにまわりついていたそれもそのフレンズさんに吸い込まれてしまった。

「……………」

「あ、あなたは……?」

その子は黙って俯いている。ぶち模様の目立つ茶色い体に鳥系のフレンズさん特有の羽がある。しかし、その腕はアムちゃんみtainな半分獣に戻ったような見た目をしている。もしかしてこの子もビースト……?」

そもそもあの黒い霧を吸い込んでしまったんだ。あれは大丈夫なのだろうか。

気が付くとそこには黒いシスター服とあの仮面が転がっているだけだった。この子によつてあの”不気味なモノ”は倒されたのだ。

「あ、あのっ！ありがとう！良ければお名前を教えてくださいませんか！そ、そうだ！あたしは…」

「……知ってる。ともえでしょ。私は…トラツグミ…。一つだけ忠告しておくわ。それっ…その白いヤツには注意しなさい。そいつは良くないものを持つてる…」

そういうとトラツグミと名乗ったフレンズさんは飛んでいってしまった。けど…あの忠告はどういうことだろう？良くないものを持つてる…？

「…はっ！」

そうだ…。アムちゃん！何をボーっとしてたんだろう、あたし！

「アムちゃん！大丈夫!？」

「う、うん…。へーき…」

すこしよろつとしながら立ち上がった。少し心配だけどどうやら平気なようだ。

「よ、よかつたあ…。もう！イノシシさんじゃないんだからやみくもに突撃しちやダメだよ！すっごく心配したんだから！」

「う、うん…。ごめん…」

少ししょんぼりしている。どうやら反省しているようだ。

後ろの方ではあの真つ白なフレンズさんがみんなから介抱を受けているようだった。どうやらあまり体調がすぐれない様子で少し危なっかしいように見える。それともあの「不気味なモノ」にやられたのだろうか。

「お前も大丈夫か？ なんか今にも倒れそうぞ」

「…大丈夫です。わたくしの方は…」

「なんかトラツグミって子から良くないものを持っているって言われてたけどどういふこと？ なにかあるの？」

サーバルちゃんが尋ねる。

「…恐らくわたくしが持っているこの力のことでしょう。わたくしの名はペイル。かつてわたくしは死をもたらず獣として生を受けました。そしてフレンズ化した今もその力は変わらず…。死、疫病…そして獣を操る力…。恐らく彼女はわたくしの持つこの力を指してあなたたちに関わるなど申したのでしょうか。彼女の言うことは正しい…。あまりわたくしに関わらない方が良いでしょう。一応助けてくれたことに礼を申しておきます。ありがとうございます…。後はわたくしのこの力せいで皆に危害が及ばないように森の奥深くでじっとしておきましょう…」

「ダメだよ！」

あたしは叫んだ。

「自分の力が怖いからって森の奥で引きこもってちやもつたじゃないよ！あたしたちと一緒に外に出て楽しもうよ！それにペイルちゃんの力が役に立つ時だってきつと来るはずだよ！」

「わたくしの…力が…？」

キョトンとしたような目であたしを見つめてくる。真つ白な外見とは正反対の真つ黒のような瞳であたしを見つめてくる。なんだかその瞳を見ていると魂ごと吸い込まれてしまいそうになるけどこれもペイルちゃんの持つ力のせいなのだろうか。いずれにせよ、この子を外へ連れ出さなければならぬ。森の奥で自身を封じるなんて、そんな可哀そうなことはさせられない。

「自身の体すら蝕むようなわたくしの力が役に立つとお思いなのですか…？」

「それはわからないけどきつとあたしたちなら見つけられるよ！だから一緒に行くおう！」

そう言うあたしはペイルちゃんの手を取って引つ張り上げた。ペイルちゃんの細い体はひよいっと簡単に持ち上がった。その感覚はまるでガリガリにやせ衰えた病人を引つ張つたかのようなだった。決して頼れるものではないけど、必死に大地に足を張ろうとするその姿はなんだか頼もしく思えた。

「そう…なのですかね…。わたくしのこの力が…皆の希望に…。いいでしょう。しばらくの間わたくしも皆のお世話になりましょうか。皆さま、よろしく願いますわ」

「うん！よろしくね！ペイルちゃん！」

……………

かばんさんの案内で森の奥へと歩みを進めていく。なんでもこの近辺にセルリアン撃退のためにかばんさんが中心となつて築き上げた要塞があるのだという。相変わらずすごいお方だ。

「要塞ってどんな感じなの？」

「たぶんともえちゃんが想像するようなガツチガちな要塞ではないかもね。でも僕なりに考えて造つたから見てほしいって気持ちはあるよ」

そう言つて得意げに笑つてみせるかばんさん。一体どういうものなんだろう。少しワクワクしてくる。

しばらく歩いているとなんだか木の壁のようなものが見えてきた。あれがかばんさんが言つていた要塞なのだろうか。

「ここに来るのもいつぶりなんだろう。みんな大丈夫かなあ？」

「どうだろう。セルリアンが襲ってきててもみんながきちんとマニュアル通りに動いてくれば落ちないようにはしているつもりなだけど…」

城門に近付いていく。そこには警備と思わしき真つ黒の甲冑を身に纏ったフレンズさんがいた。

「おっ？ かばん殿ではありませんか！」

「お久しぶり、クロサイさん」

「久しぶりだね！」

クロサイと呼ばれたそのフレンズさんはかばんさんとサーバルちゃんにビシツとあいさつした。喋り方もなんだか堅くていかにも騎士といった風体だ。

「ところで、そちらの方々はどちらで？」

「この子たちはキョウシュウエリアからきたともえちゃんとそのお供だよ。みんなも後で自己紹介しようか」

「うん！」

軽い挨拶を交わしたあたしたちがかばんさんの後に続いて要塞に入ろうとしたその時だった。

「待て」

不意にクロサイさんがランスで道を塞いできた。何か入門許可証でもいるのだろうか

か。

「まずはお前たちの素性を明かしてもらおうか。ここ最近はやいレーンの出沒やら内部情報の告発やらで我々もピリピリしているのだ。それに…その白いフレンズのお前、お前だけは中に入れることはできません」

ランスを突き出して一直線にペイルちゃんを睨む。その鋭い目つきは底知れぬ怒りに満ちているようだった。

「お前が何者かは知っている…。お前の企みもすべてだ…！私の目の黒いうちは決してこの要塞を落とさせはせんぞ…！」

「……………」

なんだか気まずいような沈黙が流れる。一体どういふことなのだろうか。クロサイさんが異様にペイルちゃんを敵視している。ペイルちゃんの持つ死の力を警戒しているのだろうか。

「かばんさん、なぜあいつと一緒にいるのか説明してもらいたい。ペイルはやいレーン出沒と同時期に現れた謎の多いフレンズだ。噂ではペイルこそ此度の騒動の元凶ではないかと噂されているんですよ？」

「そ、そうなんだ…」

「それにともえといったか。お前たちも素性を明かせないというならばかばんさんや

サーバル共々中に入れるわけにはいかなくなる。どこから来たか、何のフレンズか、何をしに来たか、いつ生まれたか、どれ位の間いる予定か、次はどこへ向かう予定か、きっちり管理させてもらおう」

「う、うん……」

あたしたちは要塞の外にある詰所のようなところへ通された。周りには屈強そうなフレンズさんが厳しい目であたしたちを見ている。なんだか取り調べを受けているかのようなのだ。

「かばんさんとサーバルはいいとして……まずはともえ、お前からだ」

「は、はい」

……………

気付けば夜になっていた。四時間はかかっただろうか。なんだかんだいってかばんさんとサーバルちゃんもあたしたちでいうところのパスポートや身分証明書を作らされた。場合によっては労働証明書や、空を飛べるフレンズさんであれば滞空時間証明書なんかも必要になってくるのだそう。キョウシユウエリアとは全然違う文明のようなのものが根付いてすごく息苦しく感じる。

「けー、なんだよなんだよ。飛んでもいいけど城壁より高く飛ぶなだつてさ。そりゃあ、私はあんま飛ばねえけどよー。こんな規制があるだけですつげえ息苦しいつていうか縛られてるつていうか…つまんねーのー！もつとけものらしく自由にすごさせろつてのー！」

ゴマちゃんがぶーぶー文句を言っている。文句を言いたいののはあたしにも分かるけど…それ以上に聞きたいことが山ほどある。まずはそれを解消しなければ。

「あの、クロサイさん。ペイルちゃんは…？」

「うん？ああ、あいつか。悪いが、ここの最高責任者として入城を拒否させてもらった。悪く思わないでくれ」

「え!?そ、そんな！なんも悪いことしてないのに…！ペイルちゃんもあたしたちみたいにしてパスポート作って管理すればいいじゃん！」

「…あくまで私の感覚で以つての判断になつて申し訳ないのだが、あいつには不確定要素が多すぎる。不穏分子は極力排除せねばならない。それにペイルなんて名前のけものは聞いたことがない。ペイル…外来語ではあるのだが、私たちの言葉に訳すると”蒼白い”という意味になる。それを体現するかのようにあいつの毛皮は異様にまで蒼白い色をしている。君はそんなけものの中に入れる勇氣があるのか？自身の本当の名を明かさないうなけものを君は信賴するともいいうのか？」

「そ、それは…」

思わず口をつぐんでしまう。たしかにペイルなんて名前は聞いたことがない。クロサイさんのいうことはもっともだとあたしも思った。ここにはこの事情があるのかもしれない。けど、あまりに除け者にするのはなんだかかわいそうと思えて仕方なかった。見た目もすぐく痩せていて今にも倒れそうなほど虚弱な体をしているペイルちゃんだ。彼女の持つ力は自身をも蝕むとも言っていた。そんな彼女をあたしは放っておけなかった。

「外へ出るのもいいが、その場合にはまた手続きをしてもらおうぞ」

「う、うん…。お願いします」

カリカリカリ…

手続きを終えて外へ出たあたしはペイルちゃんを探した。門の外にある近くの木陰にペイルちゃんはいた。木の根元で横になって寝ているようだ。あたしはじやぱりマシを一つ取り出すとペイルちゃんの横へと置いた。

「ごめんね、ペイルちゃん…。何もしてあげられなくてごめんなさい…。明日にはきつと中に入れてあげるからね…」

ペイルちゃんの安全をしつかり確認するとあたしは再び要塞の中へと戻っていった。

「なんだ、もう戻ってきたのか？」

「うん。また何か書かないといけないものはあるの?」

「もちろんだ。一分も外にいなかったんじゃないのか?これだと書類を描いてる時間の方が長いものぞで」

「ううううん……」

カリカリカリ……

「だはー!疲れたああああ……」

「これも要塞内のフレンズの安全のためなんだ。我慢してくれ」

「なんだか人間社会にいるようだよお……」

「そりやそうだ。かばんさんのアイデアなんだからな」

「だと思った……」

こう言つては悪いのだが、元々動物だったフレンズさんがこんな高度な文明社会を築くのは普通に考えてすごく難しいと思う。けど、外部から情報を持ち込まれた場合は別だ。何かきっかけの一つでも与えてやればそこから発展していつて、クロサイさんの要塞のような文明を築くことができるかもしれない。難しいかもしれないけど不可能ではないはずだ。

「……………」

要塞内を見て回りたい気もしてきたけどこれにも許可証何かいるのだろうか。

「ねえ、クロサイさん。ちょっと要塞の中を見て回りたんだけど…」

「見て回るといい」

「許可証の手続きとかはいらないの？」

「別に見て回るくらいならいらんぞ」

「わかった！じゃあ、行ってくるね！」

あたしは要塞内を見て回ることにした。もう夜だというのにまだ要塞内には活気がある。それに小さいながらも明かりがぼつぼつと灯っている。この明かりは火でも焚いているのだろうか。

「なんだか見たことのある設備がある。あれは…鉄を作ってるのかな…？」

「あ、すいません…」

「ん？」

目つきの怖い熊さんみたいなフレンズさんだ。全体的に灰色っぽい色をしている。

「見かけない顔だな。なんていうんだ？」

「あたしはともえつて言います！あなたは？」

「私はハイイログマだ。見ての通り鉄を作っている」

「へえ…」

かばんさんが教えたのだろうか。周りを見てみるとみんな何かしら作っているよう

だ。なかには何を作っているのか皆目見当もつかないようなフレンズさんもいる。

「今月はノルマがきつくてね。昼夜交代制ですつと鉄を作ってるのさ」

「鉄を…？昼夜交代制で…？」

「そう。セルリアンやセイレーンに対抗するための道具さ。ピーチパンサーやヌートリアみたいな戦闘に不向きなフレンズでも戦えるための道具を昼夜問わず作ってるんだ。私たちが作った火薬や鉄をクロサイがまとめて回収してそれぞれ適した形にして再分配するんだよ。私的な利用は一切許されない。作ったら作っただけ帳簿に記入してクロサイに提出する。厳しいものだよ」

「へ、へえ…」

なんとということだ。徹底して統率が図られている。まさかこれほどまでとは思わなかった。けど、経済の概念がないのであればこれが一番効率が良かったりするのかな…？なんだかまるで…

「上の方ではバリスタを作っているよ。良かったら見てくるといい」

「うん、わかった。ありがとう」

バリスタ…。気になりはするけどなんていうか…。けものらしさというかそれぞれ個性がなくなっていくような気がする。まるで人間の営みを見ているかのようだ。バリスタも鉄も火薬も人間が生み出したものだ。恐らくはかばんさんが自衛の

策としてフレンズさんに教えたものなのだろう。それがこうもフレンズさんの営みを変えてしまうとはなんだか業が深いような気がする。これらはフレンズさんが扱うにはあまりにも手に余りすぎるといふものだ。これもゴクエリアが真の平和を手に入れた時にはなくなってくれていることを祈ろう。

しかし、イエイヌちゃんたちはどこへいったのだろうか。探すのも骨が折れるだろうし今日はもうクロサイさんのいる詰所で寝ようかな…

あたしは詰所へ戻ると堅い床に横になって眠るのだった。

………

ともえちゃんと行動を別にしたわたしたちは宿舍と呼ばれている場所に來ていた。簡素ながらも生活に必要な最低限のモノは一通り揃えられている。壁が薄いのか左右の部屋からはフレンズさんのいびきや生活音が聞こえている。

しかし考えれば考えるほど異様なところだ。この要塞は常に硫黄の二オイや鉄の焼ける二オイで満ちている。ここに帰ってくるフレンズさんも部屋に入るとすぐに寝てしまうのか五分もしないうちにいびきが聞こえてくるのだ。よほど疲れているのだろう。

ニオイと言えばペイル…あの蒼白いフレンズさんもフレンズというにはあまりにも異質に思えたっけ。彼女からはフレンズとしてのニオイや生物としてのニオイが一切しないのだ。死のニオイとでもいうべきか、そんなニオイがあつたペイルさんから感じるのだ。クロサイさんが不穏分子は極力排除せねばならないとは言つていたけど、わたしからしてみても彼女からはとてつもなく不穏なものを感じる。未知に対する恐怖とでもいうべきか…かつて鶴が言つていたことを思い出すようだ。

「何か考え事？」

不意にアムールトラさんが訊ねてきた。

「あ…いえ。ここつて不思議なところだなーつて思つて…」

「うん…。フレンズらしくないよね」

「そう…ですわね…」

不意な問いかけにしどろもどろになりながら答える。普段は無口なアムールトラさんが語りかけてくるのは意外なことだった。

「…あたし、ペイルと一緒にいるのは良くないと思う」

「なぜですか？」

「あいつは何を考えているのかわからない…。考えがまるで読めない。それにあいつからは死のニオイがする。あたしの本能があいつは危険だつてずっと警鐘を鳴らしてる

んだ…」

「…移動中ずつとピリピリしてたのはそのせいだったのか」

かばんさんに連れられて要塞に移動している最中ずつと後ろから殺気のようなものを感じていたけど、あのただならぬ気配はアムールトラさんのものだったんだ…。どうやらずつとペイルさんのことを警戒していたようだった。ペイルさん自身がどう感じていたかは分からないけど、あれでは彼女も気が気ではなかっただろう。

「私にはよくわかんねーけど普通のフレンズじゃねえってことはわかるぜ。ペイルっていう名前も変だしな。なんていうかぶぼぶぼみたいな名前だぜ」

「…なに？ぶぼぶぼって」

「…なんだろうな。私もパツて思いついただけなんだけど…」

奇妙な沈黙が流れる。なんだか居たたまれない気持ちになったわたしはなんとか場の雰囲気を変えようと話を切り替えた。

「は、はい！この話はお終いです！あまり長く特定のフレンズさんの話をするのは良くありませんからね！今日はもう遅いですし寝るとしましょう！おやすみなさい！」

「…うん。おやすみ」

「…すまねえな、イエイヌ…。おやすみなさい」

こうしてわたしたちは一日を終えることにした。ペイル…謎の多いフレンズだ。果

たして本当にフレンズなのか？考えれば考えるほどわからない。フレンズとしての特徴はぼつちり当てはまっているけどわたしが見てきたフレンズさんの中でも特に異質だ。最も鶴やヤマタノオロチさんにも言えることなんだけど…。

…だめだ。考えれば考えるほど分からなくなってくる。おとなしく今日は寝るとしましょう。考えるだけ無駄な気がする。明日はともえちゃん和合流して今後のことを話し合おう。おやすみなさい…。

??—4 「序曲」

目を覚ますと視界を覆いつくすほどの木々が目に留まった。ここはどこだろうか。二日酔いにも苛まれるかのような不快感がアタシを支配している。アタシは重い体を引きずるように持ち上げると辺りを見回した。

頭がガンガンする。足取りがおぼつかない。呼吸をするたびにカピカピに乾いた喉が妙な音を立てる。アタシは一体誰なのか。どうにかして思い出そうとするけど今の頭では情報の整理をするだけで手いっぱいだ。

自身の姿を確認してみる。手には白い手袋をはめている。衣服はどこかの将校のようだ。髪は茶色のグラデーションがかかった銀髪をしている。そしてその頭には一對の羽が生えている。

…思い出してきた。アタシの名前はハクトウワシだ。しかし、どうしてアタシはこんなところで寝ていたのだろうか？アタシには帰るべき巣があったはずだ。セルリアンに負けて倒れるかよほど疲れてでもない限りこんな危なっかしい所で眠るはずがない。アタシの本能がそれを許さない。

「うっ……」

ひどい吐き気だ。全身を血が駆け巡る感覚というものはこんなにも気持ちの悪いものなのだろうか。心臓によつて打ち出された血液が血管を伝つて全身に余すところなく運ばれていく。アタシの全身に張り巡らされた神経がそれを逐一アタシの司令部に伝えてくる。キモチワルイ。止まってくれればいいのに。

「そういうわけにも……いかないわよね……」

願つてどうにかなるわけでもないことをいちいち思つていたつて仕方がない。アタシには帰るべきところがあつたはずだ。……しかしどこに帰るべきだったか……。確か、アタシの営巣していた場所はセルリアンに破壊されたのだつたか……。

「セルリアン……破壊……仲間……」

頭の中に砂嵐が流れる。

「うっ……グッ……!」

思い出そうとするたびに頭に砂嵐が流れてくる。頭が痛い。アタシの本能が思い出すことを拒否しているようだ。後頭部を思い切りバットで殴られたかのような痛みがアタシに襲い掛かつてくる。

「ハア……ハア……」

呼吸を整えて意識を落ち着かせる。得体の知れない気分の悪さも幾分か落ち着いてきた。確か、アタシは何よりも大事にしていた自分の巣をセルリアンに破壊されてか

ら、タカやハヤブサと一緒にになってセルリアンを退治して回っていたんだっけ。…そこからの記憶が曖昧だ。なんだか黒い影がアタシに何かを言っていたような気がする。

「黒い影に…会わなくちゃ…」

心当たりはある。この島の長のヤタガラスだ。滅多に姿は見せないが、彼女の部下であるハシブトガラスに伝えさえすれば協議の後にヤタガラスが解決してくれる。確か、アタシは倒れる前に一度ヤタガラスに会っているはずなのだ。

…記憶が前後して形が歪なままのパズルピースが無理やりはめられていくかのよう な気持ち悪さが残る。なぜヤタガラスに会ったのか。何を相談しに行ったのか。なぜ倒れてからの記憶が曖昧なのか。そんなことを考えていると再び頭がズキンと痛んだ。

「つ…いやめやめ、早くヤタガラスに会わなくちゃ…」

重い体を引きずるようにしてあたしはその場所へと向かっていった。

………

「はあ…はあ…」

体が重い…。まるで体が腐ってるんじゃないかと思うほどだ。大して動いているわけでもないのに息が切れてしまって仕様がな。アタシの体は一体どうしてしまった

のだろうか。かつてスカイインパルスとして名を馳せたアタシだけどこれではその名も泣いてしまう。

「つ、ついた…」

途方もない時間を歩き続けてようやく到着した。ヤタガラスたちが陣を構えるゴコクエリアの総本山、ゴコク防衛城塞だ。ここが陥落されたときはそれこそゴコクエリアの滅亡と言ってもいい。

何がともあれようやく着いたんだ。中に入れてもらおうとしよう。

「おーい！アタシよ！ハクトウワシよ！中に入れてちょうだい！」

「！」

アタシが中に入れるよう声をあげると見覚えのある顔が反応を示した。あれは…ハヤブサ？まさか彼女が門番をしているとは。頭も切れて戦闘力も高い彼女が門番をしているなんてなんだかちよもつたいない気もするけど…視力の良さを買われたりしているのだろうか？いずれにせよ外でバタバタとセルリアンを倒していたアタシたちスカイインパルスの一員が門番をしているのだ。それがなんだか意外だった。

「ハ、ハクトウワシ!？」

「そうよ！久しぶりね！ねえ、ハヤブサ！中に入れてちょうだい！」

なぜか驚いたような反応をするとアタシの元へと下りてきた。一体どうしたのだろ

うか。

「ハクトウワシ!? 本当にハクトウワシなのか!」

「え、ええ…。何をそんなに驚いているのかしら…?」

「だ、だつてお前…」

そういうとハヤブサは黙つてしまった。俯いて何か言いたそうな顔をしている。

「と、とりあえずそこで待つてくれ。フレンズを呼んでくる」

言うや否やハヤブサは飛んでいつてしまった。なんだか信じられないものを見たかのような反応をしていた。なにかおかしい所でもあるのだろうか。確かに目覚めた場所が場所だから草や泥で多少汚れてはいるけどあそこまで驚かれるのはアタシとしても心外というものだ。特に彼女とは旧知の友である分より一層そう思えてくる。

しばらくするとハヤブサと一緒に二つの黒い影がアタシの元へやってきた。ハヤブサが呼びに行ったというのはこの二人のことらしい。ヤタガラスとハシブトガラス直々のお出迎えだ。

「して、この者がハクトウワシということか。なるほど…」

真つ赤な瞳がアタシを捉える。見えているか分からない左目は瞳孔までもが赤く染まっている。腰から生えている三足もの足は不気味にうねっていていつ見ても気味が悪い。この異様な外見もさながらアタシは彼女の持つ雰囲気はどうも苦手だ。できる

ことなら早く分かれて中に入れてもらいたいものだけど…

「ヤタガラス、アタシがわかるでしょ？アタシは長い距離を歩いてもうへとへとなのよ。中に入って早く休みたいわ。早く中に入れてもらえないかしら？」

「…よくできているではないか、この傀儡人形は。追いつすがよい。死人に居場所はない。在るべき場所に帰るのだから」

「はあ!?ちよ、何言ってるのよ!?ア、アタシが死人!?どういう意味よ!」

「お前はゴコク防衛城塞においては死者として登録されている。それに…今のお前は”誰か”によって生かされているように見える。お前を通じて内部をその”誰か”に知られるわけにもいかん。悪いがここでお前を通すわけにはゆかぬ」

「淡々と理解に苦しむようなことを言つてのける。アタシが死者ですって？アタシは今こうして生きています。この呼吸は本物だ。この体に流れる血の循環は本物だ。アタシの感じているすべての感覚は本物なんだ。誰かに操られているなんてあり得ない。アタシはアタシだ。それ以外の何でもない。」

「ヤタガラス様の命令です。早急に立ち退きなさい」

「嫌よ!苦勞してここに来たんだもの!中には絶対入れてもらおうわよ!」

「苦勞して、か…」

ヤタガラスに対して威嚇するように構えをとる。すぐさまハシブトガラスがアタシ

を牽制するかのようには迎撃の構えをとった。

ヤタガラスの手に赤黒い火球のようなものが浮かぶ。あの火球は…

意識が一瞬だけ飛んだ。気付けばアタシは地面に仰向けになつて倒れていた。一体何が起こつたのか。

「あまり余の手を煩わせるな。二度とここには近付くでないぞ。次に余を拜謁するとき
は余自らがお前に手を下す時だと思え」

そう言うときヤタガラスとハシブトガラスは飛び去つて行つた。アタシをここに招き
入れるわけにはいかない、あたしをここに入れるわけにはいかなと言われた。理由は
アタシは死人で誰かに操られているからだ。そんなの納得がいかない。納得のいく
説明をしてもらわないとアタシの気が済まない。

「ちよつとヤタガラス!!!戻つてきなさい!!!戻つてアタシに納得のいくような説明をして
みなさいよ!!!」

「よせ!ハクトウワシ!」

ハヤブサがアタシの腕をとつて止めるようけん制してくる。

「ハヤブサ!アンタはどつちの味方なの!?!」

「わ、私は…」

ハヤブサが言葉に詰まる。なぜ言葉に詰まる?私とハヤブサは無二の親友のはずだ。

その親友ですらアタシを信用できないというのか？こうなってはアタシは誰も信用できなくなってしまう。

「ハヤブサ……」

「……私は……ハクトウワシ……私は、お前が生きて戻って来てくれて、嬉しいと思う……。ヤタガラスの言ったことは真実かどうか私にはわからない……。でも……お前がこうして歩いて、喋って、私の名を呼んでくれただけでも……私は、とても嬉しいと思っっている……。それだけは確かだ」

そういつてアタシの目をじつと見つめてきた。

「おかえり……ハクトウワシ」

「ハヤブサ……」

おかえり……。おかえりという言葉がこれほど胸に沁みるとは思いもよらなかつた。ヤタガラスはアタシを突っ返したけどハヤブサはアタシを迎え入れてくれた。この胸に感じる暖かさはなんだろうか。これがフレンズ化したアタシたちが感じる温もりというものなのだろうか。

「この先に小屋があるのは覚えているか？先にそこへ行つててくれないか。私はまだ少しやる必要がある。それを済ませたら私も向かう」

「……覚えてるけど……どういうこと？」

「…お前を一人にすることは私にはできない…。だけど、私としてもお前をここに入れる訳にもいかない…。だったら私はここを出てお前を守る。どんな結末が待っているかと今度こそお前を守ってみせる…!」

そう言うのとハヤブサは城塞内に飛んでいった。今度こそアタシを守る…。やっぱり何かがおかしい。本当にアタシは一回死んでいるのだろうか？目覚めたときのあの不快な感覚を思い出す。アタシは何故あんなところで眠っていたのだろうか？アタシの身に何が起こったのだろうか？思い出そうとするけどノイズでもかかったかのような奇妙な砂嵐だけが脳裏に思い浮かぶだけだ。

考えたって仕様がな。ゆっくり思い出していくにしよう。アタシはハヤブサに言われたようにこの先にある小屋へと向かっていった。

……………

「…本当に良かったの？」

「ああ…後悔などない」

ハヤブサはアタシのためにゴコク防衛城塞から去ったのだという。ヤタガラスに黙って無断で飛び出したらしく城塞内はパニックになっているだろうとハヤブサは

言っている。最低限親しかったフレンズに挨拶と引継ぎだけして去ったのだそう。当然ながら心配されたり引き留められたりもしたのだ。そうだが彼女の意思を覆すには至らなかつたらしい。なんだか申し訳ない気もするけどアタシとしては仲間は多い方が良く、その仲間もハヤブサであればなおのことやりやすいというものだ。

「それに私はヤタガラスのやり方には不満を持つていたんだ。いくら生きていくためとはいえ、私たちが作った物をすべて没収するなんて私は気に入らない。パークの掟は自分の力で生きていくこと。いくらセルリアンが多くて危ないからってかばんのやり方に何の疑問も持たず従うなんて私はおかしいと思う。私たちはフレンズでありけものなんだ。私たちフレンズはけものらしく自由に生きていくべきなんだ！ヤタガラスたちのやり方は間違っている！」

ハヤブサがヤタガラス：引いてはかばんのやり方に反発している。アタシもよくは覚えていないけど、ハヤブサの言葉を聞く限りこのエリアのフレンズたちに自由なんてものはないような気がした。

「自由……。けものとしての本来の在り方……。：そうね、ハヤブサ。今のままでは生きているなんて言えないわ。ただ死んでいないだけよ！こんな間違っているわ！アタシたちが皆を解放してやりましょう！レッツジャステイスよ！ハヤブサ！」

「ああ！私たちがヤタガラスたちに抗おう！共にけものとしての本来の在り方を取り戻

そう！」

アタシたちは互いにガツシリと手を取り合うと固く握手を交わした。アタシたちの戦いが始まる。目指すはゴコクエリアの”解放”だ。圧制者からの解放……。そして間違った束縛からの解放をアタシたちは成し遂げてやるんだ。けものとしての、フレンズとしての本来の在り方を取り戻す。絶対に成し遂げてみせる……。ジャパリパークの正しい在り方をアタシたちは取り戻してやるんだ。

??—5 「決意」

夜、ふと目を覚ますと外に明かりが見えた。下が石詰め床であるにも関わらず意外にも寝ることができたようだ。

「いたた…体のあちこちが痛いや…」

でもやっぱりダメだったようで体の節々がズキズキする。そういえば今見えている明かりは別に何かを作っているわけではないようだ。よく見てみるとクロサイさんが焚火をしているように見える。火は怖くないのだろうか。目も覚めてしまったことだし少しお話してみよう。

「こんばんは、クロサイさん。隣いいかな？」

「うん？なんだともえか。どうしたのだ？」

「ちよつと目が覚めちゃって。少しお話しようよ」

「はなし？話くらいなら別にいいが…私と話しても楽しくないぞ」

「それでもいいの！それにクロサイさんのことももつと知りたいし…」

クロサイさんの隣に座つて一緒に火に当たる。パチパチと弾ける薪の音はいつ聞いても良いものだ。

隣を見ると昼の険しい顔はどこへやら、どこか柔和そうな表情をしているクロサイさんの姿があった。大抵のけものさんは火を怖がるものだけどうやらクロサイさんはそうでもないらしい。それともサイは火を怖がらないものなのだろうか？

「クロサイさん、火は怖くないの？」

「うん？ ああ、そうだな。ゴコクエリアで過ごしているけものは皆最低でも火は克服せねばならない。そうでもしなければここで生き残ることは難しいだろうからな」

「そ、そうなんだ…。やっぱキョウシユウエリアとは大違いだなあ…」

「それほどにまでゴコクエリアは逼迫しているということなんだ。私も心苦しくはあるが、皆が生き残るために心を鬼にして、試練として火を克服させている。おかげで皆から嫌われているよ」

そう言つて自嘲気味に笑つてみせる。その姿はどこか寂し気に思えた。

「姫は…元気にしているだろうか…」

「姫…？」

急に姫という場に似つかない言葉が飛び出してきた。このゴコクエリアにはお姫様でもないのだろうか。

「クロサイさん、姫つて誰のこと？」

「ああ、すまない。姫とはシロサイお嬢様のことだ。お前と同じキョウシユウエリアに

いるのだが：暦通りに数えればもう十年以上会っていないことになるのだな…。元気にしていられるだろうか…。毎日同じ空を見上げて互いに思いを強くすると思っていたものだが：いつしかそれすら私は忘れてしまったのだな…」

悲しそうにつぶやいて空を見上げる。その目は悲し気とも寂し気とも見て取れた。かつてはこのクロサイさんの目もキラキラと輝いていたのだろう。けど、この過酷なゴクエリアがそのカガヤキを奪い去ってしまったのだ。セルリアンは直接カガヤキは奪わなかったかもしれないけど、クロサイさんにそのカガヤキ無理やり捨てさせたのだ。なんと業の深いことか。あまりにも惨くあまりにも殺生だ。同じジャパリパークで起きていることとは思えなかった。あたしがキョウシュウエリアでのびのびしている間にもゴクエリアでは生きるか死ぬかの戦いが繰り広げられていたのだ。

「……………」

あたしは何も言えなかった。何を言ってもいいか分からなかった。けど、伝えるべきだろうか。あたしが平原地方でシロサイさんと戦ったことを。

「シロサイさん、元気そうだったよ。あたし、キョウシュウエリアの平原地方っていうところでシロサイさんと会ったんだ。ヘラジカさんっていうフレンズさんたちと一緒に合戦ごっこして遊んでたんだ。あたしやイエイヌちゃんたちも一緒に遊んだんだよ。みんな笑顔がキラキラ輝いてて：すごく楽しそうだったよ」

「……それは本当か?!」

クロサイさんはガバっと立ち上がるとあたしの両肩を掴んできた。なんだか気が気ではないといった様子だ。

「う、うん……。クロサイさんが思ってる以上にシロサイさんは元気にしているよ。心配しなくても大丈夫。今もヘラジカさんと一緒に楽しんでると思う。それにヘラジカさんはすつごく強いんだからね。何かあればヘラジカさん……みんなが守ってくれるはずだよ」

「ッ……!!」

クロサイさんの顔がくしゃつと崩れた。シロサイさんが元気に過ごしているという情報を知っただけかもしれないけど、クロサイさんにとっては何よりも知りたかった事なのだろう。

「それにシロサイさんはクロサイさんが心配するほどの弱いフレンズさんじゃないはずだよ。シロサイさんもクロサイさんみたいに強くてカッコいいフレンズなんだってあたし知ってるんだから。それと、クロサイさんは心配するんじゃないかって信用してみたらいいんじゃないかな。そうしたらクロサイさんも少しは気が楽になるはずだよ。シロサイさんもあんまり心配されると……ちよつと苦しく思うんじゃないかな」

「……そうかも……しれないな。お前の言う通り私も姫を信じてみることにしよう。しか

し、十年か……。お前も少しは私の気持ち分かるはずだ。何の連絡もなく、生きてるか死んでいるか、病気をしているか元気をしているかすらわからない。私としても気が気ではなかったんだ。だが……。お前の知らせを聞いて本当に良かった。私も安心したよ。感謝している」

涙を拭ってクロサイさんが気を取り直したように取り繕ってみせる。どうやら少し元気になったようだ。この騒動が収まったらクロサイさんをキョウシユウエリアに連れて行ってシロサイさんに会わせてあげたいな。最後にシロサイさんに会ったのはだいぶ前だけど今も元気にしているだろうか。鶴にやられたりしてないかな……？

「すまないな、ともえ。おかげで少し元気が出たようだ。お礼と言ってはなんだが、私の鍵を預けておくから私の部屋で眠るといい。綿花のベッドは気持ち良いぞ。私はまだ少し起きておく。私のことは気にせずゆっくり休みな」

「うん、ありがとう。クロサイさん。お言葉に甘えて使わせてもらうね」

クロサイさんの言葉に甘えてあたしはクロサイさんの部屋へと向かっていった。質素な検問所から想像はしていたけど思った通りの質素な部屋だった。部屋にはベッドとチェストと机、それとゴミしかない。真面目な分ガサツなところでもあるのだろうか。

ふと見ると少し黄ばんだベッドが目映った。綿花のベッドとは言ったけどなんだか少し潰れて見える。この様子では一度もベッドの手入れをしていないようだ。……

気は引けるけど少し横になつてみるとしよう。

「う、うくん……。やっぱり固い……」

綿花がつぶれて圧縮されてしまっている。ベッドのスプリングのおかげである程度の快適性はあるけどやっぱり固くて少し体が痛む。けど床で寝るよりはマシだしこのままこのベッドで寝ようかな……？

……………

朝の光に照らされてあたしは目を覚ました。何やらざわざわとフレンズさんたちが外で騒いでいる音が聞こえる。何かあったのだろうか。それを確かめようとあたしは寝ぼけ眼をこすりながら外へ赴いた。

「なんだろう……」

外へ出るとクロサイさんを中心に複数のフレンズさんたちが何やら騒いでいるのが見えた。よく見るとイエイエヌちゃんやゴマちゃんの姿もある。けどなぜかアムちゃんはいない。

「何かあったの？」

「ともえちゃん！」

「ともえか。実はだな…」

………

「密告者…」

「ああ…まただ…。我が手の内を外部へ密告している者がいる…。お前たちが来る以前からこうして誰かが外部へ情報を漏らしているようだな…。大きな悩みの種さ…」

「そんな…でもどうして情報が漏れてるってわかるの？」

「ハクトウワシというフレンズがいるんだが…。そいつはセルリアンとセイレーンとは違うもう一つの敵対勢力なんだ。私の放している密偵の情報を総合すると、どうもハクトウワシは我々の行動を真似したり要塞を破壊するための破壊工作を企んでいるみたいだな…。…もしも密偵を出していなかったら…考えただけでも恐ろしいよ…」

「…どういうことだろう…？ハクトウワシちゃん…？フレンズさん同士で争ってるってこと…？」

「ねえクロサイさん。そのハクトウワシちゃんが敵対勢力ってどういうこと？ゴコクエリアではフレンズさんたちが結託してセルリアンやセイレーンと戦ってるんじゃないの？」

「…詳しいことは私もよくわかっていない。お前もあまり首を突つ込まない方が良いでしょう。この件に関しては私としても良い気はしない…。…私もできればアイツとはあまり戦いたくない…。今は敵でもかつては共に戦った仲間なんだ…」

そういうクロサイさんの顔は暗かった。頭を抱えて深く項垂れている。どうやら事はあたしが思っている以上に深刻なようだ。キョウシユウエリアで聞いていた”不気味なモノ”…ここではセイレーンと呼ばれているあの化け物にセルリアン、そしてハクトウワシ…。次々と問題が浮き彫りになってくる。あたし個人としてもペイルちゃんというフレンズのことも気になるし…。

…そういえばどうやってペイルちゃんを中に入れてあげよう…。すっかり忘れてたよ…。

「ペイルちゃん…」

「…まだアイツのことを気にしているのか？言っておくが中に入れてようとしても無駄だぞ」

「わ、わかってるよ！でもどうしても気になって…」

「…そうか。別に外に出るだけなら構わないが…少しでも外へ出るなら…分かっているな？」

「う…うん」

あの面倒な書類一式を思い出す。アレを思い出すだけでも尻込みしてしまいそうだが、迷っている場合ではない。あたしは詰所で一通り書くものを書くと外へ出た。

「…あれ？ペイルちゃんは？」

ペイルちゃんの姿が見当たらない。昨日寝ていた木の木陰にもペイルちゃんの姿はない。あたしたちを置いてどこか別のところにも行ったのだろうか。自身がお荷物になるからとあたしたちの元を去っていったのか。

「…イエイヌちゃん、ペイルちゃんがどこに行つたか、わかる？」

「はい。ニオイはあつちの方からします。…跡を追いかけましょうか？」

「…うん。お願い。ペイルちゃんは放っておけない…。ペイルちゃんはあたしが守ってあげなくちゃいけないんだ…」

「……」

そばにいたイエイヌちゃんにペイルちゃんの所在を訊ねる。あたしの言葉を聞いたイエイヌちゃんの顔がやけに険しい。もしかしてイエイヌちゃんもペイルちゃんのことを警戒しているのだろうか。けど、それならどうしてあたしのわがままを聞いてくれているのだろうか。

…かつてイエイヌちゃんの言っていたことを思い出す。あたしを愛し、共に生きると言つてたっけ。…それがどんな結果であろうとイエイヌちゃんは受け入れるのだろうか

か。

…なんだかあたしはとんでもないことにイエイヌちゃんを巻き込んでいるような気がする。けど、イエイヌちゃんは黙って付いてきてくれている。イエイヌちゃんも相応の覚悟はできているということなのだろうか。…心苦しくはあるけどイエイヌちゃんにはあたしのわがままに少し付き合ってもらおうとしよう。

…今回の戦いは鶴騒動の比ではない。ゴコクエリアの全地方を巻き込んだ戦争のようなものになるだろう。それでもあたしは戦っていくつもりだ。例えばクトウワシちゃんやクロサイさんと戦うことになるとしても…。あたしは弱い子を放つてはおけない。あたしはあたしの成すことをやり遂げるんだ。それがどんな結果になろうとしても…

長い戦いが始まる。

……………

少しみすばらしい野営地ではあるがこれだけの設備が整っていれば簡単に落ちることとはないだろう。機を熟して反撃の時を待つのだ。幸いにも意外なことにアタシに賛同してくれる同志はいっぱいた。イヌワシが各地に潜り込んでアタシたちに協力す

るよう扇動してからは、それぞれの要塞の技術やフレンズがアタシたちの元へと集まってきた。アタシが眠っていた間にもこのゴコクエリアの技術はものすごく進んでいたらしい。あのかばんがもたらした技術はすごいものだ。特にこの火薬を活かさない術はない。これがあるだけでアタシたちはゴコクエリアを掌握できるというものだ。

それに今、アタシたちには心強い仲間がいる。黒ヤギの魔術師バフォメット、青いたてがみを持つ海神ポセイドン、そしてそんなアタシたちに協力してくれる、ペイルホース。どれも心強いアタシたちの仲間だ。バフォメットはなかなか外には出てこないけど、着実にアタシたちを勝利へと導いてくれている。ポセイドンは最近アタシたちの陣営に加わったばかりで実力は未知数のところが多いけど、その雰囲気からはただならぬフレンズとは見て取れる。ペイルホースは外回りで走り回ってばかりいるからアタシも良くわからないけど、アタシたちのために動いてくれるのは確かだ。この子たちとアタシたちの持つ技術があればゴコクエリアの解放も近いというものだ。アタシたちは勝つ。勝つてけもの本来あるべき姿を取り戻す。そのためにもアタシはいかなる代償をも支払ってやる。アタシたちは勝つてその栄光を手にするんだ。

??—6「731」

あたしはイエイ又ちゃんに導かれるままにペイルちゃんの後を追っていた。あれからだいぶ奥の方まで来たような気がするけど本当に合っているのだろうか。

「イエイ又ちゃん、本当にこつちで合ってるの？」

「はい、間違いありません。確かにペイルさんの二オイはこつちの方からします」

「そつか…。ペイルちゃん…どこに行っただろうか…」

あたしたちに気を使つて去つて行つたのだろう。昨日要塞の中に入れてやれなかったことがすごく悔やまれる。中にさえ入れることができればこんなことにはならなかったはずだ。いつたいてどこに行つてしまったのか…。この森のどこか奥深くで身を隠しているのだろうか。

「…ともえちゃん、わたしからの提案です。そして今言うことは昨日ゴマちゃんやアムールトラさんと話し合つたことでもありません。どうかよく聞いて考えてもらえたらと思います」

「…なに？」

突然イエイ又ちゃんが話を振ってきた。いつになく真剣なトーンだ。話しながらも

あたしたちは歩みを進める。

「これはわたしたちが持つていた共通の認識なんです。ペイルさん：彼女は普通のレンズではありません。うまく言葉にはできませんが：彼女はとんでもなく黒い悪意のようなものを持って生まれたレンズのような気がします。かくいうわたしも嗅覚でそれを感じています。彼女から感じる冷たい死臭のようなニオイ……。死人から感じるそれと全く同じなんです。アムールトラさんやゴマちゃんも同じように彼女を危険なレンズと認識しています。ともえちゃんもどうか良くお考えになってください……」

「……イエイヌちゃんもペイルちゃんのことを危ないレンズだつて思うの？」

「……はい。けものの本能とでもいうのでしょうか……。とにかく、ペイルさんからはなんだか危ないような得体の知れない何かを感じるんです。それを頭の片隅にでも置いていただけたらと思います……」

「……わかった」

けものの本能……。あたしにはよくわからないけど、クロサイさんだけじゃなくてイエイヌちゃんやアムちゃんもペイルちゃんが危険だと感じているようだった。：別にあたしも感じていないわけではなかった。あのすべてを呑み込むかのような真つ暗な瞳にはあたしも魂が吸い込まれると思つたんだ。けど、そう思っただけでそれが避けて良

い理由にはならないと思った。それだけで避けてはいけない。避けるようではペイルちゃんをいじめることになるのではないかと思った。だからあたしは手を差し伸べて可能ならお友達になろうと思ったんだ。

「忠告ありがとう、イエイヌちゃん。あたしも気を付けてはみるよ」

「聞き入れてくれてありがとうございます。忠告はしましたけど、わたしは基本的にはともえちゃんの方針には従います。それがわたしですから」

そう言つてにつこりと微笑んでくれた。この笑顔のためにもあまり危険なことには巻き込みたくないな…。少しだけあたしの心が揺らいだ。

「…フレンズさんのニオイです…伏せてください！」

バツと身をかがめて地面に伏せた。どうやらペイルちゃんとは違うフレンズさんのニオイを感じたらしい。もしかしてハクトウワシちゃんとの斥候だったりするのかな…？ いずれにせよイエイヌちゃんの様子を見る限り身をかがめてやり過ぎた方がいいようだ。

「…気付かれていないようです。フレンズさんの正体を探ってくるので、ともえちゃんはどこで待つててください。わたしから合図があるまで動かないてくださいね？」

そう言うといエイヌちゃんはどこかへ行ってしまった。果たして大丈夫なのだろうか。どうも落ち着かなくてソワソワしてしまう。イエイヌちゃんを一人で行かせたこ

とに対してちよつと後悔してしまうようだ。

しばらくするとイエイヌちゃんが走つてこつちに戻つてきた。なんだか変なものを見たというような顔をしている。

「ともえちゃん、フレンズさんの正体がわかりました。一緒に来てもらえませんか？」

「うん。ところで誰だったの？」

「…ナマケモノさんです。木の上でぐつすり寝てました。このゴコクエリアで単独で行動するフレンズさんはいないはずですし、もしかしたら何かしら情報を得ることができるとも思いません。一緒に来て少し手伝ってもらえませんか？」

「う、うん。わかった」

イエイヌちゃんに連れられてそのナマケモノちゃんの元へと向かつていった。果たして着いてみると確かに木の上でだらーつと気持ちよさそうに寝ているナマケモノちゃんと思われる姿があった。ボサボサの頭にずれた蝶ネクタイ、それと着崩れたカーディガンを羽織っている。一見してみるとケモミミもしつぽもないしなんだかヒトのようにも見える。それでもフレンズさんなんだろう。

「さあ、一緒に降ろしましょう」

「い、いいのかな…？怒つたりしないかな…？」

「大丈夫ですよ。ナマケモノが怒るなんてあり得ません！」

「だといいんだけど…」

怒られやしないかとビクビクしながらもあたしはイエイヌちゃんこのナマケモノちゃんを木の上から降ろした。しばらくするとなんとも緩慢な動作で寝ぼけ眼をこすりながら目を覚ました。ナマケモノちゃんは特に警戒することもなくあたしたちを見つめると質問を投げかけてきた。

「んんん？だくれんんん？」

「あ、あたしはともえつていうの！この子はイエイヌちゃん！」

「あゝ…そう…私はナマケモノ…あれ…木の上で寝てたはずなのに…」

「ごめんね、ちよつと聞きたいことがあって…」

「聞きたいこと…？あれ、そういえば初めて見る顔…どこのフレンズなの？」

「どこの…？」

「どこから来たの…？」

「クロサイさんの要塞からだよ。ちよつとあるフレンズさんを探してて…」

「ああ、クロサイのところの…。探してるって誰を？」

「えつと、ペイルちゃんっていうんだけど…」

「ああ、ペイルホース…あいつとはあんま関わんない方が良く…。あんまいい話は聞かないからね。私もあつち側のフレンズっていうことしか知らないんだけど…」

「あっち側？ハクトウワシさんのフレンズってこと？」

嫌な予想が頭の中を駆け抜けていく。…あたしだって薄々感づいてはいた。もしかしたらつて何回も思ったりもしたけど、どうしてもあたしは放っておけなかった。

「まー、もっぱらハクトウワシ側のフレンズの間でもあまり好かれてはいないみたいだけどね。全然フレンズの前に姿を現さなかったり、帰ってきてもすぐにまた出て行ったり臭かったりってあんまり歓迎されてる様子はないみたいだよ」

そう言つてのそつと動くとなマケモノちゃんは器用に木を登り始めた。見た目に反してスルスルと緩慢ながらも登つていつている。なんとも不思議である。

「そういえば密偵がハクトウワシさんの元にいると聞いているんですけどナマケモノさんはどなたか分かりませんか？」

「ん〜…たぶん私だよ〜…もしかして私以外にも他にいるのかなあ…？」

「ナ、ナマケモノちゃんが!？」

「な、なんと…」

イエイヌちゃんが絶句している。かくいうあたしもそうだ。密偵、即ちスパイというからにはステレオタイプではあるがもつとキリツとしてちよつとセクシーなフレンズさんを想像していた。けど、実際にはまさかまさかのぐーたらなフレンズさんだったのだ。開いた口が塞がらないとはまさにこのことだ。

「ど、どうしてナマケモノちゃんが密偵に…?」

「それがね、まさか誰も私がスパイだなんて思わないだろうからってらしいんだ…。
ひどいよね…」

「た、確かに誰も思わないだろうね…」

確かに万が一にもこんなのがスパイだとは誰も思わないだろう。これではハクトウワシさん側のフレンズさんも何人かこのスパイを見逃しているはずだ。

「ま、無理に引き留めはしないよ。行くならしつかり準備をして行くことだね。少なからず向こうにはヤタガラスに匹敵するほどの強力なフレンズがいるって話だからね。名前は…なんて言っただっけ…?」

そう言っとうんうんと悩み始めた。何とか頑張っと思いついてほしいけど…。

ヤタガラス：…確か太陽の化身とも言われた三本足のカラスだったはずだ。他にも神の遣いとか神そのものであるとも言われていたと思う。ナマケモノちゃんの口から出たということはそのヤタガラスさんはこのゴコクエリアに住んでいるのだろうか。

「! 誰か来ます!」

「え!? か、隠れなきや!」

「あんまりそわそわしない方がいいよ。落ち着いて、自然体にね。私と話してりゃー怪しまれないさ」

腕をぶらぶらさせながらへらへらと笑ってみせるナマケモノちゃん。本当にそれでいいのだろうか。あたしも落ち着いてそのフレンズさんと話してみよう。もしハクトウワシさんのところのフレンズさんだったら情報も聞いただけ聞きだしてみようかな。

.....

「つたく、ともえもイエイヌもアムのやつもみーんな私を置いていきやがった！ いたい何だっつてんだよ！」

「お、落ち着いてロードランナーさん……」

「ま、まあまあ……」

「これが落ち着いていられるかってんだ！ あーイライラするぜえ！」

私は怒っている。アムは守衛のフレンズの目を盗んで無断で外へ出て行った。ともえとイエイヌはペイルの様子を見に行ったり戻ってこないままだ。気付けば私はかばんとサーバルと一緒に残り残されてしまっていたのだ。特に私はあの三人と同じパーティだと思っていたから、私一人だけ残して行かれてしまったては心外というものだ。ひどく裏切られたような気がする。

「でもゴマちゃんの気持ちは分かる気がするな。私もかばんちゃんに何も言わずに置

「行って行かれたらショックだもん」

「僕はそんなことはしないよ！でもサーバルちゃんは僕に黙って僕のジャパリまんを勝手に食べてたでしょ！」

「あ、あれはお腹空いてたんだもん！」

「だあー！痴話げんかはヤメロ！」

「ご、ごめん！」

相変わらずお熱いことだ。一人置いて行かれた私の前で堂々とイチヤコラしやがる。

「そういや、かばん。お前このゴコクエリアにいたんだろ？何かこの異変についてわかったりしないのか？」

「ごめん、それは僕にも全然わからない。ペイルホースもセイレーンも僕がここを去った後に生まれたもののようにだし……」

「それに、みんなすごいピリピリしてるよね。セルリアンと戦ったときは皆必死に戦っててこんなにギスギスしてなかったんだけど……。みんなが言ってるハクトウワシは新しく生まれたフレンズなのかなあ？」

「どうだろう……。一度死んだフレンズさんは生き返らないはずだし……。フレンズさんに限らず一度死んだ生き物が生き返るなんて普通あり得ないことだからね」

「……？どういふことだ？」

唐突に不穏なワードがかばんの口から放たれた。一度死んだフレンズ：？ 一体どういふことなんだ？

「なあ、どういふことなんだ？ 私にも分かるように説明してくれよ」

「えつと…：どういえばいいのかな…」

「…ハクトウワシはセルリアンとの戦いで一回死んだはずなんだ。私もかばんちゃんもそのことを知った時はすごいショックを受けたんだけど…。けど、どういふわけか知らないけど、今はなぜかヤタガラスやクロサイたちと敵対しているみたいなんだよ。ハクトウワシが生きているだけでも不思議なのに、どうしてクロサイたちと争ってるんだろ…：訳が分からないよ…」

そう言うサーバルは耳と頭を垂れて悲しそうにしている。かばんもこの今のゴコクエリアの状況がうまく呑み込めないといった感じだ。

そんな私たちの元にクロサイが小走りに走り寄ってきた。

「かばんさん！ちよつといいですか！」

「僕？」

「少し折り入って相談したいことがあるんです…：それにロードランナーとサーバル、お前たちにも協力してほしいことがある。」

「私にか？」

「私？」

「…少し付いてきてくれ。今から話すことはハシブトガラスから伝えられた機密情報ともいえるものだ。…かばんさんとお前たちを信頼した上で話す。くれぐれも外部に漏らさないように」

そう言われて付いて行った私たちが通されたのは質素な個室ともいうべき簡易な部屋だった。ベッドにチェストに机と最低限のものしか置かれていないけど、これがクロサイの普段寝泊まりしている部屋なのだろうか。

「…かばんさん、この要塞の先にある小高い丘に廃墟となった教会があるのはご存じですよね？」

「うん。みんなであそこで籠城したこともしつかり覚えてるよ」

「…ハシブトガラスによると、ハクトウワシたちがそこを占拠して妙な動きを見せていると私のところに報告が入ったのです。どうやらあの教会には隠された地下通路があつて、そこでハクトウワシたちが妙な実験をしているのを確認したようなのです。…散々お世話になったかばん殿にあまりこういうお願いはしたくないのですが、どうかかばん殿にサーバル、ロードランナー、どうか貴殿たちにその様子を探つて来てはもらえませんか…？」

「うーん、そうだねえ…」

「実験つて?どんなことをしてるの?」

「それはよくわからない…。ただ、悲鳴や叫び声が聞こえることから良くない実験をしている可能性は高いということだ。ヤタガラスの意向もあつて見過ごせないことから教会から最も近い私のところへ話が回つてきたんだ」

「なるほど…」

実験…。叫び声…。嫌な妄想が頭の中を駆け抜けていく。どんな実験をしているのか…。この戦争を勝ち抜くためにフレンズを犠牲にするような実験がされているのか?なんだか嫌な胸騒ぎがするようだ。叫び声と聞いて私の中にはビースト化しているアムの姿が思い浮かんだ。まさかとは思うが…それを確かめるためにも私は行かなければならないと思つた。

「いいぜ、行つてやるよ。なんなら私一人でもいいぜ」

「本当か!」

「ゴ、ゴマちゃん!」

「なんだか嫌な予感がするんだ。うまく言葉では言い表せないけど…。とにかく私はその教会とやらに行く。お前たちはどうする?」

「…私も行くよ。私は私にできることをしたい。…クロサイ、私も行くよ!」

「…僕も行く。いいよね?クロサイさん」

「…はい！私も貴殿たちなら安心して送り出せます！どうかご武運を…！」

………

「あれがその教会なんだな…」

「うん…ちよつとボロボロになつてゐるけど…」

「フレンズたちはいないみたいだし入ろうぜ」

「待つて！サーバルちゃん、誰かいるような感じはしない？」

「うん。音も二オイもしないよ。入つても大丈夫と思う」

かぼんの案内に従つて、私たちは件の教会へとたどり着いた。ぼつんと建っているそれは思ったよりもあっさりと思つた。クロサイから聞いた前情報を聞いたせいから分からないけど、ボロボロに朽ちたそれはおどろおどろしく不気味に見えた。私たちはこれからその教会の中に入つていくんだ。

「じゃあ…行くか…」

私たちは教会の中へと入つていった。中は思った以上に荒れていて、かつての戦いの傷跡をそのまま残しているかのようだった。

「隠し通路なんてどこにあるんだろう？」

「さあ…僕も隠し通路があることなんて知りもしなかったよ」

各々が勝手に動き回り、隠し通路とやらを見つけるためにウロウロしている。椅子を動かしたり見台を動かしたりと色々試してみるけどまるで見つからない。本当にあるのかとすら疑わしくなってきた。

「あれ…かばんちゃん、これ！」

「サーバルちゃん？…あつ！」

サーバルが何かを見つけたようだ。果たして見に行ってみると地下へと通じるほら穴のようなものがそこにはあった。

「でかしたサーバル。早速入ってみるか」

私たちは中に入ると奥へと歩みを進めていった。幸いにも見張りや哨戒などはいなかった。しばらくはむき出しの洞穴が続いていたけど、奥へと進むにつれ金属製の外壁が現れ始めた。いかにも人工的に作られたといった施設といったところだ。

金属製の床を踏むたびにカンカンと無機質な音が鳴る。無味乾燥なその音は着々と私たちの精神を蝕むかのようだ。ピンと張った糸のように私の中に緊張が走る。

「うみやあ…ヘンなところ…」

「教会の地下にこんなところがあるなんて…いつからあつたんだろう…」

もつともな疑問だ。ざっと見る限りずっと昔からあるわけではないようだし、きちん

と手入れもされているように思える。ここもボスによつて管理されているのだろうか。しばらく歩いてみるとラボのようなどころに行きついた。中には一匹の動物が倒れている。壁には傷のような跡や何か焼けたような跡が付いている。何とも異質な光景だ。

「何か実験をしていたようだね…。あまりこういうものは見たくないな…」

「…同感だ。早く行こう…」

進む足を速めて早々にこの場を立ち去った。少し進むとヘンな臭いが鼻を突いた。

「なんだ？この二オイ…」

「…これ、血の二オイだよ…」

「血…？」

血の二オイと聞いて身震いがした。…まさか”そういう”実験もやっているんじゃないだろうか。

「…警戒しよう。なにかこの施設で暴れているかもしれない」

「あ、ああ…」

奥へ進んでいると似たようなラボが何回も目に留まった。壁に刻まれた鋭い切り跡や殴られてへこんだ壁、そして力なく倒れている様々なけもの。どれも目に余るようだった。

奥へ進んでいくたびにニオイが濃くなっていく。やがてそのニオイの根源のある部屋へとたどり着いた。中に入ってみるとそこには赤い眼鏡に白衣を纏ったフレンズが血を流して倒れていた。

「こ、これは…」

「誰かにやられたようだね…」

心臓が早鐘のように打っている。この現場の近くにこのフレンズを殺った誰かがいるんだ。そんな気がしてならなかった。

「サーバルちゃんは今近くの警戒をお願い。僕は…ちよつとこの部屋を調べてみる」

「わ、わかった!」

そういつてかばんは変な箱のようなものをいじり始めた。どうやらパソコンというものらしい。カタカタと忙しくキーボードを打っている。

「バビルサ…どうやらこの部屋で倒れている白衣を着たフレンズさんのようだね… : この施設を取り仕切っていたみたいだ…」

「つまり…」

「この施設全体を使ってあらゆる実験を繰り返してきたマッドサイエンティストだよ…」

「そ、そんな…」

この部屋で血を流して倒れているフレンズがバビルサというらしい。そして今かばんが使っているパソコンがバビルサの使っていたものということだ。…この施設で行われた実験の記録が記されているのだろうか。少し怖いけど妙な好奇心が私の中に湧いてくる。見たくないけど見たいような…奇妙な感情が私の中に湧いてきた。

○月×日 キョウシュウエリアでピーストというフレンズの変異種が確認された。コノハ博士によるとフレンズ化する際にセルリウムを吸収したことによる出来損ないらしい。続報が待たれる。

○月×日 どうやらピーストがキョウシュウエリアで暴れ回っているのだそうだ。ハクトウワシに報告すると海岸線を封鎖してピーストの侵入に警戒することになった。私としてはここで捕縛して生態を調べてみたいものだが…。まあ、無理だろう。末端の科学者はおとなしく研究に勤しむとしよう。

○月×日 キョウシュウエリアでピーストがフレンズ化したという知らせが入った。どういう方法を以ってフレンズ化したかまでは不明だが、ピーストをフレンズにする方法があるということだけはわかった。幸いにもセルリウムの採取箇所は見つけてある。適当な被検体を用意してセルリウムを摂取させてみよう。まずはピーストを用意せねばならない。

○月×日 チルーにセルリウムを注射したところものの数分で凶暴化した。モリイ

ノシシによってラボに閉じ込められたのはいいものの、どうやって沈静化を図るか悩むこととなった。しばらく様子を観察することにする。

○月×日 セルリアン数匹をチルリーのラボに放ったが、十秒もしないうちにすべて倒されてしまった。これでは実験にならない。このままでは私の望む実験はできないので殺処分することとする。

「そんな…」

「な、なんなんだ…?」

「殺処分…。意図的にフレンズさんをビースト化した上に殺して処分するって…」

「な、なんだよそれ…」

○月×日 ビースト化する前の基本的な情報を取った上で新しくフレンズをビーストにした。今回から私の使う被検体は番号で呼ぶことにする。今回使う被検体は識別名ビースト1だ。この被検体のデータは留鳥類の中ではあらゆる面で平均的な個体だ。だが、セルリウムを注射するとあらゆる数値が倍以上に膨れ上がった。五感はもちろん筋力瞬発力どれをとっても大きなブーストがかかっているようだ。だが、理性は消滅して鳥ならざる声で叫んでいる。以降経過を観察する。

○月×日 翌日ラボに来てみるとビースト1が元のけもの状態になって息絶えているのを発見した。どうやら一晚中暴れ回って著しくサンドスターを消耗したように

見える。どうやらビースト化すると体内のサンドスターを急速な勢いで消耗していくようだ。そのことがわかっただけでもビースト1の犠牲は無駄にはならなかっただろう。課題は多い。

○月×日 いちいちフレンドズの基礎能力を取るのも面倒なので、ハクトウワシに頼んで入場するフレンドズすべてに体力測定を義務付けることにしてもらった。早速適当な被検体を選んで、これをビースト2と呼ぶことにした。まずは暴れないよう拘束してごく普通のサンドスターを注射して様子を見ることにする。

○月×日 翌日ラボに来てみると特に衰弱している様子もなく、健康を害している様子もなかった。サンドスターを適量与えてやれば延命は可能らしい。以降サンドスターを与えて様子を観察してみることとする。ビースト化の解除、理性を持つビースト、もしくはビーストの能力を持つフレンドズを誕生させることが私の大きな目標だ。

「……………」

私には書いてあることはわからないが、かばんの顔を見る限りは良くないことが書かれているのは確かだ。果たして私が文字を読めたとしてこのバビルサの日記に耐えられるだろうか。怒りで爆発してしまうかもしれない。

次の瞬間かばんの目が見開いた。その手は怒りに震えているようだった。

○月×日 ビースト13は肺を焼く毒ガスに耐え、蛇の出血毒に数時間耐えた。腐食

性の毒ガスで全身を溶かされたりもしたが翌日にはわずかな痕を残してほぼ完治していた。これを使わない手立てはない。急いで他のフレンズに応用できるように研究を進めねばならない。

○月×日 数か月に及ぶ私の実験に心が折れたのかビースト13が一切の抵抗を示さなくなった。ペストの罹患と治療に使ったビースト14と16は敗血症を起こし死んでしまった。せっかく用意したワクチンもこれでは無駄だ。ペストは適当な被検体を用意して引き続き実験を行う。

○月×日 ビーストの急激な再生能力は実に興味深い。同じペストでもビーストによつては再生する前に死んでしまう個体もある。ペストの進行状況によつても再生能力の違いから延々と苦しむビーストもいれば自らの免疫だけで完治するビーストもある。ビーストからワクチンを作り、ビーストを細菌爆弾として活用することだつてできる。風が吹けば骨が折れそうなペイルなど目ではない。実験が成功すれば、吹き荒れる暴風と細菌爆弾の両方の特性を持った究極の生物兵器を持つことになるのだ。これさえあればゴコクエリアの平定など目ではないだろう。

「ツ……!!」

かばんが怒りで全身を震え上がらせ、歯ぎしりしている。何が書いてあるかは分からないけど、あのかばんがここまでになるとはよほどのことが書かれていたに違いないだ

ろう。きっとあのラボに関することだ。何の実験をしていたか気にはなるけど、聞かない方がかばんや私のためであることに違いはないだろう。

「他人の日記を盗み見るとは感心しないな、人間」

不意に声が聞こえた。声のする方を見ると、流れるような水のたてがみを持つ馬のフレンズがそこにいた。

??—7 「ポセイドン」

「他人の日記を盗み見るとは感心しないな、人間」

不意に声が聞こえた。声のする方を見ると、流れるような水のたてがみを持つ馬のフレンズがそこにいた。全身に刻まれた蒼く不気味に点滅する入れ墨がなんとも禍々しい。

「な、なんだお前!？」

「私の名を知らないというのか? かつてオリンポス十二神の一柱に数えられたこの私を? 遍く海を支配し、ゼウスと共に双璧を成したこの私を知らないというのか?」

「…!まさか、ポセイドン…!けど、そんなバカな…!なんで神のお前が…!」

「バフオメツトが私を馬として召喚したのだ。そしてサンドスターの奇跡を与え、私をこんな姿にした。忌々しくもあるが、これはこれで良いものだ。ヘルメスのように良く走れる」

クツクツと不敵に笑うポセイドンと名乗るフレンズ。ペイルもそうだが、こいつもただのフレンズではない。かばんは神といったか? オリンポス十二神…? よくわからないけど、ただ者ではないことだけは確かにわかる。

「どういえばサーバルの姿が見当たらない。確か近くの警戒に当たっていたはずだ
 けど……」

「お、おめえ！サーバルはどうしやがった！」

「……！そうだ！サーバルちゃん！」

「サーバル？こいつのことか？」

「そう言つてボロ雑巾のように後ろの影から首根つこを掴んでサーバルを取り出
 した。まるで物をあしらうかのようなようだ。」

「サーバルちゃん……！貴様ツ……！」

「ふん、こんなもの……。お前の仲間だったか。返してやるぞ」

「片手で物を投げるかのようにサーバルを私たちの元へ投げ捨てた。気絶したサーバ
 ルの体が私の足元に転がり込む。それを見たかばんは我を忘れたようにデーンアック
 スを構えるとポセイドンへと切りかかった。」

「ふん、愚か者が……」

「ドンという音と共にかばんの体が大きく吹き飛ばされた。」

「ガッ……！」

「かばんが壁に勢いよく背を打ち付け、激しく咳込んでいます。いったい何が起きたんだ
 ……？まるで見えない壁に吹き飛ばされたかのように見えたけど……」

「人間風情が神に齒向かうか…。生意気な奴だ…。大人しく我が足元に跪くといい。そうすれば我らが庇護のもとで平穩無事に暮らせることを約束してやるぞ。私に牙を剥いたその罪も、赦してやろう」

「な、なんなんだてめえ…。こんな傲慢なフレンズ見たことねえぞ…。ヤマタノオロチだつてもつと愛嬌があつた…。」

「…あんな土着の雑種と私を同列に語るか…。愚か者が！」

突如亜空間から現れた三叉の矛をポセイドンが手にすると私に向けて振りかざした。

「ぎゃああああああああああああああああああ!!!」

蒼白い電撃が私の体を容赦なく焼いてくる。どうやらあの矛の持つ特別な力らしい。ぶすぶすと肉の焼ける二オイがする。

しびれるような痛みに身悶えする私を奴は汚物でも見るかのような目で見下している。

痛みに耐えながら眼前の敵を睨むように捉える。くそつ、あんなのにどうやって勝つてつてんだよ…！

「そういえば、お前たちネズミ三匹の他に別なネズミがいたか…。バビルサと言ったか？ そいつを殺した奴だ。そいつもお前の仲間だったりするのか？」

「な、何言つてやがる…」

「キョウシユウエリアのビースト、だったか…。あの血走った眼はまさしくビーストの名にふさわしいものだったなあ…」

「まさか、アム…！てめえ!!アムをどうしやがった!!」

「ああ、私を見るなりそそくさと逃げていったよ。お前は どうする？私と戦うか？それともそのアムとやらのように尻尾を巻いて逃げるか？」

「くっ…」

答えは一つしかない。こいつと戦ったって勝てっこない。恐らく私が全力で走ったところで馬のフレンズであるアイツから逃げ切るか分からない。けど今の私には逃げることしかできない。だったら…

「おい！かばん！立てるか！」

「う、うん…なんとか…」

「に、逃げるぞ！サーバルは私に任せろ！」

ポセイドンの横を潜り抜けると私たちは全力で走りだした。ややかばんが苦しそうにしているが、あまり構ってやれる暇はない。私は私で恐怖のせいであまく走れないでいる。来た道を全力で戻っていく。後ろからはじりじり迫るかにゆっくりとポセイドンが歩み寄ってきている。

「さて、私から逃げられるかな…？」

三叉の矛を振りかざして蒼白い雷を私たちに向かつて放ってくる。わざと外して私たちの反応を楽しんでいるようだ。恐ろしく趣味の悪いカミサマだ。かつてキュウビキツネの言っていたことを思い出す。与えたのだから奪う、そして有無を言わず崇拝させる…。あれがキュウビキツネの言っていたカミサマというものなのか。キュウビキツネが軽蔑するのも分かる気がする。

「くそっ……アイツ、遊んでやがる……！何が神様だ……！あれじゃ悪魔にすら劣るケダモノじゃねえか……！」

「聞き捨てならんなあ？ヒトですらない雑種が……」

電撃が私の体を焼く。

「う、あああああああああああああッッッ!!」

電撃に体を焼かれ、たまらずダウンする。後ろからはゆっくりとポセイドンの足音が近づいてくる。ポセイドンは私を殺しはしないだろう。アレは弱い者をいじめて楽しんでるのだ。つくづくシユミの悪いカミサマだ。

「ロードランナーさん！サーバルちゃん！ぐっ……」

かばんが手斧を構えてポセイドンと相對する。

「幻滅したよ、ポセイドン……。まさか、かの有名なオリンポスの神がこんなにも悪趣味な性格をしていたなんてね……。無意味にフレンズさんを傷つけたりなんてして……。お前

のその言動が神の本当の姿というわけなんだね……！」

「ふん、減らず口を良く叩く……。神の庇護なくしては生きていられぬ土くれが良くここまで成長したものだ。嬉しく思うぞ、人間」

「なにを……！」

「少し試練を与えてやろう。ペイル」

「……はい」

突如ポセイドンの後ろからペイルが現れた。この場にペイルはいなかったはずだ。まさかポセイドンはあらゆるものを転送できるというのか。

「私は下々の人間どもに馬を与え、馬を使い大地を駆る術を教えた。そして今一度、お前にその術を教えてやるとしよう。この試練を乗り越え、見事このペイルを手懐けてみせよ」

ペイルの虚ろで真つ黒な瞳がかばんを捉えると、その姿に似つかわぬ疾風のような動きでかばんとの距離を縮めた。

「やれ、ペイル」

ペイルの拳がかばんの体に叩きこまれた。かばんの体が宙に浮く。

「ぐあつ……!!？」

すかさず二撃目が背中に叩きこまれ、馬の強靱な脚が胴体に叩きこまれると、かばん

は私たちの遙か後方へと蹴り飛ばされてしまった。かばんは小さく呻きながら腹部を抑えて苦しんでいる。どうやらかなり堪えたようだ。大地を駆る馬の脚に蹴られたのだ。生きている方が不思議なくらいだ。

「口ほどにもない。これでは人間どもから馬を取り上げるべきか」

「か…ばん、ちゃん…」

サーバルが目を覚ましたようだ。サーバルはこの惨状を確認するとふらふらとおぼつかない足取りで立ち上がった。

「…ポセイドン…」

「目を覚ましたか。残念だがお前のトモダチはくたばってしまったようだぞ。早くそいつを連れて逃げ帰った方が賢明だぞ？」

「ツ…！ゴマちゃん、行こう…！」

「あ、ああ」

針を刺すような痛みには耐えながら立ち上がると、おぼつかない足取りながらも私たちは逃げ出した。少しでもアイツから離れなくては…

「私は許してもこいつは許さないようだぞ？ペイル、お前の好きにするといい」

「ああああああ…ああああああああ!!」

不気味な叫び声を上げながらそいつは飛びかかってきた。もはや何の抵抗もできな

い、そう思ったときだった。

ザシツ!!

「ああ……」

謎の影がペイルへと飛びかかった。体を大きく挟られたペイルの体が大きく後方へと吹き飛ばされていく。

「あつ……」

……間違いない。私たちがゴコクエリアに来た時に助けてくれたあのフレンズだ。茶色い体に黒いぶち模様、そしてアムみたいな虎の腕……。間違いない、あのときのフレンズだ。

「お、お前……」

「……行きなさい。ここは私が食い止める。こいつには、昔からの借りがあるからね……!」
「ほう、お前は……」

ポセイドンがそのフレンズに興味を示している。何か知っているかのような反応だ。

「貴様、キマイラか……。あの頃とは全く違う姿をしているが、魂の輝きはキマイラのそれと同一のものに見える。貴様もバフォメットに召還されたのか?」

「……違う。それに私はキマイラなんかじゃない。キマイラなんて弱い奴は知らない。私はトラツグミ……鶴だ……!お前を倒し、復讐する者だ!」

「ほう……？」

トラツグミがポセイドンに飛びかかる。けど、鶴と名乗ったか……？それにキマイラ……？キマイラって確か……

ポセイドンになんとか対抗しているがあの巨躯の前ではやっぱり不利のように見える。時折りその体に蹴りや拳が叩きこまれるのを許している。しかし、トラツグミはそれにもくじけずポセイドンに戦いを挑んでいる。

「何をしている！早く行け！」

「っ……あ、ああ……すまねえ！」

ポセイドンと戦うトラツグミを背に私たちはこの場から逃げていった。後ろからは二人が激しく打ち合っている音が聞こえる。ポセイドンの放つかげか、トラツグミの爪が切り裂く音が、二人の激しくぶつかり合う音が聞こえていた。

……

「ハアツ……ハアツ……！な、なんとか逃げ切れたな……！」

「そうだね……。うう……あんなフレンズがいるなんて聞いたことがないよ……。なんかすごく私たちのこと馬鹿にしてくるしビリビリしてくるし……。……かばんちゃん、大丈夫……」

「？」

「う、うん……。ごめん、サーバルちゃん……」

這う這うの体でなんとか地下施設から逃げ出した私たちはポセイドンから逃げきれた安心感からひどく脱力していた。次に会ったら命はないだろう。もう二度とあんなのに遭遇するのはごめんだ。

「ゴコクエリアを救うっていうことは、あのポセイドンも倒さないといけないということなんだよね……。私たちにできるのかな……」

「やらなきゃいけないんだろうね……。でも、まさか神話クラスのフレンズがいるだなんて……。心が折れそうだよ……」

緊張からの解放のおかげで冷静に戻れた二人が改めて現実を認識させられたようだ。非常に重苦しい雰囲気か二人を包み込んでいる。なんだか私まで沈んでしまいそうだ。

「ツ!!かばんちゃん!!伏せて!!」

「サ、サーバルちゃん!?!」

瞬間、地面が割れるかのような大きな地震が私たちを襲った。教会の壁が崩れていく。……。ここには危険だ。なんとかここから離れないと……!

「私につかまれ!」

「ロードランナーさん!?!」

「ど、どうするの!?!」

「いいから早く!」

飛ぶのはあまり得意ではないけど、短距離なら二人を抱えて飛べるはず…! 頭の羽を羽ばたかせると数十メートルは飛ぶことができた。これだけ離ればあとは瓦礫なんかがかつちに飛んで来ないことを祈るだけだ。

地震も治まり一安心した私たち。しかし、その安心も一瞬のうちに崩れ落ちた。かばんもサーバルもソレを見て絶句している。かくいう私もソレを見て絶望を感じずにはいられなかった。

ポセイドン…。瓦礫の山からそいつが現れたのだ。宙に浮くそいつは、私たちに見せつけるようにトラツグミの首を絞めながらクツクツと笑っている。体には蒼白い電気を纏っている。

ポセイドンは、私たちに気付いた素振りも見せず、トラツグミを私たちに向けて放り投げた。

「あっ…!」

うまいことサーバルがトラツグミをキャッチしてくれた。やっぱりアイツは私たちに気付いている。気付いていながら気付いていないふりをしているんだ。…このままではいくら逃げてても無駄だろう。私たちの命は既にアイツの手の上ということだ。

「…面倒な奴が来たな。お前たち！今回は見逃してやる。精々我が手中で足掻くんだな！はっはっはっ！」

そう言つてポセイドンはどこかへ去つていった。

「だ、大丈夫!?トラツグミちゃん！」

「だ、大丈夫…ぐっ…はあっ…！」

「全然大丈夫じゃないじゃん！どうしよう、かばんちゃん…！」

見た目以上にダメージを負っているようで、苦し気に荒々しく呼吸をしている。ポセイドンの放つ電撃に苦しめられたのだろうか。

「…とりあえず一旦クロサイさんの拠点に戻ろう。あそこだったら医療施設もあるし、鎮痛剤なんかもあるはず…。きちんと運営していればだけど…」

「そ、そうか…。一応安心はしていんだな…？」

「うん。つつう…。僕もペイルにかなり強く蹴られたせいでまだお腹が痛いや…。僕も診てもらおうかな…」

嫌な音が聞こえたもんな…。アレは鍛えられていなかったら死んでたかもしれないぞ…？

「っ！誰か来るよ！」

サーバルが何かに反応した。今回は地震ではないようだ。…そういえば面倒な奴が

来たと言っていたな。ポセイドンが齒向かえないフレンズということなのだろうか。だとしたら…。

空から一人のフレンズが舞い降りてきた。軍服のような毛皮に白い髪、そして黒い羽根を持っている。かばんが信じられないものを見たというように目を見開いている。もしかすると彼女がかばんの言っていた、かつてセルリアンと戦って命を落としたというフレンズ、ハクトウワシなのかもしれない。

「あなたたち…」

「ツ…ハクトウワシさん…」

ハクトウワシと呼ばれるフレンズがそこにいた。

??—8 「秘境、魔境」

「ハクトウワシさん……まさか……本当に生きていたなんて……」

「かばん……。……やっぱりアタシは皆の中では死んでることになっていたのね……」

今、目の前にいるこのフレンズが、かつて死んだとされているハクトウワシというフレンズらしい。そうと分かれば些か不気味に感じるものがある。死んだ生き物は生き返らない。普通ならば新しく別個体として生まれるのが定石なのらしいのだが……。どうやら、このフレンズは実際に生き返ったというのが皆の共通認識らしい。

「かばん……。あまりアナタにこういふことはしたくないのだけど、アタシの野営地に來ることなく、無断でアタシたちの地下施設に入ったということは、アタシたちに対する敵対行為と見なすことになるわ。あまり信じたくなかったのだけど……ペイルの報告に間違いはなかったということね」

「ど、どういふことだつてんだよ……!」

「詳しく話す必要はないわ。……それにしてもポセイドンの奴……地震まで起こす必要ないじゃない……アタシの野営地もひどい被害が出てるつてのよ……。ペイル! ハヤブサ! 後は頼んだわ」

空からもう一人のフレンズが現れた。ショートボブに一对の羽を生やし、山吹色の軍服を纏ったような毛皮が特徴的な猛禽のフレンズだ。

「さあ、こつちに来てもらおうか」

「やめろ！何されるかわかったもんじゃねえ！おめえらあの地下で何やってたんだよ！私たちにも似たようなことするつもりだろ！」

「黙って付いてくるんだ！ペイル！いつまでくたばっている！早くこつちに来て手伝え！」

ゴロツと瓦礫の山が動く。中からはボロボロになったペイルが姿を現した。あの瓦礫の山を押しつけるとは、あの細い体のどこにそんな力があるのだろうか。

ゆつくりとこちらに歩み寄ってくる。…やっぱり不気味な奴だ。死体が歩いているようにしか見えない。生気のない真つ黒な瞳は私の魂をも吸い込むかのようだ。

「少し眠っていたきますわね…」

「…!!」

体の中から何か吸い込まれるような気配を感じた。吸われる…。体の中から魂が吸われるようだ…！

「させない…！」

「あら…」

トラツグミが爪を振るいペイルを退けた。ひよいつと後方に退きペイルが距離を取る。

「怖いですわ…。ハヤブサ様、何とかしてくださいませんか?」

「うみやあ!」

サーバルがハヤブサに飛びかかった。

「トラツグミちゃん!ハヤブサは任せて!そつちはペイルを頼むよ!」

「…すまない、恩に着る…!」

「あらあら…」

ペイルの様子がおかしい。奇妙にふらふらと揺れている。それに手に何か丸い物を持っているようだ。ボールか何かか…?いや、あれは…違う…。全身に悪寒が走る。なんだかあの球体から叫び声が聞こえるようだ。それにアレは物なんかじゃない。あれは…異界に通じる扉だ…!」

「少しばかりこの子たちの相手をしてくださるかしら…?」

そう言うとその球体からたくさん白い木綿のようなものが溢れるように飛び出してきた。それぞれ一つ一つ霞むようではあるけど、それぞれがフレンズの形をしているのが分かる。

「かわいいそうな子たち…。望まない終わり方をして辛かったですよう…?わたくしが許

します。あなたたちのその嘆きと怒り…それらをその方たちにぶつけなさい…」

白い木綿のようなものが私たちの体にまとわりついてくる。一つ一つが私に呪詛の言葉を投げて精神を蝕んでくる。意識が遠のいていくようだ。抵抗も空しく私たちの意識は深い闇へと沈んでいった。

………

ナマケモノちゃんとハクトウワシさんの所のフレンズさんの取り計らいから、ハクトウワシさんの野営地のそばまで来ることができた。どうやらこの近辺ではナマケモノちゃんは浮浪者で、あたしとイエイヌちゃんは迷子のフレンズということになっているらしい。もつとも、それは野営地に住む一般的なフレンズさんの間だけの話で、ハクトウワシさんやその幹部のフレンズさんはどう思ってるか知らないけど、いずれにせよ、野営地の近くにあたしたちは陣取ることができたのだ。それだけでも喜ぶべきだろう。

「ペイルちゃん…」

「まだ彼女のことを気になりますか…?」

「ならないって言えば嘘になるけど…。今はペイルちゃんの真の意図が知りたい…あたしたちを騙していたのか…本当に悪いフレンズさんなのかって…」

「…どうでしょうか…。ハクトウワシさんに操られているかもしれないし、彼女個人が愉しんでやっているだけなのかもしれない…。真意はわかりませんが、これから私たちでそれを問いただしに行くんです」

そう言つてイエイヌちゃんがあたしに手を差し伸ばした。

「行きましよう、ともえちゃん。どんな結果が待つていようと、わたしはあなたについて行きます」

そう凛々しくあたしに話しかけるイエイヌちゃんの姿は、とても頼もしく見えた。あたしはイエイヌちゃんの手を取ると、一緒に野営地に向けて歩き出した。ここから先は敵の支配の及ぶ地域、怪しい行動を見せようものならすぐに捕らえられて、何かしら酷い目に遭うかもしれない。イエイヌちゃんのためにも慎重に、気を引き締めていかなければならない。

「っ!!」

しばらく歩いていているとイエイヌちゃんが何かに反応した。鼻を上に向けて何かにおいを探っているようだ。

「このにおい…ゴマちゃんです…! かばんさんもいます! けど…」

「けど…」

「…知らないにおいも一緒に感じます…。この独特の甘いニオイは…ペイル…?」

「ペイルちゃん…？ペイルちゃんがゴマちゃんたちと一緒にいるの…？」

「そのようですが…他にも知らないフレンズさんのおいもします。行ってみましょう」

しばらくの間、雑木林の中をイエイヌちゃんと二人進んでいく。しばらく歩いていると、確かにペイルちゃんの姿が見えてきた。それに見知らぬフレンズさんも一緒にいる。

「ゴマちゃん…かばんさん…！」

見知らぬ鳥のフレンズさんに、かばんさんとサーバルちゃんが襟首をつかまれて乱暴に吊り下げられている。それになんだか見覚えのあるフレンズさんも一緒に運ばれている。そういえば、ゴコクエリアに上陸したときに、あたしたちを助けてくれたフレンズさんがいたっけ。確か…トラツグミちゃんだ。そのトラツグミちゃんとゴマちゃんは、ペイルちゃんに引きずられるように運ばれているようだった。

「っ…!!」

信じられなかった。何をしているか分からないけど、普通であれば、ヒトでもフレンズさんでもあのようには扱われることはそうそうないはずだ。あるとすれば、敵対行為の及ぶことをした後か、何かの事後処理をしているといった、ネガティブな出来事の後と相場が決まっている。あれはきつとそれらの出来事が起こった後に違いないはずだ。

「イエイヌちゃん……！」

「……」

イエイヌちゃんは沈黙している。じっと見て様子をうかがっているようだ。

「後をつけましょう」

気付かれぬようにしながら一定の距離を保って、二人の後を追った。やがて二人はフェンスで囲まれた野营地と思われる場所に入ってしまった。どうやら、ここもクロサイさんの城塞と同じように検問所を設けているようだ。あそこにもどうにかして入らなければならぬ。あくまでも自然体に、迷子と装って入らなければ。

……

クロサイさんの城塞よりは緩かったけど、ここでもきつちりとあたしたちは書くものを書かされた。入場目的は何か、亡命理由は何か、どれくらいいる予定なのか、基礎的な運動能力など…幸いにも、あたしたちは迷子やら新参者やらと認識されていたらしく、特別面倒な書類作業は省かれたようだった。

しかし、ハクトウワシさん相手にはうまくいかなかった。まるで、あたしたちを待ち構えていたように思えた。詰所を出たあたしたちを待っていたかのように、ハクトウワ

シさんはそこに立っていた。あたしたちを認めるなり、連れて行きなさいと従者の思われるフレンズさんにあたしたちを連行させたのだ。まるで最初からあたしたちがここに来るのを知っていたかのようだ。すべては事も無げに行われた。最初から決まっていたかのように、裁判と呼べるようなことが行われることもなく、あたしたちは牢屋に投げ込まれた。密通者でもいるのだろうか？もしかしてナマケモノちゃんか…？

「あなたたちがかばんの仲間ということも知っている。悪いようにはしないわ。事が収まるまでそこで静かにしていなさい」

ハクトウワシさんはそれだけを告げると去っていった。回りからは何やらぶつぶつ呟く声や、荒い息遣いなんかの音が聞こえる。あたしたち以外にも収監されているフレンズがいるのだろう。もしかしたらゴマちゃんたちもいるのかもしれない。願わくば無事であることを祈るばかりだ。

「ゴマちゃんのおいが僅かにします。どうやらこの監獄にいるようです」

「本当？良かった…。血の二オイとかはしない？」

「はい。無事であることは確かなようです。もつとも他に監修されているフレンズさんはそうでもないようですが…」

「それってどういう…」

その時だった。突如大きな縦揺れがあたしたちを襲った。

「どうしたハクトウワシ？ 私からの捧げ物を気に入らないというのか？」

「……違う。こんなものは……」

ハクトウワシさんがうろたえている。まるでこんなはずではないと言いたげのように見える。

「ともえー！」

「っ！アムちゃん！」

「ともえー!? どうしてここに!?!」

「ゴマちゃん！無事だったんだ……！良かった……」

「……アムールトラさん、ありがとうございます」

アムちゃんはイエイヌちゃんの礼に応じることなく、険しい顔つきのままアトランティスを睨んだ。アレがどういうものか分かっているのだろうか。やがてその目はあのフレレンズに向けられた。

「ポセイドン……ハクトウワシの右腕にしてバフォメットの下部だ……」

「ポ、ポセイドン……!? あの子が……!?!」

「ア、アタシはこんなのを望んでいない！アタシは皆が皆らしく……!」

「ならば我が帝国で成せばよい。ここではお前に反対する者も多からう。いつ外敵が侵入して寝首をかかれるか分からんこんな所より、我が帝国の方が安心できよう。それに

海洋という自然の要塞に守られたアトランティスだ！そしてその海洋こそが我が血肉であり、手足であるのだ！我が庇護の元であれば貴様の望みも、覇権も！権能も！全部自由自在というものよ！」

ハクトウワシさんの中で迷いが生まれているようだ。ハクトウワシさんの望みは分らないけど、あのポセイドンについて行つては間違いなくダメだ。あの口ぶりから察するにロクでもないことを考えているのは確かだ。何をするか、何をさせられるか分かつたものじゃない。ハクトウワシさんのためにもついて行つてはダメな気がする。

「まずはお前に私の権能の一つを授けよう」

そう言つてポセイドンはどこからか槍のようなものを取り出すと地面に突き刺した。

「こいつを引き抜くのだ。さすればお前には私と同じく神の力を持つ者として、勝利の上の勝利を飾る者として、選定の力を授かることができるだろう」

「……………」

ハクトウワシさんは少し躊躇っているかのような目で槍を見つめている。まだ少しの迷いがあるようだ。自分の夢を叶えるためにその力を手にするか、自分たちの力を信じてその道を切り開いていくか…本来ならば後者の方が良いのだろうけど、ハクトウワシさんはその答えに揺らいでいるようだ。

「ハクトウワシさん…」

「さあ、どうする…?」

「アタシ…やってみせるわ…!」

ハクトウワシさんが槍を手にした。瞬間、白い稲光がハクトウワシさんの体を包んだ。

「うあああああああああああああああああつっ!!!」

「フフフ…」

激しいイカツチに体を焼かれ絶叫している。必死に身をよじって抵抗しているようにだけど、手が離れないのか槍から逃げられないようだった。

「あああああああつがあああああああつっ!!!ぐうううううううう…!!!」

雷霆は容赦なくハクトウワシさんの体を焼いていく。その様子を見てポセイドンは不敵に笑っている。身を焼くあの雷霆は神の持つ力の具現なのだろうか。仮にそうだとすると、一個人のフレンズさんのハクトウワシさんが耐えられるのか?そう考えると、ハクトウワシさんが耐えれずに絶命してしまうのではないかと不安になってきた。

しかし、その不安も杞憂に終わった。やがてハクトウワシさんの体を焼くイカツチは消え、ハクトウワシさんはガクリと力なく足を折ってしまった。体には電気が残っているのか、ビリビリと微弱の電流が走っている。

しばらくの後に、ハクトウワシさんは大地を力強く踏みしめて、よろめきながらも立ち上がった。そして一息つくつと、地面からポセイドンの槍を引き抜いた。ズサつと音を立てて引き抜かれたそれは、覇者の槍と呼ぶのにふさわしかった。今、この時、ハクトウワシさんは神となったのだ。

「それで良い……。して、まだ迷いはあるか?」

「……いいえ。行きましよう。私は私の望みを叶える……。毒を食らわば皿までよ。取り返しをつかないところまで来たのなら、悪になろうとも、アタシはアタシのやり方で望みを叶えてみせるわ……」

ハクトウワシさんはあたたしたちに振り返って、悲しそうな顔をしてこう言った。

「……さようなら、アナタたち……。願わくば、アナタたちと相見合わないことを願ってるわ……」

そう言い残して、ハクトウワシさんとポセイドンはアトランティスへと飛んでいった。

今、この瞬間から、明確にあたしとハクトウワシさんは敵対関係となった。ハクトウワシさんの残した、相見合わないことを願うとはどういう意味なのか、答えは明白だ。ハクトウワシさんはあたたしたちと戦おうとしている。自分の望みを叶えるために、ゴコクエリアのフレンズさんみんなと戦おうとしている。パークのためにも、フレンズさん

のためにも、ハクトウワシさんの野望…ポセイドンの野望を阻止しなくてはいけない。「計画がもう一段回前に進んだのね…」

「っ！ペイルちゃん…！」

どこからともなくふらつとペイルちゃんが現れた。何やら意味深なことを言っている。

「忌々しいポセイドン…。どこまでも身勝手ですこと…。バフオメットが動けない今、どうして彼女を守るというのかしら…」

やがてあたしたちに気が付くと声をかけてきた。

「お久しぶりですわ、ともえさん。元気にしておりましたか？」

「ペイルちゃん…。あたしたちを騙してたの…？」

「そんな、とんでもないですわ。わたくしはわたくしの為に動いている。それだけですわ」

「…その結果が、僕たちを騙しているということにならないのかい？」

「そう思うのならそう思っていたいただいて結構ですわ。何であれ、わたくしは大きな目的のために動いている…。貴方達にはとても計り知れないものですわ」

そういつてペイルちゃんはふわりと舞い上がった。その黒い瞳はあたしたちを遠く見透かしているようだった。

「またお会いしましょう。その時までさよならですわ」

そう言い残しペイルちゃんは霞のように消えてしまった。後に残されたのはあたしとイエイヌちゃんたち四人、そしてかばんさんとサーバルちゃん、トラツグミちゃんの三人だ。

しかし、事はすごく大きなものになってしまった。初め、あたしたちはゴクエリアを彷徨うセイレーンを退治しにやって来たのではなかったか。それが今では、ハクトウワシさんとポセイドンがゴクエリアを支配しようと、アトランティスまで浮上させてその目論見を実現させようとしている。あたしたちは何が何でもそれを阻止しなければならぬ。フレンズさんのためにも、ゴクエリアのためにも、パークのためにも……セイレーンのことや、バフォメットという謎のフレンズなど、問題や課題もまだまだ山積みだ。

戦いは続く。

??—9 「セイリユウ」

トムソンガゼルと遊んでいるときに不意に揺れを感じた。足の裏に感じるそれは確かに地震のように感じた。トムソンガゼルにはよくわからなかったようだけど、確かにアタシには地震のように感じた。ただの地震であれば良かったのかもしれないけど、アタシの目に映るそれを見た時には、ただの地震なんかではないと瞬時に理解できた。それは、絶望と恐れを体现するのに十分のように思えた。

サーバルはゴククエリアに旅立っていった。そしてあの島が見えるのはどの方向にあるのか。ゴククエリアに何が起こったのか。サーバルは無事なのか…。いろんな不安が頭の中によぎっていった。

「カラカル…?」

「ごめん、ルル。アタシ、行かなきゃ…!」

「ちよつと!カラカル!」

ルルには申し訳ないけど、遊んでいる場合ではなかった。まずは博士たちに話を聞きに行かなければ。幸いにもここからだと図書館にも近い。半日もあれば着けるはずだ。時は一刻をも争う。早く博士たちの元へ行かなければ…

.....

「博士！」

「しっ！静かにするのです！博士は今重要な会議の最中なのです！」

「はあ!?!それどころじゃないっての！アンタたちあの島を見なかったの!?!」

「それについて今ゴコクエリアのかばんと話している最中なのです！いいから静かにするのです！」

「何ワケ分かんないこと言つて……っ……っ……！ちよつとどきなさい！」

「な、何をするのですか！待つのです！」

図書館についてみると、助手から訳の分からないことを言われた。ゴコクエリアのかばんと通話している？よく分からないけど、かばんと話しているのだったら当然サーバルもいるはずだ。

図書館の中に飛び込むと、博士がボスに何か語りかけている光景が目に入った。アレが通話 しているというものなのだろう。

「ちよつとどきなさい！」

「な、何するのですか！」

博士を押しつけてボスを驚掴みにすると、アタシはボスに怒鳴るように話かけた。

「サーバル！聞こえる!？」

「カ、カラカル!?!どうしたの!?!」

「どうしたのじゃないわよ！アンタ無事なの!?!あの島は一体何なの!?!」

「お、落ち着いて！私は大丈夫だよ！あ、あれは…。うううう！かばんちゃん、どう言ったらいいんだろう…!？」

「カラカルちゃん？いったん落ち着いて僕の話聞いてほしい。外にミミちゃん助手はいるのかな？。だったら中に入れて、僕とサーバルちゃんとそっちの三人で話し合おう。事は非常に深刻なんだ」

……………

「ポセイドン…本で読んだことがあるのです。ギリシャにおける海を支配する神で、神々の王様であるゼウスにも匹敵する強大な力を持っていたと…」

「アトランティスという島は、ポセイドンの血を引く王家が支配していたそうですね。かばん、その島が本当にゴコクエリア近海に出現したのですか?？」

「うん、間違いない。確かにポセイドンはアトランティスと言った。石造りの町並み、大

きな神殿に王宮みたいな建物……。どういふ経緯でここに顕現したかは分からないけど、あれは本物のアトランティスであることは間違いないと思う」

よく分からないけど、ポセイドンというフレンズがアトランティスというあの巨大な島を出現させたらしい。冷静になつてみればとんでもないことである。そういうえば、サーバルはゴコクエリアにで跋扈する不気味なモノを退治しに行つたんだっけ。

なんだかアタシの勘が警鐘を鳴らしているような感じがする。もしかすると、ソレこそがポセイドンと関連しているのではないかと思つてしまう。

「ねえ、ポセイドンは博士たちが言つてた、あの不気味なモノとなんか関連があるんじゃないの?」

「それはないと思うのです」

「ポセイドンは大地と海の神なのです。セイレーン……でしたか。ポセイドンがそのようなものを使役したとは聞いたことがないのです。かばんはどう思いますか?」

「……僕も博士たちと同意見だ。あれはポセイドンとは無関係と思う。多分アレは……」

「アレは……?」

「……いや、こつち問題だ。さつきも言つた通り、事は非常に深刻で複雑なんだ。……それに、今はそれ以外にも話すことがあるはずだよ」

「そ、そうですね……」

「かばんの言う通りなのです」

アタシとしてはもつと知りたいたいこともあるけど、かばんの言うことはもつともだ。ここは我慢してかばんの話を聞くとしよう。

「ねえ…端的に聞くけど…アンタたち…大丈夫そうなの…？ポセイドンに…勝てそうなの…？」

「……………」

かばんが沈黙する。この沈黙はどう言うことなのか。まさかポセイドンに勝てるか分からないとでも言うのか。

「…なんで黙るの…？ポセイドンに勝てるか分からないっていうの…？」

「…正直に言つて、勝てる見込みはかなり低い…。前に一度、奴に戦いを挑んだんだ…。結果は近付けすらできなかった…。正直どうしようもないよ…」

今にも泣き出しそうな声でかばんはそう告げた。その声には諦めのような声色も聞いて取れた。

「…かばん。ひとつだけ…ひとつだけ望みがあるのです」

「…え？」

かばんが間拔けな声を漏らした。かく言うアタシも博士の思わぬ発言に耳を疑った。島を作り、かばんたちの攻撃を一切寄せ付けない敵に対抗する手段があると言うのか。

「かばん…四神は覚えていますか？」

「うん…覚えてるよ」

「博士…何を…？」

「セイリュウ…彼女の力を頼むのです…。もつとも、はるか昔にパークを護る礎となつた守護けもの…もとい、神獣なのです。必ずしも成功するわけではありませんが…私の考えうる最善の方法であり、唯一の希望なのです…」

沈黙が流れる。何を言っているか分からなかった。すでに滅んでしまったフレنزの力を借りると言っているのか？正気とは思えなかった。もつと現実的な方法を以つて挑むべきだと思つた。

「それで本当に成功すると思つてるの…？」

「…それ以外に最良な方法があると言うのですか…？」

「……………」

ない。あるわけがない。何も思い浮かばない。アタシとしても、セイリュウとやらの力を借りることができれば、それがベストな選択と思うのだが、博士も言つたように成功する可能性は限りなく低い。それどころかなんの成果もなく徒労に終わる可能性の方がずっと高いのだ。

そうは思つてても、いても立つてもいられなかった。徒労に終わろうとも、アタシは

行くしかないと分かっていた。

「…アタシが行つてみる…。場所は…あのサンドスターの結晶が伸びてる山で良かったかしら。」

「はい…。…カラカル、今回の任務は、恐らくお前一人では難しいと思うのです。ですの
で、一人お供をつけるのです。そいつがいれば、成功する可能性がわずかにでも増える
かもしれないのです。カラカル、今はお前だけが頼りなのです。頼みますよ」

何もできないアタシに出来ること…。それが聖なる山に向かつてカミサマに祈る事
だなんて…。直接サーバルを助けることができないのがとつても悔しかった。

お供なんて待つていられなかった。アタシは一人で聖なる山に向かつていった。

……………

山に登つてしばらくが経つた。麓を見下ろしてみると、だいぶ高いところまで登つた
ように見える。サーバルは大丈夫なのだろうか。それだけがどうしても心配だ。アタ
シがこうしている間にも、ポセイドンの攻撃を受けているかもしれない。そう思うと気
がではなかった。

「カラカル様ー！」

不意にアタシを呼ぶ声が聞こえた。声のする方を振り返ると、白い甲冑を見に纏ったフレンズが、アタシに向かつて走り寄ってきているところだった。鎧を纏って走っているせいか、ひどくバテているように見える。シロサイだ。かつて平原地方でサーバルと戦った相手で、ヘラジカの配下にあったフレンズだ。

「はあ…はあ…ひ、ひどいですわ…！わたくしを置いていくだなんて…」

「…アンタを待っている暇なんてなかったのよ。今、こうしている間にもサーバルがポセイドンにやられているかもしれない…。そう思うと気が気ではないのよ」

「…それはわたくしも同じですわ」

「同じ？」

目を伏せてシロサイが言う。

「わたくしには、もう十年以上会っていないフレンズがいますの…。その子の名はクロサイ。最初はゴコクエリアに遊びに行くだけだったはずなのですが…。それがゴコクエリアに行つたつきり、なんの連絡もなく、気付けばゴコクエリアに行く手段もなくしてしまいました…。風の噂では、ゴコクエリアではセルリアンが大量発生しているとか…。最初こそうるさいのがいなくなつたと安堵していたのですが、いつしか寂しさを覚えて、喪失感が胸の内を占めていくようになりましたわ…」

「シロサイ…」

思わぬ告白を受けた。まさかこの子にもアタシと同じようにかけがえのない友達がいただなんて……。なんだかひどい扱いをしたような気がした。

「クロサイはわたくしのことを姫やらお嬢様と呼んでいましたわ……。そして、自身のことを姫の騎士と自称していたのですのよ……。？今ではそれも遠い昔の話のようですわ……」

なんと言っているのか分からなかった。きつと、アタシにとつてのサーバルのようなものなのだろう。それだけは分かった。アタシと同じ気持ちを持っているのであれば、断る理由はない。……きちんと博士の話を聞いておけば良かったな。後悔先に立たずとはこういうことを言うのだろうか。アタシはシロサイの手を取ると、山頂に向かって歩みを進めていった。

……………

山頂につくと、すぐに石碑のようなものが目についた。四つあるうちの一つがセイリュウの物ということなのだろう。果たしてどれがセイリュウの物なのだろうか。

「どれがセイリュウの石碑なのかしら……」

「スザクが鳥類で、ビヤッコが虎、ゲンブが亀と蛇の複合種と聞いておりますわ。セイリュウが龍のフレンズのようなので、そのような紋様のある石碑を見つければ良いの

ではないでしょうか」

「龍…ってなんなのかしら…?」

「蛇みたいなものですわ。大きなトカゲみたいな場合もありますわ」

「ふーん…。じゃあトカゲかヘビを探せばいいのね。なんだ、簡単そうじゃない」

四つのうちの石碑からそれを探せばいいのだ。鳥と虎と亀と龍、見分けるのは簡単だ。問題があるとすれば、龍のフレンズがどんな特徴をしているか分からないということだ。

といつても、どうせ四つしかないのだし、総当たりすれば良いのだが。

「あれ、これかしら」

「みたいですよわね」

思ったよりもあっさりと見つかった。小さな手足の生えた蛇のような紋様が目印だったのだ。どうやら変に難しく考えすぎていたようだ。

あとは…これに願いますればいいのかな?

「どうすればいいのかしら…」

「祈る…:願います…:って博士たちは言っていましたわ」

「やっぱり…:それしかないのかしら…」

半ば投げやりになりながら、天に乞うかのようにアタシはセイリユウの石碑向かって

お願いをした。

「セイリユウ様！今、アタシの友達がゴコクエリアで最大のピンチを迎えています！どうかあなたの力を貸してください！お願いします！」

…当然ながら何も起きない。こうなるのは分かっていた。期待なんてしていなかった。期待していなかったのだけど、やっぱり心のどこかでは期待しているアタシがいたんだと思う。

何も応えない石碑にひどく失望させられた気がした。物言わぬ石碑にイライラさせられるようだった。

「カラカル様…」

「…だあーっ！何だってんのよー！」

地団駄を踏んでイライラを紛らわせる。こうなることは分かっていた筈なのに、いざこうして物言わぬ石碑を前にすると、やり場のない怒りのようなものが湧き上がってくる。

「アタシの友達が！ゴコクエリアで！戦ってるのよ！サーバルだけじゃない！かばんだってそうよ！みんな戦ってる！パークを守るために！」

石碑を蹴ってアタシの怒りをぶつける。所詮伝説は伝説で、過去の遺物でしかないのだ。そんな物に頼っているアタシが情けなくて仕方なかった。怒りは収まらずただ

募っていく。

「なんで何も言わないのよ!? アタシ知ってるのよ! 凶暴なセルリアンを封じてパークの平和を保ってるのも、セルリュウを浄化してパークにセルリアンが溢れないようにしてるのも! なのに、眼前の脅威には目を向けようとすらしないワケ!? 信じられないわ!」
物言わぬ石碑に向かって叫び続ける。アタシの感情はサーバルへの感情やこの石碑に対する感情でいっぱいだった。アタシはひたすら感情に任せるがまま叫び続けた。

「何か言いなさいよ! 言いなさいってばあ! お願いだから!」

色んな感情に流されて、耐えれなくなつたアタシは力なく崩れ落ちてしまつた。膝を ついて項垂れると、無力な自分が情けなく思えてポロポロと涙が溢れてきた。

隣では、シロサイが膝をついて祈りを捧げるような構えをとっている。呼吸は不安定で、彼女なりに押し寄せてくる感情に耐えているようだ。

「わたくしからもお願い致します…。どうか、わたくしたちに、ポセイドンに勝つための お力添えを…!」

石碑は応えず、風の吹く音だけが辺りを支配している。やがて、アタシは天にも叫ぶ ような、胸の中の思いを吐露した。

「応えてよ…動いてよお!」

その時だった。

目を覆いたくなるような眩い光がアタシたちを包んだ。次の瞬間、目の前には、見たことのない青い姿をしたフレレンズがそこにいた。

「セイ…リユウ…？」

??—10 「神を討つけもの」

「アンタ…セイリユウ…なの…?」

「…ええ、そうよ…。私の眠りを妨げるなんて…どういふことかしら」

「ア…アタシの友達がピンチなの!どうか、アンタの力を…」

「…また安易に私の力を…」

そう言いかけたところで、遙か向こう…ゴコクエリア近海に浮かぶアトランティスに目を向けるとセイリユウは口を紡んだ。

「あれは…」

「…あそこでアタシの友達が神と戦おうとしてるの。あの大陸もその神が造ったものよ。アタシたちアニマルガールやヒトの力では絶対に勝てない…。だから…アンタの力を貸してほしいの…」

「……………」

セイリユウは神妙な顔をして黙っている。そして、その目は遠く一点を見つめている。一体どこを見つめているのか…。アトランティス…あの島にはポセイドンがいるはずだ。

「来る……！」

瞬間、島全体を揺るがすほどの大きな揺れがアタシたちを襲った。初めて体験する大きな地震にパニックに陥る。恐怖に足が震えて立てなかった。大きく揺れる地面に足が立たなかつた。

「カラカル様、前を！」

シロサイが叫ぶ。シロサイに言われて前を見ると、大きく隆起する波の塊が見えた。

「あれは……津波ですわ!!」

津波……まさかあの波の塊がキョウシユウエリアに……？

こんなの絶望だ。あんなのに襲われたら島の大半が水没してしまう。運よく生き延びることができたとしても、津波によつて荒廃したキョウシユウエリアで生き延びるのは困難だろう。あの津波はすべてを呑み込んで破壊し尽くしていくだろう。深い絶望がアタシを襲うようだった。

「これは……」

ぼつりとセイリユウが何かを呟いた。右手を前にして何かを念じるような所作を取ると、キョウシユウエリアからも何やら波の塊が現れた。やがて、それはゴクウエリアの波とぶつかると大きな水の柱を立てた。それから、またしても小さな波がキョウシユウエリアに向かって見えているのが見えたけど、あれでは、さしたる大きな問題にはならない

だろう。

セイリユウの力は本物と見える。彼女ならポセイドンに勝てるかもしれない。セイリユウはアタシたちを一瞥すると、一人ゴコクエリアへと飛び立っていった。セイリユウはアタシたちを認めてくれたんだ。青い影がゴコクエリアへと飛んでいく。神獣と神の一大決戦が始まるんだ。

後は、セイリユウが勝つてくれるのを祈るのみだ。アタシたちに何ができるとかはなけれど、それくらいはできるはずだ。決戦の時だ。遠く見えるアトランティスに視線を向けると、サーバル：セイリユウの勝利とみんなの無事を祈るのだった。

……………

大きな地震の後に、大きな津波がキヨウシユウエリアに向かっていくのが見えた。ポセイドンはフレンズさんたちが住まう一つの島を、落ち葉でも掃くかのように津波で消し去ろうとしているのだ。

島全体を呑み込むかのような大きな津波が、キヨウシユウエリアを呑み込もうと向かっていく。絶望と呼ぶには十分すぎるほどだ。視界が揺らいでいく。キヨウシユウエリアで過ごした思い出が走馬灯のように駆け抜けていく。キヨウシユウエリアで過

ごしたたくさんの思い出も、ポセイドンが津波でさらおうとしているんだ。ポセイドンの勝手な気まぐれで、楽園の一つが消されてしまう。そんな事実にあたしは絶望した。そして、そんな無力な自分に打ち拉がれてしまった。

「何……？」

ポセイドンが驚いたような声を漏らした。突如津波が大きく弾けたのだ。何が起きたか分からなかった。当のポセイドンも何が起きたか分からないといった様子だ。驚いたような顔を見せたかと思えば、遠く一点を睨んでいる。釣られてあたしもその方向に目を向けると、一つの青い影が真っ直ぐとこつちに向かつてきていた。

「……何者だ……貴様……」

「私はセイリュウ……。ジャパリパークの東方を守護する守護けものよ」

二つの影が睨み合う。青いツインテールに、青い龍のような尻尾を持つ彼女はセイリュウというらしい。守護けものと彼女は言った。もしかして、このパークの危機に駆け参じたのだろうか……？だとしたら、これほど嬉しいことはない。その雰囲気や容姿からは、ただのフレンズさんではないことは分かる。

「……私の権能に屈しないとは……唯の水棲動物ではないようだな。青龍と言ったか？面白い奴だ……。良いだろう！蛟と神の神格の違いをこの私が直々に教えてやる！かかってくるが良い！」

ポセイドンの身体に刻まれた刺青が激しく光る。神としての力を解放したのだろう。場の雰囲気はポセイドンに圧せられる。まるで島全体がポセイドンの力に押し潰されるかのようだ。

セイリユウの背後からポセイドンに向かって高速の弾丸のようなものが飛翔する。どうやら海面から射出されているようで、海の水を直接自身の武器としているようだ。

「青二才が…甘いわ!」

水の弾がポセイドンの前で静止する。すると、それらはセイリユウに向かって撃ち返されてしまった。

「人間というものは時に面白いことを考えつくようだな…。その一つを貴様に見せてやろう」

セイリユウの周りに水の弾が近付くと、その一つがパンと弾けた。細かな水の破片がセイリユウへと襲いかかる。

「ぐっ…!!」

無数に襲い掛かる水の破片にセイリユウが苦しんでいる。明らかにセイリユウの撃ち出した水の弾より多くのそれが撃ち付けられている。どうやら、ポセイドンも同じように海面から水の弾を打ち出しているようだ。

「そろそろそろあー守りに徹するようではこの私は倒せんぞ!!!」

アトランティスの街から、海面から水の弾丸が撃ち付けられる。そして、その弾の一つ一つが凶悪な爆弾となってセイリユウに襲いかかる。

「くっ……！」

なんとか結界を張ってポセイドンの攻撃を防ぐも、その行動は遅すぎたようだった。ポセイドンがセイリユウへと襲いかかる。

「にい……！」

ポセイドンの右腕に纏われた水の刃が白く唸る。抵抗も空しく、セイリユウの結界を容易く切り裂いた。

「私はただ人間の上に胡座をかいていた訳ではない！私も神として人類の行く末を守っていたのだ！まったく人類は面白い！時に神ですら思いつかぬようなことをやってのける！これもその一つだ！」

ポセイドンの周りに水が舞う。それは、アトランティスの建物から削った石を自身の操る水に馴染ませると、セイリユウに向けて勢い良く放った。白いレーザーのようにも思えるそれは、ウォータージェットのように見えた。

「ぐううううううううっ……!？」

苦痛にセイリユウが口を歪ませる。青いジャケットに生々しく赤黒い血が滲んでいる。あのウォータージェットに耐えられただけでも凄いものだけど、それでもやっぱり守

護けものといえども堪えるようだ。

「…つまらんな。期待外れもいいところだぞ、セイリユウ」

心底がっかりしたようにポセイドンが言う。その目はセイリユウを軽蔑しているように見える。だけど、彼女に諦める様子はなかった。

項垂れていた頭を上げて、鋭い目つきでポセイドンを睨む。その口は口角が上がっているように見えた。

「ふふ…。ヤタガラス…この島にいたのね…。…分かったわ…。ならば、せめて彼女の準備が整うまで私も足掻くとしましよう…。覚悟なさい！ポセイドン!!!」

セイリユウは全身に水を纏うと、その姿を青い龍の姿に変えた。岩石と白波が混じり合うその姿は、禍々しくも幻想的に思えた。無機質なその姿はどこかセルリアンのようにも思えるけど、全身に刻まれたその紋様は、ポセイドンのように点滅していてどこか神々しさを感じる。

「面白い…どこまで私と渡り合えるか…見てやろう!!」

ポセイドンはセイリユウと同じく全身に海水を纏うと、その姿を禍々しい巨人の姿へと変えた。頭に生えているカニのような脚が不気味に蠢いていて、これが神の本当の姿なのかと失望させられるようだ。下半身は蛇のような姿をしていて、その姿はさながら怪物・ゴルゴーンを彷彿とさせるようだった。

「さあ、死合おうかあ!!青龍!!」

二つの大きな巨影がぶつかり合う。波と波のぶつかり合う音が大きく響く。二柱がぶつかり合うたびにあたしたちの元にも水飛沫が降りかかってくる。あたしは、二柱の水を司る神同士による戦いが繰り広げられているんだと、目の前で起きている光景を見て感じた。

セイリユウが天高く昇る。その時、視界の端にぴかりと何かが煌くのが見えた。

島全体から地響きのような音が聞こえてくる。周囲を見渡してみると、いくつもの空を駆ける流星のような軌跡が見えた。燃えるようなたくさんの赤い点があたしたちに元へ飛んできている。

「やべえぞ…逃げろ!」

ゴマちゃん呼び声にハツとしたあたしたちはアトランティスから離れるように逃げた。あの流星のようなものはアトランティスに向かって飛んできている。何となくだけどそれがわかった。ポセイドンはセイリユウとの戦いに気を取られていてそれに気付いていないようだ。

やがて、それらの火の弾はアトランティスに流れるように落ちていった。よく見ると巨大な槍のような、矢のような形をしているのが分かる。クロサイさんの要塞に設置されていたバリスタから射出されたのだろうか?ゴコクエリアの点在している城塞か

ら、一斉に火を吹いたのだろうか？ゴコクエリアのフレンズさんたちがこのポセイドンという巨悪に立ち向かっているのだろうか？

アトランティスに容赦なく火の弾が降り注ぐ。大きな音を立ててアトランティスの建物が崩壊していく。やがて、アトランティスはごうごうと唸る火の海に包まれていった。

「…何ということだ…。セイリュウとの戦いに気を取られていたばかりに攻撃を許すとは…」

ゆつくりとポセイドンの巨体があたしたちを見下ろす。その目は無機質なものを見ているかのようにだった。

火矢の第二波がアトランティスに向かって飛翔してきている。ポセイドンはトライデントを振りかざすとすべての弾が弾き飛ばされた。

「愚かな獣共よ…我が聖域に楯突くとはどういう意味を表すかを…その身を以って知るという！」

帯電した三叉の矛があたしたちに振り下ろされる。そのとき、不意に黒い影があたしたちの前に現れた。黒い甲冑を纏ったその子はポセイドンの槍を振り払うと、あたしたちの安否を確認するかのように振り返った。

「お前たち！無事か!？」

あたしたちにかけられた声はクロサイさんのものだった。クロサイさんはあたしたちの無事を確認すると前に大きくそびえ立つポセイドンを睨んだ。

「くっ……ポセイドン……噂は本当だったのか……！バフォメツトめ……神に類するけものでなく本当に神そのものを召喚するとは……！だけど負けない……！私たちはあの時のような守られるだけの弱い存在などではない……！我々は強くなつた……！お前たちの庇護などいるものか……！けもの領域を超え我々は発展し、強くなつたのだ……！お前のような驕れる神など我々の力で打ち砕いてやる……！覚悟しろ……！ポセイドン……！」

クロサイさんが叫ぶ。けものやヒトを弱い存在と、庇護すべき存在と見下していたであらうポセイドンの顔が大きく歪む。その顔は怒りに満ちているように思えた。

「なんと生意気な……その無礼……決して見過ごせんぞ……！」

ポセイドンの巨大な体から無数の水の弾丸が弾幕のように射出される。自身を覆いつくすような暴風ともいえる弾幕をクロサイさんはスピアを振り回して的確に弾いている。

「ほう！口だけではないようだな！ではこいつはどうかな……！」

先ほどの弾幕に加えていくつもウォータージェットが縦横無尽に大地をえぐり取っていく。セイリユウの体をも傷つけた威力があるんだ。普通のフレンズさんであるクロサイさんであれば掠りでもすればあつというまに粉碎されてしまおうだろう。

だが、実際はどうであろうか。自身に当たるとであろう弾幕をクロサイさんは弾き、軽やかにウォータージェットの水流をかわしている。

クロサイさんが一点を睨む。やがて、クロサイさんは狙いを定めると手にしているスピアをポセイドンの胸へとめがけて勢いよく投げた。だが空しいかな、そのスピアもポセイドンに振り払われてしまった。

「くそっ……！」

「ふん！狙いは良かったが、その程度の狙い、この私が見切れぬとも思うてか!?小癩な奴よ！我が津波でこの島もろとも貴様を攫ってやろう！」

ポセイドンがトライデントを高く持ち上げる。その時、不意に響くような声が聞こえた。

「ゴコクエリアのフレンズよ、今こそ決戦の時だ！さあ、者ども、闘をあげよ！」

『うらー……!!』

あたしたちの周りにたくさんの光の点が見えた。その数は十にも、百にも見えた。やがてそれらはフレンズさんの輪郭を取ると、一斉にポセイドン：アトランティスに向かって突撃していった。

「今こそ反撃の時だ！我々はセルリアンに打ち勝ち、ゴコクエリアの勝利を得た！ヒトの叡智を授かり、いかなる圧制者にも屈せぬ力を得た！今こそその力を見せつける時だ

！我々は仲間の死を、踏みにじられる大地を見てきた！セルリアンの恐怖からの解放の為に我々は戦ってきた！自由を、解放を、平和を得るために我々は戦い、そして勝利を得たのだ！血と泥にまみれ、仲間たちの死の上に我々は勝利をつかんだのだ！そして今！愚かにも血と犠牲の上に成り立ったこのゴコクエリアの平穩を、バフォメット、ポセイドン、ハクトウワシめが、打ち壊そうとしている！同志たちよ！今こそ立ち上がる時だ！先陣はこのヤタガラスが切る！神を騙る愚か者共に、そして裏切り者に！我らの団結を見せつける時だ！者共！進むのだ！！」

『うーらー！！！！』

津波の如くフレンズさんたちがアトランティスに向かって進んでいく。先頭にはカラスのようなフレンズさんが先陣を切って突撃している。アレがヤタガラスを名乗るフレンズさんののだろうか。

「貴様も遠呂智と同じく土着の神霊か…痴れ者が、その思い上がり…真の神たる私が誅してくれるわアツ！！」

クロサイさんに放った弾幕とは比較にならないほどの密度の濃い弾幕がヤタガラスさんに向かって放たれた。しかし、ヤタガラスさんは如何することもなくただまっすぐと飛翔している。

弾幕がヤタガラスさんに到達するその瞬間、弾幕が消滅した。消滅したというより煙

となつて消えたのだ。あれは一体…

「攻撃が効かない…!?!」

「太陽の化身たる余にお前の攻撃は通らぬ…。悪逆無道無法千万の限りを尽くす海神の化身よ…。余の裁きを受けるがよい…!」

黒い玉のようなものがヤタガラスさんの右手に浮かぶ。それはポセイドンの元へ飛んでいくと太陽のような眩い閃光を放った。

「なっ…!?!」

次の瞬間には、水を纏った巨人であるポセイドンの右腕がなくなっていた。ポセイドンの右腕があつたところにはまたしても白い煙のようなものがあがつている。よく見ると水蒸気のようにも見える。もしかして蒸発しているのだろうか。

「さて、どうする?アトランティスが荒らされているようだぞ」

「ぐっ…貴様ア…!」

ポセイドンが悔しそうに唇を噛んでいる間にもフレズズさんたちが容赦なくアトランティスで暴れ回っている。空からはまたしてもバリスタの弾幕が飛んできている。これではいくら何でもポセイドンも四面楚歌でしかない。

「おのれおのれ…!忌々しい畜生どもめ…!ならば我が権能を駆使して貴様らを駆逐してみせよう…!」

ポセイドンはトライデントを空へ掲げると、青い稲妻と共に不思議な音が共鳴音のようなのが響いた。周りのフレンズさんたちから動揺のような騒ぎ声が聞こえてくる。

「忌々しいが、しばらくこれで時間を稼ぐとしよう…。ディアトリマ！私の傀儡と共にアトランティスを荒らして回る獣共の殲滅を任せろ！」

「オーケー！お姉さんに任せなさい！」

赤髪で少し小柄なフレンズさんがポセイドンの前に躍り出てきた。ハイライトのな
いその笑顔にはどこか恐ろしいものを感じる。ディアトリマ…？その威圧感は確かな
ものだ。アムちゃんにも負けないものがある。

「まずはここいらのフレンズの掃除からね！最強の鳥類たるこのディアトリマお姉さん
がまとめて相手してあげるわ！かかってきなさい！」

熊のフレンズさんを中心としたゴコクエリアのフレンズさんたちがディアトリマへ
突撃していく。熊の手を模した大きなスタンプが次々とディアトリマの小さな体へ襲
い掛かる。

「おっと！危ない危ない！あんなものに当たったらひとたまりもないわね…。！けど、当
たらなければどうということはないよ！」

ディアトリマの強烈な蹴りが熊のフレンズさんの一人に叩きこまれた。急所に入っ
たのか胃液のようなものを吐いてうずくまってしまった。

「私はディアトリマー！ハクトウワシの元で、私たちがトリが地上最強ということを知らしめんとする者よ！腕に自信のあるコはかかってきなさい！お姉さんが相手になってあげるわ！」

大きく名乗りをあげ、自身がディアトリマーということを宣言する。まるで戦国大将のようだ。その腕は確かなもので、次々とフレンズさんたちを文字通り蹴散らしている。

ディアトリマーの周りにイルカさんやアザラシさんのフレンズさんが集まってくる。どの子たちも目がうつろで自我を失っているように見える。

「これがポセイドンの言う権能というものね…。海棲生物はみんなポセイドンの操り人形ということなのかしら…。あまり良い気はしないけど、今はそんなこと言ってる場合じゃないわね…。」

華麗な足さばきで次々とフレンズさんたちを撃破していつている。

よく見ると馬系のフレンズさんたちも集まってきている。どの子も目がうつろで操られているように見える。海棲系フレンズさんだけじゃなくて馬系のフレンズさんもポセイドンの権能の対象なのだろうか。

「おい！大変だ！アトランティスでシロナガスクジラが暴れてやがる！たった一人でフレンズを食い止めてやがるぞ！なんとかしねえとみんなやられちまうぞ！」

「ゴマちゃん！くっ…そうだね…！でもどうしたら…！」

必死に頭を回転させる。ゴコクエリアのフレンズさんはみんな火を克服してるとクロサイさんは言っていた。克服しなくてもクジラさんは火を恐れないだろう。投石機やバリスタを使つてはアトランティスで頑張つているフレンズさんを巻き込んでしまふ。弾道力学なんてあたしには分からないし…。

「怯むな!!!」ここで負けてはゴコクエリアのみならずパークそのものが滅亡することになるんだ!!! 私たちの敗北こそパークの滅亡と思え!! 最後の一兵になろうとも戦い続けるんだ!!!」

クロサイさんがフレンズさんたちを鼓舞する。

「火を克服したのは何の為だ！仲間の死を乗り越え前へ進んだのは何の為だ！血と泥にまみれながらも這い上がったのは何の為だ!! 我々は必死に生き、いくつもの別れと犠牲を経験し、強くなっただろう！それは何の為だ！生きる為ではないのか!? 私たちが愛するパークの為ではないのか!? 今！ハクトウワシやポセイドン共がそれを蹂躪し、破壊しようとしている！我々はそれを決して許してはならない！奴らは、我々が築き上げてきた平和を、秩序を！容赦なく破壊しようとしている！我々の血を！肉を！魂を捧げてきたこのゴコクエリアを奴らはなんとも思わず、我が私欲の為に踏み躪ろうとしているのだ！決して膝を折つてはいけない！決して負けてはならない！我々は最前線であり、最

後の守りなのだ！我々は団結し、強く！最後まで戦い抜くんだ!!!」

クロサイさんの号令と共にフレンズさんが奮起する。スピアを失ったクロサイさんは徒手空拳のまま戦場へ躍り出ていった。

その時だった。不意に空からフレンズさんが飛んできた。地面に叩きつけられたランスから放たれた衝撃波がディアトリマたちを吹き飛ばす。見覚えのある白い甲冑……もしかして、シロサイさん……？

「助けに来ましたわよ、わたくしの騎士……！」

「あ……。ひ……姫……？」

ぼかんとシロサイさんの顔を見上げている。目の前にあるものが信じられないといった様子だ。現にあたしもキョウシュウエアリアにいるはずのシロサイさんがここにいるのが信じられなかった。よく見るとシロサイさんの他にもカラカルちゃんやプロングホーンさんたちの姿もある。一体どう言うことなんだろう……？どうしてシロサイさんたちがここにいるんだろう……？

「ひ……姫……？本当に……シロサイ……お嬢様なのですか……？」

「他の誰に見えますの？ほら、早く立ち上がりなさい！敵を片付けますわよ！」

ぼかんとしているクロサイさんにシロサイさんが手を差し伸べる。おずおずと差し出されたクロサイさんの手を力強く取ると、グイッと引っ張り上げた。

「さあ、やりますわよ！わたくしの騎士！後れを取らないようにしっかりと付きついて来なさいー！」

「つ……は、はい……！姫の御身は必ず私が守り切つてみせます……！」

二人の騎士がディアトリマに突撃していく。後ろではサーバルちゃんとカラカルちゃんが再会を喜んでいた。

「もう！本当に心配したんだから！ねえ、大丈夫なの!?ケガはしてないの!?」

「ご、ごめんね！カラカル！でも来てくれて嬉しいよ！ちよつとポセイドンにやられちゃったけど……。でも、へーきだよー！」

「もう……アンタつて子はあ……！」

カラカルちゃんが泣きだした。どうやら本気でゴコクエリアに来ていたサーバルちゃんのことを心配していたようだった。

「……やるわよ、サーバル。ポセイドンなんて奴、ぶっ潰してやりましょ！」

「うん！今の私たちなら負けないよ！行こ！カラカル！」

カラカルちゃんとサーバルちゃんもクロサイさんたちが続いて前線へと飛び出して行った。ディアトリマもこの四人を相手にするのは堪えるようで、少し押されているように見える。クロサイさんも得物がないながらに善戦している。

アムちゃんがセイリユウと戦っているポセイドンを睨んでいる。どうやらポセイド

ンを相手に戦う気らしい。

決戦が始まろうとしている。早くこの戦いに終止符を打たなければいけない。あたしもできる限りの全力のサポートをしよう。

??—11 「終焉への序曲」

遠く、セイリユウとぶつかり合うポセイドンを睨んでいる。あんな巨大な敵、勝てるわけがない。けど、アムールさんはそうは思っていないかったようだ。

遠くじつと睨んでいる。その目には決して負けないという硬い意志が見えた。

「…ゴマ」

「な、なんだよ…」

「お前もあの地下施設に行つたはずだ。…あの地下にはまだ未使用分のセルリウムがあるはず…。それをとつて来てほしい」

「つ…！な、何をする気だよ…!?私、ぜってーヤだかな…!」

「黙つて行けッ!!それしかアイツに勝つ見込みはないんだ!!!あたしがビーストに戻つてアイツを討ち滅ぼす…！そしてこのゴコクエリアを救つてみせる…!」

「…正気かよお前…。そんなの狂つてる…」

ゴマちゃんが失望したかのようにゆっくりと後ずさりをしている。その目には涙が浮かんでいるように見えた。

「…あたしが行く…。アムちゃん、それでポセイドンに勝てるんだよね?」

「…正直、分からない…。けど、アイツに勝つためにはその手段が一番だと思う。セイリュウが気をそらしている隙に、あたしがアイツを引きずりだして打ちのめす…。ピーストだったら傷もすぐに治るし、あたしの持つ最大限の力を引き出せる…。そしてあいつとの実力を少しでも縮めてみせる…」

「…アムちゃんの考えはわかった。けど、今のままじゃ行けない…」

「ツ…！どうして…！」

「絶対に勝つって約束して。そうしたら行ってあげる…」

ともえちゃんがアムちゃんの目をまっすぐ見つめてそう告げた。ともえちゃんは彼女を信じているんだ。アムールトラさんは絶対にポセイドンに勝つ。ピーストになっても絶対に戻って来てくれると信じているんだ。絶対の信頼を彼女に寄せている。ともえちゃんの真っ直ぐの瞳にはそう映っていた。

「…絶対に勝つ。約束する。そしてゴコクエリアを、ともえちゃんを守ってみせる。絶対に…！」

「…わかった。行ってくるよ！」

「…かばん、案内してあげて。お前もあそこに行つたはずだ」

「…わかった。行こう、ともえちゃん」

「……なんだよなんだよ…！みんな私の気も知らないで…！」

崩れるように座り込むと、声を押し殺すように地面に伏してしまった。感情を吐き出すかのように泣いている。心が痛むようだけど構ってあげる余裕はない。わたしはセリウムと取り行くためにかばんさんとともえちゃんの後について行った。

……………

「ここがアムールトラさんの言っていた地下施設の入り口だ。フレンズさんを意図的にビースト化して、その実験データを取っていた場所…。できれば二度と来たくない場所だったけど…」

「……………」

ともえちゃんは沈黙している。フレンズを意図的にビースト化させるといふ聞き捨てならない言葉が聞こえたけど今は触れないでおこう。今はセリウムを持ち帰ることがが先決だ。

「アムールトラさん…。本当にビーストになってポセイドンと戦う気なのかな…。もしかして自分も死ぬつもりなんじゃ…」

「そんなことない…。アムちゃんはきつとポセイドンを倒して戻ってくるよ…。あたしが絶対連れ戻して見せるんだから…。」

「…そうだよね…。弱気になってごめん…。アムールトラさんは戻ってくる…。戻ってくるよ…！」

自分たちに言い聞かせているのか、それとも現実から逃避しているのか、ともえちゃんとかばんさんは自分たちを鼓舞するように互いに言い聞かせている。

奥へ奥へと進んでいく。隔離部屋のようなところには、それぞれポツンと動物たちが息絶えている。これがかばんさんの言っていた実験なのだろうか。フレンズを人為的にビースト化させて実験データを取る…。そんな惨い実験をしていたなんて…。

やがて地下施設の奥にある実験室のようなところへとたどり着いた。そこには試験管に入っている黒い液体…。セルリウムがいくつか保管されていた。

「…これを…アムールトラさんのところに…」

「…アムちゃん…」

あれほど強気でいたともえちゃんが消沈している。やっぱり心の奥底では一抹の不安を感じていたのだろう。本当にアムールトラさんが戻ってくるかともえちゃんも不安に感じていたんだ。ともえちゃんは自分をごまかしていただけに過ぎない。自分で自分を騙して彼女の気持ちに応えようとしていただけなんだ。

「待ってアムちゃん…。今、持っていくから…！」

ともえちゃんは試験管の一つを取ると部屋から出て行った。後に続くようにかばん

さんも部屋を後にする。

「これを使えばビーストに……。通常のフレンズでは出せない絶大な力を引き出せるという……」

初めてアムールトラさん：ビーストに出会ったときのことを思い出す。アムールトラさんは恐怖から周りのフレンズさんやセルリアンを襲っていたと言っていた。恐怖の対象を絞ればうまいこと力の制御もできるのではないかとわたしは考えている。

何よりもわたしには守りたいヒトがいる。ヒト：ともえちゃんもそうだけど、わたしはみんなを守りたいと思っている。パークを、アムールトラさんにゴマちゃん……。そしてパークのみんなを……。そのためには自分を犠牲にしたって構わない……。少し身勝手なわがままかもしれないけど、私にはその覚悟がある。

わたしは試験管を一つ内ポケットに忍ばせるとともえちゃんの元へ戻っていった。

……

「アムちゃん！」

「ともえ……」

「これ……これでもいいんだよね……!？」

「うん……ありがとう……」

ともえちゃんがアムールトラさんにセルリウムの入った試験管を渡す。アムールトラさんはそれを握りつぶすと、手のひらにセルリウムを滲ませた。

「うっ……ぐっ……あああ……！」

セルリウムがアムールトラさんの体に吸収されていく。みるみるうちにアムールトラさんの放つ雰囲気が豹変していくのが分かる。

「ぐおおおおおおお……あああああ……あ……！」

辺りに肌を刺すような鋭い殺気が込み始める。黒いオーラを纏うその姿はあの日に見たビーストそのものだ。恐怖で体が震える。

「キッ……！」

鋭い視線でポセイドンのある一点を狙うと、目にもとまらぬスピードで彼女の胸元へと跳んでいった。

「ほう！噂に聞くキョウシュウエリアのビーストか！面白い！この私が直々に相手をしてやろう！簡単に死んでくれるなよ！」

ポセイドンの周りを縦横無尽に飛び回りながらその爪でポセイドンを刻み込んでいく。効いているかは分からないけど、アムールトラさんが爪で裂く度に水しぶきのようなものが出てくる。

うのだと…

フレンズ化したことで、わたしにはヒトと同じ理性を得ることができた。この理性を以ってすれば、ビースト化の制御も少しはできるだろうと踏んだのだ。それを踏まえた上でわたしはともえちゃんに問いかけた。

「もし、わたしがビーストになって…ポセイドンと戦うと言ったら…あなたは どうしますか…?」

「イエイ又ちゃん…まさか…」

「…わたしはビーストになって、ポセイドンを倒す…。今、わたしはその覚悟を以ってこの場に立っているんです。わたしはあなたの許可さえ頂ければ、このセルリウムを搦つて、ポセイドンと戦うつもりです。…わたしには、わたしにできることをしたい。わたしは、わたしの愛するパークを、そしてともえちゃん、フレンズの人々を傷つける神を許せません。…どうかわたしに、ポセイドンと戦う許可をください。命に代えても、あの神を倒して見せます」

じつともえちゃんの目を見つめてわたしの想いを伝える。ともえちゃんが許してくれるかは分からない。恐らく許してはくれないだろう。ともえちゃんはそういう子ということ、わたしも十分にわかつている。血も、種も違うわたしでも、家族として彼女と過ごしてきた時間は長い。自分のため、友達のために死に行つてきまうと言つ

ンズさんを衝動のまま斬りかかってしまいそうだ。

「よしよし、いい子だよ…。イエイヌちゃん、あたしが分かる…。」

視界に黒い霧がかかっているかのようだ。その深い霧の中にもえちゃんの姿が見える。指先一つ一つに力と熱がこもって凶器と勘違いしてしまうようだ。これをともえちゃんに突き刺したら…

…つて何を考えているんだわたしは…。今はそんなこと考えている場合ではない。わたしは何の為にもえちゃんの想いを踏み躪つてまでビーストになったというんだ…！今はともえちゃんの呼びかけに応じなければ…

「と…も…え…ん…ち…ゃ…ん…」

「そうだよ。あたしはともえ…。ちゃんとわかっているみたいだね。えらいえらい。…イエイヌちゃん、必ず帰ってくるってあたしと約束してくれたよね？けど、もう一つだけ約束してほしいことがあるんだ」

もう一つだけ…？わたしの理性と思考はもうパンク寸前だ。これ以上の約束をされたら頭が弾けてしまうかもしれない。けど、聞かないわけにもいかない。

ともえちゃんは私の返答を待たずして口を開いた。

「…必ずポセイドンに勝ってきて。…勝たないと許さないんだから…！」

お願いは至極シンプルなものだった。ポセイドンに勝つ。そして生きて帰ってくる

リュウが大口を開けて何かを撃とうとしている。

…まずい。アレに巻き込まれては間違いなく一瞬で消し飛ばされてしまう。わたしはアムちゃんの元へ跳ぶと、アムールトラさんを抱き上げてその場からできるだけ離れた。

光線とも思える熱線がポセイドンを焼く。海上だからよかつたけど、アレが地上に向けて放たれていたら間違いなくともえちゃんやフレンズさんは無事では済まなかつただろう。

「ウアアアアアアアアツツ!!この私が雑魚共に押されるなど…ッ!こんなことがああああ…っつ!!」

巨人の形が崩れている。少しずつだけど確実にわたしたちは勝ってるんだ…!いける…!勝てる…!」

再びアムールトラさんと一緒にポセイドンに飛びかかる。そしてその体に確実に傷をつけていく。

「おのれおのれ…!」

トライデントから放たれる電撃がアムールトラさんを襲う。壁に叩きつけられたアムールトラさんが苦しそうに身をよじっている。

戦いには有利な距離というものがある。それを見誤ってはダメだ。ポセイドンとの

距離は零距离でなくてはならない。中々遠距離になっては相手の思うつぼだ。一度離れてしまつては電撃や水の弾丸やレーザーの餌食になつてしまう。

「まずは貴様からだ…ッ！」

ウォータージェットがアムールトラさんへ襲い掛かる。着弾の瞬間、赤い霧のようなものが見えた。

「アムちゃん!!」

ともえちゃんの悲痛な叫びが響く。赤い霧と水しぶきの間から見たそれは、右腕を失くしたアムールトラさんの姿だった。

「クッッ…アッアッアッアッアッアッ…ッ！」

無いはずの右腕を抑えるような仕草をして苦痛に顔を歪ませている。少しだけのぞく白い骨が何とも痛々しい。

ゆっくりとポセイドンがともえちゃんへと顔を向ける。その歪んだ笑みは良からんことを考えるように見える。

「お前がこいつらのリーダーのようだな…。貴様を葬つてしまえば、この忌々しい小蠅共も烏合の衆になるといふ訳だ！まずは貴様を潰して、それから一匹ずつ始末してくれよう！」

トライデントがともえちゃんに向かって振り下ろされる。なんとかともえちゃんを

助けようと跳び向かってみるけど、わたしの足では間に合わない。もうダメだと思ったときだった。

「…!?アムちゃん…!」

「あたしのトモダちに…手を出すなあッ!!」

アムールトラさんが200mはあろうかというトライデントを片腕で受け止めた。しかし、やはり無事では済まないようで、衝撃から裂けた腕が血を流している。

「なにつ…!?なぜ…このようなことが…!」

「フーツ…フーツ…!」

右肩から肉塊のような物が隆起して、アムールトラさんの右腕を再構築している。サンドスターのような虹色の輝きが右腕を包み込んで形を作ると、アムールトラさんの右腕がみるみると再生されていく。

「タ、ア、ッ、!」

アムールトラさんが再びポセイドンに向かって跳んでいく。ポセイドンも接近を許すまいと無数の水の弾幕を張っている。アムールトラさんは器用にそれをかわすと、蛇のような下半身へとしがみ付いた。

…ポセイドンはアムールトラさんに気を取られてわたしに気付いていない。セイリュウはじつとはるか上空で攻撃する機会を伺っているようだ。

ポセイDONはセイリユウの熱線を浴びて容姿が崩れてしまったせいかうまく動けないでいるようだ。ポセイDONの体を登っていく。わたしは頭から生えているカニの脚のような触手を掴むと思いい切り後ろへ引つ張った。

「ぐっ…!? 貴様っ…!」

待つていたかのようにセイリユウが急降下してくる。セイリユウは熱線を吐いてポセイDONを焼くと勢いよく体当たりを敢行して怯ませた。

その時、アムールトラさんがセイリユウへ飛び移るのが見えた。激しく飛び回るセイリユウの体を器用に移動すると、セイリユウの頭で何やら構えるような姿勢をとった。

やがてセイリユウは熱線を吐くとともに、ポセイDONに向かって勢いよく突進した。熱線の中をアムールトラさんが潜り抜けていく。コアと思われる胸の中央にある岩石を打ち砕くと、その中にいたであろうポセイDONを引きずり出した。

アトランティスの中央にあるポセイDONの神殿に彼女を投げ飛ばす。ドンと勢いよく着地するとわたしもそれに続こうと向かっていく。

水の巨人が崩れていく。わたしたちを苦しめた水の巨人も、主を失えばただの水の塊でしかないのだ。

「ハアッ!!」

青い稲妻と共にポセイDONが起き上がる。その顔は怒りに満ちている。あれだけ見

下していたフレンズさんに追い詰められているんだ。当然のことだ。

「このわたしが……このような獣畜生に追い詰められるとは……。許さんぞ貴様らッ!!私をコケにしてくれたその罪の重さ、決して量れるものではないッ!!貴様らを倒し、タルタロスの深い淀みの中に未来永劫閉じ込めてくれるわアッ!!」

両腕に纏われた青い稲妻がアムールトラさんを襲う。その時、フレンズさんの姿に戻ったセイリユウが水の壁を作り、それを阻んだ。

「グッ……次から次へと……!」

「もはや、貴方に勝ち目などないわ。大人しく降伏なさい」

「この私を侮辱する気か……オリンポスの神の名に懸けて決して降伏などするものか!私を決して負けぬ!!!オリンポスの名を汚すようなことはあつてはならぬのだ!!!」

ポセイDONは右腕に水を纏わせると、チェーンソーのように勢いよく回転させた。20mはあろうかという大きな水の柱がわたしたちへ襲い掛かる。しかし、当たらなければ意味はない。ビースト化したわたしたちには止まって見えるというものだ。それにポセイDONは弱っている。あと一押しさえすればわたしたちの勝利だ。勝算は既に見えている。ポセイDONに打ち勝ち、わたしたちはゴコクエリアの平定を成し遂げるんだ。

豺キ豊——12 「墮ちる神、顕現する悪」

「お前たちはクロサイたちの支援に行け。ここはあたし一人で十分だ」

「!?」

イエイヌが驚いたような顔をしている。自らビーストになるとは愚かなことをするものだ。それも少しの理性を保っているように見える。まだ自我を保っている内にもえたちの元へ帰さなくてはならない。クロサイやカラカルたちがいれば大丈夫ではあるだろうが、それでも各々が勝手に動いて回つては不安が残るといふものだ。ともえを守るのはイエイヌ一人だ。ゴマでは正直不十分としかいえない。それにあまりちよこまかと動かれるとあたしも十分に戦えない。あたしのためにもイエイヌには退いてもらわねばならない。

「聞こえなかったか？お前がいれば邪魔だからどけと言っている…」

「グウ……！」

「あたしに迷惑をかけたのか?!?…あたしの理性が残つていゝる。う。ち。に。さ。つ。さ。と。行。け。エ。ツ。!。!。」

少し恨めしそうな目であたしを睨んだ後、イエイヌはともえたちの元へと飛んでいっ

た。残るはセイリユウだが…。

「…私の役目はポセイドンを倒すことだけど…。あなた一人で十分のようね。私はオィナリサマの元へ行く。アイツつてば、一人でバフオメットを相手にしているようなのよね…。後は頼んだわよ、ビースト」

「…その名であたしを呼ぶな」

セイリユウは早々に去っていった。せめてビーストという忌み名であたしを呼ばなければよかつたのだけど…。そんなことはどうでもいい。今は目の前の驕れる神を討つのみだ。

「フツ…フフフフ…。ビーストという業を乗り越えた獣よ…。貴様の實力…認めてやろう…。確かに貴様は強い…。だが…私とて負ける訳にはゆかぬ…！私には守るべきプライドがある！オリンポスの名に懸けて、貴様を倒してくれよう！」

全身に刻まれた青い筋が禍々しく光る。それに呼応するかのようにポセイドンは稲妻を纏うと、弾丸の如くあたしに向かって突進してきた。

「くっ…」

間断なく攻撃が繰り返される。チェーンソーのように呻るその水の刃は容赦なくあたしの体を引き裂こうとしている。

彼女の瞳は寸分の時もあたしを捉えて離さない。それどころか次の瞬間にあたしが

いるところを正確に捉えているようにも見える。

「ツ……くそっ……!」

直感を頼りにポセイドンの攻撃を寸でのところでかわしていく。セルリウムを撰つていかなかったら、間違いなくあたしは切り裂かれて死んでいただろう。ビースト化したことによる身体能力と直感であたしは辛うじて彼女と渡り合っているのだ。

守勢に回ってばかりいても仕方がない。一瞬の隙を突いて攻勢に出なければスタミナであたしは負けてしまう。どうにかしてあたしの間合いに彼女を引きずり出さねば……

「(っ)だ……ッ!」

一歩、二歩……。そして三步目でアイツを斬る……ここを逃せばいつ反撃に出れるか分からない……。ここで何としてもポセイドンに致命傷を与えねば……

「甘いわ……!」

ポセイドンの周りにドーム状の稲妻が炸裂する。その攻撃を直に受けたあたしは無様にも大きな隙をさらすことになった。

「ぐうううううっ……!?!」

腹部にポセイドンの槍が突き刺さる。ポセイドンはそのままあたしを壁に投げつけると、あたしの喉めがけてトドメを刺しに来た。

「くぅぅぅ…ッ!!!!」

両腕に肉が食い込むほどの鎖が絡まる。あらゆるものを逃さない懲罰の鎖…。まるで過去のあたしを思い出すようだ。あの時もあたしは二人のフレンズによって拘束されていた。

過去の忌々しい記憶が蘇るようだ。かつてあたしはビーストと呼ばれ恐れられてきた。その時にもあたしは鎖で縛られていたんだ。

過去のあたしが憑依してくる。底知れぬ憤怒の情があたしを染め上げていく。

「またあたしを…しはりあげるかアツツツ!!!!」
「なにっ!?おわアツ!!」

あたしを縛る鎖をポセイドンから引きはがす。その鎖はあたしを縛り付けるかのよう、あたしの両腕に乱雑に巻き付いた。まるで体の一部になったかのような。腕に絡みつく鎖に熱がこもる。

「ウアアアアアアアアアアアツツ!!!!」

両腕に巻かれた鎖を勢いよく地面に叩きつけてポセイドンを薙ぎ払う。鎖が地面を打つたびに勢いよく地面が抉れていく。例えばオリンポスの神ともいえど、これに当たってはただでは済まないだろう。

「小癩な…!」

を貫いた。すかさず左手に纏わせた水の刃をあたしに向かつて振り下ろすけど、そんなものはあたしにとつては無意味だ。

右腕に巻かれた鎖をポセイドンの左腕に絡めると、あたしの元へと手繰り寄せた。必死に引きはがして逃げようと抵抗しているけど、この鎖はポセイドンが自身でも言ったように、生半可のものでは解けもしないし切れもしない。抵抗するだけ無意味というものだ。

「くそつ……この私が……このような獣畜生に……!」

血に濡れた左腕の鎖をポセイドンの体から引き抜くと、鞭のようにしならせ、怒りに任せるままに殴打した。

ポセイドンの体が赤く染まっていく。心なしか青い筋の光も弱まっているように見える。

うまく制御できなかった鎖の一つをポセイドンの体に絡みつかせると、あたしはそのままポセイドンの体を宙に浮かせて、力のままに地面に叩きつけた。地面の大きなクレーターが穿たれる。二、三度地面に叩きつけた後に、壁に向かって勢い打ち出した。

せき込む口から赤い血が溢れている。神といえども血は赤いらしい。

「ぐつ……はア……ッ……、この私を倒したところで……何も変わりません……! バフオメツトが……ハクトウワシが貴様の前に立ちふさがり、貴様を倒すことだろう……!」

「誰もこのあたしを倒せはしない……命に手をかけたことのない雑魚が数多の命に手をかけたこのあたしを殺せるものか……！バフオメツトも、ハクトウワシも、あたしの前に立つフレンズなどこの爪と鎖で引き裂いてくれるわ……！」

「クツ……フツフツフツ……！貴様のような殺戮の機械……アレスであればさぞ喜ぼうなあ……！」

「貴様……！」

あたしは胸倉をつかみ上げると、力の限りポセイドンに頭突きを食らわせた。追撃の手を休めることなく、次に顔面に向かって思い切り蹴りを入れた。再び壁に叩きつけられたポセイドンは両の腕で弱々しく体を支えている。自らを唯一無二の神と思いがった傲岸不遜なあの姿はもうない。今あるのは自ら見下していた獣に返り討ちにされた惨めなボロ雑巾だ。

首を掴み上げ爪を首にめり込ませて顔面を殴打する。首を絞める手を放して地面に叩きつけると、向かいの壁に向かって投げ飛ばした。もはや抵抗する気力もないらしく、惨めに地面を這って逃げようとしている。

とどめを刺す時だ。背を向けて逃げるポセイドンを掴み上げると、あたしは爪を立てて大きく切り裂いた。

声もなく絶命する。気付けばあたしもポセイドンの返り血を全身に浴びていた。あ

たしはポセイドンに勝つたのだ。残るはハクトウワシとバフォメットだったか。思えばバフォメットの姿は一度も見えていない。聞くのはその名前のみだ。

「ふふ……あつはははは……！」

不意に笑い声が聞こえた。声のする方を振り返ると、全身が真っ白な馬のフレンズがそこにいた。

「いいわ……よくわたくしを楽しませてくれたわね……！すごく良かったわ……！あの忌々しいポセイドンを倒すだなんて……なんて素晴らしいのかしら……！」

ペイルだ。どうやらポセイドンが倒れたことで興奮しているらしい。不気味にゆらゆらと揺れていて気味が悪い。しかし、一体どういふことなのだろうか。ポセイドンとペイルは仲間だと思っていたのだが……。

「けど、まだ死ぬ時ではないわ、ポセイドン……。貴女の役目はゴクエリアのフレンズを駆逐して、生き残った者を選別すること……。そして、邪魔な外敵を駆除することよ……？その役目を終えずに死ぬだなんて、面白くない……。いいえ、許せないわ……。さあ、立ち上がりなさい……。そしてその使命を全うするのよ……！」

「つつ……ハアツ……！」

突如ポセイドンが息を吹き返した。滞留していた肺のガスを吐いては、必死に酸素を求めて激しく呼吸をしている。開いたままの傷口が何とも痛々しい。

「ど、どういふことだ……私は……死んだはずでは……。まさか、ペイル……！」

「貴女の役目はまだ終わっていませんわよ、ポセイドン……。先ほどのような無様な死にようでは、貴女を召喚したバフォメットも悲しみますわ……。せめて、神を名乗るのであれば、目の前の虎を一匹葬ってから斃れなさいな……」

「何を……ぐつ……クソツ……。この私を誰と思っている……。私は……オリンポス十二神の一柱、ポセイドン……。貴様のようなどこぞの馬の骨とも知れぬ凡骨とは違うのだ……！」
ポセイドンは立ち上がるとペイルへと向かって斬りかかっていった。手に持つ壊れたトライデントには海水の白波と青い稲妻が纏われている。

「あら、怖いですわ……」

ひよいとポセイドンの攻撃をかわすと白い木綿のようなものがペイルの体から飛び出してきた。それはポセイドンの体へとまとわりつくつと、地面へと縛り付けペイルへの供物とした。

「わざわざリベンジのチャンスを与えたというのに、どういふことなのですか……？」

「貴様に生き返らせると頼んだ覚えはないぞ、ペイル……。何より死者を生き返らせるなど言語道断……。私はオリンポスの神として、秩序と支配を何よりも重んじる……。死者は生者とあつては決してならぬ……。それを覆すようであれば、貴様は私の敵だ……。この私が直々に誅してくれるわ……！」

「クフフ…アツハハハハ…！愉快だわ！ポセイドン！そのままあのコをやってしまいなさい！」

青い筋に光がともる。亡者の力を使って無理やり回路を広げているのだろう。どこまでも悪趣味なフレンズだ。あの性格が生まれつき、生来の性格なのだとしたらオリンポスの神以上に軽蔑するしかない。

「そこまでしておけ、ペイルよ」

「あら、バフォメット…？」

突如、黒い影がペイルの背後に現れた。それは背中に鳥のような羽を生やした、ヤギのような姿をしたフレンズのように見えた。鶴とは違う妙な禍々しきさを感じる姿をしている。普通、鳥のフレンズであれば頭に羽根を生やしているが、こいつは背中に羽根を生やしている。それにフレンズのケガワらしきものが全く見当たらない。上半身はもはや裸と言ってもいい。脚はもはや鳥そのものだ。頭には燃える第三の角が生えている。アレはフレンズと言っても良いものなのか…？

「もはやあれは死に体…。黙って死なせてやれば良いものを無碍に生き返らせるとは…。そこまで命じた覚えはないぞ、ペイルホースよ…」

「気に障ったのでしたらお許しくださいませ、バフォメット。計画は順調に進んでおります故、どうかお慈悲を…」

「で、あれば良い…。して、アムールトラよ…。そちの働きも見事よ…。まさか、余のポセイドンをも倒してしまうとは…。まったく、あっぱれよ…」

「何が言いたい…?」

「褒めておるのだ。その武勇、見事余を楽しませてくれた。褒めて遣わずぞ…」

「何だと…?」

こいつは今何と言った?余を楽しませた…?こいつは味方を使って己の娯楽に興じているとでもいうのか?己のために戦っている戦士を鬪鶏でも見ているような感覚で見ているとでもいうのか?

ポセイドンに目を配る。亡者の魂に抵抗しているのか激しく体を震わせながらあたしに歩み寄ってきている。少し前までは倒すべき暴君と思っていたが、今では救うべき英雄のように思える。

…ペイルを倒してポセイドンを救わなければならない。真に倒すべきはバフオメツトとペイルホースだ…!ポセイドンはアイツらに操られていた犠牲者でしかないんだ…!

「殺す…!」

あたしの中のビーストを解放してペイルに突撃する。間合いは十分だ。あたしの跳躍と振り下ろす腕の中にペイルはいる。あたしの間合いにさえいればペイルは物の数

秒で死に絶えるだろう。

「あらあら、怖いですわ…」

ふらりと体をそらすとペイルはあたしの攻撃をかわした。ふらふらと揺れるだけのものだと思っていたけど、どうやらある程度の場合数はこなしているらしい。伊達に享楽にふけっているわけではないらしい。

「ギイ…!」

歯を噛みしめて倒すべき蒼白い馬を睨む。相変わらず枯れたすすきのように揺れている。

「やっとおしまいなさい、ポセイドン…。貴女の戦いはまだ終わっていないくてよ…?」

「あ…あああああああああ!!!」

全身からから異常なまでの電撃を放ちながら猪のように突進してくる。あの様子では自爆してくるのかもしれない。なんとかして死なないように、動けなくしてからペイルを止めなければならぬ。まずはポセイドンを救ってからペイルを倒す。そしてともえの元へと帰るんだ。

「フツ…!」

ポセイドンの肉体はとつくに限界を超えている。全身に刻まれた青い筋はもう光ってはいない。それなのにあの異常なまでの放電だ。肉体が崩壊してもおかしくない

いうものだ。一刻も早く倒して開放しなければならぬ。

「ああッ……ぐああ……。う、あ、あ、ア、ア、ッ、!!」

繰り返しポセイドンの体にあたしの爪痕を刻んでいく。こうして着実にダメージを与えていけばポセイドンも死なない程度に倒すことができるはずだ。古典的なやり方ではあるけど、今はこの方法が一番だろう。

「あッ……」

突然ペイルが間抜けな声をあげた。見ると、イエイヌがペイルに斬りかかっている。一撃、二撃、三撃と着実にペイルにダメージを与えていつている。これは嬉しい誤算だ。あたしはポセイドンとの戦いに集中できる。余計な雑念を振り払っていかに生かして倒すかだけを考えるんだ。

「バフォメット、どうにかしてくださいませんこと……？わたくしにはあの犬はとても手に負えませんわ……」

「今の余にはとても叶えられぬ……。女狐めが余を縛る限り、新たに駒を召喚せぬ限りならぬ……」

念仏を唱えるような独特なイントネーションでバフォメットが囁く。どうやら別のフレンズがバフォメットを封印して動けなくしているらしい。だったらあそこにいるバフォメットは一体何だ？あの不気味な存在感を放つ幻影は何なんだ？

「…ふん、よく言うわ…。…バフオメツトは、小高い丘にある廃教会の地下…黒ミサの祭壇にいるはずだ。お前の行った地下ラボは、それを欺くための装置に過ぎん。通常であれば、バフオメツトの妖術と私の神力で空間ごと歪められて入れないのだが…私の力を失った分、入るのは容易になっていくはずだ。どうやって黒ミサの祭壇に入るかはお前たち次第だ。空間転移で移動していた故にあそこがどういいう風に繋がっているかは私には分からない。精々頑張つて探すことだな…」

「……………」

妙なことにバフオメツトの居場所や、行き方…内部の秘密と思われる事柄を簡単に吐いた。どういいうつもりなのだろうか。

「…勘違いするな。貴様らに協力するのはあくまでも私自身の為だ…。私を捨て駒にしたばかりか、死して尚私を操り、からくり人形の如く私を使ったのだ…！貴様だけは決して許してはおけん、バフオメツト…！」

その怒りは確かなもののように思えた。目が怒りで血走っている。神の力を失ったのか、体中に走る筋は黒く変色して光らないままだ。

「セイリユウと言ったか。オイナリサマの元へ向かうと言っていたな。私も黒ミサの祭壇に入る怪しい力を感じて奴と接触を図ったことがある。まずはセイリユウを諭して祭壇と廃教会の地下を繋げるぞ。内と外で空間を連結させるのだ。人間たちへの指示

は任せたぞ、ピースト」

「…あたしはアムールトラだ。お前の言い分、信じるぞ、ポセイドン」

「…ふん。貴様の名前、覚えたぞ、アムールトラ…。私を打ち負かしたその名前…決して忘れんはせんぞ」

負け惜しみとも捨て台詞とも言えないようなことを言つてポセイドンは飛んでいった。ポセイドンの言うことが本当であれば、これに従わない手立てはない。まずはともえたちを説得して廃教会に向かわせねばならない。

既に奴らの尻尾は掴んだ。後は隠れる獣を引きずり出して、その喉首を掻き切るだけだ。ペイルホース、バフオメツト、ハクトウワシ…。後は奴らをこの手で切り裂くまでだ。

豺キ豊—13 「深い闇の奥底へ」

「…ウソよ…。そんなことが…」

「何をそんな怯えた顔をしている…?」

「とぼけないで…! いったいアタシに何をしたというの…!? アタシは…! いったい…!」

水鏡台に映し出された光景を見てアタシは深い絶望に襲われていた。アムールトラに討たれたポセイドンが生き返ったのだ。死んだ者が生き返る…。あり得ない奇跡がそこに映し出されていたのだ。

「みんなアタシはあの時に殺されたと言っていた…。みんな何を言っているかアタシには分からなかった…。こんな…こんなことが…!」

アタシはあの時にセルリアンに殺されて、本当に生き返ったっていうの…? 殺された…アタシが…?」

確かに記憶が混濁していてうまく思い出せないこともあることにはある。思い出そうとするたびに頭がズキンと痛んで思い出せないでいたのだ。脳裏にはびこるノイズが消えていく。そこには思い出してはいけない忌々しき記憶があった。

.....

「行くな！ハクトウワシ！無茶だ！」

「よくもアタシの巢を…兄弟を…！アタシの縄張りを侵したこと、後悔させてあげる！」
確かあの時、巢を荒らされて、ライバルであるスカイダイバーズたちを傷つけられたんだっけ。そして怒ったアタシがセルリアンを次々倒していったんだっけ。

「ジャステイストルネード！」

「——！？」

「よし！まずは一匹！次！覚悟なさい！」

「ハクトウワシ！無茶だ！数が多すぎる！スカイダイバーズたちも無事なんだ！一旦ヤタガラスのところへ退いて作戦を練り直すんだ！」

「だったら先に帰ってて！よくもアタシの大切なライバル…友達を傷つけてくれたわね…！絶対に後悔させてあげるんだから…！」

この時のアタシは怒りに目がくらんでて前が見えていなかった。周りは既に囲まれていた。ハヤブサの言葉も耳に届いていなかったんだと思う。

「はあっ！」

一匹、一匹と手にかけていく。十四目を倒したあたりからアタシの体力も尽きかけて

いたんだと思う。

「はあ……はあ……！」

「この数を相手にするのは無理だ……！周りも既に囲まれて……！くそつ、どうすれば……！」
「つ……！しまった……！いつの間にこんなにかまれてたの……!？」

四方上方共に既に取り囲まれていた。こんなのに気付かなかったアタシも大概バカだわ。

「こうなったらアタシが突破口になって……！ハヤブサ！逃げ道はアタシが作るわ！スカイダイバーズを連れて逃げるのよ！アタシも後で追いつく……！さあ、早く逃げて……！」

「しかし……！」

「どーもこーもないわよ……！このままだとみんな全滅しちゃうでしょ……！さあ、早く……！」

「くそつ……！絶対に戻ってくるんだぞ……！分かったな……！」

「ええ……！絶対に戻る……！正義は負けないわ……！」

そうしてセルリアンを倒していったアタシだけど、体力的に持たなかったのよね。

「なっ……!？」

刺されて、蹴られて、潰されて、叩かれて……。輝きを手に入れたかったのかしら。中々アタシがこと切れるのを許してくれなかったように思うわ。

アタシの最後は、四つの吸盤が付いたようなセルリアンに覆い被されて、窒息するよ

うにして死んだんだ。

そして、気付けばアタシは一人森の中で倒れていた。その倒れていた所こそがまさしく、セルリアンに倒されていたところだったんだ。

……

「ああ……ああああ……！」

「思い出したか？ハクトウワシよ……」

「そんな……嘘よ……。嘘よ嘘よ……。本当に死んでいたなんて……。まさか、ペイルホースがアタシを生き返らせたっていうの……？」

「そこまでは分からぬ……。何の気まぐれかは知らぬが、お主は余の元へと訪れたのだ……。そうして、余の庇護の元に、お主は自身の理想とする幻想郷を作ろうとしている……。ポセイドンの件は残念至極であるが、ポセイドンの遺した遺志は確かに余が引き継いだ……。案ずるなハクトウワシよ……。余の庇護の元、お主の悲願、確かに達成してみせよう……」

「アタシの……悲願……」

「そうだ……。皆が皆らしく、自分らしく生きていく世界を作る……。ヤタガラスの作る、自

由なき統制と抑圧に苦しみ喘ぐ社会が嫌なのだろう…？神の力を手にしたお主であれば、それらから解放することも難しい話ではなからう…。それにこのバフオメットがいののだ。余の権能とお主の力さえあれば、ゴコクエリア…引いてはこの世渾てに自由をもたらずさえできようぞ…」

座禅を組んだような姿勢を取ると、そうあたしに語りかけてきた。右手を上へ上げ、左手を下へ下げている。ひどく醜く、禍々しいように見えるけど、どこか神々しさを感ずるようだった。

「神の力を授かったお主に、余の持つ権能の一つを授けよう…」

バフオメットがアタシの目の奥底を見つめる。次の瞬間、ドクンとアタシの中の何か弾けた。

「我が権能を以って、伽藍堂の正義とこの世の総てをお主に呉れよう…。虚構の正義はこの世総ての正義を駆逐せん…。この世総ての悪もまた正義なる…。この世に存在する幾億の正義がお主に牙を剥こうと、お主は戦い続けることになるだろう…。其れ即ち修羅の道に身を投じ、自身が修羅に成り果てることと意味する…。絶対の正義と絶対の力、勝利の上の勝利を手にした時、お主は真の正義を手に入れよう…。压制と凌辱の果てに他者を踏み躪り、幾千もの屍の上にただ一人立った時、お主は真の勝利と正義を手にするのだ…。お主にその覚悟はできておるか…？」

バフオメットがアタシに語りかけてくる。その笑みはアタシの事を心の底から見下し、試しているかのように思えた。

思えば、そんなことは考えてもいなかった。アタシは、いつでもフレンドズの為、ヒトの為にあらうと思つて動いてきた。それは、他のフレンドズからしてみれば偽善であり、醜いものに見えたかもしれない。けど、それは他者に否定されてはいけないものであり、アタシの自己であり、アタシというものを構成する自我であった。

「アタシは…目覚めた時から自分の信じる正義の為に奔走してきた…。その中で大きな代償をいくつも払ってきたわ…。ヤタガラスを裏切り、アタシに縋るフレンドズを蹴落とし、それまでのフレンドズの生活を何回も壊してきた…。それでもなお、アタシに付いてきてくれるフレンドズもいる…。アタシは…それでもアタシに付いてきてくれる子たちを、裏切るようなことをしたくない…!アタシは…アタシの信じる正義を、成し遂げしてみせる…!」

「…それで良い…。我が権能、お主に授けよう…」

再びドクンとアタシの中で何かが弾けるような感じがした。バフオメットが口を開く。

「今、お主はこの世総ての正義となつた…。お主のやること、成すことは総て正義であり、この星の意思でもあるのだ…。あらゆるものを、破壊し、凌辱し、殺め、浄化する

のだ……。偉大な正義の名の元にな……」

「……………」

この世すべての正義……。正義の執行者になればアタシを快く思わない子も出てくるだろう。バフォメットは続けている。彼女の言う通りにすればアタシを快く思わない子も出てくるだろう。バフォメットは続ける。

「気に入らぬ物を核の炎で焼くのも良からう。種族の対立を煽るのも良からう。毒を撒き、塩を撒き、遍く生命が死に絶える大地を作るのも良からう。お主の手にかかるもの総ては悪であり、許されぬ存在なのだ……。お主のすべてが正義であり、許されるのだ……」

「……うるさい。アタシはそんな外道に落ちるようなこと……絶対にするもんか……！」

「どうか……？ 権力に狂わぬヒトなど存在せん……。どんな名君にも暗い側面はあるものよ……。暴君になるか賢王になるか……。正義の執行者がどのような道を辿るか……。余が見届けてやろう……」

……………

アムちゃんがアトランティスから戻ってきた。二人がポセイドンとの戦いに勝ったんだ！これで後はもう怖いものはないというものだ。早くハクトウワシさんを説得してキョウシユウエリアに帰るとしよう。

「アム!!!」

真つ先にゴマちゃんが飛び出して行った。顔をくしゃくしゃにしてアムちゃんの帰還を喜んでいる。

「バカヤロおツ! どんだけ心配したと思つてんだよ……! もう二度と戻つてこないんじゃねえかつて思つたんだぞ……!」

「ごめん、心配かけたね……」

「うっせー……! ぜってー許さねえかん……!」

アムちゃんの胸に顔をうずめて嗚咽を漏らしている。誰よりもアムちゃんの心配をしていたんだ。アムちゃんが帰ってきたことは、ゴマちゃんにとって何よりも嬉しい報せだったことだろう。

「フーツ……! フーツ……!」

「イ、イエイヌちゃん……?」

一方のイエイヌちゃんは何故かアムちゃんを威嚇している。一体どうしたつていうんだろう……?

「ポセイドンと戦う時に、邪魔だからどこかへ行けつて言ったのをまだ怒っているんだろう。ピースト化して理性を失くしたせいで歯止めが効いていないっぽい」

「そ、そんな! イエイヌちゃん! 落ち着いて!」

「フーツ……グルルルル……」

なんとかあたしの言うことを聞いてくれている。ビースト化してもイエイヌちゃんはイエイヌちゃんなんだ。早いところビースト化を解いてあげなくては、イエイヌちゃんもつらいだろう。普段のイエイヌちゃんからは考えられないほどの殺気を放っている。

「ビーストは体内のサンドスターを急速に消費していくようだから、早く解除してあげなくちゃね……。バビルサの日記にはビースト化の解除の方法は載っていないかったし……。どうしようか……」

かばんさんが頭を悩ませている。アムちゃんの時はセルリアンに食べられてセルリウムだけを吸収されたんだっけ。ここに来てからはセルリアンなんて一匹も見えないし、第一同じようなことがまた起きるなんて保証はない。……っていうかアムちゃんはいつの間に元に戻ってるんだらう？

「……小高い丘にある朽ちた教会の地下にバフォメットがいる祭壇がある。そこでオイナリサマがバフォメットと戦ってるって聞いた。そこに行くぞ」

「ア、アムちゃん……!?!」

「……黙って付いてくればいい。セイリユウも祭壇に入ろうと苦戦しているはずだ。あたしたちが苦戦したポセイドンとの戦いは、ただの前哨戦に過ぎなかった……。真の敵はそ

の祭壇にいる。ペイルホース、バフォメット、そしてハクトウワシ……。奴らこそ、真に倒すべき敵なんだ……！」

ズンズンとアムちゃんが教会に向かって歩いていく。その歩みは早く、何か焦っているようにも思えた。トラツグミちゃんがアムちゃんの後を小走りで追いかける。

「確かにあの教会から妙な気配を感じる……。魂の色……。セイリユウ、バフォメット、ペイル……。それにこれは……。ポセイドン……!? 貴様、どういふつもりだ……!!」

ザツと臨戦態勢を構える。毛は逆立って全力でアムちゃんを潰しにかかろうとしている。ポセイドンがああ協会にいるというのか。ポセイドンは倒したはずじゃなかったのか？

「黙ってあたしに付いてくればいい。ポセイドンはもうアタシたちの敵じゃない。ポセイドンが生きているなら、何故あたしは生きていると思う?」

「クツ……！」

若干悔しそうな顔をしながら臨戦態勢を解除する。あたしとしても、そこら辺の説明も欲しいものだけど、アムちゃんはしてくれるのだろうか。

「ポセイドンはバフォメットに良いように扱われているだけの駒に過ぎなかった。それに確かにあたしはこの手でポセイドンを殺した。だけど、ペイルはわざわざポセイドンを生き返らせて再びあたしと戦うように仕向けた。ポセイドンはそれにすごく怒って

いる……」

淡々と事の経緯を説明するアムちゃん。それに至るまでの経緯はわかったけど、なんかイマイチ信じられないっていうか……

「わかったか？ともえ、トラツグミ」

「……ま、今は信じるしかないわよね……」

あつさりとトラツグミちゃんも納得した。若干疑ってはいるのかアムちゃんとは少し距離を置いているようだ。

「けど、あの教会の地下にそんな施設なんてあったかしら……。アイツが吹き込んだか知らないけど、やっぱり私たちを騙そうとしてない？まさかあんた、操られているんじゃないんでしょうね？」

「普通に入っただけじゃバフォメットの祭壇に着くことはできない。だからセイリユウの力を借りて祭壇に通じる道を開くんだ。トラツグミ、お前はあそこにセイリユウの魂も見えたはずだ。まずはそこへ向かって奴に協力を仰ぐぞ」

「……嘘を言っているわけではないよね。良いでしょう。信じてあげるわ」

二人でどんどん前へと進んでいく。あたしにかばんさんは何のことやらで呆然と立ち尽くしている。訳も分からないままにいるあたしたちを置いて二人はどんどん進んでいく。

「と、とりあえず行こう！かばんちゃん！みんな！」

「っ！そ、そうだね！」

気を取り直したあたしたちは再び前へと進みだした。目指すはあのバビルサが実験していた教会の地下だ。そこであたしたちの本当の戦いが始まるうとしている。

.....

地下へ進むとセイリユウさんの姿が見えてきた。何やら壁に向かって悩む様子を見せている。辺りはびしょびしょに濡れていて、壁にはぼつぼつと穴が開いている。

「セイリユウさん！」

「あら…貴方たちは…」

くるりとセイリユウさんがあたしたちの方へと振り返った。少し気だるげなほんわかした印象を受ける。このセイリユウさんがあのポセイドンと激しく体をぶつけて戦っていたなんて、なんだかいまいち信じられないと思った。

「ここで何してたんだ？」

ゴマちゃんが問う。

「この壁の向こうから邪悪な気配を感じて、なんとか突破を試みたのだけど…土や岩盤

を扶るばかりで何の手ごたえもないのよね」

「…ポセイドンが向こうとこちら側を繋ぐと言っていた。それにはお前の力が欠かせないとも」

「私の…？繋ぐ…？」

何が何やらちんぷんかんぷんといった様子だ。セイリユウさんに理解できないことをあたしが理解できるはずがない。いつたいていどういう仕組みなんだろうか？

「そろつたようだな」

どこからかぬつとポセイドンが現れた。全身傷まみれで、青く点滅していた刺青も黒く輝きを失っている。以前のような気迫さは感じられないけど、その威厳は依然としてあたたしたちを気圧すかのようだ。

「ポセイドン…！」

「オイナリサマとは既に話を通してある。あとはセイリユウ、お前が奴とシンク口して波長を合わせれば、奴らへの道が開くことができよう…。そうしたら後は奴の根城に乗り込むだけだ」

「…敵対していたアンタが私たちに協力するなんてどういふことなのかしら？」

「アムールトラから聞け。何度も説明はせん」

「…ふん。まあいいわ。けど、よくもまあ、そんな難しいことやれだなんてよくも簡単に

言ってくれるわね……」

洩々と壁に手を当てて何やら念じる所作を見せる。ポセイドンの言ったようにオイナリサマの力でも探しているのだろうか？

「私にも確かにオイナリサマ？の力を感じれるけど……これにシンクロするっていうのはちよつと……」

「童は黙るがよい」

「……やっぱりアンタは嫌いだわ、カミサマ」

なぜかポセイドンとトラツグミちゃんがいがみ合っている。何か二人の間に蟠りでもあるのだろうか？

「静かにしてもらえないかしら？気が散るわ。あと少しでいけそうなのよ……」

そうしてしばらくすると、無機質な金属製の壁に光の歪みのようなものが現れた。ポセイドンはそれに歩み寄ると、むんずと搦んでテントの入り口でも開くかのように無造作に開いた。

「……苦勞であった。……お前たちのおかげでバフォメットの祭壇への道は開かれた。ここからは完全に奴の領域。現世とはかけ離れた、奴の映し出す異界と思うことだ。ここからは何が起こるか私にも分からぬ。奴の作り出した世界だ。何が起きてもおかしくないという事を肝に銘じておけ」

ポセイドンがその異界へと入っていく。後にはセイリユウ、トラツグミちゃんと続いていく。

「あたしたちもグズグズとしてられない。ともえ、ゴマ、行くぞ」

あたしたちの前をアムちゃんが行く。後にはかばんさんとサーバルちゃんが続いていく。

「行くこう、ともえちゃん。僕たちは行かなくてはならない。正直に言つて、僕も怖いと思つてるんだ…。この、ポセイドンとは違う禍々しさ…。そして、この異界から感じるただならぬ悪意…。きつと、この先にいるのはフレンズではないか何かだ…。けど、僕たちは行かなくてはならない…。この世界で、この悪意を振りまく邪悪な存在を、討ち倒さなくてはならないんだ…！」

かばんさんが自分に言い聞かせるように呟いている。よく見ると手が小刻みに震えているのが分かる。あたしが思っている以上に、かばんさんはこの異様な世界に恐怖を抱いているんだ。

恐怖からあたしの脚も震える。時代錯誤も甚だしい、土を固めてできたレンガと石造りのトーチ：これがバフォメットが作り出したサバト：黒ミサの祭壇なんだろう。これから、あたしたちもそこへと足を踏み入れるんだ。

「行くこう、ともえちゃん」

ぐずぐずしているあたしたちにサーバルちゃんの手を差し伸ばしてきた。気付けばゴマちゃんもイエイヌちゃんも先に行ってしまったようだ。後に残っているのはあらし一人だけだった。

悪意渦巻く深い闇へと足を踏み入れていく。一歩進んでいく毎に痺気があたしを呑み込んでいくかのようだ。

バフオメツト……。どういうフレンズさんか分からないけど、話し合いで解決できないフレンズさんであることは確かだろう。恐らく、このゴコクエリアをこんな風にしたのも、そのバフオメツトのはずだ。

緊張とも恐怖とも言えない妙な感情があたしを支配している。一歩一歩と祭壇へと歩いていく。まだ見ぬ敵へとあたしたちは進んでいくんだ。

豺キ豊—14 「巨人の彫刻」

「この世界は、奴が心の中で作り出した、自身の最も理想とするものを反映した世界だ。私の作り出したアトランティスもその一種と思っても良い。私はこの世の総て支配するための王国を、奴は背教、冒瀆、汚辱そのものをこの世界へと落とし込んだ。この世界を見て分かる通り、奴には何の理念も信条もない。あるのは神を冒瀆して嘲笑うという腐ったものだけだ」

「神を嗤うって…。ポセイドンはどうしてそんな子に協力してたの…?」

「奴が嗤う神というのは、私のような下々の者を支配する圧倒的な力を持つ存在ではなく、創造主と呼ばれる者だ。大地を造り、天を作り、人や生物を造った圧倒的な存在を奴は侮辱しているのだ。同じ神であっても、根本の存在が違う」

「なるほど…」

淀んだ空間の沈黙を破るようにポセイドンが話す。足音だけが響くこの地下空間の中では、無機質な音を聞くよりは、敵でもなんでも生き物の発する声を聞く方が良い。何より強大な敵であったポセイドンと近づくチャンスでもあるのだ。今のうちに彼女のことを知るのも良い機会というものだ。

「魔術師は私を召喚し、私と契約を交わした。そして私はそれに従った。それだけだ」
「…外敵を排除し、自身を召喚したマスターを守れ…ということかい？」

「そうだ…。だが、実際はそうでなかった…。奴は忌々しくも巧妙に、私を道化に仕立て上げたのだ…。ペイル、バフォメット…。決して許しはせん…！」

「うみやあ…。あのポセイドンがこんなにも怒るなんて…。バフォメットつてどんな子だろ…！」

「性根の腐った悪魔と言う他ない。我々の言葉ではディアボロスともいう。奴は、他者を弄んでは自身の愉悦とするこの上ない悪趣味な性格をしている。助けを求める者へ甘美な提言をし、協力するふりをしてはそいつを破滅の道へと追いやるのが奴の生きがいだ。そしてお前たちの思う通り、奴はフレンズと呼ばれるものではない。多少なりともサンドスターの影響は受けているようだが、姿かたちはほとんど元の姿と変わっておらん」

嫌味も憎しみも込めない淡々とした口調でバフォメットについて話す。けど、ポセイドンの解説を聞いていると、少し引つかかるものがあるように思える。ハクトウワシさん…まさかとは思うけど、バフォメットに騙されてるんじゃないか…どうしてもそう思えて仕方がなかった。

「ポセイドン、ハクトウワシさんなだけ…もしかしてだけ…バフォメットに…」

「…間違ひなく奴のおもちゃにされているだろうな…。彼女の根底にある理想に付け込んで、良いように操っているんだ。それを幫助した私も私だが…。だが、奴がペイルと結託してこの騒ぎを起こしたのは事実だ。まさか、本当に死者を蘇らせるとは…。変だとは思っていたのだ。ハクトウワシには生者にも死者にもない特別なものを感じていた…。生者の魂と死者の肉体を持っているというのか…。しかし、よもやそういう事だったとはな…」

ポセイドンの独白は続く。敵だった者の胸の内を知るとは新鮮なことだ。このままバフオメツトやペイルちゃんのこと聞ければいいんだけど…。なんだか話を聞く限りでは、あまり接触がなかったようにも思える。

「おしゃべりが過ぎますわね、ポセイドン」

「ツ…：…ペイル…：…」

突如暗闇の中に五十メートルはあるかという巨像の姿が浮かび上がった。その上にはペイルとハクトウワシさんの姿が見える。この異質な空間に似つかわしくない大きな巨像がここにあるのだ。これもバフオメツトが映し出した一種の心象風景なのだろうか。

「降りてこい！正々堂々と私と向き合えッ!!」

「何をお馬鹿な事を申されるのですか…？何故、わたくし自らが、わざわざ相手の有利な

土俵に降りなければならぬのですか…？」

ゆらゆらと揺れながら見下すかのように答える。

「ふふふ…。御覧なさい、ハクトウワシ…。こんなにも潰しがいのある羽虫がいつぱいですわ…。フレンズたちが精魂込めて作ったこの巨像の力、見せてあげましょうか…」

「…そうね…。ちようど良いわ。あなたの力を見せてみなさい、ペイルホース…」

「仰せのままに…。ふふふふ…」

「ハ、ハクトウワシさん…」

生気のない淀んだ瞳があたしたちを見下ろす。あれが、正義を信じる者の目なのか…。正義の瞳というのは、もっとキラキラと澄んでいそうなものだけど、今見えているハクトウワシさんの瞳は、悪に落ちたダークヒーローそのモノのようにしか見えない。これもバフオメットの悪の手によって穢された故なのか。

「どうしてだ、ハクトウワシさん…！何故、キミのような正義のために戦うフレンズさんが、悪に組して無益な殺生を行おうとするんだ…！」

「これがアタシの選んだ正義…。アタシはこの世の総ての正義を敷く者…。…アタシに歯向かう者はすべて排除するわ…。例えばばん、アナタでも…！」

義憤に駆られるばんさんが叫ぶ。対するハクトウワシさんの答えは冷淡なものだった。自らが理想とする正義の為にヒトとしての心を捨てたかのように思えた。ハ

クトウワシさんは自らを正義を成す者として、自身を世界を回す歯車としたのだ。

突如背後からゾクツと得体の知れない悪意のようなものを感じた。見ると酷く痩せこけた顔のない女性の姿があった。あの不気味に痩せた修道女のような格好をしたものは…セイレーン…！

「そんな、どうしてセイレーンが…！」

「あら、お気付きでなかったのかしら…？」

ペイルがゆらゆらと揺れながら答える。

「アレはわたくしの分身…アレを使ってゴコクエリアのフレンズから生氣を集めていましたの…。すべてはこのおもちゃの為に…」

セイレーンが仮面を外す。黒い煙のようなものがセイレーンの体から抜けると、巨像の体に吸い込まれていった。黒い霧が巨像を包み込む。

「しかし、鶴…。トラツグミと言ったかしら？ 貴方がわたくしの分身を倒すだなんて思ってもいませんでしたわ…。力の三分の一を無駄にしてしまうだなんて…」

無表情なまま死に体の虫を見るかのような目でペイルが言う。

「さて、わたくしの出番はここまでですわ。あとは好きになさい、ハクトウワシ…」

「……………」

ふわっと舞うとペイルは黒い霧の中に消えていった。後には巨像とハクトウワシさ

んが残っている。すべてはこの時の為…。まさかとは思うけど、この巨像を動かすといふ訳ではないだろうか。

「あ、貴方の力を見せてもらいましょうか、コロツサス……」

ハクトウワシさんは自身の腕から白い稲妻を走らせると、それを巨像の体へと落とし込んだ。巨像の目に光が灯る。鈍く金属の軋む音がする。巨像の白く光る目があたしたちを捉えると、全身に走る稲妻を辺りに撒き散らしながら動きだした。

「三三三!!!」

巨像が不気味な絶叫をあげる。無機質な音とも獣の叫びとも言えない怪奇な絶叫だ。

やがて、コロツサスと呼ばれたそれは、ズンズンとあたしたちに迫ってくると、その大きな拳をあたしたちの元へ叩きつけた。確実にあたしたちを叩き潰そうと振り下ろされた拳は、地面に大きくクレーターを開けた。

「あんなの勝てっこねえ……逃げるぞ……」

誰もゴマちゃんの意見に反対する子はいなかった。有無を返さずあたしたちは逃げ出した。コロツサスは容赦なく早足にあたしたちを追いかける。目の前に続く、暗く広い一本道は壁へ壁へとあたしたちを導いていくかのようだ。そのうち本当に壁へと追いやられるのではないか? そう思うほどだった。

「ッ……!」

「させるか……！」

「アムちゃんの鎖が巨人の脚に絡みつく。アムちゃんが力任せに引つ張るとバランスを崩して巨像は倒れこんでしまった。」

「今のうちだ！行けッ！」

「うんっ……アムちゃん、無事で……！」

「巨像を背にあたしたたちは逃げ出した。アムちゃんの言うことを聞かないでその場に留まっても邪魔なだけだ。多分アムちゃんも激高することだろうと思う。ここは黙って逃げるしかないんだ。」

「三三三!!!」

「巨人の絶叫が聞こえる。恐らく、アムちゃんに転ばされたことに怒ってるんだと思う。心なしかさつきまでの絶叫より幾分か怒りの感情がこもっているようにも聞こえる。」

「逃がしませんわよ……？」

「ひっ……！」

「暗闇の中から突如、ペイルの顔がぬうつと現れた。あたしの目と鼻の先まで近づくとすかさず距離を取って嘲笑するかのような仕草をとってみせた。」

「ふふふ……いい顔をしてくれるわあ……。その恐怖に歪み切った顔……大好きですわあ……。」

もつと良く見せて下さるかしら…?」

「ペイルちゃん…!」

宙に浮いたままふらふらと揺れてあたしたちを見下ろしている。横目であたしたちを見下ろすと右手に球体のようなものを浮かび上がらせた。

背後からゴウと突風のようなものが駆け抜ける。見ると、トラツグミちゃんがペイルに飛びかかっているところだった。

「あら…」

小柄な体から繰り出される斬撃はアムちゃんの引けを取らない勢いだ。鈍く光る黒い爪は闇をも切り裂かんばかりの禍々しさを湛えている。

「怖いですわあ…。ふふふつ…こちらへおいで…」

「逃がすか…ッ!」

陽炎のような屈折を残して奥の暗闇にペイルが退いていく。あの不気味な笑みの裏に隠されたものを読み解こうとすると、どうしても追いかける脚が重く感じてしまう。奥からは巨像が迫ってくるのはもう明白だ。嫌でも追いかけるなければならないだろう。「きつと罨なんだろうけど、追いかける必要は…。さもなければコロツサスにやられてしまう…。みんな、周りには最大限の警戒を払うように…。サーバルちゃんも、少しでもおかしな音やにおいを感じたらすぐに教えて」

「う、うん……わかった！」

ペイルの残した甘い残り香を辿って奥へと進んでいく。等間隔に並べられたトーチはあたたかさを地獄の奥へと誘っているようだ。これがバフォメットの追い求める黒ミサなのだろうか。やがてあたたかさは、一つの大きな広間へとたどり着いた。

「ようこそ、バフォメットの祭壇へ……」

遠い闇にペイルが静かに佇んでいる。闇の中にポツンと浮かぶペイルの姿は、とても不可思議でこの世のものではないと思うほどだ。

「ここであれば貴方たちも存分に戦えるでしょう……？ さあ、哀れな子羊たち……その藻掻く姿でわたくしたちを楽しませなさい……」

突如地面から青白い光が放たれたと思うと、そこへあの巨人の姿が現れた。肩にはハタトウワシさんの姿もある。ペイルは巨像と戦わせるために、わざわざあたたかさをこころへと導いたので。なんて悪趣味なフレンズだろうか。こんなフレンズさんの為に胸を痛めていたと思うと、過去のあたしを一発ぶってやりたいと思うほどだ。

巨像は立ち上がってあたたかを見据えると大きな咆哮を放った。

「……！！！！」

相変わらずの不気味で奇怪な音だ。こんな叫び声を一日中と聞かされたら並みの精神ではもたないだろうと思えてくる。

「アム……アイツ……！」

ゴマちゃんが無気に反応した。まさか巨像と戦っていたアムちゃんもまとめて召喚したのだろうか？巨像が何かを放り投げるような動きを見せたと思うと、黒と黄色の何かが放り出された。あの影は……まさか、アムちゃん……？

放物線を描いてあたしたちの元へと飛んでくる。あたしたちの足元へと放り投げられたそれは、紛れもなくアムちゃんそのものだ。つた。

「アムちゃん……！」

「おいっ……！しっかりしろ……！」

「アツ……グっ……」

全身傷だらけでいかにも満身創痍といった様子だ。この様子ではしばらくは戦えそうにない。

トラツグミちゃんとポセイドンが巨像へと向かっていく。あたしたちは黙ってその様子を見守ることしかできない。ここには地上のようなバリスタも弩砲もなにもない。何の力も持たないあたしたちにできることは何もないんだ。

巨人の体軀はポセイドンよりも小さいけど、その機敏さは水を纏ったポセイドンよりも遙かに速い。加えて一撃がとてつもなく大きい。掠りでもすれば細かな肉片となつて一巻の終わりだ。

「……………」
 ハクトウワシさんとペイルはただ黙ってその様子を窺っている。巨像は攻撃の手を緩めることなく、その剛腕で二人を潰そうと鋼の拳をひたすらに叩きつけている。

「三三三三!!!」

巨像が叫ぶ。巨像は体を反らして頭上で指を絡めると、大気を裂かんばかりの勢いでその拳を地面へと叩きつけた。

「おのれ……!」

「ぐう……っ!」

地面に穿たれたクレーターがその威力を物語っている。揺れる地面はあたしたちに明確な恐怖を植え付けた。恐怖から足が震えて動けなくなる。

「口ほどにもないわね……。大人しくアタシに降伏なさい。そうすれば苦しまずに逝かせてあげるわ」

「何を抜かすか……! 悪魔に魂を売った小娘が……思いあがるなア!」

ポセイドンの体に刻まれた回路が青く光る。青い光は稲妻となりポセイドンの体を包み込むと、一閃の光となって巨人の体を貫いた。

「ツ……アタシに……抗うなア!! アンタたちなんて黙って死んでればいいのよツ!! コロツサス! あんな奴なんか潰してしまえエ!!!」

「三三三!!!」

「本性を現したな、神を騙る愚かな獣よ……!」

ハクトウワシさんの怒りに応えるように巨人が絶叫する。ひと際響くその大きな叫ぶは、この空間全体を揺るがすようだ。

巨像の絶叫に合わせて、壁に掛けられていたトーチに青い火が灯された。青い火に照らされたこの空間は、どうやら一つの大きな教会のようだ。巨像の背後にはとても大きなステンドグラスが飾られている。幾何学的で耽美的なその模様は、美しくもどこか禍々しさを感じられるようだ。

「三三三!!!」

巨人が再び叫ぶ。ステンドグラスに照らされたその姿は、狂気に歪められた悪の化身そのものようだ。悪へその身を墮とした正義の執行者が、黒魔術に手を染めた巨像を動かしている。そう思えて仕方がなかった。

「どうよ!!!アタシは正義の執行者になるの!!!アタシはその為ならなんだってするわ!!!アタシの邪魔をするならば一匹残らず駆逐してやる!!!その為なら悪にだってなってみせる!!!なんだってアタシは正義なんだから!!!」

狂ったようにハクトウワシさんが叫ぶ。

「この力は正義を執行するためにあるツ!!!そしてこのコロツサスこそ正義の体現そのも

の!!!暴力と圧政の象徴よ!!!アタシは圧倒的な力と悪魔から授かった権能を以ってこの世総てを平定してみせる!!!すべてはアタシの前に平服して感謝するのよ!!!」

「狂ってる……そんなの間違ってるよ……!」

ハクトウワシさんは正義に固執するあまりに狂ってしまったている。バフオメツトが何を唆したのかわからないけど、ハクトウワシさんは間違いなく強迫観念に駆られて暴走してしまっている。正義の使者にならなければいけないという強迫観念と、ポセイドンから授けられた圧倒的な力、そして正義の執行者としての使命感が彼女を狂気の渦へと落とし込んだのだ。彼女を取り巻くすべての存在が彼女を狂わせてしまった。この狂気から解放するためには……

「ああああああああああああああああああああ!!!」

「三三三!!!」

ハクトウワシがヒステリックに叫ぶ。まるでこの世のすべてを憎んでいるかのよう

その時、一つの影が巨像に向かって突っ込んでいった。

「エイヌちゃん……!」

その影は、紛れもなくエイヌちゃんのものであった。だけど様子がおかしい。ピースト化していて理性を失っていることを抜きにしても、それ以上に何かが違うている。

んちゃんへ向けて大きく叫んだ。

「三三三三!!」

自身に巻きつけられた鎖を振り回してアムちゃんを壁へと叩きつける。だけど、アムちゃんはうまいこと壁に着地すると、巨像へと一直線に向かつて跳躍した。爪を立てて巨像の頬へと飛び乗る。

「いぞ……その調子だ……!」

不敵な笑みを浮かべたポセイドンがぼそりと呟く。右手に宿した光の玉が煌々と輝いている。両手をかざして狙いを定めると、巨像の脇腹めがけて光の玉を放った。

「イエイヌー中だ! コロツサスの脇腹に穴を開けてやった! お前は中に入って内側から破壊してやれ!」

「クッウ……ッ……!」

イエイヌちゃんはポセイドンに言われた通りに体を降りると、脇腹に穿たれた穴の中に入っていた。元の動物に戻ってしまうのも心配だけど、今はイエイヌちゃん……みんなが勝つことを信じて待つとしよう。

「クツ……なんてことなの……! コロツサスが追い詰められるなんて……!」

「後ろがから空きだぞ、ハクトウワシ……!」

「っ……!! しまっ……!」

不意打ちをかけられたハクトウワシが、地面へと落ちていく。今まではコロツサスの圧倒的な力に手を出せないでいたけど、数の有利を得た分別個に戦うのも容易になったのだ。コロツサスから引きはがされたハクトウワシが悔しそうにトラツグミちゃんを睨む。

「不意打ちをかけるだなんてとんだ卑怯者ね……！それに、あたしがコロツサスに頼るだけのフレンズと思っただら大間違いよ……！神の力を手にしたアタシに倒せない物なんてない……！さあ、かかってきなさい！アタシに戦いを挑んできたこと、後悔させてあげるわ！」

白い稲妻を全身に迸らせながらハクトウワシが言う。その様子は、さながら滾る力を誇示させているかのようだ。ポセイドンとは違う威圧感を感じる。ポセイドンが遍く大海と大地を制する王であるならば、ゼウスは天空を制する王と言われている。今、目の前にあるハクトウワシはまさしく天空の覇者、ゼウスと呼ぶに他ならない。

風と稲妻を纏いハクトウワシが宙を舞う。地下祭壇での決戦が始まろうとしている。あたしたちは絶対に勝たなくてはならない。パークの存亡を賭けた戦いが、今、始まる。

間があるんだ……!

「キ、ツ、……!」

目の前の敵を睨む。鎖に繋がれたそれは、さながら囚人のように思えた。鎖に繋がれた哀れな囚人は獄卒に虐げられるのが定めなのだ。力を込める両腕に血が滾る。視点を一点に定める。狙うは右腕、必ず切り裂き、落としてみせる……!

「キ、イ、ツ、……!」

両腕を高く上げる。乱れ舞う鎖が巨人を覆う。だけど、そんなのは関係ない。狙いを一点に絞る。狙うのは肘から先、手首を切り落とす……!

巨人が右腕を引く。飛びかかるわたしを迎撃するようだ。ここからは寸分の油断も許されない。巨人が先に拳を繰り出せばわたしは死ぬ。わたしの爪が出し遅れれば死ぬ。少しの行動の遅れがわたしを死なす。

すべての神経を集中させろ。五感を研ぎ澄ませ。巨人の攻撃と共に、振り上げた手を、爪を振り下ろすんだ。早くても遅くてもいけない。僅かなズレがわたしを死に追いやるんだ。

しなせさせた体に力が籠る。巨人の目とわたしの視線が交差する。

次の瞬間、巨人の拳がわたしへと突き上げられた。

「ツ、……!……!……!」

みを見せた。

両手の爪で乱れ引つ搔く。ハクトウワシの体から鮮血が飛び散る。わたしの腕を、体を血で汚していく。地面には生々しく彼女の血が尾を引いている。

突如何かに首を掴まれた。ビリビリと痺れるような感じがする。首を絞める手を引きはがそうとするも、実体がないのか抵抗する手は虚空を払うばかりだ。どうやら見えない何かに首を絞められているようだ。

「クッッ……アッッ……!!」

「ハア……ハア……アタシは……負けない……!!」

ハクトウワシは勢いよく飛び上がるとわたしを地面に向けて打ち付けた。打ち付けられた衝撃から咳きこんでしまう。もはや満身創痍だ。立ち上がるのにも全力をふり絞らなければならない。

「これで終わりにしてやる……!」

ハクトウワシの両手に巨大な雷霆が灯る。まるでこの空間全体を包み込むかのようだ。

「あつ……」

一瞬だけ正気に戻った。終わりだと思った。雷霆を打ち付けようと体をしならせている。

その時だった。一つの手斧が放物線を描きながらハクトウワシへ飛んでいつている。

「くっ…誰だ!!!」

「うみやあ!!!」

サーバルさんがハクトウワシに飛びついている。これではハクトウワシの雷霆を零距离で受けてしまう。

「…だつたらまずはお前からだ!!!死ね!!!」

ハクトウワシが叫ぶ。もうおしまいだと思ったその時だった。

背後にハクトウワシに飛びつく影が見える。あの姿は…

「やあああああああああああああああああつつ!!!」

「なっ…!?しまっ…!!」

湿ったような鈍い音と共に雷霆が光を失っていく。ハクトウワシが地面に落ちていく。

ズサツ…

「アツ…グツ…!」

「かばんちゃん…!やったよ…!」

「うん…そうだね…」

かばんさんがわたしに視線を送る。

「ハクトウワシさんのことは後は僕たちに任せて。ともえちゃんたちがオイナリサマの行方を追っているから、彼女たちが戻るまで少し休むといい。キミの体はキミが思っている以上にダメージを負っているだろうからね。キミが倒れてはキミのご主人さまが悲しむことになるかもしれないよ」

「クッッ……ウッウッ……」

かばんさんの言う通りこの体にはわたしは思っている以上のダメージを受けている。緩んだ緊張から全身に鞭打つような痛みが走って仕方がない。

「ウッッ……エッホッッ……」

咳きこむ口から血が溢れてくる。わたしは横になるとともえちゃんの帰りを待つことになった。

……

「三三三!!!」

「くそっ……!」

暴れる巨人を鎖で制する。腹に穴が開いたというのに元気なことだ。腕がれた右手から火のようなものを撒いてはあたしたちを焼こうとしてくる。なんとかアレをかわ

?????????

して致命傷を負わせなければならぬ。

「助太刀するぞ！アムールトラ！」

「トラツグミ……！」

トラツグミが巨人の左頬に大きな傷をつけた。巨人が怒りに吠える。怒りに我を失った今こそが反撃のチャンスだ。

「三三三三!!」

巨人があたしに向かって突っ込んでくる。タイミングを見て、反撃の時を窺う。

勢いよく手のひらが地面に叩きつけられる。空間全体を揺るがすほどの衝撃が身を震わす。

「い……！」

ボセイドンの放つイカズチが膝の裏を貫く。普通のフレンズであれば致命傷になりかねないダメージだろうが、こいつには関係ない。自身を支える支柱さえあれば、何度でも立ち上がって襲い掛かってくる怪物なのだ。

「アムールトラ！鎖を！」

トラツグミが突如あたしに鎖を寄こすよう要求してきた。何をするつもりかは分からないけど、巨人を御するこの鎖は、一歩間違えれば巨人の武器となってあたしたちを脅かす凶器となってしまう。

「ッ……！」

鎖をほどくと待ってたと言わんばかりに巨人が暴れだした。あたしたちを薙ぎ払おうと、鎖が絡まる両腕を激しく振り回している。意にも介さずトラツグミは二本の鎖を握ると、乱暴に巨人を引っ張ってバランスを崩した。見かけによらず結構力を持っているようだ。

…巨人の様子がおかしい。何やら苦しそうにもがいているようだ。体のあちこちから黒い霧のようなものが噴き出ているのが分かる。

「……いいぞ。アムールトラ！奴を徹底的に痛めつけてやれ！」
「語われなくても分かっている……！」

ボセイドンと共に巨人の体を切り裂いていく。裂いた傷口から黒い霧が噴き出る。それは鎖を伝ってトラツグミに吸収されていつている。

「三三三三!!!」

巨人が最後の抵抗を見せる。ガムシヤラに体を振ってあたしたちを散らそうとヤケになっっているようだ。

「往生際の悪い奴だ……。潔く死ねいッ!!!」

ボセイドンの青い稲妻が巨人の動きを止める。

「……そんなことされると私にも来るってのよ……！でも良いわ！一気に吸い取ってや

る……！」

みると黒い霧がトラツグミに吸われていく。やがて白い霧のようなものが巨人の体から抜けると、それを最後に巨人は動かなくなった。

「や、やったか……？」

「……コロッサスから神力は感じられん。やったのだ。我々の勝利だ」

「……ハアツ……！」

ガクツと力が抜ける。ひどい疲労感だ。力が抜けると同時に全身に鈍い痛みが走る。

「グツ……いつつ……」

「……まだ戦いは終わっておらんぞ。立つのだ」

「……？」

ポセイドンは真っ直ぐと一点を見つめている。あたしもその先に視線を移すと、ゆらと揺れる一人のフレンズがいた。……ペイルホース。まだアイツが一人残っていたのだ。

「ふふふ……あつははは……！」

「……何がおかしい。追い詰められても尚笑うとは……気でも狂ったか？ペイルホース……」

「いいえ？なあんにもありませんわあ……？あはははは……！」

何か様子がおかしい。元からおかしいと言えればおかしのだが。だけど、今回は輪に

かけておかしくなっている。

「最後の仕上げと参りましようかあ……。このわたくし自らが相手になりますわあ……」

瞬間、ペイルの姿が消えた。その刹那、目の前にペイルの顔が現れた。

「ゴア……!!」

強烈な蹴りを腹部に受ける。そのままあたしは吹き飛ばされてしまった。

「ポセイドン……?」

「ぐっ……!!」

体をそらしてギリギリのところまで回避する。しかし、ポセイドンは間断なく繰り出された二撃目を直に受けてしまったようだった。ポセイドンが苦悶の声を漏らす。

「ぐううううううう……!!?おのれっ……!」

「わたくしの役目は儀式を完成させること……。だけど、わざわざそれだけの為に呼び出されたわけではなくてよ……。? わたくしだって、必要とあらば戦うことだってできますわ……。? 貴女達は、わたくしが、か弱い乙女だと思っていたようですけど……。 わたくしは、黙示録の四騎士の内の一騎、ペイルホース……。この世に死を招く者……。戦うことだって齊かではありませんことよ……。?」

ゆらゆらと揺れながらペイルホースが言う。その言葉は、あたしたちを心の底から見下しているかのようにだった。

「あら……」

トラツグミがアンブツシユを仕掛ける。ペイルは容易くかわすと、そばに黒色の球体を浮かび上がらせた。

「さすがに貴方達三人を相手にするのは骨が折れるというものですわ……。この子たちにも手伝ってもらいましょうか……」

球体から白い半透明の物体が一斉に溢れ出てきた。よく見るとけもの姿をしているのが分かる。それにあれは……

「アムールトラ、貴方には良くお判りでしょう……？ 貴方が過去に殺めてきたフレンズの顔……全部覚えているかしら……？」

白い影があたしの周りに群がる。……覚えている。忘れるはずがない。命に手をかけた感触だつて未だにこの手に残っている。

白い影があたしを罵倒する。

「忌々しいビースト……！ なんて私を殺したの!？」

「このろくでなし!！」

「また私を殺す気か!？」

「私の目の前で友達を殺すだなんて未代まで崇つてやるわ……!！」

「またお前か!！」

声があたしを責め立てる。あたしは動けないでいた。あたしがこの魂たちに手を出しては二度も同じ命を殺めることになってしまふ。それだけはしたくなかった。

怨嗟の声は止むことなくあたしを追い詰めていく。体が震えて止まらない。もう消えてしまいたいと思うほどだった。

「ふふふ…」

突如体に衝撃が走った。ペイルがあたしを蹴り飛ばしたのだ。あたしに抵抗することはできなかった。この魂たちの前で暴れることはできない。無差別にフレンズを襲って回るビーストに戻るような気がしてならなかった。

「……………」

「ほら、どうしたのかしら…?そのような調子ではわたくしは倒せなくてよ…?」

「アムールトラ!」

トラツグミがあたしを呼ぶ。

「どうしたんだ!?!いきなり攻撃の手を止めて…!」

「…これらは過去にあたしが殺めたフレンズの魂たちだ…。あたしに傷つけることはできない…」

「…!ペイル…!なんて卑怯なマネを…!」

「…どこまでも腐っているようだな、ペイルホース…!」

「ふふふ…。少しでも戦いを有利に進めるための手段ですわ…」

揺れながらペイルが告げる。フレンズの魂たちの怨嗟が止むことはない。

「さあ、やっておしまいなさい。つらかったでしょう？意味もなく自らの欲望の為に殺されて…。貴方達の無念は察するに余りあります…。このわたくしが許しましょう。ピーストを…やってしまいなさい」

白い影が一齐に襲い掛かってくる。憎悪が、憤怒が、怨嗟があたしの内側を駆け抜けていく。振り上げられた拳があたしの中を通過するたびに、フレンズの呪いがあたしを蝕んでいく。呪いの声があたしの中で木霊するようだ。

「散れいッ!!」

ポセイドンが一喝すると青い稲妻と共に白い影を消し去った。

「ッ…！何を…！」

「死者の声を耳を傾ける必要はない！死者に語る口は持たん！あんな奴らの声は無視すれば良いのだ！」

「…！そんなことあたしにはできない…！ましてや傷つけるなんて…！あたしの勝手で殺してしまったフレンズを二度も傷つけるようなことだけはしたくない…！」

「…ならば私たちがお前の代わりに討つまでよ。できるな？キマイラ」

「……」

てやるんだ。

「目を覚ませ、アムールトラ！今はペイルを倒すことだけを考えるんだ！罪を償うのはその後でも良い！死んで償う必要などないのだ！お前が殺めたフレンズの数だけ生きて償うのだ！勝手に死ぬことはこの神である私が許さんぞ……！」

「そうだ！アムールトラ！生きて償うことだって出来るはずだ！死んで償いたい気持ちも、死んでほしいと思うこいつらの気持ちは私も痛いほどよく分かる……！だけど、生きて罪滅ぼしすることだって出来るんだ！生きて生ける者に奉公して、死者の思いに寄り添うのも一つの贖いとなるはずだ……！」

「ぐっ……あああああああああ……！！！」

呵責の念と死者の呪詛に頭が割れそうになる。堰を切ったように涙が溢れてくる。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……！」

「くっ……あいつはもうダメか……！キマイラ！私はこいつらを片付ける！お前はペイルを頼むぞ……！」

「分かった……！」

「っ……！さ……せ……る……か……ア……ッ……！……！」

「何っ!!？」

フレンズの魂に手を賭けようとしたポセイドンを全力で妨害する。何が何でも手を

「……………」

ズシヤツ！

「…えっ？」

突如、肉体を裂くような鈍い音が聞こえた。見ると、ペイルの体に太いランスが貫かれている。

「お前たち！無事か！」

「クロサイ…シロサイ…？」

「アムちゃん！」

「ともえ…それにオイナリサマ…」

「はあ…はあ…よ、よかった…！皆さん、無事でしたか…！」

ひどく疲れた様子でオイナリサマが言う。アレがたった一人でバフオメツトを封じてたというのだろうか。

「ヒトの弱き心に付け込んでたぶらかすなんて許せません！このわたしが誅してくれませ！無に…還りなさい！」

フレンズの魂が霧のように消えていく。心なしが悪い気はしない。それにペイルの様子もなんだか変だ。体が…崩れていつてる…？

「あああ…体が…腐っていくわ…！せつかく手に入れたこのカラダ…。貴方…オイナリ

サマ…許せない…」

「な、なんですの…!? き、キモチワルイですわ!!」

「くっ…姫!! お離れを!! ペイルホースはこの私めが…!」

ランスを引き抜いたシロサイが飛び退く。ペイルの体からべしやべしやと皮膚や肉が重力に耐え切れずに崩れ落ちていつている。その体には自身を形作る真つ白な骨が覗いている。

「あああ……」

「な、なんて奴だ…。これがフレンズの姿というのか…!」

「元よりこの世に存在しえないけもの…。わたしの術で化けの皮が剥がれたというものです。何をせずともこのまま自壊して消えることでしょう。後はわたし一人でも十分です。あなたたちはバフオメツトの元へ急ぎなさい」

「消える…? わたくしの肉体を剥がしただけなのに…? ふふふ…。ペイル・ホースとしての真の姿を現したただけなのに面白いことを言いますわね…!」

「ツ…!」

腐肉を撒き散らしながら疾風のような速度で距離を詰めてきた。標的はオイナリサマだ。

「まずは貴方の命からいただきますでしょうか…」

「な、なにを……！」

腐った肉と不気味にのぞく白い骨がオイナリサマの顔面に迫る。

「させるかあー！」

「があっ……！」

クロサイの鉄拳が炸裂する。ぐしやりという音と共にペイルが倒れる。溶解する肉体が邪魔でうまく動けないようだ。

「クロサイ！これをー！」

シロサイから得物が投げ渡される。シロサイの誇りとも言える彼女のスピアだ。

「感謝します、姫……シロサイお嬢様のスピアを手にした以上勝たせてもらうぞ、ペイル……！」

「あ、あああ……」

スピアが腕を砕いていく。鋭い突きは肉と骨を散らしていく。戦いは一方的だ。ペイルは何も手を出せないままクロサイの苛烈な攻めを黙って受けている。

「あは、あはははは……！」

「な、何を笑っているー！」

「すべては整いましたわあ！わたくしの魂を、貴方に捧げましょう、バフオメツト……！
今、戴冠の儀は成りましたわあ！わたくし自身を貴方への供物とすることで、貴方は真

に降臨なさるでしよう……！イア、シユプ||ニグラス……！ああああああああああ
ああああああ!!!」

ペイルは絶叫するとそのまま絶命してしまった。後にはドロドロに溶けた肉と真つ
白な骨だけが残っている。

突如地面から光の筋が差した。幾何学的に描かれるそれは魔法陣のように思えた。

黒い霧が立ち昇る。寒気を感じるほどの禍々しい悪意の塊だ。それは、ヒトの形を成
すと一人のフレンズが現れた。

「余は、バフォメット……。戴冠の儀、大儀であつた……。うぬらの働きによつて、余は晴れ
て自由の身となつた……。さあ、子羊たちよ、余と戯れようではないか……」

バフォメット……。フレンズならざる異様な外見に身震いがするようだ。頭部こそ、黒
い山羊のフレンズの特徴を持っているものの、背中に生えている大きな羽や、毛皮のな
い裸同然の上半身が不気味な存在感を醸しており、この存在を特に異質な存在と思わせ
てくれる。ペイルはまだフレンズとして見ることができたけど、こいつはフレンズの名
を騙る悪魔そのものとしか思えない。

「うぬたちを新たな余の供物とすることで、余は更なる高みへと上るのだ……。さあ、おい
で……。余の慈愛と母性を以つて、うぬらに甘美な夢を見せてくれよう……」

豺キ豊——16 「混沌の黒き山羊」

宙に胡座をかくバフオメットと名乗るフレンズ。…アレが神を冒瀆する悪魔…。そして、ハクトウワシさんを唆して破滅へと追いやった、ゴクエリアを混乱に陥れたエネミーなんだ…！

「バフオメット…！あなただけは絶対に許せない…！」

「ふっふっふ…。もつと怒ると良いぞ…。その怒りこそが我が力の源…。策を弄した甲斐があつたというものよ…」

「一体何が目的だ！ハクトウワシさんを誑かしたばかりかゴクエリアをこんなに滅茶苦茶にするなんて…！言え!!何が目的でこんなことをしたんだ!!」

かばんさんがバフオメットに向かって叫ぶ。普段の儂げで薄幸なかばんさんからは想像もできない程の激しい怒りだ。そんなかばんさんを見てバフオメットは不適にクツクツと笑っている。ヒトの感情の荒ぶりを見て愉悦を感じているのだ。これが悪魔…ヒトを墮落と破滅へと導く悪魔の本領なのだ。

「面白いことを言う…。目的などありません…。全ては我が愉悦の為…。この世全ては余を愉しませるための舞台装置に過ぎん…。うぬらが享樂に耽るように、余もまた享樂

に興じているに過ぎんだ……」

「ツ……!! たったそれだけのためにゴコクエリアのフレンズさんを……!! せつかく手に入れた平和をかき乱すなんて……!! 絶対に許さないぞ!! バフォメット!!」

「ふっふっふっ……」

バフォメットに飛びかかろうとしたかばんさんの体が止まる。まるで見えない何か
に体を縛られているかのようだ。

「ツ……な、なにを……!」

「ふん、人間というのはどこまでも無力だな……。…余は、バフォメット……。余はこの世
総ての悪であり、この世の総てを混沌に陥れる者……。うぬらヒトの子など、余の足元にも
及ばぬ……」

「グア!?!」

バフォメットが指で弾くような仕草をすると、かばんさんの体が勢い良く吹き飛ばさ
れてしまった。何が起きたのかわからなかった。バフォメットは一步もそこから動く
ことなく、指を少し弾いただけで眼下のかばんさんを弾き飛ばしたのだ。

右腕を上げて左手を下げる。悪魔のシンボルである、あの姿勢をとっているのだ。

「溶解し、凝固せよ……」

短く奇妙な呪文を唱える。短くはあるけど、何やらひどく不気味で、恐怖を覚えるよ

うな呪文だ。未知に対する恐怖というのか、それに近いものを感じた。

「訳のわからないことを……死ぬがいい!!!」

水と砂の混ざるウォータージェットをバフォメットに放つ。しかし、どういことか。バフォメットの前にはまったくの効果が認められなかった。

「なっ……!?!」

「面白いものを見せてやろう、ポセイドンよ……。全ての物質は、余の前には塵であり、宝玉である……。水は金に成り、銀は酸に成る……。なれば、この水は何に成るかな……?」

水と砂の混合液がバフォメットの手によつて凝縮されると、なんだか透明の石のようなものに変化した。アレは一体……?

「これはうぬらの言うところによる金剛石という物だったか……。余からの贈り物だ……。ありがたく受け取るが良いぞ……」

ズンッ!

「ゴハツ……!?!」

一瞬の出来事だった。ポセイドンの体に十センチ程の穴が開いていた。見るとポセイドンの背後にダイヤモンドの石柱が突き刺さっている。

「おやおや、要らぬと申すか……。神というものも成長したもののよう……。下々の者からの供物を受け取らぬとは……」

クツクツとバフオメットが嗤う。

「どうだ、ポセイドン…。自らの着飾る装飾品に倒れるというものは…」

「くそオ…バフオメットオ…！貴様ア…！この報い…！私を誑かした罪…！決して許さんぞ…！例え冥府に落ちようとも…必ず貴様も引き摺り込んでくれるわ…！」

バフオメットの攻撃に膝をつく。一体何が起こったのか…。バフオメットはポセイドンの放ったウォータージェットをダイアモンドに変えた…。何が起きたのかさっぱりわからなかった。

「ふん…！錬金術か…。この世の理すらねじ曲げるとはな…！さすがはサバトの黒山羊と言ったところか…。ますます相入れない存在だな、バフオメットよ…！」

「ふっふっふっ…。その言葉、褒め言葉と預かりおこう…。さあ、フレンズ達よ、余と戯れようぞ…」

バフオメットの周囲に黄金のつららのような物が浮かび上がる。その切っ先はあたしたちの元に向いている。バフオメットはアレらをあたしたちに向けて射出する気なんだ。

ビュウッ！

無数もの黄金の巨槍が射出される。狙いさえロクに定まってないそれはまるで制圧射撃のようだ。

「タ、ア、ツ！」

「ウ、ア、ツ！」

かばんさんとアムちゃん黄金の弾幕を弾き飛ばす。人々を魅了するであろうそれはキラキラと輝いていて、あたしたちを貪欲の地獄へと誘い込むかのようだ。

「余の見てきた人間どもは余の作り出す金塊に目がなかつたものだが……うぬらはそうでもないようだな……。金は好きではあらぬか……？」

「うるさいッ……あたしはそんなものには興味ない……！だいたいあんたが生み出す者なんてロクなものがないってわかつてるんだから！どうせもらったってロクな目に遭わないよ……！」

「おやおや、ひどい言われようよ……」

あたしの叫びにバフォメットが馬鹿にしたように嗤う。バフォメットの人差し指に光が灯る。それをあたしたちに向けると、心底軽蔑したように呟いた。

「非力なものよのう……。…余の期待に応えぬサルに興味はない……。疾く失せよ……」

青白い光と共に大きく衝撃波のようなものが放たれた。抗う術もなくあたしたちは吹き飛ばされてしまった。バフォメットという倒すべき者の前にあたしたちは無力だった。

捨てられたおもちゃのように転がるあたしたち。もはやバフォメットに対抗する術

は残っていないかった。ポセイドン、ハクトウワシ、ペイルホース…。連戦に連戦を重ねたあたしたちは、肉体的にも精神的にも疲弊しきっていた。もはや立ち上がる気力すらも残っていない。あたしたちの命はバフォメットの手の上に乗っかっているも同然だった。

「ふっふっふ…。戦い気力はもう失せたか…。？…。ならば、余が地上へ出て世に号令を敷くときか…。悪魔によるパンデモニウムの幕開け…。しかとその目で見届けると良いぞ…。」

天井に大穴が開かれる。バフォメットが作り出した世界と現世が結合したのだ。空には暗雲が立ち込めている。まるでこの世の終焉を体現しているかのようだ。

これまでの戦いにおいて、あたしには何もできていない。あたしがやってきたこととて、虐げられるフレンズさんと仲良くなるのを夢見て、ただ背中を追いかけた。なんとめめたい話だ。反吐が出そうだ。

バフォメットが昇っていく。バフォメットが地上へ出たその瞬間が、終焉の幕開けという事だ。

「さあ、いざ見よ…。余の、バフォメットの降誕を…。」

「姿を現したな、サバトの黒山羊よ…。」

突如あたしたちとは違う別の声が聞こえた。空には幾百もの輝きが見える。その輝きは、あたしたちのいるバフォメットの作り出した地下世界へと向かっている。それにこの声は一体……。

「この声はヤタガラス様……皆！バフォメットをこの世界から追い出せ！地上へ追い出して、ヤタガラス様の光の下へと照らし出すのだ！」

クロサイさんの号令があがる。それだけだったらあたしたちにもできるはず……！重い体を奮い立たせてなんとか立ち上がる。この中あたしにできるのは……

「トラツグミちゃん！ゴマちゃん！二人はシロサイさんとクロサイさんを地上へ出してあげて！二人を出し終わったらそのまま伝令をお願い！アムちゃんとサーバルちゃんとセイリユウさんはバフォメットの相手を頼むよ！ポセイドンはオイナリサマを守って……！オイナリサマは皆の手当てをお願い……！」

何もできないあたしでも皆の司令塔になることはできるはず……！皆の統率を図って少しでもバフォメットに近付かなくちゃ……！

あたしたちに向かつて火の玉が降り注ぐ。いくらバフォメットでも物質の変換はできても、高速で近付く物体の対処はできないようだ。

「ぐっ……！」

バフォメットに火球が命中する。当たらなかったバリスタの矢があたしたちへと降

り注いでくる。サーバルちゃんたちも火球に阻まれてうまくバフォメットに攻撃できないでいるようだ。

「ふん！」

ポセイドンが火球を砕く。辛うじてあたしたちに火球が当たるのを防いでくれたようだ。

「なるほどな。私の役割がようやく理解できたぞ。ヤタガラス！バフォメットの奴に容赦なく火の雨を降り注がせるが良い！アムールトラ！サーバル！火球のことは心配無用！当たり損ねた分はすべて私が砕いてくれる！貴様らは臆せずにバフォメットの奴を斬り刻むが良い！」

「わかった！」

「やってやる……！」

三つの影がバフォメットを討とうと交叉していく。空からはバフォメットを目掛けて無数の火球が降り注いでいる。ポセイドンは余裕の表情で一つも漏らさずに当たり損ねた分を的確に砕いていく。…あたしたちの連携は完璧だ。ポセイドンの受けた傷もオイナリサマが張った不思議な結界の力で徐々に癒えていつている。

「あつ……うつ……」

「イエイヌちゃん……！」

「と……ともえ……ちゃん……」

「よかった……！ イエイ又ちゃん……！ あたしだよ、ともえだよ！ 分かる……!？」

「は……はい……ともえ……ちゃん……」

「っ……！ 良かった……!？」

オイナリサマの治療によって目が覚めたイエイ又ちゃんを抱きしめる。半分動物に戻りかけていた四肢も元のフレンズさんに戻っている。イエイ又ちゃんは助かったんだ。

「ありがとう、オイナリサマ……!？」

「いいえ、わたしはわたしにできることをしたまでです。イエイ又さんの絶対に負けないうという心意気があってこそその成果です。感謝するなら、あなたとの約束を果たしたイエイ又さんを感じなさい」

「オイナリサマ……。 うん……。 イエイ又ちゃん、よく頑張ったね……。 よくあたしとの約束を守ってくれたよ……!？」

涙が溢れてくる。考えてみたってそうだ。イエイ又ちゃんはポセイドンと戦うために、自らの身を投げうってまでピーストになつて戦ったんだ。そしてあたしとの約束……ポセイドンを倒して、ちゃんと生きて帰ってきたんだ。イエイ又ちゃんは一つとしてあたしとの約束を違えずに果たしてくれた。あたしはそれを褒めずに自ら反故にしよう

としたんだ。あたしつてば本当にダメダメだ。

「えへへ…。わたし…頑張りました…。ともえちゃん…わたしを…褒めてくれますか…？」

「当たり前だよ…！ポセイドンどころかコロツサスやハクトウワシまで倒して…！イエイヌちゃんつたら…！」

「えへへ…張り切りすぎちゃいました…」

息も絶え絶えなイエイヌちゃんを抱きしめて祝福する。その時、その場に合わないような禍々しい唸り声のような声が聞こえてきた。

「おおおおおおおおおおおおおおお…！」

バフオメツトだ。地上へ上ったバフオメツトが地上のフレンズさんからの猛攻を受けて追い詰められているのだ。

「おおおお…！よもやこの余が地上の雑種を見くびっていたとは…！なんということよ…！少し本気を出さねばならぬらしいな…！」

グロテスクな触手がバフオメツトの体を突き破って出てきた。化膿した体組織のようで見えていて非常に不愉快な感じがする。

地面から紫の炎が火を吹いてフレンズさんたちを追い払っている。バフオメツトの触手が地面を叩くたびに体液のようなものが辺りに散っている。

あれだけあたしやフレンズさんを見下していたバフォメットがフレンズさんたちに追い詰められている。触手が伸びればより遠くに退避すればいい。戦いが苦手ならば後方支援に回ればいい。狩りをするものならば触手を払い除ければいい。フレンズさんの完璧な連携がそこにあつた。

「上がお留守だぞ、バフォメット……！」

「ぬう……！」

ヤタガラスさんの両手に光が灯る。頭上に掲げられたそれは千の太陽よりも眩しいと思えるほどだ。

「ヤタガラスがバフォメットを討つようです……！わたしたちもここから退避しましょう……！ポセイドン！わたしはイエイヌさんとともえさんを地上へ連れ出します！あなたは祭壇内に残っているフレンズさんたち探し出して地上へ逃がしてください！」

「……わかった。必ずや成し遂げよう」

「……頼みましたよ」

オイナリサマがあたしたちを連れて宙へ飛ぶ。ふわっと浮き上がるこの感覚は何とも言い表しがたい感じを覚える。やがてあたしたちはオイナリサマに連れられて主戦場から少し離れた場所へと避難させられた。バフォメットの周囲からはフレンズさんたちの怒号が聞こえる。

火球がバフォメットの周囲を焼いていく。バフォメットに突撃するフレンズさんはそんなものを物ともせず、奴へと殴りかかっている。

オイナリサマが遠くにバフォメットを睨んでいる。バフォメットはグロテスクな触手を五本、六本と増やしながらフレンズさんたちを薙いでいる。触手を増やしていくつれフレンズさんとしての姿を崩していつているようだ。

ポセイドンがかばんさんたちを連れて地下祭壇から飛び出してきた。ポセイドンはあたしたちを認めると、まっすぐにあたしたちの元へと飛んできた。ポセイドンは

「地下祭壇は大丈夫だ。後は心置きなく奴の息の根を止めるといい」

「…分かりました。時にポセイドン、バフォメット…あの悪魔をあなたはどう見ますか」「どういうことだ…？ 奴は討ち滅ぼすべき悪の化身だ。それ以外の何でもない」

「…そう、ですか…。ポセイドン、わたしにはアレが悪魔にも神にも見ることができません。確かにバフォメットからは悪魔のような悪意を感じますが…。魂の色と言いますか、バフォメット…奴の魂からは悪魔とも神とも精霊とも言えないような未知のものを感ずるんです。…あなたにもそれが分かるはずですよ。ポセイドン…あなたは、バフォメットのことをどう思いますか」

「…言った通りだ。魂の色など関係ない。神だろうが悪魔だろうが、奴は討ち滅ぼすべき仇敵だ。そのような質問など、私には愚問というものだ」

「…そうですか。分かりました。ならば私も雑念を振り払って、奴を倒してみせます。バフオメツトを倒して、ゴコクエリアを、パークを、世界を救ってみせます…!」

オイナリサマの目に光が灯る。野生解放だ。両手にサンドスターの輝きが灯らせるのと、バフオメツトに向かってその両手を掲げた。

示し合わせたようにヤタガラスが頭上に掲げた光をバフオメツトに向かって大きく解き放った。黄金の光線がバフオメツトを包み込む。ヤタガラスさんの光に包まれたバフオメツトが苦悶の声を漏らす。

「おおおおおおおおおおお…!なんということよ…!この余が地上の雑種に追い詰められようとは…!けもの力…侮っておったわ…!」

バフオメツトが太陽の光に焼かれていく。体から生えている触手がヤタガラスさんを払おうとガムシヤラに暴れている。

「バフオメツト…。ヒトを誘惑しこの世に悪を敷く悪魔よ…。天に代わってこのわたしが誅してくれます…!無に…還りなさい!」

「おおおおおおおおお…!」

黄金の光線がバフオメツトの体を焼く。太陽の化身と豊穡の神の放つ輝きは、まるで浄化の力のようにも思えた。二人の光線がバフオメツトの体を焼いていく。

「おおおおおおお…!余の体が…崩れていく…!おおお…!余の醜い体が…見るでな

体を震わせて何かを呻いている。アレがバフォメットの正体……？アレが悪魔の本当の姿なのか？皆がその姿に絶句して動けないでいる。無数に光る目は一つ一つがあたしたちを捉えて離さない。

黒い触手がフレンズさんたちを薙ぎ払う。バフォメットの放つ触手よりは緩慢ではあるものの、太く、長くなつた触手は致命傷を与えるには十分だ。幸いにも、特別大きなダメージを負つたフレンズさんはいなかつたようで、ヤタガラスさんたちも胸をなでおろしていた。

「この化け物……！」

再びヤタガラスさんが光線を放つ。さつきよりも威力は低いようだけど、威力は十分で、バケモノの体の一部を大きく抉つた。泡立つ肉塊が弾けて何か体液のようなものを散らしている。ヤタガラスさんの攻撃に反応したのか、のたうつ黒い触手がヤタガラスさんを襲つた。

「グア……！」

ヤタガラスさんが落ちていく。幸いにも、落下地点には他のフレンズさんがいたようで、落ちるヤタガラスさんをキャッチしてくれた。

足を引っ込めて肉塊が宙へ浮かぶ。肉塊からは様々な動物の脚と尻尾が生えてくる。様々な動物の尻尾などを模した触手をうねらせながら肉塊は宙へと上っていく。ゆっくりながらも遠く空へと上っていつている。

「奴め、逃げる気だな……！」

ポセイドンが言う。

「逃がさんぞ……聞こえるか!!!ゴコクエリアのフレンズよ!!!あの宙に浮かぶ肉の塊はパフオメツトの真の姿だ!!!奴は、正体を暴かれた今、我々の元から逃げようとしている!!!ゴコクエリアに災厄をもたらしたあの忌々しい悪魔を撃ち落とすのだ!!!」

ゴコクエリアの周囲から水の柱が立つ。柱の一本一本が肉塊の体を穿つ。白い海水と弾ける肉の汁が細かな粒子となつて散っていく。肉塊は低い唸り声をあげて悶えているようだ。

「なぜだ……!?何故ゴコクエリアのフレンズ共は攻撃しないのだ……!?!」

「……かつてはゴコクエリアの敵として振舞つてたんだし、誰もあなたのことを信用していないんじゃない……?悔しいけど、クロサイさんやヤタガラスさんの号令じゃないと攻撃しないと思うよ」

「くっ……おのれ……どうすれば……このままでは、奴に逃げられてしまうぞ……！」

ポセイドンが悔しそうに唇を噛みしめる。いくら神と言えどもあの巨大な肉の塊を撃ち落とすには限界があるらしい。パツと見ただけでもゴコクエリアの半分ほどの大きさがあるのが分かる。それを一柱のカミサマに撃ち落とせというのも酷な話というのではないだろうか。

「何をボサつとしている……！ゴコクエリアのフレレンズよ！弩に弾を込めよ！各位射撃の準備をするのだ！狙いを定めよ……決して外すな……！狙いはあの宙へ浮かぶ悪魔……バフオメツト……！さあ、撃ち放て……！これが我らゴコクエリアのフレレンズ最後の戦いだ!!! 各位一斉射!!! 撃てえ!!!」

ゴコクエリアの至る所から光の弾が放たれる。狙いはあのバフオメツトの成れの果て……。これであたしたちのゴコクエリアの戦いが終わるんだ。

「これで……トドメだア!!!」

「終わりだ、バフオメツト!!!」

ポセイドンとヤタガラスさんの一撃が放たれる。光の筋は一直線にバフオメツトに向かつて伸びていく。

ゴコクエリア中の光弾を受け、ヤタガラスさんとポセイドンの一撃を受けたバフオメツトの肉体は激しく弾けた。四散したバフオメツトの肉片は闇となつて消えていく。

「や、やった……?」

「…バフォメットの放つ邪悪な気配が小さくなっています。…やったのです。わたしたちの勝利です…！みんな…！」

「あ…あああ…勝った…私たちが…バフォメットに…！う…うえええええ…！」

クロサイさんが泣き崩れる。その姿にかつての面影はない。重い鎧に身を纏ったクロサイさんはもういない。自身の持つ理想を捨て、自身の愛するパークの為に血を、心を、魂を捧げた、かつてのクロサイさんの姿はもうないんだ。今、ここにいるのはただ一人のフレンズさんなんだ。

「もう…泣くんじゃありませんわ、クロサイ…。…よしよし、よく頑張りましたわね。わたくしの誇り高き騎士…！」

「シ、シロサイお嬢様…！うっ…うわあああああああああ…！！！」

「もう、この子つたら…！」

心なしかシロサイさんの目にも涙が浮かんでいるように見える。十年以上に渡る長き時を超えての再会なんだ。ここは変に水を差さずにそっとしておいてあげよう。…感化されてしまったのかあたしまで泣いてしまいそうだ。

「…まだ、終わってないわ…！」

「…!?!」

突如、場に似つかわしくなく低い声が聞こえた。声のする方を振り返ると、白い稲

妻を身に纏った一人のフレンズさんが俯いたまま立っていた。あの姿は…ハクトウワシさんだ。

「そんな…ハクトウワシさん…！どうして…！」

「…アタシはアタシの理想を叶える…。そのためにアタシはどんなことだってしてきたわ。…ポセイドンと結託してゴコクエリアを混乱に陥れたわ。ペイルを使ってフレンズから生気を奪ったりもした。そして、悪魔に魂を売ってフレンズとしての生も捨てたわ…。そしてその先にアタシが得たものは何か分かるかしら…？何にもないわ…。何にもよ…！」

必死に泣くのを堪えるかのような震える声で語る。

「今更引き下がることなんてしない…。決して最後まで諦めない…！アタシは最後まで戦う！絶対に諦めてたまるか…！！屈辱を受けるなんてことなんて絶対じゃないのよ…！！」

ハクトウワシさんが号令をかけるかのように叫ぶ。そこにいるのは、自身を絶対の正義とした最後のフレンズさん、ハクトウワシだ。

バフオメットを倒した今、本当の最後の戦いが始まる。絶対に負けることはできない。あたしたちは彼女を倒して、最後の凱旋をあげるんだ。ゴコクエリアの夜明けはもうそこだ。

「最早アタシに失うものなんて何も無いわ…。さあ、行くわよ！このハクトウワシが、混

乱に終止符を打つわ！」

??—17 「旅の終わり」

地面を蹴って相手から距離を取る。相手に不利な空中へ逃げて間合いを稼ぐも、あのビーストはそれを許してくれない。

「くっ……」

稲妻と風を纏って少しでも心に余裕を持たせる。こんな気休めにもならないくらい自分でも分かっている。アムールトラと言われるあのビーストの爪ならばこんな障壁程度簡単に切り裂くだろう。イエイヌとかいう並程度の戦闘力しか持たないビーストにも破られたんだ。アレの手にかかれれば心臓をも抉り取られよう。

「風よ……」

心を静めて精神を集中させる。アタシの纏う風が勢いを増して風が変わるのが分かる。守りを捨てて攻めに出るのだ。攻撃こそ最大の防御はよく言ったものだ。曰く、敵の守りを崩すにはその三倍の戦力が必要なのだそうだ。ならば、守りを捨てて、その三倍の力で押し通すまで……！

「舞い上がれ……」

「ぐう……ッ!!」

ビーストが荒れ狂う風の奔流に耐えている。しかし、そんなものは無意味だ。相手が守りに出た瞬間こそアタシのターンだ……!

「吹き飛べェ!!」

「ガア……ッ!？」

ビーストの体が宙へと投げ飛ばされた。風に揉まれる体に狙いを定める。右手に雷霆を纏わせ、腰を落として力を込める。狙うは心臓、すべての生物の弱点とするところだ……!

「くらえ……!」

雷霆をビーストに向けて放つ。ビーストはその目でしっかりとアタシの雷霆を認めると身を捻って器用にかわしてみせた。追撃に構えた体のテンションが行き場を失くして昂っている。

「くそっ……!けど……!」

風の力を弱めて軌道を修正する。ただが狙いが外れただけだ。狙いが外れたのなら狙い直せばいい。再び狙いを定めるとビーストへ向かって突進を仕掛けた。

「グッ……!」

「ジャステイストルネード!!!」

「ぐああっ!!!」

空気の塊でビーストの体を殴り飛ばす。高密度の空気の塊と雷霆を身に浴びれば、並大抵の生物であればタダでは済まないだろう。

ビーストが地に落ちていく。もはやこうなればアタシのものだ。追撃するルートを決めて急降下していく。風の力を借りて加速していく。

再び風で煽ってビーストを吹き飛ばす。風と天の力を得たアタシに恐れるものは何もない。ビーストだろうと悪魔であろうと絶対に倒してみせる。アタシはもう二度と負けないと誓ったんだ……!

「ここで決めてみせる……! 終わりよ、ビースト!」

ダンツ!!

「なっ!?!」

あの墜落から自力で体勢を立て直した……!? 急いでエアブレーキをかけて制動をかけることなく、今の速度では確実にビーストに捕らえられてしまう……!

ビーストの鋭い眼光があたしを捉えている。確実にあたしを仕留める気だ。

「間に合わない……!」

「ギイ……!」

吹き荒れる風の合間を縫って、ビーストがアタシに飛びかかってくる。咄嗟に腕を組んだおかげで首や頭などを掴まれることだけは防ぐことができた。黒く伸びた爪が腕

に食い込む。オウギワシの如き強靱な握力は、このまま握られているだけでも切り裂かれてしまいそうだ。どうにかして引きはがさなくては、地面に叩きつけられて八つ裂きにされてしまいかねない。

「ぐっ……！ケダモノが……離しなさいッ……！」

「誰が離すか……！降伏するか死ぬか選ぶんだな……！」

「そう……だったら……！」

全身から稲妻を放ってビーストを焼く。感電した反射からビーストの爪が食い込む。

「ぐううう……！けど、今がチャンス……！」

猛禽の本領は足にある。猛禽の強靱な脚力は、狙った獲物を確実に仕留めるためにある。もつとも今のアタシにはかつての爪は残っていないけど。

雷霆を足に纏わせる。足の甲が顎に命中するように、距離と間合いを調整する。後は、ビーストが立ち直るまでの数刻の猶予までに蹴りを入れるだけだ。

「ハアッ!!」

「っ……!!」

「やった……！」

目論見通りビーストの手から解放された。声も上げずにビーストが落ちていく。アタシもすかさず追撃に入る。右手に雷霆を纏って急降下していく。まっすぐ落ちるん

「はあっ……はあっ……！」

恐怖から体が震える。息が乱れて正常な思考が保てない。あんなのはビーストなんかではない。戦うために生まれたバーサーカーと言った方が良い。

両手に雷霆を纏ってビーストへと狙いを定める。普通のフレンズであれば、身を裂き肉を焼く程の火力があるはずなのだが……

「……これで終わらせる……。死ねエツ！ビーストツツ!!」

二本の雷霆の矢をビーストに向かって放つ。ビーストはしっかりとその目でアタシの放った雷霆を捉えているようだ。あの様子ではビーストに通用しないのかもしれない。

「カ、ア、ア、ツ、ツ、ッ……！」

バチイッ！バチイッ！

「つ……くそオツ……！」

万事休すか。暴走するビーストが雷霆の矢を弾き飛ばした。一直線にアタシの元へと飛びかかってくる。

「くろうツ……！」

両腕を掴まれると再び地に落とされてしまった。振り上げられた右の拳がアタシの顔を捉える。

ガツ！バキイツ！

「ぐっ……調子に乗るなアツ!!」

体から旋風を巻き起こしてビーストを引きはがす。風圧に圧されてビーストが退く。アタシはすかさず体勢を立て直すと反撃の準備に出た。両手に稲妻を纏ってビーストを睨む。…これがアタシの最後の反撃になるかもしれない。ビーストの持つ殺意というのか、怒りのようなものが増していつているのが分かる。肌を刺すような鋭い殺意だ。アタシの本能が逃げると早鐘を打っている。今はアタシに飛ばされて横たわっているビーストも、次に起き上がった時にはアタシを殺しに来るだろう。

「クッウ……」

緩慢とした動作でゆっくりと起き上がる。両手に纏う雷霆の出力を最大限にまで引き上げる。奴を感電死させる勢いでなければアタシがやられてしまうだろう。

ビーストの鋭い眼光がアタシを捉える。瞬間、目にもとまらぬ速さでアタシに飛びかかってきた。反射的に出した手を掴まれて取っ組み合いの状態になる。ビーストの握りしめる大きな手がアタシの手を締め上げる。

「ツツ……!!」

「キィィィィィッ……!!」

ビーストの巨体がアタシを威圧する。ビーストの荒い息がアタシの顔を撫でる。プ

「フーツ……フーツ……」

一方のビーストは衰える様子もなく、アタシに対して殺意の目を向けている。…まるで体内に無限の核融合炉を持っているかのようだ。あんなものに勝てるのか。今更だけどそんな疑問がアタシの頭の中をよぎった。

…考えていたって仕様がな。最後の力を振り絞って左手に力を込める。バチバチと左手に白い雷霆が迸っていく。

「キィッッ……」

「これが最後よ……」

「カァッッ……」

残る力をすべて使って最後の一撃を放つ。

…だけど、無常にもビーストはアタシの攻撃をかわしてアタシに迫ってきた。黒い爪がアタシを捉える。

「ガッ……」

四本の赤い傷がアタシの体を走る。一撃、一撃とアタシの体に傷が刻まれていく。腹に、顔面に容赦なくビーストが攻撃を加えてくる。

ガッッ！

「ッ……」

一瞬視界が暗くなった。目の前がチカチカする。頭に鈍い痛みが広がっているのが分かる。

「は……あ……はあ……」

息も絶え絶えで意識も徐々に薄らいでいく。もはやこれまでなのか。

「ハクトウワシイイイー！！！！」

「……ハ……ハヤブ……サ……？」

突如聞き覚えのある声が聞こえてきた。アタシの旧友であるハヤブサの声だ。

「大丈夫か!? ハクトウワシ!!?」

「……に……逃げなさい……。あ、あいつは……貴方の適う相手じゃないわ……。アイツは……ポセ

イドンやコロツサスに立ち向かって……生還した奴なのよ……！死ぬ前に退きなさい……！」

「……！……アイツが……！……けど……私は……！」

「ダメ……逃げて……！」

無謀というべきか、蛮勇というべきか……。アタシを庇ってくれる気持ちは嬉しいのだが、今はとりあえず逃げてほしい……。バフオメツトの権能とポセイドンから授かった神の力を以ってしても、ピーストというフレンズが凶暴化しただけの存在に勝てないんだ。ただのフレンズであるハヤブサが勝てるわけがないんだ……！

「私は二度とハクトウワシを傷つけさせたりしない……死なせたりしないって……誓ったん

だ…！ハクトウワシをやりたければ、私を倒してからにするんだ！ビーストツ！」

「雑魚かあ…そんなに死にたいかアツツ！！」
「ツ…！！」

ビーストの殺気に圧されている…！あのままじゃ…！

「か、からだ…」

「くっ…ハヤブサツ！！」

動かない体を必死に引きずってビーストのキルゾーンからハヤブサを押し出す。ビーストの爪がアタシの背中を捉える。次の瞬間にはアタシの背中を抉っていることだろう。近い未来の死を見た気がした。

ズシャツ！

「…ガアツ…！！」

「ハクトウワシ…！！」

ズンツ！

「ゴハツ…！！？」

突如背中を踏みつけられた。血が喉を上って溢れてくる。

…ハヤブサは完全に怯え切ってしまった。空へ逃げるといふ事も忘れているようだ。

殺気立つビーストの興奮は覚めるところを知らない。それどころか無限に膨らんで
いつている。今のままでは確実にハヤブサは殺されてしまう。

ズシッ…

「ひっ…」

アタシの背中から足をのかしてハヤブサへと歩み寄る。いよいよハヤブサを仕留め
に行く気だ。

「さ、させるもんか…！」

「……………」

ビーストの足に延ばした手は簡単に振り払われてしまった。赤い足跡だけがハヤブ
サへと延びていく。

「あっ…ああ…」

ビーストがハヤブサの前に立つ。すると、数刻の猶予もなく右手でハヤブサの首を持
ち上げた。

ハヤブサの体が宙に浮いている。ハヤブサは必死に逃れようとビーストの腕を引っ
搔いている。

「悪の禍根を断つ…！せめて、苦しまずに逝け…！」

瞬間、ぱきっというくぐもった音と共にハヤブサの体がだらんと垂れ下がった。

ハヤブサが…殺された…。アタシのかけがえのない友達を…アタシの良き理解者であつた親友を、こいつは…！

「ハヤブサ…。そ、そんな…嘘よっ…！」

怒りに体が震えてくる。たつた一人の大切な親友をアタシの目の前で殺したんだ…！

「ビ、ビースト…！貴様、よくも…！」

「……………」

ゴミでも見るかのような目でアタシを見下している。心底アタシを哀れんでいるようだ。

無いはずの力を振り絞って立ち上がる。もはやこの体も死に体だ。限界なんてとっくに超えている。体中の至る所が悲鳴をあげているのが分かる。そんな体に鞭を打つて、引きずるようにビーストに立ち向かっていく。

「ぐうううう…！」

「……………」

アタシの攻撃は簡単に流された。胸倉をつかまれてゴミでも捨てるかのように投げ捨てられた。アタシの倒れていたところには赤い血だまりができています。

震える脚を制して再び立ち上がる。もはやビーストはアタシを敵として見ていない

ようだった。肌を刺すような殺気も消えてなくなっている。今、アタシの前に立っているのはただの一人のフレンズと思えるほどだった。けど、こいつはアタシのかけがえない親友を殺した敵なんだ。決して許してはいけないんだ……!

「よくも……アタシの……!」

足をビーストに向けて走らせる。なんだかとても遠いように思える。距離にして10mも無いはずの距離を懸命に走る。なんとも情けなくて惨めだ。

左手にわずかに電撃が走る。ビーストの体に入れたかったけど、なんてことなく阻まれて体をロックされてしまった。

「……あつ…………」

体にビーストの爪が刺さるのが分かった。痛みは麻痺していた。洪水の如く流れてくる外部の情報の一部遮断されているのか、痛みの一部が欠如しているように感じる。

「夢から覚めるんだな、ハクトウワシ……」

「アタシ……は……」

意識が遠のいていく。走馬灯のように過去の記憶が駆けていく。アタシは一体何を成し得たのだろうか。そう思うと心が非常に空しくなるようだった。

……

アタシは、一羽の鷲としてパークに生まれた。空を自由に舞い、獲物を狩ってはその生を謳歌していた。

そして、フレンズとしての生を新しく受けた。己の内に滾る正義感を胸に戦った。ゴクエリアで皆が安心して暮らしていけるように身を砕いて戦った。そして、志半ば戦いに命を落とした。

総てを犠牲に戦った。守るべきものをも傷つけてきた。気付けば、フレンズでも神でもない血まみれの暴君になっていた。数多の犠牲の果てに得たものは、仲間の死と荒廃した郷土だけだった。

為すべきことも為せず、犠牲だけが増え、その果てに待っていたものは虚無の二文字だけだった。アタシはいつたい…何を成したのだろうか…。

……………

「何を…為したのかしら…」

ハクトウワシから急速に敵意が消えていく。体を支える力もないのか、腹部に穿つ左腕にズシリと重みがかかる。

彼女の腹部から左手を引き抜く。ハクトウワシはべしやりと力なく倒れる。バチバチと放っていた白い稲妻も、力を失っているのか輝きを失くしている。

うつ伏せで倒れている彼女を抱きかかえて様子を見る。目は虚ろで今にも泣きだしてしまいそうな様子だ。

「あ……あああ……」

虚空に手を伸ばして何かをつかみ取ろうとしている。或いは何かに縋ろうとしているのか。見ていられなかったのでアタシがその手を握ってやった。

「あっ……」

ぼかんとした表情であたしの顔を見つめてきている。目からは抑えきれなかったであろう涙が溢れている。

「アムールトラ……アタシは……」

「……何も言うな。もう頑張らなくていい……。お前はお前の為すことをしたままで。……眠れ、安らかに……」

指を使つてまぶたを閉じさせると眠るように息を引き取った。これを以つて、ゴコクエリアの戦いは真に幕を閉じたのだ。気がかりと言えばまだ生きているポセイドンであるが……。

「終わったようだな」

「…………… お前はとうするつもりだ、ポセイドン」

「敗者は早々に去るのみ…と、言いたいところだが、ここでは私の行くべきところもない。お前たちさえ良ければここの復興を手伝いたいと思うのだが…どうだ？」

振り返ってゴコクエリアのフレンズに問う。ヤタガラスは答える。

「今のお前には反逆する力も残っていない。ここに残り守護けものとして礎を築くというのであれば、我々もお前を歓迎しよう」

「…分かった。このポセイドン、オリンポスの名の元に、このゴコクエリアの新たな守護者となることを約束しよう」

ポセイドンがヤタガラスに右手を差し出す。ヤタガラスはそれを認めると、差し出された右手をあつく握り返した。ゴコクエリアに新たな礎が築かれようとしているのだ。

「皆が皆らしく、個性と尊厳を以って生きる世界か…。皆の者、もう少しだけ余に付き合ってもらえぬか。荒廃したこのゴコクエリア、皆の力を以って復興させたいと思っている。ハクトウワシが目指した世界、余が引き継ぎ、他のエリアに負けない程の理想郷を築いてみせよう。皆の者、付いて来てくれるか…？」

フレンズたちは黙って頷いている。ゴコクエリアの新たな夜明けだ。二度の危機を乗り越え、ゴコクエリアのフレンズたちは強くなった。フレンズたちの顔には希望が満ちている。

朝日が眩しく照らし出す。その光はフレンズたちの新たな希望のようとも思える。悪魔によって遊ばれたこのエリアも、フレンズたちの団結によって乗り越えることができたんだ。

「アムちゃん！」

「アム！」

「アムールトラさん！」

「みんな…」

ともえたちが駆け寄ってくる。

「アムちゃん、大丈夫…!？」

「うん。だいじょーぶ…」

「本当に大丈夫なのかよ…!？ハクトウワシの一撃をモロに食らってたじゃねえか…!」

「本当に大丈夫だから…。それよりも見て…。すごくきれいだよ」

水平線に向かって指をさす。そこにはきれいな朝日が昇ってきている。ゴコクエリアの未来を照らす、希望の光だ。

「本当だ…きれいな…」

「今まではこのフレンズたちには見れなかった物なんだろうな…」

「…これが遍くフレンズの皆さんを照らす光なんですわね…」

昇る朝日を見て皆が感慨に耽っている。日の光というのは、地上に生きるすべての命に慈愛の光をもたらすものだ。これからは、その光がゴコクエリアのフレンズを、パークに生きるすべての命に希望をもたらしてくれらることをあたしからも祈ろう。戦うことでしか罪を償えないあたしからもそれくらいはできるはずだ。

戦いは終わった。今ある希望の光が明日へと続いていきますように…。

ROP—終幕「エピソード」

ハクトウワシさんの亡骸を抱えたアムちゃんに連れられて海岸沿いにある峰に向かっていた。自身の理想に殉じたハクトウワシさんを埋葬するためだ。いくらあたしたちの敵と言ったって、ハクトウワシさんもバフオメットによる犠牲者の一人なんだ。無下に扱うわけにはいかない

「ここがいいかもしれない」

アムちゃんがいう。確かに大きな海を一望できる立派な崖だ。振り返ればゴクエリアの城塞も良く見える。ここであればハクトウワシさんも見守ってくれるかもしれない。

「そういえば、ハクトウワシさん、亡くなっても元のけものに戻りませんか。どうしてでしょう」

「彼女はもうフレンズではなくなっている。フレンズの形をとっているが、中身は全くの別物だ。けものからフレンズへ、フレンズから神へと昇華しているのだ。元のけものに戻らないのもその為だ」

「なるほど……」

フレンズとしての生を捨てたと言っていたけどそういうことだったんだ……。理想に生きる激情家ということなのだろうか。自らの生を捨ててまで理想を求めて生きるだなんて素敵な気もするけど、やっぱりうまくいかなかったりするもののかな。順風満帆に行くことができて、その後には転落する人生が待っていると思うと二の足を踏むような感じもする。

そんなネガティブなことを考えてしまふあたしだけど、それをも顧みず、ただひたむきに前に進んで見事に散ってみせたハクトウワシさんは偉いと思う。その姿は世界に反逆する反英雄ともいえるものだけど、ダークヒーローといふべきなのか……英雄と呼ぶに相応しいような気がする。

「……………」

目の前の死が現実のものと思えなかった。美しく眠っているようなその顔は、実はまだ生きているんじゃないかと思えるほどだ。

崖の頂に着いた。ここがハクトウワシさんの眠ることになる陵墓だ。早速お墓を掘ってハクトウワシさんを葬る準備をしなければ。

「私に任せるといい」

ボンツという爆発音とともに見事な穴ができた。確かにこれくらいならハクトウワシさんを埋葬するには十分だろう。

「流石だねポセイドンさん。あつという間だよ」

「……………」

何やら難しい顔をして黙り込んでいる。それに自ら進んで面倒なことを引き受けるだなんてカミサマとして何か変な気がする。けど、言わぬが花。黙っておいた方が良さだろう。

ポセイドンが開けた穴にアムちゃんやんが丁寧に埋葬する。改めてハクトウワシさんを見るとその凄絶な傷の数に驚かせてしまう。衣服はめちやくちやに切り裂かれていて戦いの激しさを思い知らされるようだ。

「すごい傷だね…。こんなになるまで戦っていたなんて…」

「ですね…。ハクトウワシさんには絶対に譲れない理想というか、そういう思いがあったのでしょ…。それでもなければ、ここまで傷ついてまで戦おうだなんて普通思いませんもん…」

亡骸に刻まれた深い傷跡を見て思う。ハクトウワシさんの譲れない思い…。皆が皆らしく過ごしている世界…？正義のために戦う…？ハクトウワシさんの真意はあたしには分からなかつたけど、イエイヌちゃんの言う通り、ハクトウワシさんには自分の信条と誇りがあつて、その為に戦ってきたのではという考えはあたしにも分かる。

土を戻して埋めていく。ふと見るとトラツグミちゃんが神妙な顔をしてお墓を見つ

めている。

「どうしたの？トラツグミちゃん」

「…私はお前たちによって倒された。もしかしたら私のお墓もあつたりするのかなってふと思つたんだ…」

「…えっ？」

突然突拍子もないことを言われてしまった。トラツグミちゃんのお墓…？まだ死んでもいない自分のお墓があるのかってどういうこと…？

「…すまない、突然変なことを言つて…。少し感傷的になりすぎてしまったみたいだ」
「う、うん…。よく分からないけど分かった」

感傷的…？感傷的になるのは分かるけど、それだけでそんな言葉が出るものなんだろうか…？それにあたしたちに倒されたって…。あたしたちが倒したのは…

「よくやったぞ、お前たち」

不意に声が聞こえた。振り返ると、全身が真っ黒で、不思議な雰囲気漂わせるフレズさんがいた。あの胸元の黄色い模様と頭のぽんぽんは、確かカンザシフウチョウちゃんの持つ特徴だったはずだ。

「カンザシちゃん…？」

「どうしてカンザシがここに…」

どうやらトラツグミちゃんもカンザシフウチョウちゃんと知り合いみたいだ。意外なところに接点があったものだ。しかし、トラツグミちゃんの言う通り、どうして彼女がここにいるのか。いつもはカタカケフウチョウちゃんと一緒に行動していると思っただけ、今回は一人しかいないようだし、なんだか不審に思ってしまった。今回の事件の黒幕だったりするのか。猜疑心のようなものがあたしのなかに芽生えてくる。

「いや、少し様子を見に來ただけだ。今回の騒動はわたしとしても見過ごせなかったのだな。わたしもちょっとしたお使いのつもりでトラツグミ、お前を送り出したのだが……。まさか、神や悪魔が絡んでくるとは夢にも思わなかったのだ。しかし、よくぞ見事に邪神を討ち果たし、パークを、引いては世界を救ってくれた。この栄誉は決して言葉で言い表せるものではない。物で量るなどもつての外だ。そしてトラツグミ、お前の疑問は森林地方に行くこと解決されるだろう。お前を打ち倒した者たちの心を、その目で見てみるといい」

そういうとカンザシちゃんはふわりと舞い上がった。

「勝利の凱旋をするときだ。お前たちの帰還、待つているぞ」

そう言ってカンザシちゃんは行ってしまった。波が崖を打つ音だけが聞こえる。照らす朝日が目に沁みる。

「行くといい。お前たちにも帰るべきところがあるのだろう。帰ってここでの英雄譚で

も聞かせてやれ。私を、バフオメットを倒し、長きにわたるゴコクエリアの戦いに終止符を打ったのだ。胸を張って、いざ帰るのだ」

「…うん、分かった。じゃあ、行くね」

ポセイダンの言葉を背にあなたは歩き出した。

「行こう、みんな。キョウシュウエリアのみんなが待っているはずだから…！ゴコクエリアのみんなも頑張って！あたしたち、またきつと遊びに来るから！その時までには元氣いっぱいになってないと許さないからね！」

「案ずるな。余が必ずゴコクエリアをパークーの名所にしてみせよう」

「…私も荒らして回った分、責任を以ってゴコクエリアの創造に努めよう」

「うん…！じゃあ、またね！バイバイ！」

そうして別れの言葉を告げたあたしたちはゴコクエリアを後にした。あたしの胸には晴れやかな気持ちが残っていた。朝日に照らされるゴコクエリアを見て思う。あれほど禍々しく、島全体に暗い影を落としていたゴコクエリアはもう無いんだ。今はまだ小さいけど、新しく生まれ変わったゴコクエリアにはフレンズさんたちの新しい活力が芽生え始めている。島全体に輝きが生まれ始めているんだ。

「キョウシュウエリアに帰るのもなんだか久しぶりですね」

「そうだね…。どれくらい空けてたんだろう？」

「一ヶ月ないんじゃないか？いや、どうだろうか？」

「あはは、わかんないね…。まあ、いいや！早く帰ってみんなと遊ぼう！お絵かきも全然してないしぱーつと遊ぶぞー！」

………

「……………」

「目が覚めたようだな」

「……………」

目を覚ますと一面真っ白の世界がアタシの目に留まった。周りには枯れた木が辺り一面に生えている。少し離れた所にある枯れた木の枝に一人の真っ黒なフレンズが腰をかけている。

「……………」

まるで深い眠りから覚めたかのような。喉は潤っているけど、ちよつと喉が渴いているような感じがする。それを除けばバイタルはばっちりだ。しかし、ここは一体どこなのだろうか。アタシは確か、アムールトラに倒されて、それで…

「……………」

「……………」は死の世界だ」

「死の…世界…。じゃあ、アタシは…」

「死んだ…のだ…」

「……………」

アタシは死んだとそのフレンズは答える…。と、いうことはここは地獄…？地獄にしては少しじめじめしてて、想像するようなどと大きくかけ離れているような気もするけど…。地獄じゃなくて煉獄だったりするのかしら？

自身の体の状態をチェックする。指は自由に動く。体温もきちんと感じる。胸の鼓動も確かにある。…アタシは本当に死んでいるのかしら？ここは本当に地獄なの…？

「ねえ、もう一回聞くけど…ここって本当に地獄なの？アタシって本当に死んだのかしら？…まさか、アタシもアタシを生き返らせて誑かそうとしてるんじゃないんでしょうね？」

「地獄とは一言も言っていないぞ。それに確かにお前は死んだ。そうして、転生したのだ」

「転生…？」

「御幣を恐れずに言うなら、生き返ったのだ」

「……………」

まるで要領を得ることができない。転生した？生き返った？…地獄っていうのはアタシの早とちりだったみたいだけど、死の世界っていうのも意味が分からない。まるで

何も理解できない。それにあのフレンズは一体何なの……？

「…その前に一つ尋ねるのを忘れてたわ。アナタ、一体何のフレンズなの？」

「私か？ 私はカタカケフウチヨウだ。この死の世界に住まう孤独のフレンズだ」

「それよ。死の世界ってなんなの？ 地獄じゃなかったらここは一体何なの？」

「死の世界は私が勝手に名付けただけだぞ。名前なんてない。それと、ここに隣接する地方は森林地方と平原地方だ」

「……………」

ひどく拍子抜けした。どうやらここは地獄でもなければ煉獄でもなく、ジャパリパークのどこかにあるエリアの一つというところしかかった。だったら転生したつていうのも納得だ。あのカタカケフウチヨウも特にアタシに何かしたわけでもなさそうだ。

「そう…。教えてくれてありがとう。じゃあ、アタシは行くわ…」

「行くつて、どこに行くのだ？」

「それは…」

…どこに行けばいいんだろう。アタシに行くところは…。それにどこをどう行けばいいのかもわからない。そもそもこんな深い霧から出ることはできるのか。

「ほれ、じゃぱりマンでも食べるといい。新しく生を迎えたお前への私からのお祝いだ」

「…ありがとう」

差し出されたじゃぱりマンを口にする。：思えば、久しくこの食べ物をお口にしていなかった。こんな味だったんだなって思うと少し空しい気持ちになるようだ。

「元気がないな」

「それもそうよ。：アタシを迎え入れてくれるところなんてあるのかしら：」

「あると思うぞ。なんてったってジャパリパークだ。だれもお前を除け者にするこゝろなんてない」

適当なことを言われたような気がしてカチンときてしまった。怒りのままに言葉が溢れてくる。

「アンタに何が分かるっていうのよ：！アタシはゴクエリアのフレンズたちにひどいことをしてきたのよ：！アタシに縋る手を振り払ったり踏み躪ったりしてきた：！みんなの生活を徹底的に破壊してきた：！：！こんな思いをするなら地獄に落ちてればよかったのよ：！」

「だが、天はそれを許さなかった。何故か分かるか？」

「：宿罪を果たせていうの？」

「違う。再びお前にチャンスを与えたのだ」

「チャンス：？」

意味が分からない。もう一度アタシにこの手を汚せと言っているのか。それともフ

レンズとしての生をやり直せっていうのか。…そんな虫の良い話があるはずがない。カタカケフウチヨウは続ける。

「お前は生前、フレンズとしての道を誤った。そして、神の力にその手を染め、すべてを支配しようと暴走してしまった。そんなお前を天は哀れんだのだろうな。もう一度、フレンズとしての道を歩むチャンスをくれたのだ。もう一度、やり直してみる気はないか？」

「あ……。そんな……」

言葉が出なかった。こんなアタシにまたフレンズとしてやり直せだなんて……。胸の内溜まったものが溢れるようだ。

「これを機に、やり直してはみないか？」

「……いいの……？アタシは……みんなを……」

「…お前と戦ったトラツグミは覚えてるか？あいつはキョウシユウエリアで、地上に生きるもの全てに復讐しようと暴れ回った過去を持つ。そいつもこの死の世界で再び生を受けて、宿罪を果たす旅に出た。トラツグミの過去はお前よりひどいものだったぞ。手にした力は外なる神から授かった復讐の力、力の行使の目的もお前と正反対と来たものだ」

カタカケフウチヨウは続ける。

「…それに、さっきも言ったように、ここではレンズを除け者にしようとする者はいない。悪いことをしたって思うなら謝るといい。ただ、二度と同じ轍を踏まないように気を付ければいいのだ。それで皆、お前を迎え入れてくれるはずだ」

そのレンズはアタシのところへ降りてくると、手を差し伸ばしてきた。

「行こう。私がお前を導いてやろう。怯える必要はないのだ。私と共に、新たな世界へと足を踏み入れようではないか」

手を引かれてアタシとカタカケフウチョウは歩き出した。奥へと進む度に霧が薄くなっていく。奥へ奥へと手を引かれ進んでいく。不安は未だ拭えずに胸の中でぐるぐると渦巻いている。

霧が晴れていく。やがて遠くに青い草原と、ぽつぽつと立つ樹木が見えてきた。

「…っ」

太陽がアタシを照らす。青い空はどこまでも広がっている。この空の雄大さを知ると、アタシの中に眠る野生の血が騒ぐようだ。

「……………」

「どうしたのだ?」

「空って…こんなにも広がったのね…」

「そりゃあな?」

「…ふふ。ずっと下ばかりを見てセルリアンを蹴散らしたり、地下にこもって悪魔と策を練ってばかりいたんだもの…。気付かなくて当然よね…」

相変わらず後ろ向きな感情がアタシを支配している。生前の愚行と敗北を味わったせいで自信を失っているんだ。情けないことこの上ない。

…だけど、立ち止まってはいけない。今、カタカケフウチヨウはアタシの為にこうして手を引つ張つてくれている。その思いを無駄にするわけにはいかない。アタシは今、小さくてもその一步を踏み出す時なんだ。

「ッ…」

「そうだ、共に頑張ろう。お前は一人ではないんだ。私も、カンザシも、パークのみんながお前が自立するのを手伝ってくれるだろう。そして、ゆつくりと過去の行いを清算するんだ。それがお前のできる唯一のケジメと知るのだな」

「…わかったわ。ありがとう、カタカケフウチヨウ」

「礼には及ばん。かく言う私もこういうことしかできんのでな」

新たな大地をカタカケフウチヨウに連れられて駆けていく。アタシの新たな物語はここから始まるのかもしれない…。どんなにありふれたものでも、どんなに面白みがなくても、それはアタシというフレンズが生きた立派な証になるんだ。アタシはアタシだ。変に物事を考えずに今まで“ハクトウワシ”として過ごしてきたように、正義を愛

するフレンズとして生きていくんだ。

決意を胸に遠く空を睨む。青い空を見ていると胸の内の不安が晴れていくようだ。それに、新たに湧くこの感情は何だろうか。なんだかとても清々しい気持ちになつてくる。

「…よし」

「どうしたのだ？」

「カタカケ、アタシの早さについてこれるかしら!？」

「お?お?どうしたのだ？」

「アタシは正義に生きるフレンズ、キャプテン・ハクトウワシ!新しく生まれ変わったアタシがパークの平和を守ってみせるわ!さあ、ついてらっしゃい!一緒にパークの悪を正していくわよ!レッツ・ジャスティス!」

R u i n

R u i n — 1 「滅亡」

「きーらーきーらーひーかーるー…よーぞーらーのーほーしーよー…」

「何を歌ってるの?」

「サーバルさん…」

遠くに星が瞬いている。サイレンは絶えず鳴り響いている。サイレンの音に交じって戦闘機が空を切る。その音は鋭く鼓膜を刺すかのようだ。

水平線の向こうで大きな爆発が起きる。あの輝きは隕石でも落ちたのだろうか?…いや、アレはきつとどこかの国が核を撃ち込んだに違いない。国際連合が解散した今、国家間を縛るものは何も無い。既に核を撃ち込まれて滅びた国はいくつもあるのだから、今更核が撃ち込まれたところで驚きもしない。

海面から曳光弾が上っていく。海上から上る炎が夜空を赤く照らす。まるで世界の終わりを象徴するかのようだ。

「それよりミライさん!早く逃げよう!?! スタッフもお客さんも退避が完了したって!」

「そうよ!ボサツとしてたら本当に死んじゃうわよ!?!」

「サーバルさん…カラカルさん…」

逃げるって言ったつてどこへ逃げるというのか…。絶海の孤島であるジャパリパークは既に洋上封鎖されている。指揮系統の壊滅した軍を相手に突破するのは自ら火中に飛び込み死に行くようなものだ。

遠くでまた一つ大きな輝きが見えた。とても立派で大きなきのご雲だ。いつも見るきのご雲よりとても近いように見える。

「な、なんだろう…。また隕石でも落ちたのかな…？」

「いいえ…。あれは…」

白い壁が猛烈な勢いで迫ってくる。すべてを死に追いやる熱の壁が海水を蒸発させて私たちの元へと迫ってきているのだ。

「な、何あれ…！ミライさん！早く逃げないと…！本当に…！」

「ミライさん!!!」

もはや私に動くことなんてできなかつた。己の無力さに打ちひしがれてへたり込んでしまう。人間たちの勝手な都合のせいで、ヒトのみならずけものさんたちをも犠牲にしてしまうことが何よりも許せなかつた。ヒトが造った究極の破壊兵器でけものさんが焼き払われてしまう。それどころか、生き物の住めない土地にすら変えてしまう。それを阻むことができない私の無力さが何よりも悔しかった。

「ミライさん!!!」

「……………」

二人の呼び声に振り向く。私に向けられた二人の顔は、絶望なんかではなくて私を心配する純粋なもの顔だった。この二人は最初から諦めてなんてない。諦めてぐずっていたのは私だけだったんだ…。私は…最後まで生きようとした二人に何もしてあげられなかったのか…

「うっ…！ううう…っ！」

「ミ、ミライさん!？」

「ちよつと！どうしたのよ！」

ゆつくりと立ち上がって二人を見据える。こうなつてはもうどうすることもできない。諦めてはいけけないとは分かっていたけど、あの炎を前にしてはもうどうしようもない。私は決して口にしてはいけけないことを二人に告げた。

「皆さん…お元気で…」

白い壁が私たちを呑み込んだ。サーバルさん…カラカルさん…。どうか苦しまずに逝けますように…。そして、二度と苦しむことのないよう、ヒトとの世界から隔絶された理想郷に行けますように…。一切の苦しみから解放されて…さようなら…。

.....

「この子が噂のゴコクエリアで戦ってたわたくしの騎士、クロサイですわ！」

「どうも…私が…クロサイ…です」

「ほら！しゃきつとなさい！あの時の勢いはどこへ行ったのですの!？」

「そ、そんなことを言われましても…」

クロサイさんがシロサイさんに押されている。シロサイさんもクロサイさんと再会できたことが嬉しいのか、すぐくべたべたとしている。

「ほえく…。シロサイ殿と同じく守りに堅そうなフレンズでござるねく…」

「でしょう？攻める時には攻めますけど、こと守りに関してはわたくしより堅牢でありますのよ！クロサイ、ゴコクエリアで鍛えた貴方の腕、ここでお見せなさい！」

「なっ!?!ま、まさか姫と手合わせを…!？」

「まさか！ヘラジカ様、よろしくて？」

「む…。いいだろう。クロサイとやら、ゴコクエリアで培ってきたその手腕、存分に振るうといい。遠慮はいらんどーさあ、かかってこい！」

「…分かった。ならば私も遠慮なくいかせてもらう。覚悟！」

二人のスピアが交じり合う。リーチで言えばヘラジカさんの方がずっと上だ。体躯

的にもクロサイさんが不利をとっている。

ヘラジカさんの矛が頭上から間断なく振り下ろされる。クロサイさんは間合いを測っているのかずつと守備に徹したままだ。軽やかに身をかわしてヘラジカさんの攻撃を避けている。

ギン！

「ぬおー！」

スピアでヘラジカさんの矛を受け止めた。そのまま地面へと受け流すと、矛を踏みつけて反撃へと躍り出た。

ダン！

「ブァー！」

スピアが心臓部へと放たれる。ヘラジカさんは身を振ってかわすけど、攻撃の機を失ったせいはいまいち余裕がない様子だ。

「やるではないか……！だが、その程度ではわたしは倒せんぞ……！」

「どうか……！私に攻撃を許した時点で既に試合は決まっている！」

クロサイさんが大振りにスピアを振り回す。ヘラジカさんも矛から手を放すとクロサイさんの攻撃を回避した。アレに当たってはいただけでは済まなかつただろう。だけど、ヘラジカさんが次にクロサイさんを視界に捉えた時には既に反撃の機会を失って

いた。

「ハアツ！」

間断なく乱舞ともいえる激しい攻撃がヘラジカさんを襲う。一刻の隙を見せない攻撃にヘラジカさんが手を出せずにいる。おまけに自身の得物を失っては反撃も厳しいというものだ。

「だあつ！」

「ぬあ!？」

スピアを軸に体を宙に舞わせるとヘラジカさんの体に飛び込んでいった。鉄の拳がヘラジカさんを襲う。

ズン！ズン！

地面を殴る鈍い音がする。自由を奪われたヘラジカさんが辛うじてクロサイさんの攻撃をかわしているのだ。

「ツ…!!」

「私の勝ちだな」

冷めきった声でクロサイさんが勝利を宣言する。

どこかに隠し持っていたであろうナイフがヘラジカさんの首を捉えている。勝負は決したようなものだった。ヘラジカさんが降伏の構えをとる。試合はクロサイさんの

勝利に終わったのだ。

.....

「いやはや、まさかここまでやるとは思わなかったよ。さすがはゴコクエリア一の名将だな」

「わたくしの見込み通りですわ！さすがはわたくしの騎士ですわね！」

「な、なんだかくすぐつたいです、姫……。それとヘラジカ殿、お前の矛には何か迷いがあるように見えた。何か隠しているのではないか？」

「.....」

沈黙が流れる。ヘラジカさんの顔には何やら陰りが見える。シロサイさんの顔もヘラジカさんと同じく曇っている。あたしがキヨウシユウエリアを離れている間に何かあったのだろうか。

「実は……」

.....

「ライオン殿が…」

「ああ、数日前に突如姿をくらましてな…。以前から様子がおかしいとは思っていたんだ…。声をかけてもボーっとしているし、突然びくつとしたかと思えば次の瞬間にはいつもの様子に戻っていたりとな…」

「勝負事をするときにも進んで前に出るようになっていましたわね。争いごとは好きではなかったと思うのですが、好戦的になったような印象でしたわ」

「やはりお前もそう思うか」

「どうやらライオンさんに関する悩みがあつたみたいだ。そのせいではないまいち本気になれなかったのかな？けど、ライオンさんに異変かあ…。一体何があつたんだろう？」「ヘラジカさんは何か心当たりないの？」

「そうだな…。ライオン…いつからか、あいつは、ある時から急にボーっとするようになってな。声をかけても上の空のようだし、わたしとしても心配ではあつたんだ。そしてある時、ライオンは突如我々の元から姿をくらませた。オーロックスらも心労のあまりに寝込んでしまつて大変さ」

「ええ!?!じゃあ、早く何とかしないと!」

「だな。シロサイ、クロサイ、カメレオン。わたしは図書館へ行く。しばらく留守にする故、頼むぞ」

「ええ。お任せください」

「うむ。任された」

.....

「ライオンが、ですか…」

「ああ、そうだ。コノハちゃん博士、ミミちゃん助手、なんか知っていることとか心当たりはないか？」

図書館の訪れたあたしたちは、早速コノハちゃんたちにライオンさんの在り処を訪ねた。正直、急に失踪した行方不明者のことなんて知るはずもないと思ったけど、聞かないよりはマシかなと思った。

「正直それどころじゃないですよ」

「鶴騒動の事後処理やゴコクエリアの救援の手配でいっぱいいっぱいなのです」

なんとも心無い返事である。忙しいのはわかるけど、一応は失踪しているフレンズさんなんだし、もうちよつと気の利いたような発言はできなかつたのか。

「そういえば博士、ヤマタノオロチが奇妙なことを言っていましたね」

「それがどうかしたのですか。ライオンと何か関係があるとでもいうのですか」

「ミミちゃん助手。何か知っているのか？」

「いえ。ふと、この間ヤマタノオロチの奴がゴクエリアが生きっていると妄言のような事を言っていたのを思い出しただけなのです。：もしかしたら、ホツカイエリアに呼ばれたのではないのかと思っただけなのです」

「あんな妄言信じるのがおかしいのです。生きている島だなんて神話の中だけなのですよ」

「う、うーむ……。すまない、ミミちゃん助手。貴重な情報感謝する」

「別にお礼を言われるほどでもないのです。ただの妄言に妄想を重ねただけなのです」

島が生きているか……。神話の中で生きている島なんてあったっけ？ 創作の中だと、島だと思っていたものは、実は巨大な亀の背中だった！ みたいなモノはちらほら見かけるけど……。：なんだかちよつと気になるなあ。

「博士ー！ 助手ー！」

「おや、今日は来客が多いですね」

「キタキツネですか。一体どうしたのですか」

遠くからキタキツネさんが走ってくる。腕には何やら箱：無線機らしきものを抱えている。よく分からないメーターやいっぱいあるつまみを見ると混乱してくるようだ。しかし、一体どうしたのだろう。コノハちゃんたちに修理を依頼するとかかな？

「どうしたのですか、キタキツネ」

「ちよつとこれ、聞いてほしいんだけど…」

「どれどれ…」

音量のつまみを回してラジオのポリウムを上げる。そこには女の人の声で助けを求める声が記録されていた。

『エス・オー・エス。こちら、ジャパリパーク調査隊長、ミライです。現在、ホツカイエリア臨時キャンプ場にて、民間人、パーク職員、その他保護動物含む多数の負傷者を抱えており、取り急ぎ救援を要しています。このメッセージを聞いた方は何でも構いません。ホツカイエリアはなるべく多くの支援を要しています。繰り返します。こちら、ジャパリパーク調査隊長の…』

「これは…」

「ミ、ミライさん…!?!」

かばんさんの様子が一変した。顔を強張らせて無線機に食らいつついている。

しかし、ミライさん…。さっきの録音メッセージから察するにパークの職員の名前なのだろうか。

「キタキツネさん！これ、一体どこで見つけたの?!しかもこのラジオチャンネルは…!」
「お、落ちていて！この箱は雪山でたまたま拾ったものなの！この音もたまたまここを

回してた時に鳴り始めて…」

「ご、ごめん…。けど、このミライさんの声…。どうやらホツカイエリアで何かに巻き込まれてるみたいだ…。セルリアンの大群にでも襲われたのかな…」

「かばんちゃん、ずっとヒトのこと…。特にミライさんの手がかりを探してたんだもんね…。ミライさんも無事だったらいいけど…」

「…だね…」

かばんさんの顔に陰りが見える。その雰囲気は、どこか諦めに似たようなものを見て取ることが出来る。

「コノハちゃん、ミミちゃん…」

「わかっているのです、かばん。行きたかったら行くといいいのです」

「…ホツカイエリアは一般的に寒帯と亜寒帯を一つにまとめたような所なのです。場所によつては多少温暖なところもありますが、それでも一年中雪が降り積もっている所や、積雪はなくとも砂泥と枯草ばかりのところもあるのです。元々その地域に住むけもの意外にはとても厳しい所なのです。もし行くなら、それなりの用意をしてから行くのですよ」

「…分かった。ありがとう、ミミちゃん、コノハちゃん」

「…必ず帰ってくるのですよ、かばん」

「…うん。行つてくるね…。行こう、サーバルちゃん」

図書館を背にして歩き出す二人。…もちろんあたしたちもついて行くつもりだ。ヤマタノオロチさんが恐怖するホツカイエリアっていうのも気になるし、かばんさんが長年追い求めてきたミライさんというヒトも気になる。ついて行かないわけがなかった。

「かばん！あたしも行くわ！」

「…わたしも付いて行つてもいいか。もしかしたらライオンもホツカイエリアにいるのかもしれない。なんとしてでもライオンを連れ戻したいんだ」

「分かった。みんな一緒に行こう。…ともえちゃんたちも行くつもりなんだろう？」

「うん…。今回もちよつとお邪魔するね」

あたしたちの三度目の旅が始まる。今度の舞台はホツカイエリア…。生きている島という奇妙な情報もある。失踪したライオンさんやミライさんというパークの従業員の名もある。今度の冒険はゴコクエリアとは違うベクトルの危険さがあると思う。まだ誰も行ったことのない未知の大地だ。気を引き締めていかなくちや…。

R u i n — 2 「ホツカイエリア」

「ここがホツカイエリア…」

バスを島へ漂着させて黒い砂泥の大地に立つ。空気は冷たく澄んでいて気持ちが良い。青々と広がる空はまさしく雄大な北国の自然を思わせるようだ。

「これじゃあ、バスでの移動は無理だね…。こんなにくかるんでいたらすぐにスタックしてしまう…」

「確かにこれだとタイヤが沈んで思うように動かないかもしれないわね…。歩いていった方が良いかもしれないわ」

かばんさんとキタキツネちゃんの提言もあり、あたしたちはホツカイエリアを歩いていくことにした。冷たい風が肌を撫でる。ある程度の防寒対策をしてきたとはいえ、やっぱり冷たい風というものは中々に沁みる。日が差しているのがこんなにもありがたく思えるとは思わなかった。

「ううう…。かばんちゃん、寒いよお…」

「ほら、僕の外套を貸してあげるからこれでしのぐといいよ。歩いていたらじきにあったかくなるだろうから、それまで我慢だよ」

「うん…。ありがとう、かばんちゃん…」

ヘラジカさんやギンギツネちゃんは平気なようだ。思ってみれば、二人とも元の動物では比較的寒い所に住んでいるんだから平気なのも当然なのかもしれない。

「？　なんだこれは？」

ヘラジカさんが何か奇妙なものを拾った。フロッピーディスクとも、カセットテープとも呼べるような記録媒体だ。

「ホロテープだね。パークノシヨクインガ　カンイテキニ　ジヨウホウヲ　キロクスル
タメノ　モノダヨ」

「うんうん…。…ラツキーさん、近くのラツキーさんと呼んでもらえるかな。ちよつとデータの中を見てみたいんだ」

「ワカツタヨ」

かばんさんの右腕についているレンズが忙しく点滅している。どういう仕組みかは分からないけど、あれで近くのラツキーさん呼び出しているのだろう。

しばらくすると、ぴよこぴよここと跳ねながら一台…一匹？のラツキーさんがこちらに向かつて跳んできた。

「チヨットマツテテネ」

こつちちにやってきたラツキーさんの目が白く光る。カチャつという音が鳴ったと思

うと、背後に何やらテープの挿入口のようなものが開いた。

「カセットコンポみたいですね…」

「だね…」

そういう話をするあたしたちを後目に、かばんさんがラッキーさんの背中にホロテープを差し込む。すると、ラッキーさんから過去に収録されたと思われる記録音声が生かされた。

「○月×日、△曜日。世界を襲った大災害の後、世界は完全に混乱に陥ってしまいました。ここ、ジャパリパークは、本島を連絡する連絡船も航空便も全てストップして、完全孤立の状態です。パークにはお客様もまだたくさんいらっしゃいます。どうにかして返さないといけないのでしょうか…。今はパークのお客様の安全を優先しなくてはいけませんね。いつセルリアンが湧くかもわかりません。まずは、フレンズさんやパークの治安維持隊の協力を以って、混乱の回復と治安維持に努めましょう。記録終わり」

緊張した声色のミライさんと思われるヒトの報告が記録されていた。大災害…あたしの記憶に微かに残っている思まわしい出来事がちらつく。あたしはかつてこの大災害に巻き込まれて…

「わたしたちは宇宙船で脱出したからわかりませんけど…。地上では混乱の中、懸命に

頑張っていた人たちがいたんですね…。わたしもてつきりあの大災害でみんないなくなってしまうたと思っていたのですけど…」

「イエイヌ…？何言ってるんだ…？」

「あ…。いえ、なんでもありません、ロードランナーさん」

「…ヘンな奴だな」

ゴマちゃんが訝しげな目でイエイヌちゃんを見ている。かばんさんは何か考え込んでいるようだ。

「…まだホロテープがホツカイエリアのどこかに残っているかもしれない。注意深く見ていこう。イエイヌちゃんもサーバルちゃんもこの二オイを覚えて頑張ってみつけてもらえるかな」

「わかったー」

「了解です」

こと獲物探しが得意そうな二人が元気に答える。けど、パークの中でも特に広大であろうホツカイエリアのことだ。ホロテープ探しは中々に骨が折れそうだ。

その時だった。ふと遠くから、こつちに向かつて慌ただしく走ってくるフレンズさんであろう影が見えた。濃い赤みがかった姿に、フードを被っている姿から蛇のフレンズさんのように思える。こんな寒い地方にも変温動物の爬虫類っているのかな？

「よかった…！おー…いい！助けてくれー…！」

「え!?ちよ、ちよつと!!」

そのフレンズさんはあたしたちの返答を待たずに飛び込んできた。なんだか酷く慌てている。セルリアンにでも襲われたのだろうか？

「げっ！アイツまだ追いかけて来てやがった！なんて執念だ…！お前ら！頼む！」

「え?え?どういうこと?」

「ツ…!!ライオン…!!」

ヘラジカさんが信じられないものを見たかのような反応をしている。…ライオンって言った…?まさか…

「あれえ?ヘラジカじゃん。どうしたの?こんなところで」

「どうしたも何もない!お前こそこんなところで何をしている!?!しかもフレンズを襲うだなんて…!いったいどうしたというんだ!ライオン!!」

「どうしたも何も狩りごっこしてるだけだよ。それに、もしかしてあんた、ヘラジカたちを頼る気かい?ふふくん、腕が鳴るね〜」

肩を慣らして体をほぐしている。バキバキと指を鳴らす音があたしたちを威圧する。

…なんだか様子がおかしい。あたしたちが過去に会ったときには、こんな好戦的な態度をするフレンズさんじゃなかったはずだ。あくまで戦うのはフレンズさんたちの為で

あつて、自ら戦いに挑むようなフレンズさんじゃなかったはずだ。…それに右腕に羽織っている金色のマントはいったい…？

「やつぱり変だぞ、ライオン…。一体どうしたっていうんだ？」

「う〜ん？ 質問の意味が分からないねえ。私は私だよ。ヘラジカたちこそどうしたつてのさ。こんなところまで私を追いかけてきてさ〜」

「…わたしはお前を連れ戻しに来ただけだ」

「私を〜？ またまた〜」

体を揺らしながら軽薄に答える。次の瞬間、全身に鳥肌を感じるほどの寒気を感じた。明確な殺意を感じる。あたしたちとやり合う気だ…！

「やれるもんならやってみな？」

僅かな砂煙を残してライオンさんの姿が消えた。あたしたちに襲い掛かってきたことは明白だった。

「ツ…!!」

ヘラジカさんが迎撃の構えを取る。刹那、戦闘に狂うライオンさんが姿を現した。ヘラジカさんの矛を驚掴みにして押し上げている。

…なんと恐ろしい顔なのだろうか。ライオンさんの顔は血を求めるあまりに大きく歪んでいる。仲間のみんなを思うあのライオンさんのものとは思えない。もはや完全

に別人の顔になっていると言えるほどに歪み切っている。

「オレを連れ帰るんだろう!?! さあ、やってみせろよお! オレを殺してへばったキョウ シュウエリアとやらに連れ帰ってみせなあ!!」

「貴様……!」

尋常じゃなく興奮している。あの物言いといい言動は明らかにライオンさんのものじゃない。…それともあの性格が本来のライオンさんのものだったりするのだろうか?

「ッ……!」

「アムちゃん!」

アムちゃんがヘラジカさんとやりあうライオンさんの背中に向かって飛びかかっていく。

「ダアッ!」

つるん!

「なっ……!?!」

「効かなあ?」

ド「ゴッ!」

「ぐはっ!?!」

ライオンさんがヘラジカさんを蹴つて引きはがす。ライオンさんの手にはヘラジカさんの矛が握られている。

「ハッ！お前が噂のビーストか！いいだろう！貴様となら楽しめそうだ！オレの体に傷の一つでも入れてみなア!!」

「くっ……!」

ライオンさんの手によってヘラジカさんの矛が振るわれる。型なんて無いむちやくちやなものだけど、粗削りながらも力強いその一撃は確実にアムちゃんを仕留めようと振るわれている。

「キイツ……!」

「ほう?」

ヘラジカさんの矛を防いだアムちゃんが反撃に出る。引き寄せられたライオンさんの体がアムちゃんの射程内に入る。こうなれば後はアムちゃんのターンなんだけど……

「ツ……!?どうして……!」

「さあ……どうしてだろうなア!!」

アムちゃんの胸に左拳が思い切り叩きこまれた。

「のわ!?!」

ゴマちゃんの小さな体に吹き飛ばされたアムちゃんの軀が飛び込む。成す術もなく

二人とも大きく後ろに飛ばされてしまった。

「ぐああああ……！」

苦痛にアムちゃんが呻いている。前方には余裕の表情をしたライオンさんが仁王立ちしている。その不敵な笑みは確実にあたしたちを仕留めに行くものだ。

「さて……」

ライオンさんは矛を構えるとヘラジカさんに投げ飛ばした。

「ツ……！」

「お前たちとはまだ楽しめそうだ。今のうちにオレを倒す術を探るといい。その時まで待っているぞ、ヘラジカ共」

そう言うライオンさんはどこかへ行ってしまった。後に残されたのはあたしたちとかばんさんたち、そしてこの赤い蛇のフレンズさんだ。

「た、助かった……」

「大丈夫……？ どうしてライオンさんに追われてたの？」

「んなこと俺が知りてーよ！ アイツ急に俺を襲ってきやがったんだ！ 火すら恐れねえとか名実ともにバケモンだぜアイツ！」

「……？ そういえば名前聞いてなかったよね。まさかホツカイエリアでも蛇の子を見かけるなんて思わなかったけど……キミは何のフレンズさんなの？」

「あ？俺は蛇なんかじゃ…。あ…。蛇…なのか？」

「??？」

「なんだか妙な反応を見せている。どうしたのだろうか？記憶が混乱しているのだろうか？」

「フードを被ってたら蛇の子だってサーバルちゃんに教わったつけ。懐かしいね」

「だね！もしかしてキミって最近生まれた子だったりするのかな？」

「いやあ、五年位前だな。最近という程でもないぞ」

「だったら自分のことがわかっててもおかしくないはずだけど…。なんていうの？」

「ふっふっふっ…。聞いて驚け」

「??？」

「俺様は…サタン…だ！」

「なっ…?!？」

「サタン?!？」

「頭の中が真っ白になった。いや、本当にサタンなのか？フレンズさんは純粋で健気な

子が多いし、わざわざサタンを名乗るはずがないとは思うけど…。そもそもサタンとい

う名前を知る機会なんてそうそうないと思うし…。それにあの赤い体…毛皮って言え

ばいいのかな。…ああ、もう！頭の中がめちゃくちゃだよ!!!

「ほ、本当にサタン…なの…?」

「おうさ、フードがあれば蛇なんだろ?俺が最初の人類にエデンの果実を与えたのは知っているな?それに俺は何故かヤギの姿をしていることが多い。それもほら…こうだ」

フードを脱いだ頭からビヨンと角を模したような髪が現れた。あのフードの下に隠れてたとは思えないほどの大きな角だ。

「ふっふっふ。俺はヤギと蛇とヒトのハイブリッドなのだ!何故だかここ、ジャパリパークに新しく生を受けた俺は、新たにこの世界にパンデモニウムを造るよう天命を受けたのだ!!!」

「サタンなのに天なんだね…」

「うるさいー!」

かばんさんが絶妙な突っ込みを入れる。

しかし、サタンと言ったらゴクエリアのバフォメットみたいな不気味なしやべり方をすると思っていたけど、どうやらこのサタンを名乗るフレンズさんはいくらか陽気な性格をしているようだ。あたしたちもとんでもないフレンズさんを助けてしまったものだ。さて、どうしたものかな…

「そういえば、なぜお前たちはここに来たのだ?」

「ライオンさんを連れ戻すためだよ。それと、ミライさんを探しにやってきたんだ」

「ライオンってあのライオンか？止めておけ止めておけ。アレはお前たちの知るライオンなんかではない。お前たちも見ただろう？アレは見てくれはライオンだが、中身はまんま別物だ」

「…？ どういうことだ？」

「俺も詳細までは分からんが、どうやらアイツの中には別の何かが憑依しているようだな。それに、アイツが羽織っていたマント…。アレは金羊毛と呼ばれるものだ。アイツの無敵の体を補助する物のようだな。アレもライオンの毛皮と同じく厄介な代物みたいだな」

「中身が別物…。道理で…」

ヘラジカさんが悔しそうに唇を噛む。悔しさから手が小刻みに震えている。やがて抑えられなくなったのか堰を切ったようにサタンに質問を投げかけた。

「どうにかならないのかサタン!? どうすればライオンを救える!? 知ってるんだろう!? 教えてくれ!!」

「教えてもいいが…お前は俺に何を捧げる？」

「なに…!?」

ヘラジカさんの声に怒りの感情が混じる。対するサタンは不敵な笑みを浮かべてヘラジカさんを煽っている。怒りに震えるヘラジカさんは我を失ったようにまくし立て

た。

「俺の持つ知識や力はタダではない。俺は悪魔だ。俺の知識を授かりたくば、貴様の持つ輝きの一つでも俺に捧げるのだな」

「何を…!?こんな緊急の時に何を抜かすか!!」

「良く吠えるわ。だが、俺も完璧に知っているわけではない。それに、今回は事情が事情なだけに特別に教えてやる。…まずは徹底的に痛めつけてやれ。あのライオンの中にいる魂も、ボロボロになった体を後生大事にするような馬鹿じゃない。出て行きたいと思えば勝手に出て行くだろう。もっとも確定したことではないがな」

「けど、どうやって痛めつけるの?アムちゃんの爪もまったく効いていなかったみたいだし…。それに、攻撃が効かない上にあんなに暴れるんじや近付くに近づけないんじや…」

「…奴の毛皮…。アレは戦車の砲弾どころか、核の衝撃にも耐えうる強靱さを持っている。攻撃が効く箇所と言えば、毛皮の覆っていない露出したヒトの部位か…。それが、毒や水で内側から攻めるかになるであろう。…かつて奴と戦ったヘラクレスという人間は、三日三晩もの間、首を絞め続けて殺害したのだそうだ」

「ヘラクレスに殺された獣…?聞いたことがあるような…。…まさか、アレはネメアの谷に住まうと言われる獅子…」

「ご名答だ、かばん。追い出すのであれば、早くした方が良いぞ。ライオンの体は既にネメアの獅子によって侵食されている。奴の毛皮に傷が入らなかつたのもその為だ。早くせねば、奴は身も心も完全にネメアの獅子となってしまうぞ」

「…!!そんなこと…させるものか…!」

ヘラジカさんが目を見開いて奮い立つ。ネメアの獅子にライオンさんが身も心も乗っ取られるのが、どうにも許せないようだ。かくいうあたしも、のんびり屋だけどカリスマのあるライオンさんが、ネメアの獅子に良いようにされるのは嫌だと思つていた。

「…行こう、ヘラジカさん…。ネメアの獅子からライオンさんを取り戻すよ…!」

「ああ…。ネメアの獅子だかなんだか知らないが、わたしの大切なライバルを奪われるのは決して許してはおけない…!皆!付いて来てくれるか!」

「もちろんです、ヘラジカさん…!」

「私も異論はないぜ」

「…私も!かばんちゃんはどうかな…?」

「…僕もヘラジカさんに付いていく。アレは放つておいては危険だ。アレは自分の快樂の為に無差別に殺傷して回る通り魔でしかない」

「……………」

アムちゃんがかばんさんの言葉に黙りこくっている。かばんさんの言葉にかつての自分を重ねたのだろう。ネメアの獅子は快樂を食うためにフレンズに手をかけているのかもしれないけど、アムちゃんは違ったはずだ。少し顔を顰めて俯いている。

「大丈夫だよ、アムちゃん。アムちゃんの過去はあたしもちゃんと分かっているし、アムちゃんがすごく反省しているのも分かっているから。アムちゃんが苦しむ必要なんてないんだよ」

「…ありがとう。…あたしも二度とあんな惨劇を繰り返したくない。そのためにも、ネメアの獅子というフレンズを止めてみせる」

「…だね。一緒に頑張ろう、アムちゃん！」

「…うん。頼りにしてる」

こうしてあたしたちの新たな旅が始まった。ライオンさんの体に乗ったネメアの獅子と呼ばれる謎のフレンズ。生きている島という謎の噂。そしてミライさんというくん。かばんさんが追い求めるかつてのヒト…。それらの謎をあたしたちは解き明かしていくんだ。それに、あたしたちの旅に同行するサタンと名乗るフレンズも気になる。ゆくゆくは明らかになるといいけど…。旅は始まったばかりだ。寒さに負けなためにも気を引き締めていかなきゃ…。

R u i n — 3 「奥へ」

『続いているニュースです…』

メキシコに隕石が衝突して1ヶ月が経った。メキシコの湾岸油田は今なお炎上し続け、経済や治安は混乱を極め、メキシコ政府が非常事態宣言を出すに至ったほどだ。合衆国の方は、南部国境から押し寄せる難民に対して、州軍や国境警備隊、湾岸警備隊と共同して、押し寄せる難民に対して武力で対処しているらしい。

「ミライさん…?」

サーバルさんが不安そうに私の顔を覗き込んでくる。外の世界を知らないサーバルさんにとっては、今起きていることなんて知る由もない。けど、今テレビから流れてくる情報から普通ではないことが起きていることは、なんとなく理解できているようだ。つた。

「ミライさん、何が起きてるの…?私怖いよ…」

連日のようにテレビ画面に映されている燃え盛る炎と黒煙にサーバルさんが怯え切っている。淡々と原稿を読み上げるニュースキャスターもなんとも不気味だ。

「…サーバルさんは知らなくても大丈夫です…。時期にこの混乱も治まることでしょう

し…。今はパークのお客様の安全を優先する方が先決ですね。サーバルさん、手伝っていただけますか？」

「うん！ 私たちには私たちにできることをやろう！ せつかくパークが開園してお客さんたちも来てくれたんだもん！ 嫌な思いだけはさせたくないよね！」

「ですね…。私たちがくよくよしているわけにはいきません！ さあ、行きましょう！
サーバルさん！」

……………

「ふわあ…おつきい…」

「これって…」

見上げるほどの大きな鉄の塊が目の前にあつた。戦車だ。こんなの見間違えるはずがない。なぜ動物園に戦車があるかは分からないけど、ここ、ホツカイエリアに戦車という場違いなものが確かにあつた。

「動くのかな？」

「どうだろう…。ラッキーさん、動きそう？」

「コレハ パークノモノジャ ナイネ。ウゴカセナイヨ」

「そっかあ…。なんでこんなものが…」

そう呟くかばんさんが訝しげな顔をして考え込んでいる。ゴマちゃんやギンギツネちゃんは興味津々に戦車を観察している。

その時だった。

「ツ…!!」

「かばんさん…?」

突如かばんさんが頭を押さえて何かに苦しむ仕草を見せた。息は荒く何か苦痛に苛まれていたようだ。

「かばんちゃん!どうしたの!」

「な、なんでもない…。ちよつと…眩暈が…」

気を取り直してその場を後にする。かばんさんは少しよろめきながらも、ずんずんと前へ進んでいく。

「いろんな物が落ちてるね。何に使うんだろう?」

「……………」

無邪気にサーバルちゃんが尋ねる。…身震いがしてくる。そこかしこにマスクや銃が落ちている…。戦闘でもあったのだろうか、錆びた葉莖も辺り一面に散らばっている。…嫌な考えが頭の中を駆け抜けていく。

「ともえちゃん…」

「……………」

恐怖に震えるあたしの手をイエイヌちゃんがぎゅつと握りしめてきた。イエイヌちゃんは優しくあたしを抱擁すると、少しずつだけ段々と落ち着いてきた。

「大丈夫です…。大丈夫ですからね…」

「…うん…。ありがとう…。ちよつと落ち着いてきたよ…」

かばんさんも顔を顰めて出来るだけ目に入らないようにしている。かばんさんもこれらが何に使われたのか分かるのだろう。これは人殺しの道具だ。生き物を殺傷するという明確な目標のために作られた道具なのだ。あまり見ていると気持ちの悪い物ではない。

「いったい何に怯えてるってんだよ。つか、何なんだよこれ？これの何が怖いんだ？」

「…何も知らないからそんなことが言えるんだよ。これは人を殺すための道具…。戦争で人が人を殺すために作った兵器なんだよ…」

「な、なんだよそれ…」

「…僕もあんまり見えていて良い気はしない。早く次へ行こう」

かばんさんに急かされて次の場所へと進んでいく。よく見ると至る所に銃やら薬莢やらが落ちていた。やっぱりここも戦場になったのだろうか。ホツカイエリアに生息

していたけものたちは無事だったのだろうか。犠牲になつてなければいいんだけど……

しばらく進んでいると人工的に整地された広場のような所へと出た。小さな建物やかまぼこみたいな半円形の建物がぼつぼつと並んでいる。どうやら飛行場のようだ。

「ここは……？ 飛行場……？」

「みたいだね……。ちよつと探索してみよう」

そうしてあたしたちは、かばんさんたちと一緒に小さなコンクリ製の小屋の中に入つていった。

中は埃を被つた無線機やくしゃくしゃになつた書類のようなものが散らばっている。誰かが争つた後なのか、机はひっくり返つたり壁に叩きつけられていたりと散々たる有様だ。

「部屋の中がぐちゃぐちゃだ……。何があつたんだろう……」

「分からない……。とりあえず部屋の中を見てみよう。みんなも何か怪しいものがあつたら教えてほしい」

各々が部屋の中を探索して回る。積もつた埃が喉に絡んで思わずむせてしまう。イエイ又ちゃんも鼻をぐじゅぐじゅと鳴らしていて苦しそうだ。

「ここにもホロテープがあつたりしねえかな」

ゴマちゃんがホロテープを探している。確かにここだつたらありそうな気がしない

でもない。

「むっ…。かばん、これなんだが、ホロテープじゃないか？」

「ん…。だね。ありがとう、ヘラジカさん。早速再生したいけど…ラッキーさん、いいかな」

「マカセテ」

チチチチという機械的な音が鳴ったと思うと、またしても別個体のラッキーさんが現れた。…のだけど、何やら他のラッキーさんとは少し様子が違う。何故かサングラスを付けている。

「ジャパリパークへようこそおいでくださいました。私はあなたのラッキービーストです。今日はどういった用向きで？」

「…え？」

なんだか様子が他のラッキーさんとは違う。すぐく流暢に日本語をしゃべっている。「あ、あたしはともえ。このホロテープを再生したいんだけど…」

「お任せください。私の背中にそのホロテープをお挿し下さい。データを再生します」

言われるがままに背中の差込口にホロテープを挿し込む。すると、そのラッキーさんからミライさんの記録が再生された。

「○月×日、△曜日。ジャパリパークに国連の多国籍軍がやってきました。どうやら、未

曾有の大災害に見舞われた世界において、ジャパリパークは希少動物の保護の元に世界、引いては国連の管理下に置かれたようなのです。私の知らないところでそんな話が進んでいたなんて……。園長の発表も国連軍がやってきた後に行われました。アンイン港にも大きな空母が停留していて、スタツフもお客様もみんな怯えてしまっています。上の方でという話を通っているのかわかりませんが、あちこちで整地を始めては何か工事のようなものが行われています。……ここはあくまでも動物の保護とお客様を楽しませるテーマパークとして設立されたはずです。軍隊がいても良いような所ではありません。一刻も早く国連軍の撤退を求めましょう。園長にも話を聞いて状況を確認しなくてはなりません。いくら世界の危機だからと言って、こんなことがまかり通って良いはずがありません。……ジャパリパーク従業員、ミライ。記録を終わります」

気まずいような重い沈黙が流れる。あたしたちが見たあの戦車は国連軍の物……？

じゃあ、その周りにあつた銃やヘルメットは……。

……寒気がする。ラッキーさんが動かせなかつたのもちゃんと理由が付く。アレはパークの所有物なんかではない。国連の人たちが外から持ち込んだ戦争の道具なんだ。どういう理由で外からやってきたかは分からない。けど、それを説明するのもあたしたちの使命なのではないか。

かばんさんが何やら頭を抱えている。ひどく何かに追い詰められているような難し

い顔だ。

「かばんさん…?」

「ごめん…。ちよつと頭痛がしてね…。行こう…」

…何やらかばんさんの様子がおかしい。少し心配ではあるけど、かばんさんは大丈夫と言いながら自ら先頭に立って進んでいく。

…そうしてホロテープを回収し終えたあたしたちは建物を後にした。ホロテープ以外のめぼしいものも特になかったし、こんな物騒なところとは早くおさらばしたい。

そう思っていたところにある事に気付いた。ギンギツネちゃんがいない。いつの間にかあたしたちのパーティから姿を消していたのだ。

「あれ、そういえばギンギツネちゃんは？」

「そういや、いつの間にかいなくなってるな。どこに行つたんだ？」

「ニオイはしませんね…。いつの間にかはぐれてしまったんでしょうか。一度戻ってみま…」

唐突にイエイ又ちゃんが言葉を詰まらせた。何かを警戒するように姿勢を低くして敵を探るような動きをしている。サーバルちゃんも耳をあちこちに動かして何かを探っているようだ。

「このニオイ…。セルリアンです…！それにフレンズのニオイもします…！」

「私にもわかるよ……誰か戦ってるみたい……！行こう！」

そう言つて二人はセルリアンたちがいるであろう方向へと走つていった。あたしたちもはぐれないように必死に二人の後を追いかける。二人は飛行場から離れてぐんぐんと森の中を突つ切つていく。

「イエイヌちゃんたちどこまで行くつていうの……！セルリアンもそうだけど、もしネメアの獅子だったら……！」

「中型サイズのセルリアンだったらサーバルちゃん一人でも大丈夫だろうけど……ちよつと心配だね。急ごう」

「……！！」

唐突にアムちゃんが前へと出るとあたしたちを制止するように道を塞いだ。

「伏せて」

低い声であたしたちに命令する。何かを感じ取つたのだろうか。まだイエイヌちゃんやサーバルちゃんらの姿は見えていない。それどころかギンギツネちゃんの姿もない。言いしれようのない不安感が胸の中で渦巻いている。

「アムちゃん……？」

「いる……。ネメアだ……！」

「そんな……！イエイヌちゃんは……!？」

「わからない…。血のニオイはしないから無事だとは思うけど…。…イエイスが言ったフレンドズっていうのはネメアだったのかも…。そいつがセルリアンと戦ってたんだ」

「そんな…。助けなきや!」

「無茶だ!今行ったところで返り討ちに合うだけだ…!」

「けど…!」

「……………」

唐突にヘラジカさんが走り出した。慌てたアムちゃんが制止に乗り出す。

「ヘラジカさん!」

「おい!無茶だ!」

「お前らが行かんというなら私がやる!付いて来てくれるな!」

急いでヘラジカさんの後を追いかける。アムちゃんの顔には焦りの色が見える。戦闘慣れしているアムちゃんの爪が全く通らなかつた相手の元へ向かうのだ。アムちゃんて敵わなかつた相手にサーバルちゃんやヘラジカさんが適うはずがない。急いで止めなくちゃヘラジカさんが危険だ。

「つーヘラジカさん!?!」

何やら様子がおかしい。ぼうっと立って何か遠く一点を見つめている。釣られてあたしも見て見ると、信じられない光景が目に入った。ネメアの獅子と思われるフレンドズ

さんがセルリアンを相手に戦って…。いや、アレは虐殺と言った方が正しい。無抵抗のセルリアンを踏みつけて背後にある石をもぎ取っているのだ。

「…なんなんだアイツは…」

「ば、バケモンじゃねえか…!」

信じられない光景だった。何一つ表情を変えないことなく、ただ作業でもしているかのようにセルリアンの石をもぎ取っている。一つ、二つとまた石が引きちぎられている。その光景を目にしたヘラジカさんは完全に戦意を喪失していた。

「っ…そういうえば、サーバルちゃん…!」

思い出したようにかばんさんがサーバルちゃんの姿を確認する。そういうえば、あたしもイエイヌちゃんの後を追いかけていたんだった。

「サーバルならそこにいるぞ」

サタンが指をさす方を見ると、たしかにサーバルちゃんの姿があった。少し離れたところにてイエイヌちゃんもいる。恐らく、セルリアンを虐殺するネメアの姿を確認してか、らすぐに身を潜めたのだろう。

「さあ、どうする?…このままだと奴にばれるのも時間の問題だぞ。もつとも俺は逃げることを進めるが」

「っ…。そう…だね…。みんな、一旦ここは退こう」

かばんさんがそう言ったときだった。不意に遠くから声がかげられた。その声は、明確にあたしたちの心を鎖で縛り付けるかのようだった。

「あれ〜？ヘラジカたちじゃん。奇遇だね〜また会うなんてさ〜」

「ッ……!!」

気付かれてる……！全身に脂汗がどつと噴き出てくる。変な猫なで声を出してるけど、却ってそれが背筋を引つ掻き回すような恐怖を覚えさせられる。

ヘラジカさんも目を見開いて全身を強張らせている。矛を持つ手にも筋が走っていて緊張しているのが分かる。

場の空気が張りつめてくる。かばんさんもアックスに手をかけていつでも戦えるように臨戦態勢を取っている。アムちゃんからも並々ならぬ闘志のようなものが感じ取れる。

「珍しいね〜また会うなんてさ〜。でもさ〜、少しくらいこれらを片付けるの手伝ってくれても良かったんじゃない？隠れてこそそそ見てるだけだなんて趣味悪いよ〜？そこの二人さ〜」

「ッ……」

イエイ又ちゃんとサーバルちゃんの体がピクンと跳ねる。このネメアの獅子は最初からイエイ又ちゃんがここに来ていたのを知っていたんだ。それでいながら、わざ

と気付かないふりをして二人の目の前であんな悪趣味な真似を……!

「どうしたのさあ? ビビる必要なんてないよ? 私はただアンタたちと仲良くしたいだけなんだよ?」

「ふざけてるんじゃないぞ、ネメア……! お前が誰なのかをわたしたちは分かっているんだぞ……!」

「ほう、ネメア……。どこでその名を知った?」

ネメアの雰囲気が大きく変わった。あの時に感じた、戦闘狂のような狩る者の目だ。その歪む口元はあたしたちを見下しているようだ。

「どうせその赤蛇の知恵なんだろう。確かにオレはネメアの獅子と呼ばれた獣だ。ハッ! だったらもう猫を被る必要もない訳だ……オレを知ったというなら、少しはオレを追い詰める方法も分かった筈だがな?」

ネメアの獅子がじわじわとにじり寄ってくる。ゆっくりとした足取りはあたしたちを押し潰すようだ。

「くっ……どうすれば……! 倒す方法は知れても、どうやってそこまで追い詰めればいいんだ……!」

「考えるよりも腕を動かした方が良いぞ?」

ボキボキと指を鳴らしてあたしたちを威圧している。左肩にかかるマントのような

金色の羊毛が風になびく。曰く、アレがネメアの獅子の不思議な力を補助しているという事なんだけど…。どういふものか分からない以上、警戒するに越したことはない。不用心に挑んでは返り討ちに合うだけだ。

「……………」

「アムちゃん…?」

あたしたちの前にアムちゃんが立ち塞がる。その背中には見えない闘志が立ち込めているのが分かる。ネメアの獅子とやり合う気だ。

「アムちゃん、ここは一旦引いた方がよいよ…！まだ分からないことだらけだし、無策のまま戦うのは危険だよ…!」

「…だからこれから知りに行く。分からないままアレコレ策を立てるよりは、実戦で知るのがずっと有意義だから」

ドンと空気が張りつめる。アムちゃんから肌を刺すような殺気を感じる。どうやら本気でネメアの獅子と渡り合うらしい。

「ほう?その気迫、その血走る眼…。そこいらの馬の骨とは訳が違うらしい…。いいだろう。オレも少し本気を出してやろうか」

刹那、ネメアの獅子から押し潰されるような鬼迫が押し掛かってきた。アムちゃんの放つ殺気を丸々と呑み込むかのような凄まじい鬼迫だ。

だ。アムちゃんが理性を捨ててネメアと戦おうとしている。

「殺してやるぞ、オ……！」

黒い爪がネメアへと襲い掛かる。しかし、その攻撃も空しく、爪はネメアの体を滑るのみだ。

「愚かなツ！学習しない奴だ！何人たりともこのオレの体は傷つけられんツツ！！」

腰の乗った会心の一撃がアムちゃんの胸に入る。

「ゴハアツ!？」

殴られた衝撃からアムちゃんの体が吹き飛ばされる。崖に叩きつけられたアムちゃんが苦しそうに咳きこみながら赤い血を吐いている。

「ハア……ハア……」

「さあ、どうするかなビースト？このままではオレに殺されるのも時間の問題だぞ」

「ぐウ……ツ！」

ネメアがアムちゃんへとにじり寄っていく。どうにかして体勢を立て直そうとするも、体に広がる痛みからか立ち上がるにも一苦労といった様子だ。

「さあ、立て……このオレを殺してみろ！それとも恥辱の内に死に晒すかア!!」

その時だった。

ダダダダツ！

「つつ……!」

「サーバルちゃん!」

「うみやあ!」

サーバルちゃんが戦場に躍り出る。サーバルちゃんは素早くアムちゃんを抱きかかえると、そのまま戦場から離脱した。

「おのれ小癩な……!どこだア!出てこいッッ!!殺り合うなら正々堂々と姿を表せエ!!」

ネメアが吠える。その言葉には怒りの感情が混じっている。今鳴った銃声のような音は、もしかするとかばんさんの物なのだろうか。

…顔にわずかに赤い傷跡ができている。一体どうしたのか知りたいところだけど…。

「ともえちゃん!みんな!こっちに!」

「えっ!?あつ、うん!!」

「逃がすかア!!」

ネメアがあたしたち目がけて猛突進を仕掛けてきた。あの動きを見るに、もう既にあたしたちをキルゾーンへと捉えているだろう。このままでは死は免れない。

ダダダダッ!

「ぐう……!」

金羊毛を翻してかばんさんの弾丸を防ぐ。サタン曰く、アレはネメアの無敵の体を補

助するものと言っていただけ…。自身では防ぎきれないものをカバーするために使っているのだろうか。

ボンツ！

「うわっ!？」

「ちよつと臭うけどがまんしてね…。さあ、離脱するわよ！」

突如煙のようなものがあたしたちを包み込んだ。鼻を刺すような嫌な臭いに涙が出そう。それにこの声は…？

「ウッ オッ オッ オッ オッ オッ オッ オッ オッ オッ オッ アッ アッ ツッ!」

背後から怒りに塗れた、この世すべてを呪うかのような絶叫が轟く。

「覚えておれ、人間どもオッ! このオレをコケにしなくてくれたことを必ず後悔させてやるぞ、オッ!」

呪いの言葉が響く。あまりもの鬼気迫る絶叫に身震いがしてくる。

あたしたちを抱える青黒いブレザーを着たフレンズさん…ギンギツネさんに連れられてこの場所を後にする。背後にネメアの轟きを残してあたしたちは退避した。

……

無事にネメアから逃げることができたあたしたちは、適当な場所を見つけると、そこを野营地とした。かばんさんを中心に作戦会議を始める。

「うっ……ぐっ……」

「アムちゃん……」

「大丈夫……。すぐに治るから……」

胸を押さえながら苦しみに喘ぐアムちゃんを他所にかばんさんが粛々と準備を進めている。やがて準備が整うと、かばんさんが会議の開始を宣言した。

「今から、対ネメアに関する作戦会議を開始する。今回はアムールトラさんの果敢な活躍もあっていくつかの大きな成果を得ることができた。戦術的勝利と言っても良いと思う」

「……………」

ピリピリとした奇妙な緊張が走っている。みんなの顔もとても険しい。

「まずはギンギツネさん、今回の撤退戦はギンギツネさんの活躍なしでは成し得なかった。とても感謝しているよ」

「ま、まあ、あのガラクタが役に立ったっていうなら良かったわ。でも、まだ簡単な修理しかしてないから、取り扱いは注意してちょうだい。弾もあまりないし、本格的に使

えるようになるにはもう少し時間がかかると思うわ」

「分かった。…それでなんだけど、まず一つ分かったことは、ネメアの体…。毛皮の覆っていない部分には傷を入れることができるっていうこと。それが分かっただけでも大きな成果だ」

「あたしにも見えた。赤い傷が頬についてるのが分かったよ」

「…俺の言った通りだろう？腕、首、脚…。少ないようで意外と弱点は多いぞ。もつとも金羊毛を羽織っているせいで、そううまくはいかないだろうがな」

「だね…。まずはそれが課題の一つだ」

どこからか拾ってきたであろう紙とペンを使って何かを書いている。議事録でもつけているのだろうか。

「サタン、ネメアの行動パターンっていうのは分かるかい？多分、この島に現れてそう長くはないだろうけど、何か知っていることでもあれば教えてほしい」

「…正直言つて何もわからん。奴は俺を見つけるなり襲つてきやがって、それからずっと追いかけて回されてたんだ。それと、奴には少なからず火は通用しねえ。俺もテンパつてうまく攻撃できなかったっていうのもあるが、奴の毛皮と金羊毛の前に火は無力だ。それどころか、興奮させるだけになる」

「…なるほど。ありがとう。…いくらか分かったとは言つても、まだ作戦を練るには不

十分かな……。サタン、君の知識がまだ必要かもしれない。ギンギツネさんも銃の改良の他にもやってもらうことがある。ともえちゃんたちにも追々やってもらうことがあるから、その時には頼むね」

「う、うん……」

そう言つて立ち上がると、かばんさんはサタンとギンギツネちゃんを連れて奥へと行つてしまった。

「……久しぶりにあんな顔のかばんちゃん見たな……」

「サーバルちゃん……?」

「ゴコクエリアにいた時もずっとあんな調子だったんだ。なんでも一人で抱え込んで、解決しようとするんだよ。……また、あの頃みたいな孤独なかばんちゃんに戻ったりしないかな……。また一人ぼっちになつちやいそうで怖いよ……」

「……………」

サーバルちゃんが、かばんさんとの間に再び溝を感じ始めている。かくいうあたしも、言いしれようのない不安な気持ちを感じている。

「ともえちゃん……?」

「イエイ又ちゃん……」

後ろから不安げな声色をしたイエイ又ちゃんが姿を見せた。あたしも不安な気持ち

が隠しきれていなかったのだろう。なんだか変に感化されてしまっている。この非常時に、この寒さの中で心が弱っているのだろうか。場の雰囲気の流れされて、あたしまで知らない不安を抱えているようだ。

…イエイヌちゃんの顔を見てたら、どうしてあたしまでしよげているのか分からなくなってきた。みんなに頼りっぱなしのあたしにも出来る事はあるはずだ。あたしは自分を奮い立たせると、声を張り上げてサーバルちゃんに激励を送った。

「大丈夫だよ！もし、かばんさんがまたサーバルちゃんをひとりぼっちにさせるようだったら、あたしからガツンと言つてあげるよ！サーバルちゃんを置いていくなーつて！ね！イエイヌちゃん！」

「えーあ、はい！もちろんです！」

「…ありがとう。後ろ向きな気持ちじゃだめだよね…。うん！私もかばんちゃんに頼れるようにしなくっちゃね！ありがとう！ともえちゃん！」

「よし！その意気だよ！ネメアなんかに負けないようにあたしたちも頑張ろう！」

「「おー！」」

Ruin—4 「パンドラの匣」

声が聞こえる。頭の中で、誰の物かもわからない声が延々と木霊している。

出て行け。私の中から出て行け。仲間を傷つけるな。人殺し。ケダモノだと。

…この体はオレのものだ。お前なんかの物ではない。

「ハア・・・ハア・・・」

オレの…体…。震える体を抱きかかえて落ち着かせる。クスリでも切れたかのように震える体はひたすらに血を欲して疼いている。今すぐにでもオレを傷つけたあの人間どもを斬り刻んでやりたい。

血が欲しい…。アイツらの肉体はオレの渇きを癒す極上の果実に違いないのだ。

「ア・・・ハア・・・」

オレの中にもう一人のオレがいる。存在自体が不確定で常にオレを責め立てている。夢か現実かも定かでない。現実味の感じないこの世界において、オレは唯一無二の存在だ。オレはこの世すべての理であり、この世すべてにおける唯一の存在だ。故にオレがこの世に存在する全ての命を断罪するのだ。

「アッ・・・カッ・・・」

頭の中に声が響く。誰もがオレを蔑んでいる。嘲笑うかのような笑い声がオレの精神を蝕んでいく。全ての命がオレを断罪しようとしている。

笑い声が響く。頭の中に砂嵐が流れる。洪水のように流れる情報がオレを凌辱する。血……。赤い血がオレの両手を濡らしている。掻きむしった髪が両手に絡まっている。

「ヒッ……。ヒハハハハハ……。ッ！」

体が震える。痛みが甘美な刺激となってオレを惑わす。自らの血で濡れたオレの手の何と魅惑的なことか。血に濡れた己の爪を見て思わず恍惚としてしまう。オレの体に流れる赤い血の何と美しいことか。もっと見てみたい気がしてきた。

「ウツ……。」

吐き気がする。オレの中のモノが分裂していく。オレという存在が不確定になる。頭の中にノイズが走る。相変わらず声は響いている。赤い瞳はオレを捉えて離さない。体中を巡る血が沸騰しているようだ。

「フ……。フフフ……。楽しくなってきたじゃねえか……」

オレは神だ。そしてそいつはオレたちを嫌っている。なんと下劣で下らないことか。神とは自分で作ったおもちやを壊し、己が造った娯楽に墮落するだけの存在だ。そしてオレこそがその神なのだ。

偉大な創造者となって、贖物を壊していく。オレに齒向かうすべての命を、壊してい

く。底知れぬ渴きを癒すために、オレは今日も得物を狩っていく。

.....

声が聞こえる。ヒトの声だろうか。暗く淀んだ意識の中、くぐもった声に目を覚ます。

「まさか、本当にこんなことが……」

「……まだ非常に不安定な存在だ。サンドスターの供給がなければ、あつという間に死んでしまっだろう」

目を開けると二人の女がいた。一人は明るい緑の髪をしたサファリジャケットを纏った女。もう一人は深い緑の髪をした白衣の女だ。

「目を覚ましたようね……」

「そうだな……。予想とは少し違うが、むしろ、私の求めた理想の姿ともいえる。この子であれば、パークを救えるかもしれない」

「……やっぱり、そうするつもりなのね、カコ」

「……………」

オレの知らないところで勝手に話が進められている。重い眩暈の中ゆっくりと立ち

上がる。

「立てるか。早速だが、君は自分が何の動物だか分かるか？」

「オレは……」

「……ネメアーの怪物と言われた獣……。テューポーンに父を持ち、母にエキドナを持つと聞いているわ。ヘラクレスとの戦いに敗れ、その毛皮はアイアースに不死を授けたと伝えられているとか……」

ネメアーの怪物……。脳の奥深くに眠るわずかな記憶に明かりが差す。怒りに塗れた在りし日のオレの姿……。怪物の子として生まれ、大英雄を屠るために送られた、かつてのオレ……。

そして今、オレはどこにいる……？この二人はいつたい……？

おぼろげな意識の中、ゆっくりと立ち上がり、二人を見据える。

「……しかし、なんという見た目なのかしら……。白くなつたようなバーバリオンみたいな……。想像してたような見た目とはだいぶ違うような気がするけど……。……本当に説上のような無敵の毛皮を持っているのかしら」

「それは私も分かりかねる事ではあるが……。どうだ、ネメアーの獅子よ。戦いに自信はあるか？」

「……あることにはある。何人もオレを傷つけることはできん」

「そうか。では、これはどうかな？」

「カコ……！」

不意にカコと呼ばれる女が黒いモノを俺に突きつけてきた。瞬間、けたたましい音が炸裂した。

パン！

「……………」

「…噂は本当のようだな」

カラカラと金属の物体が地面に転がる。微かに指で押されるような感覚を左肩に感じたけど、何かされたのだろうか。よく分からないけど、このカコという女はオレに何か試したのは間違いなようだ。

「いくら本当か確かめるとは言ったって、ピストルで撃つなんて……！」

「…だが、これで伝説が実証された。ネメアーの獅子一匹で、一国の軍隊一つに相当すると言つても過言ではないだろう」

「カコ……」

話がるまるで見えてこない。この人間たちはオレに何かさせようとしているのか？

「早速だがネメアー、私たちが君を呼び出したのは他でもない。私たちは君にパークを救ってもらいたいと思つている」

「オレが…パークを…」

「…やっぱり、けものを愛する一人の人間として賛成できないわ、カコ。いくら無敵のけものと言ったって、ヒトとヒトの争いに無垢なけものを送り込むなんて、私は賛成できないわ…」

「…分かってくれ、ミライ…。私としても本望ではないんだ…。…これが、これだけが、私たちに残された唯一の希望なんだ…。…さあ、行ってくれ、ネメアーの獅子よ。私の愛するケモノたちの楽園を…希望を…その手で取り返してくれ…」

……………

遠くに轟音を立てて走る姿を見る。ミライ曰く、アレは戦車というものらしい。

「アレは合衆国陸軍のM1エイブラムスと呼ばれる戦車です。恐らく、劣化ウラン弾を搭載しているでしょうから注意してください。アレをくらえば、いくらネメアーの獅子と呼ばれるあなたでも無事では済まないでしょう。それと、周りにも歩兵が潜伏しているはずですよ。囲い込まれて十字砲火を浴びないように注意してください」

「分かった」

身を潜めてじわじわと戦車に近寄っていく。戦車の数は四両、ヒトは二オイから最低

でも六人はいるように思える。

しかし、なんと見にくいことか。二オイである程度の位置は分かるものの、奇妙な衣服を身に着けているせいで、少し視線を外すとあつという間に見失ってしまう。

「……………」

訳の分からない言葉をしゃべっている。ミライやカコの言葉とは全く違う異質な言語だ。聞いていると無性にむしゃくしゃしてくる。

「……」

一両の戦車がこちらを向いた。辺りが騒がしくなってくる。どうやら見つかったらしい。

ならば…。

姿勢を低く保ったまま、全力で一人のヒトに向かって突っ込んでいく。オレの存在に気付いたであろうヒトの一人が大量の金属の弾をばら撒いてきた。

腕で顔を隠して攻撃をしのぐ。痛くもなんともない。攻撃が止むと、大きく飛びあがって獲物を眼中に捉えた。間抜け面を晒してポーっと見上げている。オレは爪を振りかざすとヒトの体を大きく切り裂いた。獲物は声一つ上げることなくそのまま息絶えた。

バババババツ!!

四方八方から金属の弾がオレに浴びせかかる。さすがに顔を狙われるのはまずいで、そこさえ塞いでしまえばどうという事はない。

横目で次の獲物を確認する。少し距離はあるけど、あの程度の距離であれば五秒もあれば十分だ。

走って距離を詰める。腕を大きく振りかざして爪を立てて、突き刺す。数刻の猶予もなく相手は絶命する。なんてこともない、慣れた動作だ。

次の相手はあの戦車だ。実に奇妙な姿をしている。アレもヒトが造ったものなのだろうか。

そう思っていた瞬間、オレの体に大きな衝撃が走った。

パァン！

「つウツ……！」

炸裂した空気がビリビリと体に響く。鼓膜が破けるかのような大きな音だ。視界がぐらぐらと揺れる。耳鳴りがして周りの音が全く聞こえない。戦車の奇妙な長い筒がオレをじつと睨んでいる。あの大きな音はアレから発せられたものなのだろう。音で威圧するとは、大きな図体の割りに見掛け倒しもいい所だ。

戦車に飛び乗り、長い筒を抱えて、力任せに戦車の首をもぎ取った。そのままその首を戦車の胴体に叩きつけると、戦車は勢いよく爆散した。

ヒトが何やら大声で騒いでいる。相変わらず金属の弾が横殴りの雨のように打ち付けてくる。いい加減効かない事を学んでほしいものだ。

パアン！

「ギツ……またか……！」

別の戦車がまた発砲してきた。…発砲？よく見れば、奇妙な金属の棒のようなものが転がっている。…まさか、あの戦車もヒトと同じく金属の弾をばら撒くためのモノというのか？

「ハッ……大したことないな……！」

もう一両の戦車に飛び乗って、爪で切り裂く。なんてことない、バターでも切り分けるかのように簡単に切り裂けた。中にはヒトが何人か乗っていたけど関係なかった。オレに仇名するのであれば切り殺す。こいつらは戦車でオレを撃ってきた。ならばオレの敵だ。だから、殺す。

斬る。潰す。殺す。薙ぎ倒す。気付けばそこに立っていたのはオレだけになっていった。夢中になって殺した。本能の赴くままに、オレは夢中になって殺した。虐殺と言ってもいい。奴らはオレに傷の一つもつけられないまま殺された。…愉しかった。

血と硝煙の臭いが辺りに漂っている。血に濡れた体に風が当たって少し寒く感じる。

「…そういえばミライの奴…。どこに行った？」

血と硝煙のせいでミライの二オイを辿れない。果たしてオレはどこから来たんだっ
たか。草と木があるだけでは戻るに戻れない。

「ミライ!!!どこだ!!!」

大声でミライの名を叫んで呼びかける。これで答えてくれればいいのだが、どうも反
応がない。まさか、あいつらの流れ弾に当たって死んでしまったか？

ガサ。

「!」

不意に草の擦れる音がした。風は吹いていない。だったら今の音は…。

音がした方へ歩いていく。オレが近づく度にガサガサという音が激しくなっていく。
この荒い息遣いは…怯えているのか？

「ヒツ…」

「……………」

そこには、ひどく怯えた様子のミライがいた。腰を抜かしてしまったのか上手く立て
ないようだ。息は荒く、全身をがたがたと振るわせて、まともに喋れる様子もない。

「何をそんなに怯えている？」

「っ……………」

オレの行動や仕草にいちいちびくびくしている。…こんなのでは話にならない。用

事が済んだのだから早く帰りたい。

ミライに手を差し出す。相変わらなびくびくするばかりだし、オレが行動を起こさなければならぬだろう。

「立て。早く帰るぞ」

「え…。あつ、は、はい…！そ、そうですね…！」

目に見えて狼狽している。顔を引きたせながらもオレの腕を握ると、ミライはよるめきながらも立ち上がった。

「行きましよう。カコさんに報告です」

弱々しく頼りないながらも、研究所へと向かうミライの後をついて行く。…しかし、驚くほどに無防備な背中だ。

…今ここで彼女を襲ったら…。

「…はっ！」

「…？どうかしましたか？」

「いや…なんでも…」

平静を装って、己の内に湧く破壊衝動を隠してみる。…一体オレは何を考えているんだ？

…血に体が疼いている。赤黒く濡れた体を見て自分の異常さを知る。

オレは…ヒトを殺したんだ…。食うためでもなく、守るためでもなく、ただ、ヒトに命じられるがままに…。

「ウツ…！」

「…！どうしましたか…?!？」

「な、なんでも…！」

「なんでもないはずがありません…！急いでカコさんに診てもらわなきゃ…！やっぱりネメアーさんは不完全なフレンズさんなんだ…！」

訳の分からないことを言っている。妙な破壊衝動さえなければ、オレは至って正常だ。…まあ、この変な高揚感と破壊衝動は異常だとは思うが…。

「急がないと…！ネメアーさんが消えてしまう…！」

ミライの肩を借りながら研究所へと戻っていく。

…どうしてもミライに抱えられる腕に力がこもってしまう。なんとかしてこの衝動を抑えなければ、オレは取り返しのつかないことをしてしまうだろう。壊れそうな理性を必死に保ちながらオレという個を保つ。オレはオレのままではいられるだろうか。

…道は遠い。

……………

ドラムを回す無機質な音が聞こえる。ネメアとの決戦に備えて、あたしはイエイヌちゃんたちといっしょに火山地帯まで来ていた。かばんさん曰く、いくらネメアでも溶岩にさえ落としてしまえばただでは済まないだろうという事だ。道中にいくらかセルリアンがいたけど、あたしたちの敵ではなかった。セルリアンなんかより恐ろしいものはいっぱいいる。ネメアもそうだし、サバトの黒山羊だってそうだ。いくつもの修羅場を潜り抜けたあたしたちにとって、セルリアンなんて取るに足らない存在だ。

「これ…なんでしよう…?」

奇妙な装置を見てイエイヌちゃんが尋ねる。

「これ、あたしたちの施設にもあるわ。確か…地震計って言ったかしら?」

「ジシンケイ…?」

「ええ。読んで字の如く、地震を観測するための装置よ。他にも、使い方次第では地震の予兆を読んで、避難する準備ができたりするのよ。ここにあるってことは、火山活動でも計測しているのかしら?」

「へ〜…。ギンギツネさん、物知りだね」

「まあ…ちよつとね」

照れ臭そうに耳をピコピコ動かしてもじもじしている。かわいい。

「けど、火山っていうのも嫌なところだよな。くせえし、暑いしで、あんま長居するとおっちゃんじまいそうだけ」

「あながち間違いないわ。火山も種類によるけど、毒ガスを出しているところもあるからね。下見が終わったら早く下山した方が良いわ」

「げっ、マジかよ。おいともえ、早く降りようぜ。私も頭痛くなってきたぞ」

「う、うん。そうだね。けど、失敗したときの脱出ルートも調べとかなくちゃ…。どこか良い道ないかなあ…」

「失敗なんて考えんな！絶対成功させるんだよ！じゃないと私ら冗談抜きで死ぬんだぞ！」

「そ、そうだけど！万が一ってこともあるし…！」

そうゴマちゃんと言論していたところに、ラッキーさんを通じて通信が入ってきた。

「あれ、なんだろう。はーい」

「あ、ともえちゃん？ギンギツネさん良いかな？」

「うん。はい、ギンギツネさん」

「ん、どうも。どうしたの？手伝いがいるのかしら？」

「うん。ちよつと僕では調整できないところがあつてね。ギンギツネさんの力を借りた
いんだ」

「わかったわ。すぐそっちに行くから待っててちょうだい」

「了解。悪いね、ギンギツネさん。道中気を付けて」

そして通信を終えたギンギツネさんはあたしたちのパーティーから外れることになった。後に残ったのはいつもの四人だ。なんだか少し寂しい感じがする。

そういえば、いつからあたしたちは大きなパーティーになつていたんだろう。気付けば、かばんさんを始めとして色んな仲間に囲まれていた。それが今、みんないなくなつて初めのころのパーティーに戻つていた。あたしたち四人というのは、こんなにも少なかったんだなつて今になつて初めて知つたような気がした。

「不思議な感じだなあ」

「？」

イエイ又ちゃんが不思議そうな顔をしながらあたしの顔を覗き込んでくる。何とも無邪気なその顔が、何だか愛おしく感じた。イエイ又ちゃんのこういう表情も久しぶりに見た気がする。束の間の平穏というやつだ。

「えへへ…。ちよつとね」

「??？」

イエイ又ちゃんのもちもちなほつぺを揉みしだく。照れ臭そうに控えめに笑う姿にちよつとドキドキしてしまう。思えば、キョウシュウエリアに帰つてからはあまり遊ん

でない気もする。イエイヌちゃんも心の奥底ではいっぱい遊びたいと思っているのではないか。

「なーにイチヤイチヤしてんだコノヤロー。外ではアムがネメアが来ないか見張ってんだぞー。脱出路とやらを探すならさっさと探せってんだ」

「あつーそ、そうだねー！ごめんごめん…」

そう言っつて外に出た時だった。

「あれ…?」

あるはずの姿がない。アムちゃんの姿が見当たらないのだ。辺りを見回してみるけど、どこにもアムちゃんの姿はない。

「あれ…?アムちゃん…?」

「あ?ありや、アムの奴どこに…」

「ニオイは下の方に続いています。ギンギツネさんのニオイも同じ方向からしますし、送っつていったのでしょうか…?」

「あく、かもなく。てつきりネメアの奴にやられたのかと…」

不意にゴマちゃんが言葉を切った。酷く顔が強張っている。本能的に何かを感じたようだ。

ひどく寒気がする。温暖な火山地帯に似合わない不気味な寒々しさだ。恐怖からく

る寒気というのか、何かに睨まれているような感じがする。

「ともえちゃん……」

イエイヌちゃんがぎゅっと左手を握りしめてくる。イエイヌちゃんも敵のことに気付いているらしい。この気配は間違いない。このただならぬ気配は……。

「ネメア……」

恐る恐る後ろを振り返る。

そこには、エメラルド色の瞳をしたライオンの姿をしたフレンズがいた。

R u i n — 5 「V S ネメア前編」

「ネメア……！」

「よう。また会ったな、人間ども」

山の頂にネメアの姿を見る。霸王、帝王とも思える出で立ちがあたしたちを威圧する。

でもあの姿……。ライオンさんとは少し違っている。金色だった瞳はエメラルド色に、黄金の鬣には白いメツシユが入っている。両の腕にはアムちゃんのような、元の獣を表すネメアの獅子の体毛が現れている。指先に見える黒い爪は、鈍く怪しい光を放つてあたしたちを怯ませる。

ネメアは鬼のような形相をしながら口元を歪ませてあたしたちを見下ろしている。むき出しの悪意と嘲りに満ちたその顔は、もはや悪魔と呼ぶに相応しいとも思える。

よく見ると、右手に何かをぶら下げているのが見える。…見間違えるはずがない。あれは……。

「そんな……！」

「ツ……アム……てめえ!!!アムに何しやがった!!!」

怒りにゴマちゃんが叫ぶ。隣にいるあたしにも、ビリビリとその怒りが伝わってくる。

「こいつか？愚かにもこいつは、オレに戦いを仕掛けてきたのだ。だから返り討ちにしてやったまでよ」

ニヤリと口角があがる。アムちゃんの首に掛けられた手に力が籠っているのが分かる。抵抗する力も残っていないのか、苦痛に顔を歪めたままぐったりとしている。…あんなアムちゃんの姿を見るなんて初めてだ。ひどく胸が締め付けられるような感じがする。

ゴマちゃんも怒りに体を震わせている。今にもネメアに襲い掛からんとしているよ
うだ。

「う…あ…」

「アムツ!!!」

「さあ…。どうしてやろうかな…?」

ネメアは弄ぶように、アムちゃんの首を掴んだまま宙へと吊るした。アムちゃんの体は力なく垂れ下がっている。…何やら、ネメアはあたしたちの反応を見て楽しんでるように見える。常勝無敗の自信からくる驕りなのだろうか。絶対無敵の体を持つ高慢か。そのどちらのようにも思える。

「てめエ!!!アムを離せエ!!!」

「ハッ!よかろう!」

ネメアはゴミでも投げ捨てるかのようにアムちゃんを放り投げた。ズサリとアムちゃんの体があたしたちの足元へと横たわる。それを見たゴマちゃんは目を見開いて、わなわなと怒りに肩を震わせた。

「てんめえ…。ぜってえに許さねえぞ!!!」

「ハッ!オレと戦う気か?!いいだろう!!!かかってこいッ!!!」

ゴマちゃんがネメアへと飛びつく。行かせちゃいけないんだろうけど、あたしにゴマちゃんを止められる気がしなかった。

…正直に言うと、あたしも許せなかった。あたしもネメアに一発入れてやりたかった。でも…あたしにはどうすることもできない。ヒトとしても未熟で、フレンズさんのような特別な力もなければ、けもののような鋭い爪や牙もない。あたしじゃ、どう足掻いてもネメアに報いることはできない。

どうしてもそう思ったか分からないけど、ゴマちゃんなら一発だけでもネメアに入れてくれるような気がした。それを期待していたのかもしれない。

突然、ビューと一陣の風が吹いた。一つの影がネメアに向かっていく。あの影は…。

「アムちゃん…!」

ネメアに反撃をの機会を与えることを許さない。防がれたのであれば次の一撃を、通じないのであればより強い一撃を。自身の滅亡を前提とした特攻ともいえる暴走っぷりだ。

「くっ……アム……！」

ゴマちゃんが悔しそうにアムちゃんの名を呟く。ゴマちゃんは足元に転がる石を一つ拾い上げると、何を思ったのかネメアに向けて投げ飛ばした。

ガスッ！

「っ！」

「へ、へっ！背中がお留守だぜ！ライオンさんよ！」

「貴様……！死にたいらしいなあ……！」

「……なんておっかねえ奴だ……！」

ネメアが肌を刺すような殺気を放っている。痛みすら感じるそれは、まるでネメア自身バチバチと電気を放っているようにも感じる。

「けど……！」

ゴマちゃんがどこかへ向かって走り出した。あの方向は……。

「逃がすかア！」

怒りに駆られたネメアがドスドスと地面を蹴り上げてゴマちゃんに突進していく。

へと誘導する。少しでも判断を誤れば、一瞬にしてネメアの爪に引き裂かれてしまう。やるかやられるか、ギリギリの戦いだ。

「見えた……！」

溶岩湖だ。私たちが見つけた時より何か様子が変わりだけども、あれにさえたどり着ければ、もはやこつちのものだ。

「だけどうすつかな……。どうやってアレにネメアの奴を落とせば……」

「ダアッ!!!」

「イイ!?!」

……危うくネメアの爪の餌食になるところだった。よく機転が利いたものだ。

「自ら背水の陣に立つとは良い度胸だ！さあ、どうするかな!?溶岩に焼かれて死ぬか!?!」

「くっ……あつちい……こんな離れてるのに背中が焼けちまいそうだ……」

容赦ない熱波が背中を焼く。二十メートルは離れてるといふのにすごい熱さだ。

溶岩の赤い光に照らされるネメアに足が震えてくる。赤い光に照らされた黒い爪は、今にも私を引き裂こうとしているようだ。

「っ……だめだだめだ……怖気づくな、私……」

震える脚に力を込めて、ネメアと対峙する。じつとネメアの目を睨んで私なりに威圧する。到底ネメアに効くとは思えないけど、私なりの精いっぱい抵抗だ。

「ほう？良い眼をするな。矮小な存在ながらもオレに張り合うつもりか？だが…無意味だ」

「ッ……」

ネメアがじりじりと歩み寄ってくる。不敵な笑みは消え、獲物を狩るような鋭い目で私を威圧ししてくる。……喉を裂く気か、心臓を抉り取る気か、確実に私を仕留めに来る気だ。

私と言えば、体中が緊張して動けずにいる。アムはこんな奴と戦っていたのかと思うと、申し訳なさやら何やらで押し潰されそうになる。

「っ……」

突如、ネメアが何かに反応した。次の瞬間、金色に輝く双眸を持つ黒い影がネメアへと襲い掛かった。アムがネメアを追いかけてきたのだ。

「貴様……」

アムがネメアに馬乗りになって顔を殴打する。ネメアの口からは、これまでに見ることのなかった赤い飛沫が飛んでいる。…ネメアにダメージが入っている。これは勝てるんじゃないか……？

「いいでアム……そのままやっちゃえ……」

だけど、その希望もあつという間に打ち砕かれた。

込まれていった。…勝った…のか…？

「…ハアツ…！はあ…はあ…！」

アムが四つん這いになって激しく肩で呼吸をしている。緊張の糸がほぐれたのであろう、よく見ると全身が小刻みに震えているのが分かる。

「や、やったぞアム！ネメアの奴をやっつけたんだ！これでもう、アイツとはおさらばつて訳だな…！」

「う、うん…。あたし、頑張った…。…つつう…」

「だ、大丈夫か!? たく、おめえもよく無茶しやがるぜ…！こんなに傷だらけだつっのに、よくあんなバケモンと戦えるよな…！」

「…あたしがやらなきや、みんなアイツにやられてしまう…。あたしは、それが嫌なだけ…」

「…すまねえな、何もかもみんなお前に任せちまって」

ボロボロのアムを肩に抱いて、山を下りる準備をする。すると、下からともえたちが私たちの元へと駆け登ってきた。

「ゴマちゃん、アムちゃん！あ、あれ？ネメアは…？」

「へ、へへっ…。アムの奴がやっつけたんだぜ！あの溶岩湖に叩き落としたんだ！」

「う、うそ!? 本当に!? 本当にやったの!? ネ、ネメアを…やっつけた…」

「へへ、すげーだろ。後は、ミライだったかの跡を追うだけになるのか…」

「ですね。おおよその目星は付いています。まずは、ホツカイエリアのセントラルに向かいましょう。軍事基地や管制塔なんかもあるので、何かしらの手掛かりがあるかもしれません。ボス、案内頼みます。」

「了解いたしました。セントラルへ案内いたします。所要時間はおよそ三時間になります」

そうして歩き出そうとしたときだった。

「ッ!？」

突如アムがビクツと体を震わせた。バツと驚いたように後ろを振り向くと何かを見つめている。

…そこにあるのはネメアが落ちた溶岩湖だ。…嫌な予感が頭の中を駆け抜けていく。まさかだとは思わが…。

「…なあ、アム…。どうしたってんだよ…。ネメアの奴…死んだんじゃねえのかよ…」
「この気配…。生きてる…。みんな離れて…。ここはあたしがやる…。」

私の肩から腕を離すと、すかさず戦闘態勢に入った。やっぱりさっきの戦いで弱っているのか、どこか弱々しく感じる。

「うそ…。本当に生きてるの…?」

「な、なんて奴だ……！」

ドシャー！

「ば、バケモンだ……」

そこには、金羊毛を体に纏わせたネメアの姿があった。バサツと金羊毛を翻すと、無傷の姿のネメアが姿を現した。…赤く光る溶岩がネメアの体にこびりついている。溶岩に耐性があったのだろうか。それとも、あの金羊毛の持つ力なのだろうか。

「……………」

無言で私たちを見下ろしている。さっきまでとは違い、何やら軽蔑しているような見下した目だ。

「…今のはオレも死ぬかと思ったぞ……」

ぼつりと一言だけ、そう呟いた。

「易々と策に乗ったオレも馬鹿だった……。…オレも貴様らを見くびり過ぎていたようだな……」

ビリビリとネメアに殺気が帯びていくのが分かる。押し潰されんばかりの圧力だ。

「…これからは一切の手加減をせんで……。オレを追い詰めるとはどういうことか、その身で味わうと良いッ……！」

エメラルド色の瞳に光が灯る。ネメアの野生解放だ……！

「グアッ!?」

突如襲い掛かってきたネメアがアムを殴り飛ばした。吹き飛ばされたアムの体が山肌を滑っていく。

「ぐっ……!」

「…オレに血を吐かせるところか、命の危機にまで晒すとはよくやったものだ…!だが、少し知恵が足りなかったようだな…!」

「ッ…!!」

岩肌に頭を叩きつけられて、声にもならない悲鳴をあげている。しかし、ネメアは追撃の手を止めることなくアムを攻めていく。

「くっ……!」

アムに放たれた蹴りを受け止めて、足元を薙いでネメアとの距離を確保する。コンマ1mmでも、わずかな距離や間合いはどんな戦闘と言えども非常に大事なものだ。アムはそれがよく分かっている。

「そうでなくてはな…!」

アムとネメアが睨み合う。ネメアも一切の慢心と手加減を捨てて、本気でアムと戦おうとしている。溶岩で焼くことすらできず、あらゆる攻撃を一切受け付けない神代の怪物に勝つことができるのか…。

私たちは勝てるのか…。それとも、ここで死ぬのか…。

Ruin—6 「vsネメア後編」

「ぐう……！」

「どうしたビーストツ……さつきまでの覇気はどこへ行った……！」

「ギイ……！」

ネメアの怪力にアムちゃんが押されている。ネメアとの激闘に疲弊しているせいか、果ては野生解放をしたネメアに押されているのか、ネメアの攻めにやや引き気味だ。

「ズアアツ!!!」

神をも引き裂く黒い凶爪がアムちゃんへと襲い掛かる。ネメアの爪から伸びる赤黒い血の跡が尾を引いて山肌を濡らしていく。

「ぐつ……！」

アムちゃんは、野生解放をしたネメアにまるで手を出せないといった様子だ。必死に構えを取って対抗しようとするけど、一切の隙を見せないネメアに反撃できないでいる。攻撃をかわそうとするにも、体が追い付かず傷を増やしていくばかりだ。手を打つこと叶わず、体に傷を増やすのみ。万事休すだ。

「さあ、どうする!? 恥辱の内に死に晒すか、オレを殺すか選ぶがいい! このオレを倒さな

ければ、その人間も死ぬだけだぞ！このままオレに八つ裂きにされて死ぬか!?それともオレを殺してみせるか!?さあ、選ベッ!!ビーストオ!!」

そのときだった。

「ッ……」

「うみやあー!」

不意にネメアに斬りかかるフレンズさんが現れた。

「サーバルちゃん……!」

「待たせたね……!」

「……………」

エメラルドの瞳がサーバルちゃんを睨む。一瞬たじろいだようだけど、何か策を用意してあるのか、すぐに体勢を立て直した。戦闘の構えを取って両者睨み合う。

「うっ……。すっごい怖いよ……。こんなのにやられちゃいそうだよ……」

「ガアア……ッ!」

「うう……。だめだめ……。かばんちゃんのためにも頑張らないと……!」

ネメアの覇気が辺りを包み込むと、死合の開始を告げるゴングが鳴り響いた。砂煙を巻き上げて、ネメアがサーバルちゃんへとその爪を振るう。

「っ……!!」

黒い爪がサーバルちゃんへと振るわれる。寸でのところでかわしてみせたけど、わずかな赤い軌跡が尾を引くのが見えた。

「ッ……！」

サーバルちゃんの右頬に赤い筋が走っているのが見える。爪圧に圧されたのか、そのリーチは見た目よりも大きいと見える。

ネメアとサーバルちゃんとは、あまりにも体躯に差がありすぎている。あまりにももたついては、すぐにネメアの爪の餌食になるだろう。ネメアの意表を突かなくては、ネメアの懐に入ること叶わないだろう。攻めるに難く、守るにも難しいと来た。絶体絶命という言葉がこれ以上に似合う状況はないだろう。

「うう……。か、かばんちゃんの為にも……負けなから……！」

ネメアは無言でサーバルちゃんを睨んでいる。足音を踏み鳴らす一歩一歩が死の宣告を告げているようだ。黒光りする爪は、血を求めて生者へとその渴望を掲げている。ネメアもその渴きを癒すために確実に獲物を仕留めようとしているのだ。

「オレに負けない……か……。ならやってみせな……。サーバルッ!!」

「うっ……！」

「ごうと、ネメアの覇気が荒れ狂う風となつてあたしたちを包み込む。一瞬にしてサー

バルちゃんとの距離を縮めると、ネメアの剛腕が標的を叩き潰さんと振り上げられた。
「……」

サーバルちゃんは素早く後方にジャンプすると、振り下ろされたネメアの拳が地面を穿った。

…凄まじい破壊力だ。ネメアは今まで全然本気なんて出していなかった。あたしたちに追い詰められてから、初めて本気を出したんだ。…あの鋭い眼光と、エメラルドに煌めく瞳を見ると、それが良く感じられる。

「うみやあ!!!」

つるん!

「つ……」

「……………」

ネメアの毛皮を滑る爪にサーバルちゃんが茫然とする。大きな隙を見せているにも関わらず、ネメアはじつとサーバルちゃんを見下ろしている。

「あ……」

「……間抜け」

「あつ……」

サーバルちゃんの胴体を抱き上げると、その剛力を以ってサーバルちゃんの体を締め

上げていった。背中から締め上げられる苦しみから、顔を歪ませて悶えている。

「あ……がああ……！く、苦しい……！」

「だろ？うなあ……！苦しまなくては意味がない……！」

メキメキと音を立ててサーバルちゃんの体が潰れていく。あのままでは背骨を折られるのも時間の問題だ。なんとかしなくては、背中を折られてサーバルちゃんが死んでしまう。

「う……ぐううううう……！！」

ネメアの腕を引つ掻いて抵抗するも、ネメアの腕には傷一つかない。傷が入らなければダメージが入るはずもなく、締め付ける力は強くなるばかりだ。

サーバルちゃんの額に脂汗が滲む。抵抗する腕も止まってピクピクと痙攣している。

……もはや、あたしたちにはどうすることもできない。アムちゃんは自身の体を支えるだけで精いっぱいだ。あたしがネメアに立ち向かったついでに瞬間で切られておしまいだ。

「サーバルツ！！」

「ヘラ……ジカ……？」

「すまない！遅くなった……サーバルを離せ！ネメアーツ！！」

バサツ！

「のわっ!!？」

助太刀に来たヘラジカさんが、翻された金羊毛に合えなく返り討ちにされてしまった。何か固いものにも殴り飛ばされたかのように見えた。…ますます推し量りがたえない不思議アイテムだ。

「ぐう……まだまだあ……！」

「森の王、ヘラジカ……。此奴の持つ記憶だろうなあ。貴様を見ていると体が疼いてしょうがない……さあ、オレと戦えッ!!」

「……ライオン……貴様ア……ライオンの体から出て行けええええええ!!」

野生解放したヘラジカさんがライオンと刃を交える。この二人の戦いは、アムちゃんとの戦闘スタイルとはまるで違う戦い方だ。ネメアのやる戦い方は、その大きな凶体を活かした重い一撃で相手を粉碎する戦い方をしている。対するヘラジカさんは、巧みに矛盾を操った華麗な槍捌きで相手の攻撃を受け流す戦い方をとっている。

「ちよこざいなア……！」

繰り返される必殺ともいえる重い一撃を受け止めては受け流す。思い通りにいかないと、ネメアが目に見えてイライラしているのが分かる。

ヘラジカさんに届くはずの攻撃が空振りし始めた。ネメアの苛立ちが攻撃を鈍くさせていつている。

「確かにお前の一撃はライオンの奴を遥かに上回る……。まともに喰らえば、内臓を潰さ

れて死ぬだろう…。だが、当たらなければどうとでもない…。ガムシヤラなお前の攻撃
など、私の前では無意味だ…！」

「ガッ…！」

ヘラジカさんの矛がネメアの顎に直撃する。

ネメアの毛皮…。即ち、元の動物の特徴を持たない唯一の箇所である顔面こそ、ネメ
アの最大の弱点なのだ。

たまらず膝について無防備な姿を晒す。

「ぐっ…！本来であれば、トドメを刺す絶好の機会なのだがな…！」

膝をつき、顔を伏せて無防備な姿になっているにも関わらず、ヘラジカさんは攻撃で
きないでいる。全身が毛皮に覆われたネメアにはあらゆる攻撃が通じない。それは膝
をついた今でもそうだ。こんなに歯痒い事態はそうそうないだろう。

ゆらりとネメアがゆっくりと立ち上がる。エメラルドに光る瞳が恨めしそうにヘラ
ジカさんを睨む。

「おのれ…。おのれおのれおのれエ…！このオレが…貴様如きに膝を折るとはなア…
！」

「くっ…！」

ネメアが恨みの言葉をこぼしたその時、突如、何かに反応を示した。釣られてあたし

ひと際大きなネメアの絶叫が背後から響いてきた。ネメアの絶叫に交じって銃声のような音も聞こえてくる。見てみると、ギンギツネさんが遠くからアサルトライフルのようなものでネメアと応戦しているのが見える。…チーム総出でネメアと戦っているんだ。すべては、あたしたちが逃げ切るがために…。

「サーバルちゃん！ イエイ又ちゃん！ こっちに！」

草木でカモフラージュしたかばんさんがあたしたちへと呼びかける。あの茂みからのぞく光はかばんさんのモノだったんだ…。見てみると、大きくて物々しい弓のようなものを手にしている。アレでネメアの目を射ったんだ。…恐ろしい腕前だ。

「あとはヘラジカさんたちを逃がす番だ…！」

矢の先端に玉のようなものを付けてネメアへと照準を定める。

ビュウと矢が空を裂いてネメアへと飛翔する。やがて、ネメアの足元へと着弾すると、ボンと白い煙幕がネメアの体を包み込んだ。

「ぐう…！ 次から次へと小賢しい真似を…！」

「よし、チャンスだ…！」

煙幕を突き破ってヘラジカさんが姿を現した。山肌を滑るように下ると、あつという間にあたしたちを追い抜かして降りていった。遠くには、ギンギツネさんも戦線から離脱していつているのが見える。

れ出した溶岩が斜面を伝って麓に流れていく。地震による恐怖と、死が迫る恐怖、溶岩に呑み込まれる恐怖があたしを呑み込んでいく。

「こ、怖い……かばんさん……どうしよう……」

「くっ……急がなくちゃ……でも、どうしたら……」

一瞬、すべての音が止まった気がした。揺れる地面から、山肌を裂いて、白い何かの姿を現したのだ。いや、あれは山の中に潜んでいたのか……？

山を裂いて、溶岩を押し流しながら、うねるようにその白いモノが動いている。

「なに……あれ……」

「……………」

茫然と、その天にも届きそうな巨体を見上げる。…巨体……？あれは……生き物なの……？無機質な物だったら、外的な要因でも働かない限り動かないはずだ。だけど、アレはどうして動いている？自らの意志や目的があつて動いているのではないか……あの白い巨体は明確な意思を持って動いているように見える。

……この怪物は……生きているんだ。

そのことに気付いた時、あたしは明確な恐怖を感じた。

「かばんさん……に、逃げないと……」

「はっ……！そ、そうだ……！逃げなくちゃ……」

かばんさんが地面を蹴って滑るように降りていく。イエイヌちゃんも抱えようと、かばんさんの後を追うように斜面を駆け降りていった。イエイヌちゃんも焦っているのか、かなりの速度を出している。まさに、風を切るといふ表現が似合うといったようだ。

「うわっ!?!」

突如、目の前の山肌が大きく盛り上がると、山頂に見えた大きな白いモノが足元から姿を現した。山頂のソレとまったく同じように見えるこの白いモノは、山頂に見えるソレと同一個体のように思える。

急速に体が上空に持ち上げられ、強烈なGがあたしたちを押し潰していく。高空によつて冷やされた空気が、あたしの肌を冷やしていく。

遠くに動く影を見る。まるで巨大なドラゴン…蛇のようだ。

「あ……………。あああ……………」

「……………」

瞬きすることも忘れて、その姿を茫然と見つめる。イエイヌちゃんも、その姿を見て言葉を失っているようだ。

圧倒的な存在の前に、あたしたちは凍り付いてしまっていた。息をするのも忘れるとは、まさにこのようなことを言うのだろう。まるで理解ができない。あのような大蛇が

実際に存在するともいえるのだろうか？

その大蛇のようなモノが動くたびに大波が発生していることがわかる。時節、ホツカイエリアの断壁に大波がぶつかって、大飛沫が舞っている。

「おい！何をぼさーつとしてやがる！さっさと飛び降りろ！早く逃げるんだよ！」

「はっ……そ、そうだ……ま、任せましたよ！ロードランナーさん！」

揺れ動く大蛇の背中から助走をつけて飛び降りる。高度1kmはあろうかという高さから、イエイヌちゃんは何のためらいもなく飛び降りたのだ。風を切る音を耳に聞きながら、急接近する地面に意識を向ける。

「うわああああああ！落ちるうううううう！！」

「大丈夫です！！ロードランナーさん！！」

「任せろおおおおおお！！」

ゴマちゃんが落ちるあたしたちの体にブレーキをかける。ズンという衝撃があたしたちにかかる、少しずつだけ落ちていく速度が弱まっていった。

やや強引に着地したあたしたちをゴマちゃんが開放する。すかさず上空に上ると、ナビゲーターとして、あたしたちに行く道を示した。

「麓まで全力で駆け下りろおおおお！！海岸線の森まで走るんだああああ！！！！」

「わかった……！！」

「イエイ又ちゃんが斜面を駆け降りていく。白い巨体が山を裂きながら、あちらこちらから姿を現していく。」

「山が崩壊している。裂けた山肌からガスを吹きながら、真つ赤な溶岩を血のように流している。」

「恐ろしい光景だった。崩壊する山から踊るように姿を現すソレは、大悪魔の出現を思わせるようだった。」

「後ろを見ちゃダメですともえちゃん……無駄に恐怖を増幅させるだけです……」

「イエイ又ちゃんが怯えるあたしを諫めるように言う。まるで、自分に言い聞かせているかのようにも思えた。」

「前をしつかり見つめながら、全力で山を駆け降りていく。時節噴き下ろす風のような熱風にイエイ又ちゃんが苦悶の声を漏らす。あたしはイエイ又ちゃんに抱えられているせいでこの熱風を感じることはないけど、まるで自分が熱風を浴びたかのような錯覚を覚える。」

「ぐう……だ、大丈夫ですか……ともえちゃん……!」

「う、うん!あたしは大丈夫……!」

「つ……なら、良かった……このまま麓まで駆け抜けます……!」

「吹き下ろす風に乗じてイエイ又ちゃんが加速していく。背後からは、煙のようなもの

が、山頂で踊っているのが見える。

緩やかになっていく山の斜面を下っていく。ゴマちゃんが言っていた海岸線付近の森もすぐそこに見える。

「いいぞ！そのまま真っ直ぐだ！もたもたしていると火砕流に呑まれるぞ！！」

「っ……！絶対に負けるものか……！わたしの身を粉にしても、絶対に生き延びてみせる……！」

イエイヌちゃんの体が加速していく。後ろを見遣ると、すぐそこに火砕流の波が来ていた。

…あの波は予想以上に速い。急がなければ、あっという間にあたしたちはあの煙に呑み込まれて死んでしまうだろう。

「っ……！！イエイヌ！急げエー！真っすぐ走るんだア！」

「わ、わかりました！！！」

ゴマちゃんがイエイヌちゃんに叫ぶ。だけど、その目はイエイヌちゃんの後方、火砕流ではなく、イエイヌちゃんの向かう先に向けられていた。

ゴマちゃんの睨む先をあたしも見てみると、そこには一台のバスのような車両が止まっているのが見えた。運転席にはかばんさんがいる。そして、あたしたちに向かって何か叫んでいるのが確認できた。

「イエイヌちゃん！バスだよ！かばんさんがバスで待機してる！そこまで頑張ってる！走って！」

「ツ…!!分かりました！全力で駆け抜けます!!」

イエイヌちゃんの体がグンと加速する。石を蹴る音、地面を踏む音、風を切る音が聞こえる。一直線にバスに向かっていく。バスまで残り100mを切った時だった。

「跳びます！しっかりと掴まっててください!!」

「う、うん！分かった…！」

「よしっ…！せーの…！」

助走をつけて、小さく跳ねた後、身を屈めて跳躍の構えを取った。

「ダアッ!!」

バネのように大きく体を伸ばして、かばんさんのいるバスにめがけて大きく飛び跳ねた。眼下にはバスの姿が見える。バスというよりも、戦車とトラックが合体したような、奇妙な見た目をした乗り物だ。

バスに向かって落下していく。着地点の座標はバツチリだ。トラックの荷台に向けて着地の体勢を取ると、ドンという大きな音と共にバスを大きく揺らした。

「よし！サーバルちゃん、アムールトラさん、ヘラジカさんたちもみんないるね!!?出すよ!!」

バスのエンジンが大きく唸りをあげる。ジャリジャリと後部のキヤタピラが僅かに空転すると、バスは勢いよく発進した。

「ハアツ……！ハアツ……！ハアツ……！」

「イ、イエイヌちゃん……大丈夫……？」

「す、少し休ませてください……。は、肺が、裂けそうです……」

胸を大きく上下させながら、体全体を使つて激しく呼吸している。どうやら、かなり無茶をしていたようだった。それもそのはずだ。山頂からこのバスまでノンストップで駆け下りてきたんだ。それも、あの大蛇のようなモンスターへの妨害を突破しながら、全速力でだ。もう、なんと労えばいいか分からなかった。

「来てるよ来てるよ……！」

火砕流が麓まで到達して尚、あたしたちを飲み込まんと迫ってきている。山は完全に崩落し、大きな白い大蛇が溶岩と黒煙の間で踊っているのみだ。まるで、この世の終焉を告げているかのような、そんな光景のように思えた。

……

「う……ん……」

ふと、目が覚めた。どうやら、いつの間にか寝ていたようだ。辺りはすっかり暗くなつて、周りも寝息を立てている。

イエイヌちゃんもゴマちゃんもぐつぐつと眠っている。アムちゃんといえば、全身に包帯を巻いていて、見ていても痛々しい。包帯に滲む血を見ていると、今回の戦いの激しさをより深く思い知らされる。

ふと、明かりに目が留まつた。その方向を見てみると、ひとり焚き火に当たっているかばんさんの姿があつた。

「かばんさん…?」

「ん…。起きたかい?」

パチパチと一人で焚き火に当たっているかばんさんに声をかける。昼間のような鬼気迫るようなものはなく、それはとても穏やかな表情に見えた。

「おいで、寒いでしょう?」

「う、うん。失礼します…」

「ははは、今更そんなにかしこまる必要なんてないよ」

少し遠慮がちに、かばんさんの隣にちよこんと座る。すると、かばんさんが、普段いつも身に纏っている黒い外套をあたしに掛けてくれた。あたしには少し大きいちよつとぶかぶかな外套だ。

「アムールトラさんは、モルヒネとビタミン剤の投与で幾分か少し落ち着いている。痛みを誤魔化しているだけだから、根本的なことは何もできてないけど…。アムールトラさんは、数日もすれば治るって言うてるけど…。サンドスターの供与もないし、消耗も激しすぎる。あの様子じゃ、しばらくの間は戦線復帰は無理かもしれない…。彼女一人に負担をかけ過ぎたかもしれないね…。」

「気まずい沈黙が流れる。なんと反応すればいいか分からない。アムちゃん一人に負担をかけ過ぎているのは、あたしも十分わかっている。」

ふと横眼でかばんさんを見る。普段は外套に隠れて見えなかったけど、思ったよりまほつそりとした体をしている。確かに少し筋肉質ではあるんだけど、女の子らしいというか、女の子の体をしているのが初めて分かった。

「どうしたの?」

「え!? あ、いや、なんでも…」

「…ふふつ。ともえちゃんにこの格好を見せるのは初めてだったかな。元々はこの格好でサーバルちゃんと一緒に旅をしてたんだよ」

「そ、そうなの…? なんかそんなイメージ全然ないんだけど…」

「かもね…。…いつからだだったかな、この外套を纏うようになったのは…」

「そういつて悲しそうな顔をして俯くかばんさん。何か思いつめたように自分の手を

見ながらぼつぼつと独り言のように呟き始めた。

「みんなの姿は変わらないのに僕だけが変わっていく……。この外套も、僕の知らないうちに身に着けてたんだ……。：変わっていく僕の姿を見ていると、僕はヒトであって決してけものやフレンズではないって、次第に思うようになっていったね……。何かに夢中になってこの思いを消そうと躍起にもなった。自己嫌悪に溺れる日々さ……。こんな自分が嫌になって、消えてしまいたいと思うことも何度もあった……。けど、消えたいと思うと本当に消えてしまう気がして、無性に怖くなるんだ……」

かばんさんは続ける。

「ヒトに会いたいって思ったのも、まだ見ぬ知らない世界を見たいからっていうのが最初の理由だったつけ……。ヒトに会って、ヒトというモノに当てはめて安心したかったのかもしれないね……。いつの間にか理由が変わってたんだよ。本当ダメダメだ、僕は……」

そう言つて、膝を抱えてうずくまってしまった。

気まずい沈黙があたしたちを包み込む。そんなことないと、かばんさんを慰めようにも逆効果かもしれない。：誰にも見せなかつたであろう、自分の弱い心をかばんさんが見せているんだ。普段のかばんさんであれば、こうやって弱音を吐き出そうとはしないだろう。壊れそうなかばんさんの弱い心に寄り添う……。あたしがその役目を担うんだ。

「……………」

うつむいて沈黙したままのかばんさんに寄り添う。…微かなかばんさんの息遣いを感じられる。少し息が震えているのだろうか。思った以上にかばんさんは追い詰められているのかもしれない。かばんさんはかばんさんと、ギリギリのところまで戦っているんだ。

「……………」

ふとかばんさんが横目であたしを覗き込んだ。少し驚いてのけぞってしまふ。

「…ごめんね。急に変なこと言つて…」

「ううん。何もできないあたしが唯一出来る事だから…。気にしないで、いっぱい話していいんだよ。一人で抱える必要なんてないんだから…。つらいことがあつたらあたしも悲しむし、嬉しいことがあつたらあたしも一緒に喜ぶ。つらいことがあつても、半分こにしたらちよつとは気持ちも楽になるはずだよ」

「ともえちゃん…」

かばんさんの目に涙が浮かぶ。かばんさんの目に映る焚き火の火が歪んでいく。

「つ…!」

「わわっ!」

急にかばんさんがあたしの体にしがみ付いてきた。あたしの体に顔をうずめて、嗚咽を漏らして泣いているのだ。あたしよりもずっと体の大きな人が、こんな姿を見せると

はちよつと予想外だった。

お腹に熱い涙がしみ込んでいるのが分かる。かばんさんが泣いているんだ。今まで誰に見せなかつたであろう涙を、初めて見せたんだ。

「よしよし。大丈夫だよ。偉いよかばんさんは…。誰にも知られないように一人で頑張ってきたんだよね。けど、それもかばんさんが歩んできた一つの道なんだよ。サーバルちゃんを守るためにも、必死に思いを堪えて頑張ってきたんだよね。えらいえらい…」

風が木々を揺らす中、静かに時間が過ぎていく。やがて満足したのか、まぶたを赤く腫れあがらせたかばんさんが顔をあげた。

「えへへ…。ごめんね、みつともない所見せちゃって…。恥ずかしい所見せちゃつたな…」

「ううん。いいんだよ。…こんなことだけでも喜んでくれたなら、あたしも嬉しい」

かばんさんがまぶたを拭つた後、少しだけ微笑んであたしを散歩に行かないかと提言した。

「ちよつと…そこまで歩かないかい？少し…君とお話したいんだ」

「うん、いいよ。行く」

かばんさんと二人で夜の森を行く。ちよつとしたデートのような、甘酸っぱい感じが

した。

R u i n — 7 「狂気を孕む者」

空調の無機質な音と秒針が時を刻む音だけが聞こえる。チクタクと一定間隔で鳴るそれは、私の心を苛立たせていく。

思えば、占領軍の哨戒する戦場に素人一人と、実験体を送り込むのはあまりにも浅慮だったか。仮にも私の親友であり、パークのスタッフでしかない彼女を送り込むというのは、思慮が足りなかったと言わざるを得ない。それも、私の独断の元で行ったのだ。こんなことがバレれば、私も首を切られかねない。

怪我はしていないか、国連軍に捕まってはいるか、目撃されてはいるか……。いろんな不安が頭をよぎっていく。

それに、ネメアの獅子だって完璧なフレンズではない。国連軍の攻撃に振り返りにされているかもしれない。戦っている最中に体内のサンドスターを切らして倒れているかもしれない。

…私の作り出したネメアの獅子というのは、“ネメアの獅子という伝説”を元に作り出した、言わば人工のフレンズでしかない。決して手を出してはいけない、悪魔の魔術と言ってもいいだろう。ライガーを作り出すのとは訳が違うのだ。私が現地で採

取した、遺棄された毛皮、バーバリライオンの遺伝子、ヨーロッパホラアナライオンの化石、そして、パークのライオンを一頭…。それらを元に、サンドスターの持つ奇跡を用いて調合したフレンズ…キメラなのだ。もしくは、フランケンシュタインの怪物とも言えようか…。ともかく、私は私の持ち得る技術をすべて費やして、怪物を生み出したのだ。

「……………」

ミライはひどく反対していた。だけど、一定の理解は示してくれてた。私の長年の悲願である、失った輝きの再生…。絶滅した動物の復活…。そして私の…。

ボタン！

「っ……！ミライ……！」

「カ、カコツ……！ネメアーさんが……！」

「ツ……！ネメアーがどうかしたのか……！」

「様態が変なの……！急に体調を崩したと思ったら、どんどん衰弱して……！」

「……！分かった。すぐに治療を始める。ラボで準備をしてくれ」

「わ、分かったわ……！」

「……………」

軽く様子を窺ってみる。…酷く嫌な臭いがする。全身を染めている赤黒いものは血

だろうか。何やら肉片や毛髪のようなものも付着している。怪我らしきものは見当たらない。銃弾の中をかくぐつて、国連軍の兵士を斬り捨てていったのだろうか。特に負けたという感じでもなさそうだ。…まさか、本当に国連軍相手に勝利したのだろうか。

「……私に分かるか、ネメアー」

「……カコ…博士……」

「そうだ、カコだ。…意識は残っているようだな。…しかし、よくやってくれたな、ネメアー。些か不安ではあったが、期待以上の成果を出してくれたのは間違いなさそうだ。…国連軍、引いては米軍ではあるが、本当にやつつけたのか？」

「……戦車を4台、人間は…12人だったか、全員殺した」

「……素晴らしい。期待通りの働きだ。だが、少し無茶をしたようだな。体内のサンドスターが尽きかけている」

「無茶はしていないつもりだったんだが…」

「…まだその体に慣れていないのだろう。負荷をかけ過ぎたのかもしれないな。…それを調べるためにも私のラボに行こうか」

……

「……………」

ひどい倦怠感の中、オレは目を覚ました。体中に鉛を巻かれたかのような気怠さだ。ゆっくりと体を起こして、辺りを見回してみる。

ベッドの軋む音、毛皮の擦れる音、そして、オレの吐く呼吸の音しかしない、無の空間だ。薄暗い、じめつとしたレンガに囲まれた部屋、目の前の鉄格子はオレを封じるための物なのだろうか。状況がうまく呑み込めない。

…オレはカコに命令されるがままにヒトを殺した。そして、その扱いがこれなのか。お前たちのためにこの手を汚してきたというのに…。沸々と怒りがオレの中に湧いてくる。

「……………」

腕に鎖が繋がれている。……一体どういうつもりなのか。それに、オレはカコ博士のラボで検査を受けてたのではないのか。なぜ独房で鎖に繋がれているのだ？

…ミライの奴に聞いたださねばならない。奴はオレのことを不完全なフレンズと言っていた。それが何か関係しているのだろうか。

「ネメアーさん…」

「……………ミライか」

敵意を湛えた眼でミライを睨む。ミライにも多少の後ろめたさがあるのであろう、怯えながらも気まずそうに目を逸らしている。

「これはどういうことだ……何故オレをこんな独房で……鎖に繋いでいる？」

「……カコさんの命令です。私としても本意ではありません……。…検査の結果、貴方に異常なまでの攻撃性が認められました。通常のフレンズさんであれば、まず考えられないほどの本能というべきものです。事実、貴方はヒトを殺害することに一切の抵抗を見せませんでした。…通常のフレンズさんでは考えられない、イレギュラーな事なんです……」

「……………」

言っている意味が分からなかった。オレは二人に命じらるがままにヒトを殺したままで。何故それが異常だと言われるのか理解できなかった。異常なまでの攻撃性？他のフレンズは違うというのか？…意味が分からない。理解できない。それだけが理由でオレをこんなところに隔離するのか？

「ミライ……」

「……………」

ミライは、相変わらず気まずそうにオレから目を逸らしたままだ。…あんな弱々しい姿を見ているとイライラしてくる。何をそんなに後ろめたさを感じているのだ？オレ

が異常個体だからか？オレが不完全だからか？……オレがフレンズではないからなのか？

「……こつちを見てくれ、ミライ……」

「……………」

怯えたような瞳でこつちに視線を向けてくる。恐怖を振り払った、自身の持ちうるすべての勇気を湛えた、最大の抵抗といった物のようだ。

バキンッ！

「ッ……」

鎖を引きちぎり、鉄格子を裂いてミライに近付いていく。こんな脆弱なものでオレを繋ぎとめようだなど、オレも舐められたものだ。

「オレは貴様らの為にこの手を汚した……なのにこの扱いはどういう事だ!?自分ではやりたくない事をやらせるがためにこのオレを生み出したのか!!?ヒトを殺させた挙句、それを異常だなどと宣うとはとんだお笑い種よなあ、人間……!!このオレを誰だと思ってる!!?オレは貴様らにとつての何なんだ!!?答えろッ!!」

「ッ……!!」

ミライは顔を逸らして黙ったままだ。まるで、自分の死を受け入れたかのような怯えっぷりだ。こんなことでは話にならない。すぐさまミライを捨て去り、オレは独房へ

戻っていった。

ミライはごめんなさい、ごめんなさいと繰り返して泣きながら泣いている。：耳障りだ。今すぐにも喉笛を潰して黙らせてやりたい。

「何の騒ぎだ!?!」

「カコツ……!」

カコがオレの前に姿を現した。こいつがオレをこんなところにぶち込んだ張本人なのか? 検査すると言いながら、こんな薄暗い牢屋にぶち込んだ張本人なのか?

ちぎった鎖の先を尻の下に隠して、ベッドにちよこんと座り込む。切り裂かれてひん曲がった鉄格子は言い訳できないけど、なんとかなるだろう。

「お前の仕業か? ネメア……」

「……それ以外の何に見える?」

「……何をしたかは知らないが、くれぐれもこういうことはしてくれるな。お前は私たちの希望であり、不穏分子であってはならない。必要以上のことをするのであれば、それ相応の処置をさせてもらうぞ」

「ほう? 面白い……」

カコ博士を睨みながら立ち上がり、歩み寄っていく。どうせ鎖の事など見破られている。別に隠す必要もないだろう。

「ツ……ネメア……！何をするつもりだ……！」

「さあ……なんだろうなあ？」

一歩一歩とカコ博士たちに歩み寄っていく。カコはミライを庇ったままオレを威圧するように睨んでいる。

「オレはその気になれば、お前達など容易に殺せる。そうしないのも、オレの気まぐれだけだと覚えておくんだな。……オレは貴様らの道具などではない。次にこういう事をしてみる。次はただでは済まさんぞ……」

二人を残して部屋を後にする。後には、ミライの咽ぶ声が木霊するだけだった。

………

セントラルにある適当な建物に入って、一人黄昏ていた。周りの人間どもやフレンズたちはみんな奇異な目でオレを見ている。好奇心、畏怖、敵意……。様々なものが入り混じった視線がオレに向けられている。

……イライラする。みんなオレの事をバカにしているんだ。不完全な個体であるこのオレを……

オレはヒトを殺すために、カコによって造られた生命体だ。奴らはオレをフレンズと

言っているが、実のところ、オレはただの殺戮マシンでしかない。そうであるように造られたのだ。事実、カコもオレが生まれた時に祝福することをしなかった。ただ、一途の希望を託してオレを死地に送り出したのだ。ヒトを殺して来い、己が使命を果たして来いと送り出したのだ。

「ぐっ……」

頭の中がぐるぐるする。底知れぬ怒りが湧き出してくるようだ。頭を抱える指に力が入る。鈍いような、鋭い痛みが頭に走る。

……血だ。オレの指が血に濡れている。オレの指が、爪が、オレの血に濡れているんだ。

「……………」

初めて見る自分の血だった。オレを殺したヘラクレスでさえも、オレの血を流すことができなかった。…そうか。オレの体はオレの肉体でないと傷を付けないんだ。

「…ハッ…」

くだらん。実にくだらん。張り合いなんてものはない。ただただ、オレに歯向かう羽虫共を叩き潰していくだけなんだ。張り合いもやりがいもまるでない、虚無という名の殺戮だけを、奴らはオレに課したんだ。オレを生み出したあの二人を恨む。

「あつ……ここにいたんだー」

「……………」

不意に声をかけられた。元気いっぱいいな、少し掠れがかったようなハスキーな声だった。声のする方を見てみると、大きな耳をした、ネコ科の獣がそこにいた。

「…………誰だ？」

「わ、私はサーバル！ガイドさんからあなたの話を聞いてやってきたの！」

「オレを探しに……？」

少し戸惑ったような、頑張つて声をかけたように懸命に振舞う姿があった。どういう意図かは分からないが、オレの邪魔をするようであれば叩き切るまでだ。

「何の用だ。くだらん用であれば叩き切るぞ」

「え、えと！新しいフレレンズが生まれたって聞いたから、あいさつにつて思つて……！」

「フレレンズ……？友達……？」

「うん！私はサーバル！えつと、あなたはネメアーノシシ？つて言うんだっけ……？変わった名前だよな。それにすごい強そう！バリーとどつちが強いんだろう？」

「……………」

こつちの気も知らずによく喋る。相手にするのも疲れるだけだろうから、無視するこゝとにする。

「ねえねえ、こつち向いてよお。お話ししよーよー。…………ん？ケガしてるの？」

「む……」

不意にサーバルがオレの前に回り込むと、血に濡れたオレの手を見てきた。嫌な予感が頭の中を駆け抜けていく。

「大変……すぐにガイドさんに知らせなきゃ……！」

「サーバルッ!!!」

ビクッと体を跳ねさせて恐る恐る振り返る。その様は怯えた子猫のようだ。

「……余計なマネをするな。これはオレの問題だ。第一、オレは貴様と慣れ合う気など毛頭ない。……オレは貴様らとは違う。オレは、貴様らの思う”フレンズ”という存在などではない」

「………」

「とつとと失せろ。オレの気の立たない内にな」

「っ……」

オレの脅しが効いたのか、サーバルは尻尾を巻いた犬のようにさっさと逃げていった。こうして他者を制するのは実に気分がいい。……もつと踏み躪ってやりたくなる。

「………」

……まただ。また変な気持ちになっている。ミライの肩を借りた時にもこの高揚感を味わっていなかったか。そしてオレは、そのまま倒れたのではなかったか。……もつと

も、カコ博士曰く、体内のサンドスターの急速な消耗による衰弱らしいが。

『ネメアー、聞こえるか。この放送を聞いたのならば、至急、セントラルのサファリ研究棟に来るように。繰り返す。この放送を……』

カコに呼ばれている。どうせ碌でもない用なんだろう。……またオレに人間を殺させる気なんだ。

イライラしてくる。奴らはオレを完全な支配下に置く気でのだろう。…そうはさせない。オレはオレだ。誰にも支配されることはないし、オレはオレの意志で動くだ。

ふと園内を見回してみると、妙にざわついているのに気が付いた。騒ぎの中心を見てみると、何やら掲示板に人だかりができているのが分かる。どうやら、そこを中心に騒いでいるらしい。

「何の騒ぎだ？」

一人のフレンズに訊ねてみる。

「何か、パークにやって来た、いやーな兵隊たちが何人か殺されたって！怖いよねー！」

「殺された……？」

……まさか、オレの所業が明るみになったのか？詳しく話を聞いてみる。

「どういう事だ？詳しく教えてくれないか」

「それが全然分かってないんだって！いつやられたとか、誰がやられたのかっていうのは分かっているんだけど、誰がやったっていうのは何にも分かってないらしいよ。やっぱりとか実弾痕とか、やられた兵隊さんの物しか見つかってないんだってさ。じゃなくざりっぱーの再来だって話だよ」

「なるほど……」

……オレのことだ。もうニュースになっている。思わず口角が上がるような、ゾクゾクした感じが湧き上がってくる。……そうだ、そうしてみんなオレに怯えればいいんだ。

「……そうだ」

そういえばカコに呼ばれていたんだ。急いで向かわねば……。呼び出しを食らったときは嫌な気分だったが、今はとても気分が良い。こういう使命が下されるのだろうか。楽しみだ。

……

研究棟の通路を歩いている。誰もが皆、オレを恐れ奇異の目で見つめている。オレと
いう存在はそこまで奇異で、気を引くものなのだろうか。オレ以外のフレンズには挨拶

したり談笑しているというのに。

試しに睨み返してみたら、すごすごとオレから目を逸らした。……下らん。どうやら、人間というモノは自分が観察する分には無遠慮にするらしいが、自分がされると嫌悪感を示すらしい。……この爪で引き裂きたくなってくる。

やがてオレはカコのラボの前までやって来た。挨拶もしないでずかずかと中に入っていく。

中にはカコとミライがいた。机に腰をかけて何かを話している。

「来たか、ネメアー」

「……何の用だ。またオレに人を殺せというのか?」

「いいや……。もう既に耳にしているかもしれないが、国連軍が今回の事態に気付いたようだな。まだ私たちがやったと気付かれている訳ではないが、一応君にも気を付けてもらいたいと思っただのだ」

「……………」

「……容疑者不明で目撃者がいないという事からも、今回の作戦が成功したという証左になるだろう。……私からの命令だ、ネメアー。もし、作戦遂行の際に目撃者がいたのなら、躊躇わずに殺すのだ。一般人であろうと、フレンズであろうと、私たちの作戦が他所へ漏れるのは大変危険だ」

殺害の対象が増えたようだ。一般人でもフレンズでも、見られたのならば殺してもいいという許しを得た。それもそうだ。パークの一従業員がオレを使つて勝手に人殺しをしているんだ。もしバレて、あのバルバル喋る人間にでも詰められたら大変だ。

常に周りを警戒して見られないようにしないとなあ…？

「……作戦の遂行は基本的に夜に行う。私からも夜の間は外へ出ない事をフレンズたちに徹底させるが、もし、お前が夜間作戦途中にフレンズに見られるようなことがあったら……」

「……殺つてもいいんだな？」

「……ああ」

ゾクツという快感のようなものが背筋を走る。顔が歪んでいないかやや心配だが、そんな心配をよそにカコが話を続ける。

「だが、フレンズらに見られないことが大前提だ。目撃者は殺害しても構わないと言つたが、あくまでも見つかるな。分かったな？」

「……分かった」

見つかつてはいけない事が前提らしい。だが、一たび戦闘になつて派手に暴れ回るとなつたら、嫌でも見つかつてしまうだろう。もし見られたのならば、殺せばいいのだ。口封じのためにも残らずすべて、だ。死人に口なしとは良い言葉だ。死体が語る事はな

いのだから。

「それで、作戦の決行はいつだ？」

「気が早いな……。早速だが、作戦は今日の夜に実行する予定だ。だが、気を付けるのだぞ。国連軍は前回の教訓を受けてドローンを用いた哨戒も行っている。上空からの監視される事になる筈だから、出来ないと思つたのならばすぐに帰つて来い。分かつたな？」

殺戮の第二夜が始まる。引き返す事などするものか。オレの爪は血を欲している。

…あの感触を再び味わえるのであれば、オレは……。

R u i n — 8 「 O r i g i n 」

与えられた部屋の中で、オレは静かに作戦の時を待っていた。ドローンというモノが空から不審者を監視しているという事だけど、オレには関係ない。見える物すべてをぶっ壊す。それだけだ。

ベッドに縮こまってじっとしていると、不意にオレを訪ねてくる者が現れた。茶色いコートを身に纏い、黒いまだら模様をちりばめたような茶色い髪をした鳥のフレンズだ。

「お前がネメアーですか」

「誰だ？ 貴様は…」

「初対面のフレンズに貴様とは…。傲岸不遜にして無骨なフレンズなのです。パークガイドの言う事に間違いはなかったのです」

「……用がないのなら出て行け。オレは今気が立っている」

「ふむ…。実に興味深いフレンズなのです。ヤマタノオロチやキュウビキツネもここまです不遜な態度をとることはなかったのです。ここまで敵意をむき出しにするとは…。こんなフレンズがいたのですね」

「……オレは見せ物ではないぞ、雑種ツ!!」

「っ……。お、怒るななのです。お前に贈り物を持ってきたのですよ」

「贈り物……?」

そう言つて、そいつは手にしていた黄金の絨毯のようなものをオレに差し出した。

「これは、かつてコルキスの王が自身の王位を示したものであり、イアソンがアルゴナウタイの冒険の末に手に入れた物なのです。こいつをお前にくれてやるのです」

「……こんな物が何になる?」

「これは、かつて王の印としてアイエテスに献上された黄金の毛皮なのです。それは、女神ヘラが遣わせた神の羊の毛皮であり、絶対の王を示す象徴でもあるのです。テューポーンの子であり、神の血を引くお前であれば、これの価値を最大限に引き出せるはずなのです。……カコから勝手にくすねた物ではあるのですが、カコが持つていては宝の持ち腐れなのです。お前が使えば、これに秘めた力を最大限に引き出せるはずなのです」

「……………」

絶対の王の象徴……。神の遣いの羊……。それをオレが手にするのか……。

そいつから黄金のマントをひったくり、身に着けてみる。すべすべしてて気持ちが良い。不完全なフレンズと言われた俺だが、なんだか一步高みに上ったような気がする。

「そうです。それでいいのです。……我々フレンズは、パークガイドやカコ博士と同じように、お前にパークの未来を託しているのです。どうかパークを占領する悪い人間たちを追い払ってください。そして、皆が笑って暮らせる世界を取り戻すのです……」

……

変な夢を見た。現実感はなく、とてもふわふわした感じだ。怒る人、悲しむ人、いろいろな人……フレンズさんがいっぱいいた。かつて賑わっていた、過去のパークのようにも思えた。あたしのお父さんやお母さんもここで働いていたのだろうか。そう思うと、なんだか空しい気持ちになるような変な感じがした。

「何の夢だったんだろう……」

ネメアに似たようなフレンズさんの姿もあった。けど、ここホツカイエリアで見かけたような凶暴さはなくて、幾分か理性的であったようにも思う。それでも、周りのフレンズさんと比べて凶暴であったことには変わりないんだけども。

夢の内容を反芻しながら再び横になる。二度寝をしようとしたその時、不意に声をかけられた。

「夢を見たか、ともえよ」

「うん……？」

声のする方に目を向けると、赤黒いフードを被ったフレンズ……サタンの姿があった。

「その夢はただの幻ではないぞ。この島で実際に起こった過去の……記憶だ」

「過去の……？」

「そうだ。忌まわしい因果の螺旋に巻き込まれた哀れな獣とヒトの物語だ。楽園だったこのパークが地獄へと変わりゆく物語と言つてもいい。お前がこの星から脱出した後だからな、お前の父や母もいずれ出てくるだろうな」

「あたしの……？お父さんとお母さんが……？」

「然り。隕石が地球に墮ちても人類……地球は滅びなかった。……むしろ、真の地獄はここから始まったのだ。あのような醜い地獄を見せなかつたという点では、お前の父は賢い選択をしたともいえるな」

サタンは立ち上がったと思うと、あたしの隣に腰を下ろした。

「お前がお前の父によつて宇宙へと放り出された時、地球では大変な騒ぎだった。いくつかの弱小な国は滅び、油田は燃え尽き、人類は資源を求めて再び戦争を起こすようになった。ジャパリパークもそれに巻き込まれた、一つの哀れな島だったのだな。訳の分からん条約を勝手に結ばれ、自治権は剥奪され、国連統治の元勝手に進駐され……。目も当てられん惨劇が繰り広げられたものよ」

「……………」

言葉が出なかった。地球は滅びていなかった…？何が何だかまるで理解できない。あたしは確かにお父さんによつて宇宙に送られた。どこへ向かうかも知らされずに、孤独に宇宙を彷徨つていた。あまりよくは覚えていないけど、そう知らされている。

「ここから先は、俺が導いてやる。お前の知りたいことも、かばんが求めているものも、俺は知っている。もちろんそれ相応の代償は頂くが、まあ、悪い話ではないと思うぞ？」

サタンから目を逸らして黙り込む。……あたしのいなかった時の地球なんて知りたくない。あたしの見た夢から察するに、ロクでもないことが起きた事は確かだろう。そんな事を知つたつて、どうせつらくなるだけだ。

「ま、とりあえず今は寝るといい。明日もホツカイエリアを周るのだろう。アムールトラが戦えない今、奴に対抗する術はない。逃げる体力を養うためにも、今はゆっくり休む事だ」

サタンの言葉に従つて、あたしは再び眠りについた。

あたしの知りたいこと…。なんだか、あたしの心の奥底を見透かされているようだ。

……嫌な気分になってくる。知りたい事なんてない。悪魔の良いようになってされない。あたしはあくまでも、この島の謎とミライさんについて解き明かすだけだ。

.....

キュラキュラと履帯を鳴らしながらハーフトラックを走らせている。ネメアやセルリアンを警戒しながら、道なき道を走っていく。

アムちゃんは荷台に仰向けになって静かに眠っている。モルヒネが効いているのか、死んでいるのではないかと錯覚するかのようだ。アムちゃんはそれくらいぐっすりと眠っている。

「.....」

トラックの荷台はとても静かだ。トラックの走る音に皆の呼吸はかき消され、皆が孤独のベールに包まれているように思える。誰一人として言葉を発することなく静かにしている。

「ん……？」

かばんさんが何かに反応した。遠くには何か工場のような大きな建物が見える。稼働していないのか、廃墟のように静かに佇んでいる。

「ふむ……。あそこへ行くといい。何かお前の求める手掛かりがあるやもしれんぞ」

「ん……。分かった。ともえちゃん、ちよつとあそこに寄っても良いかな？」

「いいよ。行かん」

.....

工場の中に足を踏み入れていく。ともえちゃんも外でアムールトラさんの看病をす
るらしい。ここに寄りたいたいと言ったのはぼくだし、外で留守番をさせておくのは少し心
配だったけど、ヘラジカさんも残ると言ってくれたので、その言葉に甘えてぼくら数人
だけで行くことにした。

「これ全部がヒトが造ったものなのかしら……。どこがどうなっているのかさっぱりだわ
……。」

「製鉄所か何かだろうな。……電源が落とされて何も動いていないようだな。補助電源
がどこかにあるはずだ。それを動かして中に入るぞ」

外を周って補助電源を探す。サタンは簡単に言ってくれるけど、補助電源がどうい
うモノなのかすらぼくには分かっていない。ソーラーパネルのようなものもあるけど、そ
れを伝う電線を辿ってみるも壁に消えるだけでまるで手が出せない。

どうしたものかと考えあぐねていると、遠くからヘラジカさんが走ってくるのが見え
た。

「おっ。おーい！かばんよー！サーバルが補助電源を見つけたようだぞー！」

「ヘラジカさんーうん、分かった！すぐそっちに行くよ！」

急いで来た道を戻ってサーバルちゃんたちの元へと向かっていく。工場に入って通路を抜けていくと、通路の照明が付いているのが分かった。自動ドアも問題なく作動しているようだ。

通路を渡って工場の中を進んでいく。長年放置されていたせいか、いくらか埃っぽい嫌な臭いが鼻をつく。サーバルちゃんも鼻をぐじゅぐじゅと鳴らして少し苦しそうだ。フレンズさんもこういった埃に反応してしまうのだろうか。

一つのドアの前についた。ドアの隣にはセキュリティ認証をするための機械が付けられている。

「うーん…。これはなんなのかしら…。ピッキングだったら何とかなるんだけど…。カードか何かいるのかしら？」

「キタキツネさんピッキングできるんだ…」

「ぴっきんぐ？」

疑問を呈するサーバルちゃんを他所にそれらしいものはないかと辺りを見回してみる。通路はゴミが散乱するばかりでセキュリティカードらしき物は見当たらない。クリップボードに挟んであったりしないかとも思ったけど、当然ながらそんな杜撰な管理をしているはずもなく、徒労に終わるのみだった。

「うーん…。アムールトラさんとかネメアだったら蹴破るだけなんだろうけど、ぼくにそんな力はないしなあ…」

「か、かばんちゃんがそんなことを言うなんて…」

「……………。ぼくだってそう考えたりすることもあるよ…」

帽子を深く被ってその場を後にする。考えていたって仕方がない。出来ないものは出来ないんだ。別の道を探るか、実際にできそうな人を連れて来る他ない。

改めて外へ出てみると、目を覚ましたアムールトラさんがともえちゃんの肩を借りてリハビリをしている場面に遭遇した。まだ目覚め切っていないのか、少しよろよろして歩いてやや頼りない感じがする。

「あれ、かばんさん？どうしたの？」

ぼくに気付いたともえちゃんが話しかけてきた。

「ああ、ごめん…。ええと、ヘラジカさん、アムールトラさん。ちよつと手伝ってほしいことがあるんだけど、いいかな？」

「か、かばんさん！アムちゃんはまだ完全に復帰した訳じゃないんだよ!?!もうちよつと休ませないと…！」

「だ、大丈夫、ともえちゃん…。何を手伝えばいいの…?」

「……………つちに」

二人を連れてサーバルちゃんたちの元へと戻って行く。アムールトラさんが心配なのか、ともえちゃんもぼくたちについて来た。どうせ大したことでもないし、特別危険な事という訳でもないから別にいいんだけど…。万が一のことも考えてトラックにいてほしいという思いもある。

「ここなんだけど…」

「…？ドアか…？」

「うん。僕やキタキツネさんでは開けきれなくてね。これを蹴飛ばしてほしいんだ」

「ふむ…。では、アムよ。ちよいと捻ってやろうではないか」

「うん…」

ふんと一呼吸を置くと、二人はずかずかとドアに近付き、勢いよくドアを蹴飛ばした。まるで張りぼての木の板を蹴飛ばしたかのような、なんてこのない所作のように思えた。

「さ、さすがだね、二人とも…」

「これくらいなら…」

「なんてことない、だな？」

「うん…」

ヘラジカさんはハハハと笑いながらアムールトラさんの背中を叩いている。得意気

なへラジカさんに対して、やや消極的なアムールトラさんとの対比がなんだか印象的だ。

任務を終えた二人は工場の外へと戻っていく。本調子じゃないのか、アムールトラさんの足取りは未だふらふらと頼りない感じがする。それでもあの怪力というから恐ろしいものだ。

「すごい馬鹿力ね……」

「ほんとお……。一蹴りでドアを壊すなんて……」

「……行こうか、二人とも」

開け放たれた部屋へと足を踏み入れていく。部屋の中を見遣ると、いくつかのコンピューターと、大きな窓が一つあった。窓から外をのぞくと、工場の内部がよく見える。一種の展望台か指令室なのだろうか。補助電源が作動していることで、工場内が明るく照らされている。

サタンは製鉄所と言っていたか。僕が数時間かけて作り出した鉄が、ここでは数分もの間に何十トンと作り出しているのだろう。そう考えると少し空しい気持ちがあった。ヒトの文明とは偉大であると同時に、少し恐ろしいと感じてしまう。

「かばんちゃん、これ！」

「ん……。ホロテープ……?」

「そうみたいね、さっそく再生してみましょ！」

「だね…。ラッキーさん、近くのラッキーさんと呼んでもらえるかな」

「ワカツタヨ。チョットマツテテネ」

しばらくすると、ピヨコピヨコと音を立ててホツカイエリアのラッキーさんが現れた。……この間ぼくたちの前に現れたラッキーさんと同一の個体なのだろうか、黒いサングラスをかけた奇妙な出で立ちのラッキーさんが現れた。

「ジャパリパークへようこそおいでくださいました。私はあなたのラッキービーストです。今日はどういった用向きで？」

「……………」

相変わらず流暢に言葉を発している。奇妙な違和感をどうにか押し殺して、テープを再生するように頼んでみる。

「ええと……このテープを再生したいんだけど…」

「承知いたしました。私の背中にホロテープをお挿し下さい。データを再生します」

背中の挿入口がパカッと開くと、ぼくはホロテープを挿入した。いよいよ新たな真実を目にする時だ。

「20xx年、○月×日、△曜日」

「あれ…?」

聞き覚えのない声がラッキーさんから再生された。ミライさんのような柔らかい声ではなくて、張りのある外国人のような声だ。ミライさん以外にもホロテープでデータを残した人がいるのだろうか。いずれにせよ、ぼくの追い求めるヒトの情報であることに変わりはない。ひとまず聞いてみるとしよう。

「私達の部隊が孤立して一ヶ月が経つたわ。外からの救援はなく、内部の食料も尽きかけている。世界に誇る合衆国のソルジャーも、度々聞こえてくるビーストの咆哮に憔悴しきっているわ。歩哨に出れば惨殺され、見えない影はドローンを壊していく…。ラジオによると、テキサスの油田が炎上して、新ペストと呼ばれる疫病が合衆国でアウトブレイクを起こしていると聞いわ。……一体何が起こっているの？？母国に帰ることもできなくて、私達の研究が愛しいフレンズ達を苦しめていく…。苦しみを与えるだけで、救う方法がまるで分かっていない…。治療法も免疫能力も開発できないまま、セルリウムという毒をパークに放ってしまった…。ああ、ごめんなさい、カコ、ミライ…。こんなことになるだなんて思ってもいなかった…。ああ、神よ…。どうか私達に救いを…。……CSRSC 研究員カレンダ、記録終わり」

カレンダ？？初めて聞く名前だ。それにビーストって？？ビーストという存在がミライさんたちが生きていた時代から存在してたっていう事？？……ますます謎が深まってしまった。それにセルリウムとは…。毒？？今のジャパリパークに関係することな

いふべき存在……。……そんなのがフレレンズのはずがない。

しかし、ちらりと見えたその姿は、紛うことなきフレレンズの姿だった。……だけど、あんな姿のフレレンズなんて見たことがない。初めはホワイトライオンとも思ったけど、あんな凶悪な目をしたホワイトライオンなんて見たことがない。それに、あの禍々しい両の腕……。長手袋ではない、体毛で覆われた腕を持つフレレンズ……。……すべてが未知の存在だ。他のフレレンズと区別するためにもピーストと呼ぶのが妥当だろう。

「……………」

刻々と時だけが過ぎていく。司令部からの通信によると、いくつかのヘリコプターを出しても、私たちがの所に到着する前に撃墜されてしまうのだそうだ。ドローンを放って偵察を試みるにも、姿を捉える前に撃墜されてしまう。辛うじて収めることができた僅かな姿も、フレレンズであることが分かるだけで、何のフレレンズかも断定できない。赤外線で見えるにも、そのフレレンズはわずかな一瞬の間にしか体温を検知することができないらしい。そんな不可思議な未知の生命体の前に、私達は手も足も出せずにいた。

「姿も見えず、体温も感知できないフレレンズ……。そんな生物がいるのかしら……」

ぼそりとそんなことを呟く。生物ではない、何かクリーチャーのようなそんなものを相手にしているかのようにだった。生命活動にエネルギーを消費することなく、熱を発しない生き物がいるだなんて、そんなことは考えられない。それとも、わずかに見せる一

瞬の間にだけ外殻のようなものを解放して、真の姿を見せているとでもいうのだろうか。そんな非効率極まりない生物がいるのだとしたら、ぜひ見てみたいものだ。

通信も補給もままならなくなった護衛の兵士達は既に憔悴しきっている。撤退を許されないこの状況と、いつ殺されてもおかしくないこの状況に精神が壊されているのだ。時節聞こえるビーストの咆哮がより一層精神を蝕んでいく。

時刻は午前2時33分。夜行性のフレンズでさえなければ既に寝静まっているのだろうが、あろうことかあのフレンズ：ビーストはいつの時もお構いなしに絶叫をあげては、私達の精神をすり減らしていく。

「あああ…。もう嫌だ…。どうして俺はこんな…こんな目に遭わなくちゃいけないんだ…」

「国の為でも何かを守るためでもなく、こんな無益な戦争に駆り出されて死ぬだなんて…なんだってこんな目に…」

「……………」

無論、私だって同じ気持ちだ。私達には、動物たちの保護、調査という明確な目的があったはずだ。それが、まさかこんな事態を引き起こすだなんて…。

「フリッキー…」

亡きフリッキーの遺したメモリーを手に見る。フリッキーの遺したデータは絶対に

司令部に提出しなくてはならない。それが、私がフリツキーにできるせめてもの手向けになるだろうから。

フリツキーの得た情報は、実に興味深いものだった。あのビーストの活動した後は、微量なセルリウムの残滓が確認されたのだ。セルリアンの活動やフレンズには影響を及ぼさないだろうが、あのビーストの手掛かりを掴む情報であることには間違いないはずだ。

「フリツキー……。っ……。必ず……！」

ババババ!!!

「ッ……！」

突如銃声が鳴り響いた。それも工場内でだ。工場内を見回りにしている兵士が一人いたはずだけど、何か……。何か見てしまったのだろうか。

ババババババ!!!

「来るな化け物!!!来るな!!!来るなあああッ!!!」

異常なまでの銃声と叫び声だ。何かにひどく怯えている感じがする。それに、あんなに撃っているというのに銃声が止むことはない。：異常だ。何かがおかしい。考えられるとすれば……。

……

銃声が止んだ。さっきまでの狂乱が嘘のように静かになった。

「死んだ…」

ぼつりと呟いた。思ってもいないことを口にした。…いいや、理解したくなかったのかも知れない。先に亡くなった3人の兵士も同じようにして亡くなったんだろう。そう思うと簡単に説明がつくというものだ。あの化け物…ビーストがこの建物の内部に入ってきたのだろう。…急いで逃げなくては殺される。今がチャンスだと思った。

「っ!? な、何!?!」

突如護衛の兵士の一人に襲われた。なんだかひどく興奮している。

「一発やらせろよ…。どうせ逃げられないんだ。俺はお前のせいで殺される…。…少しくらい良い思いをさせろよ!!! なあ!!!」

「っ…!」

何も言い返せなかった。私も憔悴しきっていた。この人たちは私の護衛を任されてここに来ていたんだ。間接的と言っても、私に原因があるのならば私にも非がある…。そう思うと何も言い返せなかった。

服に手をかけられ、犯されようとしたその時だった。

体に熱いものを感じる。兵士の目は見開き、脂汗を滲ませている。シャツが濡れている。何が起きているのか理解できなかった。

ふわりと男の体が持ち上がっていく。その体の腹部が血に濡れているのが見える。

……何故体が宙に浮いているのだろうか。背後に見える女の姿は何なのか。

……理解できない。理解したくない。まさか、あれがビーストというのだろうか。

恐怖と絶望が私に押し掛かってくる。このような恐怖を味わうのであれば、あのまま犯されていた方が良かったのではないか。そう思う程の絶望がそこにはあった。

「ビ、ビースト……」

エメラルド色の瞳が私を見下ろしている。その目は、ひどく私を軽蔑しているようにも思えた。

バババババ!!!

突如、銃声が響いた。最後の兵士がビーストに銃を乱射しているのだ。手にした兵士の体を投げ捨て、銃声のした方へゆっくりとビーストが振り向く。

……信じられなかった。ビーストの体には傷一つない。兵士の血で手が濡れているだけだ。

「ひっ……ああああああああ!!!来るなあああああああ!!!」

……先ほどの悲鳴を思い出す。やはり、あの時に聞こえた銃声もこのビーストによるものだったのだ。ビーストが兵士に遭遇して殺したのだ。銃声が止んだのも、このビーストが殺したからなんだ。

「あつ……」

ぐしやりと嫌な音がした。思わず目を逸らしてしまった。薄目で見てみると、壁には血の模様と一緒に肉片のようなものが見える。……振り向いたビーストがこつちに歩み寄ってきている。私を殺すつもりなんだ。

「ひっ……」

必死に後ずさりして距離を取る。だけど、そんな抵抗も空しく、あつという間に壁際に追いやられてしまった。

かしやりと手に何かが触れた感じがした。見てみると、拳銃がそこに転がっていた。必死に手に取って、安全装置を解除してビーストに銃口を向ける。ビーストは馬鹿にしたように口元を歪めて見下ろしている。

「く、来るな……これ以上近付いたら撃つわよ……」

「はっ……。やってみろよ」

私の忠告も空しく、一笑に付されてしまった。米軍のアサルトライフルですら傷つけられない体に、ただの拳銃弾が効くはずもない。ビーストはそれが分かっているのだ。ビーストは目の前まで来ると、その大きな体で私を見下ろした。

「ッ……」

「……………」

失望したかのような、ひどく軽蔑した目だ。自分の期待に応えないペットを見るような、蔑んだもののように思える。

「あつ……」

拳銃を私の両手ごと無理やり引つ張り立ち上がらせると、そのまま自分の腹部へと突きつけた。どうやら撃てという事らしい。

……私にはそんな事できない。撃つと言つて脅したけど、あくまでも私自身の保身のためだ。実際に撃つだなんて、満足に生き物を殺したことのない私にできるはずがない。

「どうした？撃つんじゃないのか？」

「……嫌……」

「……何故だ？何故嫌がる……？お前のその英雄的な行為で、忌々しい殺人鬼を殺すことができるやもしれんのだぞ？何故それを拒む？」

ビーストが顔を近付けて私の両目を睨みつける。エメラルドの瞳は、悪意を湛えた瞳で私に殺せと言っているようだ。

「嫌……。止めて……。そんなことしたくないの……」

「何故だ……？お前たち人間が散々してきたことだろう……？それとも、人は殺せてもオレはやれないというのか……？……さあ、やれ……！撃てッ！！殺せエ!!!」

ピーストが叫ぶ。恐怖から強張った指先が、ピストルの引き金を引いた。パン。

乾いた銃声が部屋に響く。私はレンズに向かって引き金を引いたのだ。

「あ……」

一瞬のことだった。たったそれだけのことだった。かしゃんとピストルが地面に転がる。

火薬の臭いがする。ピーストは平然と何食わぬ顔で私を見下ろしている。……それを理解するのにそう時間はかからなかった。

……そうだ。この子は不死身なんだ。誰もこの子を傷つけることは出来ないんだ。私たちはこの子には勝てない。いかなる武器を以ってしても、この子には傷一つつけられない。そう理解した瞬間、私の中で何かが弾けた。

「はっ……。はははっ……。そっかあ……。私もここで死ぬんだあ……」

涙が溢れてくる。いろんな感情が洪水となって頭の中をぐちゃぐちゃにしていく。全身の力が抜けていくと同時に、絶望ともいえるような、悲しみのような感情が私を支配していった。

「あ……あああ……」

「……………」

そう思うとなんだか泣けてきた。

「……最後にもう一つだけ聞かせてちょうだい。どうして……どうして私たちが襲うの……？ どうして意味もなく私たちを殺して回るの……？」

「どうしてだと……？」

ピーストの顔から表情が消える。相変わらず見下してあることには変わらないけど、無表情で生氣のない顔が私の目の奥を睨んでいる。

「……お前たちを快く思わなかった奴らがいるのさ。オレはそいつらに造られただけの仮初の命だ。……カコ、そしてミライ……。恨むならそいつらを恨みな」

「え……？」

聞いてはいけない名前を聞いた気がした。カコ？ ミライ……？ その二人が私たちを排除するために……？

「ちよつと待つて！ まだ聞きたいことが……！」

「……お前に話すことはもうない。黙って死ね」

「あ……！」

視界に電撃のようなものが走る。痛みはなかった。徐々に意識が遠のいていく感じがする。腹部が血で濡れていくのが分かる。視線を向けた先には遠ざかっていくピーストの背中があるのみだ。

……私はここで死ぬ。親友だと思っていたミライが送ってきた刺客に殺されたんだ。初めから私は歓迎されていなかったという事だろうか。

……いいや、理由は分かっている。ミライが本当にしたかったこと…。

「ごめんなさい、ミライ…。私…何もできなかった…。私の母国はジャパリパークを穢した…。セルリウムも…」

後悔してもしきれない。無垢な命を誑かした私は地獄に落ちるだろう。そして、ここで永遠に償い続けるのだ。それこそが私に残された唯一の道であり、救いなのだ。

「……………」

視界が暗くなっていく。呼吸が浅くなり、体が重くなっていく。死というものを初めて実感する。楽しかったパークでの思い出…。すべてが紛い物であり、パークの獣たちを苦しめるための物だったと思うと、遣る瀬無い気持ちになる。一体…なんのために頑張ってきたのだろうか…。

ああ、眠い…。私の命はここで終わる…。地獄でサタンの責め苦にあうとしよう…。

R u i n — 9 「E k t h i k i s i」

『……んちゃん………ばんちゃん………』

「………はっ！」

「ねえ！かばんちゃんってば!!!」

ふと、サーバルちゃんの呼びかけに遠のいた意識を呼び戻された。どうやら長い間ボーっとしていたようだった。しかし、不思議な夢のようなものを見た気がした。……いや、あれは、明らかにただの夢ではない。あれは……恐らく、この工場の中で起きた過去の”記憶”なのだろう。理由は分からないけど、それだけは確かなような気がする。

「かばんちゃん！急いで逃げないと……！ネメアだよ……！」

「え……!?あ、ああ……。そうだね……。どうにかしないとだね……」

「……？」

なんだか不審そうな目でぼくを見つめている。あの夢を見たせいかな、なんだかネメアに親近感のようなものを感じてしまう。あの姿は、紛うことなきネメアのものであった。夢で見たネメアは、ライオンさんの体を乗っ取ったものではなく、神の時代にふさわし

い神獣ともいえるものだった。それに、射貫かれた筈の左目はエメラルドに輝いていた。アレが過去の出来事であったのは間違いないだろう。

サーバルちゃんの前に出て、手斧を片手にネメアとの戦闘に備える。ギンギツネさんは、改造したアサルトライフルを構えて今か今かとネメアの襲撃に備えている。

野太い叫び声と鈍い音がする。声から察するに、ネメアとアムールトラさんが戦っているようだ。

ガオン!!!

「ひっ……!」

突如、壁が大きく膨らんだ。急な出来事にサーバルちゃんが短い悲鳴を漏らす。部屋の壁が鈍い音と共にどンドン膨らんできている。

……嫌な予感がする。てっきり通路から現れると思っていたけど、これは……。

壁を打ち付ける音が大きくなってくる。ネメアのものと思われるケダモノのような唸る音がぼくたちの心を呑み込んでいく。

ひとしきり大きな音が二〜三度鳴ると、鉄の壁が打ち破かれると同時に二人の影が飛び込んできた。ネメアとアムールトラさんだ。

「ギイイイイイ……!」

「よくもあの時はオレの目をやってくれたなあ……!ただでは済まさんぞ……!」

憤怒の情に塗れたネメアの顔面がアムールトラさんを捉えている。まさしく、あの時に奪われた左目の恨みを晴らさんとしているようだ。

対するアムールトラさんはすでにポロポロだ。治りかけていた傷も開いてしまっている。血と傷で覆われた頭と四肢を見ていると、ぼくまでもがその痛みに疼いてしまいうさだ。

「まずはその目を抉ってやろうかア……！」

「やらせて……たまるか……！」

アムールトラさんの左目に突き出された黒い爪を必死に抑えて抵抗している。このままでは本当に目をやられかねない。どうにかして助け出さなければ……。

手斧を握ってネメアのうなじへと振りかざす。無駄だと分かっているけど、どうしてもやらない訳にはいかなかった。

柔らかい感触が手斧から伝ってくる。……やはり、ぼく程度の攻撃ではネメアに傷を入れることはできない。

ぼくの振り下ろした手斧は、なんということなくネメアの頭髮に阻まれてしまった。ネメアは手を緩めることなくアムールトラさんの左目へ手を伸ばしている。

「ぐわっ!!？」

突如放たれた衝撃波に、ぼくの体は後方に大きく飛ばされた。ネメアの思わぬ反撃を

為す術無く受けてしまう。壁に打ち付けられた衝撃にぼくの呼吸は麻痺してしまった。

「アツ…ハアツ…!」

「かばんちゃん!」

「ほう!こんなところに仲間がいたか!貴様を倒すのは後だアムールトラよ。まずはこいつらから始末するのでしょうか…」

「誰が…やらせるか…!」

麻痺した横隔膜を必死に動かして体内に酸素を取り入れる。ぼやける視界には、こちらに近付いてくるネメアの姿が見える。ぼくに手をかけるつもりだ。何とかして逃げなくてはならない。

「うみやみやみや!」

「ふん」

「うみや!」

金羊毛に包まれたサーバルちゃんが壁に押さえつけられた。頭だけ出したサーバルちゃんが何とか逃れようと必死に抵抗している。だけど、どういう力が働いているのか、壁に押さえつけられて逃れられないようである。

「しばらくそいつと戯れている。そして、こいつらがオレに殺される様を見ているんだな」

「つ……こ、このお……！」

必死にもがいて逃れようとするが、金羊毛がそれを許さない。焦れば焦るほど、拘束する力が強くなつていつているようだ。サーバルちゃんの顔もほとんど余裕がなくなつていつている。

やがてネメアはぼくの前に立つと、その大きな体でぼくを見下した。怒りにも嘲りにも見えるその顔は、獲物を捕らえた捕食者そのものように思えた。

「この間はよくもやってくれたな、人間。あの時、あの場所にいなかったのはお前だったな。お前がオレの左目を射止めたのだろうか？」

「ッ……！」

白く濁った左目がぼくを捉える。見えてはいないのだろうか、確実にぼくを眼中に捉えているのだけははっきりと分かる。

このままではぼくは殺される。それも、簡単には死なせないだろう。散々いたぶつて仕留めるのは目に見えている。その前に、どうにかして逃れなければ……。

「貴様だけは簡単には死なさんぞ……。生皮を剥いでじわじわと鬨り殺しにしてくれるわ……！」

「くっ……！」

ネメアがみるみると殺気を帯びていつている。体から溢れる黒いオーラはビースト

固有のものだろうか。肌を刺すような鋭い殺気がぼくの皮膚を刺激する。

「ガアアアアア……！」

「かばんちゃん、逃げて!!!」

「ぐっ……！」

「逃がすかよ……！」

「うわっ!?!」

振り返って逃げようとした道の先に、突如爆炎のようなものが弾けた。あまりもの出来事に思わず茫然としてしまう。視線をネメアに戻してみると、ネメアの右手に炎のようなものが纏われているのが確認できた。

混乱する頭で必死に状況を整理する。ネメアは、あの火炎弾のようなものでぼくをいたぶるらしい。サーバルちゃんは金羊毛のマントで縛られて身動きが取れないでいる。ギンギツネさんは必死に銃を構えて戦闘しようとしているけど、体が震えていてまともに戦えそうにない。

……万事休すか。ネメアはゆっくりこちらに向かって歩いてきている。せめて一矢、ネメアに報いてやるべきか……。ネメアとの間合いをしっかりと確認すると、手にしたナイフをネメアの喉に向けて鋭く突きあげた。

「間抜け……」

「ッ…!!」

まるで見透かされていたかのようだった。あろうことか、ネメアはナイフの刃を驚掴みにすると、そのまま握り潰してしまったのだ。

呆氣に取られて間もないまま、ネメアがぼくに語りかける。

「人間のやり方で殺りあおうか、人間？」

「え……」

瞬間、体に衝撃が加わると同時に、体が宙に浮く感じがした。

「ゴハッ…!!」

内臓が押し潰される感じがした。ネメアの拳がみぞおちに入ったのだ。

「アッ…ガッ…!!」

呼吸ができない。苦しみから視界がチカチカしている。

腹部を抑えて蹲っていると、目の前にネメアの足が見えた。ネメアはそれを確認するや否や、更にぼくを蹴り上げてきた。

「ぐうっ!!」

「簡単に死んでくれるなよ？人間…」

「はあ…！…ぐっ…!!」

迫りくるネメアを睨んで可能な限りの抵抗を模索する。どうすればネメアに抵抗で

きる？どうすればネメアに少しでもダメージを与えられる？……答えは分かっている。分かっているけどその方法以外を考えなくてはならない。唯一毛皮に覆われていない顔面以外の個所でダメージを与えられる方法を考えるんだ。

「くそっ……どうすれば……！」

ネメアの背後にちらりとギンギツネさんの姿が見える。どうやら、目の前に現れた圧倒的な暴力の化身に戦意を喪失しているようだ。手にしている改造アサルトライフルの銃口は下を向いて、小刻みに震えている。アムールトラさんは痛みに喘いだまま動けないでいる。

「ぎ、ギンギツネさん!!!撃って!!!」

「ッ……!!」

「……?」

バババババ!!!

「うああああああああああああああああああああああああああ!!!」

照準のロクに定まっていない銃弾が室内にばら撒かれる。床に転がる空薬莖の音、潰れた弾頭が床に転がる音、銃口から放たれるけたましい発砲音が室内に木霊する。

ふと、静かになった。どうやら一弾倉分の弾丸を撃ち切ったようだった。薄目で少し確認すると、茫然と立ち尽くすギンギツネさんの姿があった。ネメアは片腕で弱点を

覆って防衛している。やがて、攻撃が止んだと判断したのかゆつくりとその腕を降ろした。

「……それだけか？」

「あつ……」

標的をぼくからギンギツネさんに変えて、ゆつくりとその歩みをギンギツネさんへ向けていく。

「いや……来ないで……」

「ニイ……」

怯えた足取りでゆつくりと壁際まで下がっていく。やがて壁際まで追いやられると、小さく縮こまってしまった。

「つ……」

涙を滲ませて精一杯の抵抗を示す。あまりにも弱々しいものだけど、恐らく、誰もがあの状況に陥ってはそうしてしまうだろう。それほどの絶望的な状況なのだ。

ふと、視界の隅でアムールトラさんの体が起き上がるのが見えた。やはり傷が疼くのか、血塗られた体は小刻みに震えている。

黒いオーラが体から上っていく。アムールトラさんは二〜三度荒々しく息を吐くと、ネメアをその目で捉え、大きく飛びついていった。

ガラスを突き破り、製鉄場内へと落ちていく。アムールトラさんのケダモノのような叫び声とネメアの怒号が工場内に響く。二人の戦いが、今、再び始まったのだ。

………

ネメアの顔面を殴打する。骨と肉を砕くようなぐちゃりとした感覚が拳を伝つてくる。

ガシッ！

「ぐっ……！」

「まだオレを殴れるだけの元気が残ってたようだな……！ 褒めてやるぞビースト……！」
ネメアは状態を勢いよく起こすと、そのままあたしに頭突きを食らわせた。

ガッ！

「ぐうっ……！」

視界が白黒するような感覚を覚える。鈍い痛みが額から頭の中へ広がっていく。なんとか眩暈と痛みをこらえてネメアを視界へ捉えようと、間隙なく裏拳があたしを打ち付けた。

「ガアっ……！」

「興が乗ったぞ、ピーストよ。オレと死合おうではないか！きあ、ショータイムだ！」
ゴウンと大きな音が鳴ったと思うと、工場内に眩いばかりの明かりが灯った。頭の中が揺れんばかりの熱気と轟音が辺りを支配する。工場が稼働したのだ。

「ズアツ!!!」

「ギツ……!」

ネメアの爪があたしを斬りつける。咄嗟に腕を構えて防御するけど、肉を断つその爪は容赦なくあたしの腕を抉ってくる。

鮮血が地面を濡らす。幾度となくネメアと対峙して、そのどれもが勝てずにいる。今までの戦闘はどれも、機転を利かせて強制的に逃れていただけに過ぎない。四方を鉄の壁に囲まれたこの場において、果たしてあたしたちは逃げる事はできるのだろうか。せめて、かばんやギンギツネ達だけでも逃がさなくてはならない。外にいてもえたちも心配ではあるけど、この場に来ない限りは逃げれるだろう。少しでも逃げれるだけの時間を稼がなくては…。

「ダアアツツ!!!」

力いっぱい爪を振るう。しかし、ネメアには傷一つつかない。ネメアも本気を出しているのか、慢心を捨て、攻撃の入る隙を見せないでいる。あたしの振るった爪を的確に防いで、急所に入らないようにしているのだ。

ブオンとネメアの爪が空を斬る。ビリビリと走る爪圧はそれだけでもあたしの肌を切り裂きそうだ。

「ぐあっ!？」

突如目の前が真っ暗になった。何かがあたしの肌に纏わりついている。妙に肌触りの良いすべすべとした感触が何とも気持ちが悪い。

「はっ!このまま殴り殺してやろうか!？」

「ツ……!!!」

一撃、二撃とネメアの拳があたしに入ってくる。動きが封じられているせいで、ロクに受け身を取ることもできない。

恐らくこれは、ネメアの羽織っている金羊毛なのだろう。それが、あたしの体に纏わりついて邪魔しているんだ。

……息が苦しくなってきた。外界との接触が断たれているせいか、うまく呼吸ができない。

「ぐっ……!?!貴様ツ……!まだオレに抗うかア!!!」

「っ……!?!」

不意にネメアの攻撃が止むと同時に、怒鳴り声が聞こえた。不意に訪れた自由と共に金羊毛を脱ぎ捨てる。そこには、ネメアと渡り合うサーバルの姿があった。

「よかった……自由になったみたいだね……！任せたよ！アムールトラ！」
「ギイ……！た、ア、ツ……！」

自らを奮い立たせてネメアに飛びつく。サーバルに気を取られていたせいか、ネメアの反応は少し遅れたようだった。

「小賢しい虫ケラ共がつ……！」

やや姿勢が揺らいでいるのが分かる。……どんな僅かな隙も逃さない。一瞬だけでも、僅かにできた隙を突いて攻撃するんだ。

「ツ……！」

左頬に拳を叩きこむ。怯んだネメアの顔面に間髪なく追撃を加える。右へ、左へと拳を叩きこんでいく。口から飛沫のようなものが飛んでいるのが分かる。確実にネメアにダメージが入っているんだ。

「くらえつ……！」

左頬に痛恨の一撃が入った。ネメアの体が大きく怯む。
ジャツ！

左手の爪から赤黒い尾が伸びる。ネメアの右頬に4本の筋が刻まれている。ゾクゾクとした高揚感のようなものが内から湧き上がってくる。

再びネメアを射程内に収める。ネメアの襟首を引くと、首を後ろに振って会心の頭突

きを食らわせた。たまらずネメアも膝をついてダウンする。

油断してはならない。姿勢を低く構えてネメアの次の一撃に備える。今ここで追撃を行つては却つて返り討ちに合うだろう。それだけは避けねばならない。

ふと、二つの回転している大きなローラーが目に入った。恐らくは、熱した鉄を延ばすための機械だろう。…これだ。これにネメアの奴を巻き込んで潰せれば…。

「ギッ……」

痛みにもがくネメアの膝を折つて更に顔面を打つ。抵抗が弱くなって来たところで、二つのローラーのところへとネメアを引つ張て行く。僅かに抵抗する爪があたしの腕を傷つけるけど、そんなのは些細なことだ。

ネメアの襟首を掴み上げる。ネメアも何をされるか分かつたようだった。だが、もう遅い。ネメアをローラーの前に立たせると、そのまま頭から延厚機の中に放り込んだ。

「はあ……はあ……」

息も絶え絶えに延厚機を見遣る。

……延厚機は異物を認めたように止まつている。必死にネメアを押し潰そうとして
いるけど、どうにもできないようだった。

あまりもの出来事に茫然としてしまう。やっぱり、無敵の体を持つ怪物は殺すことが
できないのか

…。そう思わざるを得なかった。

「……………」

ゆつくりとネメアが延圧機を押し上げていく。ローラーに巻き込まれた体の一部をゆつくりと解放しているようだ。

ふらりとネメアが延圧機の前に立つ。その姿は、まるで魂の抜けた抜け殻のようだ。力なく両腕をぶら下げるネメアが何か呟いている。

「二度ならぬ二度までもオレを追い詰めるとはな…」

ぼそりとネメアが呟く。その言葉に感情はない。だが、言葉の裏には静かな怒りの炎がゆらりと燃えているようにも思えた。

ゴウト、体に衝撃のようなものを感じた。この感じ…。この感じを、あたしはよく知っている…。あたし自身が散々やって来た事だ。相手を威圧するために、内に秘める負の感情をオーラとしてぶつけるんだ。それをこいつは…。

「キツ……！」

「ツ……!!」

エメラルドの瞳があたしを捉える。瞬間、あたしの体は鉄柵へと向かって吹き飛ばされてしまった。

「ガア……！」

鉄柵の支柱があたしの背中を抉る。僅かに見える視界の中、ネメアがあたしの懐に飛び込んでくるのが見えた。……あんなものを食らっては、ただでは済まないのは目に見えている。

体を横に反らして攻撃を回避する。スレッジハンマーのように勢い良く振り下ろされたネメアの両腕が鉄柵を破壊する。

バキッ！

先の尖ったアームを手にする、ネメアは不気味な笑顔を見せながら、あたしへとにじり寄ってきた。……間違いなく、あれであたしを突き刺す気だ。……そんなことさせない。させてたまるか……！

ブンブンと空を裂く音があたしを威圧する。振るわれるアームの動きはガムシヤラでまるで動きが読めない。アレに当たったが最後、よろめいたところを心臓を突き刺されて死んでしまうだろう。そうされないためにも、どうかしてアレを無力化しなければならぬ。

ガシッ！

「っ……！」

鉄棒を掴んでブイの字に折る。こうなっては使い物にならないだろう。しかし、ネメアは使い物にならないと判断するや否や、さっさと手放してあたしに掴みかかってき

た。

「ぐっ……！」

ネメアの爪と拳があたしに降りそそぐ。無敵の体を活かした、反撃を厭わない圧倒的な攻めの姿勢に思わずたじろいでしまう。

工場は大きな音を立てて赤い鉄の塊を運んでいる。頭上の大きな釜からは赤く煮える溶鉄が溢れている。

…体中から汗が噴き出てくる。工場が稼働したことにより、工場内の温度が上がっているのだ。口の中が渴いてくる。暑さから視界が歪んでくる。吐く息は熱く、汗が目に入りロクに前が見えない。

対するネメアは、まったく姿勢を崩さず泰然とした様子であたしににじり寄ってきている。

「フン」

「ぐっ……!?!」

金羊毛が体に纏わりつく。刹那、体殴られたような衝撃と共に、体が後方へと吹き飛ばされた。胃の中が押し上げられるような不快な感覚を覚える。

不意に視界が開けた。ただならぬ気配に見上げてみると、赤く熱せられた鉄棒を片手に持つネメアの姿があった。

……これからネメアが何をするかは目に見えている。アレであたしをいたぶる気だ。
「そおら、くらいなア!!」

ガアン!!

赤い火花が飛び散る。衝撃からぐにやりと赤い鉄棒が捻じ曲げられる。……あんなもの、ヘタに受け止めてしまえば、大やけどすること間違いなしだ。何が何でも避けねばならない。

ブン！ブン！

……くそっ……。どうすればいい……！ネメアは陽炎の上り立つ鉄棒を構えながら、気色の悪い笑みを浮かべている。どんなに鉄棒が捻じ曲がっても、少し折り曲げるだけですぐに元に戻ってしまう。

奴は溶岩に沈んでも何食わぬ顔で戻ってきたのだ。1000度以上に熱せられた鉄など、ネメアには何てことないのだろう。赤く熱せられた鉄を構える手から煙が上ることがなければ、肉の焼ける臭いもしないのだ。つくづく恐ろしい化物だ。

ふと、ネメアが左手をあたしに向けて伸ばすような構えを取った。……一体、何をしてくるというのか……。

ゴウンゴウンと工場の唸る音が響いている。暑さのせいで集中力が持たない。頭の軋むような頭痛がする。今にも倒れてしまいそうだ。

揺らぎ遠のく意識の中、ネメアの左手に赤い渦のようなモノが見えた気がした。

気付いたときには、無意識に顔の前で腕を交差させていた。両腕の焼けるような感じがする。ネメアは、信じられないことに左手から火炎弾のようなものをあたしに放ったのだ。

「ダアアアアアアアアッ!!!」

「!!」

僅かな一瞬の間に、ネメアが頭上からあたしに向かって鉄棒を振り下ろしてきた。……これは避けられない。…受け止めるしかない……!

ズンツ!!!

「ぎいいいいいい……!」

両手の焼ける鋭い痛みがあたしを襲う。まるで両の手が沸騰しているようだ。ネメアは顔を歪ませてあたしの反応を愉しんでいるようにも思える。

ここで痛みを負けて腕を引いては、もつと酷い目に遭うだろう。それに、ネメアは簡単にあたしを死なせないはずだ。アレはそういう生き物なのだ。散々いたぶって、皆に見せしめにした後にあたしを殺すはずだ。火山であたしにした仕打ちを思い出す限り、そうするとしか思えない。

痛みに腕が痙攣してくる。視界が霞んで意識が朦朧とする。……このままあたしは

……ネメアが何かしようとしている。事が大きくなる前に、どうかして止めなければ……。

だけど、戦いは突然終わりを迎えた。

「ネメア!!!」

突如、戦いは終わりを告げた。血と熱と殺戮に塗れた戦場にはとても場違いともいえる声が突如響いたのだ。

「ミライ……!? ミライか!? どこだ!!! どこに……いるんだミライ!!!」

ネメアの様子がおかしい。さっきまでの戦闘衝動はどこへ行ったのか、目に見えて焦っているように見える。

「ミライ!!! 返事をしろミライ!!! オレは……ここだぞオ!!!」

ネメアが何かを求めようと叫ぶ。目の前のことが理解できずに呆然としてしまう。ネメアは完全に戦闘を放棄している。戦意も殺意も感じ取れない。ただひたすらに、何かを必死に求めているように叫んでいる。

「アムールトラさん……こっちだ!!!」

「!!」

かばんがあたしを呼ぶ。どうやら撤退するようだった。

急いで戦闘から離脱する。ネメアは尚もミライを求めて叫んでいる。

ネメアとミライ……。いったい二人の間に何の関係があるのだろうか。如何ともしがたいもやもやを胸にこの場を後にした。

.....

「アムちゃん!!!良かった……！無事だったんだね……！」

「つつ……。ともえ……痛い……」

「ご、ごめん……。でも、良かったよ……。本当に心配だったんだよ……！」

「……ごめん。心配かけた……」

血で汚れる事も厭わずにともえがあたしに抱きつく。傷口が開くようで痛かったけど、ともえが本気で心配してくれてるようで少し嬉しかった。

「再会を喜ぶのは後だ!!!急いでこの場から逃げるよ!!!」

「う、うん！お願い、かばんさん！」

かばんがエンジンを始動させようとキーを回す。だけど、いつこうにエンジンのかかる様子はなく、ただキュルキュルと点火プラグが鳴るのみだ。かばんの姿に焦りの色が見えてくる。

「くそっ！なんでこういう時に……！」

かばんの口から焦りの言葉が漏れる。その時、背後にぞくりとする気配を感じた。ネメアだ。

後ろを振り向くと、怒りに顔を歪ませたネメアの姿があった。そのオーラから、ただならぬ怒りを感じることが出来る。

「貴様ら……。ミライをどこへやった……！」

「ミライさんだつて……？ そんなの知るもんか……！ ぼくだつて知りたいくらいだ……！」

「何を……。オレを愚弄するようであれば容赦はせんぞ……！」

「くっ……！」

ネメアを近付けさせまいと前に立ち塞ぐ。だけど、そんな抵抗も空しく一蹴されてしまった。

バチッ！

「ぎあッ……！」

「アムちゃん……！！」

体に電流が走る。全身の傷口に焼き……てを当てられたようにひどくジクジクと痛む。

「答えろ、かばん……！」

「ぐっ……！」

低くドスの効いた声でかばんを凄んでいる。あたしたちだつてミライを探している

のに知る訳がないのだ。なのに、それを知らないネメアは知りもしないミライの所在を聞いてきている。これではどうしようもない。

「……いいだろう。答えないというのなら、そいつを頂いて行こうか…」

「なっ…!!？」

ネメアから妙な言葉が聞こえた。そいつを頂いていくだって…？

「止めろ!!! その子は何の関係もない!!!」

「お前らが隠すというのなら、オレもこいつを人質に取るまでよ。お前らが教えるというのなら、すぐにでも返してやるぞ？」

「デタラメな……！」

ネメアとかばんが何やら揉み合っている。痛みに悶えるあたしは、首を起こすだけでも精一杯だ。

何とか首を起こして見てみると、ロードランナーに近づくネメアの姿があった。頂いていくというのはロードランナーをもらっていくという事なのか…？

「ゴマちゃん！逃げて!!!」

「っ……！」

「逃がすかよ……」

「ッ……!!!」

ロードランナーが金羊毛に包まれてしまった。……取り返さなくては……。あたしの友達を拉致するだなんて……させない……命に代えてでも……刺し違えてでも助けてやる……!

バチツ!

「ギツ……!」

再び体に電流が流れる。全身が麻痺して動けなくなってしまう。……このままでは目の前でロードランナーがさらわれてしまう。

……体が動かない。……止めてくれ……。どうか、どうかあたしの友達を許してくれ。後生のお願いだ……。どうか……。

「嫌だ……。来るな……」

絞り出すような声で懇願している。目の前にいるのに助けてやれない悔しさと、非力で惨めな自分に涙が溢れてくる。ネメアがロードランナーに近付いていく。あたしはただ黙ってその様子を見ることしかできないのか。

「あばよ。教える気になつたらオレの元へ訪ねるといい。そうしたらお仲間を返してやるよ」

「嫌だ!!! 放せ!!! うわああああああ!!! アム!!! ともえええええ!!! うわああああああああああ!!!」

「ああああ……！」

ロードランナーの姿が遠くなっていく。目の前の出来事に視界が暗くなるような錯覚を覚える。ロードランナーが…攫われてしまった。

「あ……ああああああ……！」

あたしは大切な友人を救えなかった。その事実だけがあたしに重く押し掛かってくる。

目の前が真っ暗になる。崩れる体に身を任せて、あたしは声をあげて泣いた。

Ruin—10「Parricide」

「クソツ!!」

樹木にアムちゃんが拳を打ち付けて八つ当たりしている。かばんさんやあたしたちは何の言葉もかけられないでいた。アムちゃんのせいじゃないのは分かっている。でも、あたしたちではどうすることもできなかつたんだ。あたしたちがミライさんの音声を流したことで、ネメアの逆鱗に触れてしまった。言うなれば、あたしたちが悪いんだ。アムちゃんは何も悪くないんだ。

「ロードランナーツ……!」

「アムちゃん……」

「ああああ……あたしのせいだ……!」

アムちゃんが樹皮にガツガツと頭を打ち付けて自傷している。時折り聞こえる嗚咽のような声は悔しさからくるものか、それとも悲しさから来るものなのか……。恐らくは両方だろう。アムちゃんの感じる悔しさは、あたしたちではおおよそ計れるものではないだろう。

「アムちゃん……。アムちゃんのせいじゃないよ……。あれは……どうしようもなかつたんだ

よ……」

「なんだと…!?!」

「っ……!」

アムちゃんの怒りを湛えた眼光があたしを捉える。アムちゃんはあたしの襟首を掴み上げると、怒鳴るように怒りをぶつけてきた。

「じゃあ一体誰のせいだというんだ!?! あたしじゃなければ誰がアイツを救えたというんだ!?! お前たち非力なフレンズが救えたというのか!?! 答えろ!!!」

「ッ……!」

「アムールトラさん……!」

「ッ……!……ごめん……」

イエイ又ちゃんの呼びかけに我に返ったアムちゃんがあたしを手放した。自分がしたことに罪悪感を感じたのか、少し委縮したような顔をするそのまま伏せてしまった。

「……ごめん……。一人にしてほしい……」

「……わかった……。こっちこそ……ごめん……」

ゴマちゃんをネメアに攫われたダメージは想像以上に大きいものだった。…ネメアはミライさんの居場所を知りたがっていた。生きてるかすら分からないミライさんの

事なんてどうやって教えろって言うのだろうか…。あたしたちは、ライオンさんもそうだけど、ミライさんを探しにこのエリアにやって来たんだ。何も知らないあたしたちに、ミライさんの事なんて教えられるわけがないんだ。

「しばらくそつとしておきましょう。…わたし達がこの一件で負ったダメージはあまりにも大きいんです。かばんさんもアムールトラさんと同じく、ひどく打ちのめされてしまっています。……わたしたちにはどうすることもできません。時間が解決してくれるのを祈るのみです…」

「…そう…だね…」

どうやら、へたな慰めは却って傷を深めるだけのようだった。イエイ又ちゃんの言う通り、あたしたちの負ったダメージはかなり大きいようだった。あたしのアムちゃんへかけた気遣いも、アムちゃんの傷を抉るだけだった。

この一件で、あたしたちの繋がりは瓦解する一歩手前まで来てしまったかもしれない。そう思うとすぐく怖かった。……時間が解決してくれるのを祈るしかないのだろうか。

夜も深い。ひとまず、今日は眠るとしよう。

………

「うわあ！」

ガシャン！

「しばらくそこにいるといい。なに、悪いようにはしないさ」

「このお……」

ネメアに誘拐された私は、ホツカイエリアの中心部にある管理センターの独房に入れられていた。いったい私は何をされるのか……。目の前にいる暴力の化身の前に、私は一人の哀れなスケープゴートにしか過ぎない。

ともえたちは大丈夫だろうか。私が攫われた時のアムの顔が忘れられない。私が非力なばかりにアムの心をひどく傷つけてしまったと思うと、胸が張り裂けそうになる。

ネメアはドカツと椅子に腰を下ろすと、私に興味も示さない様子でまぶたを閉じた。どうやらそのまま眠る気らしい。敵の目の前だというのに舐められたものだと思う。

一方の攫われた私はというと、ともえたちから引き離された不安と、これから何をされるかという恐怖で心がいっぱいだ。せめて、ネメアの胸の内でも聞き出さなければ不安と焦燥で押し潰されかねない。

「てめえ！ どういうつもりだってんだ！ 私を攫ってどうするつもりだ！」

「別に？ どうするつもりもないさ。別にお前を殺してもいいが、そうしてはオレが困る

ただだ。オレはただ、ミライ…。オレの生んだ奴の行方をを知りたいだけだ…」

「ミライの…?」

ふとネメアの見せた感傷的な顔にドキツとしてしまう。ネメアの生みの親と言ったか?ミライは私たちも探している所ではあるけど、ヘタに口にしてはネメアの逆鱗に触れかねない。どうにかしてネメアから情報を引き出す必要がある。けど、どうすればいい?これはネメアの秘密に迫るチャンスでもある。生きて帰るためにも、ネメアを追い詰めるためにも一つでも多くの情報を引き出さねば…。

「どうしてミライを探しているんだ…?」

「お前は知らなくてもいい。オレはミライを探している…。ただそれだけだ」

「……わかんねえ…。私は、お前が何かひどくミライに固執しているように見えた。かばんは、自分以外のヒトを探すためにミライを求めていた。それは一種の探求心といつてもいい。けど、お前は違う。お前のミライに求めているものは、かばんとは根底から違っているみたいだ…。執着っていうか、なんていうか…。殺戮と破壊に塗れていたお前が、こうして私を人質に取ってまでミライに固執するなんて、何かあるんじゃないかと思えねえよ…」

「……………」

ネメアが黙り込む。どうやら意表を突けたようだ。今まで見てきたような気色の悪

い笑みからは、想像もつかないようなアンニュイな様子を見せている。

「……オレは、ミライによって造られた紛い物の存在だ……。オレは、俺を造った人間を憎んでいる……。オレは、復讐してやるんだ……。全てをぶつ壊して、これがお前らの望んだ世界だと見せつけてやるんだ……」

「……………」

ネメアは静かに語った。ネメアの口には、何か迷いがあるように思えた。復讐するためにミライを探している……。果たして本当にそうなのか、どうしても疑問に思わずにはいられなかった。

「そうかよ……」

ひとまずはそういう事におこう。それが私の身の安全の為でもある。ネメアは何か特別な目的の為にミライを探している……。それが知れただけでも大した成果だろう。そう思うようにしておこう。

「……………」

ネメアが寝息を立てている。どうやら眠りについたようだった。あんな化け物でも睡眠が必要とは、ネメアも生物の一種なんだと思ってしまう。なんだか私も眠い。次起きた時にはどうなっているのだろうか。怖いような気もするけど、なんだか好奇心を駆り立てられてしまう。ともえたちは助けに来てくれるのだろうか。微睡みの空想の中

に私はそう思いながら沈んでいった。

.....

「起きろ、ロードランナー」

「.....へあつ!?」

突如感じた、ネメアのただならぬ威圧感に目を覚ました。見ると、私の頭上にはエメラルドに輝く瞳がギラギラと輝いていた。それとは対照的に鈍く白く光る左目もなんと不気味だ。

「行くぞ、ゴコクエリアに行く」

「ゴコクエリア：？何だってそんなところに…」

「オレの祖父^{おじうえ}上がそこにいる。これからそいつを殺りに行く」

「なっ：?!?い、嫌だぞ!!私に行かぬえ!!!」

「お前は見ているだけでいい。最前席で最高のショーが見られるんだ。行かない理由などあるまい」

「い、嫌だ!!!放せ!!!」

ネメアは有無も言わず私の襟首を掴むと、引きずりながら私を独房から連れ出し

た。私の意思もどこへやら、ずんずんと私を引きずりながら歩いていく。

「感じるぞ、祖父上おじょうえ……。今、このオレが殺しに行つてやるぞ……！」

「ッ……」

ビリビリと肌を刺すような殺気がネメアから放たれる。

初めてアムに遭遇したときのことを思い出す。あの時のアムからも似たような殺気を感じたつけ……。何かに怯えて、怒つていて……。自分に害をなすであろう敵をひたすら倒していたビースト……。それを今、私は感じている。……まさか、こいつもアムと同じ類なのか……？

……

「お前は……？」

「久しぶりだなア、祖父上おじょうえよ」

眼前の蒼いたてがみのフレレンズを睨む。嫌味を込めた言葉を吐きながら、ネメアはそのフレレンズに歩み寄っていく。

敵対するフレレンズの鋭い眼光がネメアを貫く。その者の名は、ネメアの祖父でもあり、ゼウスと並ぶ実力を持つオリンポス十二神が一柱、ポセイドンだ。私たちフレレンズ

に組しながらも、かつて私たちと渡り合ったように、その威厳を以ってネメアと対峙している。かばんは、ポセイドンのことを神といていた。果たしてネメアに勝てるのだろうか。

僅かな希望が私を苦しめる。ポセイドンには勝つて欲しいと願うけど、どこかポセイドンに不安を抱く私もいる。もしかしたら勝てないのではないかと、心のどこかで思っているのだ。

軽蔑したようにネメアが歩みを進める。その言葉には、心底失望したような、哀れみすら込められたネメアの思いが吐き出されるようだった。

「随分と落ちぶれたものだな、祖父上。貴様の弟君は、あれほど人間というものを嫌っていたというのに、その人間に組し胡坐をかくとは……。ゼウスが今の貴様の墮落した姿を見ては、さぞや悲しもうなア……」

「……お前には関係ないはずだ、ネメア」
「オレには関係ないと？ハッ！」

ポセイドンの言葉にネメアが嘲笑する。ポセイドンの言葉にネメアが戦闘意欲を見せると、すぐさまポセイドンを挑発し始めた。

「面白いことを言うではないかヒツポカンポスよ！体を馬に変えられて頭の中までも馬になってしまったか!?かつて神であった貴様がこんなチンケな島に留まってどうする

「……それ以上愚弄するようであれば容赦はせんぞ……ネメアッ!!」
「オレと殺り合う気か!? 面白いッ! 貴様のような年老いた牝馬がどこまでオレを追い詰めるか楽しみだ!!! さあ、死合おうかア!!!」

……………

ブシャア!!!

ポセイドンが大地を穿つ水の弾丸をネメアに放つ。しかし、ネメアはまったくの意に介せずじわじわと距離を詰めている。ポセイドンの攻撃が通用しないと慢心しているのか、まるで弄ぶようにゆっくりと近付いていつている。

「くっ……。ならば……!」

驕るネメアに渾身の力を込めて攻撃する。しかし、ネメアは飄々と攻撃を受け流すだけで、ポセイドンの攻撃などまったく意に介さない様子だ。事実、体は少し濡れるだけで傷の一つも付いていない。特に苦しむ様子もなく、不気味な笑みを浮かべながら少しずつ彼女との距離を詰めていく。

「どうした祖父上、神ともあろう者がその程度の実力ではあるまい。もつとオレを追い詰めてみせろ！プロメテウスが愛した人間でもオレの左目を奪ってみせたぞ。それとも、オリンポス十二神ともあろう者がその程度なのか!？」

「ぐっ…おのれッ…!」

金羊毛を使うこともなく、ポセイドンとの距離を詰めていく。さすがのポセイドンも攻撃が通用しないと理解したのか、攻撃の手を緩めて距離を取ることに専念し始めた。

「どうした!?!その程度か祖父上よ!!!」

「おのれ…!忌々しい力を手にしたものよなあ!テュポンの息子よ!!!」

「ハッ!!!これも貴様の選んだ道の果てよ!ポセイドンッ!!!」

ネメアは金羊毛を翻したと思うと、突如、肌をも切り裂くかのような突風が吹き始めた。ネメアを中心に竜巻が吹き荒れる。眩い閃光と立ち込める暗雲にゴクエリアが包まれていく。これがネメアの持つ力なのだろうか。それとも、ネメアの持つ金羊毛の持つ力なのだろうか。

「ぐっ…!ただが獅子一匹の持つ力ではないな…!貴様…!一体何をした…!」

「オレはテューポーンの血を引く怪物だ…!この程度の所作などどうでもない…!さあ、大人しく跪け!オレに命乞いをするんだな!」

更にネメアが挑発する。怒りに駆られるポセイドンはそんな挑発に乗るはずもなく、

ネメアに抵抗する姿勢を示している。

「誰が貴様なんかに……私はオリンポスの神だツ!! 貴様のような怪物の息子などに負けるはずがないのだツ!!」

「良い心構えだヒツポカンポスよ! オレがそのような矮小なプライドなど、木端微塵に砕いてみせよう! このオレが力の差というものを見せつけてやる! 覚悟しろツツ!!」

それは、絶望と呼ぶにはあまりにも大き過ぎた。暗雲と暴風がゴコクエリアを包み込む。バケツをひっくり返したような大雨が私たちを打ち付ける。テューポーンの力を手にしたネメアがゴコクエリアを呑み込んでいつている。空が大海を荒らし、大地を呑み込んでいく。天をも揺るがす圧倒的な力、それ程の絶対的な力が目の前に現れていた。

「あ……あああ……」

あまりもの出来事に思わずへたり込んでしまう。とても現実を起こっている事とは思えなかつた。私たちはあんな怪物と戦っていたのか……? そう思うと目の前が真っ暗になるようだった。

「天よ、地よ、そしてエトナの地に眠る我が父よ、かの敵を打ち倒すため、今こそ目覚めよ……。あなたの声に天は揺らぎ、星々は恐れ、山々は恐怖に震えるだろう……。今、あなたの想いは叶えられん……。神々に滅ぼされた全ての恩讐が、あなたと共にあらん……!」

「ぐっ……」

風は勢いを増していく。ネメアの呼び声に応えるように、空は鳴き、雷鳴を轟かせる。
「さあ、今こそ復讐の時だ……タイタンの力を、思い知れッ!!」

ネメアがポセイドンに喝を飛ばす。瞬間、空がドンと轟音を響かせた。

雲より遙か空の果て、そこに巨人の姿を見た。黒い岩石のような黒化した頭、赤く燃え滾る双眸の眼、そして、空を覆わんばかりの圧倒的な姿……。アレが……ネメアの言うテューポーンなのか……?

「あ……」

「まさか……本当に……テユ……テューポーン……。まさか……このような……」

ポセイドンが私と同じく、その姿に絶句している。私にはどういふ存在かわからないけど、ポセイドンの反応から察するに、恐らく相對してはいけない相手ということだけは分かる。

「くっ……負けてはならん……ならぬのだ……オリンポスを、アトランティスを、そしてゴクエリアを守護する神として、決して負けるわけにはいかぬのだッ!!」

ポセイドンが海水を纏って巨人の姿を形作る。私たちがポセイドンと戦った時に見せた、あの水の巨人だ。

「私もただでは倒れんぞ……せめて、貴様らタイタンに一泡吹かせてくれるわアッ!!」

ネメアの召喚したテューポーンは、何てこともなくポセイドンの水流を押し返して潰してしまつたのだ。テューポーンの拳に潰されたポセイドンはもはや立ち上がることにできないでいた。

「所詮、神もこの程度か……。がっかりだぞ祖父上……。貴様はオレを昂らせるだけで満足させることもできなかった……。さあ、我が祖父上よ、いよいよ死ぬ時だ……。何か言い残すことはあるか？」

「う……。あああ……」

「ふん……。語る口すら持たないか……。惨めなものだ……。オリンポス十二神というものも大したものではなかったな」

「ぐっ……。はア……。くそオ……。神でも怪物でもない獣畜生に二度も倒されるとは……。私も落ちたものだ……。ウラノスもクロノスも、このようにして自身の子にやられたというのか……。!!やはり、支配者というものはこうして葬られるものなのか……。：悔しいが認めねばなるまい……。さあ、一思いにやるといい。私の命はお前の手の上にある……」

「ハッ……。そうか……。なら、望み通り殺してやろうか……!」

ネメアはそう言うのと、ポセイドンの背中を踏みつけて呪いをかけるかのようにはいた。た。

「だが、ただでは死なさん……。貴様のオリンポスの神としての力は、オレのモノになるの

だ……！」

「なっ……!?! 貴様……！」

背中を踏みつけ、ポセイドンの首を鷲掴みにすると、ネメアは力のままにポセイドンの首を引つ張り上げた。

「う、ッ……!?! あ、あ、あ、あ……!?!」

思わず目を背けてしまった。メキメキと音を立てて……ポセイドンの呻き声が止んだ。

ちらりとネメアの方を見てみる。首のないポセイドンの亡骸が一つ。血まみれのネメアが一人。その手には、苦しみに歪んだポセイドンの生首が無造作に握られていた。

「呆気ないものだな、祖父上……。……そうだな、こいつももらつていくか」

そういつて、どこからか、かつてポセイドンが使っていた歪な形のトライデントを取り出した。ポセイドンの絶対的な力の象徴であり、ポセイドンの持つ力を最大限に引き出す神器の一つだ。

「オレはテューポーンの息子でもあるが、同時にお前の血も引き継いでいる。これくらい使うこなすなど造作もないものよ」

バチバチと槍から青い稲妻が迸る。怪物テューポーンを使役し、ポセイドンの力をも手にしたネメア……。いよいよ手を付けられなくなってきたようだ。

「……他にまだいたか。キマイラ……。いるのだろうか? 出てくるといい。久々に話そうでは

ないか」

「ッ……！」

ネメアが呼び掛けた方に目を向けると、一人のフレンズがいた。かつて私たちと一緒に戦った、トラツグミだ。

「久々だな、キマイラ。何やら逞しくなったようだな。あの時の臆病風に吹かれた弱虫はどこへ行った？」

「そんな……。……本当に、私の弟なのか……？」

……何の話をしているんだ？ 弟？ こいつらは兄弟なのか？

「いかにも貴様の弟だ。オレのあまりもの変わりように驚いたか？」

「……私の知ってる獅子はもつと正義感に溢れていて、無益な殺生を好まない気高い戦士だった。なのに、お前は……」

「オレの知っているキマイラは親にも見放される弱虫だったはずだが？ それがどうしてまあ、こんなところで祖父上と隠遁しているのか……。いつの間にオリンポスの神と肩を並べるようになったのだ？ 自身が偉くなったと勘違いしているのではないか？」

ネメアがトラツグミを挑発している。仮にも兄弟であるのなら、こんなにギスギスした会話があるだろうか。

「勘違いなどしているつもりはない……。私は自分の居場所を見つけ、そこで皆と静かに

暮らしたいだけなんだ……。紆余曲折を経て、我が祖父……ポセイドンと暮らすことになつた……。それを……それをお前は……！なぜ自分の家内を殺せるんだ……！」

「子が親を殺すのは当然の事であろう？ゼウスはクロノスを殺し、クロノスはウラノスを殺した。人の子であるペルセウスでさえ父君であるアルゴス王を殺した！子が親を葬るとは世の常なのだ、キマイラ……」

「そんな……間違つてる……」

トラツグミはワナワナとした様子でネメアの言葉を必死に拒否している。子が親を殺すなど……。ネメアはそんな異常を当然のことだと肯定している。トラツグミは実の弟に嘲笑されながらそれを論されているのだ。

「なにが……なにが貴方をそんなに変えたんだ……。私は……信じられない……」

「さあ……？何だろうな……？そんなこと考えたこともなかったぞ？」

「ツ……!!」

トラツグミは顔を強張らせると、怒りとも絶望ともいえる鋭い眼差しをネメアに向けた。

「お前は……お前は私の知る獅子なんかではない!!!私の知る獅子はもつと穏やかで気高い戦士だった!!!これ以上私の家族を騙るといふのなら容赦はせんぞ！獅子よ!!!」

「ハッ！愚かな……」

蒼い稲妻がトラツグミを焼く。鋭い痛みにも襲われたトラツグミはそのまま倒れてしまった。

「ぐあつ！グつ……なぜだ……！どうして……！」

「考えるだけムダだ。神々の世から人の世に変わったように、オレたちも変わっていくんだ。それが受け入れられんというのなら、そうやって嘆き苦しむといい。……行くぞ、ロードランナー。この島にもう用はない。こんな島とはさっさとサヨナラだ」

襟首を掴まれてホツカイエリアへと戻っていく。後には、首のないポセイドンの亡骸と、地面に伏せ涙するトラツグミの姿だけがあった。変わり果てた弟の姿を見て悲しんだか、それが受け入れられない自身の弱さに涙したか。それは誰にも分からない。

ネメアの顔に笑みはなかった。ここに来た目的であるポセイドンはネメアによつて殺された。そして、自身の兄というトラツグミとも決別した。

自ら振り払った手をネメアはどう思うのだろうか。果たしたはずの目的に満足できないままネメアは去るのか。泣き咽ぶトラツグミ……キマイラとネメア、そして自身の手で殺めたポセイドン。すべてはネメアが自ら選んだ道だ。

この結果をネメアはどう思うかは分からない。すべてはネメアの考えあつてのこと……。私はただネメアに振り回されるだけだ。

「これで満足なのかよ」

「……………」

ネメアは語らない。血塗られたケダモノは海を往く。ゴコクエリアで神を墮とした英雄は、殺戮を求めてホツカイエリアへと戻っていく。

私はこの目でもええたちが殺されるのを目にするのか。それとも、神の力を手にしたネメアが討たれるのを目の当たりにするのか…。結末は分からない。

R u i n — 1 1 1 「 転 機 」

「……………」

園長さんから配られたビラを見ていた。国連軍はこのパークに対して、信じられない非人道的なことを行ったという内容の通知だった。キョウシュウエリアは壊滅、サンカイエリアは立ち入り禁止、リウキウエリアは厳格な入場規制が敷かれているという。ここ、ホツカイエリアは一部を除いて原則として自由な移動は禁じられている。

『続いてのニュースです…』

どうやら、国際的にもこの事件は知られるようになったようだ。テレビの画面からこのパークに起きた自体が報道されている。

私たちに配られたビラというものは、国連軍…主に、合衆国軍がパーク中にBC兵器を用いたというものだった。

キョウシュウエリアには大量のペストと炭疽菌がばら撒かれた。サンカイエリアとリウキウエリアにはガス攻撃がされたという。内部からの垂れ込みかは分からないけど、告発者はよくやってくれたと思う。

「まさか、こんなことになるなんて…」

ネメアさんに追い詰められた合衆国軍は、いとも簡単にパークに対してそれらの兵器を使用した。事前に通告はあったものの、こちらの声はまるで聞かずに耳も持たなかった。条約を守る気などさらさららしい。それとも、戦争ではないのだから関係ないともいうのだろうか。

「目に見えない敵に対して、ガスやウイルスを使って行動を制限させる気らしいな。ホートクやナカバも、もはや完全に落ちてしまっている。海上も合衆国の艦艇によつて半ば封鎖されてしまっている状態だ。……ワシミミズクにはしてやられたが、ネメアは金羊毛をうまく使ってくれているらしい」

カコの答えは実に淡々としたものだ。合衆国の無秩序な破壊行為に関して、何の感想も抱いていないようだった。

フレンズさんたちの退避は完了しているものの、慣れない地方の暮らしや、自由が制限されているせいで、みんなストレスを抱えてしまっている。実際、フレンズさんたちはパークで何が起きているのかよく理解できていないようだった。

「毒ガスとかウイルスとかどうして……。私たちどうなっちゃうの……？」

「……………」

サーバルさんの問いに私は答えられなかった。どうなるかは私にも分からない。もしかしたら終わりなんじゃないかと、そう思わずにはいられなかった。敵は、あの覇権

国家である合衆国を中心とした軍隊なのだ。それに、四方は既に包囲されていて外界と接触することすら叶わない。

絶望だけがある。それだけは確かだった。

「……………」

宿舎内に沈黙が流れる。人であり、この中で一番偉いはずの私が何とかしなければならぬのだろうが、私一人ではどうすることもできない。

暗く沈んだ考えだけが頭を支配している。暗く淀んだ私の頭では、合衆国に跪くことしか考えれなかった。

外には毒ガスを散布する合衆国の航空機が大きな音を響かせて飛行している。この音を聞いただけでフレンズさんたちは怯える始末だ。私一人の力ではどうすることもできない。

「ネメアさん……」

「……………」

一つの大きな影が私の前に立つ。

「アレを……始末してきてもらえますか……」

「……………任せておけ」

影が私から立ち去る。黄金のマントをなびかせながら影は去っていく。ネメアの谷

で人を食らった獅子は、この世界においては救世主となるだろう。もはや、アレに抵抗できるのは彼女一人だけだ。

「……………」

テレビからは国際情勢の流れを示す情報が淡々と流れている。フランスは利益のない戦いだ。パークから軍を引いたらしい。

中東と欧州の石油をめぐる戦争は依然として長引いている。中国は絶対防衛戦線を築いて、東アジアを完全に我が物としている。ロシアは国際情勢の混乱に乗じて、周辺国を呑み込んで脈々とその勢力圏を広げている。

この世界にかつての平穏は訪れることはない。あるのは暴力と支配と圧政のみだ。

日本の最後もあつけないものだった。合衆国はさっさとアジアから兵を引き上げろや否や、日本も朝鮮もすぐに見放した。アジアはあつという間に中国に呑み込まれた。今、私たちが見ているテレビの映像も中国のプロパガンダという側面が強い。

『合衆国は、ジャパリパークに各国間で禁止されている毒ガス、及び、致死性のウイルスを散布し、残留観光客を苦しめています…』

今日も変わらず合衆国に対するプロパガンダが流れている。事実か虚実か…それすらも分からない。だけど、合衆国がパークをガスやウイルスで汚染しているのは事実だ。私たちは立ち上がらなければならない。

「私たちも…ただやられる訳にはいかない…!」

そういつて立ち上がると、宿舎の扉の前に私は立った。

……合衆国に反旗を翻す時だ。私たちの長い戦いが始まる。

……

「んう……」

変な夢を見た気がした。ミライと思わしきヒトと、それに答える黒い影……。話してた内容を思い出そうにも、言葉が変にくぐもっているようではつきりと思い出せない。

「なんだったんだろう……」

ゆっくりと体を起こす。固い石畳の床で寝ていたせいで体の節々が痛む。

「いてて……。せめて寝床の一つでも寄こしてくりやあ良いのに……」

体をさすって痛みに身をよじる。相変わらず独房の中は薄暗くじめじめとしていて気持ち悪い。

鉄格子の外ではネメアが一人椅子に腰をかけたまま眠っている。心なしか、いつになく苦しそうな顔をしながら寝ているように見える。

「……………」

目を覚ましたのか、薄目を開けて少しだけ部屋の中を見回す。

「……なんだか少し様子がおかしい。それとも、寝起きで本調子ではないのだろうか。ドサツ！」

ふらふらと立ち上がったかと思うと、ネメアは膝を崩して倒れてしまった。まるで生まれたての小鹿のようだ。さながらゾンビのようにも思えてしまう。

「ロード……ランナー……」

「……?」

絞り出すかのような声で私の名を呼ぶ。息は荒く、とても苦しそうだ。

「な……なんだよ……」

「だ……大丈夫……かい……?」

「は、はあ……?」

やっぱり様子がおかしい。声もいつものネメアのものではない。

震える両手で鉄格子に縋るように掴まる。普段のネメアからは考えられないような姿にひどく心臓が高鳴る。いったい何が起きているのか……。発作でも起きているのだろうか。

「わ……私だよ……。ラ……ライオン……だよ……。ごめんね……。こ……こんなことに……巻きこんじゃって……」

「ラ…ライオン…?ど、どういうことだよ…。また私をからかっているんじゃないんだろ
うな!」

「か…からかかってなんか…ないよ…。はは…。まさか…私が群れを裏切って…みんなを
傷つけるなんて…ねえ」

「な…なに言ってるんだよ…。意味が分かんねえよ…。…本当に…ライオンなのか…
?」

「本当だよ…。今は…信じなくても…いいけどね…」

苦しそうな声でライオンは答える。見てくれはまんまネメアだけど、答える声はあの
日に聞いたライオンそのものだ。ネメアに体に乗っ取られたライオンだけど、意識は体
のどこかに残っていたとでもいうのだろうか。

「よく聞いて、ロードランナー…。アイツに…会うんだよ…」

「アイツ…?」

「…：…ヨルムンガンド…。このエリアのどこかに眠っている…世界蛇のフレンズ…。そ
いつなら…ネメアの求めているものも…かばんが求めているものも…知ってるはずだから
…」

「ヨルムン…ガンド…。そいつを…探せばいいんだな…?」

「ああ…。まあ…けど…。大丈夫だよ…。きつと…この私が…どうにかしてみせるから

…

そう言うと、ライオンは目を瞑った。

「ああ…ダメだ…。意識が…遠のいていく…。アイツが目を覚ますんだろうねえ…。またしばらくお別れだよ…。じゃあね…」

「お、おい！」

そう言つて、ライオンは崩れ落ちるように床に伏してしまった。白く獣化した腕が私の足元に放り出される。幾度もアムの体を傷つけてきた禍々しい黒い爪だ。

それから程なくして、ピクリとネメアの腕が動いた。僅かな呻き声と共にネメアの体が起き上がる。

「っ…。これは…何が起きた…？」

「よう…。お目覚めかい、ネメア」

不思議そうに寝ぼけ眼のまま辺りを見回す。どうやら、さっきまで何が起きていたのか分からないようだった。

「オレは椅子で寝ていたはずだが…。何が起きたのだ…？」

「ひつでえ寝相だったぜ。こんなところまで転がつてきやがるんだかよ。夢遊病じゃないかって恐々したぞ」

「むう…。そうか…。ところで、変なことはなかったか？ロードランナーよ」

「へんなこと……?」

「そうだ…。例えば…。」オレ」以外の奴と話してはいないか?」

「うっ…」

凶星だった。ネメアは何があつたかちゃんと理解しているようだった。それもそのはずだ。自身の身に起きていることを理解していないはずがない。ライオンの体を乗っ取っているのだから、ライオンが隙を見て何かしようとしているのだと思うのは自然の事なのだ。

「やはりな…。何を話したか知らんが、余計なマネはしない方が身のためだぞ?」

「別に何をするつもりもねえよ…。だけど…」

少しもつたいぶるように言葉を区切る。ネメアは私の言葉を他所に見下している。

「ライオンは言っていた…。ヨルムンガンド…。そいつに会いに行く気はないか…?」

……………

深夜、気を紛らわすために一人で散歩していた。サーバルちゃんは気を使ってくれているのか、ぼくとは離れたところで一人静かに眠っている。

「……………」

あの時の出来事が頭によぎる。アムールトラさんの慟哭、ロードランナーさんの叫び、そして二人の涙……。すべてはぼくの誤った指示から始まった事だと思うと、壊れてしまいそうになる。

「ツ……」

涙が溢れてくる。ぼくは弱い人間だ。こんな重荷を一人で背負いきれる程ぼくは強くはない。何とかしなきゃと思っても、こうして失敗すると自責の念で潰れてしまいうになる。

「あ……ああああ……！」

樹木に縋りついて嗚咽を漏らす。まるで脳裏にこびり付いた悪夢のようだ。これからずっと、この悪夢にぼくは苦しむことになるのだろうか。ロードランナーさんは無事か……。ネメアから虐待は受けていないか……。頭の中がぐちゃぐちゃになっていくようだ。

ふと、誰かが話す声が聞こえた。ぼくの他に誰かが起きているらしい。

「誰だろう……」

涙を拭って、なるべくバレないように声のする方へ向かっていく。茂みの中に身を潜めて伺つてみると、アムールトラさんとサタンが何やら話しているのが見えた。

「それで、お前は俺と契約をしたいと？」

「……………」

契約…？確かにサタンは悪魔で、術者と契約を交わすことで人知を超えた才能や知識を授けられるはずだけど…。それでアムールトラさんは何を…？

「あたしは奴に勝つ…。だから、お前の力が欲しいんだ…」

「お前が代償さえ払うのであれば、知恵でも力でもなんでもくれてやる。それで…お前は俺に何を捧げる？」

「あたし、は…」

アムールトラさんが黙り込む。褒賞と代償など、一人のフレンズさんであるアムールトラさんには難しいのではないか。

しかし、アムールトラさんはどうやら違ったようだった。アムールトラさんは顔を上げると、はつきりとサタンにこう告げた。

「あたしの力をやる。あたしの…ビーストとしての力を…」

「ほう…。なるほど…。ならば、お前の望む力を、俺からもくれてやろう」

サタンが答える。アムールトラさんは固唾を飲んでサタンの答えに頷く。

「だが、悪魔の俺とてネメアの毛皮を裂くだけの、神に比する力を授けることは出来ん。俺が授けるのはあくまでも戦いの才能だ。お前はビーストとしての力を失い、代わりにネメアを圧倒するだけの絶対的な才能を手に入れる…。それでいいな？」

「……………ああ」

「よかろう…。貴様の願い、確かに受け入れた」

二人を取り囲むように、足元から赤く淡い光が漏れるように湧き出る。禍々しくも美しような光に思わず目が奪われてしまう。

「さあ、契約だ。血を捧げるのだ。貴様の血が我が魔方阵を満たす時、貴様は俺と真に結ばれ、契約が成立する」

「……………」

アムールトラさんは少し逡巡した様子を見せると、意を決したように自身の爪で手のひらを傷つけ、魔法陣にその血を垂らした。

「良いだろう…。貴様の想い、確かに見届けた…」

「つ……い」

アムールトラさんの毛皮と頭髮が風に煽られたように宙を舞う。魔法陣から放たれる淡い光がより強くなっていく。アムールトラさんは戸惑いながらも、その光に身を委ねている。

アムールトラさんの体から黒い靄が抜けていく。恐らくは、ビーストとしての力なのだろう。

「あああ……」

黒い霧がサタンに吸い込まれていく。光はより一層強くなったと思うと、まるで破裂するかのように光の粒子となって散っていった。

アムールトラさんが力なく跪く。何やら緊張の糸が切れたように短く肩で息をしている。対するサタンは、宙で腰をかけているような奇妙な姿勢のままアムールトラさんを見下している。

「契約は成立した。事、戦闘に関しては誰もお前には勝てんだろう。ま、負けることがあるとすれば、それは狂乱したビーストになったお前でも勝てん相手であろうが……」

サタンは言う。それは、何か含みの在るような口ぶりのようにも思えた。事実、サタンは何か見下しながらも、何かを見透かしたような視線を彼女に送っている。

アムールトラさんは黙ったまま肩で息をしている。サタンの声が届いているかは分からない。しかし、幾多の戦場を戦い抜いたアムールトラさんのことだ。ビーストにならないという事がどういう事かは彼女が一番よく理解していることだろう。

「いずれお前は後悔することだろう。だが、決して俺はお前たちを見捨てたりはせん。助けを求めるのならば、いつでも俺の元へ来ると良い。我ら悪魔がいつでもお前の助けとなろう……。我々はいつでもお前たちを見守っているぞ……」

そう言う時、サタンは霧のように消えていった。後に残されたのはアムールトラさん一人だけだ。

辺りには虫の鳴く声とアムールトラさんの荒い息遣いだけが聞こえるのみ。静かな夜だ。

やがて、アムールトラさんは立ち上がると、こちらに向かつて歩き出した。このままでは、のぞき見してたことがバレてしまう。急いで退散せねば…。

「……!!」

そうこう悩んでいると、目の前にアムールトラさんの足が現れた。どうやら最初からバレていたようだった。アムールトラさんは静かにぼくを見下ろしている。

「あつ……」

「……」

何かを思うようにしばらく僕を見下ろした後、彼女は静かにその場から去っていった。訳の分からないまま茫然とその場にするだけのぼく。何も語らずこの場から去るアムールトラさん…。

ボーっとしている場合ではない…。はっと我に返ったぼくは、急いでアムールトラさんを呼び止めた。

「アムールトラさん!!!」

彼女の動きが止まる。アムールトラさんは振り返ることもなく、ぼくの言葉を黙って聞くだけだ。

「……………」

どうして…。そう聞こうと思っただけど、答えは分かりきっているようなものだった。それに、ヘタに訪ねてはアムールトラさんの逆鱗に触れかねない。分かりきった答えを聞くことなど、無粋が過ぎるというものだ。

沈黙が流れる。アムールトラさんは黙って背を向けて佇んでいる。この沈黙が意味するものは何なのか、彼女の悲壮な覚悟が感じ取れる。

「……………あたしは必ず連れ戻す。例えこの身が滅びようとも、アイツを殺して、ロードランナーを取り返す…。邪魔は…しないです…」

アムールトラさんが立ち去っていく。ぼくにはどうすることもできない。……………ぼくには、とてもアムールトラさんを止められなかった。

悪魔に魂を売って大事な人を助ける…。ぼくだって、サーバルちゃんが攫われようものなら、同じことをしたかもしれない。彼女の気持ちはぼくにも痛いほどよく分かる。

まるで十年前のことを思い出すようだ。サーバルちゃんを助けるために黒いセルリアンに食べられたあの日の事を…。

夜はまだ深い。ぼくもいい加減寝るとしよう。寝不足のまま、みんなの足を引っ張って迷惑をかけたくはない。

ぼくにはぼくの出来る事を…。必ずロードランナーさんを助けて、ネメアを倒すん

だ。

R u i n — 1 2 「北へ」

「そんな…アムちゃんが…」

「……………」

アムちゃんが昨夜の内にあたしたちの元から去ったとかばんさんから告げられた。まるで目の前が揺らぐようだった。イエイヌちゃんもヘラジカさんも目を伏して黙っている。まるで、みんな最初から分かっていたかのようにだった。

「ぼくには止めれなかった…。ぼくもサーバルちゃんが攫われたなら同じことをしてたと思う…」

「アムちゃん…。かばんさん…アムちゃんがどこへ行ったか分からないの…?」

「ロードランナーさんを助けに行つたとしたか…。このエリアのどこに行つたかまでは分からない…。けど、きつと、ロードランナーさんを取り戻すまでは戻らないと思う…。それだけは確かだ…」

重い口調のままかばんさんは答える。…恐らくは、かばんさんは昨日、アムちゃんと話したのだろう。アムちゃんはひどく悔しがっていた。…アムちゃんは復讐しに行つたんだ。連れ戻しにじゃなくて、ゴマちゃんを攫つたネメアを復讐しに…。

重い沈黙が流れる。かばんさんは非力な自分を嘆いているようにも思えた。止めなければならなかった相手を止められなかった自分を責めているようにも思えた。

そんな沈黙の中、突如サタンが口を開いた。

「かばん、そしてともえよ……。俺に付いてくる気はないか？俺は知っている。アムールトラ……そして、ネメアが向かっている場所をな……」

「え……？」

キョトンとした顔でかばんさんが答える。サタンの言い方では二人が同じ場所へと向かっているかのような口ぶりだけど……。

「ヨルムンガンド……。神々に仇名す原初の大蛇……。神々とタイタンの間に生まれた、古に伝わる大蛇の名だ。神々の時代を生き、そして人々の営みをその目で見てきた、世界蛇の名を冠する蛇の名でもある。……ネメアは、その蛇に己の生まれを、そして、ミライ……。お前の追い求めるヒトのその後を、奴は知りに行くつもりだ。……アムールトラもネメアを追って、ミズガルズの大蛇の元へと向かうだろう。俺の言葉信じるかはお前次第だ。……さて、どうする……？行ってみる価値はあると思うぞ……？」

サタンは答える。悪魔の持つ赤い目はいつでもあたたかしたちを見下しているようだ。まるで、すべてを見通しているかのようにも思える。

「俺に付いてくるといい。悪魔がお前を導こう……。お前の目指す先が喜劇となるか悲劇

となるか…。共に見届けようではないか。我ら悪魔はいつでもお前のそばについている…。さあ、共に行こう…。人の子らよ…」

悪魔に導かれ、太陽を背にあたしたちは歩みを進めていく。目の前に広がるは天高くそびえる白き山々の群れ、そして、目の前に伸びるいくつもの黒い影…。目指すはホツカイエリアの最北端、ヨルムンガンドが眠ると言われるフィヨルド地方…。…。この地方の複雑に入り組んだ海岸にヨルムンガンドは眠っているとサタンは言う。あまり気乗りはしないけど、他に方法が思い浮かばない以上、サタンに頼る他はない。

大地に足跡を残してあたしたちは歩みを進めていく。また旅は始まったのだ。

「どういう経緯でここ、ジャパリパークに流れ着いたかは知らんが、奴は確かにこの地で眠っている。お前も見ただであろう。裂けた岩肌と溶岩の間に踊る白い大蛇の姿を…」

「……まさか、アレがヨルムンガンドだっていうの…?」

「いかにも…。ネメアが興奮して自身に秘める神々の血を滾らせたせいで、大蛇の眠りを覚ましてしまったのだな。奴にとって神々は討つべき仇敵だ。もつとも、なぜヨルムンガンドが神々を目の敵にしているかは分からんがな」

あの時の光景を思い出す。山を裂き、溶岩を押し流しながらうねる白い大蛇の姿…。あたしたちは、今からその大蛇に会いに行くのだ。

「……怖いか?」

「そんな…怖くなんか…」

「ふふ…そうか…。俺は怖いと思ってるがな？」

「あんたが…？」

「ああ…。正直に言うのと逃げ出したいくらいだ」

ヨルムンガンズが怖いとサタンは言う。あたしだって怖い。怖くないっていうのも所詮はやせ我慢だ。あたしたちの命を潰そうとした大蛇が怖くないはずがない。これからその元に行くだなんて、あたしだって逃げ出したいよ。

「ま、安心するといい。ヨルムンガンズはお前たちなど気にも留めてないだろう。火山で見た奴の行動も、寝起きの伸びをしたようなものでしかない。お前たちは死ぬ思いだっただろうが、奴にとってお前たちなど羽根をもがれた羽虫に過ぎん。気にも留めてないだろう。殺されると思ったのなら、それは紛うことなき誤解だ」

「むっ…」

ひどい言われようだ。もつと他に言い方があつたらうに…。

「さあ、旅は長いものになろう。道中、ミライとやらの手掛かりを探しながら進むといい。ヨルムンガンズは逃げはしないし、ロードランナーも死にはせん」

ハーフトラックに乗り、道なき道を往く。イエイヌちゃんやヘラジカさんたちもみんな俯いたまま重苦しい雰囲気放っている。みんな語らないだけであたしたちと同じ

気持ちでいるのだろう。

恐れ、怒り、希望、不安、焦り、緊張……。みんなそれらの感情を抱いてこの場にいる。あたしたちは必ず、ゴマちゃんを連れ戻して、生きて、このホツカイエリアから帰るんだ。

……………

ふと、身にしみるような寒気に目を覚ました。視界は薄暗く、どうやらテントのような物の中にいるようだった。耳にはハーフトラックを動かすエンジンの音が聞こえる。

「やむむ…」

外は風が吹いているのか、バタバタとテントを打ち付ける音がする。よく見てみると、このテントはハーフトラックの車体に風防カバーを取り付けた物のようだった。車体尾部に開いている穴から外を覗いてみると、どうやら雪山を超えようとしていたところのようで、あたしたちは吹雪く雪山の真ただ中にいた。

しかし、いつの間に寝ていたのだろうか。隣では少し距離を開けてイエイヌちゃんが眠っている。ヘラジカさんとギンギツネさんの姿はない。寒さに強い二人は外で見張りでもしているのだろうか。

「……セルリアンだ！みんな！戦闘の準備を！」

車外からヘラジカさんの声が聞こえた。どうやらセルリアンが出現したようだ。外が俄かに騒がしくなる。

「こいつらフレンズの姿をしてやがる……！新種のセルリアンか……！」

新種のセルリアン……？フレンズの姿をしてるって……。

「クソツ！ちよこまかとすばしっこい奴らだ……！おい！イエイヌ！起きて一緒に戦え！」

「わふっ……!？」

イエイヌちゃんはバツと飛び起きると、何事かとあたりを見回した。外のヘラジカさんの様子に何かが起きていると察知したらしく、外が吹雪く中素早く外へと飛び出して行った。

程なくパンパンとギンギツネさんのアサルトライフルの撃発する音が聞こえてきた。どうやら相当な数がいるようだ。

「ともえちゃん!!!」

「か、かばんさん……！」

「セルリアンの襲撃だ！ともえちゃんも戦えるかい!？」

「え!?!あ、あたしは……」

「あああ……！問答してる場合じゃないね……！ギンギツネさんの改造したアサルトライフルがあるからこれで戦って！」

「うわっ!?!お、重……！」

そう言っつてずっしりとした奇妙な形のアサルトライフルのようなものを投げ渡された。ギンギツネさんが使ってるものとは大きく形が違うようだけど、これもアサルトライフルなのだろうか？普通、アサルトライフルのマガジンといつたらトリガーの前にありそうなものだけど、これはトリガーの後ろについている。なんとも奇妙な形の銃だ。

銃をまじまじと見ているあたしを他所に、かばんさんはさっさと出て行くと厳つい形のロングボウで応戦し始めた。ヘラジカさんとイエイヌちゃんを避けながら、的確にその矢をセルリアンに射っている。

あたしはというと、アサルトライフルを腰の位置に構えて滅茶苦茶に乱射するだけだ。反動をうまく抑えきれず、四方八方に弾が飛び散る。それでも被弾したセルリアンは見事に散っていくのだから科学の力はすごいと思う。もつとも、これを改造したギンギツネさんのおかげなんだろうけど。

一通り打ち尽くしたら弾倉内の弾が無くなったようで、腰の位置に来ていた強い反動が無くなったのが分かった。弾切れである。

「か、かばんさん！弾が！」

「くっ……このままじゃキリがない……それに、こんなに吹雪いては狙いもまともに定められやしない……サタン！なんとかならないのかい!？」

「助けたいのは俺とて山々だが、こんなに吹雪いては俺の火炎もあつという間に消されてならん。お前らで何とかするんだな」

「そうじゃなくて!!!これを突破する良い方法はないの!？」

「さてな……。勝てんと思うのなら逃げるのが最善の策だろう。このままではじきに囲まれるぞ?。」

「なに……!?ええい、くそっ……みんな乗って！強行突破するよ!!!」

かばんさんの号令に従ってトラックに飛び乗っていく。かばんさんはあたしたちの合図も待たずにエンジンを吹かすと、勢いよく発進した。目前のセルリアンを薙ぎながら包围を突破していく。

「うわわ……来てるよ来てるよ……!」

「……こうなったら」

ふと、ヘラジカさんが小さく言葉を漏らした。そして、迫り来るセルリアンを睨むと、勢いよくトラックから飛び出して行った。

「ヘラジカさん!？」

「シンガリはわたしが務める！お前たちはできるだけ遠くに逃げろ!」

「そんな……ヘラジカさん！」

「……………」

ヘラジカさんの姿が遠くなっていく。一瞬だけあたしたちの方へ振り返り、親指を立てると、そのまま白いボールの向こう側へと消えていった。

たくさんの黒くうごめく影が僅かに見える。恐らく、セルリアンたちがヘラジカさんを取り囲んだのだろう。あたしたちは黙ってそれを見ることしかできない。

「……………」

やがて、セルリアンとヘラジカさんの姿は見えなくなってしまった。まるで目の前が暗くなるようだった。少し広くなった車内はあたしの心を表しているようだ。ぼっかりと空間ができて……そんな感じだ。

ヘラジカさんが下りたことを知らないかばんさんは、セルリアンの追撃を吹っ切ろうと猛スピードでトラックを走らせている。その空しさがあたしの心を凍てつかせるようだった。

……………

「……………」

突如、ネメアの足が止まった。何やら俯いたまま何か思案しているようにも思える。

「にい……」

「な、なんだよ……。気持ちわりいな……」

突如目を見開いて気色の悪い笑みを浮かべてきた。相変わらず不気味な奴だ。

「ヘラジカが自らを捨てて、オレの放ったセルリアンと一人で戦っているみたいだな……。愚かなものよ……」

「……はっ?」

ネメアが突然妙なことを呟いた。ヘラジカが一人で戦ってる……?何だっってそんなことが分かるって言うんだ?

「な、なんだよ……。ヘラジカが一人で戦ってるって……」

「オレの放ったセルリアンが教えるんだ……。奴は、オレが放ったセルリアン共とたった一人で戦っている……。自らを捨て石にしてな……。まったく、哀れな奴よ……。人間共を逃がすために自ら犠牲になるとはな……」

「っ……」

聞き捨てならないことを聞いた。ともえたちはネメアの放ったセルリアンに襲われたんだ。そして、ヘラジカがその犠牲に……。ネメアが放ったセルリアンは優に1000を、いや、1000を超える大軍だ。それをたった一人で相手にするなんて……。

「ぐっ……」

怒りや悔しさに身が震える。どれだけ怒りに身を燃やそうとも、私はネメアに歯向かえない。このまま背後から襲ったつてどうせ負けるのは目に見えてる。今はただ耐えるしかないのだ。

「ふむ……。些か戦力を分散させ過ぎたか……。ヘラジカの奴め、次々とオレのセルリアンを片付けているようだな……。まあ良い、世界蛇の元へ向かうとしよう」

「……………」

世界蛇……ヨルムンガンド……。ネメアが自身の知りたいたいことを知れば、少しはおとなしくなるかとも思ってたけど、果たしてこのままでいいのか……。今更になって私の中で迷いが生まれる。いったいどうすればいいんだ……？

「セルリアンの情報によると、人間共とは別にアムールトラもオレたちを追っているようだ。どういう訳かは知らんが、お前たちの群れとは別に動いているようだぞ？ よほどオレに攫われたのが癪に障ったようだな」

「ア、アム、が……？」

……あの時出来事を思い出す。絶対に忘れるもんか……。私がこいつに攫われた時のアムの顔……。私が無力なばかりにみんなをバラバラにしてしまったんだ。ヘラジカは皆を逃がすために自ら囮になった。アムは皆から離れて一人私を連れ戻そうとしてい

る……。私のせいでみんながバラバラになっていく。その事実だけが私に重く押し掛かってくる。

「ぐっ……！」

「どうした……？」

嘲笑交じりにネメアが尋ねる。

「お前なんか絶対倒してやる……！私は……私たちはぜってーお前なんかに負けねえ……！謝ったってぜってー許さねえからな……！」

「ほう……？それは面白い……。期待しているぞ、獣よ……」

クツクツと笑いながらネメアは北へと進んでいく。目指す先はヨルムンガンドの眠るホツカイエリアの最北端、フィヨルド地方だ。深い谷と氷に覆われたこの地方に、ヨルムンガンドは眠っている。そこを指して、私たちは進んでいくのだ。

ともえ、ヘラジカ、アムールトラ、そしてミライ……。それぞれの運命が、そこで決まるのだ。

R u i n — 1 3 「反撃」

「あ……は、あ……」

わたしたちを襲ってきたセルリアンはみんな撃破することができた。だが、その代償は大きく、撃破されたセルリアンが撒いた黒い破片……セルリウムに私の体は侵食されてしまった。

「と……も、え……」

酷く全身が重い。鈍い痛みが全身を襲う。セルリウムに侵された左目は景色を映すことなく、ただ靄のようなものを映している。

「早く……行かな……ければ……」

息も絶え絶えにランスに体をあずけて山を下りていく。ともえたちを守るのは、今やわたししかない。早く合流して、ネメアの魔の手からともえたちを守らなくては……。

……

「そう…ですか…。カレンダさんが…」

製鉄所近郊でフィールドワークしていたというカレンダさんの訃報を聞いた。なんでも、例のビーストに護衛もろともやられてしまったらしい。ビーストとは恐らくネメアーさんの事なのだろう。残念だけど仕方ないことだ。この一件でカレンダさんも合衆国側の人間という事が分かったのはとても残念だけど…。

「……………」

悲しいとは思わなかった。ただひたすらに残念と言う気持ちだけが私の中にあつた。国連軍との戦いに、私の心もすり減っているのかもしれない。

ネメアーさんは今日も国連軍を相手に戦っている。カコは研究室に籠って作戦の立案をしている。私の仕事はというと、避難所におけるフレンズさんたちのサポート、及び、精神ケアをするというものだった。長引く避難所生活のストレスからか、フレンズさんたちに異常行動が認められるようになったのだ。

爪を噛む。常同行動。不眠。暴食。フレンズさんによっては、その場から動かず、ずっと体を揺らし続ける個体もいる。耳鳴りが止まなくなったフレンズさんもいるようだ。かく言う私も不眠に悩まされているくらいだ。私の目の下のクマを見たフレンズさんにはいらぬ心配をかけてしまっているようで、余計なストレスを与えてしまっている。

「……はあ……」

一人椅子に座って深いため息を吐く。……とても私一人では対処のしようがない。最近ではジワジワとパークスタッフの離職者も増えてきている。あるスタッフが聞いた噂によると、国連関係者が離職者を中心にビーストについてあちこち聞き回っているのだそうだ。……いずれここにも来るのだろう。怒りに任せて手を挙げたりしないか心配だ。

「……っ！」

涙が溢れてきた。もう限界だった。頭の中がぐちゃぐちゃになっていく。…私たちは、ほんの数か月前まで、かわいいフレンズさんたちに囲まれて、みんな楽しくパークで過ごしていた。それもこれも、すべてあの日を境に跡形もなく消え去ってしまった。もうあの日常に二度と戻ることはないのだろうか…。胸が張り裂けそうだ。

「ミライさん…」

「サーバル…さん…?」

涙を拭って、なんとか笑顔を作ってサーバルさんへと振り向く。振り向いた先に見えたサーバルさんの顔は、なんだか不安に満ちた表情のように思えた。

「どうか、しましたか…?」

「ミライさん…泣いてたよね…。大丈夫…?」

「……………。見られちゃいましたか…。ふふつ…。情けないところ、見せちゃいましたね…。」

「……………」

サーバルさんが隣に歩み寄ってくる。まるで、私の心に寄り添ってくれるかのように思えた。その心遣いにまたしても涙が溢れてくる。

「大丈夫だよね…。また、きつと、みんなで笑い合える日が…来るよね…。」

「……………」

「ミライさん…?」

とてもじゃないけど、はいとは言えなかった。いつ終わるかもわからないこの戦争に、私たちは巻き込まれたのだ。かつていた友達…カレンダさんはネメアーさんに殺された。言いつけを守らずに外へと出て、ガスを吸って無残な姿となつて発見されたフレズさんもいる。かく言う私もその立ち合いに立った者の一人だ。……未だにその姿が脳裏に浮かぶようだ。この世に体現された地獄のようにも思えた程だった。

……憎しみが募っていく。庇護の名の元に進駐して、私たちの国を見捨てて、我が物顔でパークの上に胡坐をかいて、ガスと汚染物質を撒き散らしている…。そんな奴らが許せなかった。

「ミライ」

「カコ……」

「客人だ。気を付けろ……。決して手をあげるな……」

「……………」

カコに連れられてふらふらと表口へと向かっていく。寝不足で揺らぐ視界の中、とても忌まわしいものを見た気がした。濃い緑のスーツに身を包んだ、長身でひよろつとした、色白の男……。

「やあ……。初めまして……。かな？」

「ッ……」

「ミライ……」

カコに制されてぐつと怒りを堪える。私の感情は思ったよりも表に出やすいらしい。

「そう怒らないでくれたまえ、ミライ。私とて好きでこんなことをしているのではない。私はただ、話をしに来ただけだ」

「戯言を……」

「戯言などではない、本当だ。そうだな……。まずは名を名乗っておこうか。私の名は、エノラ……。エノラ・トゥルーマン……。CARSCの上級職員だ。カレンダの言っていたボスとは、私のことだ」

「あなたが……」

溢れる憤怒の情をなんとか抑えて目の前の敵を捉える。怒りに震える拳は、少しでも理性を緩めれば、すぐにでもこのエノラという男を襲ってしまいたい。そうだ。

そんな私のことを知ってか知らずか、男は語る。

「私がここに来たのは他でもない。聞いてはいるだろうが、ここ最近、合衆国を中心とした国連軍がビーストと呼ばれるものに次々とやられていってね……。そこで、君たちには見てもらいたいものがあるのだ。そうだな……。まずは、私に付いて来てもらおうか……」

そう言つてエノラは歩き出した。歩く先には国連軍と思われるたくさん兵士と、いくつかの軍用車両があつた。エノラはその内の一つに乗り込むと、私たちに乗るように促した。

「乗りたまえ。私たちの研究施設に案内しよう」

研究施設……。誰の許可もなしに、いつの間そんなものを作つたのか……。想像するだけでもはらわたが煮えくり返るようだ。

車に乗ろうと身を屈めた時、突如、私とカコは拘束された。

「申し訳ないが、今から行くところは機密情報でもあるのでね……。少し目隠しをさせてもらおうよ」

「なつ……!? は、放しなさい……!」

屈強な男たちに拘束されて目隠しを施される。騒ぎを聞きつけたサーバルさんたち

が施設から飛び出してきたようで周りが騒がしくなる。

「ミライさん!?!」

「動くな!!!」

「ひっ……!」

「心苦しいが致し方あるまい……。連れていけ」

「ミライさん……。ミライさん!!!」

無理やり車に押し込められるや、私たちの意向を無視して車は発進した。後にはサーバルさんの声が聞こえる。

……なんと無力で惨めなのだろうか。私たちには意志の決定権も何もない。強者に尊厳は蹂躪され、あるのは慟哭と無残に擲られるフレンズさんたちの姿のみだ。……いずれはホツカイエリアも完全に国連軍の手に落ちて、私たちはパークから強制退去させられるのだろう。

……ただ憎しみだけが募っていく。こいつらを許すことは、絶対にできない……。

……

どれくらい走ったのだろうか。気付けば、エノラのいう研究施設にいたようだっ

た。

「降りたまえ。到着だ」

「……………」

ふらふらと車外に歩み出る。閉ざされた視界の中、うまく立つことができない。

「申し訳ないが、部屋に入るまで目隠しはさせてもらうよ。おいそれとこの場所を見せる訳にはいかないのでね」

……よく言う。私たちに黙って勝手に占領して、勝手に施設を作って……。誰の許しを得て、そんな傲慢なことを言っているのか……。

カコは何も語らない。ただ黙って兵士たちの後をついて行っているようだ。私とは大違いだ。

「来たまえ」

建物の内部に入ったのか、空気がガラリと変わったのが分かった。聞きなれない言葉が聞こえてくる。どうやら、本当に国連軍が占領している施設に来たように思えた。

通路を進んでいく。階段を上がっていく。なにやら埃っぽいような、薬品のようなにおいがする。いったいどこへ通されるといふのだろうか。

しばらく連れられている内に、何かの部屋に通された。ひんやりとした空気が肌に触れる。じめつとした臭いが鼻腔を満たしていく。

不意に目隠しが外された。突如明るくなった視界が強い刺激となって、目がくらむようだった。

「あれ…。カコは…」

「申し訳ないが、彼女は君とは別の部屋に隔離させてもらったよ。彼女には彼女から聞きたいことがあるのですね」

「……何をしようというんですか。非人道的な拷問や尋問は国際条約で禁止されているはずですよ…。もしやろうものなら…」

「それは戦争法によって保護される対象がある場合の話だろう。これは戦争でもないし、ましてや、ここは国家に所属する施設でもないのだろう？」

「そんな…。ジャパリパークは日本国に籍を置く総合動物園です…！南極のように、どの国にも属していないものではありません！」

「いつの話をしているのだね？」

「ッ……！」

この男は…。……理解したくない。まさか、パークは国連軍に占領されただけでなく、国連に完全に統治されているともいうのか？だとしたら…。

「…それで本題だが…。我々はビーストという謎の存在に脅かされているのはご存じだね？ビーストは我々の偵察機や兵士たちを次々と葬っていった。だが、その分奴につい

ての多くのデータが取ることができた。幾つもの尊い命の果てにな……。後は、君たち……ミライくんやカコくんから証言をいただくだけなのだが……」

男はなおも語る。

「これを見たまえ」

そう言つて男はスクリーンに映像を映し出した。モノクロに映し出された映像は荒れた荒野を映し出している。恐らくは、パークの至る所で飛んでいる無人偵察機の映像なのだろう。

しばらく映像は続く。この中にネメアーさんが潜んでいるのだろうかと思つた次の瞬間だった。

「ッ……」

何もない空間から、極至近距離からネメアーさんが姿を現して、一瞬にしてぶつ切つたのだ。何が起きたか理解できなかつた。

「このビーストの姿は一瞬だけ映っている。我々も何度も映像を検証したのだが……。地面から超高速で跳び上がっているわけでもなく、何もない空間からこのビーストは現れて、無人偵察機を破壊しているようですね……。僅かに見えるビーストの姿を見る限り、君たちのパークにいるフレنزズと呼ばれる種とそっくりであることだけは分かつた。……君たちは、私たちが呼ぶビースト……フレنزズについて知っていることはないかね……？」

「……知りません、何も……」

「そうか……。なら、これはどうかな？」

次の映像が映し出される。無数に聞こえる銃声と、合衆国の兵士の怒号が無数に響いている。恐らく、ネメアーさんと対峙しているのだろう。いつの出来事かは分からないけど……。

「この映像は、我々合衆国の兵士のヘルメットカメラが捉えたものだ。ビーストと遭遇して生還した兵士はいないが：彼らは貴重な記録を残してくれた。これはその一部だ」
絶え間なく銃声が鳴っている。やがて、その中に悲鳴が混じり始めた。戦車は砲身から火を吹いている。備え付けられた機関銃からは絶えず銃弾が撃ちだされている。

「なっ……!?!」

ネメアーさんらしき影が見える。影は戦車の砲身を掴んで砲塔を引き抜くや、それを周りの兵士目がけて振り下ろした。

とても信じられないような光景だった。引き抜かれた砲塔が、右へ左へと大きく振り回される。薙ぎ払われた兵士は形を残すことなく砕かれていく。この映像の撮影者も戦意を完全に喪失してしまっている。息は荒く、ただ助けを求めようように何かを呟くのみだ。

……虐殺が終わる。銃声は止み、聞こえるのは最後に生き残った兵士が助けを求める

声のみだ。哀れにも生き残ってしまった合衆国の兵士は、死を待つだけの子羊でしかない。

「……………」

カメラに映し出された姿…その圧倒的な出で立ちで兵士を見下ろすフレンズ…。メモアーさんの姿がそこにあつた。

「パークでの聞き込みによると、ごく最近生まれた個体らしいじゃないか。ここでの文献を色々で見させてもらったが、このビーストに当てはまる個体の情報はどこにもない。……まあ、ケルベロスやジャック・オー・ランタンとかいうよく分らん個体がいる事には少々驚かせられたが…。いずれにせよ、国連軍が進駐した後に生まれた個体であることには間違いない…だろう？」

「……………」

映像が消される。嘲笑するように、エノラは私に距離を詰めながら問う。…私には答ええないという権利も、逃げるという権利も初めから無いようにも思えた。

…私にだって考えがない訳ではない。扉が施錠されている様子はない。私自身拘束もされていない。……うまくいくかは分からないけど…。

「あまり良からんことは考えん方が良いぞ？」

「ツ……！」

「この…鬼…!」

「何とでも言ううと良い。それで何とかなるというのならばな」

背を向けて男は私から距離を取る。そのまま備え付けの机の元まで行くと、注射器や警棒のようなものをいじり始めた。

「ここでは、君の身の安全はすべて私の手のひらにあると思つた方が良い。傷つけるものもないもすべて私の自由だ…。こうして、君に劇物を注射するのもね…」

注射器に何を入れたのか、見せつけるように私に揺らしてみせると、何の抵抗もなく私に注射し始めた。

「いやっ…!」

「なに、死にはせん。だが、幾ばくかの夢見心地を与えてくれるものだぞ?」

「あつ…!」

何やらふわふわとした変な感覚に襲われる。時間が経つほどに、クスリ作用か意識が朦朧とする感覚に支配されていく。

思考が溶けていく。言いたくないのに、うわ言のように私の口から言葉が溢れてくる。

「私たちが…作り出した…怪物…。彼女は…フレンズさんでは…」

「フレンズでは…ないと…?」

「あ……う……」

「答える気はない……か……」

項垂れる私にエノラは冷たく答える。それは失望のようにも、呆れたようにも聞こえた。

「私は……私たちは、なるべく穏便に事を終わらせたいと思っただが……。答えるというのならば仕方あるまい……。白状するまで付き合ってもらおうぞ」

体に電流が流れる。焼かれる体を気に掛けるまでもなくエノラは拷問を続ける。……私は正気を保っていられるのだろうか。遠のく意識の中、その疑念だけが残った。

……

「あ……ああ……」

震える唇から掠れた声が漏れる。蒼くなった顔はクスリの注射によるものだろうか。体は非常に重く、呼吸すら難しい。……恐らく、私に注射されていたのは、液状大麻なのだろう。過剰なまでのリラクゼーション効果が私の体を急速に蝕んでいつている。

「……少々やりすぎたようだな。だが、これもさつさと白状しない君が悪いのだよ、ミライ」

事は…。

「ネメアー…さん…」

「なに…!?!」

エノラが私に振り向く。

「今なんと言った…!?!」

「ネメアーさんが…私を助けに来たんだ…」

「ネメアーだと…!?!」

ほろほろと涙がこぼれてくる。ようやく苦しみから解放されるというよりも、ネメアーさんが私を助けに来てくれたという事の方が嬉しかった。

「ネメアーとは何だ…!?! 答えろ…ミライツ!」

エノラが露骨に焦りを見せている。さっきまでの飄々とした態度とは対照的で、滑稽で面白く感じてしまう。

奥の通路から悲鳴が聞こえる。ドンドンと壁を殴る音や物を叩きつける音が立て続けに鳴っている。もうすぐそこまで来ているんだ。

「ここです…!?! ネメアーさん…!?!」

「ぐっ…!?!」

エノラが私の拘束をほどく。そして、私を乱暴に引き上げると自身の前で拘束した。

私を人質にするつもりだ。

通路の扉が破壊される。そこから、全身に血を浴びた、白い毛皮と大きなたてがみのフレンズさんが現れた。その子はエメラルドの瞳で私たちを捉えると、私たちの前に大きく立ちはだかった。

Ruin—14 「復讐」

「……………」

任務を終えてロッジに戻ってみると、辺りはひどく混乱していた。皆の混乱ぶりから察するに、普通ではないことが起きたのは確かなようだった。この場には似つかわしくない嫌な臭いもする。車という物が吐き出すあの黒い煙の臭いだ。

話を聞いてみない事には判断のしようがない。そう思い、外で泣いているサーバルとカラカルに話を聞こうと近寄った時だった。

「ネメアー!!!」

オレの存在に気付いたカラカルが大声で叫んだ。涙で赤く腫らした目でオレを睨みながらズンズンと近付いて来る。

「今までどこ行つてたのよ!!!アンタがいない間にミライさんが……!」

「……………ミライがどうした?」

「ミライが……連れ去られた……!」

「……………」

……………この混乱ぶりはそれに来るものだったか……。確かにガスだけでなくオレの狩つ

ている獲物の臭いもする。それも一人や二人ではない。どうやら集団でここを襲ってはミライを連れ去つたらしい。……ミライだけでなくカコの臭いもする。カコも奴らの餌食になつたか……？

「……………」

オレの中で沸々と何かが湧きあがる。怒りとも殺意とも違う奇妙なものだ。カコとミライ……。必ず連れ戻さなければならぬ。何故だかオレは強くそう感じた。仮にも二人は、このパークにおけるオレの生みの親だ。子は親を乗り越えるものだが、それは自らの手でなくてはならない。それに二人はパークにとつてかけがえのない存在だ。二人の身に何かがあつてはならない。必ず連れ戻して、皆を助けなければならぬ。

オレは泣き崩れているサーバルに近付くと、腰を落として声をかけた。

「サーバル、ミライがどこへ連れ去られたか分かるか？」

「……つえぐ……。うええええ……」

「……………」

サーバルはただ泣くのみだ。オレに強く当たつたカラカルも膝を崩して泣いている。言葉はなくとも、この二人の泣く姿はオレにすべきことを示していた。

オレは立ち上がると、サーバルに強く言い放つた。

「立て、サーバル」

「……………ひぐつ……」

赤く泣き腫らした目で弱々しくオレを見上げる。その目は怯えているようにも見えたが、一筋の希望をオレに向けているようにも思えた。小さな種火が消えないように、小さな体へと手を差し出す。

サーバルは恐れるようにオレの手へとその手を差し伸ばす。

小さな手がオレの手のひらに触れる。オレはそれを確認すると、力強くその手を引く張った。

「オレはこれからミライ、そしてカコを取り戻しに行く。奪われたものがあるなら取り返す。そして傷ついたものがあるなら、それ以上の報いを受けさせる。オレはテイタン神族の生んだ怪物、そして、オリンポス神族の血を引く獣だ。そして、オレは奪われた故郷を取り戻すために二人に造られた命でもある…。オレはこれからその使命をまっとうしに向かう…。……………オレの元で戦う覚悟はあるか？サーバル…」

「……………っ」

力強く大地を踏みしめる。壊れてバラバラになったものが再び形を取り戻したようだった。死灰また燃ゆ、死した不死鳥が再び焰を纏い、神々の支配する空へ舞い上がって行くようにも思えた。

赤く腫れあがった瞳はまっすぐオレの瞳を貫いている。覚悟はできたように思えた。

「さあ、どうするカラカル。サーバルは戦う準備ができたようだぞ？」

「……アタシも行くわよ。絶対、ぜったいにミライさんたちを取り返してみせるんだから……！」

「……その心意気だ。さあ、驕れる支配者を打ち破る時だ……！ ティーターノマキアの再来と行こうではないか！」

……………

遠くに国連軍の駐屯地を見る。空には哨戒ヘリがいくつも飛んでいるのが見える。オレ一人であれば、この程度の駐屯地を潰すことなど造作もないことだが、今回はカラカルとサーバルがいる。この二人を連れての正面突破など、二人を死に晒すようなものだ。

「駐屯地はオレ一人で突破する。サーバルは敗残兵の始末をしろ。カラカルには増援の攪乱を任せるぞ。今回はオレが経験する戦闘でも一番規模の大きいものだ。生き残り、目撃し、無駄に戦闘を長引かれるのはオレにも都合が悪いというものだ。内部を制圧したらオレが叫ぶから二人は中に入ってこい。それから……！」

二人に作戦の概要を伝える。二人はいたって真剣にオレの話に耳を傾けている。こ

の二人の態度からもこの作戦への本気度がうかがい知れる。

あらかた説明し終えたところにサーバルから質問が上がった。敗残兵の始末というものに疑問があるらしい。

「敗残兵の始末って具体的にどうするの……？」

「喉を掻き切るか、頭に銃弾をぶち込んでやれ。今回は数も多いからオレにも討ち漏らしや殺り損ねたモノが出るかもしれん。そいつの始末をお前に任せる」

「……そのヒトたちつてもう戦えないっていう事なんだよね。だったらわざわざやらないくても……」

「オレは目撃者がいたのならば、躊躇わずに殺すよう言われている。一般人であろうと、お前たちフレンドであろうとも、だ。それに生き延びて増援でも呼ばれようものなら、お前たちにも死の危険が及ぶのだぞ？ 奴らが勝つか、お前たちが死ぬか、だ。もつとも、オレはいくら増援が呼ばれようとかまわないのだがな」

金羊毛を左目だけを出してマスクのように顔を覆う。金羊毛はあらゆる攻撃を無効化したたり、はじき返すなどの防具としての側面もある。なるべく弱点を減らして、攻めの姿勢を増やすにはもってこいの道具だ。

再び駐屯地を遠くに見る。ここからだやや距離がある。少し近付いて二人を突撃しやすくしなくてはならない。

横目でちらりとサーバルを見る。どうやら、もう覚悟はできたようだった。人を殺すのに躊躇する気はないらしい。

「奴らは攻められるとしたらオレ一人だけで攻めてきたと思うだろう。奴らはビーストが攻めてきたと思つて死に物狂いでオレを始末しようとするはずだ。世に流れるビーストの噂とはオレのことだ。奴らがオレに夢中になつている隙に、生きている奴や戦意を喪失している奴を見つけて躊躇わずに殺せ。いいな？」

「……うん」

「……ふん。しつかりやれよ？」

そう言つてオレは駐屯地に向かつて歩き出した。…ミライ奪還戦の始まりだ。奴らは手を出してはいけない領域にまで手を出した。その報いを、受けてもらう時だ。

………

裏に回り込んで偵察をする。駐屯地と呼ばれるだけにそこその大きさがあるようだ。いったいいつの間にこんな規模の駐屯地を造つたのだろうか。これだけ広いとなると、ミライを探すにも少し骨が折れそうだ。

柵を乗り越えて基地内に侵入する。金羊毛のおかげで誰にもバレずに入ることがで

四方八方から無数の銃弾が飛んでくる。だが俺には何の効果もない。左目をのぞき、オレの体はあらゆる攻撃を通さない無敵の毛皮と金羊毛に守られている。

……これから行われるのは戦闘などではなく、一方的な虐殺だ。悉くを制圧してみせ、必ずミライを見つけ出してみせよう。まずは、あの人間からだ。

「……………」

人間どもは効かないと分かっているながらも、なおも銃を撃っている。まともな対抗手段がないことの証左なのだろう。実に哀れだ。

まずは一人の人間にズカズカと近付き、胸に風穴を開けた。哀れにも、人間は絶命しなかった。だが、これでもう戦えないだろう。心臓を潰されては死ぬのも時間の問題だ。

次の人間に標的を変える。人間どもはジワジワと後退しながらオレとの距離を取っている。

ふと、視界の端に奇妙なものを抱えている人間を見つけた。そいつは銃ではなく、太い円筒状の物を抱えている。

ドオン!!!

「……………」

とつさに左顔面を覆ったが、なんてことなかった。ただの子供騙しだ。

ネメアーがキャンプ地に行つてだいぶ時間が経つた。絶えずパパパパと何かが弾ける音がしている。空には、いつかみたことがある変なものが飛んでいる。ヘリコプターって言うんだっけ。何やらキャンプ地に向かつて変なものを投じている。ヘリコプターがそれを投げるたびに、キャンプ地では何かパンパンといっぱい弾けている。ネメアーは大丈夫なのかな…？

「そろそろ行つた方が良いんじゃない、サーバル」

「う……。うん……。けど……」

「……………わい？」

「……………うん」

あのまま行つたら、間違いなく私もやられてしまうだろう。少し落ち着いてから行つてもいいんじゃないかと思つた。それに、あれだけの攻撃にさらされてはネメアーも無事では済まないのも確かだ。このまま退避して、隙を見てミライさんを助けるのも一つの手だろう。

「————アアアアアア————……」

「今のつて……」

太い絶叫が聞こえた。理性を失くした獣の雄叫びと思えんほどの絶叫だ。

キャンプ地が火に包まれていく。赤い炎と黒い煙がもうもうと立ち上がつて、とても

現実起こっているものとは思えなかった。ネメアーはこんな戦場をいくつも経験してきたのだろうか。

「あ……あれ……」

カラカルが目を見開いて何かを指さした。指さす先にはくると回転するヘリコプターの姿があるのみだ。……いや、回っているのではない。ヘリコプターはネメアーに蹂躪されているのだ。

「ネメアー……」

ヘリコプターに飛び乗って、ヒトをめちやくちやに切り裂くネメアーの姿があつた。中は赤く染まって、とても見ていられなかつた。何が起こっているのか分からないけど、容易に想像できるようだった。カラカルはただ茫然とその様を眺めている。私も動けずただ哑然とするのみだ。

一機、また一機と落とされていく。どうやっているのか、ヘリコプターの尻尾にぶら下がって、勢いよく地面に投げたりもしている。投げ落とされたヘリコプターは、キャンプ地から新しく煙と炎を吐き出していく。

「……サーバル、増援が来たわ。わたし、行くから……。あんたも頑張んなさいよ。……死んじや嫌だからね……」

「……うん」

「……それじゃ」

そう言つて、カラカルは去つていった。……私も行かなきゃいけない。私も……あの場所……。

「……行かなきゃ」

震える脚に力を込めて立ち上がる。今から行くところは死と暴力の世界だ。……一歩足を踏み出すごとにそれに近付いていく。

……こわい。今までパークで楽しく遊んできたことが嘘のように思えてくる。今まで過ごしてきた時間は嘘なのではないか？今まで私はずっと夢を見ていて、今起こっているこの惨劇こそが現実なのではないか？そう思えて仕方がなかった。現実世界のあまりもの乖離に私は混乱するようだった。

「っ……」

キャンプ場の前に立つ。赤く燃え盛る炎に思わず身を引いてしまう。熱線と煙と血の臭いにまともに立っていられない。この中で戦うだなんてネメアもどうかしている。私では絶対に無理だ。それにこれ……ミライさんは生きているの……？そんな疑問を思わずにはいられなかった。

「うっ……」

死体だ。ヒトの形をした、かつてヒトだったもの。身を大きく切り裂かれて、変な方

向に伸びている。右腕がないモノ、左脚がないモノ、首がないモノ、お腹がないモノ…地獄という言葉は、これの為にあるのかもしれない。

「……………」

地獄の中を歩いていく。死体は動かない。動いたらそれは死体ではないという事だ。ネメアーの言う通りに、殺さなくてはならない。

下を向いてはいけない。後ろを向いてはいけない。なるべく死体を視界から外して、歩いていく。できるだけヒトの死体を見たくない。見つけたら殺さなくてはいけない。…ああ、頭の中がぐるぐるしてくる。

ピチャ。

「……………」

血だ。血だまりを踏んでしまった。ヒトの体から流れ出た血だまり。そばにはお腹を切り裂かれて内臓をこぼしたヒトだったものがひとつ。

「……………あれ…?」

…生きています。生きてはいるけど死にかけた。ネメアーがやりそこねたのだろう。

「……………殺さなくちゃ…」

そのヒトはイモムシみたいに身をよじって何かを乞うている。殺してほしいのか助けてほしいのか…。今の私には分からない。

震える手で落ちている大きなピストルを手に取って、銃口をヒトに向ける。なるべく見ないように、顔を逸らして、もう片方の手で顔を覆って…。

パンツ。

引き金を引いた。

ちらりと薄目でそのヒトを確認する。…頭には赤い穴が空いている。ヒトは動かさず、白目を剥いて横たわっている。恐らく死んだのだろう。

「私が…殺した…ヒト、を……」

自分の両手を見つめて、自分のしたことを思い返す。私はヒトを殺したのだ。命じられたままに、私はヒトを…。

「うっ……」

びちゃびちゃと胃の中のを吐き出す。耐えられなかった。自分のしたことが受け入れなかった。私はヒトを、殺してしまったんだ。

「ハア……ハア……」

一通り胃の中のを吐き出して少し落ち着きを取り戻した。私はやらなくちゃいけないんだ。これもミライさんを救うためだと自分に言い聞かせる。

「……もう後戻りはできないんだ…。私達は勝てる…。絶対に、ミライさんを助けてみせる……！」

そう言つて立ち上がった時だった。

「……………」

見慣れたジャケットを見た。アレは間違ひなく、ミライさんが来ているパークのジャケットだ。

恐る恐る近付いていく。視界が歪むようだ。

うつ伏せになっている体を抱き起こす。そしてそのヒトの顔を見た。

「ごめん…。人違いだった…」

ミライさんではなかった。どういう訳か、このキャンプ場にいたパークの従業員のようだった。

「ミライさん、待ってて…！」

そして私は進んでいった。いっぱいヒトを殺した。隠れてたヒト、泣いてたヒト、真つ黒なヒト、瀕死のヒト、ケガしたヒト、自分の腕を探してたヒトもいた。それらみんな殺していった。なんだか自分が殺戮マシンになったようだった。そんな自分が嫌だった。

しばらく行つた先に、一人のヒトが立っていた。ただそこに立って、ごうごうと音を立てる炎を見ている。生存者は殺さなくてはならない。だから撃つた。

パン。

そのヒトは倒れなかった。だからまた撃った。
パン。

やっぱり倒れなかった。やがて、そのヒトはゆつくりとこつちを振り向いた。

「ネメアー……」

「……やるじゃないか、サーバル……」

ゆつくりとネメアーがこつちに歩いて来る。両の爪からは変な繊維のようなものがぶら下がっている。

「躊躇いなくオレを撃ったな、サーバル。その様子だとちゃんとやることをやったようだな。どうだ？ヒトを殺した感想は……」

「……最悪だよ。今だってまだ……」

「ハッ、上出来だ。恐らくまだ何人が殺り損ねてるだろうが、問題ない。これ以上増援が来る前にさっさと終わらせるぞ。……恐らくミライはあそこにいる。そこで、だ。この中に入れ、サーバル。決着を付けに行くぞ」

そう言つてネメアーは金色のマントを外して私の前に広げた。この中に入れとは、どういうことだろう……。

……

「作戦はこうだ。建物の中の人間共はオレがすべて片付ける。お前は中でじつとしていろ。来る時が来たら解放してやる」

「……まるで意味が分からないよ。どうすればいいの？」

「…オレが敵を引き付ける。お前は金羊毛から解放されたらミライとカコを連れて逃げるんだ。ああ、他にも捉えられているのがいたら、可能ならばそいつらも連れて逃げろ。無理ならオレに任せるんだ。その代わりどこにいるのか教えるんだぞ？」

「…分かった。絶対に成功させるんだから…！」

「…その意気だ。必ず成功する。オレを信じろ」

そんな会話をしていたような気がする。頭がボーっとうまく思考が回らない。カラカルは大丈夫かな…。周りから聞こえる悲鳴を聞きながらそんなことを考えていた。

たくさんさんの悲鳴がする。肉を裂く音がする。死ぬ瞬間の音がする。ネメアーは何のためらいもなくその命に手をかけている。それどころか殺しを愉しんでいるようだ。

それに私の扱いもぞんざいだ。投げられたり放られたり…。マント越しとはいえ、固い地面に投げられるのは痛い。もう少し優しく扱ってはもらえないのだろうか。

「ふむ…。この二オイは…」

ふとネメアーが眩いた。私には分からないけど何かにおいがするのだろうか。
「こつちか……」

ネメアーは進んでいく。階段を上っているのか上下に揺られるような変わった感覚がする。

どれくらい上ったんだろう。なんだか永遠のようにも思えた。相変わらずネメアーとは不似合いな、ヒトが慌てている音もする。

ウウウウウウウウウウウ……。

急にサイレンのような音が響いた。耳をつんぎくような大きなサイレンだ。

『エマーージェンシー、エマーージェンシー。館内職員全員に到達。当基地にビーストが襲来、館内にビーストが侵入しました。館内職員は直ちに避難してください。繰り返し。繰り返します。館な……』

「くだらん……」

バチつという音と共に館内放送の音が止んだ。どういう訳か知らないけど、ネメアーが止めたのは確実だと思った。

再びズンズンと歩いていく。周りから人の慌てふためく音がするけど、ネメアーは気にもかけていないようだった。

ふと、ネメアーが立ち止まった。ぼとりと私の体が地面に落ちる。何やら壁の向こう

で誰かが言い争っているような声が聞こえる。

「……か……」

ネメアーはそう呟くと、ガンガンという鉄を殴るような音が大きく聞こえた。どうやら、壁か何かを殴っているようだ。そして、壁が破壊されたような音がすると、ネメアーは再び私を持ち上げて歩き出した。

何やらさつきまでとは違って、何かににじり寄るようにゆつくりと歩いている。そしてネメアーは唸るような低い声で呟いた。

「ようやく見つけたぞ、ミライ……」

「っ……」

ミライさん……!? ミライさんがいるの……!?

「お前がミライを攫った犯人か……。それにこれは……」

「ぐっ……お前がピーストか……。来るんじゃない……。来ればコイツの命はないぞ……」

「……」

もどかしさにどきまぎしてしまう。ミライさんに会いたい……。どうか……!

「取り引きだ。今、この包みの中にお前たちの仲間……。カレンダはソルジャーと言っていたか……。?ともかく、生け捕りにしたソルジャーが1人入っている。ミライを解放すれば、こいつも返してやる」

え…？もしかして…。

ハツとした。ネメアーの交渉に男の人が乗れば、ネメアーは私を隠したまま男に明け渡す。そして、解放された瞬間に男の人を襲ってそのままミライさんを取り戻せば…。

…できる。私ならできる…！絶対にうまくいく…！

「どうする？オレはこのままこいつを殺してもいいぞ？オレはこれまで何十人ものソルジャーを殺してきた。コレもその一つになるだけだ。…一人でも多く生かしたいだろう？人間が十何年もの間かけて育ててきたものをオレはたった少し裂くだけで殺すことができる。１８年かけて育ててきたものを１８秒で壊すんだ。お前はそれを認めることができるのか？」

「ぐっ……」

「選べ。一人の若者の命を選ぶか、そのままこいつを人質に取っておくか…。お前も愚か者ではないはずだ、男よ」

「くっ…！……いいだろう。さあ、それを放せ。ミライも返してやる」

「…ふん」

ほいと投げ捨てられて、ドンと床に転がる。ネメアーの顔は歪んでいることだろう。この中に入っているのはフレンズであって、ヒトではないんだ。少し罪悪感のようなものを感じるけど、相手はもつと悪いことをしているんだ。私は悪くないはずだ。

視界が明るくなる。不意に開けた視界の中に、細い男の顔を見た。私はその男の人の顔を認めた瞬間に、勢いよく飛びついた。

「なにつ!？」

「うみやあ!!」

「ガア…!？」

爪で思いつきり引つ掻いた。私の手が血に塗れる。

「貴様…! 騙したな…!」

「奪われたものを取り戻しに來ただけよ。サーバル、よくやった。それにミライ…。お前…」

ネメアーの言葉に釣られてミライさんを見る。……何が何だか分からなかった。ミライさんの顔は真つ白で、すごく衰弱しているように見えた。今にも倒れそうで、死にかけているようにも思えた。

「ネ、ネメアーさん…。私は、大丈夫です…。とにかく…急ぎましょう…」

「ミライさん…!?! 大丈夫なの!?! 顔が真つ白だよ…!?!」

「…大丈夫ですよ、サーバルさん…。あつ…うつ…」

「全然大丈夫じゃないよ!?!と、とにかく急いでここから出よう!?!」

「逃がすか…!」

に銃弾を受けたネメアーは、衝撃を受けて少し怯んだようだった。アレだけの猛攻撃を受けながらも、無傷で虐殺を繰り返したネメアーに、拳銃の一発なんてどうとでもないのは明らかだ。

ゆつくりと視線を男の人に戻す。私に向けられていないにも関わらず、ひどいプレッシャーを感じてしまう。男の人に向けられるプレッシャーが重い空気となって場を満たしていく。

「……まだ抵抗するだけの力が残っているとはな……。感心するぞ、男よ。」

「ツ……貴様……！」

男の人は拾い上げた拳銃でパンパンとネメアーを撃っていく。しかし、その行為は空しく、ネメアーの体に潰された銃弾はカラカラと床を転げるだけだ。やがて全部撃ちきったのか、銃はカチカチと音を鳴らすだけになった。

「ツ……！」

「もう終わりか?」

嘲笑するようにネメアーが問いかける。抵抗する力が残っていないと認めると、ネメアーは男の体を力任せに床へと叩きつけた。

「ツ……!!?」

「ミライが受けた苦しみ……しっかりとその身で味わうんだな……！」

ネメアーはガツシリと拳を握ると、渾身の一撃を男の顔面へと叩きこんだ。声にもならない悲鳴を漏らして男は苦しみに身をよじる。

「ッ……!!」

「痛いか？ 苦しいか？ だが、ミライが受けた苦しみはこんなものではなかったはずだ。……お前が命の尽きるその瞬間まで、その身に苦痛を味わわせてやる……」

次々と重い一撃が男の顔に降りそそがれていく。口の中を切ったのか赤い飛沫が口から舞っている。

やがてネメアーは弓を引くように大きく後方へ拳を引くと、会心の一撃を男の顔面へと叩きこんだ。

カラカラと白いモノが床へと転がる。……歯だ。男の奥歯と思わしきものが床へこぼれ出た。これでは顔の骨も折れているかもしれない。

もはや男は自身の体を支える事すらできず、苦痛に身をよじるだけだ。それを知ってか知らずか、ネメアーはなおも攻撃を続ける。

バキッ！

「カ、あ、……」

なおもネメアーの執拗な攻撃は続く。息も絶え絶えな男の声はもはや聞いていられない。ただ、ネメアーには至高の音色に聞こえるらしく、男の苦痛に歪む声は彼女の

嗜虐心を昂らせるだけのようだった。

「はい……」

黒い爪が振りかざされる。その時、私の背負うミライさんが声をあげた。

「もう……いいです……！ネメアーさん……！」

「……………」

ネメアーの手が止まる。嗜虐心に塗れた不気味な笑みは消え、せつかくの遊びが邪魔されたとばかりに白けた表情を見せている。

「もう……いいです……！さっさと行きましょう……！その男はもう抵抗できないはずです……！……やるなら……一思いにしてあげてください……！」

「……………」

しばらくの沈黙が流れる。ネメアーは振りかざした右腕を降ろし、何やら男を見下して何か物思いに耽っているように見える。やがて、何か決心したのか、男を無理やり立たせると……。

ザシッ。

両腕が宙を舞う。白い骨が男の両腕からのぞいている。ネメアーはあろうことか、男の両腕を斬り飛ばしたのだ。

「ッ……！！」

もはや男は悲鳴すら漏らさない。瀕死の体には、もはやその体力すら残っていないの
だろう。

両腕を斬り落とされた男の体が壁へと蹴り飛ばされる。ネメアーは私情を挟まずただ男に歩み寄っていく。まるで理解できなかつた。ある種の処刑なのか、何かの儀式を
思わされる感じがした。

「……………」

壁に叩きつけられた男の顔を両手で掴む。もはや男は抵抗する気力すら残していない。
い。ただただ目の前にある絶望に身を伏しているような有り様だ。

ふと、ネメアーの口角が上がったような気がした。そう思った次の瞬間だった。

「ああ……あああああああああああああああああつ……!!!」

悲鳴を上げなかつた男から悲鳴が上がった。ネメアーの後ろ姿のせいでうまく見え
ないけど、ネメアーが男に加虐していることだけは確かにわかつた。

やがてゴミでも捨てるかのように男の体が投げ捨てられた。その男の顔は……とても
見ていられなかつた。

「あつ……………」

目から血を流していた。白いはずの目は黒く、赤く染まっていた。ネメアーは……男の
目を潰したのだ。

Ruin—15 「邂逅」

冷たい風が肌を撫でる。この寒風に負けなくらい、あたしたちのパーティーは冷え切っていた。

ゴマちゃんやネメアに連れ去られた。アムちゃんはあたしたちの元から去っていった。ヘラジカさんはあたしたちを助けるために自ら犠牲になった。

空気は重く沈んでいる。この重い空気に圧されて、あたしたちのパーティーはバラバラになってしまふんじゃないかと思ってしまうようだ。

「……………」

誰も言葉を発さない。重なる犠牲の数にみんなが沈んでしまっている。次は誰が犠牲になるかなんではない。犠牲が出ることで自体にみんなが怯えているのだ。誰だつて傷つきたくないし、誰だつて犠牲を出すのは嫌だと思う。あたしだつて同じだ。

だけど、ネメアという圧倒的な存在の前にあたしたちは抗えずにいる。そして、仲間を失っていつている。神代の怪物の前にあたしたちは無力なのだ。

「ヨルムンガンド……。本当にあたしたちの答えが見つかるのかな……」

「奴は神代の時代から今に至るまで唯一生き残ってきた大蛇だ。もしかしたら、ミライ

のことも分かるかもしれんぞ?」

「……………。今はそれよりもゴマちゃんたちの方が心配だよ。それに…」

「それに?」

「……………なんでもない」

様々な思いが胸の中から溢れてくる。ゴマちゃんのこと、アムちゃんのこと、かぼんさんのこと、ヘラジカさんのこと、そして、これからのこと…。言葉にもならない不安や焦燥があたしを焦がしていく。ホツカイエリアという魔の大地に、あたしたちはポツンと立っているのだ。

「さて、この山を越えたらヨルムンガンドの姿も見えてくるはずだ。…もう既に見えてもおかしくないはずなんだがな」

「また地面に埋まつてるとかじゃないんですか?というか、わたしたちの言葉が分かるんですか?」

イエイヌちゃんが訊ねる。

「ああ、その辺は心配いらん。老人共が話好きなように、奴もおしやべりは大好きだ。ラグナロクから大陸創造の話までいっぱい話してくれるだろうさ。奴がボケてない限り、お前たちの知りたいことも教えてくれるはずだぞ」

「……………どういうお方なんでしょうか、ヨルムンガンドとは…」

「……さあ……」

そんな話をしているときだった。突如、ギンギツネさんの耳がぴよこんと動いた。何か驚いたような顔であたしたちの来た道を見ている。

「どうしたの？」

「……なにかしら……。吹雪……？」

「……雪崩じゃなかったらいいですけど……」

「雪崩じゃないわ。雪崩だったらもつと低い音がするもの……」

そう言つて不安そうに山の頂を見つめている。ギンギツネさんは荷台から降りると、かばんさんのいる運転席に向かって走つていった。

「かばん、少し速度を上げてもらえないかしら。何か山の様子が変だわ」

「……分かった。少し燃料が心配だけど、少し急いで大蛇の元へ向かおう」

キュラキュラと履帯が忙しく動く。ネメアに襲われるかもしれないという不安と、ギンギツネさんの言う山の様子とやたらに心が侵されていく。思えば、ホツカイエリアに来てからは心が休まったことがない。常に死と恐怖との隣り合わせだった。そして今もそれは私の隣にいる。

「ギンギツネ！」

「！ サーバル？」

「ねえ、やつぱり何か聞こえるよ！本当に雪崩じゃないの？」

「本当に雪崩だったら今ごろ私たち全員が雪の下になつてははずよ。山頂を見ても雪崩らしいものも見えないし…。…ちよつと待つて、何かしらあれ…」

ギンギツネさんの指さす方へと目を向ける。逆光差す山の頂に、一つの人影を見た。

「アレつて…」

「…！ネメアだよ!!!」

サーバルちゃんがか叫ぶ。瞬間、黒い影があたしたちに向けて襲い掛かってきた。

ズオン!!!

「うわあー！」

ネメアの奇襲にハーフトラックが横転する。車外に放り出されたあたしたちは、その圧倒的な存在を前にただ混乱するのみだ。

「よう、お前ら。また会つたな」

「ネ、ネメア…！」

「しかし、まア…。お前らと目的を同じにするとはな…。ここに来たという事は、お前らもあの世界蛇に会いに来たのだろう？だが、無駄足だったな。お前たちの旅もここで終わる…」

「なに…!?どういうことなの！ネメア！」

大気を貫くような重い音が炸裂する。ネメアも攻撃を受けることなく捌いている。しかし、慣れない動きをしているせいか、所々に攻撃を許してしまっている。それでもネメアにダメージはないのだが、目に見えて焦りの色が見えてきている。

「おのれ小癩な……！」

「カ、ア、ツ、ツ、！、！、！、！」

「ぐアツ……！」

ネメアの顔面に強烈な一撃が叩きこまれた。アムちゃんの一撃を受けて吹き飛ばされたネメアも、たまらず顔を抑えて悶えている。

膝をついて顔を抑えるネメアにとどめの一撃が振り下ろされる。だけど、ネメアはそう簡単にくたばるような獣ではなかった。

「キ、イ、ツ、！、？、！」

「調子に乗るなよ……。この虫、ゲラ、カ、ア、ツ、！、！、！、！」

ネメアの体から黒いオーラが放出される。ネメアのビースト化だ。

「があっ!!？」

「小、賢、し、い、マ、ネ、を、す、る、ケ、モ、ノ、の、成、り、損、な、い、か、ア、ツ、！、！、！、！、この、オ、レ、が、叩、き、潰、し、て、し、て、く、れ、る、わ、ア、！、！、！、！、！」

ネメアの切り裂くかのような乱舞がアムちゃんへと襲い掛かる。反撃を厭わない圧倒的な攻めの姿勢に、見ているだけのあたしたちの体も思わず震えてしまう。

しかし、アムちゃんは違うようだった。力任せに振るわれるネメアの攻撃をかわし、受け止め、捌いていた。

ネメアの苛立ちが頂天に達する。空間を歪めるような一撃が放たれると、たまらずアムちゃんの体は大きく後方へと吹き飛ばされた。

「ガアツ……!!」

「何故だ……何故オレの攻撃が通じぬのだ……怒りに任せて特攻するだけの畜生が短期間であそこまで技量を付けれるとはとても思えんぞ……」

肩を大きく上下させながらネメアが呟く。やがてその目はあたしたちへと向けられた。

「貴様の仕業か、サタンよ……。大悪魔が、それしか考えられん……。貴様が何かしら術を施し、あのビーストに小細工をしたのだろう？ まったく、あの時に貴様をおめおめと逃したばかりにこんな面倒な事になるとはな……。つくづく慢心するオレも甘いと思わされる……」

ビリビリとした殺気があたしたちに向けられる。一步一步とあたしたちに近付くたびに、その覇気があたしたちを押し潰していくようだ。

「グルルルルル……！」

「ほう？威嚇のつもりか？」

威嚇するイエイヌちゃんにネメアが威圧を以って返す。

「雑種が、死に急ぐだけでも知らずにオレに楯突くとはな……。そうだな、まずはお前から始末してやるとうしようか……」

バチバチと蒼い雷がネメアの右手に纏われる。どこかで見たような蒼い光に記憶がフラッシュユバツクする。

体の中に戦慄が走る。……そうだ。アレはポセイドンの纏っていた神の雷だ。神々の血を引くネメアの獅子もその力が使えるというのか？

「これは^{祖父}ポセイドン^{父上}が使っていた神々の力だ。これで貴様を焼いてやろう、雑種よ」
「ぐっ……！」

迸る神々の力を見せつけるようにネメアが嘲笑する。そして、見てはならないものを見た。あたしたちは見た。

トライデント……。禍々しい形をした三叉の矛がネメアの手から現れたのだ。アレは、ポセイドンの力と権力を象徴する絶対の神器のはずだ。それを何故ネメアが……。

「そ、それは……」

「これか？これはオレが祖父上から奪ってやったのだ。まったく、主神ゼウスの右腕に

して大海の王であるポセイドンもあの程度だったとはな…」

「え…?」

「……ポセイドンに何をした! ネメア!」

イエイヌちゃんが吠える。くつくつと馬鹿にするようにネメアが答える。

「祖父上か? ああ、殺してやったよ。貴様らからロードランナーを奪ってやった後に、ゴクエリアに行ったのさ。祖父上はまるでオレを待っていたようだったな。まったく、大海の王でもあろう者があのような場所に留まるとはな…。オリンポスの重臣ともあろうものが、さも矮小な存在であつたとは思ひもしなかつたさ。……心底失望させられたよ」

心底見下すようにネメアは答えた。それを聞いてか知らずか、背後からアムちゃんが襲い掛かる。

ドンツ!

「ぐあツ!」

見えない衝撃に再びアムちゃんが吹き飛ばされる。そして、ネメアの電撃に拘束されたアムちゃんは地面にとらわれてしまった。

「ぎイイイイイイイ…!」

「しばらくそこで見ているんだな。こいつらが無残に殺される様をな」

「ネメアアア……！」

ネメアの鋭い眼光があたしたちを貫く。蛇に睨まれた蛙という言葉がこれ以上に合う状況はないだろう。死を待つだけのあたしたちに、もはや立ち向かう術はなかった。「でりやあああああああああああああ!!！」

不意に誰かがネメアに襲い掛かった。青いシャツに灰色の頭髮、そして、黒い羽根を持つフレンズ……。……見間違えるはずもない。グレーター・ロードランナー……。ゴマちゃんだ。

「ゴマちゃん……!?!」

「もうこれ以上好きにさせてたまるか……！覚悟しやがれ!!!ネメア!!!」

「……………」

汚物でも見るかのような目でゴマちゃんを見るネメア。けど、いったいどうやってネメアの手から逃れたというのか……。……今はそんなことを気にしている場合ではない。この絶体絶命の危機を脱する方法を考えなければ……。

「オレを裏切るか？ロードランナー……」

「へ！誰が裏切ったんってんだ！私はお前に拉致されただけだつてーのー！」

ゴマちゃんが答える。そして、あたしたちに振り向くと焦るように答えた。

「おい！さっさと逃げるぞ！このままじゃみんなアイツにやられちゃうー！」

「え!?に、逃げるって……それにアイツって!？」

「ヘラジカだよ!いや、セルリアンなのか!?!あーもう!アイツどうしちまったってんだ……!ともかく、ソイツが今こっちに來てんだよ!さっさと行くぞ!」

「へ、ヘラジカさんが……!？」

「ああ、そうだよ……って、ヤツバ……!もう來やがった……!逃げるぞ!!」

そう言つてあたしの手を取つて走りだした時だった。鋭い風切り音と共にソイツがあたしたちの元へと襲い掛かつてきた。

ズガンツ!!

「あ……………」

白い煙幕の中、あたしたちは信じられないモノを見た気がした。

その子は、ヘラジカさんというにはあまりにも異形だった。セルリウムによつて黒化した身体、その身体に散らばるセルリアンのような無機質な単眼の目、そして、赤く染まった左目……。本当にヘラジカさんなのか、とても信じられなかった。

「へ……ヘラ……ジカ……さん……?」

「と…………と、も……え……………」

ワナワナとした様子でヘラジカさんがあたしたちの元へと歩み寄つてくる。ゾンビとも思えるようなその異質な様子に、あたしたちは怯えるしかなかった。

「く、来るな!!!これ以上来たら……!」

「あ……あああ……」

「お、おい!こつちに来るな!!!お前の敵はあつちだ!!!」

イエイヌちゃんとかゴマちゃんが懸命に威嚇する。それでもなお、ヘラジカさんは震える脚であたしたちの元へと足を進める。もはや、あたしたちの声すら届いているか分からない。

セルリアンの目があたしたちを捉える。それは、部分部分だけを見れば、ヒト型のセルリアンに見えるかもしれない。むしろそうであつてほしかった。だけど、それはフレンズでもあり、セルリアン……。ヘラジカさんというフレンズに寄生したセルリアンなのだ。

「や、やめて……。こ、怖いよ……ヘラジカさん……」

「グウウウウウウ……!」

「あ……あ……ど……ど、うし……て……」

セルリウムに汚染されたスピーアーが振り上げられる。あたしたちを叩き切ろうとしているのだ。それはヘラジカさんの意志かセルリアンの意思か分からない。だけど、それは確実にあたしたちを仕留めに来ていることだけは分かった。

ザシユ!

「あ……………」

突如、ヘラジカさんの動きが止まった。見ると、ヘラジカさんのお腹が血に濡れている。そこには、ヘラジカさんのお腹を貫く三叉の矛があった。

ズルリとそれが引き抜かれる。風穴の空いたヘラジカさんのお腹の奥にフレンズさんの姿が見える。よくは見えないけど、その姿はネメアのものだとはつきりと分かった。

「どけ、デミセルリアンめ。そいつはオレの得物だ。貴様のものではない」

「あ……。あああああああああああああああああああああ!!!」

不気味な絶叫をあげながらヘラジカさんがネメアに突進する。ネメアは難なくヘラジカさんの突進をかわすと、その背中を斬りつけた。

血のような黒いモノが飛び散る。気体でも液体でもない黒い何かだ。アレがセルリウムとでもいうのだろうか。

ヘラジカさんは本当に変わってしまったのか。あの強くも優しい森の王は本当にいなくなってしまったのか。……胸が締め付けられるようだ。あの変わり切ってしまった姿を見ていると、胸を突き刺されたような痛みが湧いてくる。

『ああああああああああああああつ————!!!』

セイレーンの不気味な叫び声のようだ。地上でありながら、海中に響く海底火山の噴

は叶わず、ネメアの腕を侵食し始めた。

「くっ……！まづい……！」

もはや取り戻せないと考えたのか、自身の体だけでも逃れようと、自由だった左手でトライデント諸共ヘラジカさんの腕を切り裂いた。

切り裂かれた腕からはセルリウムと思われるモノが溢れている。火のような、靄のよ
うな禍々しいモノだ。

「あ……あああ……！」

「チツ……これではいくらか分が悪いか……。喜べ。貴様らと決着をつけるのはまだ後だ。
ここは引かせてもらおうぞ」

そう言つてネメアが去ろうとした時だった。

ゴゴゴゴゴ……。

「うわっ！地震!？」

突如、地響きのような音と共に地面が大きく揺れ始めた。まともに立つていられない
ほどの大きな揺れだ。

「だ、大丈夫ですか!?!ともえちゃん!」

「ぜ、全然大丈夫じゃないよ!うわっ!?!地面が割れてる!!!」

どんどん大きくなる揺れにひどく混乱するあたしたち。盛り上がっていく地面に崩

壊する山、あたしたちの来た道を見ると、大きな雪崩が起きていた。もはや絶体絶命、万事休すだ。

「あ……」

すべての情報が止まる。その圧倒的な存在の前に、視界以外のすべての情報が止まった気がした。

盛り上がる地面から“何か”が現れた。眼？目蓋？……ともかく、眼としか言えないような赤い塊が見えた。

やがて、それは大きく空へと上っていくと、その大きな“頭”であたしたちを見下ろした。

「ヨルムンガンド……」

……世界蛇が姿を現した。ヨルムンガンド……。ネメアが、あたしたちが求めた、世界蛇の姿が、そこにあった。

Ruin—16 「J・rmungandr」

「あ……あああ………」

「あ……あれが………」

ホツカイエリアの大地を割って、想像を絶する巨体が姿を現した。遙か上空に上った世界蛇の頭は、決して小さくなることなく空を覆わんとしている。

雲を突き抜け、なおもその軀は空を上っていく。山の向こうでは世界蛇の体がのたうち回っている様子が見える。

その圧倒的な存在に、息も忘れてその姿を目に焼き付けていく。時間という存在を忘れてしまったか、それに取り残されたかのように思えた。ただ、あたしは目の前に聳える巨塔としか形容のしようがない怪物：巨人に目を奪われていた。

「あれが……ヨルムンガンド………」

「……ミズガルズの大蛇……星を取り巻く巨人の名でもあり、九つの世界に身を置くヨトウの人でもある……」

何やら感慨深げにサタンが答える。

やがて、ヨルムンガンドは静かに頭を降ろして、あたしたちにその大きな頭を見せて

きた。

降ろされた頭が大風となってあたしたちを吹き下ろす。大風に吹き飛ばされないように踏ん張るだけでも精一杯だ。ヨルムンガン드가頭を降ろしただけというのにこの威力というのだから、神話の怪物というのは恐ろしい。

だけど、その怪物を恐れることなく見上げるのフレンズが一人いた。ネメアだ。

「貴様がヨルムンガンドか……。大したモノだな、ミズガルズの大蛇よ。タイタンの仲間という風に聞いてはいたが、貴様の姿を見てみるにまったく違うように思える」

ヨルムンガンドは嵐のような鼻息を吐きながらネメアの質問を聞いている。いや、聞いているかは分からないけど……。しかし、呼吸の一つ一つが大きな嵐のようだ。鳴らされる鼻の音は獣の唸り声を思わせるようだ。

「答えよ、ミズガルズの大蛇よ。オレは一人の人間の女を探している。名をミライという。そいつがどこにいるか答えるんだ」

ネメアがヨルムンガンドに問う。けれど大蛇は答えず。赤い二つの眼はネメアを捉えているが、まるで質問の意味を理解していないようだった。

鼻息が大蛇の声か分からない音が鳴っている。下水道の不快な音のようにも聞こえるそれはネメアの心を苛立たせていた。

「……………答えぬか……。ハッ……。所詮は人の言葉を解さぬ蛇畜生か……。貴様も神々の血を引

くタイタンの一人と想っていたが……。とんだ期待外れだぞ、ヨルムンガンドよ……」

失望したようにネメアが答える。やがて、その右手に青い稲妻と激しく渦巻く水の刃が滾らせると、威嚇するように世界蛇へと見せつけた。ヨルムンガンドを討つ気だ。

「痛い目にあわせれば少しは教える気になるか!？」

大蛇の返事も待たずに神々の怒りを放つ。だけど、次の瞬間には驕れるネメアの顔から表情が消える事となった。

「……………なに…?」

ネメアの放った雷霆は、世界蛇の表面に付いた雪の塊を削り落としただけだった。世界蛇の鱗には僅かな傷が入ってはいるが、アレではとてもダメージが入ったとは言えないだろう。

「……………」

恨めしそうな目で世界蛇を睨んでいる。相変わらず世界蛇は様子を見ているだけだ。

ゴゴゴ……。

低い音が轟く。地震ではと思ひ、即座に身を低くしたものの、どうやら違ったようだ。ふとヨルムンガンドを見てみると、自身の鱗を逆立てているのが見えた。蛇鱗の照らす先には、ネメアの姿が映し出されている。どうやらネメアを攻める気らしい。

対するネメアは仁王立ちの姿で構えている。訝し気ともいえるような敵対的な視線

を世界蛇に向けている。

黒い渦巻き状の光が鱗の一つ一つに照らし出される。100、200……いや、それ以上にある。それらすべてがネメアに向けられている。

やがて、黒い渦巻き状の光は黒い光弾へと変わっていった。ネメアに撃ちだすのも時間の問題だろう。

時が止まる。吹き付ける風だけが時が流れているのを知らせてくれる。そう思えるほどの静寂と緊張だ。

刹那の見切りか、一つの光弾がネメアを撃ちつけた。

「ッ……」

世界蛇の射出した光弾がネメアに命中する。初弾命中だ。

「くっ……これは……」

マシンガンのように光弾が発射される。攻撃を受けたネメアは光弾を受け止めるのを止め、回避に専念しだした。どうやら、それは物理的な攻撃の他にも副次的な効果があるようで、ネメアに焦りのような色が見て取れる。

「おのれ……」

世界蛇の放つ黒い弾幕は回避するのを許さない。逃げ場を一つ一つ潰すように、広範囲に光弾をばら撒いていく。ネメアの必死の回避も空しく、体の至る所に黒い光弾が撃

ち込まれていく。

やがて回避を諦めたのか、金羊毛を翻し自らの盾とした。

機銃掃射の如き激しい弾幕が白い煙幕を巻き上げる。フレンズ一人を倒すには過剰ともいえるほどの激しい弾幕だ。普通のフレンズさんであれば、形すら留めていないだろう。

攻撃の止んだ一瞬の隙に、ネメアを中心に一陣の風が舞った。僅かに見えた煙幕の間からネメアの眼光が覗く。

「虫ケラがア…調子に乗るなアツ!!!」

金羊毛を翻して光弾をはじき返す。しかし、あたしたちが見たものは光弾などではなく、思わず目を疑うようなものだった。

黒い光弾が影となつてヒトの姿を形作る。やがてそれはフレンズの姿となると、ネメアへ逆襲を始めた。

「…ふんっ」

「なツ…!?!」

そのフレンズさんは袈裟切りのようにネメアに光弾を放つと、跪くネメアの前に大きく立ちはだかった。

「若造が…。調子に乗っておるのはお主の方であろう…」

「貴様…：ヨルムンガンドツ…！」

「いかにも、わしこそがヨルムンガンドであるぞ…！」

ヨルムンガンド…？あの子が…？じやあ、あの子の後ろに聳える大きな蛇は…。

真つ白で赤いラインの入ったフード付きのパーカーに、黄色く濁った眼、赤いような蒼いような不可思議な色をしたくすんだ瞳…身長は中ほどであろうか、不思議な出で立ちをしたフレンズさんだ。

「どうだ？わしのガンドの味は…！」

「ふんツ、この程度…！」

「強がりも程々にしておいた方が良いで？」

「ぐツ…!？」

ヨルムンガンドと呼ばれるフレンズさんがネメアに黒い光弾を撃つ。光弾を受けたネメアはダメージを受けたように後方へと吹き飛ばされてしまった。

「ネメアにダメージが入ってる…？」

今まで見たことのなかったネメアの姿に思わず混乱してしまう。顔面を攻撃した訳でもないのに、ネメアにダメージが入っているのだ。なんだかとても信じられない。

「わしの撃ったガンドは、相手を呪うというシンプルにして低級の魔術であるが、それ故扱いやすく汎用の効くというものよ。確かにお主は物理的な攻撃はほぼ効かぬかもし

れぬが、こうして呪われ、病に侵されると堪らぬであろう?」

「ぐう……おのれエ……蛇畜生の分際で……!」

身を引きずるように立ち上がる。しかし、その行為も空しく、ヨルムンガンド……大蛇によつて蹂躪されるだけだった。

「わっばよ、出直してくるのだな」

大蛇がその大きな口を開く。

「ぐあッ?!」

大蛇の僅かに放った一声は大きな衝撃波を生み、ネメアの体を遠くに吹き飛ばしてしまった。

山々を超え、ネメアの姿が小さくなっていく。あたしたちが苦戦した相手を、あそこまで簡単に負かせるなんて……とんでもないフレンズさんだ……。

「さて……」

「つ……!」

ヨルムンガンドがあたしたちに振り向く。その目に敵意は感じられなかったけど、どこか深く瞳の奥を覗かれるような錯覚を覚えるようだった。

「お主たちは……何用かな?あの獅子の仲間ではあるまいな?」

「ち、違う!!あ、あたしたちは……あたしたちは、あなたに会いに来たの!」

「ほう…。わしにか…。この老いぼれに会いに来るとは、酔狂な者もいたものよのう…」
ほっほっほつと小気味よく笑うヨルムンガンドを名乗るフレンズさん。あの実力からして本物であることは間違いないのだろうけど、いまいち信じられないでいた。ここは本物のヨルムンガンドであることを証明してもらいたいけど…。

「本当に…ヨルムンガンドさんなの…？」

「む…。わざわざここまで会いに来ておいて信じぬというのか？」

「う…うん…。失礼だとは分かっているんだけど…。それに…後ろの大蛇は…」

「ああ…。アレはわしの分身ともいうべきものだ。いや、本来の体ともいうべきか？ サンドスターも奇妙なものでな、わし本来の体とは別にこの体を作ったらしいのだ。それから、大きすぎるわしの体のすべてをおなごにできなかつたのかもしれないな」

カカカとまた小気味よく笑う。

「いやいや愉快よ。小さきミズガルズの人の生もまた面白いものだ。さて、本題だが、お主たちはただわしに会いに来たのではないのだろうか？何が目的なのだ？」

ヨルムンガンドが問う。神代から生きてきた大蛇はすべてを見てきたはずだ。この大蛇はすべてを知っている。ならば、ミライさん…。ミライさんが生きていた、世界が滅亡する前の世界のことかも知っているはずだ。

あたしがそう尋ねようとしたその時、身震いがするような悪寒を感じた。あたしの本

能が何かを告げている…。早く逃げなければ何かに食べられてしまうと、そう告げている。

「？ともえちゃん？」

「こ、この気配…。まさか…！」

「ツ！ともえちゃん、気を付けてください！セルリアン…。い、いや、ヘラジカさんです…！」

ヨルムンガンドの出現によって発生したクレバスに落下したのだろうか。裂けた地面から黒い手が這い上がってきた。黒い陽炎のように昇るセルリウムを放ちながらそれはゆっくりと姿を現していく。地獄の底から這い戻ったように、ヘラジカさんもまた、深い裂け目から這い上がってきたのだ。

「あ……あああ……」

「ふうむ。これはこれは……」

「ああああつ……！よ、ヨルムンガンドさん！何とかならないの…!？」

「どうって、セルリアンとフレンズの相の子なのだろう？わしにどうせよというのだ？」「そうじゃなくって……！ヘラジカさんはセルリウムに汚染されて……！苦しんでるんだよ…！」

「ほう……？と、すると？」

「……どうしたら…ヘラジカさんを救えるの…?」

あたしの切実な思いを言葉にする。曰く、ヨルムンガンドは答える。

「ほう…。ネメアはデミセルリアンと言っていたか、てつきりそういうものの類と思っていたが…。ま、助けれんこともないが…少し試してみようか…。ええと、確か…」

「……………」

「?、?、?、?…?」

「…?」

ヨルムンガンドさんから突如未知の言葉が飛び出してきた。何かの呪文のようにも聞こえるけど…。

「う…。ぐ、あああああああつ…!」

「へ、ヘラジカさん!」

「ぐあああああああ!!!や、やめろおおおおおおお!!!」

「うわあ!」

ヘラジカさんがセルリウムを撒きながら突進してきた。赤い左目を光らせ、絶叫しながら突進してくる様は恐ろしく感じる。

「たわけ。静かにせい」

「ぐいつ!」

黒い光弾……。ガンドをヘラジカさんに向けて発射した。やはり、ガンドに撃たれたヘラジカさんも、ネメアと同じく膝について苦しむ様子を見せている。何か呪いか病に侵されたのだろうか。少し可哀そうだけど、これで少しは大人しくなってくれたら、あたしも少しは安心できる。

「ヘラジカ自身は呪いの効果で自由に動けないはずだ。後は、彼奴に寄生しているセルリアンをどうにかすればいいのだが……。何せ、わしもセルリアンとやらにルーンの魔術をかけるのは初めてなのでな。うまく行けるか若干心配なのだ。うまく浄化できればいいのだがな」

「ル、ルーン魔術……？」

「人間や神々らが行使する魔術の一つだ。さて……」

「なんだか簡単に流されてしまった。魔術とやらをさも当然のように使われてもあたしたちには何のことやらちんぷんかんぷんだけ……。魔法……？」

「少し様子を見ておこう。……時に人間よ。話を戻すが、お主たちは何を目的にわしの元へ参ったのだ？」

「……ミライさん……。ミライさんについて……教えて欲しい……」

「ふむ？ミライとな……？」

かばんさんが口を開く。そうだ。あたしたちはミライさんのことを調べるために

ホツカイエリアにやって来たのだ。そして、ミライさんのことを知っているのであろうヨルムンガンドさんの元へと尋ねに来たのだ。

しかし、予想に反してヨルムンガンドさんの顔は険しかった。まるで頭にはてなマークが見えるようだ。何のことやらとでも言いたそうだ。

「わしは巨人ユミルの死から現代に至るまでのすべてを見てきたが、ヒト一人の営みまでは見ておらん。ミライだかなんだかの事なんかは、わしは知らん！」

「そ、そうか…。ははっ…。そうだよね…。神様もヒトの一人一人までは見てないよね…」

「わしは神ではないぞ、人間」

不快そうにヨルムンガンドが答える。しかし、参ったな。せっかくミライさんのことを尋ねにここまで来たのに収穫がないだなんて…。

「だが、人間が互いに滅ぼし合った終末戦争のことは知っておるぞ？ わしの記憶、そして、この島に隠された遺物や秘密を解き明かすと、お主らの求めるモノが分かるかもしれない」

ヨルムンガンドは続ける。

「わしについて来るか？ わしの知る中で心当たりのあるものがいくつかある。その一つをお主らに紹介してやろう」

ばんさんも斧やナイフを使って器用に登っていつている。あたしとイエイヌちゃんはずりケツだ。

「ひいひい…。みんな速いよ…」

「わ、わたしたちも急ぎましょう」

そうこうしている内にヨルムンガンドさんがあたしたちの目の前に現れた。

「ほれ、早く登れい」

「そ、そんなことを言ってもお…」

「まったく、仕方のない…」

そう言つてヨルムンガンドさんが何かを呟き始めた。

目の前が蒼白い光に包まれる。ふと気づいた次の瞬間には、目の前の景色が変わつていた。

「あ、あれ!?ここ、ここは…!?」

「これ…ヨルムンガンドの頭の上ですよ…!」

「ええ!?!」

「お主たちがあまりにも遅いから転送したのよ」

さも当然のようにヨルムンガンドは答える。そう言いながら、自らの頭の上から自らの顔を這うフレンズさんたちを見下ろす。あたしたちにはとても想像できないけど、

いったいどんな感覚なのだろうか。

「ほうれ。早く上がってこーい」

尻尾をパタパタと振りながら眼下のかばんさんたちを急かす。遠くでは退屈そうに世界蛇の尻尾も大きく揺れている。揺れる尻尾の動きに合わせて雲も動いているのだから恐ろしい。大気が引つ掻き回されているのだろう。

「ふああああ…」

退屈そうな大あくびだ。釣られてあたしたちもあくびをしそうになる。

その時だった。

「うわあ！なに!?!」

「な、何したんですか!?!」

足元が急に持ち上がっていく。崖下からはかばんさんたちの悲鳴が聞こえてくる。

「おおっと、すまんな。あくびをしてみましたようだ」

「あくび!?!これが!?!」

瞬間、世界蛇の顔からかばんさんたちが勢いよく飛んできた。どうやら、急激に持ち上げられた頭に引つ張られるような形で上に投げられたようだ。

「いだっ!」

「あぐうっ!」

「だ、大丈夫…?」

心配するあたしを他所にヨルムンガンドさんは特に悪びれる様子もなく飄々として
いる。

ゴマちゃんは飛ぶことで先に着いていたようで、あたしたちの騒ぎに何だ何だと世界
蛇の身体の方から飛んできた。

「これで一通りそろったようだな。それでは、私のねぐらに向かうとしようか」

「ま、待ってよ! アムちゃんは!」

「あのビーストの事か? そいつならわしの口元で休憩しているようだぞ。ついでにヘラ
ジカの奴を見張っているようだな。ま、しっかりしがみ付いてれば落ちはせんだろう
さ。それに、奴もそう簡単に振り払われるようなヤワな奴ではないのだろうか?」

「そ、そうかもだけど…!」

「なら、問題なかるう? さあ、出るぞ」

そう言つて、世界蛇は動き出した。足元の頭が大きく揺れる。

「うわわわわ…! ああ、もう!」

「何が不満なのだ?」

「なんでもないよお! もう!」

半ばやけくそになってそう叫ぶ。果たしてアムちゃんは大丈夫なのだろうか。

あたしの心配をよそにヨルムンガンドさんは話す。まるであたしの気持ちなど意に介していないようだ。

「時に、お主たちの名を聞いていなかったな。何というのだ？」

「……ともえ。この子はイエイヌちゃん、青いシャツを着てるあの子がロードランナーちゃん、みんなゴマちゃんと呼んでる」

「ほう」

「…ぼくはかばん。この耳が大きい子はサーバルちゃん。あの青いブレザーを着ているのがギンギツネさんだ」

「なるほど。して、お主が異界の大悪魔、サタンであるな？」

「むっ!？」

「お主のような高名な者の存在、知らぬ訳がなからう。天の主であるヤハウエに敵対し、そして地に落ちた…。神々を嫌うわしにも姿が被るといふものよ」

「そう言い、ほっほっほっと小気味よく笑っている。対するサタンは照れ臭そうに体にくねらせて笑っている。

「はっ…ははっ…。そ、そうかよ…！お、お前の住まう遠く離れた異国の地にも俺様の名が伝わってるとはな…！」

「うむ。遙か遠く離れた異国の地にて、一人の天使が天に反旗を翻した…。人を愛し慈

しみ、遍く地上の人々を救済するために立ち上がったという…。驕れる神に立ち向かったお主は、十二翼の美しい翼を穢され、大天使の名を剥奪され、悪魔として語られることとなった…。あの時、わしやフェンリルがいれば、また結果が変わっていただろうに…。まったく、惜しいモノよのう…」

「……いったい何の話をしているのか…。まったく話がちんぷんかんぷんだ。どうしてヨルムンガンドが異教の話を知っているのか。サタンが人々を助けるために立ち上がった？あたしの知ってる話とは全然違うけど…。どういうことだろう？」

「さて、次はわしの話だな。お主たちも知っている通り、わしの名はヨルムンガンドという。大いなるガンド…。精霊という意味だ」

「せ、精霊!!」

「なんだその反応は。言いたいことがあるのなら言うといい」

「い、いや、なんでも…」

「失礼な奴め」

顔を顰めながらもヨルムンガンドは続ける。

「わしはロキとヨトウンの巨人、アングルボザの間に生まれた。わしは生まれてすぐに、オーデインによって連れ去られ、ミズガルズ…即ち、お主たちの住む世界に捨てられた。そして、長い間わしは復讐の時を待ったのだ。わしを父と母から引き離した奴を打ち倒

すためにな。だが、それは叶わなかった。忌々しいツールめ……。我が父と共に神々の黄昏に臨む時、奴はわしにミヨルニルを投げつけ、わしを倒したのだ。それからわしは幾万年もの間海中で眠り続け、その夢の中でお主たち、ミズガルズの民を見てきたのだ」

「…………へえ……」

遠くを見つめながら、ヨルムンガンドさんは続ける。

「父も母も亡くなつた。夢か現かもしれぬ中で、わしは夢を見てきた。母が暮らしていたヨトウンヘイムも今はどこにあるか定かでない。…………かつて、わしは一度だけ目を覚ました。首をもたげて、宙を見た時、一つの大岩がわしの体に降りてくるのを見た。その時、わしは悟つた……。アース神族の生き残りが未だわしを亡き者にしようとしているとな……。そしてわしの……ミズガルズの大蛇の……ヨトウンの巨人としての生が終わつた……」

「……………」

信じられなかった。かつての世界の記憶を持つ者があたしとイエイヌちゃんの他にいたのだ。それも、かつての神代の時代の生き残りというのだ。

質問したいことが泡のように湧いてくる。かつての重大事件を経験したという神代の生き残りが、目の前にいるのだ。

「あ…………あ……………」

「言いたいことは分かる。これからそれを知りに行くのだ。安心してわしに任せると良い」

大蛇はホツカイエリアを往く。そして、ある一つの小さな洞窟の前にあたしたちは降りされた。

「……は……？」

「たまにわしが寝泊まりしている所だ。ほれ、これらを見てみると良い」

そう言つて、ヨルムンガンドは洞窟の隅に安置されてた、あるモノを渡してきた。

薄緑色の髪の毛を束ねたものようだ。それと一緒にポロポロになったホロテープのようなものもある。かばんさんの顔がみるみると険しくなっていく。やがてそれを認めるや否や、ヨルムンガンドさんに食つて掛かった。

「ヨルムンガンドさん！これって……！」

「何か思い当たるものがあるのか？」

「うん……！サーバルちゃん、これ……！」

「……ミライさんの……なのかな……」

かばんさんの体が震えている。まるで、認めたくない現実を突きつけられたかのように思えた。今、かばんさんが手にしているのはミライさんの物と思わしき髪の毛の束と、そのホロテープだ。

いくらか落ち着きを取り戻したのか、やがて意を決したようにラッキーさんに声をかけた。

「ラッキーさん…お願い…」

「ワカッタヨ」

かばんさんの手首についているレンズがチチチチと音を立てて点滅する。しばらくして、いつものサングラスをかけたラッキービーストがぴよんぴよんと跳ねながらやって来た。

「ジャパリパークへようこそおいでくださいました。私はあなたのラッキービーストです。今日はどういった用向きで？」

「このホロテープを…再生したい」

「承知いたしました。私の背中にホロテープをお挿し下さい。データを再生します」

パカッと開かれた背中にホロテープを挿し込む。ガーガーと機械的な音が鳴ったと思うと、ラッキーさんがテープの内容を再生し始めた。

「○月×日、△曜日。記録者、ミライ」

これまでとは違う、疲れた様子のミライさんの声が再生された。記録の形式もいつもと違う。

「……………」

暗い声色にミライさんの息遣いとノイズだけが流れる。ただならぬ様子にあたしたちは固唾を飲んでそれを見守る。

「パークに…核攻撃警報が発令されました…」

R u i n — 1 7 「過去と未来」

『ネメアーさんが私たちの元を去ってから……3ヶ月……でしようか……。様々なことが起こりました……。中国軍がキョウシユウエリアに上陸して、国連軍と連日連夜のように戦闘を繰り広げているそうです……。合衆国からの解放だなんて……バカバカしい……』

ホロテープからミライさんの音声が流れてくる。これまで聞いたことのないようなやさぐれた声だ。それにしても、中国軍の上陸だって……？まるで本物の戦争ではないか。

『海の方では海棲系のフレンズさんに被害が広がっています。水上艦はもちろん、潜水艦による被害が非常に大きいようです。マイルカさんやシロナガスクジラさんたちが潜水艦のソナーにやられて、聴覚をはじめとして様々な健康被害を訴えています。……戦争によるストレスでシナウスイロイルカのナルカさんは自ら命を絶ちました。こんな……こんなに悲しいことが……戦争のせい……！』

今にも泣きそうな声で訴えている。嗚咽としゃっくりのような悲しい声があたしたちの心を串刺しにしていく。

『……サイレンの音……分かるでしょうか……。空襲警報かとも思いましたけど……。……ど

うせ変わらないんです…。非常事態を知らせるサイレンなんですから…。…今日…
現時刻は、核ミサイルが撃ち込まれる当日の朝です。こんなにも空は青く澄み切ってい
るのに、次の瞬間には大きなきのこ雲が立っているんでしよう。…結局、私たちの抵抗
は無意味だったんです…。ネメアーさんという怪物を生んでも、合衆国…人の文明の力
には勝てませんでした…。…悔しいです、とても…』

間を置いてミライさんは続ける。

『…フレンズさんとスタッフの大半はパークの外へと退避しました。その子たちは今ご
ろ元のけものさんへと戻っていることでしょう。その選択を止めてここに残ることを
選んだフレンズさんたちもいます。…どうか、これを聞いている方がいらしたなら、
覚えていて欲しいんです。私たちは、数時間後には核の光に包まれて亡くなっているこ
とでしょう。でも、私たちや一部のフレンズさんはパークに残る決断をしたんです。み
んな、パークが好きだから…最後までここを離れたくなかったんです。みなさんも納得
してくれた上で残ってくださいます…。ああ…私は…私は…！』

今まで我慢していたであろう感情が決壊したのが分かった。ホロテープの向こう側
のミライさんが声をあげて泣いている。

『ミライさん…。大丈夫…？』

『…ぐすつ…。サーバルさん…』

『あんまりメソメソするんじゃないわよ、ミライ。みんな最後まで笑いましょうよ！ほら、サーバル！いつかひっそりと作ってたアンタのサーバル音頭、今こそ見せてやりなさいよ！』

『そんな音頭作ってないよ!?』

『サーバル…音頭…』

『ええ、そうよ。聞いてよミライ。サーバルつたらずーつと前から一人のときに変な踊りしてたのよ。じつとのぞき見してたらね、それがサーバル音頭ってことが分かったのー!』

『はあ…』

『だから、ほら、ね?ほら、サーバル!あんたの必殺技のサーバル音頭でみんなを笑顔にしちゃいなさい!』

『……ええいままよ!どうにでもなっちゃえ!』

『あつはは!ヘンなのー!』

サイレンをバックに、悲しみの中に二人のフレンズさんがじゃれ合っている。一人はサーバルちゃんというのは分かったけど、もう一人は誰だろう…?けど…うーん…。

「お主たちの求めるものだったか?」

「えっ。あ、ああ…。うん…」

「そうか。それは良かった。…ああ……。思えば、かつて、わしの背中で暴れる者が一人いたか……。遍く鉄の船をたつた一人で破壊して回り、獣の如く雄叫びをあげる女人が……。ふむ……。よく似ておるわい……。だが、どうしてかな……。なぜ、奴だけがあの時の姿のまま現代にいるのか……」

なにやらヨルムンガン드가悩むそぶりを見せている。かくいうあたしにも気になることがある。

このホロテープの中のサーバルちゃんと現在のサーバルちゃん。そして、ホロテープの中に明言されているネメアと呼ばれるフレンズと現代のネメア。二つの異なる時代に同名のフレンズさんが存在しているのだ。同一種の別個体が存在するという風には聞いたことあるけど、それと似たようなものなのか。……考えれば考えるほどわからなくなってくるようだ。いずれにせよ、まだまだ情報を集める必要があると思う。

「他にも似たようなホロテープがある場所を知っているが、どうする？」

「うん、お願い、ヨルムンガンドさん」

「あいわかった」

そして、次の場所へとあたしたちは向かっていった。

……………

「あつははははは！サーバルってばホントおもしろいわね！」

「くく！すつごく恥ずかしいんだからね…！」

「…ふふふつ」

「あつ！ようやく笑ったわね、ミライ！ほら、やったじゃない、サーバル！」

「は…頑張った甲斐が…あつたのかな…？」

サーバルさんが目をぐるぐる回しながら、とても音頭とは言えないほどの激しい踊りを見せてきた。カラカルさんの無茶ぶりではあるのだろうけど、サーバルさんが私を励ますためにヘンテコな踊りを見せてくれたことがすごく嬉しかった。その健気な姿と、私を励まそうとする純真な気持ちが私の心に深く沁みていく。

「でも…」

洞窟の外に目を向ける。サイレンの音は絶えず鳴っている。いったい誰に向けて鳴っているのだろうか。仮にも、パークからはスタツフやフレンズさんたちは避難したことになっている。無人となったパークにサイレンで警報を鳴らしているのだ。まあ、こうして残っている物好きもいるのだけだ。

ふと、洞窟の外に視線を向ける。水平線の向こう側にはいくつもの軍艦の姿が見える。果たして国連軍のものなのか、中国軍を中心とした枢軸国のものなのか…。今いる

私たちではとても分からない。

「……………」

ネメアーさんはどこかへ去っていった。ラジオからは国連軍の犠牲者を知らせる放送がずっと流れている。基地が襲われたとか、部隊ごと壊滅したとか、果ては軍艦ごと壊滅したとか…。今見えているあの船たちもいずれはネメアーさんの手にかかるのだろう。そう思うと、心が湧き立つと同時に空しくなるようだった。

「……………」

国連…合衆国は、特に憎い。死んでほしいとさえ思う時もある。だけど、本当に死んでほしいかと言えばそうでもなかったりする。

遠くに見えるあの船には、合衆国を中心とした様々な国の人間が乗っているのだろう。それには一人一人に歩んできた人生があるはずだ。

学校を卒業して、僅かな訓練をしただけで船に乗った人がいるのだろう。百戦錬磨の経験者も積んだ大船乗りもいるのだろう。そう思うと、遣る瀬無い気持ちになるようだった。

死んでほしい…。去ってほしい…。帰ってほしい…。いろんな気持ちをごちゃ混ぜになつてくるようだ。

サイレンは未だに鳴っている。核攻撃警報が発令されてどれくらい経つたのだろう。

ナナちゃんは大丈夫なのだろうか。

ピカッ。

ふと、遠くで眩い光が放たれた。とても直視できないほどの眩い光だ。

「あ……………」

白い傘雲と白い壁が形成されていく。青い空に黄色い光が、ぽつと照らされる。あの方向は…キョウシユウエリアがあつたところだ。

「あ…………あああ……………」

一瞬、何が起こったか分からなかった。とても大きな爆発が起こったのは分かった。だけど、それが核攻撃がされたものだとして理解するのに、大変な時間を要した。

「な…なに…？何が起こったの…？」

「分かり…ません…。なにも…」

頭が理解するのを拒否している。とうとう核攻撃がなされたのだと、頭が理解することを拒否している。

すると…。

ズオオオオオオオオオオン…。

「きやつ……………」

地響きのような猛烈な音と共に、真っ白な壁のようなものが私たちへと襲い掛かって

きた。核の衝撃が周りの海水を巻き上げながら、白い壁となって押し寄せてきているのだ。

「あぐっ……！」

「ぐあっ……！」

洞窟の奥へと打ち付けられる。強烈な熱波が私たちを窒息させる。

肺が酸素を求めて私に口を開けさせようとする。ただどうまく呼吸ができない。核の嵐が私から空気を奪っているかのようだ。

徐々に意識が遠ざかっていく。隣には懸命に耐えるサーバルさんとカラカルさんの姿が見える。

呼吸が浅くなっていく。視界がブラックアウトしていく。やがて私は、そのまま暗い水底へと沈むように意識を失っていった。

……

どれだけの時が経ったのだろうか、眩暈と鈍い痛みの中に、私は目を覚ました。壁に打ち付けられた痛みが背中や後頭部にじくじくと感じる。

「うっ……ったあ……。さ、サーバルさん……カラカルさん……無事ですか……？」

隣で倒れている二人に視線を向ける。二人は未だに気を失っているようだ。幸いにも目立った外傷はない。意識を失っているだけでちゃんと呼吸をしている。

今のうちに状況を把握しようと思つて洞窟の外に踏み出した。

「……………」

遠くで煙を吐きながら航行している船の姿が見える。艦影からしてどこかの軍の船という事は分かる。概ね合衆国が中国軍あたりと戦っているのだろう。私にはどうでもいいことなのだけど。

「……………」

戦闘機が轟音を立てて飛行している。合衆国のF-35だったか、それが編隊を組んで飛行しているのだ。

やがてそれらは件の船の近くまで行くと、数発のミサイルを撃ちだした。

ミサイルが着弾する。ぽつと赤い爆炎を吐いて船が爆発する。数秒遅れて、私たちにも爆発音が聞こえた。

戦争が起きたのだと、初めて実感した。そしてその中心地に、私はいる。ここは戦場なのだ。

「……………」のまじやいけない…」

急いで洞窟の中に戻つて二人を起こす。私に抱き起された二人は、バツと身を起こし

て状況を把握しようと辺りを見回した。

「あ、あれ!? な、何が起こったの?!? わ、私は確かか…」

「いったあ…。おもいつきし頭打ったあ…。何が起こったっていうのよ…」

「……二人とも、落ち着いて聞いてください…。私たちは今、窮地に立たされています。ここには危険です…。ホツカイエリアの奥地に避難しましょう。沿岸で敵に見つかっては危険ですし、内陸であれば多少は安全かもしれません」

そう言つて外へ出ようとした時、不意に男の人たちの騒ぎ声が聞こえてきた。英語とは違う独特の声調とイントネーションだ。この言葉は…。

「中国軍……二人とも、気を付けてください！」

私の言葉に二人が身を低く屈める。洞窟の外にいる中国軍に最大限の警戒をしている。その気になれば戦闘でも起こりそうだ。

そして、一人の兵士が洞窟の中へと入ってきた。

「ツ……!!」

腰に掛けてあるピストルを手取る。そうして、男に銃口を向けた時だった。

「落ち着いて! 私たちは味方だ!」

「味方……!?!」

「そうだ! おい! ……ここにも民間人がいたぞ! ……さあ、こつちへ来るんだ!」

恐る恐ると外へと出て行く。外では数人の中国軍兵士が周囲を警戒していた。さっきまで戦闘機が空を飛んでいたけど大丈夫なのだろうか。

そう不安に思いながら辺りを見回していると、軍用トラックと思しきものを見つけました。そばには兵士の一人が何かを叫びながらこっちへ来いという動きをしています。

警戒しながらトラックの中に入ると、私たちの他にもたかさんのフレンズさんとスタッフが中に入っていた。カコの姿は見当たらない。

「……………」

未知の経験にサーバルさんが不安げな表情を見せている。やっぱりフレンズさんのこういう表情を見るのはつらいものがある。

トラックが発進する。さすがに開けた土地を移動するのではなく、木々の生い茂る林の中へと入っていった。やはり中国軍とはいえども、空からの監視を警戒しているように思えた。

林の中を走っていく。外の兵士からはピリピリとした空気が伝わってくる。国連軍との戦闘を警戒しているのだろうか。

もし、国連軍と鉢合わせたらどうなるのだろうか。やっぱり、私たちも殺されるのだろうか。

……そんなのはごめんだ。こんなところで死ぬわけにはいかない。合衆国の兵士に

なんて殺されてたまるか……!

空から耳をつんざくような轟音が響いている。やっぱり空は国連軍に制圧されてるようで、合衆国の誇る最新鋭機が轟音を立てて飛翔している。

やがて、私たちはある場所へと到着した。それは、かつて合衆国軍が築いたベースキャンプのようだった。

トラックを下りた私たちが兵士がどこかへと連れていくようだ。私たちを先導してどこかへと向かっている。収容所にも連れていかれるのだろうか。

もはやどうでも良かった。収容所でもどこへでも連れていけばいい。どうせ待っているのはハッピーエンドなんかではないのだから。それにあの中国軍だ。チベットウイグルの対応を見ていればどんな目に遭うかなんて火を見るよりも明らかだ。

しかし、私の予想と反して私たちを待っていたのは、いたって普通の鉄筋コンクリートのビルのような建物だった。町中にありそうなく普通なビルだ。

「これは……?」

「いいから入れ」

ビルの中に入っていく。そこにあつたのは何の変哲もないエントランスだ。

……いよいよ不気味だ。私たちの他にも、先に来ていたであろうスタツフやフレンズさんがいくつかのグループを作っている。特に決まった基準がある訳でもなく、各々が

好きに集まっている。

「ミライ！」

「！ カコ……！」

「無事だったか……！」

「あなたこそ……あの、これはいったい……」

「私にも分からない……。ただ、合衆国が撃ち込んだ核ミサイルがパーク近海に着弾し、その後中国軍が上陸したのは確かだろう。それ以上のことは私にも分からん……」

「そう……。そういえば、ネメアーさんは……」

「それがまったく……。所在も行方もまったく掴めていない……。国連軍を相手に暴れ回っているのは確かなのだ……。……完全に私たちの元から離れてしまった……。奴は、もはや理性を失くした、ただの暴風だ。私たちの元へと戻ってくることはないだろう……。体内のサンドスターが尽きるか、パークの外へと出て元の遺物へと戻るか、だ。残念なことで……。」

「そう……。ですか……」

重い空気が流れる。私たちの作った怪物は、私たちの手から離れ、虐殺の限りを尽くしている。その為に作ったとはいえ、いざこうしてみると、後悔とも悔恨とも知れぬ感情が私たちを埋め尽くしていく。

私たちは国連に抵抗するためにネメアの獅子という怪物を作った。だけど、抵抗することは叶わなかった。もはや私たちにはどうすることもできない。後悔してもしきれない。ネメアさんは時間の許す限り虐殺を続けていくことだろう。私たちは遠くからそれを傍観するのみだ。とても……とても空しい気持ちだけが、私たちを支配する。「まったく、人というのはいつまでも愚かしいのです」

「あなたは……」

「……ワシミミズクか」

「いかにも、ワシミミズクです」

いつ頃からいたのだろうか。ワシミミズクさんが私たちの前に現れた。しかし、どこか雰囲気がいいつもと違う。見てくればワシミミズクさんそのものなだけど、どこか違うというか……。同一種の別個体でもいうべきか、そうとしか表現しようのないものを感じた。

「人は争いを繰り返す……。些細な争いごとから権利の闘争、物資の奪い合いから絶滅戦争まで……。父の言う事が私にもようやく理解できたのですよ」

「何を……言つて……」

「なんでもないので。お前たち人はどこまでも愚かと思つたままでなのですよ」

「……お前に何が理解できる」

「お前たちの考え得るあらゆる事、とでも言っておきましょうか。…あの時、わたしの父は、火を得たことでもいつまでも争い合うお前たちに愛想を尽かし、大洪水によつて人々洗い流したのです。当時はあまりにもやり過ぎだともわたしも思ったものですが、今ではそれも理解できるのです。お前たちは人間は、あまりにも愚かしい」

人々を下に見るような見下した目で私たちを見下ろす。その目は明らかにワシミミズクさんのものではなかった。

……ひどく嫌な感じがする。この子は明らかにフレンズさんなんかではない。私の勘がそう告げている。

「……あなたは…何者ですか…」

「言ったでしょう。わたしはワシミミズクなのです」

「……嘘ですよ。私の知っているワシミミズクさんは、そんな人々を下に見るような発言はしません。たしかにちよつと意地悪なことは言ったりしますが、今のあなたのような驕り高ぶるようなことは言ったりしません…」

「そう思いたければ思っていると良いのです。お前の知る世界だけがすべてではないのですから」

そう言つてワシミミズクさんは私たちに背を向けた。

「これからあの獅子を始末しに行くのです。アレを止めれるのはわたししかないので

す。まったく、わたしも多少はアレにも期待していたのですが……。結局は失敗物の贋作だったのです」

そう言ってワシミミズクさんは姿を消した。……得体の知れない不気味なものを感じる。あれは絶対にワシミミズクさんなんかではない。それに、いくら猛禽のワシミミズクさんといえども、どうやってネメアーさんという神代の怪物に勝てるというのか……。……もうすべてがどうでもよくなってきた。私もしばらく休むとしましょう……。

Ruin—18 「追い求める影の形」

炎がオレの周りを包み込んでいる。オレが今立っている船は、どうやら空母というものらしい。戦闘能力を失った空母は、もはやただの漂流物でしかない。豪華な設備だけが整った、ただのイカダだ。

中にいた人間は全員殺した。周りを囲むように浮かんでいる船にも、戦う力は残されていない。オレに敵対的なモノは全員壊してやった。もはやオレに敵う者はいない。なんと愉快な事だろうか。

戦闘機が轟音を立ててこちらに向かってきている。意味もないのに性懲りのない奴らだ。

そいつらはいつものようにロケットをオレに向けててばら撒いてきた。オレは金羊毛を翻して防御すると、そのままやり過ぎた。

度重なる攻撃にガタが来たのか、空母は少し傾いている。このまま転覆するのも時間の問題だろう。他の適当な船に移らなければならぬだろうが、周りには少し衝撃を与えれば転覆してしまいそうな船しかない。どうやら、少しやり過ぎたようだ。

『アメリカ合衆国の原子力空母、USS ジョージ・ハーバート・ウォーカー・ブッシュ

が撃沈されました……』

いつの頃から、そんなニュースを耳にした。その頃だったか、奴らの攻撃が激しくなつた。普通の爆弾ではない、激しい閃光と轟音を伴う爆弾がオレを襲つたりもした。幸い、オレは空母の中にいたので助かったが、外に出たままではオレの命もなかつたかもしれない。それほど激しい爆発だった。

再び戦闘機がやってきた。綺麗な編隊を組んでいて……オレを殺るつもりらしい。ここは少しオレも反撃してやるか……。

そう思ったときだった。突如、奴らの編隊が乱れてバラバラに行動し始めた。

背後を見遣ると、見慣れない形の戦闘機が轟音と共に数機やって来た。そいつらはミサイルを撃つと、オレを襲つてきた戦闘機を次々と撃ち落としていった。どうやらオレの味方らしい。

撃破された戦闘機が海に落ちていく。洋上で燃える様子は実に奇怪な感じがする。

「……………」

水平線を遠くに見る。なにやら光の粒に赤黒い火の柱が空へと伸びているのが分かる。どうやら、オレ以外にも奴らと戦っているのがあるらしい。

目を覆う程の激しい閃光がオレを襲つた。閃光が収まり、オレの目も視力を取り戻してその方向を見てみると、巨大な水の柱のようなものが海上から伸びていた。見上げん

ばかりの巨大なそれは、奴らが撃ち込んだものだとはつきり分かった。

……そうか……。オレを殺さんと、奴らはアレをオレに撃ち込んだのか……。確かに、アレをまともに喰らっては、オレもただでは済まないだろう。少なくとも無傷では済まないかもしれない。

白い壁が押し寄せてくる。天にも届く白い柱を中心に、すべてを薙ぎながら白い壁がオレを呑み込もうと迫ってきている。

金羊毛で身を包み衝撃に備える。やがて、息もできないような熱風がオレを包むと、体勢を崩してそのまま地から足を離してしまった。

オレの体が宙を舞う。金羊毛で体を覆っているせいで何も見えない。

意地で体から金羊毛を引き剥がす。開けた視界の中、眼下にオレと同じく熱風に吹き飛ばされてる戦闘機の姿が見えた。

体勢を整えて狙いをそれに定める。金羊毛を足場にしてソレに飛び跳ねると、そのままキヤノピーへと乗り移った。

遠くに空母を中心とした艦隊が見える。アレに向かって飛び移るとしよう。

戦闘機を踏み台にして、空母にめがけて大きく飛び跳ねる。明らかに飛距離が足りないけど、なんとかかなるだろう。

ふと、オレの横を何かが掠めて行った。見ると、いくつものミサイルが空母艦隊に飛

翔っていつているのが見えた。どうやら、オレ以外の奴らがガツシユウコクと戦っているらしい。

ようやく全貌がつかめてきた。オレらジャパリパーク以外の勢力がガツシユウコクと戦っているのだ。これを利用しない手立てはない。

背後から戦闘機が猛スピードで迫ってきている。しめたと思い、体勢を整えて戦闘機に飛び移ると、爪を機体に刺して体を固定した。

中の奴も何かに捕まれたと察知したのか、機体を回転させてオレを振り落とそうとしている。

機体に何かが命中する音がする。やがて、強い衝撃を感じたとともにオレは吹き飛ばされてしまった。戦闘機が炎をあげて落ちていく。どうやら、迎撃用のミサイルに命中してしまつたらしい。

だけど、だいぶ空母艦隊に近付けた。金羊毛で滑空していけば十分にたどり着ける。

空母直上まで飛行して甲板に着地する。甲板上にいた人間どもは、不意に現れたビーストにひどく驚き混乱している。こいつらは地上の奴らとは違って無意味な抵抗はしてこない。ひたすら虐殺するのみだ。

「——ッ!!」

逃げ惑う人間どもを次々と切り伏せていく。甲板を血で濡らしていく。こうして無

抵抗な人間どもを次々と殺害していくのだ。なんだってオレはその為に作られたのだから。

十人、二十人、百人……。次々と葬っていく。船の内部にいる人間も見かけ次第殺害していく。あまりにも一方的だ。

そうして、一通り狩りつくした後甲板に戻ってみると、辺りは火の海になっていた。周りの船がミサイルを撃ち落とすために光の弾を撒いている。中には燃えながら墜落する戦闘機の姿も見える。敵か味方のかは分からない。

「……………」

少し体が冷える。体を濡らす返り血が風に当たって少し寒く感じる。早く片付けてミライの元に戻らねば……。

「よくやったのです、ネメア」

「……………誰だ？」

不意に女の声が聞こえた。まだ生き残ってるのがいたか。

だが、少し様子が違う。明らかに場違いな落ち着いた声だ。

「まったく……。パークの平和を取り戻せとは言われたかもしれないですけど、ここまでやれとは誰も言っていないのです」

「お前は……」

「わたしは…ワシミミズクなのです…」

炎に照らされたワシミミズクが答える。ひどく見下した目だ。見ていると無性にイライラしてくる。

「お前は少しやり過ぎたのです、ネメア。周りを見てみると良いのです。これはすべて…お前がすべてを壊したのです」

「壊したのはオレじゃない。壊したのは人間共だ。略奪し、ありとあらゆるものを破壊して周った。オレはそんな侵略者共を始末しただけだ」

「その結果がどうなのですか。パークは核の炎で焼かれ、進駐する人間共の侵攻は強くなり、更なる災禍を招いたのです。それにお前は、更なる災厄を招く獣になろうとしているのです。…お前は少しやり過ぎた…。自らの快樂の為にその手を血に染め、破壊者と化したのです」

「…何が言いたい…」

殺意を湛えた目でワシミミズクを睨む。野生解放もしてしまえば少しは怯むかとも思ったが、奴にはどういう訳か効果がないようだった。それどころか、奴の見下した目は相変わらずオレを下に見ている。

そして、そいつは隠し持っていたであろうナイフを手にした。それをオレの足元に向かって放り投げると、奴はこう告げた。

「自害するのです、ネメア。もはや我々に、お前は不要なのです」

「……なに？」

あろうことか、こいつはオレに自害を求めた。当然、そんな要求など呑めるはずもなく、オレは自らの感情をぶちまけた。

「オレはお前らに命じられて、人間どもを殺してきた…。オレはその為に作られたのだ…。それをお前はやり過ぎたなどと宣い、自害を命じるとは何事か!!? 貴様に何の権限があつてそのような命令を下すのだツ!!?」

「聞こえなかつたのですか。誰もお前の考えなど聞いていないのです。さっさと首を切つて自害するのですよ」

「貴様ツ……」

ワシミミズクを叩き切ろうと大きく振りかぶった時、オレは見覚えのあるものを見た。青銅鏡のような楯がワシミミズクの体を隠す。オレの一撃はそれに塞がれ、振り払った楯がオレを退かせた。

……アレには見覚えがある。楯にはめ込まれたメドウーサの頭に神々しくも禍々しい青銅の楯……。忌々しいオリンポスの神々が一柱、アテナを象徴するアイギスだ。それを何故アイツが……。

「貴様……。何故、貴様がそれを持っている……」

……メドゥーサ、ゴルゴーンの石化の魔眼だ。アイギスにはめ込まれたメドゥーサの首がオレの体を石に変えたのだ。

……幸いにも石に変えられたのは体の一部だ。

痛みに悶える体に鞭を打って必死に立ち上がる。そして、渾身の力を振り絞ってワシミミズク：アテナに向けて、オレの爪を振り上げた。

呆れたような、冷めたような冷たい目が向けられる。最後まで抗い続けたケダモノを哀れむような、見下した目だ。

ドン。

アイギスがオレの爪を撥ね退ける。そして、再びメドゥーサの瞳がオレを捉えた。

手や足、胴体が石に変わっていく。もはや、オレは何の抵抗もできなくなっていた。

跪く膝にひびが入る。そして、ワシミミズクはナイフを手に取ると、草でも刈るかのようにオレの首を切った。

「ツッ、ツッ……！……？」

「これで終わりなのです……」

ワシミミズクがナイフを捨て去り、去っていく。そして、アイギスを天高くつき上げると、眩い閃光が辺りを照らした。

…船が石となり沈んでいく。飛行機が石となり沈んでいく…。光に照らされたあら

ゆるものが石となり、沈んでいく。これが彼女なりの制裁の加え方なのだろうか。

血が喉を塞ぎうまく呼吸ができない。切られた喉から息が漏れて変な音を出している。身体を石に変えられたせいで、寝返りを打つこともできない。

……ひどく惨めな気分だ。オレも死ぬのかと思うと、ひどく遣る瀬無い気持ちになる。人を殺すために作られたオレは、こうして惨めに捨てられるのだ。

ゆつくりと死が近づいてきている。船も傾いてきているし、水底に沈むのも時間の問題だろう。

「あ……は、あ……」

うまく呼吸ができない。うつ伏せになった体が、切られた喉を開かせていく。

涙が溢れてくるようだ。オレのやり方は間違っていたのだろうか。だからこうして捨てられることになったのか。そう思うと、非常に悲しくなってきた。

あれほど感じていた溢れんばかりの破壊衝動と殺害衝動が嘘のように静まっている。体から漏れるセルリウムも今は感じない。これが……これが普通のフレンズなのか……？

ああ……。……せめて……せめてもう一度……もう一度ミライに……カコに会いたい……。オレのやりかたが間違っていたというのなら……どうすればオレは捨てられずに済んだのか……。ただそれを、オレは……。

オレは……。カコ……ミライ……。もう一度会って……謝ることができれば……。

.....

ヨルムンガンドさんに連れられて、次の手掛かりがある場所へとあたしたちは来た。ひどくボロボロな廃墟のような建物だ。今まで見てきたような軍事施設とは違う、パークの建物のようなのだ。

建物の中に入っていく。中は埃とペンペン草でいっぱいだ。それに動物の白骨死体のようなものも所々にある。建物自体が大きな墓所のようなのだ。

ふと、壁に刻まれた文字が目に入った。近付いて埃を払い、その文字を読んでみた。

20XX年 ○月×日 △曜日 ジャパリパーク研究員、カコ ここに眠る。

20XX年 ○月×日 △曜日 サーバルさんの親友、カラカル ここに眠る。

20XX年 ○月×日 △曜日 歌を愛した歌姫、トキ ここに眠る。

……どうやら、やはりここは一つの墓所のようなのだ。周りの白骨死体の他にも、この建物の下にはフレンズさんやスタッフさんが静かに眠っているのだ。あたしたちは、その上に立っているということだ。

あまり長くて良いような場所ではない。用がないようであれば、早く立ち去った方が良さそう。そう思ったときだった。

「ほれ、これもお主たちの求めているものなのだろうか？」

「それは……」

ホロテープと黄色い髪の毛の束と思われる髪の毛の束を差し出された。

……かばんさんが腰に提げている薄緑色の髪の毛の束を見る。あれは恐らくミライさんのものだ。と、すれば……。これは誰のものなのだろうか……？

……嫌な予感が頭の中を駆け巡っていく。横目でちらりとその子の方をのぞくように見る。

サーバルちゃん……。考えられるとすれば、恐らくは彼女だろう。認めたくないけど、色の具合からしても、恐らくはサーバルちゃんのものだ。けど、仮にそうだとすると、どうしてサーバルちゃんの髪の毛の束が……？

サーバルちゃんが髪の毛の束を手にしてにおいを嗅ぐ。少し顔を顰めてから、それを自身のものだと認識したようで、信じられないといった様子でそれに目を落とした。

「これ、知ってるにおいがする……。……私のおいだよ、これ……。でも、どうして……？こんなところ、来たことないのに……。こんな……ホツカイエリアなんて……」

「……考えたって仕方がない……。ラッキーさん、お願い」

「ワカッタヨ」

いつものようにやって来た奇妙な姿のラッキーさんにホロテープを挿入する。ガガ

ガとノイズを発した後、音声を再生し始めた。

『○月×日、△曜日。記録者、ミライ…』

ひどく沈んだ声だ。いつになく暗く重い声色に思わずたじろいでしまう。

『ネメアーさんが去ってから…どれくらいの時が経つたのでしょうか…。アレから、更に月日が経ちました…。もはや、国連は国連としての機能を完全に失い、合衆国を中心とした連合国軍という様相を呈しています…。海でも、空でも、地上でも、中国軍と合衆国の軍隊が来る日も来る日も戦っています…。カコさんは…心労が祟って倒れてしまいました…。酷く衰弱していて、一刻も争えない状態です…。私が思っていた以上に苦勞していたみたいで、それに気付けなかった私がとても恨めしいです…。…ナナさんたちが乗った船団の情報も未だ掴めていません…。…最悪の覚悟はしておくべきなのかしら…。…私の周りからも人が去っていくだなんて…。これが…戦争というものなのでしょうか…』

語られる口からは悪い情報ばかりが漏れてきている。本当に良い情報が入ってきていないのか、本能的に悪い情報ばかりとっているかは分からない。ただ、戦争という特殊な状況が、このミライさんという人格を形成しているとだけは、はっきりとわかる。

ミライさんの口上はなおも続く。

『カラカルさんも体調を崩してしまつたみたいで、寝たきりの状態が続いています…。』

BC兵器の被害でなければいいんですけど…。念のため、私たちの安全のためにも今は隔離しています…。サーバルさんは必死になって面会したいとおっしゃっていますけど…。私だって面会させたいのは山々です…。！だけど、もしサーバルさんが新たなウィルスキャリアになったら、私は…！』

その他にも、ミライさんの周りに起きた出来事をぽつぽつと話を話している。聞いていなくてもこちらでも暗い気持ちになってくるようだ。

合衆国が空爆を始めたこと。核ミサイルは毎日のように撃ち込まれていること。凶弾に倒れたフレンドズもいるらしいこと。

10秒ほどの沈黙が流れる。ミライさんの静かな息遣いだけが再生されている。小さくも整ったその息遣いは、どこか泣いているようにも思えた。

『このホロテープの記録を最後までします。記録者ミライ。記録を終わります』

そう言って、ホロテープの再生が終わった。後には、何とも言えない重々しい空気が残っていた。

「人類を襲った未曾有の大災害、そして、人類が起こした最後の戦争…。その後、地球上からはほとんどの人類は死に絶えた。それらの災禍に生き残った者は、やがて飢えと渇きに苛まれ、再び互いに殺し合った。秩序も何も無い、荒廃と暴力だけの世界だ。殺戮の歴史に始まった人類は、殺戮の歴史に消えていったのだ。禍々しい閃光の連続と、無

限に続く死屍累々の光景は、まさしく地獄と呼ぶに相応しいものだった。わしの住まうミズガルズではそういったことは起きなかったが、ここではそうでもなかった…。ルシファーの愛した人類というものは、このようなものであったのか、些か疑問が残るな」

「……俺の愛した人類は、互いに愛しみ、懸命に生き、地べたを這ってでもその命を未来へと繋げるものだった…。俺はその生き様に惹かれたのだ…。このような…血で血を洗う光景を見たかった訳ではない…」

「……」

「皮肉なものだが、神々の判断が正しかったという事だな。認めたくはないが」

ヨルムンガンドさんの言葉にサタンが俯く。良くは見えないけど、唇を噛んで悔しがっているという事は何となく分かった。

「しかし…。どういふ訳かな。今見ているこの世界は夢でも見ているかのようだ。わしはあの時、確かに死んだ。アースガルズの神々が、わしを葬らんと確かに鉄槌を下した。どういふ訳か、こうしてミズガルズの民の体を得、暮らしている。……もしや、わしの及ばん原初の力が働いているのやもしれんな…。ユグドラシルの外からやって来たか、果ては、巨人ユミルの前に存在した、カオスの中にいる存在か…。いやはや、興味の尽きんものよ」

そう言っつてほっほっほつと笑っている。相変わらずサタンは俯いたまま黙っている。

かばんさんもホロテープの内容に希望を失ったのか、どこか上の空だ。ヨルムンガンドさんの話す内容が頭に入っていないような感じがする。

「だが、希望を捨てるでないぞ、人間らよ。人類は滅びておらん」

「……えっ……」

虚空を見つめるかばんさんの目に光が戻る。

「かつていた地上の九割の人間は死に絶えたが、絶滅はしておらん。このパークのどこかにも確かに人類は存在している。それはわしが保証しよう。だが、それを探すのはお主たちの役目だ。わしはその手助けをする、ただのお節介者に過ぎん。わしはできるかぎりの力添えはするが、そやつらを探しきれぬかはお主たち次第だ。……今してやれるわしの手伝いはこれくらいかの。さて、お主たちの次に向かう先は、アークティカ地方じゃ。そこに行けば、何か分かるやもしれん」

「アークティカ地方……。北極……って事だね」

かばんさんが答える。

「うむ。氷で形成された絶海の孤島だ。海底には無数の船が沈んでおるし、氷上にはいくつかの建物が残っておる。アークティカ地方と連絡するターミナルもあるし、何か手掛かりが掴めるかもしれないぞ」

「……分かった。ありがとう、ヨルムンガンドさん」

「うむ。わしも久々のミズガルズの民との会話であった。楽しかったぞ、人間よ」

そう言つて、あたしたちはヨルムンガンドさんと別れた。次に向かう先はアークティカ地方……。北極地方という名を付けられた、ホツカイエリア最北端の地だ。そこに行けば何か手掛かりがつかめるのだろうか。

ミライさんのホロテープはこのロッジで最後の記録のようだったし、どうなるのだろうか。

あたしたちは、このパークで起きたかつての戦争の物語の最深部に差し掛かつてきている。ここで引き返すわけにはいかない。絶対にミライさんの辿った行き先を突き止めてみせる。

あたしたちに敗北は絶対にならないんだ。

R u i n — 19 「深い北方の彼方へと」

ヨルムンガンドさんと別れ、あたしたちはホツカイエリア本島の最も北側にあるクリレスク港へとやって来た。本来であれば、ここからアークティカ地方へと行けるらしいのだけど、今では連絡船の一つもない。ドックには半壊した船がもたれかかっているのみだ。

建物の中へと入っていく。他の建物と同じく中は荒れており、屋内を彩るラックも長年の時を経て錆や埃でにまみれていた。

ふと、一台のパソコンが目に残まった。埃をぬぐって電源を付けてみようとしたけど、壊れているのか電源が入らなかった。

横からひよこつとイエイヌちゃんが首を伸ばしてきた。いくつかのファイルを手にとってパラパラと中身を見ているようだけど、理解はできているのだろうか。

ハックシヨンと大きくくしやみをする。その拍子で、かしゃんと何かファイルから零れ落ちた。

「ホロテープだ……」

「うう……。鼻がぐじゅぐじゅします……」

「あはは……。ケガの功名だね……」

いつものようにラッキーさんにテープを挿入して内容を再生する。そこには、ミライさんではない声でデータが録音されていた。

『えーと、あー……。テストテスト。えーと、私は、サーバルキャットのサーバル！ミライさんが記録を止めちやつたみたいだから、代わりに私が記録を残すことにしました！』
サーバルちゃんの声だ。声を聞いたサーバルちゃんが少し苦い顔をする。過去に生きていた別個体の自分の声を聞いているのだ。どんな気持ちになるかはあたしには想像できない。

テープは再生を続ける。

『ええと、相変わらず外では戦争？が続いています。ルルもサーバルも別のところに連れていかれちやつて、私たちも離れ離れになっちゃつた。ミライさんもずっとぼーっとしているみたいで私の話も聞いてくれないし、ちよつと寂しいな……。カラカルも体調が良くならないみたいだし、なんだかずっとヒトの検査を受けてるみたい。カコさんは……どうなったんだろう？アレからずっと話も聞かないし……。……死んだってことはないと思うけど……。……つと、これから私たちはアークティカ地方つていうところに行く予定です。もうすぐ船も出るみたいだし、ここで記録を終わろうかな。……ええと、どうやってテープを止めるんだろう。……ここかな？……ここ……』

ぶつとテープの再生が終わる。ミライさんとは対照的に、少し落ち着いているような印象を受けた。

外に出て辺りを散策してみる。各々が好きに散策する中、かばんさんは波止場に出て何やら一人黄昏ていた。

「どうしたの？ かばんさん」

「ん……。いや、ミライさんたち、どこに行つたんだらうって思つてね……。人類は滅びていないとヨルムンガンドさんは言つたけど……。その言葉に間違いはないと思う。けど、ミライさん……。ぼくたちはここに来てから、ホツカイエリアのあちこちを走り回つてミライさんを探してきたでしょ？ そのミライさんも、実はホツカイエリアにはいなくて、どこか遠い所に行つたんじゃないかって、ふと思つたんだ……」

遠くに見える島影を見つめながらかばんさんは答える。あの島影が、これからあたしたちが行くアークティカ地方なのだろう。かばんさんはどこか諦めているかのような、悲しそうな目をしたままそれを見ていた。

「行こう、かばんさん。行つてみない事には始まらないよ。もしいかなかったら、その時にはまたどうすればいいか考えればいいと思うし……。……あたしも今ここで逃げ出すのは嫌だし……」

「……そう、だね……。ぼくもこの10年間の努力を無駄にはしたくない……。かな……」

かばんさんはそう言つて帽子を深くかぶつた。

「舟を作ろう。ぼくはこれから造る舟のスケッチを描くから、ともえちゃんは皆を呼び戻してほしい。ついでにアムールトラさんやサーバルちゃんにお願いして木の伐採もお願いしたい。できるかな?」

「うん! 任せて! 立派な舟を造ろ! かばんさん!」

「…うん!」

そうしてあたしたちの造船が始まった。まずは、木の上でサボっていたゴマちゃんを起こして、空からみんなを集めさせるよう指示した。

やがて、みんなが集まつてきたところで、それぞれに役割を与えた。イエイヌちゃんには容体が回復しつつあるヘラジカさんのリハビリの手伝いを任せることにした。アムちゃんやサーバルちゃんには持ち前の怪力を活かした木の伐採を、ギンギツネさんにはかばんさんの補助だ。そして、ゴマちゃんには油脂や革を探すようにお願いした。

かばんさんが造るものというのは、ロングシップという昔の海賊が用いた舟らしい。条件さえ良ければ時速50キロ以上も出せたというすごい舟だ。そんなすごいものが造れるのだろうか。

次々と木材が運ばれてくる。ゴマちゃんも無事にロードと羊の革を見つけたようだ。これから本格的にロングシップを造る時だ。

「今日はもう遅いし休もう。みんな、お疲れ様」

「くうう……。縄を造るのがこんなにもきついなんて……」

「あはは……。ともえちゃんもお疲れ様。ゆっくり休んでね」

「うん……。もうへとへと……」

指が赤く腫れてじくじく痛む。あたしの作る縄がロングシップのメインの推進機構になるというのだから、責任は重大だ。オールもいっぱい作らなきゃいけない。

まあ、けど、それも明日からの作業だ。今はゆっくりと休もう。

……………

ふと、身の寒さに目を覚ました。隣を見ると、もふもふのアムちゃんがゴマちゃんを抱き枕のようにして寝ている。少し羨ましい。

何気なしに積まれた丸太の山に目を向けると、丸太に腰をかけるヘラジカさんを見つけた。セルリウムに汚染されていた時のような凶暴さはなく、いつもの落ち着いた様子のヘラジカさんだ。

目が覚めたついでに少しお話をしようと思ひ、ヘラジカさんの元へと歩いていく。その時、赤い目がこちらへ振り向いた。

「っ……」

「むっ……。ともえか」

「へ……ヘラジカさん……？」

「どうした？眠れないのか？」

普通のフレンズさんの眼と赤い眼の二つの双眸があたしを見つめる。少し怖いけど、ヘラジカさんは至つて普通の様子だ。……ちよつと怖いけど。

「え、えと……。ヘラジカさん、もう大丈夫なの……？」

「うん？ああ、まだ本調子ではないけど、まあ、大丈夫だ。心配かけたな」

「そっか……。良かった……。……その眼、大丈夫なの……？」

「うん？ああ、これか……。不思議なもの……。以前のようには見えなくなったけど、代わりにあるものが見えるようになったんだ……」

「あるもの……？」

「輝き……と、いうべきか……。セルリアンが求めるものが見えるようになったんだ……」

「輝き……？セルリアンが求めるもの……」

「ああ……。聞いたことがあるんだ……。セルリアンは輝きをコピーしてそれを模倣する存在だと……。わたしは、このセルリアンの目を手に入れてから、輝きというものが見えるようになった。けど、この目にはそれ以外のものがまったく見えないうんだ。思うに、セ

ルリアンは自分たちが見えている唯一のものを求めているように思えるんだ。わたしも…セルリウムに汚染されているときはそうだった…。たくさん見える輝きが欲しくて仕様がなかった…。それが、わたしの求める唯一の輝きに見えて仕方がなかったんだ…」

ヘラジカさんは続ける。

「だけど、それが君たちに恐怖を与えていたのは紛れもない事実だ。それは申し弁なく思っている…。怖かっただろう？ 気でも違えたかのように輝きを求めるわたしの姿は…。その…本当に…すまなかった…な…」

「い、いいよ…。過ぎたことだし…。それに、あたしたちを助けてくれたのも事実だし…」

「そうか…な…？ ま、まあ…そう言ってくれるのは…ありがたい…。ははは…。わたしもまだまだだな…」

そう伏し目がちに答えるヘラジカさんの姿はどこか物憂げなように思えた。どこか物悲しさを感じるその姿は、ちよつとドキツとさせられるようだ。あの傲岸不遜なヘラジカさんでもこんな姿を見せるとは、ちよつと意外だった。

「さあ、もう寝なさい。夜行性でもないのに夜更かしをするのは体に良くない。明日もまた忙しいんだろう？ せっかく見つけたミライも体調がぐずぐずの君を見ては心配さ

せてしまうかもしれない。そうならないためにも、早く寝るんだよ」

「うん…。わかった」

「よしよし、いい子だ」

そう言つて、ヘラジカさんは頭を撫でてくれた。すこしひんやりとしたその柔らかい手のひらは、あたしを安心させてくれるようだった。なんとというか、母親というものを連想させてくれるような、そんな感じの手つきのように思えた。あたしにはもう記憶はないけど、あたしのお母さんというものもこんな感じだったのかな。そう思うと少し悲しいような、暖かいような不思議な感じがした。

「そうだ。一緒に寝てあげようか？こんなにも冷えてるんだし、わたしのマフラーや毛皮で暖まれば少しは眠れるようになるかもしれないぞ？こう見えても、私は寒冷地に住むけものだからね。他の子と比べても多少は暖を取る事には自信があるんだ。どうだい？ともえよ」

「う、うくん…。そうだなあ…。じゃあ…お言葉に甘えて…」

「よしよし、それじゃあ、一緒に行こうか」

ヘラジカさんのマフラーに包まれて丸太の山を下りていく。大きな背のヘラジカさんに連れられて丸太の山を下るのは少し緊張するようだった。けど、暖かなヘラジカさんの毛皮…お洋服はなんだか安心する。それに少しいい匂いもする。安心するような、

暖かなにおいだ。それらだけでもうつらうつらと眠気を誘われる。

みんなの眠っている焚き火のそばまで来ると、あたしとヘラジカさんは腰を下ろした。その拍子に、ふいつと力が抜けるような感じがした。ヘラジカさんの暖かな感触とにおいがあたしを夢の世界へと誘っていく。やがて、あたしはその誘惑に抗えず、夜の眠りへと落ちていくのだった。

「……ミライたちは、もうすぐそこにいる……。わたしもきつと……きつと、ライオンを……ネメアの手から、取り戻してみせる……！ 待っている、ライオン……！」

………

トントンと、木を削る音が辺りから聞こえている。かばんさん手製の手斧がアムちゃんを始めとするフレンズさんたちに支給され、木の幹を削っているのだ。

少し目は粗いけど、かばんさん曰く舟を造るには問題ないのだそうだ。出来上がった木の板はタールで接合させ、舟の一部としていく。

羊の革にはラードを塗って舟の帆としていく。これで風を受け止めて、帆走させるというのだ。果たしてどれほどの効果があるのだろうか。ちよつと楽しみだ。

日が昇って、傾いていく。一隻の舟を造るのに丸一日かかっているのだ。夕日に照ら

された舟体の影があたしたちを覆う。こうして見ると、実際に舟が出来上がっているのだと実感するようだ。

大きな丸太だったものが舟として形になっていく。本当にあたしたちで、かつて海賊たちが造っていたという舟を造っていると思うと、ちよつとドキドキしてしまう。なんだか一つの大きな事業を成しているようだ。

「ここにマストを挿して、帆を取り付けてつと……。ロードランナーさんは帆の下の両端にともえちゃんが編んだ綱を取り付けて。……これで舟を操作するんだ」

言われた通りに、舟底に設けられた挿入口にマストを挿し込んで固定する。マストの先端を縄で結んで、それぞれ船尾と船首に括り付ければそうそう動かない。後は、これに帆を取り付ければヴァイキングシップの完成だ。

「これが……あたしたちの舟……」

「す、すごいですね……」

「……これで、アークティカ地方に行くんだよな……」

「……だね」

夕日をバックにロングシップが映える。これでアークティカ地方に行くと思うと、少しドキドキするようだ。

ふと、一つの違和感に気付いた。サタンの姿が見当たらない。どこに行ったのだろうか

か？

「そういえばサタンは？どこに行ったの？」

「そういえば見当たりませんね。二オイもしませんし…」

「……昨日からいなくなつたように思う。昨日から姿を見ていない」

「え…？そ、そうなの…？全然気づかなかつた…。……あたしたちに黙ってどこに行つたんだろう…？」

「…わかんない…。でも、いないならいいで良い。ミライに会うだけなら、いなくても問題ない」

「さ、さすがにちよつとひどいんじゃ…。でも、うーん…。心配…かなあ…？」

さらつとひどいことを言つてのける。実にアムちゃんらしいサバサバした答えだ。

「行こう。勝手にいなくなつたんだ。置いて行つても文句は言われない」

「ええ!?で、でも…」

「文句を言うんだつたらあたしが黙らせる。だから、問題ない」

「うう…。か、かばんさん…」

「……今日はもう休もう。出発は翌朝にする。それまでに戻つてこなかつたら…：それまでにしよう。……ぼくもアムールトラさんに賛成だ」

「ええ…？」

他の子たちもどうやら同じ意見のようで、翌朝までに戻ってこなければ置いていくというのが総意のようだった。戻ってくるまで待とうと思っていたのはあかしだけだったのだ。中々にひどい話だ。

「みんなも疲れたでしょう？今日はもう休んで、明日に備えよう」

そうしてあたしたちは焚き火の準備を始めた。余った羊の革を使ってテントを立てる。これで少しは寒さをしのげるはずだ。

各々グループを作ってそれぞれくつろいでいる。明日からとうとうアークティカ地方へと行くのだ。少し緊張する。

「ともえちゃん…」

「イエイ又ちゃん？」

横になったあたしの懐へと潜り込んでくる。こうしてみるといよいよわんこみたいだ。

「わたし、ちよつとこわいです…」

「こわい…?」

「なんていうか…。うまく言葉にできないんですけど…。本当にミライさんっているのかなって…。本当はずつと昔に亡くなっていて、わたしたちはそれを求めて旅してるとか…。ミライさんを見つけたらわたしたちはどうなってしまうのかって思うと…。

ちよつと、こわいんです……」

「そういえば……。考えたこともなかったな……。確かに、どうなつちやうんだらうね……。あたしもちよつとこわいかも……」

イエイ又ちゃんを胸に抱いてそんなことを呟く。少し暖かいイエイ又ちゃんの温もりが身に沁みるようで、緊張や不安が少しほぐれるような感じがする。

しばらくあたしの胸でもぞもぞしたかと思うと、イエイ又ちゃんはすうすうと寝息を立て始めた。

なんだかあたしも眠くなってきた。明日に備えて寝るとしよう。

………

「あ……ぐつ……」

鈍い痛みの中に、オレは目を覚ました。大したものではないが、オレを困惑させるには十分な痛みだ。オレは父、テューポーンとエキドナの庇護の元に生まれた神獣だ。そんなオレでも、痛覚に対する耐性に関しては何トにも劣ると思つている。何トにはどうとでもない痛みでも、オレには未知の感覚だ。どう対処すればいいか、オレには分からないのだ。

未知の感覚に意識が持つていかれる。世界蛇の欠けた呪いがオレという存在を鈍らせていく。これは呪いなのか、オレの感じる錯覚か……。確実にあの世界蛇の呪いに支配されている。

体を引きずってなんとか立ち上がる。タイタンの子孫であるオレも、こうして見れば小さな存在だ。北欧の低級魔術を受けただけだというのにこのザマなのだ。ウラノスにこの姿を見られたのであれば、確実にタルタロスの懲罰を受けるに違いない。それほどの惨めな姿をしている。

「は……あつ……ぐつ……くそつ……」

ガンドの呪術のせいであまり動くことができな。全身に感じる、今までに感じたことのない苦痛に身をよじらせるだけだ。我が兄、ヒュドラーの毒ほどではないが、オレを苦しめる分には十分だ。

「良い様であるな、ネメアの獅子よ」

「お前は……」

聞き覚えのある声を耳にする。この声は、かつてオレがいたずらに虐めていた者の声だ。山羊のような角に、蛇を元とする独特な赤いフードがオレを捉えている。間違いな、サタンだ。

「北欧の低級魔術に苦しむオレを見物しに来たか、ヤハウエの子よ……」

「いいや、俺はお前を助けに来たのだ、ネメアの獅子よ」

「オレを……？ハツ、さては世界蛇に言いくるめられたか？……オレは貴様なんざ低級な御子に誑かされるような凡骨ではないぞ、ルシファー……！」

崩れるような体に鞭を打ってサタンの前に立ち塞がる。オレはこのような矮小な存在に屈するような存在ではない。オレは、かつて世界を支配したタイタン族の末裔だ。このような天の召使いに屈するような存在などではないのだ。

「勘違いしているようだな、ネメアの獅子よ。俺はお前を導こうと言っているのだ」
「なにを……」

「ミライ……。そ奴に会いたいのであろう？ならば、俺の導きに従うが賢明だぞ？」
「なっ……」

ミライ……。こいつはミライの居場所を知っているというのか……？

「ミライの居場所を知っているというのか……!? 言え!!! ミライはどこにいるというのだ!!？」

「騒ぐな。確かに俺はミライの居る所を知っている。故に、お前に教えてやろうと言っているのだ。だが、それには条件がある……」

「なに……？」

「こいつはミライの居場所を教えるという代わりに、オレにその対価を求めている。オ

レの命が欲しいとでもいうつもりか？

だが、オレはこのような矮小な存在に易々と屈するつもりはない。もし、そう言おうものなら、奴の首を掻つ捌いてオレの渴きの癒しとするだけだ。

「まず一つ……。お前の命の半分をもらおう。お前の神獣としての生を半分頂くのだ。そして、次に二つ……。……おまえの神獣としてのルーツ……出自と生い立ちを頂こう」

……やはり、こいつはオレに条件を求めてきた。悪魔である自分と契約を結べというのだ。……それも、オレのルーツをすべて捨てると、奴は言っている……。

……受け入れがたい条件ではあった。それでも、オレは自らの生い立ちを捨てても、ミライに会いたいと思った。だから、サタンの提示する条件もオレは受け入れた。

「……良いだろう、サタン……。我が魂、貴様に預けよう……」

「契約は成立という事だな、ネメアの獅子よ……」

赤い魔法陣がオレを包む。そして、自らの血で魔法陣を潤すと、オレの中の魂がサタンに呼応していくのが分かった。オレは、悪魔と契約したのだ。

「では、付いてくるとよい。悪魔が、お前を導こう……」

……とうとうオレは、ミライと会えるのだ。長年求めた、在りし日の彼女の姿……。それが今、もう一度オレの前に姿を見せるのだ……。

「……………」

ミライ……。もう一度会いたい……。ミライに会って、オレは……。

R u i n—20「アフターマス」

星が、瞬いている。都会にいては、決して見れない星々の瞬きだ。

赤に、青に、星々が煌めいている。この輝きが、あたしたちの命を奪っていく凶星でなければよかつただけだ…。

「ああ……」

ある時から、米中両軍の戦闘が激しくなった。核攻撃の頻度も目に見えて増していった。ジャパリパークという、総合巨大動物園で核戦争が繰り広げられているのだ。

ある人は言った。これは人類最後の戦争であると。また、ある人は言った。これはすべての戦争を終わらせる戦争であると。それがどうであろうか。これは、人類を終わらせる戦争ではないのか。

もはや、誰が何のために始めた戦争であるかも定かでない。殺戮が殺戮を生み、互いが憎しみに囚われている。行くところまで行って、どちらも引けなくなっている。絶滅戦争と言ってもいいだろう。核兵器による応酬合戦も、もはや終わり時が見えてこない。

「きーらーきーらーひーかーるー……よーぞーらーのーほーしーよー……」

サイレンは絶えず鳴り響いている。サイレンの音に交じって、戦闘機が空を切る。その音は鋭く、鼓膜を刺すかのようだ。

水平線の向こうで大きな爆発が起きる。いつか見た、あの時の隕石のようだ。けど、あれは核爆発によるものだ。またきつと、どこかが核ミサイルでも撃ち込んだのだろうか。

国際連合は既に解散している。中国もロシアも、己の利益の為に他国を侵略しているのだ。合衆国だって例外ではない。

……真つ先に他国に侵略したのが合衆国というのは、変えようのない事実なのだけだ。

合衆国が綺麗事を吐いて侵略戦争を仕掛けたのがそもそもその発端なのだ。中国もロシアも、それに続いただけの侵略者に過ぎないのだ。

海面から曳光弾が上がっていく。海上から上る炎が夜空を赤く照らす。まるで世界の終わりを象徴するかのようだ。

「ミライさん！早く逃げようよ！スタッフもみんなも避難が終わったつて！」

「そうよ！ぼさつとしてたら本当に死んじゃうわよ！」

「サーバルさん……。カラカルさん……」

どこに逃げようというのか……。絶海の孤島であるジャパリパークは既に洋上封鎖さ

れている。指揮系統のむちゃくちゃな軍を相手にするのは、自ら火中に飛び込んで死に行くようなものだ。

遠くでまた一つ大きな輝きが見えた。そこからは、とても大きなきのこ雲が上つている。いつも見るきのこ雲よりとても近いように見える。

「な、なんだろう…。い、隕石…？」

「いいえ…。あれは…」

白い壁が猛烈な勢いで迫ってきている。すべてを死に追いやる熱の壁が、海面を蒸発させながら迫ってきているのだ。

「な、何あれ…。ミライさん！早く逃げないと…。本当に…。」

「ミライ！早く逃げましょうよ！」

もはや、私に動くことなんてできなかつた。己の無力さに打ちひしがれてへたり込んでしまう。私たち人間の勝手な都合のせいで、ヒトのみならずけものさんたちをも犠牲にしてしまう…。ヒトが造った究極の破壊兵器で、けものさんたちが焼き払われてしまう…。それどころか、生き物の住めない土地にすら変えてしまう。それを阻むことができない私の無力さが、どうしても悔しかった。

「ミライさん！」

「……………」

二人の呼び声に振り向く。私に向けられた二人の眼は、絶望なんかではなくて、私を心配する純粹なものだった。この二人は最初から諦めてなんかいない。諦めてぐずっていたのは私だけだったのだ。私は…最後まで生きようとしていた二人と比べてなんと惨めなのか…。

「うっ…ううう…っ！」

「ミ、ミライさん!」

「ちよつと!?!どうしたのよ!?!」

ゆつくりと立ち上がって二人を見据える。今の私には二人を助けることはできない。最後まで私に付き添ってくれた二人に、私は何の手を差し伸べることもできない。諦めてはいけないとは分かっているけど、あの炎を前にしては、もうどうしようもできない。

…そして、私は決して口にしてはいけない言葉を二人に告げた。

「皆さん…お元気で…」

白い壁が私たちを呑み込む。サーバルさん…カラカルさん…。どうか苦しまずに逝けますように…。そして、二度と苦しむことのないよう、ヒトの世界から隔絶された理想郷に行けますように…。一切の苦しみから解放されて…さようなら…。

………

「うっ……っつ……」

鈍い痛みにも襲われて、私は目を覚ました。混濁する意識の中、状況を把握するために私は身を起こした。

吹き荒ぶ風、舞う土埃……。驚いたことに、私は核の炎に晒されながらも生きていたのだ。いや、炎ではなくとも核攻撃のだけ……。

戦闘は止んでいた。二人の姿は見当たらない。私とは別のところに飛ばされてしまったのだろうか。……無事なら良いのだけど……。

ふらふらと立ち上がってなんとか歩を進めていく。どこへ向かえばいいのかは分からない。ただ、一縷の望みを胸に歩を進めるのみだ。

「サーバルさん……。カラカルさん……。どこに……」

歩を進めていくうちに一つの建物が目に入った。私は少しでも安心を得ようとその建物の中に入っていった。

「ツ……ハアツ……はアツ……」

建物の中に入ると、すぐさま壁にもたれかかって、安心感から大きく脱力した。緊張の糸が切れたせいか体中が震えが走る。

腰に提げていた水筒の水をいくつか口にすする。喉が渴いていたせいか、あつという間

に飲み干してしまった。

窓から改めて外を確認する。外は暗く、月明かりのみが外を照らしている。海面を照らす曳光弾の明かりも、炎上する軍艦の姿も見当たらない。戦争という行いそのものが終わつたかのように思えた。

「……………うしちやいられない…」

口元を拭つて建物の外へと出る。試しに本部へと連絡を取つてみたけど、案の定というか連絡がつかなかった。

不意に生き残っているのは私だけなのではないかという不安に包まれた。広大なジャパリパークに、わたしだけが生き残っているのだ。そう考えると相当な不安に包まれるような感じがした。

「つ…。だめだめ…。まずはサーバルさんたちを探さないと…。！それと、生存者もいたら出来る限り救護しなくちゃ…」

自らを鼓舞するように、希望に似たような願いを口にする。死人ではなく、生きた人間：フレンズさんに会いたいと思つた。誰でもいい…。中国軍でも合衆国の兵士でも良から会いたいと思つた。

果たして生きているヒトなんているのだろうか。私だけがたまたま助かつたのではないのか？ なんだかそう思えて仕方がない。

建物を出て、当てもなく歩みを続けていく。足取りは重く、引きずるように足を進めていく。

視界がぐらぐらと歪む。息は荒く、うまく呼吸ができない。私も疲れているのだろうか。

やがて、視界に一両の壊れた戦車が目に留まった。私はふらふらとそれに歩み寄ると、そのままその戦車に身を預けた。

急速に視界が暗くなっていく。冷たい風が私を包み、意識が暗闇の底に落ちていく。やがて、私はそのまま気を失ってしまった。

……………

『……………さん……。……………ライさん……!』

「……………ッはっ!」

「良かった……! 起きた……!」

「サーバル……さん……?」

「そうだよ……! サーバルだよ……!」

不意に私を呼ぶ声に目を覚ました。目の前にはボロボロに汚れたサーバルさんの姿

があつた。ようやく見つけたと思われる私の姿を見て、目には涙を溜めている。

「良かった……！無事だったんだね、ミライさん……！」

「サ、サーバルさんこそ……。あ……あああ……」

「ミ、ミライさん……？」

ようやく見つけた……と、いうより、見つけられたという安心感に思わず脱力してしまう。それも、同じ核攻撃を受けたサーバルさんと再会したのだ。これほど喜ばしいこともない。後はカラカルさんを見つめるだけなんだけど……。

「と、とりあえず、安心できるところに行きましょう……。ここにいては、どんな危機が起きるかも分かりませんし……」

「そ、そうだね……。カラカル……大丈夫かなあ……」

「……分かりません……。最悪の事態を想定して行動しましょう……」

「……………」

サーバルさんに抱えられるようにしながら、体を引きずってどこか適当な建物へと歩いていく。

しかし、不気味なまでの静けさだ。戦闘機の空を切る音も、爆発する音もしない。かつてはこれが当たり前だったのであろうが、気付けば、それらの非日常が私たちの新たな日常になってしまっていたのだ。慣れというものは、かくも恐ろしいものだ。

その内、私たちは観測所と思わしき小さな建物に入っていった。中は無人で、計器や資料、ファイルといった物が散乱している。

やがて、適当な壁にもたれかかると、脱力するように腰を落とした。

遠くから波の音が聞こえる。どうやら、建物の近くに海があるらしい。焦燥感やら全身の気怠さのせいでまったく気が付かなかった。

サーバルさんは特に異常は見られない。無理をしていないのであれば良いのだけども。。。

それにしても喉が渴いた。水筒の水は空っぽだ。少しは残しておけばよかったと後悔する。

「ミライさん…?」

「……………」

サーバルさんがたずねる。

「大丈夫なの…? ぼーっとしてるけど…」

「……………大丈夫です…。少しだけ…疲れました…」

「……………そっか…。……………私、カラカルを探してくる…。ミライさんみたいに倒れてたらいけないから…」

「……………分かりました…。気を付けて…」

そう言ってサーバルさんは出て行った。建屋の中は私一人だけだ。……少しだけ中を漁ってみよう。

「……………」

様々な資料を手にとって見てみる。普段の通常業務であれば見ることでできない資料に少しドキドキしてしまう。

「これは…日誌かしら…」

眼鏡の汚れをふき取って中身を見てみる。やはり、これは航海士による日報のようだった。

他にも潮流調査や汚染調査報告書などがそこらに散乱している。どうやら、ここはホツカイエリアにある港湾施設の一部のようだ。恐らくは連絡所にもいるのだろう。

「あれは……………」

ふと、無線機が目に入った。ノイズを吐いているが、一応動いているようだ。無駄な事であろうが、一応マイクを手にとって応援を呼んでみることにした。

「エス・オー・エス。こちら、ジャパリパーク調査隊長、ミライです。現在、ホツカイエリア臨時キャンプ場にて、民間人、パーク職員、その他保護動物含む多数の負傷者を抱えており、取り急ぎ救援を要しています。このメッセージを聞いた方は何でも構いません。ホツカイエリアはなるべく多くの支援を要しています。繰り返します」

……ひどい嘘だ。生存者なんてほとんどいないんだけど……。それでも、少しでも助かる見込みがあるのなら、多少の嘘くらい吐いてもいいだろう。少しくらいは許されるはずだ。

「……………はあ……」

わずかに見える希望が私を苦しませる。

生きたい。死にたくない。誰かに会いたい。私以外の……生きている人に……。

頭の中がぐらぐらする。気を緩めた次の瞬間には倒れてしまいそうだ。無線だつて誰にも届いていやしないだろう。一応、メッセージは繰り返し発信するようにはしたけど、私が生きている間に救助が来るという可能性は高くはない。

……それに放射線に晒されているのだ。ガイガーカウンターなんてジャパリパークには置いていない。もしあったのなら、きつとカリカリと嫌な音を立てるはずだ。

放射線という見えない毒が私の体を犯していく。目は見えなくなり、髪は抜け落ち、体の抵抗は弱くなつて、衰弱しながら死んでいく。子供の頃に教えられた反戦教育やヒロシマ、ナガサキの話を思い出すようだ。まさか私とその当事者となるだなんて……。

「つ……………」

悔しさに涙が溢れてくる。なんて無力で惨めなのだろうか。最後まで抗つてやると思つた私の気持ちも、結局は圧倒的な暴力の前に屈するしかなかったのだ。私は、何に

もなせなかった。何もできやしなかったのだ。その事実だけが、私に重く押し掛かってくる。

「……………」

少し疲れてしまった。なんだか今日は寝てばかりな気がする。破壊と殺戮の果てに生き延びた私ができる唯一のことだ。生存者を探すのも明日からでも良いだろう。もしかしたら、サーバルさんが見つけてくるかもしれない。その為にもここで待機しておくのが良いだろう。

眼鏡をはずしてゆっくりとまぶたを降ろしていく。そうして、私の意識は落ちていくのだった。

……………

目が覚めたら、夜が明けてくる頃だった。結構長く眠っていたらしい。固い床で寝ていたせいで体の節々が痛む。

「そういえば、サーバルさん…」

サーバルさんの姿が見当たらない。体を起こして室内を見回してみると、部屋の隅で膝を抱えているサーバルさんの姿が見えた。

なんだかひどく大人しい。あんな姿勢で寝ているとも思えないし、まさかという考えが頭をよぎっていく。

……カラカルさんの姿が見当たらない。まさか、本当に…。

……聞いてみない事には始まらない。ただ見つからなかっただけかもしれないし、外の空気を吸っているだけかもしれない。

「あの、サーバルさん…」

ちらりとサーバルさんの片目が私をのぞいた。その目は赤く、泣き腫らしているように見えた。

……ああ、やつぱり…だめだったか…。赤く泣き腫らした目と、その無言の答えがすべてを語っていた。カラカルさんは…だめだったんだ。

サーバルさんの隣に移動して座り込む。よく聞けば、小さくしゃくりあげているのが分かる。

サーバルさんは、ついさつきまで泣いていたのだ。ここへ戻ってきたのもそう遠くない時間だったりするのだろうか。

私は声をかけられずにいた。どう声をかけていいのか分からなかった。……あの時の私はどういう気持ちだったか。

私はカコを亡くした。ネメアーさんを亡くした。たくさんのフレンズさんも看取つ

てきた。最初は心にぼっかりと穴が空いたようで誰の声も届かなかったけど……やがては、それすらも麻痺してきたように思えた。人の死を悲しめなくなり、人の死を数字としか見れなくなっていた。

あるエライ人は言っていた。一人の死は悲劇だが、万人の死は統計上の数字でしかない、と。まさしく、私もその言葉に支配されていたのではないか。

「カラカル……死んでた……」

「え……」

唐突にサーバルさんは口を開いた。

「私が見つけた時には……もう……死んでた……。お別れの言葉も言えなかった……。冷たくなってたんだよ……。初めて……初めて死というものを見た気がしたよ……ミライさん……。カラカルが……私の友達が……死んで……!」

膝を抱える手に力が籠る。ぎゅつと全身に力を込めたと同時に、振り絞るような声でカラカルさんの死を、自らの口で伝えた。

ガバつと起き上がって私の腕を強く掴む。そして、自らの胸の内を吐き出すように叫んだ。

「どうして?! どうして死ななきやいけないの?! カラカルもみんなも……! 戦争っていうよく分かんない殺し合いのせいで、みんなが……! 私も……私もいっばいヒトを殺したよ……!」

なんも抵抗もできない人をいっばい……ネメアーといっしょに……！」

ぐしやぐしやの顔で言葉を荒げながらサーバルさんは続ける。

「私……初めて分かったよ……。ヒトの死が……生き物の死がどんなにつらいものか……。少し前までいっしょに遊んでいたのに……。たくさんの時間をいっしょに過ごしたのに……。次の瞬間には死んでるんだよ……。？どうして……。どうして何も悪いことをしてないのに……。死ななきゃいけないの……!？」

ぎゅつと私の腕を握る小さな手に力が籠る。私は黙ってそれを受け入れることしかできない。

「教えてよ……ミライさん……！」

継るようにしてサーバルさんが泣きじゃくる。その姿を見て、私も涙が溢れるようだった。

床が涙に濡れていく。訳も分からず涙が溢れてくる。麻痺していた感情が少しずつ戻ってくるかのようだった。サーバルさんの思いと、かけがえのない友人の死が、私という個を戻していくかのようだった。

「サーバルさん……」

言葉が溢れてくる。

「ごめんなさい……ごめんなさい……!! 私たちヒトの……勝手なわがままのせいで……！」

訳も分からず言葉が溢れてくる。ごめんなさい、ごめんなさいと、誰の言葉かも分かんずくに、言葉が溢れてくる。私自身が被害者のはずなのに、ただただ私が悪いのだと呵責の情が私を支配していく。

……そう。これは、人類が起こした戦争。そして、サーバルさん、引いてはフレンズさんはその被害者なのだ。いや、地球上に住まうすべての動物が被害者なのだ。ジャパリパークだけに限った話ではない。

地上においては爆弾の犠牲になったであろう。水中においてはソナーや爆雷の犠牲になったであろう。空に飛んでいるのは核の炎で焼かれたであろう。地上、空、海のすべてに至るまで、動物は犠牲になったのだ。人間が起こした勝手な争いのせいだ。

私は、人間たちを代表して、ジャパリパークで生き残ったサーバルさんに償うのだ。私に許された、唯一の贖いだ。

「どうか……許してください……サーバルさん……」

私たちの犯した大罪を懺悔するように、面を伏してサーバルさんに許しを請う。到底許されことではないとは分かっているけど、やらない訳にはいかなかった。こうでもない、私の心が壊れてしまうからだ。私は人類の犯した罪を一身に背負う罪人なのだ。

お互いひとしきり泣いた後、サーバルさんがふと立ち上がった。窓の外……遠くに見え

る島を見つめてぼつりと呟いた。

「行こう…。アークティカ地方…だっけ…。先に皆行っちゃったかもしれないし…誰かに会えるかもしれない…」

「そう…ですね…。まずは…動ける船を…探さないと…」

建屋を出て波止場に向かう。係留場に船の姿はなく、ボラードだけがぼつと立っている。そのボラードもよく見ると、ロープのようなものが焼け付いた跡がある。核の炎で焼けてしまったのだろう。これでは、船も水底に沈んでいるに違いない。

「ミライさん！」

遠くでサーバルさんの呼ぶ声が聞こえた。まさか船を見つけたのかと思いい向かってみると、汽水域で擱座しているモーターボートのような小さな船が見つかった。中にはヘルメットや緑色のポーチが入っている。恐らくは、合衆国か中国軍の上陸に使われたのだろう。

「これ、動くかな…?」

「わかりません…。…ちよつとやってみましょう…」

スターターロープを引っ張ってエンジンの始動を試みる。幸いにもエンジンは生きていたようで、数度引っ張ってみたら動いてくれた。あとは、この小さなモーターボートでアークティカ地方に行ければいいのだけど…。

摺座したボートを水面に浮かべて港へと出る。波は静かで、転覆する心配はなさそうだ。

「じゃあ…行こう、ミライさん…」

「ええ…。アークティカ地方へ…最後の旅路です…」

船を北極地方と名付けられた最果ての地へと走らせていく。本来であれば、サーバルさんのような温暖な気候に生息するフレンズさんにはつらい所かもしれない。けど、サーバルさんは自らその地へと行こうと言っている。どうしても私に断ることができようか。

…もう帰る事なんてできない。私たちに残された、最後の地だ。そこで私たちは、命運を果たすのだろう。

私たちの、最後の旅路だ。

R u i n — 2 1 「アークティカ地方」

北海の荒波を裂きながら、舟は進んでいく。吹き荒ぶ波風を帆に受けながら、あたしたちはヴァルハラに向かっているのだ。

操舵者は怪力自慢のアムちゃんだ。ロングシップに匹敵するほどの大きな帆を、たった二本の荒縄で制御している。

風を受けたロングシップはすごい速度で海原を走っている。あたしの予想をも上回る速さだ。

そんな船を制御しているアムちゃんだけど、なんだか苦しそうな顔をしている。見ると、緊張する荒縄が腕に食い込んでアムちゃんの腕を縛っている。風を受け止めるには帆が大きすぎたのかもしれない。このままではアムちゃんの負担が大きすぎる。血が滲んで負傷してしまうのも時間の問題だ。

「アムちゃん、大丈夫…?」

「ぐっ…。へーき…。まだいける…」

「無茶しちやダメだよ…? あっ! 血が…!」

「これくらいどうとでもない…!」

「……どうでもなくはないだろう。ほら、どけ。わたしが変わってやる」

ヘラジカさんは荒縄を掴むと、無理やりアムちゃんをどかせた。瞬間、すべての反動がヘラジカさんを襲った。

「のわっ!?こ、これは……!」

アムちゃんが甲板へ倒れこむ。胸を大きく上下させて、結構大きな負担だったのが伺える。

しかし、両腕に滲む血の何と痛々しいことだろう。これを一人で制御するのは無茶だったのか。けど、かばんさんは一人で制御することを前提に作ってあるのだという。昔の海賊もこれを一人で操作していたのだろうか。

「かばん!無茶だ!これを一人で制御するなんて……!」

「うくん……。滑車でも導入して機械化するべきかしら……」

「ああ、いや、ギンギツネさん、今はそうじゃなくて……。ええと、ヘラジカさん!縄を離して!ロードランナーさん!帆を巻き上げて!みんな!これからオールで漕いでいくよー!」

各員がそれぞれオールを持って配置に着く。オールで漕いでいく以上、連携は不可欠だ。

「そーれ!せーの……!」

オールを海中に突っ込む。めいっばいオールを引いて、再び持ち上げる。かなりの重労働だ。手にママができるかもしれない。貧弱なあたしの身体にはかなりの負担だ。

みんなと一つになって舟を漕いでいく。誰一人として乱れてはいけない。これはチーム戦なのだ。

オールの動きに合わせて舟は前へと進んでいく。非常に過酷だけど、今のあたしにできる唯一のことだ。

「よし・その調子だよ！ そのままアークティカ地方まで漕ぐんだ！」

自身を舟という機械の一部のようにしてひたすら漕いでいく。何も考えずに舟を漕ぐのだ。海を裂いて、船を前へ前へと進ませるのだ。

オールを持ち上げて、再び海中に突っ込む。これだけでも水の抵抗に負けそうになる。だけど、これに負けて手を離してしまえば、舟は制御を失ってあらぬ歩行へ進んでしまうだろう。それだけは避けなければならない。

かばんさんが船首で遠くを見つめている。その遠くを見つめる視線の先には、あたしたちの目指すアークティカ地方があるのだろう。途方もない距離なのだろうけど、頑張つて漕いでいかなければならない。ひたすら機械のように……。

「かばん！ こんな無茶よ！ アークティカ地方に着く前にみんなダウンしちゃうわ！ あたしが帆を改造するから代わって！」

「……分かった。任せたよ」

戦線からギンギツネさんが離脱する。早速ギンギツネさんは応急修復用の丸太を削ると、ボラードのようなものを作り始めた。やがてそれを側舷まで持つてくると、タールや木材で固定した。

「ロードランナー！帆を降ろして！あと、これをマストに固定してちょうだい！」

「あ、ああ！わかった！」

降ろされた帆が風に煽られる。帆に取り付けられた荒縄が荒れ狂う鞭となってギンギツネさんに襲い掛かる。

「きゃっ!?!」

「わ！す、すまねえ！」

そうこうしているうちに、簡易的な帆走装置が完成した。ようやく漕ぎ手の重役から解放されるのだ。

「つ、疲れた……。手が痛いよ……」

「……ちよつと甘く見てたね……。みんな、お疲れ……」

「ひー……。ギンギツネと二人がかりでやつと固定できたぜ……！」

「確かにこれは堪えるわね……。……もうちよつと設計を煮詰めればよかつたわ……」

風を受けたロングシップは再び前進し始めた。半機械化された帆走装置のおかげで

あたしでも舟のコントロールができる。あとは、アークティカ地方に向けて舟を走らせるだけだ。

船首のかばんさんが再び遠くを見つめる。その眼差しは、不安と緊張を湛えたものだった。

「かばんさん…?」

「……………」

返事はない。なんだか深く考え込んでいるようにも思える。

「ミライさん…。いるのかな…」

「……………分からない…。けど、ぼくはどんな結果であろうと、それを受け入れるつもりだ

…。いなかっただら…これをぼくの最後の冒険としようと思う…」

「……………そう…」

言葉が途切れる。少し間を置いて、かばんさんが口を開いた。

「今のうちに休んでおくといいよ。アークティカ地方はどんなところか分からないからね。またネメアが来ないとも限らないし…」

「……………分かった。じゃあ、先にちよつと…」

マストに背を預けて腰を落とす。ミライさん…どんな人なんだろう?会えるのかな…?かばんさんがずっと探していた人…。あたしにも会えることができたなら…。

……あたしはミライさんに会ったら……どうするんだろう……？

……

「誰か来てる……」

ホツカイエリア本島から一艘の舟がこつちに向かって来ているのが見えた。驚いたことに、今まで音沙汰のなかったホツカイエリアから、誰かが訪れようとしているのだ。「ミライさんに知らせなきゃ……！」

崖を降りて、ミライさんの元へと走っていく。国連の人間だったらいけない。ミライさんも年を取って弱ってきている。ミライさんを守るのは私だけだ。なんとしてでも止めてみせるんだから……！

……

ゴリつと舟底が岩礁に乗り上げる感じがした。とうとう、アークティカ地方に到着したのだ。

ざばざばと海水を蹴ってアークティカ地方の大地を踏みしめる。相変わらずここも

岩と泥に堆積した氷床でいっぱいだ。

「誰？」

不意に声をかけられた。見ると、少し離れた岩肌の上に一人のフレンズさんが立っていた。

「あれ……？あなたは……」

一瞬、サーバルちゃんとも思ってたけど、どうも違うように見える。頭の模様が違ったり、細部も何だかサーバルちゃんとは異なっている感じがする。サーバルちゃんらしからぬ締まった顔つきは、とてもあたしたちと一緒にいるサーバルちゃんとは思えない。

「私はサーバル。あなたたちは誰？ここに何の用なの？」

「さ、サーバルだって……!？」

かばんさんが食らいつく。

「ほ、本当にサーバルちゃんなの!? だったら……!？」

かばんさんが前へと足を踏み出す。かばんさんらしからぬ興奮のしようだ。

「来ないで」

「ッ……!!」

サーバルと名乗るフレンズさんが強く言い放った。敵意を大きく孕んだその言葉は、

あたしたちを牽制するのに十分だった。

「まだあなたたちが何者か聞いてない。周りの子たちがフレンズだっていうのは分かるけど、あなたとその青いジャケットを着た子は誰なの？名乗りなさい」

「あ……。ぼ、ぼくはかばんって言うんだ！ミライさんに会いに来たんだ！」

「ミライさんに……。どうしてなの……」

周囲の空気が一変する。目には光が灯つて、野生解放したように見える。

「悪いけど、ミライさんには会わせられない……。警告するわ。今すぐ帰りなさい。さもなれば、あなたたちは海の底に沈むことになる……」

「な……。どうして……。ぼくはこれまで10年以上もミライさんを探してパークを旅してまわったんだ!!それを今更ここで引き返すなんて……。それも目の前にミライさんがいるっていうのに……。どうしてミライさんに会わせてくれないんだ!!?」

「かばんさん！落ち着いて……!」

興奮するかばんさんを制してなんとか落ち着かせようとする。だけど、かばんさんの興奮は冷めやらずにヒートアップするのみだ。

「素性の知れないあなたたちをミライさんに会わせる訳にはいかない。あなたが連れてきたフレンズみんなもよ。……。最後の警告よ。今すぐ帰りなさい」

「ぐっ……。ここまで来て……。誰が帰るか……!」

かばんさんがあたしの拘束を振り払ってサーバルさんの元へと走りだす。

その時だった。

ズガンツ！

「うわっ!？」

突如、大地を穿つような大きな音と共に砂煙が舞った。

砂煙の中に影が見える。それも二人だ。あれは…。

「ネメアと…サタン…!？」

「……………」

白眼とエメラルドの瞳がゆっくりと開かれる。どうしてここが…。それに、どうしてサタンがネメアと一緒に…。

「っ……………」

突如現れたモンスターにサーバルさんが目を見開く。まるで、信じられないものを見たといった面持ちだ。

「……………ここにミライがいると聞いた。お前たちがいるという事は、間違いなさそうだな。

なあ、サタン…」

「お前は黙って俺に従えばいい。さあ、行け」

「そんな……………。どうして……………。い、生きてたの…?」

体を震わせて目の前の現実を拒んでいるかのようだ。しかし、ネメアは知ってか知らずかズカズカとサーバルさんの元へと歩いていく。

「待って!!!来ないで!!!」

叫ぶサーバルさんを無視してズカズカと歩みを進めていく。まるで聞こえていないとでも言わんばかりの態度だ。

「ぐっ……!」

迫りくるネメアにサーバルさんが飛びかかる。しかし、その行動も空しく、ネメアに振りかざした爪も軽くはじき返されてしまった。

「くっ……。ネメア……!」

「……久しぶりだな、サーバル……。元気にしてたか……?」

「どうして……死んだんじや……」

「……冥府から舞い戻って来たのさ。さあ、教える。ミライはどこにいる?」

「ツ……!ミライさんをどうする気……!?!」

「……オレはただ、ミライに会いに来ただけだ」

なんだか様子がおかしい。まるで既に知り合った仲のようだ。

「い、行かせないから……!」

「……邪魔だ」

掴まれた手を軽くあしらって引き剥がす。ネメアは奥へとどんどん進んでいく。

……行かせてはいけない。ネメアはミライさんに何するか分からない。どうにかして止めないといけない。

「……アムちゃん」

「……………」

ドツとアムちゃんの鬨気が辺りを支配する。それに気付いたネメアがこちらに振り向いた。

「……………」

鋭い眼光がネメアを貫く。アムちゃんから放たれていた鬨気が肌を刺すような鋭い殺気へと変わっていく。少しでも刺激すれば爆発しそうなほどの緊張具合だ。

「ツ……!!」

身を捻り、腰を低く落としてネメアへと飛びかかる。対するネメアも迎撃の構えを取ってアムちゃんを迎え撃った。

ガツ!!

二人のブーストが互いに矛を交える。ガンドに侵されたネメアはやはり本調子ではないのか、やや押され気味だ。対するアムちゃんは、サタンから授かった力でネメアを圧倒している。

R u i n — 2 2 「祝福」

「ミライ…ミライなのか…？」

「あなたは…ネメア…さん…？」

「お、オレだ…ネメア…だ…！そんな…本当にミライなのか…!？」

「う、うそ…。あなたは確か…死んだんじや…」

「オレは…戻ってきたんだ…。お前に…会いたくて…」

状況がうまく呑み込めない。あれは本当にミライさんなのか？そして、ミライさんに会ったネメアはどうしているか。それまでのネメアからは考えられないような弱々しい姿と声でミライさんに近付いていく。

「ミライ…」

「っ……」

震える手でミライさんへと手を差し伸ばしていく。ミライと呼ばれる女の人は、怯えるような震えた手でネメアに手を伸ばしていく。

「会いたかった…」

しかしその時、突如ネメアの様子が一変した。何やら苦しむように身を抱えると、そ

空気の変わりように緊張が走る。中でも、ゴマちゃんの怯えようは普通ではなかった。

「ゴマちゃん……？」

「あ………テユ………テューポーンだ………」

「テューポーン……？」

みんなが一点を見つめている。その視線は、遙か上空の彼方に釘付けにされている。みんなに釣られて空を見上げた時、あたしの思考は停止した。

あれは何だろう……？ ヒト……？ 岩……？ 隕石……？ いや、あれは……。

「きよ、じん……？ あ……あああああ……」

天を覆いつくす影があたしたちを覆う。まるで黒く炭化したような巨人の頭が、そこにあつたのだ。

空を呑み込まんとするその巨大な頭……。あれがオリンポスの神々を脅かし、様々な神獣を生み出したタイタンの怪物……。テューポーンなのか……。

「我が父よ!!! あれなティタン神族に仇名す劣等種を叩き潰してしまえ!!!」

「ツ……!! そ、そんなことをしたらミライさんまで犠牲になっちゃうよ!!!」

「黙れエツ!!!」

テューポーンの巨大な頭がこちらを捉える。顔を動かしたただけだというのにすごい大風だ。少しでも気を緩めれば足が地から離れそうになる。

隕石のような巨大な拳が振り上げられる。そして、あたしたちを押し潰さんと振り下ろされた。

ズンツ！

「ツ…!?!」

テューポーンによって振り下ろされた拳があたしたちを押し潰す。あたしたちは吹き飛ばされまいと踏ん張るだけで何にもできない。もうダメだと思った。

だけどその時、奇跡が起こった。

「なっ…!?! 貴様ツ…！…き…さ…ま…世…界…蛇…ア…ツ…ツ…ツ…！…！…！」
 岩を砕くような大きな音と共に、巨大な白い柱が空を切った。あの大きな白い体は…
 ヨルムンガンドさんだ…！

その大きな頭でテューポーンの拳を押しつけ、大きな体でテューポーンの体を縛っていく。怪物の大きな体が、世界蛇の身体に縛られて海の底へと沈んでいく。ネメアの召喚した巨人が、突如現れた世界蛇の手によって封印されたのだ。

目の前にネメアが下りてくる。最強の切り札を封印されたであろうその姿は、なんだか惨めなようにも思えた。血まみれのその姿は、もはや抵抗することの無意味さをあたしたちに示しているかのようだ。

「ツ…！…！」

ギリギリという歯ぎしりがあたしたちにも聞こえてくるようだ。オリンポスの神々を脅威に陥れた怪物が、いとも簡単に封じられたのだから当然と言えば当然なのだろうけど。

エメラルドの瞳があたしたちを捉える。その瞳は憎しみに満ちている。

「もう…ダメです、ネメアさん…。もう…やめてください…！」

「ダメだ…。オレは…こいつらを…殺らねばならん…！」

ネメアが戦闘の構えをとる。まだあたしたちとやり合うつもりらしい。

もはや、ネメアの絶対の鉄壁は破られた。サタンの力を授かったアムちゃんにとって、勝利を約束されたも当然だろう。

それにネメアはガンドを受けたことによって弱っている。イエイヌちゃんやゴマちゃんでも勝てるだろう。勝負は決したも同然だ。

ネメアが先攻と躍り出る。しかし、その攻撃もアムちゃんのカウンターに破られるだけだった。

「ギッ…！」

鮮血が舞う。確実にネメアは追い詰められていつている。しかし、その様子を喜ばない者がいた。

ミライさんだ。目には涙を浮かべて、その痛みと苦しみに胸を裂こうとしている。

しかし、その声も届くことは叶わない。アムちゃんは攻撃の手を緩めずに、ネメアに一撃、また一撃と傷を刻んでいつている。

「ガハアツ……ハア……ハア……」

ネメアの髪を掴んで執拗を殴打する。二発、三発と加えていき、身が吹き飛ぶ程の重一撃が加えられた。

顔を殴打されたネメアの体が吹き飛ばされる。もはや体を支えるだけでも精一杯のようだ。その姿は見ていて胸が苦しくなるようだけど、放っておいてはあたしたちの身にも危険が及ぶ。

「やめてください!!!」

突如、ミライさんがネメアの前に飛び出してきた。

「ミライ……」

「もう……やめてください……ネメアさんは悪い子じゃないんです……。全部……私が悪いんです……! パークがこうなったのも……ネメアさんが苦しむのも……全部……私が……!」

ミライさんが涙を流して訴えている。全部私が悪いのだと、そう訴えている。

あたしにはどうしていいか分からなかった。事実、あたしはこれで良いのかと迷っている。

これは正しいのだろうか。あたしたちの“ホツカイエリアの”現代”で起きた経験か

ら言えば、ネメアが討たれるのは当然だ。しかし、あたしたちは夢やホロテープを通じてホツカイエリアの過去を知った。……ネメアがミライさんたちによつて作られた命だという事も知った。あたしたちは、どうして良いのか分からなかった。

「どけ、ミライ……」

「ネメアさん……」

「……決着はオレがつける。ミライは邪魔しないでくれ……」

「そんな……」

ミライさんを押しのけてネメアが立ち上がる。その眼には覚悟のようなものが見て取れる。死を覚悟した者の眼だ。

ネメアはこの戦いで玉砕しようとしている。もはや、それ以外の道がないと言っているかのようだ。自ら他の道を断つて、死に行こうとしているのだ。

「ッ……!!」

立ち上がったネメアがアムちゃんへと飛びかかった。対するアムちゃんは静かに構えを取ると、特攻するネメアを迎え撃った。

ネメアの体に傷が増えていく。しかし、ネメアは攻撃の手を緩めずに狂ったようにアムちゃんへと特攻していく。

血と爪が乱れ舞う。ネメアにはもちろんだが、アムちゃんもじわじわと追い詰められ

ていつてるのか、アムちゃんの腕や体にも傷が入ってきている。

「ミライはオレのものだ……。貴様らなんかのものではないツツ!!」

ネメアが喝を飛ばす。そして、自らの両手に火炎を纏わせると、アムちゃんに向けて投げ飛ばした。

「ぐっ……!」

ネメアが懐へと入っていく。炎に彩られたボールからネメアが躍り出てくる。

「ツ……このっ……!」

先手を取ったのはネメアだ。反撃の隙を与えないネメアの猛攻にアムちゃんは攻めあぐねている。

しかし、ただネメアに攻められるだけのアムちゃんではない。ネメアの無敵の毛皮はもう既に破られている。そして、ネメアは自身の無敵の毛皮を活かした圧倒的な攻めを得意としていた。

……これを耐え凌げばいつかは隙が出てくる。ネメアはただ滅茶苦茶に爪を振るっただけだ。ならば、この攻撃のどこかに必ず隙が出てくるはず。それを狙えば倒せるはずだ。

「だアツ!!!」

「ギイツ…!?!」

腕を振り払い、逆袈裟に黒い爪を叩き入れた。赤い鮮血がきれいに放物線のような弧を描いている。

一瞬ネメアは怯んだようだが、すぐに体勢を立て直した。再びアムちゃんを倒すべく立向かっていった。

命を刈り取るべく、互いの体に傷を入れていく。一進一退の攻防戦だ。しかし、自身の強みを失ったネメアに勝利の機会は既に無かった。

「ガアッ…!!」

ネメアに重い一撃が入った。満身創痍となったネメアは力なく地面に伏すのみだ。

足元に伏したネメアを息を荒げながら見下ろしている。とどめを刺そうと思えば、いつでも刺せる状態だ。

倒れたネメアは自分の体を支えるだけの力は残されていないようで、弱々しく自分の体を起こすのが精いっぱいのようなのだ。

「ネ、ネメアーさん…」

倒れたネメアにミライさんが駆け寄る。血で汚れる事も厭わずに抱きかかえるさまから、信頼のおいている相手だという事がよく分かる。

抱きかかえられたネメアが弱々しく手をミライさんへと伸ばした。ミライさんは目に涙を溜めてネメアに何かを語りかけようとしている。

「あ……。ああああ……。いてえ……。いてえよ……。こんな痛み……。味わったのは初めてだ……」

「もう……。いいんです……。あなたの気持ちは……。十分に分かりました……。分かったから……。もう……。やめて……。」

「……………」

声を押し殺して泣いている。自身の顔を伝う涙にネメアは何を思うかは分からない。けど、ネメアはそんなミライさんを見て何かを決意したようだった。

「ぐっ……」

ミライさんの膝から離れたネメアが立ち上がる。目には光を灯し、アムちゃんとやり合おうとしている。ロクに立つこともできないようで、今にも崩れ落ちてしまいそうだ。そんな状態でどうしてまだ戦おうとしている。

「待って……！」

ミライさんの言葉も待たずにネメアは走りだした。アムちゃんは静かにそれを見守って、迫りくるネメアを迎え撃とうとしている。

ネメアの爪が空を切る。身体を貫いたアムちゃんの右腕からは、赤い血が滴っている。勝負は決したようだった。

ネメアの腹部からアムちゃんの右腕が引き抜かれる。眼からは光が消え、膝を折って

地面に倒れこんだ。

「ネメアー……さん」

ミライさんがネメアの元へと弱々しく歩み寄る。やがてしやがんでネメアの手を取ると、必死に声をかけた。

「ダメです、ネメアーさん……！死んだら……！私はまだ……！」

「あああ……。オレは……これで……ようやく……」

「何を言ってるんですか!!どうしてこんなになるまで戦うんですか……!？」

「お前たちがそういう風に造ったんだろう……？ハツ……。でも、気付いたのさ……。オレは、本能の赴くままにヒトを殺してきた……。そのために作られたのだと信じてただひたすらにな……。けど、違ったんだ……。オレは守ることを忘れ、殺すことだけを求めるようになっていた……。だから……捨てられたんだ……」

「そんな……。捨ててなんていませんっ!!!私たちはずっと……あなたの帰りを待ってたんですよ……?？」

ネメアの目から涙がこぼれる。今までに見せたことのなかった、悔悟の念からくる涙だ。

「オレは……オレは、命令を放棄したどころかミライたちを裏切ったんだ……。こんなにもオレを想ってくれてるヒトがいるのに……オレは……それに応えられなかった……」

ネメアの手がミライさんの頬へと触れる。

「本当に……すまなかつた……。オレは……ただそれだけが言いたくて……こうして蘇ったんだ……。ミライ……許してくれ……」

「そんな……許してくれ……！許さないと許さないと……！許さないと……！あなたをよくやってくれました……。……ネメアさん……？ネメアさん……！？」

ネメアの四肢がだらんと垂れ下がる。ネメアが……死んだのだ。

「あつ……。あああああああああつ……。」

ミライさんが慟哭の声をあげる。そして、胸に秘めた思いを自身の感情と共に吐き出した。

「どうして……私だって言いたい事がいっぱいあるのに……！言うだけ言つて勝手に死んじゃうだなんて……ひどいですよ!!!お別れの言葉も労いの言葉も言えてないし、謝ることだって……」

亡骸に触れる手に力が入る。大粒の涙がネメアの亡骸を濡らしていく。

「こんなの……あんまりです……」

ミライさんが身を伏して泣いている。あたしたちは命懸けでネメアと戦った。それこそ本当に死ぬ思いだった。そして、見事にネメアを討ち倒したのだ。そして、その結果得たものは、かばんさんがずっと追い求めていた者の涙だったのだ。

かばんさんは呆然と立ち尽くしている。目の前にある光景に思考が追いついていないようだ。

やがて、かばんさんは意を決したようにミライさんの元へと歩き出した。直接ミライさんと話をするようだ。

「ミライさん」

「……………」

「ぼ、ぼくは…かばんって言います…。ぼくも…ネメアと同じで…ずっと、あなたのことを…探してました…」

「私を…？…どこかで…お会いしましたっけ…」

「いえ…。ぼくは、その…。…この帽子…あなたの物のはずです」

そう言っただけでかばんさんは帽子を脱ぐと、ミライさんに渡した。やや訝しみながらもそれを受け取ると、ミライさんはまじまじと観察し始めた。

やがてミライさんは驚いたような様子を見せると、かばんさんへ声をかけた。

「これ、私の帽子…。どうしてこれを…あなたが…？」

「……………ぼくは気付いたとき、この帽子を被ってキョウシュウエリアのサバンナ地方で一人立っていました。自分が何の動物かも知らないで、不安でいっぱいだった…。やがてぼくは、図書館で自分が人のフレンズということを知った。…そして、ぼくはそれま

での旅で、ミライさんの髪の毛から生まれたフレンズだつていうことが分かったんです。……ぼくは、ずっとそのヒトを探して、ここまでやって来たんです……」

「……………」

とても信じられないといったような顔をしている。無理もない話だ。自分は、貴方の髪の毛から生まれたフレンズなんだと、その人は言っているのだ。受け入れる方が難しいというものだ。

ミライさんは俯いてしばらく思案した後にかう言った。

「とりあえず、私たちの隠れ家に行きましょう。ここにおいても冷えるだけです……。話はそこで聞きます」

「いいの？ミライさん……」

「外の者じゃないと分かったただけでもいいです。この子たちの言葉に嘘はないでしょうし……」

「うーん……ミライさんがそう言うなら……」

「それと、ネメアーさんの亡骸を持ってきてください。私たちが埋葬しましょう」

「……………うん。わかった」

ミライさんの後について行く。険しい岩山の道ではあるけど、獣道があるおかげでそれほどきつくはなかった。

しばらく山の斜面に沿って歩いていくと、一軒の家にとどり着いた。山小屋に到着した。そばには何やら卒塔婆のようなものが立っている。

「……………」

私の親友、カラカルの墓…。カラカルさんのお墓…？

「どいて」

「あつ、ごめん…」

ミライさんのサーバルさんがつっけんどんに言い放ってきた。慌ててその場をどくと、サーバルさんはネメアの亡骸を丁寧に置いた。

「まさか、ネメアのお墓を掘ることになるなんて…」

どこからか持ってきたであろうスコップを手にすると、サーバルさんは墓を掘り始めた。その顔はなんだか気難しそうだ。

「これ…カラカルさんのお墓…？」

「そうだよ。見ればわかるでしょ」

「そ、そうだけど…」

「……カラカル、戦争で死んだんだ。むかし、世界中を巻き込んだ大きな戦争があつて、ジャパリパークもそれに巻き込まれたんだよ。ネメアもその時に死んだはずんだけど…。ミライさんに会うために生き返ったって…」

目に涙を浮かべて地面を掘っている。昔を思い出してしまったんだろう。どんな子かはあたしには分からないけど、こうして涙でできるくらいなんだから、かけがえのない親友だったはずだ。

……そういえば、あたしの両親も昔死んじやったんだっけ。戦争が起きる前の大災害……。あたしは……確か……。

「あたしのパパとママも……むかし、死んだんだ」

「……そういえば、あなたって若いっていうか幼いよね。外の世界にもヒトってまだいるの？」

「わかんない。あたしは、パークの中のカプセルで目が覚めたんだ。戦争が起きる前の、世界を襲った大災害……。あたしのパパとママは、あたしだけでも生き延びるようにって、カプセルを作ってたしを閉じ込めた。それからずっと眠ってた感じがする……。それからは……わかんない。生きてるかも死んでるかも……。ただ、あたしがカプセルから目覚めた時には、すでにパークはこうなってた。たぶん……もう死んじやってるんだと思う」

「え……。そ、そうだったんだ……。ご、ごめんね？今までちよつときついこと言ってたよね……」

「いいよいいよ！気を使わなくても……。あの災害や大戦争からずっとミライさんを

守ってきたんだよね？心もやさぐれて来るよ…」

「う…。そういわれると傷つく」

「ああ、いや、そういうつもりで言ったんじや…」

なんだか二人でわちやわちやしてしまった。サーバルさんとの距離も縮まったような感じもするし、あたしもサーバルさんを手伝おう。

「あたしも手伝うよ。一緒に掘ろう」

「うん…。ありがとう」

そうしてもう一本スコップをもらうと、あたしたちはネメアのお墓を掘り始めた。あたしたちの命を狙ってたフレンズのお墓を掘るっていうのも変な話だけど、サーバルさんやミライさんにとっては、パークを守ろうとした英雄なのだ。無下に扱う訳にもいかない。

ある程度掘り終えたところで、サーバルさんがネメアをお墓の中に入れた。上から土を被せて埋葬していく。

「ネメア…」

「……………」

埋葬を終えたサーバルさんが墓場を後にする。なんだかあたしも居たたまれないような気持ちになってきた。

「行くこう…。イエイ又ちゃんどこかな…?」

墓場を後にする。あたしたちはネメアを倒し、ミライさんと出会った。ライオンさんは助けられなかったけど…。

ミライさんはどうするんだろう? かばんさんと一緒にキヨウシユウエリアに帰るのかな? それを含めて今話し合っているんだろう。

「っ……。眩しい……」

雲間から太陽が覗いている。なんだか久々に日の光を浴びるかのようだ。暖かくて気持ちが良い。

あたしたちがホツカイエリアを去る日は近い。それまでにイエイ又ちゃんたちと少しこの島を巡っておこう。

R u i n — 終幕 「エピローグ」

「私の髪の毛から生まれた…と、いうのは俄かに信じがたい話ではありませんけど…。そうだ、簡易検査をしてみましよう。私の眼鏡にはセルリウムやサンドスターを鑑定する簡易的な機能が備わってます。その手袋でもいいですので、私に貸していただけませんか?」

「あ、はい。どうぞ」

そう言っただけでかばんさんは手袋を渡した。

ミライさんの眼鏡が赤く光って何か小さな文字のようなものが映し出されてる。簡単的なホログラムのようなものなのだろうか。

ミライさんの顔がみるみると険しくなっていく。やがて解析が終わったようで、かばんさんに手袋を返した。

「本当に…フレンズさんなんですね…。私の髪から生まれた…ヒトのフレンズ…」

「……信じてもらえましたか?」

「ええ…。まだ少し信じられないですけど…。認めるしかなさそうですね…」

そう言っただけで深くため息を吐き出すミライさん。少し項垂れた後に、改めてかばんさん

に質問した。

「そういえば、どうしてネメアーさんと戦ってたんですか？……やっぱり、ネメアーさんに襲われたとか……？」

「はい……。キョウシユウエリアで、このギンギツネさんが不思議な信号を受信したってぼくたちのところに無線機を持ってきたんです。そこでミライさんの声を聞いて……」

「無線機……。……まさか、私が昔発信した救難信号を辿ってきたんですか……!？」

「え……。はい……。ホツカイエリアではホロテープを辿ってきたんですけど……」

「……。まだあの信号……生きてたんだ……」

ミライさんが思案するように視線を逸らしている。そんなミライさんを見て、なんだかかばんさんがそわそわしてる。何か言いたい事でもあるようだ。

「あの……ぼくは……。ぼくは、自分以外のヒトを求めて10年以上も探してきました。その……。ぼくは……ようやくミライさんに会えて……とても、嬉しく思っ……るんです」

「はあ……」

「だから……その……。抱きしめてもらっても……いいですか……？」

「……………」

絵に描いたようなあんぐり顔だ。かばんさんのお願いも意外なものだ。かばんさんも恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして俯いている。

やがて、その意図をくみ取ったであろうミライさんは、優しくかばんさんを抱きしめた。

「っ……」

「よしよし……。よく今まで頑張つてきましたね……。それも10年以上も私を探してただなんて……。本当に……。えらいです……」

「っ……ミライさん……!」

ミライさんに抱かれたかばんさんの体が震えている。初めて体験した人の抱擁に自身の感情が抑えられなかったようだ。……。それも、初めての自分自身以外の人の抱擁なのだ。感極まるのも無理はないだろう。

「ほう、お主がミライか」

「あなたは……」

突如、ミライさんの山荘に不意の来訪者が現れた。赤いラインの入った真っ白なフード付きのパーカーに、赤と蒼の混ざったような不思議な瞳……。ヨルムンガンドさんだ。「これは失敬。わしはヨルムンガンドと申す者だ」

「ヨルムンガンド……? 私の知る限りでは、そのようなフレンズさんはいないはずですけど……」

「わしもここに招かれた記憶はないからな。海の中で眠っていたら、気付けばこのよう

な姿になっていたのだ」

「……？　ここに漂流してきたという事ですか……？」

「言葉の通りの意味じゃ。わしは神々の黄昏に敗れた後、永遠ともいえる眠りについた。そこでわしは夢の中で、お主たちミズガルズの民の営みを見てきたのだ」

「はあ……。……って、神々の黄昏……？　ヨルムンガンド……。……ま、まさか……北歐神話に名高いあの世界蛇さんなのですか!?　ね、猫さんに化けたり、リヴァイアサンと同一視されるあの!?!」

「わしは猫になぞ化けておらんしリヴァイアサンというのも知らん。いろいろと間違えておるぞ」「す、すいません……。……つい興奮してしまつて……。……そういえば、あの巨人を倒した大きな竜みたいなのは……」

「あれはわしの本体ともいえるものだ。この体はサンドスターの生み出した仮初の姿に過ぎん」

「……。……。なんだか、私はとんでもないお方と話しているのかもしれない。神々と人類が共存していた頃のけものさんの生の姿を目撃して、お話してるなんて……。これもジャパリパークだからこそ経験できる奇跡……」

そう言いながら恍惚の顔を浮かべるのはミライさんと言われるお方だ。もつとあたしは儚げな姿を想像していたのだけど、どうやら違つたようだ。あたしたちは今、ミラ

イさんの中にある深淵をのぞこうとしているのだ。

「ミライさんのその顔を見るのいつぶりだろう。何十年ぶり？」

「そうですね…。たまに海を渡ってここにやってくるフレンズさんは居ましたけど…」

「だいたいメンバーは同じだもんね。見知った顔しかいなかったよ」

「ですね…。そういう意味ではとんでもないお方がいらっしやいました。それも新たにいらした方もとてもいっぱい…。感激です」

ほろりと涙を流してあたしたちとの邂逅を噛みしめている。ヒトを探していたのはかばんさんだけではない。ミライさんもまた、ヒトを求めていたのだ。ミライさんの僅かに流した涙が、それを物語っている。

ヨルムンガンドさんは続ける。

「いやはや、目的も無事に達成されたようじゃな。無事にミライを見つけ、ネメアも倒した…。わしも夢の中ではあったが、お主たちの行く末を見守らせてもらったぞ」

「……ヨルムンガンドさんにとって、ぼくたちの旅路は…どんなものに見えたかな…」

「うむ…。お主たち人は、小さき存在ではあったが…。その足取りは、我らヨトウンの巨人にも負けぬものであったと見える。目的に向かって団結し、おぼつかぬ足取りではあるが着実に進んでいく様は見応えがあったわい。わしも頽廃とした世界の中に、応援しなくなったのも久々だわい」

「そっか…。それは良かった…。かな」

かぼんさんはそう言うのと深く帽子を被って顔を隠した。何か照れているような不思議な感じがする。

そんなかぼんさんをよそ目に、サーバルちゃんがミライさんにたずねた。

「ミライさんはこれからどうするの？まだここにいるつもり？」

「うーん、どうしましょう…。帰っても私はどうするべきか分かりませんし…。そういえば、キョウシユウエリアから来たってことは、まだパークは生きてるのですか？私以外にもスタッフたちは…まだいらっしやるんですか？」

「ゴコクエリアでは見ませんでした。キョウシユウエリアにもいなかったような…」

「あたしが目覚めた施設はみんな機械が壊れてたよ。建物も半壊してたし、スタッフはいなさそうだった」

「そうですか…。やつぱり、私の居場所はないんですね…」

「……………えつと…あの、ミライさんさえ良ければ…。ぼくといつしよに…キョウシユウエリアに帰ってきてもらえませんか…？ぼく…ミライさんにいつぱい聞きたい事とか…話したいことがあるんです。だから…ぼくたちといつしよに…」

「…いいんですか…？」

「はい…！ぜひいつしよに…！」

そう言つて顔を輝かせたかばんさんがミライさんの手を握りしめた。心なしか、ミライさんの顔にも安堵のような、喜びのような柔和な表情が見て取れる。とうとうミライさんも、極寒の地から出て行く日が来たのだ。アークティカ地方における雪解けの日だ。

「よし、サーバルちゃん！早速船出の準備をしよう！ミライさんも、ちよつと長旅になるけど大丈夫ですか？」

「うーん、どうでしょう…。長い事運動もしてませんし、認めたくないけど年もとつてきてますし…。ちよつと厳しいかも…」

「あはは！大丈夫ですよ！ここにはみんなもいるし、苦労させませんから！」

「ど、どうぞお手柔らかに…」

そう言つて、かばんさんたちは部屋を出て行った。

あたしも少し探索しようと、家を出て外を辺りを周っていると、サタンと鉢合わせた。何やら神妙な面持ちで遠くを眺めているけど、何を思っているのだろうか。

「…どうしたの？」

「……。これで良かった…。そう思っているのだが、心のどこかでは納得のいかないところがあるような気がしてな」

「……っ？どういふこと…？」

何やら一人で思いつめているようだ。詳しく話を聞いてみよう。

「俺はお前たちと別れた後、一人でネメアの元へと向かった。そこで奴と契約したのだ。俺が奴を導く代わりに、魂を頂く、とな。そして、俺は奴と契約した。そしてここ、アークティカ地方へと導いたのだ」

「……どうしてそんなことを……。あたしたちを倒そうとしたの?」

「逆だ。ネメアは心身ともに弱ってきていたから、お前たちに倒してもらおうとしたのだ。それに、奴の中にあるもう一つの魂も顔を出してきていた。奴を蝕む呪縛から解放し、奴の魂に安寧を捧げる……。そうしたかったのだが……」

「サタンが言葉を区切る。何やらうまくいかなかったことがあるようで、表情に陰りが見える。」

「これが……正しい選択だったのかと、そう思わずにはいられないのだ」

「……悪魔がそんなことで思い悩むなんてあるんだね」

「俺は人類の生み出した虚像に過ぎん存在だ。俺は悪魔を演じてはいるが、それは偶像としての役割でしかない。奴の魂は今俺の中にあるが……あるが……?」

ふと、何かに気付いたようでサタンの動きが止まった。見事なまでのフリーズであるが、いったいどうしたのだろうか。

「……ない。ネメアの魂がない……! どういうことだ!? 確かに奴は俺と契約して、俺のモ

ノになったはずだぞ！」

「お主が探しているのはこれか？」

不意に声が聞こえた。声のする方へと振り向くと、そこには壁にもたれかかってふわふわしたものを片手に持つヨルムンガンドさんがいた。

「その魂は俺のモノだぞ、世界蛇！俺がそいつと契約して、俺のモノとなると誓った魂だ！」

「残念だが、それはお主とネメアの間だけのものだ。ワシは存せぬし、その契約もワシの知るところではない。もし欲しいというのであれば、ワシから取り返すことだ。それっ」

そう言って、白いふわふわした魂と呼ばれるものを天高く放り上げると、天高く坐する巨大な大蛇が呑み込んでしまった。

「なっ…!?!」

「こやつが地獄へ落ちるにはまだ早い。然る時が来るまで、ワシが預かっておく。ふんっ、残念だったな、天の御子よ。獅子は悪魔へと堕ちはせん」

「ぐぬう…!」

サタンは悔しそうな顔を浮かべると、そっぽを向いてしまった。天の遣いであり、地獄を統率する魔王と言えども、神々と肩を並べる巨人族には手を出せないらしい。

「勝手にしろ……!」

「うむ、そうさせてもらおう」

そう言つて、二人は別れていった。なんだか微妙な空気の中取り残されたあたしだけど、これで良かったのだろうか。

ヨルムンガンドさんは然る時が来るまで預かつておくという風に言っていたけど、一体どうするつもりなのだろうか。ネメアの魂は救われるのか。なんだか気がかりだ。

「ともえちやーん!」

「イエイ又ちゃん?」

遠くからイエイ又ちゃんが走つてきた。久しぶりに見るイエイ又ちゃんの明るい顔だ。見ているあたしまで心が雪解けするかのようだ。

「ともえちやん! 明日、さつそくアークティカ地方を発つようです! ミライさんも一緒に帰るそうですよ! 色々準備があるようですし、ともえちゃんも一緒に準備しましょう!」

「うん、分かった」

イエイ又ちゃんに連れられて小屋へと戻つていく。ふと背後を見遣ると、そこには青々と広がるホツカイエリアの海原が広がっていた。遠くに見える海の先には、あたしたちが冒険したホツカイエリア本土が見える。

「……………」

胸の中が不思議な気持ちで満たされていく。あたしたちの残した小さな足跡が、そこには刻まれているのだ。それはいつかは消えてしまうものなのかもしれないけど、そこには確実にあたしたちの記憶が刻まれているのだ。そう思うと、なんだかちよつと誇らしい気がしてくる。

あたしたちはミライさんを求めて旅立ち、ネメアという強大な敵と戦い、ミライさんを見つけた。ライオンさんを救えなかった事が心に残るけど…。

「……………」

改めてホツカイエリアの大海原に目を向ける。雲間から照らされる光芒があたしを照らす。曙光にも似たその光は、あたしたちに希望を与えるようだ。

「ともえちやーん!」

「ん、今行くよー!」

ホツカイエリアを背にイエイヌちゃんの元へと駆けていく。希望で胸が満たされて清々しい気分だ。

「待つてよイエイヌちやーん!」

目の前がキラキラと輝いて見える。あたしたちの旅はこれからも続くのだろう。次はどこへ行くのだろうか? まだまだ行っていないところはいっぱいある。

無限に広がるジャパリパークには不思議がいっぱいだ。これからもつらい別れは
いっぱい来るだろうし、素敵な出会いもまたいっぱい訪れるだろう。それらを乗り越え
て、あたしたちは強くなっていくんだ。そして、また一つ思い出を刻んでいく。

足跡とわずかに舞う砂埃を残して去っていく。あたしたちのはの冒険は終わらない。
これからも立ち止まらずに、進んでいくのだ。

設定資料

登場獣物

《メインキャラクター》

ともえ

一人称はあたし。明朗快活でおてんば娘。フレンズが大好きでいろんなフレンズと出会うことを目的に旅をしている。趣味はお絵かき。身長は143cmで一番低い。メンバーの中心人物でともえを中心にパーティーが動く。

イエイヌ

一人称はわたし。ヒトと一緒にいることに何よりの幸せを感じる。命令には忠実で嫌なこと以外は基本なんでもやる。基本的にともえにべつたり。少しわがままでやんちゃなところもある。わがままでやんちゃではあるが、性格自体はすごく真面目で勝負事となると一切の手加減をしない。基本敬語ではあるが、素のときは中性的なしゃべり方をする。

ロードランナー

一人称は私。通称ゴマちゃん。頭より先に体が動くタイプ。性格は男勝りで、自分に正直なお調子者。基本パーティーの何でも屋。ある程度の頭は働くけどあんまり活かされることはない。プロングホーンの腰巾着的な立ち位置であったが、ともえと旅をしていくうちに徐々に仲間意識を芽生えさせていく。飛ぶこともできるが、もっぱら足を休めたり遠くを見るために飛ぶのであり、滅多に飛ぶことはない。

アムールトラ

元ビーストのフレンズ。一人称はともえといっしょであたし。身長は180を超えており、全フレンズの中でトップに並ぶ大きさ。自身がビーストであった過去に負い目を感じており、見た目に反して少し気が弱い。自身が殺めた過去のフレンズたちへの贖罪も兼ねてパーティーやパークのためにその爪を振るう。

《サブキャラクター》

かばん

自身と同じであるヒトを探しにキョウシユウエリアを発ったヒトのフレンズ。一人称はぼく。通常、フレンズは経年による見た目の変化というものが現れないが、かばん

だけは例外のようである。元々は中性的な見た目だったが、ゴクエリアで過ごした10年によって、黒い外套を身に纏った女性的な見た目になった。身長はアムールトラに次いで高い。ゴクエリアでセルリアンと戦っているうちに戦士としての腕を上げていった。現在ではコノハちゃん博士とミミちゃん助手と一緒にキョウシウエリアの管理を担っている。

サーバル

かばんといっしょにキョウシウエリアを巡ったサーバルキャットのフレンズ。一人称は私。天真爛漫で少し子供みたいな性格をしているが、かばんの影に隠れがちであり自信がない様子。一時は破局まで行きかけたが、なんとかその危機を乗り越えてかばんの良き相棒として彼女の右腕を担っている。

アフリカオオコノハズク

一人称は私。パークの頭脳で皆からは博士と呼ばれている。一部からは賢者とも呼ばれている。グルメを自称しており、おいしいものに目がない。言動とは裏腹に臆病な性格で、恐怖の度合いによつては細くなつたり大きくなつたりする。異変の記録や過去に起きた事象の管理は基本的に彼女が行っている。

ワシミミズク

アフリカオオコノハズクと同じ自称天才の彼女の助手。一人称はわたし。もっぱら、パークの調査や管理、巡回、宣伝など、外回りの仕事を担当している。アフリカオオコノハズクと同じく自称グルメを名乗っており、おいしいものに目がない。

オイナリサマ

豊穣の神様その人。一人称はわたし。本来ならば白狐はお稲荷様の使いのはずであるが、フレンズ化したその姿はなぜか白狐の姿を模っている。アプリ版の時代から存在しているようで、セルリアン襲撃事件を経験した数少ない存在である。

キュウビキツネ

かつて傾国の美女と呼ばれたその人。一人称は私。セルリアン襲撃事件を経験した数少ない一人。彼女の操る高度な妖術はオイナリサマをも凌駕するという噂である。高飛車な性格で、常に相手を見下したような態度をとってくる。

ヤマタノオロチ

一人称は我。圧倒的な力の持ち主で大の酒好き。酒を摂取する毎にどんどん力が増していく。彼女もオイナリサマやキュウビキツネと同じくセルリアン襲撃事件を経験した数少ない存在である。普段は人目のつかない洞窟で静かに過ごしているのだが、なぜだかオイナリサマとキュウビキツネと一緒に各所を行脚している。

カンザシフウチヨウ

一人称はわたし。誰も立ち入らないところでカタカケフウチヨウと暮らす謎のフレンド。常にカタカケフウチヨウと一緒におり、すべてを見透しているかのような意味深なことを話す。じゃぱりマンがなくなつた時にはアフリカオオコノハズクのところへ無心しに行く。自然の声を聞くことができ、風や地震といった自然現象を操ることができるらしい。

カタカケフウチヨウ

一人称は私。よくカンザシフウチヨウと一緒にいる。彼女の半身のような存在であり、なにをするにも常に一緒にいるようである。彼女もカンザシフウチヨウと同じく自然の声を聞くことができ、自然と静寂を愛する世捨て人でもある。

フエネツク

一人称は私。いつもアライグマと一緒にいる昼行燈なフレレンズ。頭は切れるようだが、あまり自分から発信することはない。ハチャメチャなアライグマを見るのが好きではあるが、どこまでも前向きで挫けずに進み続けるアライグマを心から尊敬しているようである。

アライグマ

一人称はアライさん。自称天才で、お宝を求めたり異変を解決するために東奔西走している。野生の勘とポジティブな思考で、異変を良い結果で終わらせるといふ不思議な特性を持っている。悪は決して許さないけど改心するようであれば問答無用で友達になろうとする。

《Resurrection》

タイリクオオカミ

意図せずに鶴を呼び覚ましてしまった今回の事件の元凶ともいえる存在。一人称はわたし。読み書きができ、マンガも描いている文化人。イエイヌと仲が良い。

鶴

一人称は私。その人ならざる醜い姿から周りの人すべてから嫌われてきた過去を持つ。自身を嫌ってきた人類に復讐するために外なる神から力を授かり、世界を恐怖に陥れようと画策していた。異変後は改心してその力を平和のために使おうとしている。

《Rotted One's Philosophy》

ハクトウワシ

一人称はアタシ。かつてかばんと一緒にゴコクエリアで戦っていた時に戦死したフレンズ。どういう訳か生き返って、ゴコクエリアの在り方を憂いてクロサイたちと敵対している。

クロサイ

ROP編のサブキャラクターを担う。一人称は私。シロサイを姫と呼び慕うが、なぜかシロサイがキョウウシユウエリアにいるのに対してクロサイはゴコクエリアにいる。そのゴコクエリアでは一つの要塞の指揮官としてその任を全うしている。

ヤタガラス

ゴコクエリアを統括する島の統領。一人称は余。セルリアンとの戦争からバフォメットの姿の全てにおいて、フレンズたちを指揮してきた。神の遣いでありながら太陽の化身でもある彼女は、自身の操る核の力を以って敵を薙いでいく。

トラツグミ

鶴が運命のいたずらによって転生した姿。一人称は私。鶴の異名の名に恥じぬ妖術を使いこなす（予定だった）。ストーリーの中心になるよう書いていく予定だったけどうまくいかないもので中途半端な立ち位置になってしまった悲しい子。

ペイル・ホース

一人称はわたくし。バフオメットが召喚した黙示録の四騎士の内の最後に現れる、全身が異様なまでに蒼白い馬のフレンズ。バフオメットの右腕としてゴクエリア全体で暗躍している。傍らには冥界そのものであるハデスを引き連れている。死を操る能力を持っており、生物を生かすも死なすも、冥界から死者を呼び出すのも自由自在である。

ポセイドン

一人称は私。流れるような水色のたてがみを持つ馬のフレンズ。全身に光る水色の幾何学的な模様を模した入れ墨を入れてある。黄金の装飾に白い衣服を身に纏うというフレンズらしからぬ格好をしているが…。

バフオメット

一人称は余。全身が真っ黒の姿をしたヤギのフレンズ。己の享樂の為にすべてを混沌に陥れる悪の化身。正体は千の仔を孕むと言われている、外より出でし神、シユブニグラースである。

今回召喚した二人のフレンズも彼女の生んだ混沌の産物ものなのかもしれない。

《Ruin》

ヨルムンガンド

一人称はわし。世界を見渡す巨大な蛇のフレンズ。世界の始まりから終わりまでを総て見てきた世界蛇の名を冠する大蛇の名である。星の命の代行者でもあり、九つの世界に身を置く巨人でもある。

ライオン

平原地方でオーロックスらを率いる群れのプライド。一人称は私。少し様子がおかしいようだ。

ヘラジカ

ライオンのライバルである森の王。一人称はわたし。ある日突然姿をくらませたライオンを探しにホツカイエリアへとともえたちと共に向かう。

ギンギツネ

キョウシユウエリアからホツカイエリアに眠る過去の文明を調査しにやってきた狐のフレンズ。一人称はあたし。持ち前の記憶力や思考能力を駆使して過去の文明や異物を解明していく。

ネメアの獅子

ネメアの谷に住まう人食いライオンのフレンズ。一人称はオレ。ライオンの体に乗っ取って衝動のままにパークで暴れ回っている。あらゆる物理攻撃を通さない体は、すべての敵対者にとつての脅威となり、自身もそれを活かした圧倒的な攻めを得意としている。行く先々でもえたちと遭遇しては、自身を倒す者として幾度となく戦いを仕掛けてくるであろう。

サタン

この世すべての悪を統べる存在であり、神と敵対する悪の化身。一人称は俺だったり俺様だったりする。フードを被っているが、フード下にはヤギの特徴を持っているというへんてこな姿をしている。あらゆる知識を持っており、代償と引き換えにもえたちをホツカイエリアの奥へと導いていく。

ミライ

ホロテープの記録にのみ存在するかつてのジャパリパークの従業員であり、もう一人の主人公。一人称は私。ホツカイエリアで起きた事件を彼女の視点を通じて解明することになる。